

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第20集

大 谷 川 IV

(遺物・考察編)

巴川(大谷川)総合治水対策特定河川事業
埋蔵文化財発掘調査報告書(神明原・元宮川遺跡)4

本文編

1989

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第20集

大 谷 川 IV

(遺物・考察編)

巴川(大谷川)総合治水対策特定河川事業
埋蔵文化財発掘調査報告書(神明原・元宮川遺跡)4

本文 編

1989

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

序

神明原・元宮川遺跡は、弥生時代から奈良時代にかけての集落遺跡として知られ、周辺には登呂遺跡・有東遺跡・汐入遺跡などの著名な集落遺跡のほか、宮川古墳群・伊庄谷横穴群、上の山遺跡などの古墳群もみられ、この地の中心的な遺跡の一つと考えられていた。

当研究所は、大谷川河川改修事業に伴う緊急調査として昭和58年度～60年度の3ヶ年をかけて現地調査を実施し、昭和61年度より昭和63年度までの3ヶ年をかけて資料整理作業を行った。その調査の成果はめざましく古代の大谷川の流路から人形・馬形木製品・斎串・ト骨やおびただしい数の土器など祭祀遺物が出土し、神明原・元宮川遺跡を流れる大谷川が古代の大規模な「祭」の場であったことが解明された。この事実は、今までの静岡平野における歴史認識に大きな変更を迫るものであり、今後静岡平野の歴史を構成する上で貴重な手がかりとなるであろう。そしてまた、日本の古代祭祀形態を考える上にも重要な資料をもたらすものであろう。

本報告書は、大谷川一神明原・元宮川遺跡の調査報告の5冊目にあたり、昭和58年度に刊行した『大谷川Ⅰ』・昭和61年度に刊行した『大谷川Ⅱ』・昭和62年度に刊行した『大谷川Ⅲ』・『大谷川(稻妻地区)』に続くものである。主として、遺物のあり方に焦点をあて資料を紹介するとともに、まとめとして若干の考察を試みた。現地調査・資料整理の期間を通じて様々な問題が提起され、その解明のため努力をつづけてきたが、本報告においてはまだまだ未解決の問題が多い。さらに努力していきたい。

なお、この調査に深い理解と協力をいただいた静岡県静岡土木事務所の方々に深い感謝の言葉をささげるものである。あわせて静岡県教育委員会の指導・助言に対して感謝するとともに、関係諸機関ならびに多くの関係者の皆様に心からの謝意を表するものである。終わりに本調査に従事し、その整理や報告書の執筆に力をあわせた所員及び作業に参加された多くの方々の労苦をねぎらいたい。

平成元年3月

財團法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤忠

例　　言

1. 本書は静岡市大谷地先に所在する神明原・元宮川遺跡の発掘調査のうち、「巴川（大谷川）総合治水対策特定河川事業埋蔵文化財発掘調査」の報告書第四分冊である。

2. 調査は「巴川（大谷川）総合治水対策特定河川事業埋蔵文化財発掘調査業務」として静岡県静岡土木事務所の委託をうけて、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。なお、昭和58年度は財団法人駿府博物館付属静岡埋蔵文化財調査研究所が実施し、昭和59年5月1日から財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が承継したものである。

3. 発掘調査体制は次の通りである。

昭和59年度 所長斎藤忠 常務理事（調査研究部長）池谷和三 調査研究1課長植松章八 主任調査研究員栗野克己 調査研究員成島仁 小嶋日出一

昭和60年度 所長斎藤忠 常務理事八代龍一 調査研究部長岡田恭順 調査研究1課長植松章八 主任調査研究員栗野克己 調査研究員森下春美 足立順司 矢田勝 鈴木基之 寺田甲子郎 成島仁 小嶋日出一

昭和61年度 所長斎藤忠 常務理事八代龍一 調査研究部長岡田恭順 調査研究1課長植松章八 調査研究員成島仁 矢田勝 寺田甲子郎

昭和62年度 所長斎藤忠 常務理事大石保夫 調査研究部長兼調査研究1課長山下晃 主任調査研究員佐藤達雄 調査研究員森下春美 寺田甲子郎

昭和63年度 所長斎藤忠 常務理事龜山千鶴男 調査研究部長山下晃 調査研究3課長佐藤達雄 調査研究員寺田甲子郎 中山正典 竹山喜章

4. 昭和63年度の資料整理は、佐藤達雄 寺田甲子郎 中山正典 竹山喜章が中心となって実施し、横田宏 柳原勉 山本ひとみ他の協力を得た。

5. 本書は静岡県埋蔵文化財調査研究所の職員が分担して執筆した。その分担は次の通りである。

佐藤 達雄 第Ⅰ章 第Ⅱ章第1節1 第2節 第4節

第IV章第1節3・11 第2節2 第4節 第5節1・3 第V章第1節

寺田甲子郎 第IV章第1節1・4・5・7・8・9・10 第V章第1節

中山 正典 第Ⅲ章第1節 第2節 第4節 第IV章第1節2・6 第2節1

第V章第3節

竹山 喜章 第Ⅱ章第3節 第IV章第2節3 第3節 第5節2 第V章第2節

横田 宏 第Ⅱ章第1節2 第Ⅲ章第3節

足立 順司 第V章 第4節

6. 遺物の写真は、中山の他、池田洋仁氏に撮影を依頼した。

7. 木製品の樹種鑑定については、山内文氏（元国立科学博物館）に依頼し、玉稿をいただき第V章に収録した。

8. 地質関係の調査は加藤芳朗氏（静岡大学名誉教授）、高橋豊氏（県立教育研修所）に依頼し、それぞ

れの分野から検討いただき、玉稿を第V章に収録した。

9. 動物遺存体については金子浩昌氏（早稲田大学）に鑑定を依頼し、玉稿を第V章に収録した。
10. 種子については桃崎祐輔氏（筑波大学）に整理を依頼し、その成果を第V章に収録した。
11. 本書の編集は、調査研究部長山下晃の指導のもとに、佐藤があたった。第I章～第IV章については、編集者の責任において用語の統一、構成の整理及び解釈の統一等を行った。第V章については、それぞれの執筆者の見解を尊重し、若干の用語の統一と整理を行ったのみである。調査員により意見の相違あるいは対立する部分もあるが、それぞれの見解を尊重しそのままとした。なお当研究所職員が分担した節に関しては文末にその責任者を記した。

目 次

例言・凡例	
序	
第 I 章 調査の方法	1
第 II 章 出土遺物の概要	4
第1節 土器	4
1 繩文時代	4
2 弥生時代	5
第2節 金属製品	7
第3節 石製品	7
第4節 その他	8
第 III 章 各遺構出土の遺物	9
第1節 西大谷1・2区 SD15およびその周辺 D46	9
第2節 宮川2区 I100	23
第3節 宮川4区 流路4 (SR54)・流路3 (SR53)	26
第4節 宮川5区 SR202	41
第 IV 章 主要遺物	45
第1節 祭祀関係遺物	45
1 舟形木製品	45
2 刀形木製品	47
3 人形木製品	57
4 煙串状木製品	67
5 箸状木製品	79
6 ミニチュア木製品	81
7 玉類 (丸玉・管玉・勾玉・ガラス小玉)	82
8 滑石製模造品	89
9 ト骨	98
10 鏡・儀鏡・銅鈴	101
11 手捏土器・ミニチュア土器	104
第2節 生産用具	109
1 農具	109

2 工具	122
3 漁撈具	123
第3節 生活用具	128
1 木製容器	128
2 紡織具	144
3 編具	149
4 裝身具	151
5 履物	156
6 その他の生活用具	159
第4節 武器類	161
1 鉄鎌・銅鎌	161
2 刀	161
3 弓	161
第5節 その他の遺物	168
1 縄文時代の遺物	168
2 銭貨	172
3 用途不明木製品	182
 第V章 考察・特論	187
第1節 神明原・元宮川遺跡におけるいわゆる「祭祀」に関する二・三の問題	187
第2節 古墳後期の大谷川祭祀と喪葬儀礼	201
第3節 祀りと人形	219
第4節 神明原・元宮川遺跡出土の灰釉陶器と山茶碗	253
第5節 神明原・元宮川遺跡の土層と静滑平野の地学的環境	269
第6節 神明原・元宮川遺跡の古環境	283
珪藻遺骸分析を中心に	
第7節 神明原・元宮川遺跡出土木製品の樹種について	291
第8節 神明原・元宮川遺跡出土の種実について	303
第9節 神明原・元宮川遺跡出土の動物遺存体	323
第10節 神明原・元宮川遺跡出土の骨角加工品	369
 おわりに	373
資料整理関係者名簿	

挿図目次

第 1 図	縄文時代土器実測図・拓影	4
第 2 図	弥生時代土器実測図	6
第 3 図	西大谷 1・2 区 S D15出土土器実測図 1	10
第 4 図	西大谷 1・2 区 S D15出土土器実測図 2	11
第 5 図	西大谷 1・2 区 S D15出土土器実測図 3	13
第 6 図	西大谷 1・2 区 D46グリッド出土土器実測図 1	15
第 7 図	西大谷 1・2 区 D46グリッド出土土器実測図 2	17
第 8 図	西大谷 1・2 区 D46グリッド出土土器実測図 3	18
第 9 図	西大谷 1・2 区 D46グリッド出土土器実測図 4	19
第 10 図	西大谷 1・2 区 D46グリッド出土土器実測図 5	20
第 11 図	西大谷 1・2 区 D46グリッド出土木製品実測図 1	21
第 12 図	西大谷 1・2 区 D46グリッド出土木製品実測図 2	22
第 13 図	宮川 2 区 I 100 グリッド出土遺物実測図 1	24
第 14 図	宮川 2 区 I 100 グリッド出土遺物実測図 2	25
第 15 図	宮川 4 区 S R54出土土器実測図 1	30
第 16 図	宮川 4 区 S R54出土土器実測図 2	31
第 17 図	宮川 4 区 S R54出土土器実測図 3	32
第 18 図	宮川 4 区 S R54出土土器実測図 4	33
第 19 図	宮川 4 区 S R54出土遺物実測図	34
第 20 図	宮川 4 区 S R53出土土器実測図 1	37
第 21 図	宮川 4 区 S R53出土土器実測図 2	38
第 22 図	宮川 4 区 S R53出土土器実測図 3	39
第 23 図	宮川 4 区 S R53出土遺物実測図	40
第 24 図	宮川 5 区 S R202 出土土器実測図 1	42
第 25 図	宮川 5 区 S R202 出土土器実測図 2	43
第 26 図	宮川 5 区 S R202 出土土器実測図 3	44
第 27 図	舟形木製品実測図	45
第 28 図	刀形木製品分類模式図	47
第 29 図	刀形木製品実測図 1	55
第 30 図	刀形木製品実測図 2	56
第 31 図	人形木製品分類模式図	57
第 32 図	人形木製品実測図 1	64
第 33 図	人形木製品実測図 2	65

第 34 図	人形木製品実測図 3	66
第 35 図	斎串状木製品実測図 1	76
第 36 図	斎串状木製品実測図 2	77
第 37 図	斎串状木製品実測図 3	78
第 38 図	箸状木製品実測図	80
第 39 図	ミニチュア木製品実測図	81
第 40 図	玉類実測図 1	83
第 41 図	玉類実測図 2	84
第 42 図	石製模造品実測図 1	90
第 43 図	石製模造品実測図 2	91
第 44 図	卜骨実測図	99
第 45 図	鏡拓影	101
第 46 図	土製模造鏡・銅鈴実測図	102
第 47 図	手捏土器・ミニチュア土器実測図 1	105
第 48 図	手捏土器・ミニチュア土器実測図 2	106
第 49 図	手捏土器・ミニチュア土器実測図 3	107
第 50 図	手捏土器・ミニチュア土器実測図 4	108
第 51 図	農具実測図 1	116
第 52 図	農具実測図 2	117
第 53 図	農具実測図 3	118
第 54 図	農具実測図 4	119
第 55 図	農具実測図 5	120
第 56 図	農具実測図 6	121
第 57 図	工具実測図	122
第 58 図	漁効具実測図 1	126
第 59 図	漁効具実測図 2	127
第 60 図	木製容器実測図 1 挽物	136
第 61 図	木製容器実測図 2 漆器	137
第 62 図	木製容器実測図 3 剥物	138
第 63 図	木製容器実測図 4 剥物	139
第 64 図	木製容器実測図 5 剥物	140
第 65 図	木製容器実測図 6 曲物	141
第 66 図	木製容器実測図 7 曲物	142
第 67 図	木製容器実測図 8 曲物	143
第 68 図	紡織具実測図 1	147

第 69 図	紡織具実測図 2 編具実測図	148
第 70 図	装身具実測図 1 耳環ほか	154
第 71 図	装身具実測図 2 橋	155
第 72 図	履物実測図 1	157
第 73 図	履物実測図 2	158
第 74 図	火鑓臼・遊具・木札・箱状木製品実測図	160
第 75 図	武器実測図 1 鐵鎌・銅鎌	163
第 76 図	武器実測図 2 刀・刀子	164
第 77 図	武器実測図 3 丸木弓等	166
第 78 図	武器実測図 4 合せ弓等	167
第 79 図	丸木舟実測図	169
第 80 図	櫛実測図	170
第 81 図	ヤス実測図	171
第 82 図	錢貨拓影 1	179
第 83 図	錢貨拓影 2	180
第 84 図	錢貨拓影 3	181
第 85 図	用途不明木製品実測図 1	183
第 86 図	用途不明木製品実測図 2	184
第 87 図	人形木製品分類図	193
第 88 図	川合遺跡、S R 1101出土遺物実測図	196
第 89 図	有度山西麓古墳群分布図	210
第 90 図	神明原元宮川遺跡祭祀遺物分布図（グリッド別）	221
第 91 図	浅間神社社殿及び斎場配置図	231
第 92 図	祓所	231
第 93 図	大倉戸の神送り順路	243
第 94 図	人形を介するケガレの流し方	249
第 95 図	产地別・器種別構成グラフ	256
第 96 図	中国陶磁実測図	257
第 97 図	皿山古窯跡群採集陶器実測図 1 (椀・小椀)	259
第 98 図	皿山古窯跡群採集陶器実測図 2 (小皿・壺類)	260
第 99 図	瓷器・瓷器系陶器の生産地	262
第 100 図	Os' kgp包含層とその上下層の堆積環境と表層地質	274
第 101 図	大谷川旧流路底最深部の標高と時期別変遷	275
第 102 図	西大谷 5 区東壁土層断面図	276
第 103 図	A 大谷 1 区土層断面図	280

B	砂・植物片・火山灰源粒子の割合	280
第 104 図	A 水上 4 区土層模式図	282
B	砂・植物片・火山灰源粒子の割合	282
第 105 図	静岡・清水平野の地形図	283
第 106 図	静岡・清水平野の表層地質図	283
第 107 図	静岡・清水地域の古地理図	284
第 108 図	北伊豆平野“沖積層”の模式的断面図	286
第 109 図	微高地堆積物の地質柱状図	287
第 110 図	調査地点における動物骨の出土量表(1)	335
第 111 図	調査地点における動物骨の出土量表(2)	337
第 112 図	骨角加工品実測図 1	369
第 113 図	骨角加工品実測図 2	370

挿表目次

第1表 刀形木製品一覧表	50
第2表 人形木製品一覧表	61
第3表 斎串状木製品一覧表	71
第4表 玉類一覧表	85
第5表 滑石製模造品（有孔円板）一覧表	89
第6表 滑石製模造品（劍形）一覧表	90
第7表 滑石製模造品（勾玉）一覧表	90
第8表 滑石製模造品（白玉）一覧表	92
第9表 木製農具観察表	112
第10表 鉄製農具観察表	115
第11表 土鍬一覧表	125
第12表 挽物（白木作り）一覧表	131
第13表 挽物（漆器）一覧表	132
第14表 剃物一覧表	133
第15表 曲物一覧表	134
第16表 土製・石製紡錘車一覧表	146
第17表 木製編錘一覧表	150
第18表 耳環一覧表	153
第19表 橫櫛一覧表	154
第20表 下駄一覧表	158
第21表 金剛草履一覧表	158
第22表 銅鏡・鉄鏡一覧表	162
第23表 錢種別一覧表	174
第24表 出土銭貨一覧表	175
第25表 直径による錢貨分布表	178
第26表 古墳時代後期須恵器器種構成	204
第27表 古墳時代後期土師器器種構成	204
第28表 壁類完形数	204
第29表 須恵器壁個体数	204
第30表 土師器個体数	204

第31表	墳墓出土土馬一覧	206
第32表	祭祀関連遺物出土状況	207
第33表	大歎調査表	233
第34表	微高地土層と海成シルト層の頂部の標高	271
第35表	静清平野のOs、Kgp包含層の層相・堆積環境と遺跡名	273
第36表	粗砂、細砂の重量割合	276
第37表	細砂の火山灰、非火山灰起源粒子の割合と火山灰起源粒子の鉱物学的内容	278
第38表	細砂中の火山灰起源粒子の含有割合と鉱物	281
第39表	水上3区の層準の青灰色粘土層にみられる珪藻遺骸群集	289
第40表	水上3区の微高地上部の黒褐色腐植土にみられる珪藻遺骸群集	289
第41表	大谷1・2区のヒシの層準の珪藻遺骸群集	289
第42表	樹種と木製品との関係	301
第43表	自然遺物一覧表	309
第44表	モモ核核長別成分表	320
第45表	モモ核地区別集計表	321
第46表	イヌ下顎骨と肢骨計測表	328
第47表	イヌ頭蓋計測表	329
第48表	出土したウマ・ウシの計測値	331
第49表	地区別、種別、動物遺存体出土数一覧表	339
第50表	動物遺存体部位別出土数一覧表〈イヌ〉	343
第51表	動物遺存体部位別出土数一覧表〈ウマ〉	345
第52表	動物遺存体部位別出土数一覧表〈ニホンジカ〉	353
第53表	動物遺存体部位別出土数一覧表〈ウシ〉	356
第54表	グリッド別歯出土数一覧表〈ウマ〉	363
第55表	グリッド別歯出土数一覧表〈ウシ〉	367

図版目次

カラー図版1 着柄鏡

カラー図版2 ト骨

- 図版1 西大谷1・2区 SD15出土土器1
- 図版2 西大谷1・2区 SD15出土土器2
- 図版3 西大谷1・2区 D46グリッド出土土器1
- 図版4 西大谷1・2区 D46グリッド出土土器2
- 図版5 西大谷1・2区 D46グリッド出土土器3
- 図版6 西大谷1・2区 D46グリッド出土土器4
- 図版7 西大谷1・2区 D46グリッド出土木製品1
- 図版8 西大谷1・2区 D46グリッド出土木製品2
- 図版9 宮川2区 I 1 0 0 グリッド出土土器
- 図版10 宮川4区 S R 5 4 出土土器1
- 図版11 宮川4区 S R 5 4 出土土器2
- 図版12 宮川4区 S R 5 4 出土土器3・S R 5 3 出土土器1
- 図版13 宮川4区 S R 5 3 出土土器2
- 図版14 宮川5区 S R 2 0 2 出土土器1
- 図版15 宮川5区 S R 2 0 2 出土土器2
- 図版16 舟形木製品
- 図版17 人形木製品1
- 図版18 人形木製品2
- 図版19 人形木製品3
- 図版20 斎串状木製品1
- 図版21 斎串状木製品2
- 図版22 着状木製品
- 図版23 ミニチュア木製品
- 図版24 玉類
- 図版25 石製模造品
- 図版26 ト骨
- 図版27 土製模造鏡・銅鏡
- 図版28 手捏土器・ミニチュア土器1
- 図版29 手捏土器・ミニチュア土器2
- 図版30 手捏土器・ミニチュア土器3

- 図版31 手捏土器・ミニチュア土器 4
- 図版32 農具 1
- 図版33 農具 2
- 図版34 工具
- 図版35 漁撈具
- 図版36 木製容器 1 挽物
- 図版37 木製容器 2 刃物
- 図版38 木製容器 3 刃物
- 図版39 木製容器 4 刃物
- 図版40 木製容器 5 曲物
- 図版41 木製容器 6 曲物
- 図版42 紡織具 1
- 図版43 紡織具 2
- 図版44 編具
- 図版45 装身具 1 耳環他
- 図版46 装身具 2 柳
- 図版47 履物
- 図版48 火鑓臼・遊具・木札・箱状木製品
- 図版49 鉄鎌・銅鎌
- 図版50 丸木弓
- 図版51 合せ弓等
- 図版52 横
- 図版53 銭貨 1
- 図版54 銭貨 2
- 図版55 用途不明木製品 1
- 図版56 用途不明木製品 2
- 図版57 皿山古窯跡群出土土器
- 図版58 動物遺存体 1
- 図版59 動物遺存体 2
- 図版60 動物遺存体 3
- 図版61 動物遺存体 4
- 図版62 動物遺存体 5
- 図版63 動物遺存体 6
- 図版64 動物遺存体 7
- 図版65 動物遺存体 8

図版66 動物遺存体 9

図版67 動物遺存体10

第Ⅰ章 調査の方法

第1節 資料整理計画

資料整理は、現地調査終了後の昭和61年度～昭和63年度の3ヶ年で計画された。昭和61年度は昭和59・60年度に現地調査を実施した地区的遺構を中心に整理し、報告書『大谷川II（遺構編）』を刊行した。昭和62年度より遺物整理に本格的に入り、昭和62年度は祭祀遺物を中心にし、報告書『大谷川III（遺物編）』を刊行した。資料整理の全体計画は次の通りである。

昭和61年度……昭和59・60年度に現地調査を実施した地区的遺構を中心に整理。報告書『大谷川II（遺構編）』を刊行

昭和62年度……遺物を中心に整理し報告書『大谷川III（遺物編）』を刊行

昭和63年度……遺物を中心に整理するとともに、遺構・遺物のあり方について検討し総合的に考察を加え、報告書『大谷川IV（遺物・考察編）』（本書）を刊行

第2節 基本方針

膨大な遺物の量であり、これらのすべてを取り扱うことは、我々に与えられた時間の中では、不可能である。そこで我々は、この限られた時間の中で、最もこの遺跡の資料を生かすにはどのようにしたら良いかを討議した。そして、神明原・元宮川遺跡の主体は、古墳時代～奈良時代の祭祀にあるとの共通認識にたち、次のような方針で臨んだ。

1) 遺構・流路等の一括遺物あるいは一群の遺物を抽出し紹介する。

具体的には、遺構認定・群認定を厳密に検討し、確実に伴う遺物を抽出し、各遺構ごとに全ての遺物を提示する。ここでは二つの点に着目して検討した。1は本遺跡の主体となる祭祀関係遺物の時期を明確に与えられる資料があるかどうか、2は駿河西部においてその様相がいまひとつはっきりしない古墳時代の土師器の様相を知る良好な資料があるか、である。

後者については、昭和62年度で基本的な検討を終えたので、補足作業にとどめ、前者に重点をおいた。

2) 遺跡の性格等を論ずるにあたり必要な遺物は出土状況の如何にかかわらず取り上げ紹介する。

川の中からの出土という性格上、時期等を明確にしがたい資料がほとんどである。一括あるいは一群の遺物を取り上げると、祭祀関係遺物をはじめ主要なものが取り上げられないまま埋もれてしまうこととなってしまう。これらの遺物を出来るだけひろい集成することで本遺跡の全体像を考える資料を提示したい。

特に今年度は祭祀遺物をすべて紹介することを主眼とし、それ以外の遺物も出来るだけひろい上げることとして作業を進めた。

第3節 作業手順と方法

現地調査の状況を知らないものが頼るのは、現地での実測図面・写真・遺物に付されたラベル等である。当遺跡の場合、今まで主要遺物という取り上げられかたで様々な遺物が独り歩きしてきた。このような場合どうしても恣意的な解釈となる危険性を常にはらんでいる。本格的な遺物整理に着手するにあたり、我々はこれを避け出来るだけ資料の厳密性を保つため、資料操作の原点に立ち返って作業を進めた。すなわち、実測図面・遺物に付されたラベルを頼りに我々の解釈を加えないで資料に当たることとした。しかしこれは逆に当遺跡資料の持つ限界をも明らかにすることとなった。すなわち、年代幅がかなり限定された良好な資料であるとされていたものも年代幅が大きくひろがり、また流れ込みとだけで排除できない状況のものも認められる。これは川の中の堆積のもつ宿命であろう。我々はこの両者を明確にすることが、神明原・元宮川遺跡の資料整理のなかで重要な意味を持つと考え、単純作業を繰り返した。

①実測図（遺物分布図）の検討

厳密に遺構に伴う遺物を選び出すため、現地で作成された図面を第一に考えた。まず遺物分布図に記載されている遺物を抽出する。分布図にはないが当該遺構出土とラベルに明記されているものについては、日誌等により遺構認定の時期を確認し現地調査段階のものであれば二次資料として組み入れる。

川の中における遺構の認定の可否については、微妙な問題をはらんでいる。遺構の認定および作業の優先順位については、現地調査関係者に集まっていた検討した。また随時、各調査員のアドバイスを得ながら進めた。

②復元・統計処理

注記・復元をし、必要なものについては類型別の統計処理等を行う。この検討の中でパソコンを導入したが、残念ながら、良い成果は得られていない。またあまりにも多量なため実測可能な土器のみで処理した場合もある。

③実測・写真撮影

全ての遺物の実測をすることは、限られた時間の中では不可能なので、とりあえず必要な最低限のものに絞って実測および写真撮影を行った。優先順位に従い抽出したので、本遺跡の全ての遺物を紹介したのではないことをお断わりしておきたい。別の視点からすれば重要な遺物が落ちている可能性はある。しかし、縦年資料となるものについては、すべての遺物を実測し紹介することを原則とした。

④検討

個々の遺物の形態分類をするとともに、遺物の組み合わせに着目し検討を加える。特に当遺跡の場合、流路の中より出土のものが大半を占めるので、その組合せに力点をおいた。また時期認定のむずかしいものが多く他遺跡の遺物のあり方と比較検討のなかで、本遺跡の遺物の様相と遺跡の位置付けを考える。

第4節 報告書の作成

1. 報告書の作成

以上のような検討を加えたもののなかで、今回報告する遺構は次にあげるものである。

1. 川の流路の変遷を考える資料となるもの

.....宮川3区S R53～S R54

2. 土器群の集中して出土した部分で古墳時代前期の土器の様相を知る上で良好な資料となるもの

.....西大谷1・2区S D15およびその周辺

また個々の遺物では祭祀関係遺物のなかから手捏土器と人形木製品・斎申ほかを報告する。また『大谷川III』で紹介できなかった生産用具・生活用具について紹介する。

いざれにせよ、今回の報告では資料の紹介に重点をおいた。我々の前に積み上げられた資料のなかから当遺跡の性格を示すとおもわれる資料のまとめを出来るだけありのままに紹介することに努めた。その組み合わせ等について問題を投げ掛けるものも多い。今回、報告書をまとめるにあたり、若干の考察と見通しを示したが、これらの詳細な検討と考察については、資料の増加を待って周辺遺跡の資料との比較検討を行い、報告出来るよう今後共努力を続けていきたい。

2. 速報・概報・報告書

当遺跡に関しては報告書である『大谷川I』～『大谷川IV』『大谷川(稻妻地区)』の5冊のほかに、当研究所刊行あるいは当研究所職員による次のような報告・資料紹介がある。(当研究所の年報・所報での紹介記事は省略)

栗野克巳「静岡・神明原・元宮川遺跡」『木簡研究』第7号 1985

栗野克巳「古墳時代の土器を伴う木簡—神明原・元宮川遺跡」『季刊考古学』18号 1987

静岡県埋蔵文化財調査研究所(編)『静岡県神明原・元宮川遺跡木簡概要』1985

静岡県埋蔵文化財調査研究所(編)『神明原・元宮川遺跡—大谷川放水路建設に伴う発掘調査概報』1986

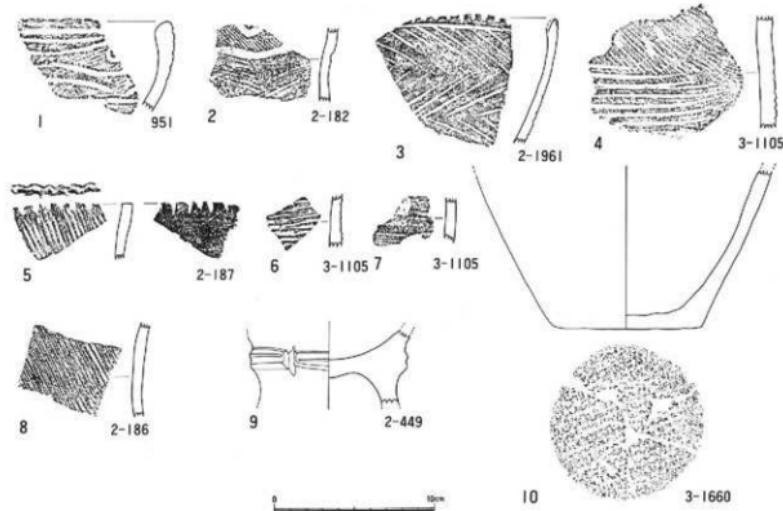
(本文中での引用の場合は『概報』と略する)

第II章 出土遺物の概要

第1節 土 器

1. 繩文時代（第1図）

縄文時代の土器片として取り上げられたものはわずかで、全てで10点8個体分である。土層より縄文時代と認定された丸木舟をはじめ、縄文時代と考えられる木製品が豊富であるのに比べて非常に少ない。出土地点は下流側に多く、大谷1区4点、西大谷4区1点、また調査区の中程の水上10区で3点とまとまっているのが注目される。1は鉢の口縁部で縦線に沈線が施されている。2は胴部破片で縦線に沈線が施され、下半は条痕文となる。カーブからして壺形土器の頸部の可能性がある。3は斜行の沈線が施され口縁部には刻み目がある。富士川町山王遺跡などに類例が見られる。4は条痕文を地文とし、部分的に横位の沈線が施されている。7は同一個体と思われる破片である。5は条痕文をもつもので、口縁部の内外面に刻み目を持ち、口唇部は波打っている。6は同一個体と思われる破片である。9は台付きの鉢と思われる破片で、脚から胴部にかけてのくびれに粘土紐が4本はりつけられている。清水市天王山遺跡等に類例が認められる。10は底部のみの破片である。無文で胎土は粗く砂粒を多く含んでいる。縄文時代の晩期に位置づけられるものがほとんどであり、この時期よりこの地域の周辺で人々の活動が始まったと考えてよいであろう。

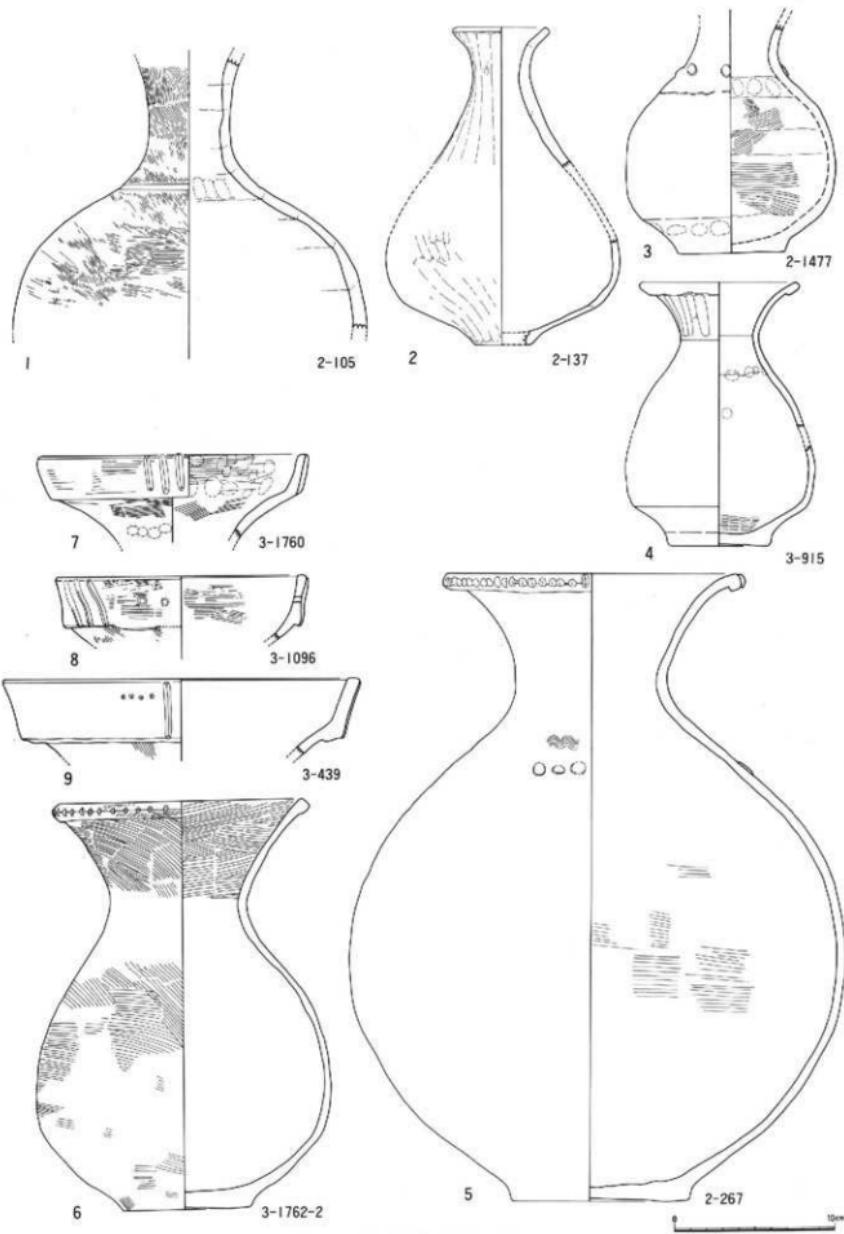


第1図 縄文時代土器 実測図・拓影

2. 弥生時代（第2図）

弥生時代の土器の出土量は、古墳時代のそれと比較すると極めて少量である。調査区では、大谷2区低湿地埋積土中、西大谷8区の大型堀立柱建物跡期前後の小穴造構、水上10区の溝状・小穴造構等からの出土である。ただ、弥生時代中期の土器はともかく、弥生時代後期から古墳時代初頭の土器は、その帰属年代の詳細が不明な土器ばかりである。現在、当該期の土器について、その諸特徴を抽出し、それを指標に形式を設定することは困難である。明確なセット関係で把握できない当遺跡の遺物は、後期の特徴の強い土器、もしくは後期の系譜を引く土器として処理するほかない。そのような事情から第2図に示した土器の中には、既に『大谷川III』（第II章第1節）で、古墳時代前期の土器とともに掲載されており、重複するものがあるので、ご了承願いたい。

1は、大谷2区のトレンチ内出土の壺形土器で口縁部と肩部下半を欠く。球形を呈する胴部は最大21.8cmを計り、口径部は最小値5cmの長筒状になる。外面には比較的細いハケメ調整を口縁部から胴部全体に施す。また、口縁部と胴部の境界に幅0.4cmの太い沈線を横一条めぐらしている。内面は、輪積み痕、指頭圧痕、横方向のナデが検出できる。2は、大谷1区出土である。胴部中央、底部中心を欠く。無花果形で漸次的に頸部へ移行する胴部と短くラッパ状に開く口縁部を持つ。調整は外面に縱方向のヘラミガキが認められるのみである。法量（推定）は口径5.5cm、最大径14.5cm、器高19.7cmである。3は、口縁部を欠く、最大径13.1cm、底径6.6cmの壺形土器である。胴部はやや下膨れの球状をなし、ラッパ状に開く口縁部を持つと思われる。肩部には径7~9mmの円形文が、ほぼ同間隔で貼付けられ、その直下に一条の結筋文を巡らす。内部には輪積み痕が残り、他に指頭圧痕、ハケメ調整がみられる。4~6は、大きさが異なるが何れも折り返し口縁部の壺形土器である。4は、施紋の確認は出来ないが、肩部が無花果形で弥生時代後期の特徴を示す。5は、口縁外部に刻み目を入れ、米粒形の貼付け文を付す。肩部には櫛書き文と円形貼付文を三個一単位で四ヶ所巡らす。この三個の円形貼付文は真ん中の一つがほかより小さい。6も口縁部に刻み目を付けるが、やや退化して貧弱である。調整は摩滅のため不明な点も多いが、全体にハケメ調整を施している。7~9は弥生時代後期の要素を持つ複合口縁壺である。すべて口縁部のみの出土で頸部以下は不明である。7は棒状貼付文が一単位に三本づつ、等間隔に4ヶ所に配され、内外面に横位のハケメ調整がしてある。8は棒状貼付文三本のほか、両側から穿った小孔が二ヶ所ある。9は棒状貼付文一本、外面からの穿孔四ヶ所を残すのみである。いずれも横または斜め方向のハケメ調整が認められる。5~9の焼成状態は、あまり良好とは言えず、色調も淡橙褐色を呈している。1~3が、胎土に比較的多くの砂粒を含み、褐色に焼成されているとの対照的である。



第2図 弥生時代土器実測図

第2節 金属製品

鉄製品・銅製品があり、その属する時期は古墳時代から近・現代にまで及び、本遺跡の性格上出土状態からは時期を特定出来ないものがほとんどである。

鉄製品が圧倒的に多い。鉄鎌14点、小刀3点、刀子9点以上、斧3点、鎌6点、鍔2点などがある。特に鉄鎌では、雁又鎌が5点以上を数え、祭祀との関わりで注目される。鉄製品の出土状況のなかでは、宮川6区が注目される。旧河道より集中して出土している。S R316より鍔先1点、斧1点、S R314より鎌1点、鎌4点、S R312より鎌1点、S X339より斧2点、鎌1点、S R319より鎌1点、S R313より鎌1点と計13点を数える。

また、これら以外に舟釘が多量に採集されている。しかし、出土状況、形態等より、近・現代のものと考えられるので今回の検討からは除外している。

銅製品では、銅鎌2点、蒂金具、鏡、銅などがある。蒂金具は丸柄で約1/3が欠失しているが、全体としての保存状態は良好である。鏡貨は148枚を数え、内訳は31種41書体である。渡来鏡は107枚、北宋鏡が圧倒的に枚数が多い。国内鏡では「和同開珎」「萬年通寶」「長年大寶」の3枚の皇朝12鏡が注目される。

旧大谷川の流れの中より、大量の耳環が検出されている。計17点で、古墳ではない遺跡からこれだけの量が検出されている例はめずらしく、河道内に意図的に投棄されたと考えられ葬送儀礼との関わりのなかで注目されるものである。

また、材質は不明であるが鉛かと考えられる金属製の錘が1点検出されている。

鉄製品については、保存処理を施し、消失した部分については最低限の補修を行った。

第3節 石製品

石製品には、玉類、滑石製模造品、石斧、砥石、石鎌、紡錘車、凹石、石皿がある。玉類は、石丸玉が81点、管玉が19点、勾玉が15点、変形勾玉が3点出土している。丸玉は蛇紋岩製、管玉は碧玉製、であり、勾玉は蛇紋岩製のものが多いが、瑪瑙製や水晶製、滑石製のものも認められる。これら石製品は旧大谷川内からの出土したものが多いが、管玉は低地の包合層からまとめて出土している。滑石製模造品は、有孔円板7点、劍形品2点、勾玉2点、臼玉286点があり、その大半が水上10区の低湿地に向かう緩斜面上の遺物群S X624出土である。

石斧は、6点出土している。磨製石斧・扁平片刃石斧・抉入柱状片刃石斧などがあり、そのほとんどが弥生時代の所産と考えられる。

砥石は、12点出土しており、そのうち1点は玉砥石である。この玉砥石は勾玉・管玉の出土とあわせて注目しておきたい。携帯用の孔を有するものが6点見られる。

石鎌は、2点出土している。頭部に紐掛けを作り出した有頭石鎌と、頭部に穿孔を有する大型石鎌であり、前者は旧河道内、後者は、古墳時代前期の井戸からの出土である。石製紡錘車は18点出土し、いずれも截頭円錐形を呈す。旧河道からの出土が多いが、微高地部のピット出土のものが2点ある。鋸齒

文を有するものを初め数点は滑石製品と思われる。紡錘車もまた祭祀とのかかわりの中で注目される遺物である。

第4節 そ の 他

その他の遺物として骨角製品、大量の動物遺存体・植物遺存体がある。

骨角製品にはト骨（第IV章第1節）がある。3点検出されており、鹿と推定されている。1点は肩胛骨、2点は肋骨を使用している。

動物遺存体・植物遺存体については金子浩昌氏（早稲田大学）・桃崎祐輔氏（筑波大学）に依頼し専門の立場から整理をお願いした。（第V章 第8節 第9節 第10節）

動物遺存体では、旧河道内に馬骨の多いのが注目される。

また種実では桃の種の多いことが注目されよう。1万点に近い桃核が採集されており特に宮川6区の旧河道S R 312では2497点を数えている。

第Ⅲ章 各遺構出土の遺物

第1節 西大谷1・2区 S D15, D46グリッド

西大谷1・2区は、全体的に把握すると、南側に古墳時代初頭の遺構面と中世の遺構面があり、北側には、平安末～中世の遺構面が確認されており、これらの遺構面ののる微高地を、川幅が確認されていないものの、最大幅10mを越す旧大谷川が蛇行して発掘区の中央部を開削している。この西大谷1・2区を概略的に大別すると3つになる。南側34列より39列にかけては、古墳時代初頭の遺構面と中世の遺構面の2面が確認される微高地がある。中央部、38列から47列にかけては旧大谷川の流路内に入り、護岸状遺構の他、古墳時代後期より中世に至る多量の土器及び祭祀関係遺物が、堆積砂礫中より出土した。そして北側46列より50列にかけては、平安末から中世の遺構面1面が確認される微高地がある。

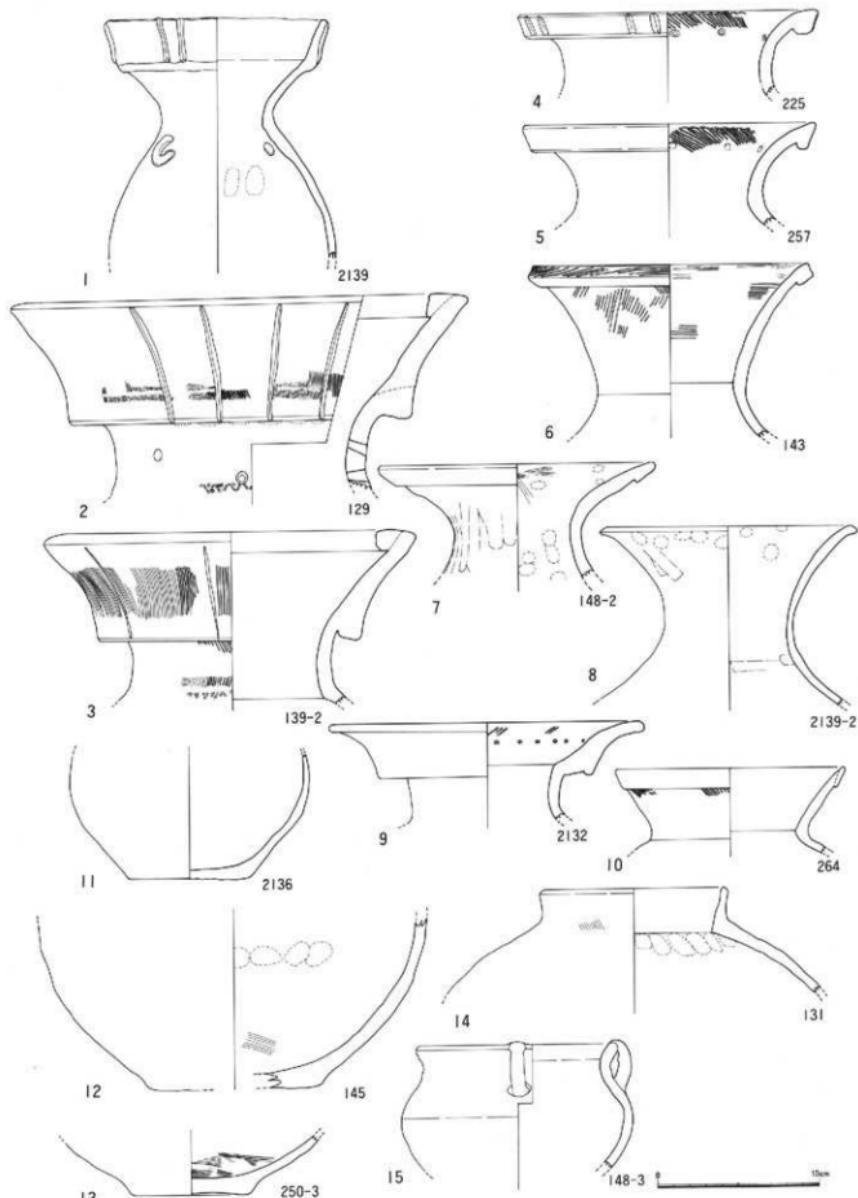
ここで扱おうとするS D15は、南側微高地を開削する溝であり、D46グリッドは旧大谷川の流路内の遺物集中箇所である。

1. S D15 (第3図～第5図)

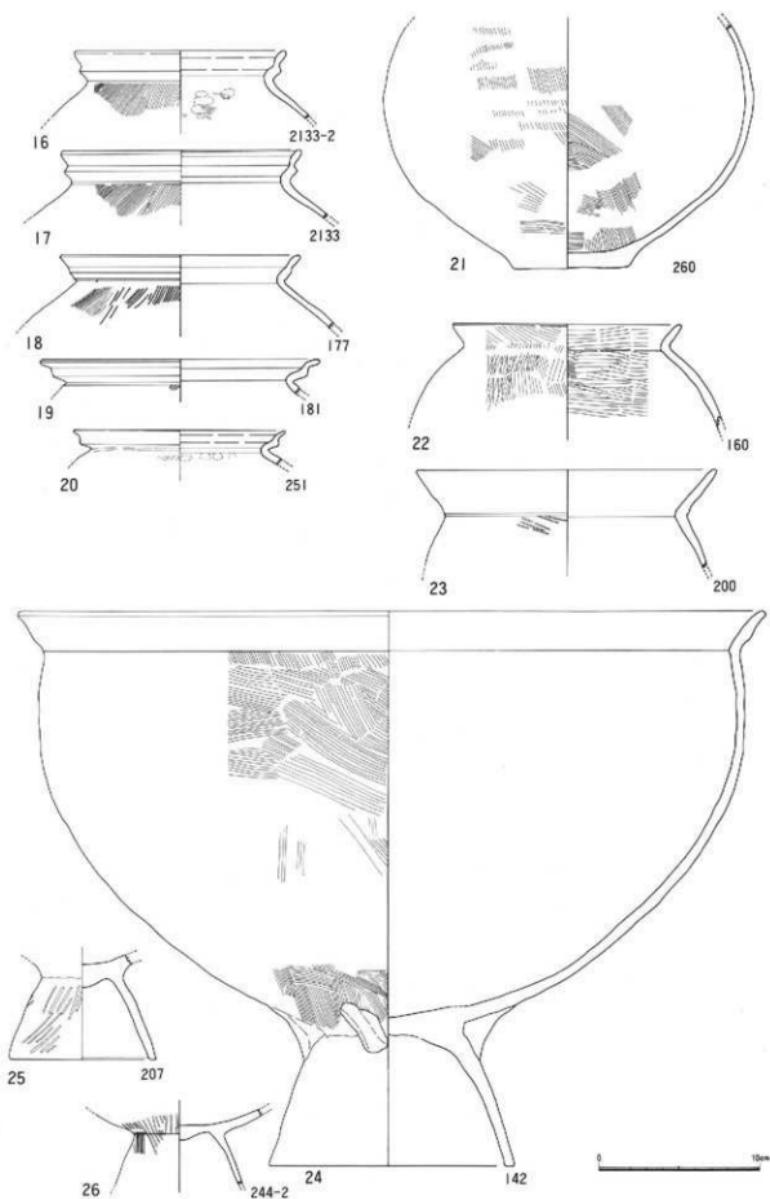
S D15とは西大谷1・2区の37・38列で確認された溝状遺構である。確認面で幅2.2m程度、底面で幅1.7m程度、深さ0.5～0.3mの溝で、覆土の上層より多量の古式土師器を出土した。溝は、ほぼ南北に延び、流れは北から南へ流れていたと考えられる。

覆土上層より出土した土器は、短時間の内に廃棄された様子がうかがわれ、古墳時代前期の一括資料として意義あるものと思われる。ここでは、S D15出土のすべての土器を接合、復元し、実測可能なものは残らず実測し、ここに図示した。既に『大谷川I』において、S D15出土土器が17点実測図を載せて報告してある。今回の資料整理に伴い、新たに実測可能なものが出てきたため、追加し、ここにS D15出土土器のうち、実測可能なものを總てここに紹介する。

壺に関しては、弥生時代後期の要素を散見することができる。特に1はその要素を色濃く持つ。口径13.5cm、最大径14cmと中途半端な大きさであり、頸部下方の浮文も逆J字（勾玉形と見なす者もいる。）をしており、特異な要素を含んだ壺である。三箇所に浮文が貼付されるものと思われ、逆J字のほか円形の貼付文も残存している。複合口縁壺であり、口縁部外面に二条を1組とする棒状浮文を4箇所に貼る。胸部は若干、無花果形を呈すると推測される。2、3は、口縁端部を内側に折り返している複合口縁の壺である。2は口径28.4cmを測り、口縁部外面に四条を1組とする縁の沈線が入る。また頸部外面には、上に竹管文、下に繩文による連鎖文のような文様を施している。3は口径23.0cmを測り、口縁部外面に沈線を等間隔に一条づつ7箇所に描き、全体にわたって、下から上の方向へハケ目調整された痕が残る。頸部外面に繩文が僅かに残り、2とほぼ同じ手法があったと思われる。4、5は、口縁を外側に折り返し、外面にフラットな面を作り出している。また口縁部内面には、結節部分を上にし、斜めに施した繩文を巡らし、下端には、竹管の円形刺突文を等間隔に施している。4は、口径18.6cmを測り、口縁部外面に二条を1組にした棒状貼付文が等間隔に施されている。5は、口径18.4cmを測る。6は折



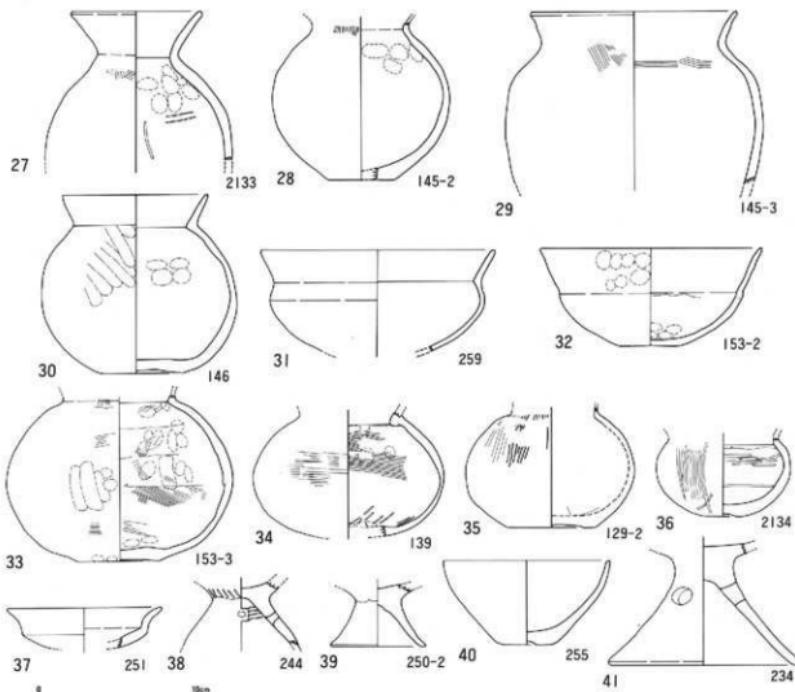
第3図 西大谷1・2区SD15出土土器実測図1



第4図 西大谷1・2区SD15出土土器実測図2

り返し口縁壺であり、外面では縦方向の、内面では横方向のハケ目が残る。7も折り返し口縁を有しているが、4、5、6に比して、口縁部の外反が鋭く、ラッパ状に開く。折り返し部は、折り返した後、指で押さえ、口唇部を薄く仕上げている。頸部外面には縦方向のナデの痕が残る。8は、単純口縁壺であるが、球胴になると思われ6、7とプロポーション的に近い。9は口径19.6cmを測る有段口縁壺である。口縁部内側に斜繩文を施し、その下端に竹音による円形刺突文を等間隔に施す。斜繩文の上端に4、5のように連鎖文を施すが残存状態がよくないため不明である。施文方法は、古い要素でありながら、有段口縁という新しい要素を兼備する。10は折り返し口縁壺であるが、頸部と体部の結合部分で屈曲し、その後の小型壺と似た形状を示す。11、12は壺の胴部の下半分である。11は胴部最大径14.8cmを測り、1の様な中途半端なサイズの壺であり、若干無花果形を呈している。12、13は、ほぼ球型の胴部かと思われる。14、15はこの時期において、他にあまり類例を見ない特異な器型の壺である。14は球胴を有し、口縁がそのまま垂直に立ち上がったまま口唇部になってしまう。15は把手が一箇所のみ残存しており、全体で何箇所の把手が付くか不明である。14、15は今後の類例出土を待ちたい。

16~20は、所謂S字状口縁台付壺である。薄手の台付壺とされるもので、胎土には金雲母を含む。調整はハケ目、ナデを主体とする。16は、口縁部がほぼ上方に立ち上がり、頸部から肩部の内面にハケ目調整の痕が残る。17、18も口縁部はほぼ上方に立ち上がる。19は、口縁部が鋭く屈曲して外側に強く外反する。19は、口径17.5cmを測る。20は、口縁部は斜めに上方に立ち上がり、口縁端部内側に一条の浅い沈線を持ち、口径は13.2cmを測る。16~20のS字状口縁壺において、16の内面にハケ目が残るものと、20の口縁部内面に浅い沈線を持つものとに注目したい。大參義一氏、安達厚三氏の分類および編年によれば内面のハケ目を古い要素としたい。富士市三新田遺跡発掘調査報告書によれば、口縁端部内面の沈線は、新しい要素となろう。この5点の他、SD15より南東20m付近のI34、I35グリッドよりS字状口縁壺の特徴の他、肩部外面に横位の櫛描直線文を施すもの、口縁端部が肥厚になっているもの等、他の特徴も指摘できる。ただ安達氏の編年、富士市月の輪遺跡群の報告の編年及び赤塚次郎氏の「S字壺」の編年等の編年尺度では、本遺跡のS字状口縁壺すべてを捉えることはできない。本遺跡のこの種の壺には複合的要素があるため、今後遺跡全体及び、静清平野全体を通しての検討が必要と思われる。21は、外面底部付近に煤が付着していることにより壺とした。内面にハケ目を残す。胴部は無花果形をし、最大径をやや下方に持ち、22.8cmを測る。22、23は単純口縁壺であり、外面にハケ目調整の痕が残る。22は、球胴で口頸部は「く」の字状に屈曲し外反して開く。胴部外面は縦方向のハケ目、内面は横方向のハケ目で調整している。23は、口径18.6cmを測り、外反する口縁部の縦は3.4cmと長い。24は、口径46cmを測る大型の台付壺で、頸部が殆ど締まらず、鉢状を呈する。最大径は口縁部にある。外面に荒いハケ目調整がある。胴部と脚部の結合部分に粘土帯で五箇所にわたり補強している。この大型壺は、静岡県東部の大庭遺跡、月の輪遺跡、三新田遺跡等においてS字状口縁壺を伴って出土しているものと同型のものと思われる。台付壺の脚25は、頸部は肩の部分に最大径がくるもの、26は球胴となるものと思われる。27~36は小型壺である。27は、口径も8.3cmであり、頸部も最小径5.1cmと、他に比して、細頸である。外面にハケ目調整痕を残す。28は、平底であり、頸部の最小径5.2cmとなり、27よりは太い頸になる。29は小型の壺とも指摘できるものである。30は、球状の胴部をもち、平底である。31、32は小型丸底壺で



第5図 西大谷1・2区SD15出土土器実測図3

あり、器台とのセットが考えられる。口縁部の立ち上がりの長さは31が2.3cm、32が3.9cmを測る。33、34、35は断面が横に広い楕円形をした胴部をもつ。33、35は明らかに平底をつくり出している。いずれも外面にハケ調整の痕が見られる。33、34は内面にもほぼ横位のハケ目が見られる。36は底部外面に窪みをつくる。胴部外面に縦方向の、内面には横方向のヘラを当てた痕が残る。

37、38は器台である。他にも数片、実測不能ではあったが、器台と思われる破片があった。40は小型の鉢である。底部よりやや内湾しながら立ち上がり、口頭部にいたる。底部は肥厚にでき、底部外面に窪みをつくる。41は高杯の脚部である。穿孔が2ヶ所残存し、全部で3ヶ所の穿孔があったことがわかる。

- (1) 大參義一 「弥生式土器から土師器へ—東海地方西部の場合—」『名古屋大学文学部研究論集(史学)』第47輯 1968
- (2) 安達厚三、木下正史 「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』第60号第2巻 1974
- (3) 富士市教育委員会 『三新田遺跡発掘調査報告書』 1983
- (4) 富士宮市教育委員会 『月の輪遺跡群』 1981
- (5) 赤塚次郎 「S字型」『久山式土器とその前後』第3回東海埋蔵文化財研究会 1986
- (6) 小野真一・菅原健洋 「沼津市大郷発見の住居址と土器」『歴史科学』第20輯 1969

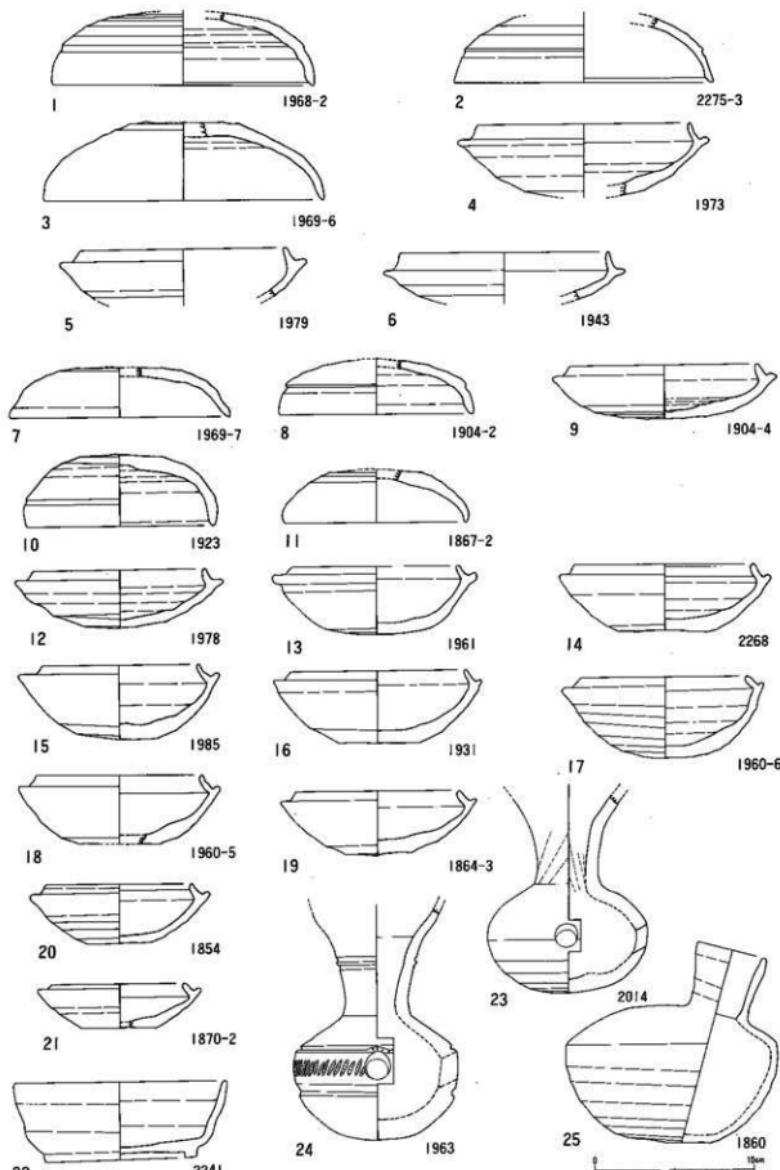
2. D46グリッド（第6図～第12図）

D46グリッドとは西大谷1、2区の中央部を蛇行して流れる旧河道の右岸の攻撃斜面部に位置する。10m四方のこのグリッド内には古墳時代後期の土器が出土すると報告されている。現地調査段階において、①H39グリッド杭を中心とする範囲②F41～E44にかけての範囲、③D46グリッドを中心とする範囲、の3箇所は、古墳時代後期の遺物のみ分布する地域としている。そこで整理作業の段階に入り、これら3箇所の地域について、1つ1つグリッド別にすべての土器を検討した。それに加え、西大谷1、2、区内の旧大谷川流路に当たる地域についても、グリッド別にすべての土器を検討した。この作業では次の4点の原則に従い、1調査員の恣意が入らぬよう配慮した。

- (1)西大谷1、2区の旧大谷川内出土のすべての土器（コンテナ270箱程度の分量）をグリッド別にし、再度、1点1点検討を加える。
 - (2)グリッド単位で再度接合作業を行う。
 - (3)口縁部から底部にかけ残存し、実測可能と思われる土器はすべて実測する。
 - (4)(3)の土器の実測図をすべてプレートに並べ、多くの調査員に検討を加えてもらう。
- 以上のような原則で、再度、検討を加えねばならなかった理由は、西大谷1、2区の場合、流路の変遷が発掘調査段階で確認できず分層と遺物の関係も明確にできないので、すべての土器を平面上、便宜的に区画したグリッドで扱わざるをえなかつたという事情があつたからである。(4)の段階のプレートは50枚以上にものぼつた。

①～③の古墳時代後期の遺物集中地域について、上述の(1)～(4)の原則に従い、検討を加えた結果、①H39グリッドを中心とする範囲においては、たしかに古墳時代後期の範囲内でと思われる土師質の壺が実測可能なもので15点出土していたのみであった。出土した壺も表面が摩滅し、残存状態の良好でなく、土師器の壺のみで時代観を示すのは困難であると思われ、ここには図示しなかつた。②F41～E44にかけての地域であるが、ここからは膨大な量の土器が出土している。(F41～E44と言っても、E43グリッドを含むか否かで相当量の土器の量の差が出てしまうため、ここでは②の出土土器の量は明示できない。)そのなかでたとえばF42グリッドは、コンテナ28箱の土器の量があり、実測可能であった土器は171点あつた。171点のうち須恵器は22点を数え、遠考研編年II期より、V期後葉までの時間幅がある。主体はIII期後葉からIV期前半かけてであるが、2世紀以上の時間幅を考えると旧河道内の遺物の扱い方には注意を要することになる。F42以外のF41～E44に該当するグリッドにおいては、F42よりも時代幅があり、遠考研編年II期の須恵器より灰釉陶器、場所によっては、山茶碗までの幅がありここに資料紹介することは、紙面の都合上、略さざるをえない。

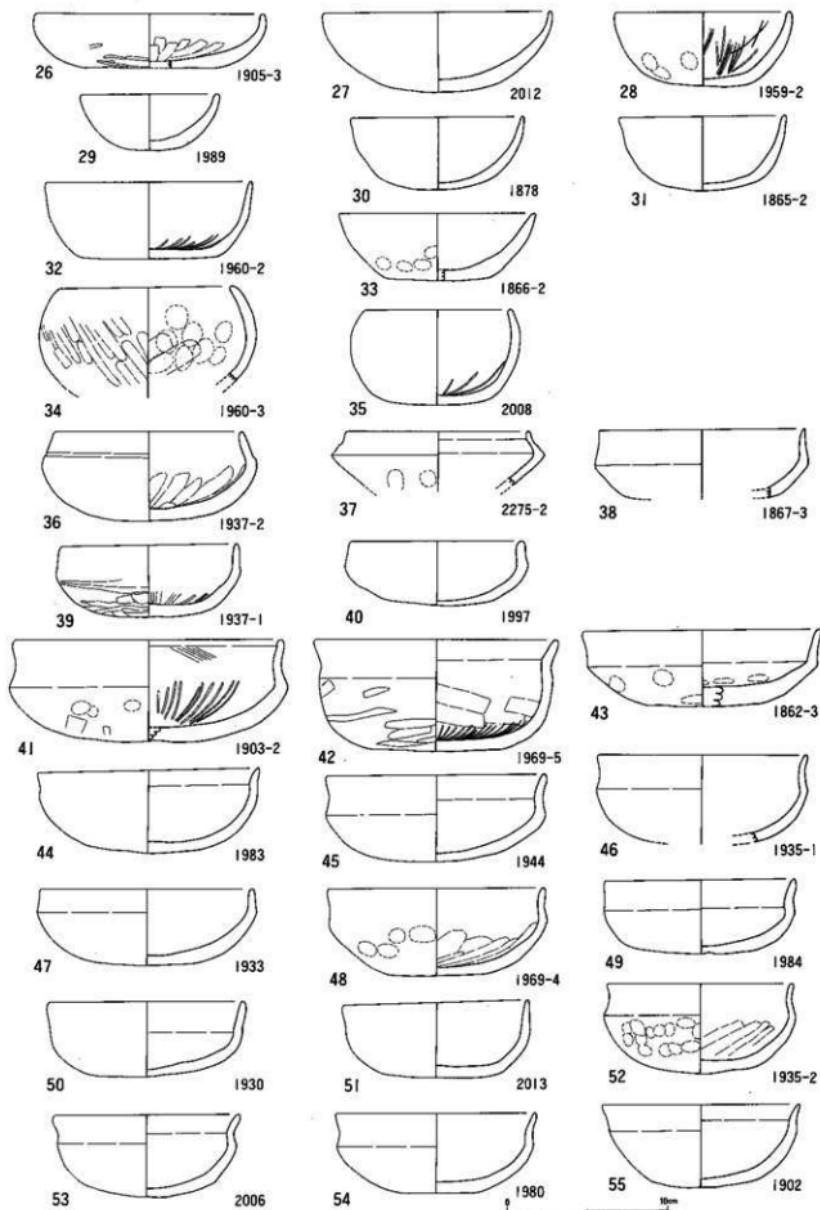
③に関しては、このグリッド内では木製形代、人形、馬形、刀形、斎串が多数出土している以上、ここに実測可能であった土器をすべて紹介すべきと考える。D46グリッド出土の土器すべてを再検討し、実測可能なものはすべてで112点になり、第6図より第10図に示した。うち須恵器は、25点ある。1～4は遠考研編年のIII期中葉の段階に該当するであろう。1は口径16.6cmを測り、ヘラケズリが1/2程度まである。3は口径17.5cmを測るがヘラケズリは、切り離し痕を消す程度にしか施されていない。5～9は、IV期前半を口径が11cm台以下とすると、III期後葉に属する。5は受け部径が14.4cmを測る。9は、



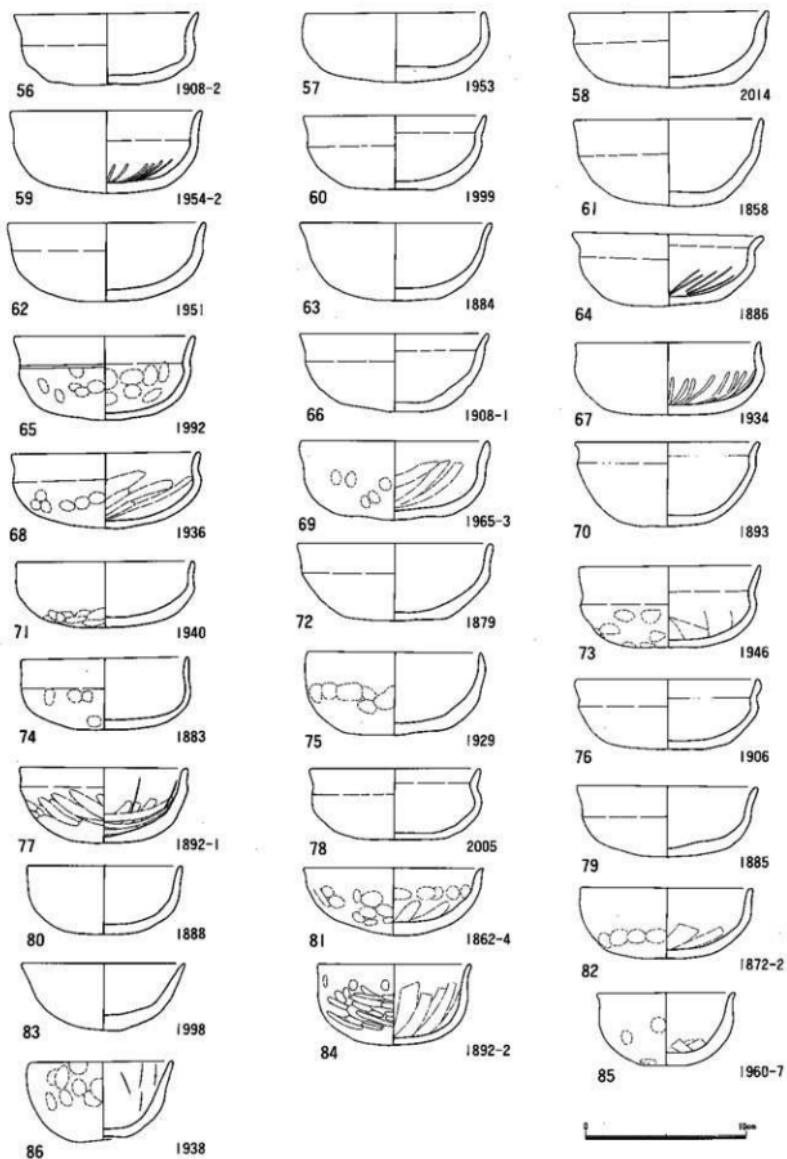
第6図 西大谷1・2区D46グリッド出土土器実測図1

口径13.2cm、ヘラケズリが1/3程度まで来ている。それら5~9に比して、10~19においては、10が口径11.7cm、器高は4.5cmと若干あるものの、ヘラケズリは、頂上部のみに限られている。中には、17のように、ヘラケズリがかなり上まで施されているものがある。概して、小型化し、粗略化が進んでいる。5~9において、Ⅲ期中葉より、暫時小型化してきている過程が受けとれる偏平でまだ大型のものと、10~19の小型化し、ほぼ粗略化した定型のものとは、違和感がある。11cm台のⅢ期末葉にすると、5~9と10~19の差位が明確になるのであろう。20、21は、最も小型化した坯身の典型であり所謂Ⅳ期前半に属するものであろう。特に21は、口径が92cm、底部は平坦な面を作りだし、この平坦な面をヘラケズリで作りだしている。器全体に薄手で、簡略化された究極の器といえる。22は底部に糸切痕が残り、高台も断面四角で、しっかりしており、器型も箱型に近い。遠考研編年のV期後葉に属すると考えられる。D46グリッドの下層より上層までの土器は以上のように単に古墳時代後期に全て含まれるものではない。時代認定をする場合、最も下がる時期をもって決めるると、22の土器が大きな意味をもつ。しかしD46グリッドの土器、コンテナ27箱分の全ての土器中、高台付須恵器は2点のみであった。圧倒的に古墳時代後期の土師質の坯が多く、須恵器に関しては、1~21が主体であることは間違いない。特に構成比で言えば、5~19のⅢ期後葉の須恵器とそれに伴う土師器が大きな比重を占める。

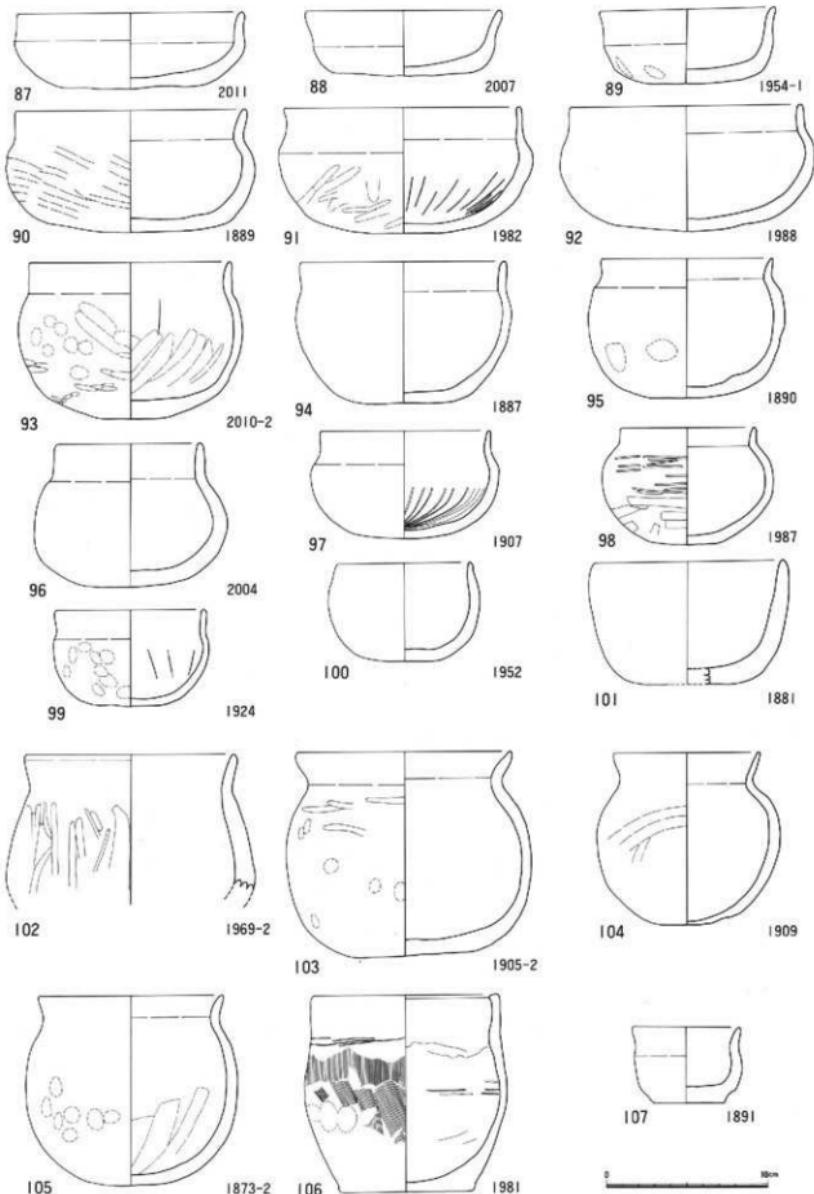
土師器を見ると、伝統的な坯が少なく、26~31に関しても、かなり形骸化したものしか残存していない。26は口径14.2cmを測り、深さ3.3cmという浅い坯である。口唇部は内湾させるも、平底ぎみに、8.6cmにわたり底部を作っている。口唇部にも端部より1.4cm程度のところまでヨコナデが施されており、伝統的な形態の坯の名残は少ない。『大谷川Ⅲ』においてB-C類に分類された坯である。28は、内面に縦のヘラミガキが部分的に残る。29~31は、丸底ではあるが、調整痕も残さず、口唇部もほとんど内湾しない粗略な作りを示す。32、33は平底である。32は、木葉痕をもった直線的な平底をもつ。箱型に近い坯もある。33は体部が直線的で口縁が屈曲せずそのまま聞く形態である。34、35は深めて体部が丸味を帯びている。34は口唇部が端部より2.7cm程度のところまでヨコナデが入る。35は平底ぎみに底部を作る。36~40は須恵器を模倣した土師質の坯である。口唇部を内側に傾けほぼ直立させる。特に、36、37は須恵器を意図的に模倣している。口唇部はヨコナデより、体部と区画をし、内側に傾けている。39は外側を手持ちヘラケズリで内面は縦のヘラミガキで調整している。41~86は、『大谷川Ⅲ』において、「口縁部を屈曲させたいわゆる“鬼高井平行”的環」としたC類に属するもので丸底のものである。41は、口径17.0cmと大型で、全体的に厚手に出来ており、内面には放射状にヘラミガキの調整痕が残る。底は丸底で中心部は窪み、あげ底風である。43、35、56、73、78、83などは、口唇部を大きく外反させている。また47、57、71、74、75、82、83は口唇部が直立するか若干内傾する。内面の調整は、縦のヘラミガキが明確に残るものとして、41、42、59、64、67がある。また木口によるミガキ痕が内面に残るものとして、42、52、69、77、82、84、85がある。概して41、42を除けば丁寧な内面調整はあまり観察できない。外側調整は特筆すべきものはないが、手持ちヘラケズリ状の横位ケズリ痕が残るものは42、77、84がある。指頭圧痕が外側体部に残るものは多い。87、88、89は口縁部を屈曲させた环のうち平底のものである。特に88、89は箱型にちかい。88は、口縁部横位のナデの範囲が広く、器高40cmに対し、口唇端部より2.2cm下までヨコナデが施されている。89は底部が肥厚に出来ており、箱型であり、新しい要



第7図 西大谷1・2区D46グリッド出土土器実測図2

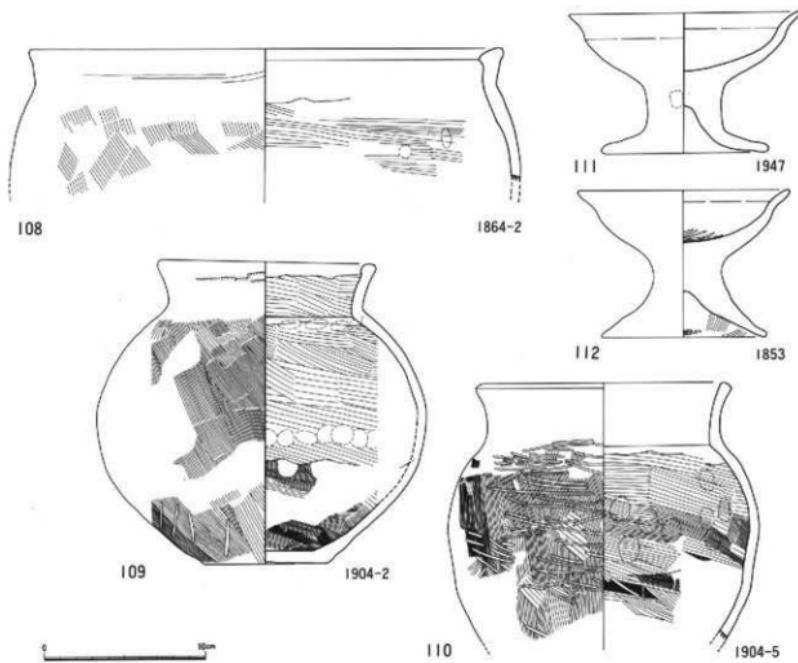


第8図 西大谷1・2区D46グリッド出土土器実測図3

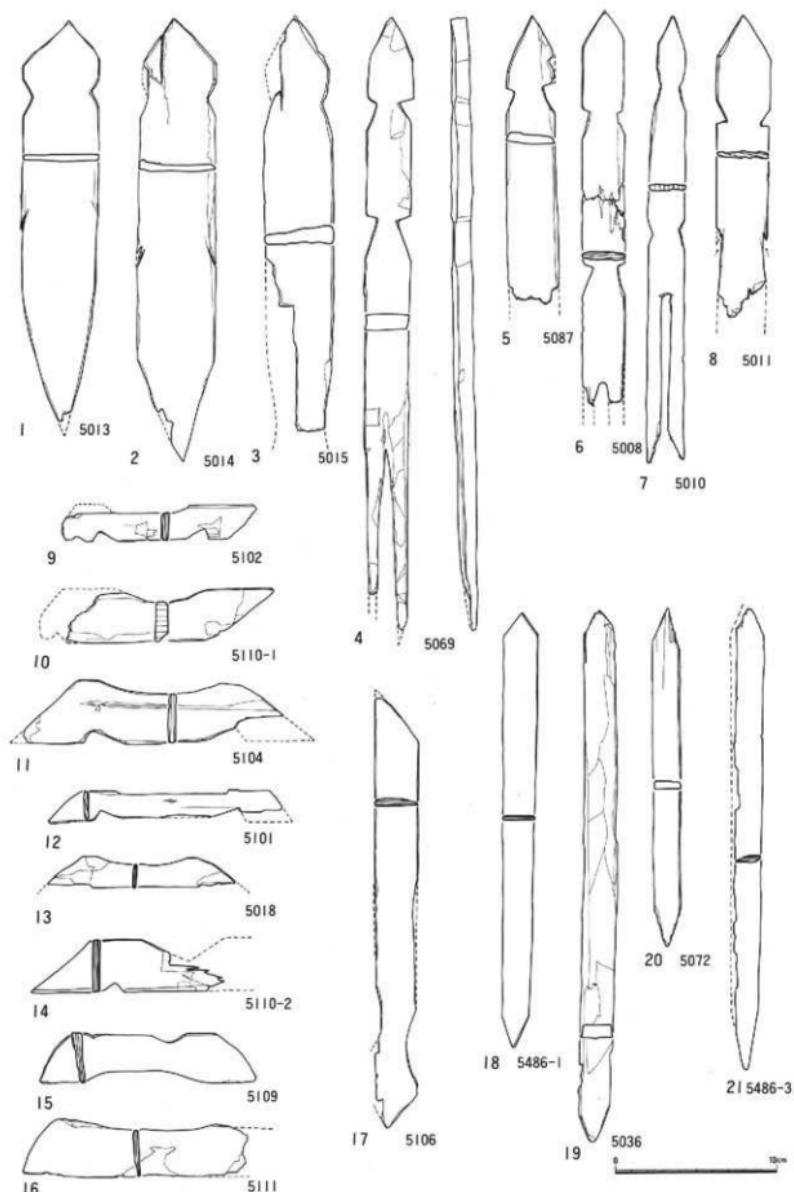


第9図 西大谷1・2区D46グリッド出土土器実測図4

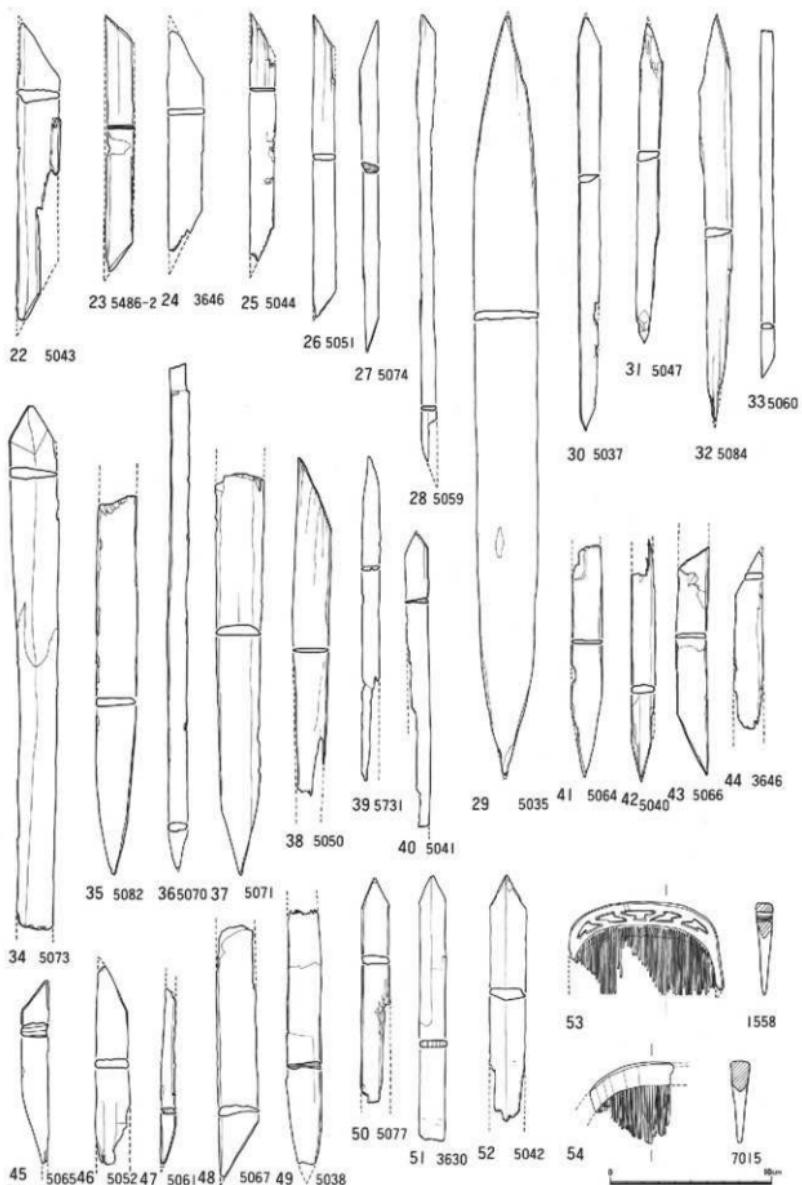
素を含む。90～100は口縁部を屈曲させた壺のうち深く、「壺」に近い器型のものである。91、97は内面の縦のヘラミガキが放射状に良く残る。98は外面を手持ちのヘラケズリで調整している。90、91、92は、器高より口縁部半径の方が大きい。93～100は器高の方が口縁部半径より大きい。95、96、97、98は、須恵器、短頸壺を模したものとも考えられる。101は、口縁部が若干内湾するものの、箱型を呈し、壺とも壺とも判別つき難い。102～106は小型壺である。102は体部外面に、縦方向のヘラケズリの痕が残る。108、109、110は壺である。108は口径29.4cmを計り、口唇部は内側を肥厚にさせ、外面にハケメ調整がみられる。109、110は口縁を「く」の字状に屈曲させ、口唇部内面をやや肥厚にさせ、球状の胸部をもつ。111、112は高壺であり、環部口縁部を外反させている。脚は太く、裾部は111がラッパ状に開き、112は緩く上下対称のごとくひらく。



第10図 西大谷1・2区D46グリッド出土土器実測図5



第11図 西大谷1・2区D48グリッド出土木製品実測図1



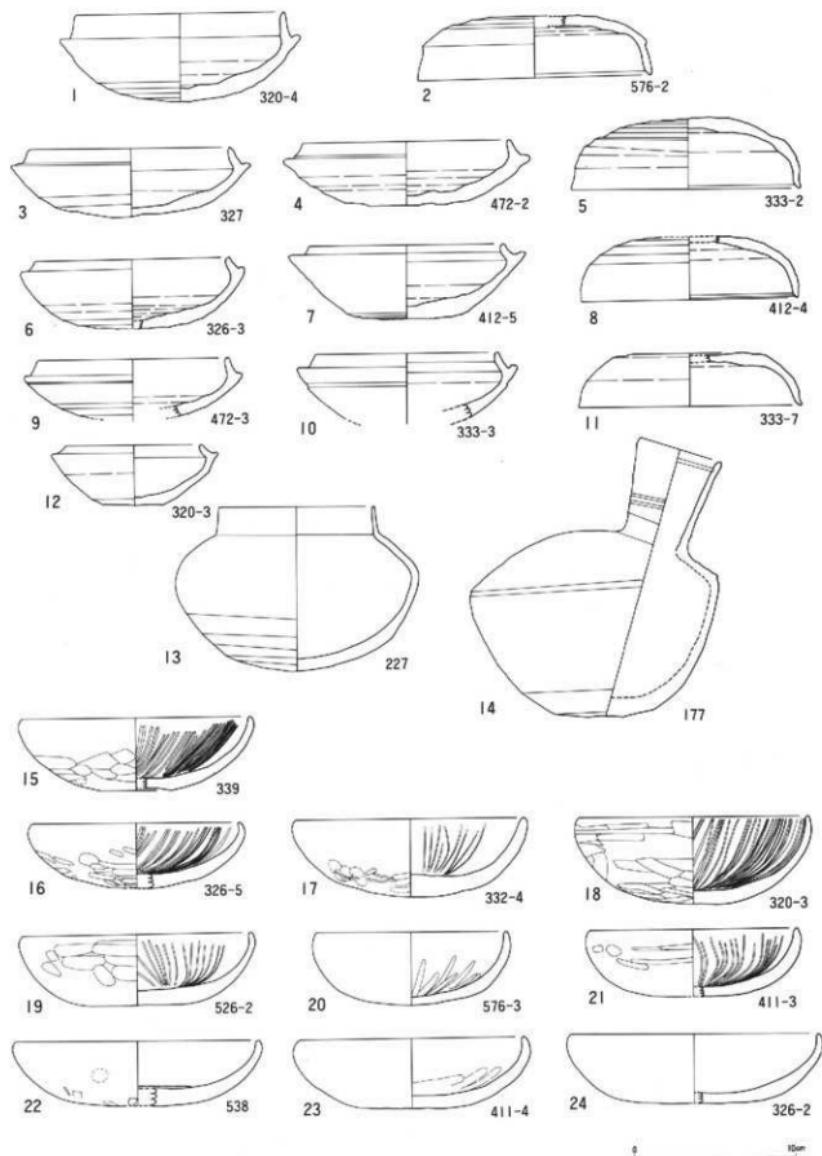
第12図 西大谷1・2区D46グリッド出土木製品実測図2

第2節 宮川2区I 100

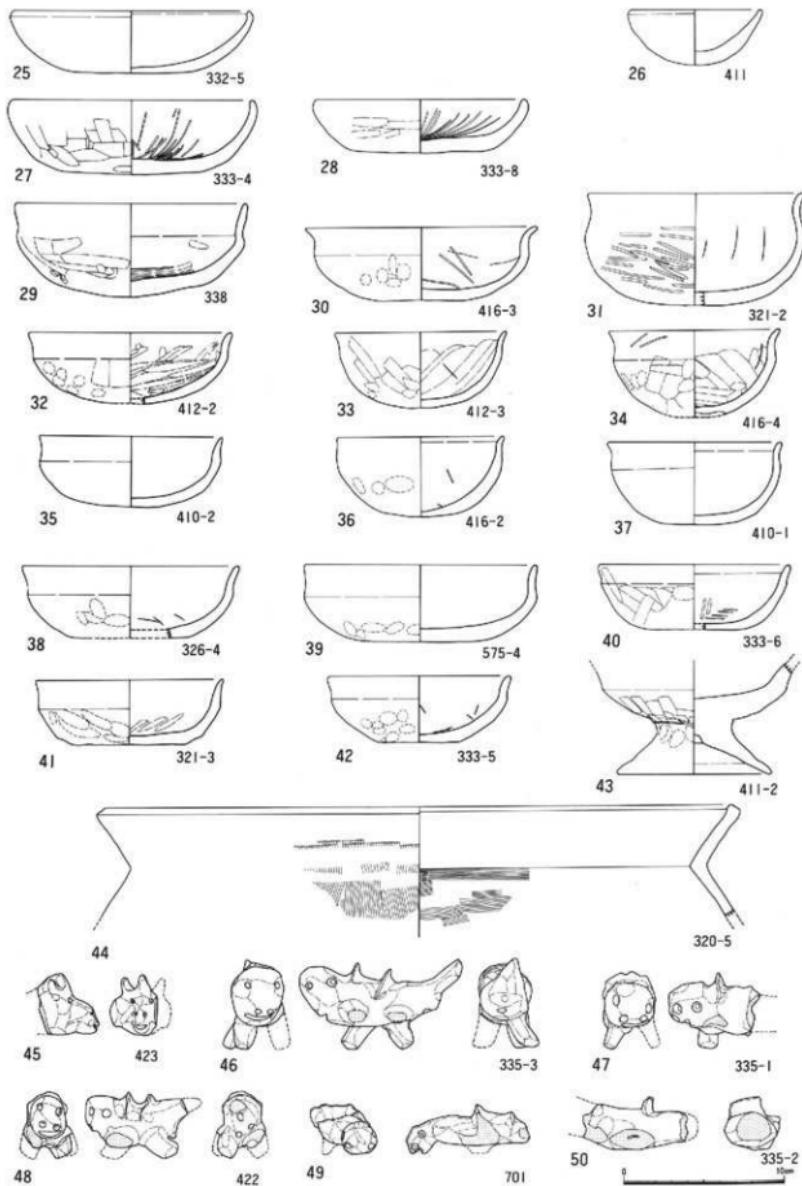
宮川2区は旧大谷川の右岸傾斜面が大半である。旧大谷川流路部分は発掘区の東側にわずかにかかる程度である。ここで扱うI 100グリッドは旧大谷川流路部分に当り、西部分には中世の護岸状遺構S L 46が検出された。このI 100グリッドの旧大谷川流路部分より多量の土器とともに動物型土製品5点が出土した。『大谷川III』の分類によると46~50は、ほぼ断面円形であると考えられ、B類に類似しているともいえる。B類は、水上7区S X801の出土状態より7世紀後葉~末葉と考えられている。S X801と若干形状の異なる土製品の年代幅を出すためにもこのグリッド出土土器は参考になるであろう。尚このグリッド内出土の土器も、西大谷1、2区の旧大谷川内と同様に、再度1点1点全ての土器片について検討を加え、接合復元し、実測可能なものはすべて第13図及び第14図に示した。

土器、1~14は須恵器である。1、2は、遠考研編年の第III期前葉に該当しよう。1の立ち上がりは、まだほぼ直立してはいるが端部は甘く、受け部径は14.0cmを測る。この環蓋はまだ稜は持つものの丸味を帯びており、口縁端部もあまり。3、4、5はIII期中葉に比定されよう。3は口径14.5cmを測り、立ち上がりは内傾する。ヘラケズリは体部の1/2程度までできている。4は口径14.6cm。5は口径14.2cmあり稜は消え、完全に、丸味を帯びている。6~11はIII期後葉に該当しよう。6は口径13.0cm、10で、12.5cm。6の环身は丸味を帯びており、ヘラケズリも範囲が、まだ広いが、11になると底部のみヘラケズリしており、切り離し痕を消すだけで、かなり粗略な作りになっている。12は口径9.5cmと最小になる。第IV期の前半に属するであろう。13は須恵器の短頸壺である。14は平瓶である。

15~42は土師質の环である。15~26は丸底の伝統的な环である。痕が良く残されており、丁寧な作りであり、静岡県中部では宮之腰遺跡出土の伝統的な环の系譜を引く良好な資料である。旧大谷川流路の中でも土師質の环の中で古い段階の資料である。1は口唇部をわずかに内溝させ、外面体部に横位の手持ちヘラケズリ、内面に縦のヘラミガキを細かく施している。底部はあげ底風にしてあり、「大谷川III」において、古墳時代後期の土師質环のA類としたものである。この種の环のうち最も古い段階と考えられる。16~19はいずれも、外面は横位のヘラケズリ、内面は縦のヘラミガキが良くのこる。22、23、24は若干浅い环であるが、平底というより丸底に近い丸味のある环である。27、28は調整方法はやはり外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキを施しているが、明らかに意図的に平底を作りだしている。29~42は口縁部を外反“鬼高窓並行”の环である。29~37は丸底である。29は口径14.6cmを測り、外面はヘラケズリ、内面は木口によるミガキが入る。30は口縁部の外反が大きく、外に引き出している。31は深いタイプの环である。32、33、34は外面のヘラケズリ、内面の木口によるヘラミガキが大きな単位でのこる。38~42は平底である。外面は指頭圧痕が主となり、内面の調整もあまり顕著に残らない。43は土師質の高环である。44は口径38.8cmを測る大型の壺であり、外面は縦方向の、内面は横方向のハケ目調整痕を残す。



第13図 宮川2区I-100グリッド出土遺物実測図1



第14図 宮川2区I100グリッド出土遺物実測図2

第3節 宮川4区・S R54、S R53

1. S R54 (第15図～第19図)

宮川4区は現大谷川の左岸で河口起点より1250m上流に位置し、S R54は、その南半分において旧大谷川が時代とともに南側に河道を移す過程において、発見された7本の河道のうちの1本である。それは、N93、Q93グリッドを西から東へ流れ、確認面での川幅は5.5m、延長13m、標高3.5m（最深部）に及んだ。遺物包含層は、それ以前の河道であるS R56、S R55の包含層（第13層、12層）を覆う第11層暗灰色砂礫粘土層である。その最下の砂礫層からある程度のかたまりをもって、西側の一部を除く全城から出土している。その出土遺物はコンテナ14箱におよぶ土器のほか、斎事状木製品15点、木簡1点、馬形土製品2点、土製丸玉1点等が出土している。なお、S R54は現大谷川対岸の調査区、宮川3区S R486の下層と連続する。以下にS R54出土遺物の実測し得たものを図示し、紹介する。

(1) 土器

S R54より出土した土器のうち、僅かな小片を除く80点を図示した。そのうちわけは、須恵器、陶質土器（所謂、土師質須恵器を含む）35点、土師器が47点である。前者の遺物は、概ね川江試案のⅢ期以降、百代寺窯併行期までのものと思われ、その主体は灰釉陶器にある。後者の遺物は、そのほとんどが古墳時代後期のものと思われ、前者と著しく様相を異なる。現地作成の遺物分布図で確認するかぎり、両者は混在しており、標高差もない。これは、旧大谷川の漸次的移動の過程における流れ込みと解するのが妥当であろう。

1～8は、川江試案のⅣ期以前と考えられる土器である。1は底部中央を欠くが口径12.3cm、受け部径15cm、立ち上がり高1.7cmをはかり、内傾して端部は丸味を帯びる。体部は半橢円形を呈し、ヘラケズリは上部まで達していない。S R54では最も古い時期の須恵器でⅡ期末～Ⅲ期前葉と考えられる。2～4はⅢ期後葉に比定できる壺身である。法量は、口径が12.1cm～12.5cm、最大径14～15cm、立ち上がり高0.6cm～1cmである。やや内傾する口縁部、ほぼ横方向に短く突き出る受け部を持ち、体部はやや偏平となる。焼成・胎土は悪い。5は高環で口径11.3cm、最大径13.6cm、立ち上がり0.9cmを測る。2～4と同時期と思われる。6～8は壺蓋である。それぞれの口径は、13.3cm、14.6cm、12cmである。6は丸味を持つ天井部とやや外方に直線的に下垂する口縁部を持ち、7は天井部から口縁部まで連続して丸味を帯びる。8は器高が5.2cmと高く、半球状の体部と直線的に弱く開く口縁部からなる。体部下半に二条の弱い沈線を施す。6～8とも天井外面は回転ヘラケズリ調整をやや広い範囲に施している。6・7がⅢ期後葉、8がⅣ期前葉と考えられる。

9～12はⅧ期に比定できる須恵器である。9の壺身は底部中央を欠くが、口径15.4cm、器高4.35cm、高台径11.7cmを測る。高台は外側に弱い稜を持ち、その断面は方形である。底部は曲線を描くようであり、Ⅷ期前半に位置付けられるだろう。10は、口径10.1cm、高台径7.35cm、器高4.4cmである。高台は偏平で接地面の内側がやや窪む。また、底部中央は回転ヘラケズリ調整を残し、他は回転横ナゲ調整を施す。中葉と考えられる。11は壺蓋である。小片であるが口径13cmを測り、外面は体部中央まで回転ヘラケズリで仕上げている。口縁部のつくりは非常に甘く、焼成・胎土ともにあまり良くない。12は口縁部

を欠くが、径8.5cm、最大径19.2cm、高台径12.7cmを測る広口壺である。体部下半以下の外面は回転ヘラケズリを施した後に回転横ナデをおこなっている。

13は、口径14.6cm、高台径7.85cm、器高3.1cmの浅い椀状を呈している。断面が偏平な高台は、接地面が底部より上にありその機能を果していない。成形方法は、回転削り出しによっている。体部は内湾しながら開き、口唇部を丸く肥厚させている。灰釉陶器の模倣と思われるが、焼成が悪く、乳白褐色に発色している。削り出し高台の成形技法は、藤枝の助宗古窯址群の遺物にみられるようであり、当遺跡においても、助宗古窯址群のものと思われる削り出し高台の坏身が若干量存在する。しかし、13はこれらの遺物とは形態が異なり、製作年代もずれると考えられる。今後の資料の増加を待ちたい。

14~21は、灰釉陶器の編年でいえばK-90窯式併行、10世紀前半段階の遺物である。椀型（14~19）の他、皿形灰釉陶器が出土している。14は口径14.6cm、高台6.4cm、器高3.85cmを測り、腰の張りが弱い体部とつまみ出しによる外反した口唇部を持つ。底部外面へ体部最下部は回転ヘラケズリ調整を行い、施釉は内面体部に薄く施す。K-90窯式でも古手のものと思われる。15は口径15.6cm、高台径8.6cm、器高4.7cmで体部下半まで回転ヘラケズリを残す。体部は緩やかに内湾、口唇部を若干外反させており、高台は外面下部に明確な稜を持つ長方形である。また、施釉は刷毛塗りによって内面全体と外面上半部に施す。胎土は緻密で焼成も良い。16は法量が、口径15.1cm、高台径7.4cm、につまみ出している。また、刷毛による施釉は底部外面・高台付近を除く全域に施す。17は口径17.1cm、高台径9cm、器高4.5cmで、形態的には15・16と類似しているが、高台がやや低い。切り離し部分は回転ヘラケズリ、施釉は体部全体に刷毛塗りしてある。18・19はともに破片であるが、断面形態等からこの時期に位置づけた。20、21は皿形灰釉陶器である。法量はそれぞれ口径13.3cm、12.8cm、高台径7.65cm、7.2cm、器高2.35cm、2.2cmである。20は非常に薄手の底部と弱く外反させ先細になる口縁部を持ち、高台は外側に弱い稜線がある隅丸三角形になる。21はつまみ出してまるくした口唇部と断面方形の高台を持つ。双方ともに底部外面に回転糸切り痕を残し、腰部に狭い範囲で回転ヘラケズリが確認できる。釉は体部中位まで施す。15~21は、いずれもK-90窯式期の新しい時期の灰釉陶器と考えられる。

22~27は、次段階O-53窯式併行、10世紀後半の灰釉陶器である。器種は椀と皿の二種類である。22・23は、口径16.2cm、15.5cm、高台径8.05cm、7cm、器高4.3cm、4.95cmをはかる。やや厚手の底部の外面には回転糸切り痕を残し、直線的に開く体部と、外側にごく弱い棱をつくる丸みのある口唇部を持つ。施釉方法は、22が刷毛塗りでほぼ体部全域に薄く施し、23は口縁～体部中位に漬け掛けしてある。ともに腰部の調整は回転横ナデを行っているが、22は古い要素と新しい要素が混在しており、やや先行する可能性がある。22・23ともに県内産と考えられる。口径16.7cm、高台径8cm、器高4.95cmと若干大型の24は、底部の器壁がかなり薄手であるが、回転糸切り痕を残す点、体部・口唇部の形態等22・23に共通する。胎土は緻密で焼成も良い施釉は口縁部～体部下半の外面を漬け掛けしている。25は底部のみの破片で高台径7.2cmをはかる。回転糸切り痕を残し、外面に灰釉が垂れ下る。胎土・焼成とも良い。22~25の高台は、内側がこころもち内湾するが、形状は様々である。26・27は、口唇部四カ所に輪花を施した皿形灰釉陶器である。26は、口径14.8cm、高台7.2cm、器高3.2cmで、弱く内湾する体部と丸く肥厚する口唇部を持つ。底部外面は丁寧な回転ヘラケズリを施し、釉は漬け掛けである。胎土は緻密、焼成も

良い。27は口径15cm、高台径7.7cm、器高3.15cmを測る。底部は厚手で外面はナデを施している。体部は若干丸みをもって延びており、口縁部はやや薄い。施釉は濁け掛けで透明感のある緑灰色に発色している。

28は、口径15.6cm、高台径7.6cm、器高4.5cmである。底部内面は平坦ではなく、外面は回転糸切りの後にナデ消しを行い、その上に「十」のヘラ記号を刻む。体部は直線的に開き、口唇部をごく僅かに外反させる。無釉である。29は、口径12.6cm、高台径6.5cm、器高3.9cmで比較的小ぶりである。底部外面に回転糸切り痕が残る。体部は直線的であるが、中位に弱い稜を持っており、非常に堅い焼きあがりになっている。28・29は、時期的にH-72窯式併行期以降の産物と考えられる。

30・31は綠釉陶器である。30は小片であるが高台径8.5cmを測る。全体に綠釉が厚く塗られており、器壁内部の焼成はさほど良くない。黒緑色と緑色の斑に発色している。31の高台径は8.1cmを測る。釉は剥離が激しく、発色も悪い。

32~35は、所謂「土師質須恵器」とでも呼称できる、焼成の悪い土器である。胎土は比較的緻密であるが、焼成が悪いため色調は白灰色や淡黄灰色を呈し、底部の一部に黒斑をもつものも存在する。成形はロクロを使用し、底部の切り離しも回転糸切り法を用いる。32は、口径12.5cm、底部径6cm、器高3.75cmで、体部は若干内湾しつつ立ち上がり、口縁部は直線的に外傾している。33は、口径13.4cm、底径5.7cm、器高4.2cmを測り、口縁は弱く外反、その端部はやや肥厚する。34・35になると口縁部の外反がより強くなり、口径値に対する底径値の割合が小さくなる。34は口径13.3cm、底部径4.65cm、器高3.7cmで、墨書きのほか、底部外面糸切り痕の上に「十」のヘラ記号が刻んである。35は口径12.4cm、底径5cm、器高3.7cmを測る。体部中位に稜を持ち、外反部と内湾部を分けている。これらの土器の成形方法、器形等は、南関東の南多摩古窯跡群出土の土器と共通する点が多い。南多摩古窯跡群において展開されている編年觀をスライドさせるならば、32・33は御殿山59窯式に、34は同25窯式に、35は同5窯式にそれぞれ併行すると考えられる。年代的には、9世紀後葉から10世紀中葉あたりまでが考えられている。

次に土師器についてその概略を述べる。出土した器種は壺がほとんどで、その他高环形、盤状形、斐形等がある。概ね古墳時代後期の所産と考えられるものが多く、奈良時代以降の土師器とみられるものは少ない。

36~54は伝統的な器形を呈する壺、あるいはその系譜を引く环形土器である。底部の形態から丸底のもの（35~43）と平底のもの（44~54）があるが、その鑑別は難しい。強弱の差はあるが何れも口縁部を内湾させており、そこに横ナデを施す。外面の調整はヘラケズリを行うもの（36・41・47・52）のほか、ヘラミガキ（38）や指頭痕（40・44）のみられる土器もある。底部外面には、小片のため確認できない38のほか、42・45~47を除くすべてに木葉痕があり、それらのほとんどがヘラ書きによる疑似木葉痕のようである。内面は放射状に細かいヘラミガキ調整を施すもの（36・37・42~44・46・47・51・52）の他、ナデ（38・44）、木口痕（44・54）等も認められる。法量は口径が18cm前後の大型のもの（52~54）、12cm前後の小型のもの（43・51）、13~14cmの中型のものの三種類に分類できる。口径の小さいもの、口縁部の内湾が弱いものが、より新しい要素をもつ土器と考えられる。

55・56は、模倣壺の中でも口縁部が反り気味に内傾するものである。口径はともに12.7cmで、器高は

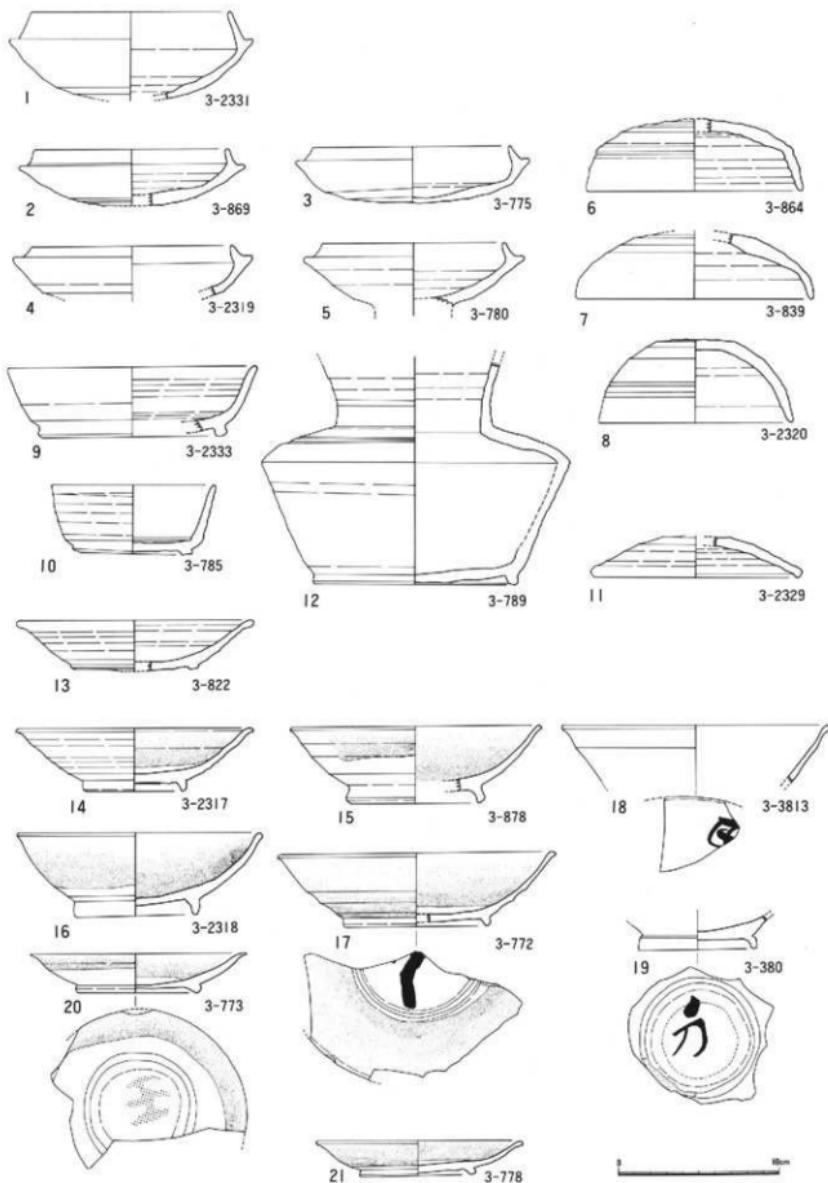
55が4.4cmである。口縁部の横ナデ調整のほか、指頭痕、指ナデ調整が観察できる。56は疑似木葉痕が刻まれる。

57～69は口縁部を屈曲させた坏で、ほぼ直立し若干外反する土器（58・61～64・66～69）と直線的に延びるもの（59・65）がある。底部は、平底（60～62・64・67～69）と、丸底（58・66）があり、確認不可能な小片を除くと木葉痕を施していないのは58の一点のみであった。これらの木葉痕もヘラ状の施文具による疑似と考えられる。法量的には、口径17.2cmの大型（59）、11cm前後の小型（66～69）、13cm前後の中型の三種類に分類できる。技法的には、疑似木葉痕のほか、ヘラミガキ（57・61・64）や指頭痕を残すもの（56・58・59・62・66～69）、61のヘラケズリ、ナデ（56・58・63・66～69）等が見受けられる。

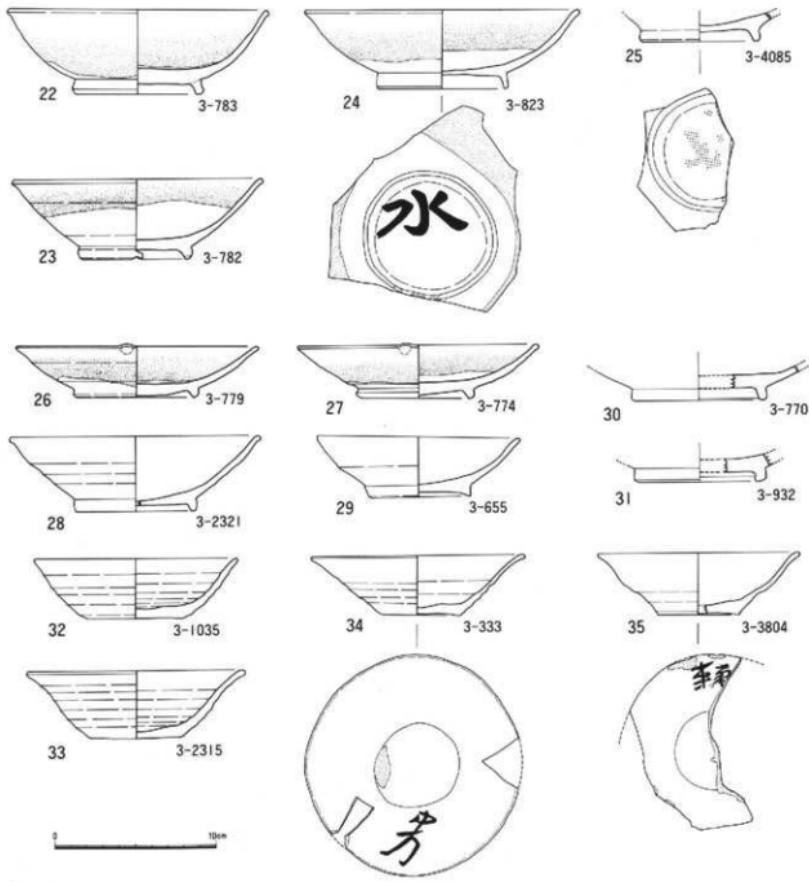
70は、底部外面に墨書きみられる土師器坏で、口径12.2cm、器高3.5cmを測る。薄い器壁の底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部は直線的に外傾する。底部と体部下半にはナデ調整を施し、その境は明確ではない。また内面はナデのほかヘラケズリ調整がみられる。71は、所謂盤状形坏で口径14.9cm、器高2.25cmを測り、口縁部を横ナデ、体・底部をナデまたはヘラケズリしている。静清平野における奈良時代以降の土師器の実態は判然としないが、70・71ともに奈良時代中葉あたりの土器であろうか。

72は、平坦な底部から若干内湾しながら立ち上がる体部とやや屈曲する口縁部を持つ。端部は丸くつくる。焼成が悪く表面が摩滅しているが、丁寧な仕上げの土師器である。

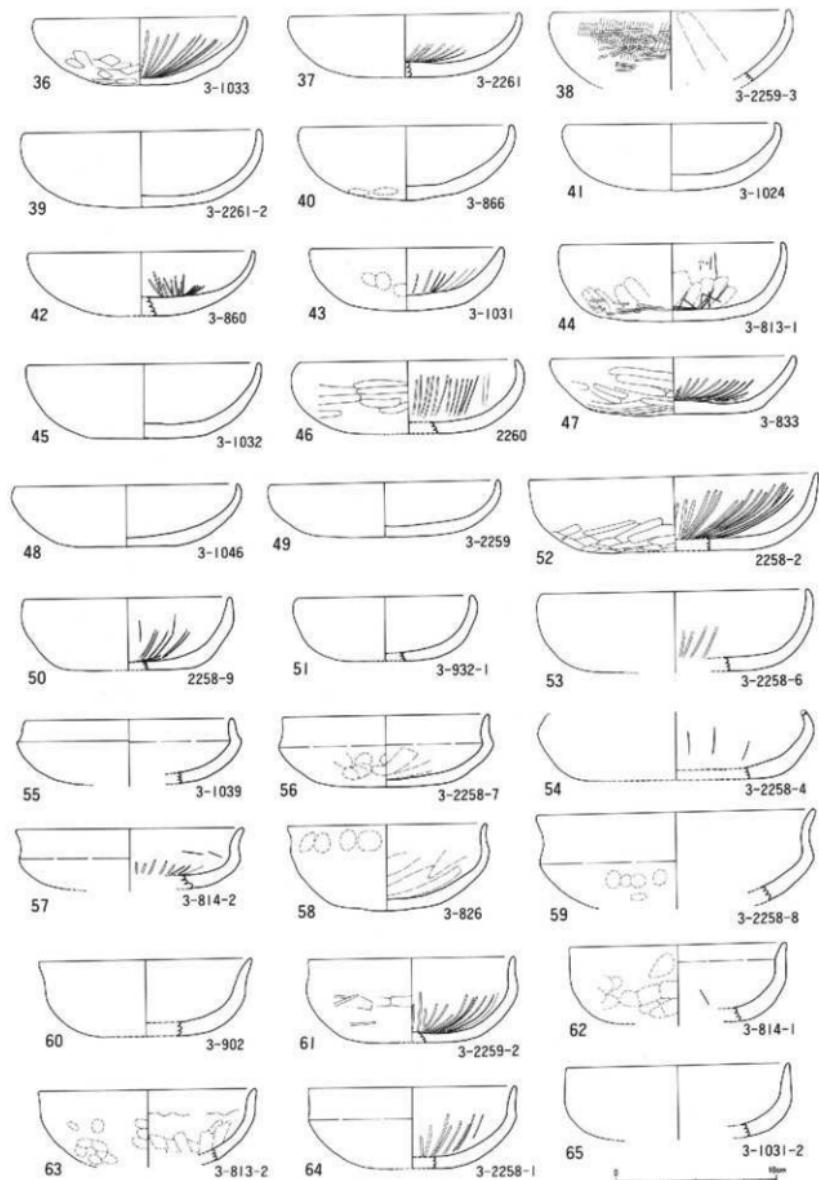
73～75は高环形土器である。73は口径14.2cm、裾部径11.4cm、器高9.5cmを測る。坏部は比較的大きく外傾し、脚部は弱い稜を中位にもつやや内湾した形をとる。調整は口縁部・裾部に横ナデを施し、坏部内面には放射状にヘラミガキを行う。



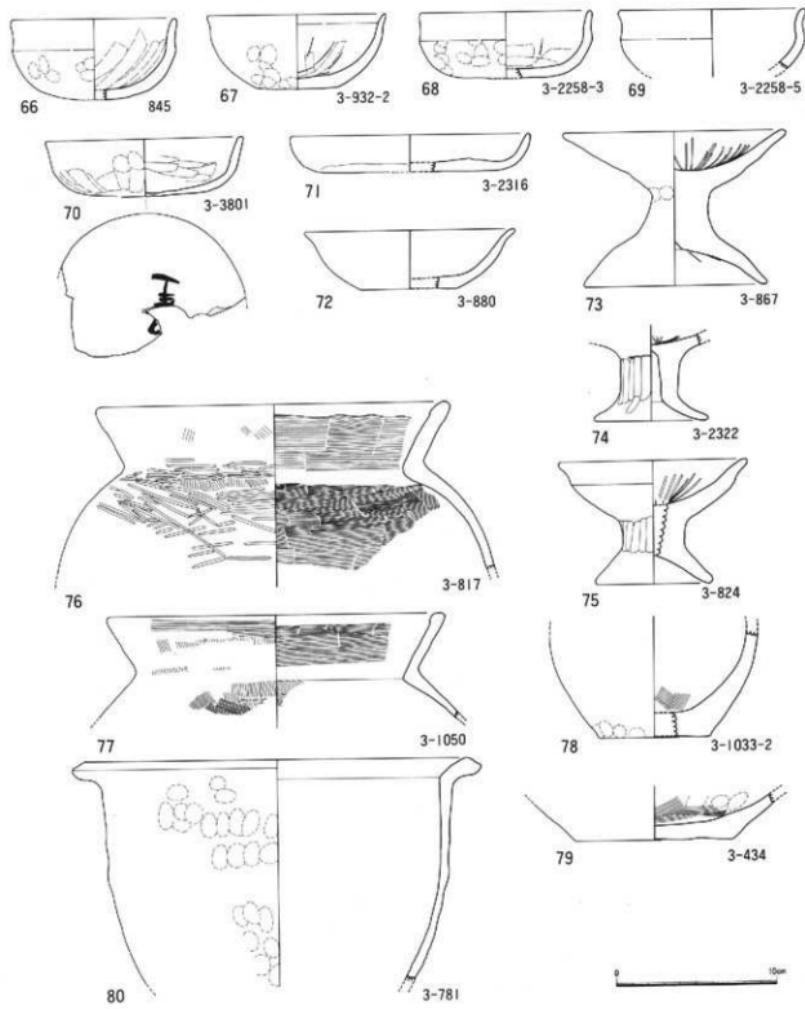
第15図 宮川4区S R54出土土器実測図1



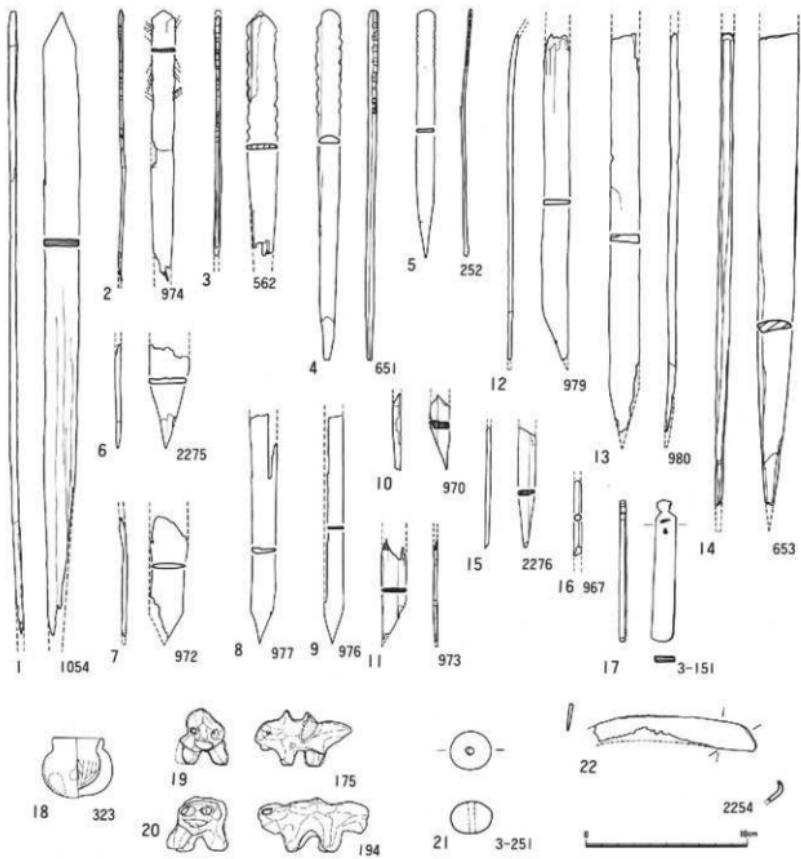
第16図 宮川4区S R54出土土器実測図2



第17図 宮川4区S R54出土土器実測図3



第18図 宮川4区S R54出土土器実測図4



第19図 宮川4区S R54出土遺物実測図

2. S R53 (第20図～第23図)

宮川4区S R53は、7本の旧大谷川跡のうち、S R54のすぐ南側で確認された遺構である。グリッドN92・93、O92・93を西から東へ流れ確認面での川幅8.1m、延長13mで、最深部の標高は3.5mであった。覆土は暗灰色砂質粘土で、最下には砂礫層があり、遺物の大半はそこから出土した。遺物は河川の中央に沿って、ある程度のまとまりをもって出土している。そのうちわけは、主体を占める土器の他、紡錘車、短刀、鐵鎌それぞれ1点、動物遺存体等が確認されている。なお、出土遺物からS R53は宮川3区S R486と連続すると考えられる。

(1) 土器

S R53より出土した土器で、実測し得た72点のうち、僅かな破片を除くすべてを図示した。須恵器・灰釉陶器・山茶碗が37点で、残りは土師器である。前者は、川江試案第Ⅲ期後葉の須恵器から12世紀末～13世紀代と思われる山茶碗まで出土しており、その主体は山茶碗にある。またこれらの中には、9点の墨書き土器もふくまれている。後者は、S R54同様、古墳時代後期の所産と考えられるものがほとんどで、奈良時代以降の実態は不明である。

S R53出土土器1～6は、古墳時代後期から奈良時代までの須恵器である。1は、受け部径15.6cm、器高3.9cmを測り、立ち上がりは0.8cmと高くやや外反しながら内傾する。端部は丸みを帯びる。色調は、内面が赤褐色、外面が褐色であるが、胎土は緻密で焼成も堅く良好である。第Ⅲ期中葉～後葉と考えられる。2は、受部径11.5cm、立ち上がり高0.7cmで小型化している。内傾した口縁部の端はあまり、受部は斜め上方に僅かに延びている。色調は灰色を呈し、胎土・焼成とも良い。第Ⅳ期前半に位置付けられる。3～5は第Ⅴ期以降の环身である。いずれも底部のみしか残存していないが、高台径はそれぞれ8.8cm、10cm、12.2cmを測る。3は、体部最下部を回転ヘラケズリしており、底部は回転ヘラケズリの後にナデを施す。胎土は緻密、焼成も良好で4・5より丁寧な作りである。4は底部外面を回転ヘラケズリの後にナデしており、中央部がやや窪む。色調は灰白色である。5は底部の器壁が非常に厚いが、板状の調整痕がみられる中部はやや薄手となり、その周囲は回転ヘラケズリの後にナデを行っている。3・4は第Ⅴ期中葉～後期、5はさらに下がると思われる。

7～11は、概ね灰釉陶器編年でO-53窯式後半～H-72窯式併行、10世紀末～11世紀と考えられる土器である。7は、口径13.8cm、器高4.2cm、高台径7.6cmを測り、回転ヘラケズリ調整を体部まで施す。高台は、体部の器壁と比較すると随分厚くしっかりしている。底部外面は回転ヘラケズリ調整で消す。施釉は漬け掛けにより、口縁部から体部下半までに及んでいる。焼成・胎土とともに良好で、灰白色を呈する。S R53においては最も古いタイプの灰釉陶器でO-53窯式後半期併行であろう。

8は、口径13.4cm、器高3.75cm、高台径6.2cmで、やや偏平な感じのする碗である。底部は糸切り痕をそのまま残し、高台にもみ痕がある。体部はごく弱く内湾するが、口縁部は逆に外反する。体部内面の灰釉は薄く掛かり、色調は濃灰色で、前段階までの土器と明かに異なる。9、10は、ともに破片で、9は口径15.8cm、10は底部6.8cmを測る。9は三日月高台を持ち、底部外面には回転糸切り痕がそのまま残る。11は、底部のみ残存の長頸壺と思われる。底径は10.6cmで、体部下半は回転ヘラケズリを施す。色調が淡白灰色で焼成がよくない。

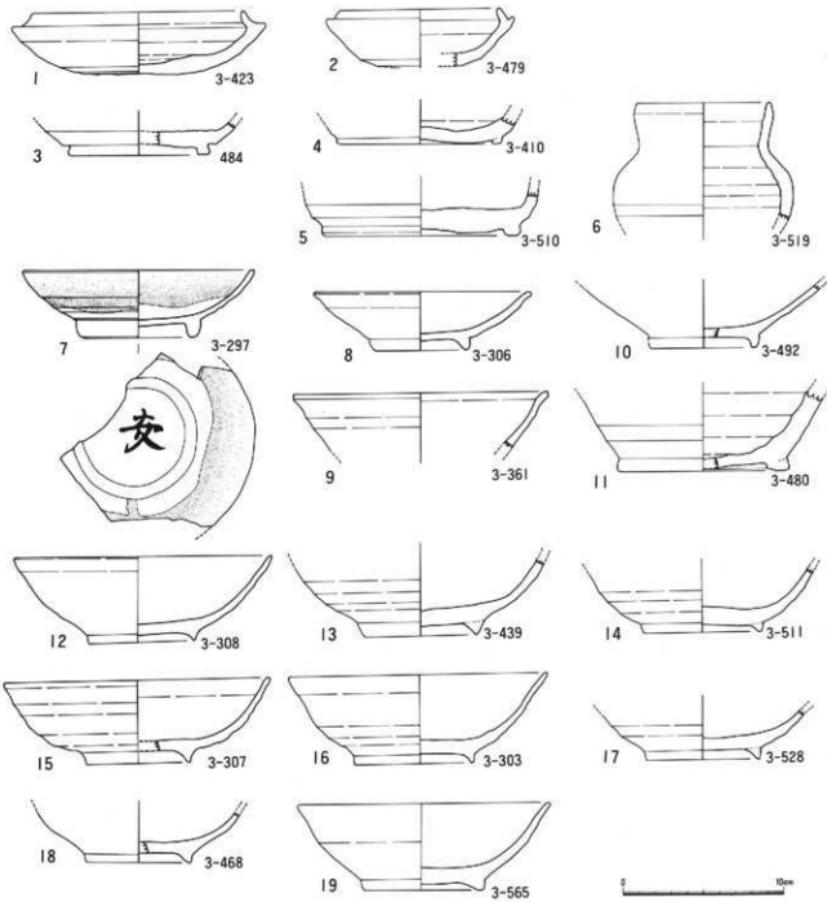
12~19は概ね11世紀終末~12世紀前半代の山茶碗である。形態的には、やや厚手で平坦部を持つ底部から、内湾しつつ立ち上がる体部と直線的に延びる口縁部を持つ。高台は、体部に比較してやや貧弱でその断面は三角形を呈する。調整は底部に回転糸切り痕を残すものが大半で、他の部位は回転横ナデしている。19を除いて、製作技法・胎土・色調ともに似かよっており、同一窯跡群産のものと推定できる。法量的には、高台径が6.6~8cm、器高5.2~5.5cm、口径15.4~16.4cmを測る。他の土器の色調が暗灰色~淡青灰色であるのに対して、19のそれは淡白色が強く、時期・生産地が異なるかもしれない。釉は、僅かに自然釉の掛かる12・13のほかは無釉である。

20~26は、すべて底部のみの破片で、前代までの土器と比較すると残存状態が非常に悪い。年代的には12世紀後葉~13世紀初のものと推測する。高台径は、26が8.2cmを測りやや大きいが、他は7.3~7.7cmである。底部成形は、回転糸切り痕をそのまま残すもの（20~23・25）とナデを加えるもの（24・26）の二種類がある。高台は20のように比較的しっかりした高いものがあるが、総じて低下しており、その作りも雑である。色調は淡灰色系のものが多く、若干黄色が加わるものもある。この群のなかには「大」と書かれた墨書き二点、記号的な墨書き二点等の墨書き土器があり、宮川3区S R 486と共に通ずる性格を持つ。27~31の土器は、13世紀代のものと考えられる。すべて底部のみの破片である。28は小片で不明であるが、他は底部外面に回転糸切り痕を残し、その器壁はぼってりとして厚手である。高台は低く、その断面は台形もしくは三角形で、つくりは雑である。体部は回転横ナデを施す。胎土・色調は、砂粒・細砂礫を含み、灰白色に焼き上がっている。

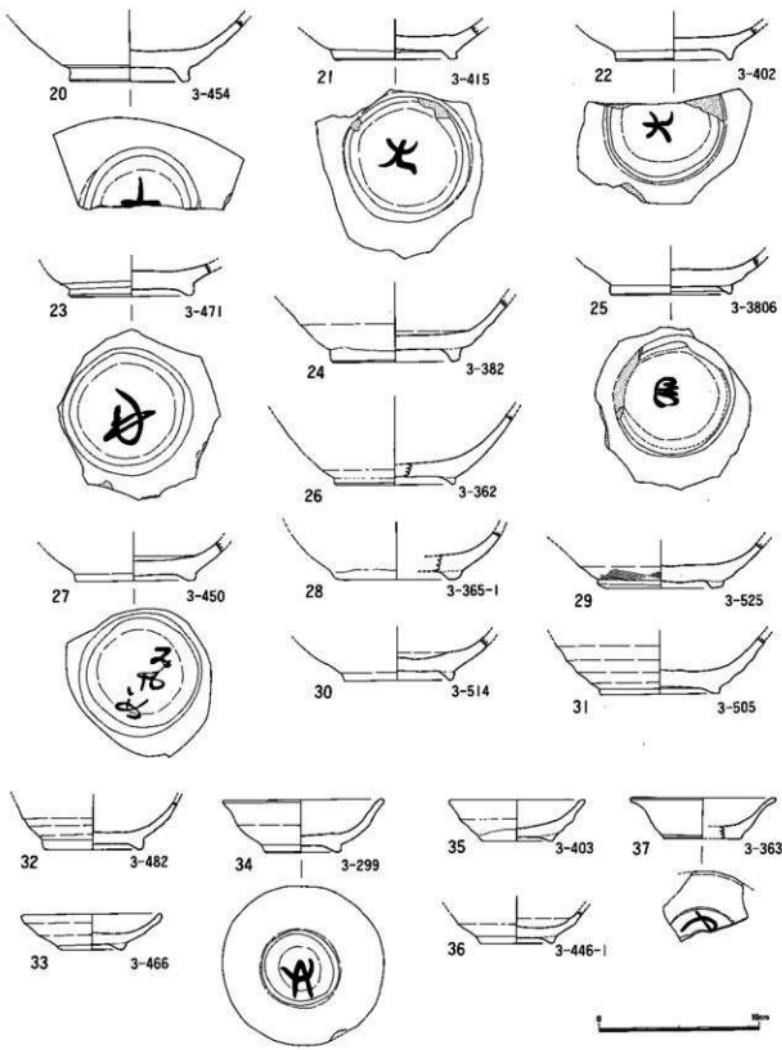
32~37の五点は、小楕・小皿である。32は口縁部を欠く。高台径6.25cmを測り、平坦な底部と内湾する体部を持つ。底部外面は回転糸切り痕を残す。33は高台径4.3cm、口径8.65cm、器高2.7cmを測り、厚めの底部と低く横に開く体部を持つ。調整は底部に回転糸切り痕を残し、他を横ナデする。内面に僅かに自然釉が付着し、胎土・焼成とも良好である。34の法量は高台径4.9cm、口径10cm、器高3.3cmで、内湾して立ち上がる体部と若干外反する口縁部を持つ。底部外面は回転糸切り痕を残し、他は回転横ナデ。細砂礫を少量含むが、焼成は良好で、色調は淡灰色である。35は、口径8.4cm、高台径10cm、器高3.3cmである。内面は平坦面を持たず、口縁部は器壁を薄くする。底部は回転糸切り痕を残し、他は回転横ナデを施す。32~36はいずれも高台を貼りつけるが、その断面は三角形であり高くない。37は口径8.9cm、器高2.5cm、底径4.8cmを測り、高台は付かない。成形は底部が回転糸切りで、他は回転ナデである。厚きのある底部と外反する口縁部を持つ。これらの土器は、総じて13世紀中葉以降のものと考えられる。

次にS R 53より出土した土師器について、その概略を述べる。実測し得た土師器35点のうち、壺形土器の底部等を除く32点を図示した。

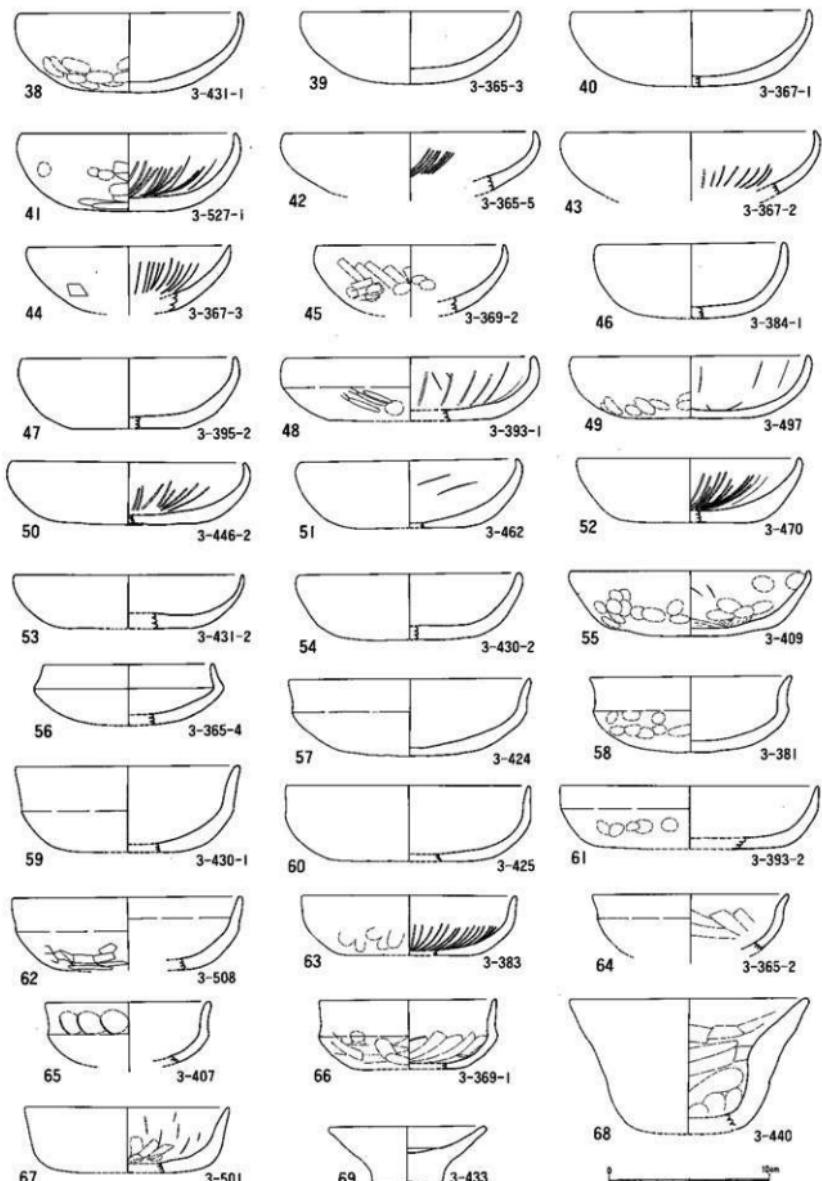
38~55は、体部・口縁部を内湾させる伝統的な壺形土器、あるいはその系譜を引く土器である。底部が丸底のもの（38~46）と平坦なもの（47~60）の二種類に大別できる。総じて、底部が平坦な土器のほうが、器高が低く偏平になる。口径は、15cm台と推定できるもの（42・43・48・49）、12cm台のやや小ぶりのもの（44~46）、その中間の13・14cm台のものがある。量的には13・14cmを測るものが多い。調整は、内面にヘラミガキを加えるもの（41~44・48~50・52）のほか、ヘラケズリや指頭圧痕を残すものがある。また、底部外面には木葉痕をのこすのが普通で、確認できない42~45を除くと、木葉



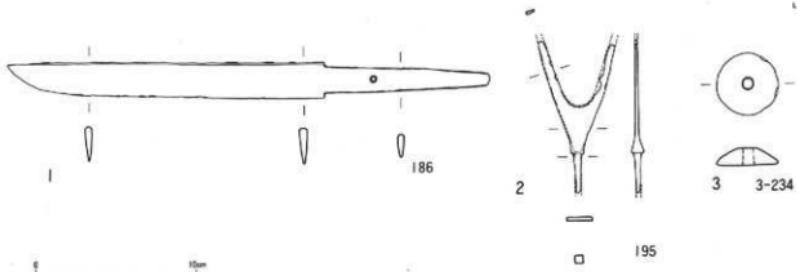
第20図 宮川4区S R53出土土器実測図1



第21図 宮川4区S R53出土土器実測図2



第22図 宮川4区S-R53出土土器実測図3



第23図 宮川4区S R53出土遺物実測図

痕がないのは47の一点のみである。しかも、そのほとんどは疑似木葉痕とみられ、細いヘラ状の施文具で意識的に刻み込んでいる。

56は口径10.4cm、器高3.7cmで小型の模倣壺である。胎土は緻密で焼成も良好である。色調は赤褐色を呈している。丸底で、体部との間に明確な稜を持つ口縁部はわずかに外反しつつ内傾する。

57~67は、口縁部と体部の間に稜を持ち、口縁部を屈曲させた土器である。丸底のもの(57・58)と平底のもののが存在する。口縁部は、直線的にのびるもの(60~63・67)と弱く外反するもの(57~59・64~66)がある。口縁部の器高に対する比率が比較的高く、短く弱く外反するものは64の一点のみである。焼成はあまり良好とは言えず、淡赤褐色を呈し、摩滅の著しいものもある。調整はヘラケズリ(62)、ヘラミガキ(63)、内面へのナデ(64・66・67)のほか指頭痕がみられる。木葉痕は、底部の残存が良好で確認できるものすべてに残っており、そのほとんどが疑似木葉痕と思われる。

68は、口径14.8cm、推定器高8.8cmの鉢状土器である。器壁は厚いが胎土がやや粗く細砂層を多く含んでいる。先細の直線的な口縁部と丸みのある方形の体部を持つと思われる。調整は不明な点が多いが、内面はヘラ状の工具あるいは指によってナデた痕が認められる。

68までの土師器はすべて古墳時代後期の所産と思われるが、69は所謂柱状高台皿と呼称されるもので11世紀代のもので有りうる。口径9.8cm、器高3.5cmである。胎土は緻密であるが、焼成が悪く、色調は淡白褐色を呈する。調整技法は、表面摩滅のため不明である。

第4節 宮川5区S R 202

宮川5区を概略的に大別すると、5区北側を東に向い流れるS R 201を中心とする地域、5区西半分及び南に広がる奈良～平安時代の遺構面が確認された微高地の部分、5区東側に南北に細長く連なる大流路の右岸付近部分、の3地域になろう。ここで扱うS R 202は、発掘区東側に細長く連なる大流路の右岸に近い流路であり、南に位置するS R 203につながる北側の流路の右岸に近い流路である。

1. S R 202 (第24図～第26図)

S R 202とは宮川5区のC 106グリッドより105列に向かって南へ流れる旧流路である。確認面での幅は最大で4.48m、延長は28.65m、河床は最深部標高4.12mを測る。

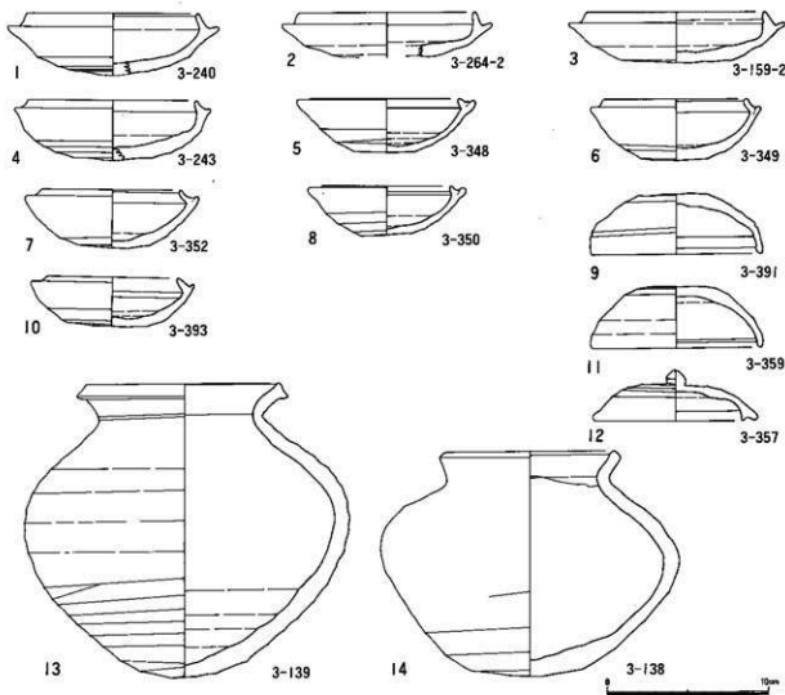
この旧流路内から木製の形代、人形2点、斎弔2点および石製勾玉1点が出土し、祭祀的色彩の強い流路であったことが確認されている。

S R 202出土の土器はコンテナ25箱分になり、再度の接合復元の結果75点実測可能となり、第26図～第28図にすべてを図示した。『大谷川II』において既に報告済みの宮川5区S X 336出土の土器と同時代と思われる。

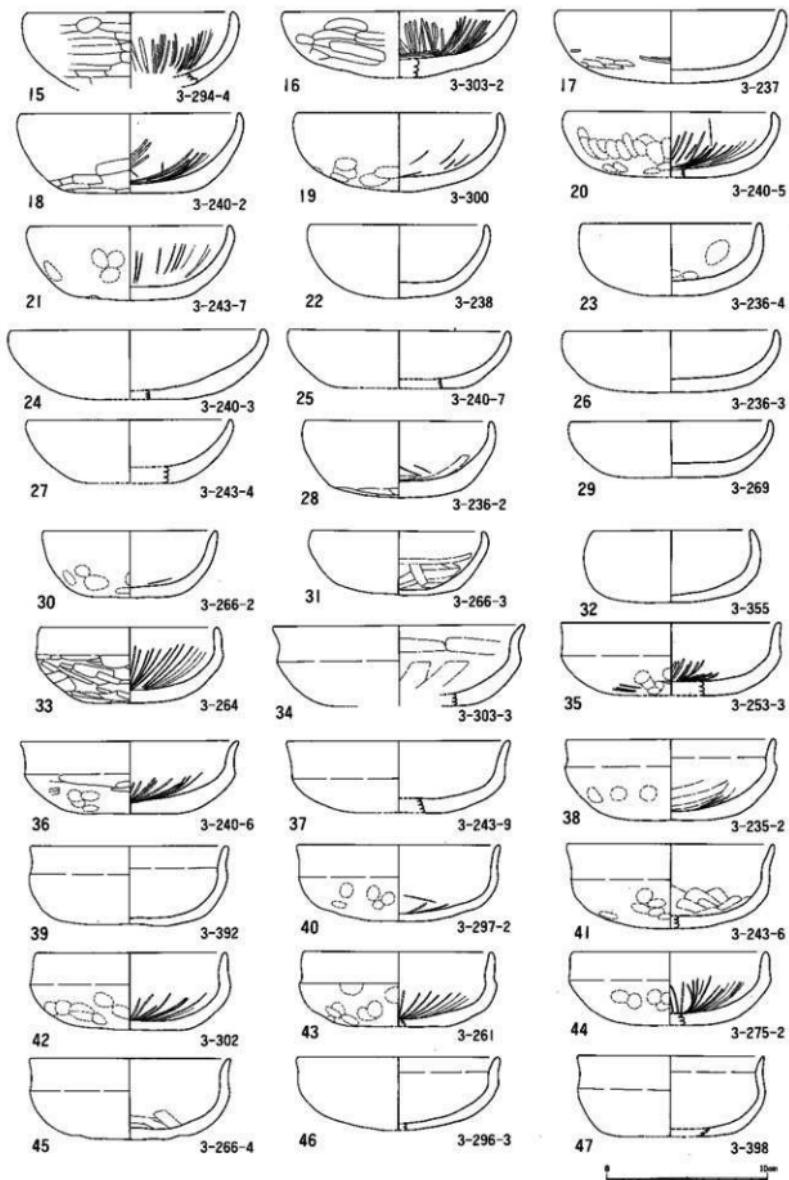
1～14は須恵器である。1～11は須恵器の壺であり、大別すると、1～3が遠考研編年のⅢ期後葉、4～11がIV期前半に該当しよう。1は受け部径12.0cm 2は12.2cm 3は12.5cmを測る。1は、ヘラケズリが体部の1/3程度まで来ているが、3はヘラ切りのまま未調整という粗略な作りである。4は口径が11.9cmあり、ヘラケズリが体部1/3程度まであり、体部も丸味を帯びている。5、8、10はヘラケズリがかなり残るもの、口径は、10で9.4cmと最小を測る。薄手で底部が平面的に作られている共通性があり、粗略化している。壺蓋9、11も切り離し痕を消す程度のヘラケズリしかしていない。12は長頸壺の蓋と考えられる。13、14は短頸の壺である。13は口縁部径で12.0cm、胸部最大径20.6cmを計り、底部は丸底である。14は口縁部径10.6cm、胸部最大径18.8cmを計り、丸底ぎみである。

15～32は口唇部をわずかに内湾させる伝統的な土師質の壺である。15～23は丸底である。15、16においては、外面は横位の手持ちヘラケズリ、内面は縦のヘラミガキが放射状に走り、丁寧な作りになっている。15は口径13.2cm、16は口径14.5cmを測る。17は外面にヘラケズリを施している。18は口径13.8cmを測り、外面にヘラケズリ、内面にヘラミガキを施すが、底部は若干平底ぎみにし、肥厚に作っている。19、20、21は外面に指頭圧痕を残し、内面にヘラミガキまたは木口によるミガキを残している。24～31は平底の伝統的な壺である。24で口径17.9cm、31は10.8cmを測る。28、31は、内面に木口でミガキを施した痕が残る。30は、口縁部の内湾が弱くなり、ほぼ直線的に立ち上がる。32は全体に丸味を帯び、口縁部も内湾する。33～71は、口縁部の屈曲させたいわゆる“鬼高潮並行”的壺である。33～63は丸底という共通性をもつ。33は口縁部はヨコナデをして体部との区画をしているもののやや内傾ぎみで、外反させていない。体部外面は非常に丁寧な手持ちヘラケズリが全面にわたり施されており、内面に縦のヘラミガキが入る。全体的に長い製作時間を要した丁寧な作りが印象的である。このように口縁部が内傾するものは、42、43、44、60である。34は口径15.6cmを測り内面に木口によるミガキが入る。口縁は外に大

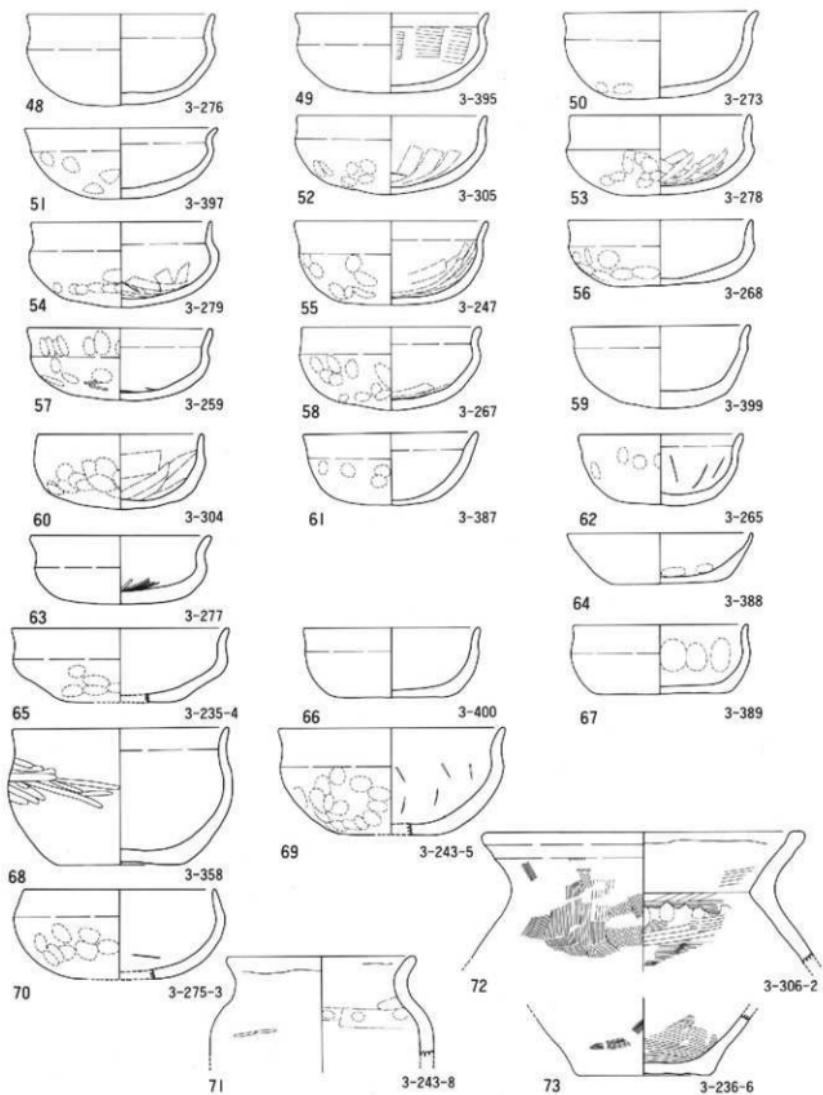
きく反る。このように口縁が大きく外反するものは36、37、40、48、55、63である。外面のヘラケズリはほとんど見られず指頭圧痕が残るものが、丸底の坏のうち20ある。内面の放射状ヘラミガキは33、35、36、40、42、43、44、63、に残り、木口によるミガキ痕は、34、38、49、52、54、55、58、60に残る。口縁部の幅（ヨコナデ）が施されている幅）が体部に対して広いものと狭いものとがある。器高1に対し、口縁部の幅を出すと、37においては1:0.5、63で1:0.48、口縁部の幅が狭いものとして、38で1:0.33、51で1:0.29となる。64は体部、口唇部ともに内湾せずほぼ45°上方に向い立ち上がり口径11.6cmと小型である。65、66、67は平底の「鬼高窓並行」の坏である。65は大きく口縁を外反させ、体部を一度張り出させたあと、底部を平底にするためか意図的に底部に近い体部をくびれさせている。67は平底を広くとり、箱型に近い形状になっている。68、69は、「壺」に近い深い坏である。68は体部外面に横位のヘラケズリがはいり、上げ底風の平底になっている。69は口縁部を大きく外反させ平底ぎみである。70は器高が口径のわりに高く口縁部が内傾している。71は小型壺である。72、73、74は壺である。いずれも内外面ともに細かいハケ目調整を施している。72は口径、18.4cmを測り、「く」の字型に口縁部を折り返しており、口縁端部は内側を肥厚させている。74は口径38.2cmを測る大型の壺である。



第24図 宮川5区S R202出土土器実測図1



第25図 宮川5区S-R202出土土器実測図2



第26図 宮川5区S R202出土土器実測図3

第IV章 主要遺物

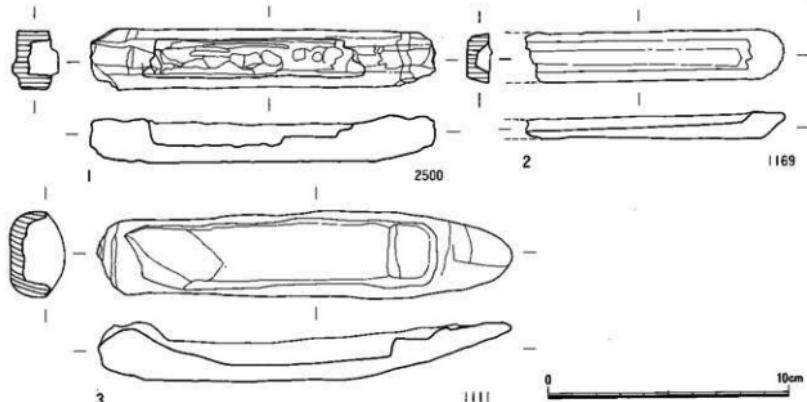
第1節 祭祀関係遺物

1. 舟形木製品（第27図）

認識できるものは3点であり、うち2点はほぼ完形である。いずれも削り抜いて作られた立体的なものであり、スギの柾目材を用いている。

1は宮川4区の旧大谷川より出土した。長さは14.3cm、幅2.45cm、高さ1.93cmを測る。舳先・艤ともに両角を斜めに落としただけの形状で尖っていない。断面形は長方形に近く、両側面はほぼ底面に対し垂直である。舟底は厚さ0.72cmほどで舳先よりには段差を設けテラス状の面を作っている。舟首上面には横方向に幅0.4cmほどの溝状の掘り込みもある。外面底部および内の削り抜き面とともに非常に整形が粗く、加工痕がはっきり残り凹凸が激しい。木製品の可能性も考えられる。伴出土器はかなりの年代幅があり限定できない。

2は宮川6区の旧大谷川S R312から出土した。欠損のため全体の形状は明らかではないが、幅2.08cmと他の2点に比べて小型である。先端の平面形は半円状に丸く仕上げられ、側面形は逆台形状で先端は45°の角度で切り落とされている。断面形は逆台形で舟底の厚さは0.3cmほどである。1に比べ表面の調整は丁寧である。非常に小形であること、長さに比して幅がせまく細長いこと、端部が丸く仕上げられていることなど、はたしてこれを舟形と認定できるかどうかは疑問である。とりあえず、ここにおいておくが他の用途の考えられる可能性は高い。伴出した土器の年代は6世紀中葉から11世紀と幅をもつもの



第27図 舟形木製品実測図

である。

3は水上10区の土坑S P727から出土した。長さ17.2cm、幅3.55cm、高さ2.36cmを測る。舳先は緩やかなカーブながら幅は狭くなり端部は丸い。舳は幅はそのまま丸く仕上げられている。底面は緩やかなカーブを描きながら舳艤とともに反り上がり、特に舳先は側面が鋭角となっている。断面形は隅丸の逆台形を呈し、舟底の厚さは0.55cmほどで舳先・艤に近くなるにつれて厚くなる。舳先の3cmほど内側には一段下がって幅1.5cmほどのテラス状の平坦面がある。同土坑からは弥生時代後期末～古墳時代初頭の土師器が出土しており、舟形木製品も同年代のものと考えられる。

静岡県内では、浜松市伊場遺跡で奈良時代後半から平安時代のものを中心に64点が出土しているの(1)はじめ、古い方では静岡市登呂遺跡・清水市長崎遺跡・韮山町山木遺跡などで(2)(3)(4)弥生時代後期の舟形が出土している。また近年静岡市川合遺跡で準構造船を模した古代時代中期末の舟形も出土している。他の木製祭祀具とは異なり、舟形は弥生時代から中・近世まで継続して使われたよう特に(5)弥生時代や古墳時代のものは剣形あるいは刀形木製品と共に伴する例が多く興味深い。(6)

(1) 浜松市教育委員会 「伊場遺跡、遺物編1」 1978

(2) 日本考古学会編 「登呂本編」 1954

(3) 静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査中

(4) 後藤守一編 「伊豆 山木遺跡」 1962

(5) (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 「川合遺跡 昭和60・61年度静清バイパス川合地区埋蔵文化財発掘調査報告」 1986

(6) 久保寿一郎 「日本古代の船船資料－舟形模造品資料集成－」『九州考古学』第61号 1987

2. 刀形木製品（第29図～第30図）

刀形木製品は、総数22点を数える。その他、刀形木製品である可能性を指摘することができる木製品が2点、剣形木製品1点を数える。ここでは、以上25点の木製品を観察し、検討する。

刀形木製品の形態について見てみる。基本的には、刀身及び柄を作り出している木製品は、刀形木製品として、太刀を模して作られた。ここでは特に、柄頭及び柄の作り方に注目して、5つに分類してみる。A～E類の刀形木製品の形態の特徴を述べる。

＜A類＞

柄頭が円頭をし、柄が弧状にそるよう削り出してある。柄の作り出しは、柄上部を二箇所三角形に切り欠き、柄下部を弧状に切り欠く。柄頭及び柄の削り出しは、非常に丁寧である。刀身は直刃で、刃は平作りのように造り出している。鋒は切刃造りのように直線的である。左柄、刃先下のときの表面が平滑に整形され、裏面には削り痕が残る。

＜B類＞

柄頭及び柄の作りだしが直線的である。特に柄頭は圭頭状に切り出している。柄上部は二箇所直角三角形状に切り欠き、柄下部は、弧状に切り欠く。柄頭及び柄上部の切り出しは、鋭利な刃物で、一度に一直線に切り欠いている。刀身は、細長い形状のものが主体で、鋒は鋭利に尖る。刃は、やはり平造りのように造りだすものが多い。鋒は、切刃造りのように直線的である。

＜C類＞

A・B類に比べて簡素な作りである。柄頭は圭頭状に切り出している。上下一箇所ずつ同じ位置を切り欠く。この切り欠くことが、柄頭と柄との区画を意味するのか、柄と刀身との区画を意味するのか不明である。位置から考えると、切り欠く部分自体が、柄を意味していると推測する。刀身はやはり直刀で刃は平造りのように作りだしている。鋒は、直線的であるものの、中にはフクラしきものを作り出しているものもある。

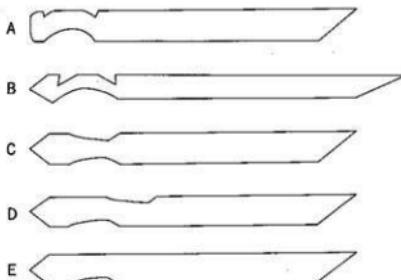
＜D類＞

柄頭は圭頭状に切り出している。柄を作り出していると思われる切り欠き部分が、上部、下部にくい違いを見せ、作り出される。上部の切り欠きか、下部のそれより刀身に近い方に寄っている。切り欠きは、弧状または、それに近い一部直線になっている。刀身はC類と同じ。

＜E類＞

柄を作り出していると思われる切り欠き部分が、わずか一箇所だけである。柄頭は、圭頭状に入り出している。これ以上、簡略化した場合、刀形と判別できないまで、簡素な作りである。

制作技法について、2点指摘しておきたい。その



第28図 刀形木製品分類模式図

第1は、極目取りした刀形木製品の切り出し方である。ミカン割状に裂いた薄いスギ材を用い、芯材部分を切り落とし刃材を切り落として刀の幅を描える。芯に近い方（木裏）を刃先方向にし、樹皮に近い方（木表）を揃方向にする。左柄刃先下のときの表面は平滑に整形し、裏面は刃先を削り出すように、刃先近くを削り、薄い刃を造り出す。場合によっては、鎬らしきものを造り出すために裏面の棟に近い部分を削るものもある。この技法で制作されたものは1・2・3・6・7・10・14・17・22である。

第2に、柄、柄頭を表現するために、柄上部、下部に切り欠く方法である。鋭利な刃物を30~45程度の角度で入れ、弧状に引き、一度抜いて逆から斜めに直線的に切り落とす。この切り欠き方をするもの、4・6・9・11・13・15・17・19・21である。丁寧な仕上げの場合では、斜めに直線的に入れた刃痕を消すように新たに何度もこの部分を整形する。この技法を用いるものは、1・2・3・12・16・19・24・25である。

刀形木製品の出土地点をみると、遺構出土のものを拾ってみると、宮川6区S R313出土が12点、宮川4区S R56出土が2点、『大谷川IV』において、遺構に準じた扱いをする西大谷1・2区D46出土が1点である。A・B・C・D・Eに分類される刀形うち残存状態の良好なものは、大半がS R313出土であり、その中でも主なものとされる2・4・8・14等は、S X335というS R313内でも遺物集中部とする地点からの出土である。出土層位は残念ながら、旧河川内という条件等のため、明確にできない。そこで、刀形木製品出土地点の土器を、下層より上層まで観察することにより、同地点出土土器の時代幅を明確にしておきたい。

S R313は、須恵器の坏身で見ると「遠考研編年」の第II期後半～第IV期前半の範囲に入ると思われる。S R56は、第III期中葉～第IV期前半の範囲である。D46は、第III期の後葉・末～第IV期前半の範囲にあることがわかる。

次に他遺跡の刀形木製品（古代に限る）の出土例を見てみる。管見ながら周辺資料として全国で30あまりの遺跡を確認した。これらの遺跡の中で、神明原・元宮川遺跡出土の刀形木製品と同系統の刀形、つまり、柄頭が作り出され、柄が弧状にやや反り、鎬の表現がなく、平作りの直刀である刀形の出土遺跡を挙げてみると、三ツ寺I遺跡（群馬県群馬郡群馬町）、川合遺跡（静岡市）、伊場遺跡（浜松市）、高溝、額戸遺跡（滋賀県近江町）、入江内湖周辺遺跡（滋賀県米原町）、服部遺跡（滋賀県守山市）、赤野井（11）湾遺跡（滋賀県守山市）、穴太遺跡（滋賀県大津市）、鶴田遺跡（京都府向日市上植野町）、小墓古墳（奈良県天理市）、豊中・古池遺跡（大阪府泉大津市）、福布ヶ森遺跡（兵庫県日高町）、田多地小谷遺跡（兵庫県出石町）等がある。時代観を見ると、三ツ寺I遺跡が5世紀後半から6世紀前半、川合遺跡が5世紀末から6世紀初頭、伊場遺跡が6世紀中葉から7世紀中葉まで、高溝・額戸遺跡が古墳時代前期後半、入江内湖周辺遺跡が古墳時代前期後半、服部遺跡が6世紀第1四半紀、赤野井湾遺跡が古墳時代前期、穴太遺跡が6世紀末葉から7世紀初頭、鶴田遺跡は古墳時代、小墓古墳は6世紀前半、豊中・古池遺跡は6世紀初頭以前、福布ヶ森遺跡および田多地小谷遺跡は9世紀代と考えられている。この他古代という時代幅の中で刀形木製品の出土例としては平城宮・京など都城出土例または、俵田遺跡の例等挙げられるが、神明原・元宮川遺跡の刀形木製品とは形状より同系統と考えにくい。すると、上記の出土例の時代観を見ると、兵庫県の2例を除くと、ほぼ古墳時代の枠内に収まる。従来、刀形木製品は律令祭祀の

祭料として検討され、天武・持統朝以降、馬形木製品、人形木製品、斎串等とのセット関係における意義が唱えられてきた。しかし、全国に小数ではあるが律令祭祀が体系化する前に、刀形木製品が使用され、それもかなりの広域にわたり同形の形態を有したものが流布していたことは、事実である。その律令期以前の定型化した刀形木製品の形態は前述の「柄頭が作り出され、柄が弧状に反り、鍔の表現がなく、平造りの直刀」である。注目すべきことは、服部遺跡における周溝状遺構より出土した例および小墓古墳の周溝より出土した例であり、どちらも古墳の葬送儀礼なりの用途が考えられ、律令制祭祀とは、全く異なる用途と考えられる。

次に刀形木製品は金属製の大刀を模したものと考えることができるかどうかという問題である。刀形は木製である以上、形代として、金属製の大刀の代替物である。そこで、ある金属製の大刀を模したものと見ることもできよう。伊場遺跡出土の刀形木製品は、報告者によると、頭椎大刀を模した可能性が指摘できるという。また、豊中遺跡では、ここに言う定型化した刀形木製品とともに素環頭大刀の素環頭の部分だけを忠実に模した木製品が出土している。そこで木製の刀形は、金属製の大刀を模して作られたと考えることもできよう。

遺跡出土の刀形木製品の柄頭を見てみると、A類の円筒形とB、C、D、E類の圭頭形に分けられる。古墳出土の大刀の柄頭は、環頭、円頭、方頭、圭頭、頭椎、萬冠頭及び、蕨手と分けることができる。³⁴ 柄、刀身すべて、円頭大刀、圭頭大刀を模しているとも思われないが、柄頭は、円頭、圭頭を意識して模しているとも言えるだろう。上代大刀を正面より観察した場合、柄と刀身部とは鍔で区画されているものの、正面より見た鍔は薄く、木製品として表現しきれないだろう。そこで、木製の場合、鍔の表現はなく、ただ柄と刀身を区画するのに、柄部を切り欠くことで補おうとしているのではないか。刀形木製品の刀身部分を観察すると、平造りのような刃の造り出しが大半である。これも、技法のところで述べたように、板材加工の方法との関連はあるものの、古墳時代の大刀の主流である平造りを意識的に模しているとも言える。平城宮・京跡等で見られるが、片切刃造の刀形木製品とは、やはり異なるであろう。平造りから切刃造り、鎬造りへの変遷を考えると興味深い。その他、頭椎大刀、鹿角裝大刀との対比も必要かとも思われる。

神明原・元宮川遺跡の刀形木製品は、6 C前半～7 C中葉の土器が出土する遺構より出土する。他遺跡の類例は、古墳時代の幅で収まるものが多い。模したと思われる上代大刀も古墳の副葬品の中に見いだせる。これらを考え合わせると、律令制祭祀の祭料であるとするより、それ以前の古墳時代の葬送儀礼に用いられたと考えるとしたらどうだろう。ただ、遺跡の特に S R313、S R56では、馬形木製品、人形木製品、斎串とのセット関係がある。これは明らかに、律令祭祀の祭料のセット関係である。この問題に関しては今後の検討課題であろう。

第1表 刀形木製品一覧表

番号	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法量			分類	形態 特徴	技法	木取り 樹種
		全長	刀身長 柄柄柄	幅 刀身幅				
1	3-1304 宮川6区 S R313 (S X335)	49.3 38.8 3.2	9.6 2.0 1.4		A	全体的に丁寧な作り出しをしている。円頭をした柄頭は意識的に丸く上げている。柄下部は弧を描くように作り出し、柄上部は柄頭と柄部、刀身部と鉢部を鋭利に直線的な切り出しで区切っている。刀身部分は平造りのようないつのつけ方をして、左納刃先ドにしたとき表面は平面に仕上げている。鉢部は直線的作り出している。尻尻から鉢とほぼ厚さは同じであり平面的に立体感のない作りである。Aに分類される典型的な刀形である。全体的に残存状態がかなり良好である。	木取りは柾目取りであり、薄くミカン削状に製いたスギの板を丁寧に加工したものと思われる。鉄製刃子のような锐利な刃物で角を丸く調整しつつ、柔らかい線で仕上げ、刀身部分は直線的に簡単な仕上げである。表面は刀痕は残っていないものの、明らかに平滑にするための調整をしている。	ス 柾 ギ
2	1423 宮川6区 S R313 (S X335) 暗灰色砂				A	Iと酷似した加工が観察できる。柄頭は凹頭をなしていない。柄下部は弧を描くように作り出し、滑かなカットが意識的に行われ柄上部は直線的な作り出しをしている。柄の握部は下部を中央部でややくくらみをつけ握りやすい作りをしている。刀身部分は、中央より柄までの刃はやや肥厚なままで作り出しているが、中央感より鉢にかけては、刃を意識的に作り出し、この部分の刃先は薄く锐利である。刃の造りは平造りのような造りをしている。表面は丁寧に平滑な仕上げをしている。	柄部の削りはIよりもより刃を当たす数が多く確認されているほど丁寧な作り出しをしている。柔らかな曲線を削り出しているが、たたかね柄上部だけは直線的な簡素な削り出しなっている。锐角的に刃を入れて、次にほぼ上から切断し合はとは未製形という、やや荒削りをしている。刀身の中央部から鉢にかけては何度も刃を当てる刃先を作り出した刃底が残っている。	ス 柾 ギ
3	3-1273 宮川6区 S R313	40.2 31.0 2.4	9.4 1.5 3.8		B	全体的に1、2に比して調整が直線的な印象を受ける。この形態は他の形態に比して幅がなく刀身が長く綾長い形状を示す。柄頭は主頭部に丸みをつけながら丁寧な作り出している。柄上部は直線的な頭部から弧を描くように丸みをつけながら丁寧な作り出している。左柄刃先下にすると表面は平滑な整形が見られる刃先の造り出しは複数の刃先部分を削り、刃先を锐利にしている。刀身は全体的な印象より平造りの感じである。鉢のフクラ部分はやや膨らんでいる。Bに分類される典型的な刀形である。	シャープな切り口が全体的に観察できる。柄下部を除けばどの角も直線的であり意識的に锐利な印象を持たせようとした整形である。木取りは柾目取りでミカン削状に製いたスギの板を片面削り出して刃先を作り出しているようだ。	ス 柾 ギ
4	3-1191 宮川6区 S R313	40.1 28.4 3.4	11.6 2.8 5.4		B	3に比すると幅広で平面的な印象を受ける。すべて直線によって形作られている。柄頭は主頭部で作成している。柄上部は両側から同じ角度で刃を入れて三角形状を削り出し柄頭と柄部、および柄頭と刀身部を区画している。柄下部を左右両側からほぼ同じ角度で刃を入れ削り出しており、台形状を呈する。刀身部では柾目取りのためか刃先の造り出しあまりなされていない。ただ鉢部ではフクラを造り出し、やや刃先もついている。	锐利な刃物で直線的に切り出し簡素な整形で刀の形を表現している。柾目取りのためだろうか、薄い刃先が造り出せずに様と刃先がほぼ同じ厚さをしている。鉢部が唯一刃先を削り出し、フクラを造り出すという丁寧な造りをしている。	ス 板 ギ
5	1192 宮川6区 S R313	残存長 (14.0) — —	14.0 1.6 6.0		B	柄頭と柄のみが残存する。しかし典型的なB類に分類される刀形の柄部である。柄頭は主頭部に示す。柄上部は直角三角形に切り込んでいる。柄頭と刀身部も直角三角形に切り込んでいると予測できる。柄下部は弧状に整形している。左柄刃先下にしたときの表面は裏面に比べてかなり平滑である。	柄上部の作り出しへ、刃を锐角に切り込み、抜き直して直角下に切り落としている。柄下部の整形はかなり丁寧に何度も刃を当てる角を欠いている。	板

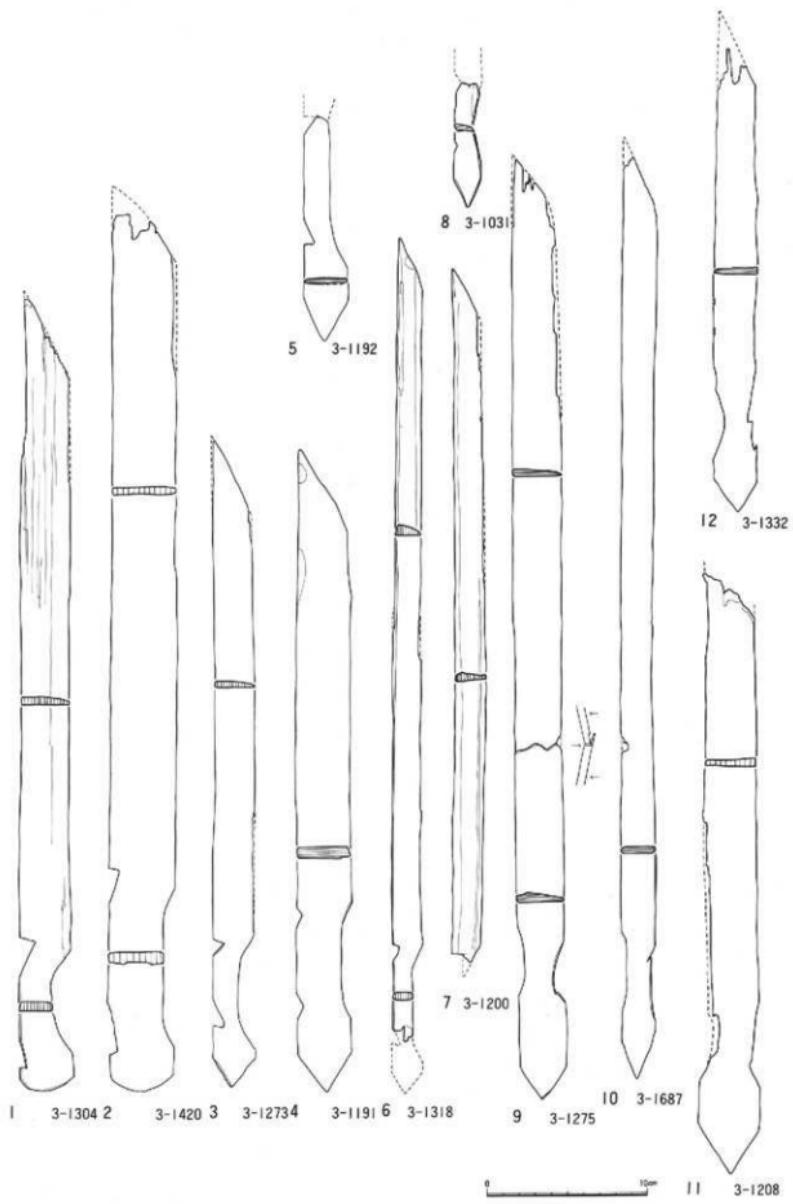
番号	登録番号 出土土地点 遺構名 出土層位	法量		形態		技法	木取り種	
		全長	柄長	長幅頭	分類			
6	3 1318 宮川 6 区 S R313	残存長 (49.8) 43.8 1.6	—	1.2	B	柄頭の部分が欠損している。6、7 の刀形は3より、より一層細長く作り出している。全長4cm程度と推定できる。柄部と刀身部との区画の仕方及び全体的に細長い形状よりBに分類できると思われる。柄上部は直角三角形状に切り込んでいる。柄下部はあまり円滑ではないものの弧状に整形している。左柄刃先下にしたときの裏面が平滑であり、表面の刃先部分を削り、刃先を造り出している。全体的に棒状で厚みがあり刀身幅が狭い。	刃の作り出しは片側（左柄刃先下にした裏面）を鋭利な刃物で削るようとしている。スギ材をミカン割状に裂いて芯材部分を取り除いた後、厚みのある刃先の部分を取り取って刃先を造り出している。鍔は剣突用大刀の鋒利さを模していると思われる。	スギ 板
7	3 1200 宮川 6 区	残存長 (43.0) 41.8 1.9	—	—	B	刀身のみが残存している。刀身が細長い形状をしているのではなくたた形を示し、Bに分類できるであろう。内眼で観察すると鍔造りのように刀身を横に繩筋のような盛り上がりが表し、裏面にある。鍔とは言えないだろうが、切り刃を意識して刃先を切り出しているかもしれない。表面の残存状態があり良好でないため判定はできない。刃先と鍔部の接点部分は、かなり意識的な刃の造りだしをしている。鍔はそのまま切先のように直線的な線が強調されている。	刀身部と柄部との区画部分の切り込みは残存し、かなり丁寧な削り痕が観察できる。刃先は切り刃造りのよう表面裏面から刃を造りだしている特に鍔の近い部分ですがそれが観察できる。桟は3mm程度の幅があり、丁寧な削り出しをしている。	スギ 板
8	3-1031 宮川 6 区 S R311 緑灰色粘土	残存長 (7.6) — —	—	1.3 3.9	B	柄頭と柄のみ残存している。柄頭・柄の形状よりBに分類できるであろう。柄頭は、鉄角の頭点を持つ圭頭状を示す。柄頭と柄の区画部分の切り欠きは、純角三角形を示し、整形は直線的である。柄下部は弧状に整形している。奉材が摩耗し、残存状態があり良くない。	柄頭と柄部の区画部分は左右同じ程度の角度を入れ、2度の切り込みによって純角三角形を形どっている。残存状態が良くなく、技法観察がありできない。	スギ 板
9	3-1275 宮川 6 区 S R313	(58.2) 47.6 3.2	10.6 1.8 6.4		C	柄部を切り出している方法に特徴がある。圭頭状の柄部と刀身との間をV字状に上下に切り欠く。この中に分類される刀形は、このV字状の切り欠きが上と下同じ位置にある。ただ、このV字状の切り欠き部分がそれぞれ各自柄頭を示すものなのか、柄頭を作り出すためのものなのか、柄頭と刀身部を区切るためのものなのか、判断できない。刃は平造りのように裏面裏面から造り出している。鍔部はややフクラ付をもっている。刃先は鍔の近い部分で欠損している。	V字状に切り欠いた部分では柄頭に近い切込みは直線的に刃が入っている。刃身に近い部分の切り欠きは、弧状に丁寧に整形している。表面・裏面とも平滑な仕上げをしている。	スギ 板
10	3-1687 宮川 4 区 S R56 暗灰色砂 混粘土	57.2 48.3 2.0	9.0 1.4 4.8		C	上下一箇所づつ同じ位置に柄部を作り出すための切り欠きを入れている。全長は57.2cm・幅2.0cmと細長い。柄頭は圭頭状を示し、柄頭は鋸角的に尖る。柄部の切り欠きは、弧状に7.8cmほどの振り部分を作り出している。左柄刃先下にしたときの裏面は平滑・裏面はやや未整形である。刃身の中央より柄部にかけての刃は、あまり意識的に削り出していない。	柄部の切り欠きは、柄頭の方より刃を入れて、弧状に切り欠いていき、ある程度フラットな面を作った後、今度は刀身側より、柄頭の方へ斜めに直線的に切断している。ミカン割状にした薄い板材を丁寧に加工している。特に表面は平滑な加工を施す。	スギ 板
11	3-1208 宮川 6 区 S R313	(37.2) — 3.2	10.6 2.6 6.6		C	残存状態が良くなく、刀身部の欠損が著しい柄及び、柄上部の切り欠きが、刀形C類に当たると思われる刀形とする。人形とも考えられるが征目取りがあり、手足の表現がないため刀形の可能性を指摘しておきたい。柄頭は圭頭状を呈する。全体的に直線的な切断のみで加工している。刃は造り出しているようには観察できない。	鋭利な刃物により直線的に切断し加工している。柄上部の切り欠きは刃身の方より柄頭に向い刃を入れ弧状に切り欠き、一度抜き直して、柄頭の方より直線的に切断している。	スギ 板

番号	登録番号 出土地点 遺物名 出土層位	法 量		形 態		技 法	木 取 り 種
		全 刀身長 刀身幅	長 柄 柄 頭	分 類	特 徴		
12	3-1332 宮川 6 区 S R313	残存部 (28.8) — 2.6	9.0 1.6 4.6	C	残存状態があまり良好ではなく鉢部、柄下部が欠損している。柄頭は主頭状を作り出す。柄部を作り出す切り欠き部分は弧状を示す。板目取りをしているためか、厚目の板材を利用している。刃の造り出しもほとんどされず粗雑な作りの刀身である。鉢は若干の残存より直線的で、フクラは削り出していないようだ。	柄上部の切り欠きは、何度も刃を当てて丁寧な整形をしている。直線的な切断部分は鋭利な刃物で一度に切り出している。表面は、板目取りのためか整形しきれず、年輪等の凹凸をそのまま残している。	板
13	3-1319 宮川 6 区 S R313 (S X335)	残存部 (26.0) — 1.6	8.4 0.9 4.2	C	残存状態が悪く、柄頭上部・桿、および刀身先端部より鉢部は欠損している。刀形と断定しにくい点があるが、柄頭上部及び柄頭下部の形状を観察すると、C頭の刀形とすることができるであろう。柄頭は、主頭状を呈する判断できる残存部である。柄部の切り欠きも弧状を呈している。	残りが悪く、加工痕はあまり観察できない。柄頭・柄部の加工は丁寧である。板目取りのためか、凹凸があり、やや不整形である。	板
14	3-3644 宮川 4 区 (J 99)	36.3 23.6 2.9	12.8 2.5 5.0	D	柄部が下部の切り欠きと上部の切り欠きが位置をずらして作り出している。全体的に残りが良好で加工も丁寧である。柄頭は主頭状で示す。柄上部及び柄下部の切り欠きは弧状を示し、上部の切り欠きが、下部の切り欠きよりも外側に位置している。刀身部は凸レンズ状の断面を示し、鍔通りの大刀の断面に近い。鍔を意識して作り出したか不明だが、刀身中央横位に盛り上げる。鉢は直線的であり锐利な鋒先を見る。桿も丁寧な加工で、面を作りながら堅固な作りである。	丁寧な加工痕が見られる。柄上部の切り欠きは、何度も刃を当てたと思われる刃痕がある。柄部は柄頭の方より刃を入れ、一度抜き直して刃身の方より斜めに切り落としている。鍔と思われる高まりの削り出しや、桿の削り出しも鋭利な刀子のようなもので、何度も繰り返し整形しながら削り出している。	ス 板 ギ
15	3-324 宮川 4 区 (N94)	残存長 (23.6) (12.6) 1.7	11.0 1.3 4.6	D	薄く小型で板目取りであるため、直線的な可能性も残る木製品である。ただ柄の作り出しが思われる切り欠きがあり、刃を若干作り出したと思われる刃先が観察できた。柄頭は主頭状で、柄尻は鋸角的に尖っている。柄上部は直線的に切り欠いており、柄下部は弧状に切り欠いている。刀身は平造りのように薄い刃を造り出している。刀身の先および鉢部分は欠損しているため明らかでない。	柄上部・柄下部の切り欠きは鋭利な刃痕が残る。両方とも二度刃を入れることで切り欠いている。表面は、板目取りには平滑に整形している	ス 板 ギ
16	5074-1 西大谷1-2区 (D46) 灰茶粘土	26.6 17.9 2.7	8.9 1.6 3.3	D	当初馬形か、刀形か判別がつかず、検討課題として残っている木製品である。D頭の刀形を検討していく中で、特に15に類似しているため刀形に分類した。柄頭は主頭状であり柄上部および柄下部の切り欠きは弧状を示し下部の切り欠きと下部の切り欠きがはずれた位置にある。刀身は平造りのように刃を造り出す。特に裏面の刃の部分を削り出して刃にしている。鉢はややフクラを付けている。表面は平滑で丁寧な整形にしている。	板目取りのためか、やや厚目の板材を用いているが、全体的に整形が丁寧である。柄の上部・下部の切り欠きは特に丁寧な仕上げをしている。柄頭は直線的に切断しているものの、柄部・鉢部は丸みのある整形を施している。	ス 板 ギ
17	3-1284 宮川 6 区 S R313 (S X335)	70.8 59.0 3.2	11.6 1.6 5.0	E	本遺跡で最も長い刀形である。柄部は柄下部一箇所だけ切り欠くものである。刀身部は桿および、刃先に欠損がある。柄頭は主頭状を示す。柄頭に当たる箇所とは、柄下部に弧状の切り欠きの部分と推定できる。ただ柄頭を表現しただけの切り欠きかもしれない。上部は頭部から鉢までほぼ一直線になっている。刃は平造りのように、意識的に刃を造り出している。鉢は直線的に尖らせ突起武器を想わせる。	簡素な作りである。薄いミカン割状の板を鋸い刃物で尖った鉢と主頭状の鉢尻を切り出し、あとは、柄下部を弧状に粗工しただけの工作である。	ス 板 ギ

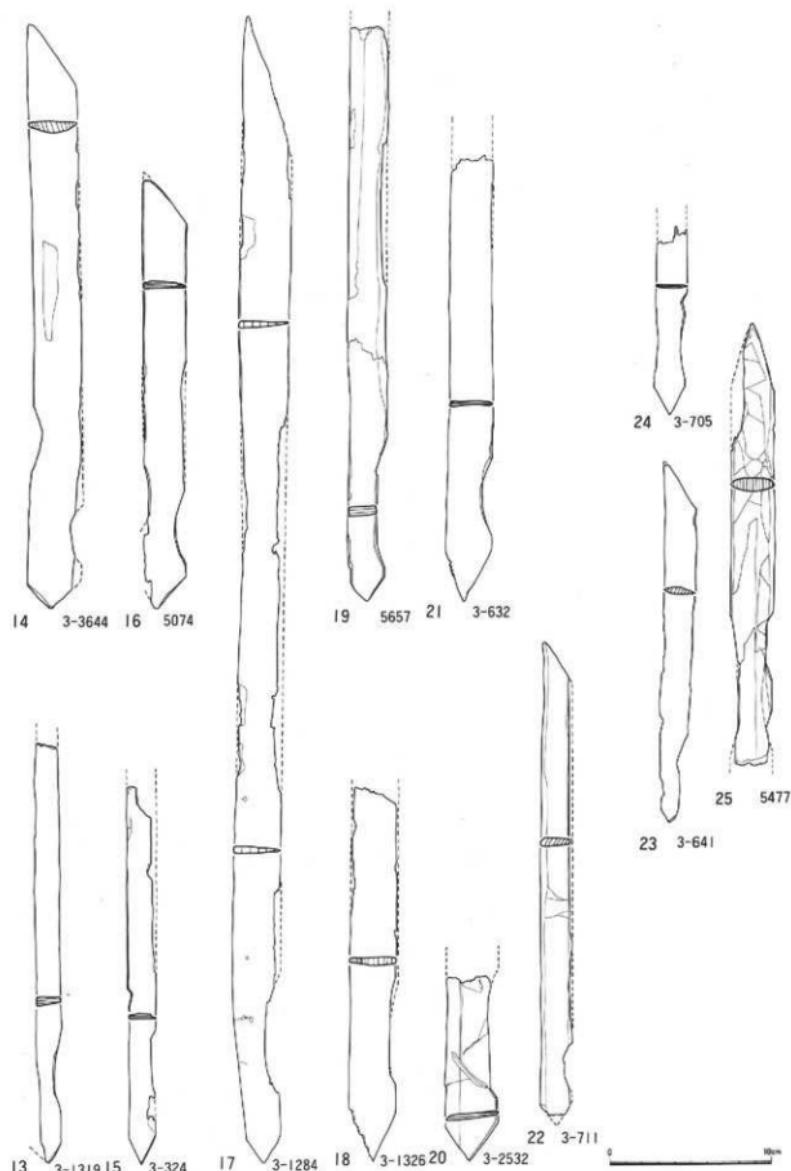
番号	登録番号	法 量		形 態		技 法	木 取り 種
		全 刀身長	柄 長	長 短	分 類		
18	3-1326 宮川 6 区 S R313	23.4 — 2.8	11.4 2.6 5.4	E	柄頭・柄および一部の刀身が残存する。春材が摩耗し、夏材が突出しているほど表面は痛んでいる。柄頭は圭頭状を示す。柄下部だけに切り欠きがあり、E型の刀形と推定する。刀身部はほとんど欠損しており、形態はつかめない。	柄下部の切り欠きは、刀身の方より刃を入れ、抜き直し、逆の柄頭の方より斜めに切り落としている。他の加工痕はあまり観察できない。	柾
19	5657 西大谷 1-2 区	残存長 (35.6) (26.0) 2.4	9.8 1.9 3.2	E	刀身は、一部根元の部分を除き、欠損している。表面は傷み、春材は摩耗している。柄頭は圭頭状を示す。柄下部の切り欠きは台形をし、刃身に作りだしている。刀身は根元の部分で、刃を作り出している。切刃造りのような断面を示す。	柄頭は断面的な切断をしている。板目取りのためか目盛の板材を用い、表面は残りのいい部分では平滑であるが、大半は凹凸がある。	ス ギ
20	3-3532 宮川 6 区 S R56 暗灰色砂混 粘土	11.4 — —	11.4 2.7 4.4	E	柄頭と柄の部分のみ残存する。柄頭は圭頭状を示す。柄上部は、残存する部分においては直線的である。柄下部は、柄頭に近い部分は直線的で、刃身部に近い部分は弧状に切断する。	柄頭・柄上部は直線的な切断であるが、柄下部は刀身に近い方は弧を描く。柄の切り欠きの柄頭に近い方の切断は力強く、锐利な刃物で当たったらしく、力余って刃先で、柄の部分まで傷がついている。	板
21	3-632 水上 7 区 (172) 砂礫	残存長 (27.6) — 2.6	8.9 2.1 5.4	E	薙串か判断が困難であるが、E型の刀形の形態に似ているため刀形の可能性を指摘する。柄頭は锐角の柄頭をもつ圭頭状を示す。柄下部の切り欠きは弧状を示す。刀身部は鋒から中央程まで欠損している。刃は意図的に造り出しているとは見られない。	柄下部の切り欠きは柄頭に近い方より刃を入れ、抜き直し、刀身の方から斜めに切り落としている。	板
22	3-711 宮川 3 区 (N94)	残存長 (29.4) (25.0) 1.8	4.4 1.4 —	E	柄尻の部分が欠損している。すべて直線的切断により形作られている。残存している柄頭上辺・下辺より類推すると、柄頭は圭頭状を示したと推測できる。柄下部は台形をし、やはり直線的な切断により切り欠いている。刃は平造りのように造り出されている。薙串の可能性も否定できない木製品である。	鋭利な刃物で直線的に切断した箇所を示す。ミカン割状にした目盛の板材を利用している。柄下部は、左右両側から直線的に切り落とすように斜めに刃が入っている。	柾 ス ギ
23	3-641 宮川 4 区 (N94)	2.1 15.5 2.0	6.6 1.1 —		柄頭及び、柄下部が欠損しているため柄の形態が把握できない。柄尻の下部が残存しているため、柄頭はやはり圭頭状を示すと推定できる。柄上部はやはり部分的に欠損しているものの、2箇所つまり、柄頭と柄の区画及び柄と刀身との区画を切り欠いている。左柄刃先下のときの表面は平滑である。裏面は刃と棒を削り出している。鋒は直線的に切断され、鋒先は锐角に尖る。	柄頭及び柄の整形技法は、明確には出来ないが、柄頭は直線的な圭頭状に削り出し、柄下部は刀身より弧状に刃が入っている。裏面の刃と、棒の削り出しは、かなり意識的に整形されている。	柾 ス ギ
24	3-705 宮川 4 区 S R56	残存部 (11.7) — 1.9	7.5 1.4 3.6		形態的には、E型に分類される刀形に柄頭・柄の部分が似ている。刀身は柄付近が若干残存しているが、大半は欠損している。柄頭は圭頭状をしている。柄上部が弧状に切り欠く。柄下部は弧状に2度連続して切り欠いている。刀身部の刃先は極端なくなり、平造りの刃のように作り出されている。小型であること・薄くなることを考慮に入れると、薙串の可能性も否定できない。	板目の薄い板材を鋭利な刃物で切断して作られ、どの部分の切口も明瞭な加工痕を残す特に、柄下部は切り口が波を打ちながらでも明瞭である。	板

番号	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法量		形態		技法	木取り 樹種
		全長	刀身長 刀身幅	柄長 柄幅	分類		
25	547 西大谷1-2区 (D45)	残存部 (27.4) 18.0 2.6	9.6 2.1 -	劍形	神明原遺跡出土木製品の中で唯一、劍形と目されるものである。剣先下部及び柄頭上辺に欠損が見られるものの、刃疵もきれいに残る程度現状頗る良好である。柄部の形態はA・B類に分類した刀形と類似した切り欠き方をしている。すなわち、柄上部を2箇所切り欠き、柄下部を1箇所切り欠く。ただ、これら3箇所の切り欠きは、どれも弧状を呈している。柄頭から鋒まで断面はすべて凸レンズ状で、特に刃身部分は両刃を表裏から丁寧に削り出している。剣先下部が5mm程度残存しているため、両刃劍とした。	全体に3・4cm程度の単位をもつ刃痕が明瞭に観察できる。柾目取りの板材を鋭利な刃物で、力強く切り出している。断面が凸レンズ状になる迄、両刃を表裏に尖らせ、両刃を意識して削り出している。	柾

- (1) (財)群馬県埋蔵文化財事業団『三ッ寺Ⅰ遺跡(木器編9)』1988
 (2) 浜松市教育委員会『伊場遺跡出土物編』
 (3) 滋賀県坂田郡近江町教育委員会 中川道士氏の御教示による。
 (4) 滋賀県坂田郡米原町教育委員会『入江内河遺跡発掘調査報告書』1988
 (5) 滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会『服部遺跡発掘調査報告書V』1985
 (6) 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会『赤井井筒遺跡』1986
 (7) (財)滋賀県文化財保護協会 兼康保明氏御教示。
 (8) (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター「考古展 第4回小さな展覧会—昭和59年度発掘調査の成果から—」1985
 (9) 豊中・古池遺跡調査会『豊中・古池遺跡発掘調査概報そのIV』1976
 (10) 加賀見省一「但馬国府と駿所一第二次但馬国府の所在をめぐってー」『高井柳三郎先生喜寿記念論集』1988
 (11) 兵庫県出石町教育委員会 小寺氏御教示。
 (12) (2)に同じ
 (13) (9)に同じ
 (14) 末永雅夫『増補 日本上代の武器』木耳社



第29図 刀形木製品実測図1



第30図 刀形木製品実測図 2

3. 人形木製品（第32図～第34図）

人形木製品として74点を認定した。しかし、これだけということではなく、大量の板状の木製品があり人形木製品の部分となりうるものも多い。また後述するように本遺跡の人形木製品の特徴の一つに頭部が圭頭となるものがあり、斎車状木製品の中にまぎれているものもある。実測図では、すでに『大谷川III』で紹介した宮川4区S R56・宮川6区S R313のものは省略し、その他のものを紹介する。

(1) 形態

形態分類には金子裕之氏等のものがあるが、ここでは当遺跡に限定し機械的に形態変化の諸要素により記号化し、その組み合せを中心としてその他の要素を加味してA～Eの5類に大別した。

当遺跡の人形木製品はいずれも板状で正面全身人形であり墨描は無い。細部の特徴として形態変化のある部分としては、①頭部、②首から肩、③手、④腰、⑤脚の5ヶ所がある。それぞれの有無・数などの変化により記号化した。

① 頭部の形状

I 圭頭状をなすもの・・・・・両側を斜めに切り落とし、鋭く尖った頭部となる。角度により
細分することが可能である。

II 平頭状をなすもの・・・・・登頂部が水平となるもの

a 頂部が全く水平となるもの

b 圭頭状のものの上部を切り落としたような形態で、両側に斜めに切り落としが残る

III 円頭状をなすもの・・・・・頂部が丸くなるもの

② 首から肩の切り欠き

A 上方・下方とも斜めに切り欠いている（撫で肩）

B 上は水平、下は斜めに切り欠いている（撫で肩）

C 上は斜め、下は水平に切り欠いている（怒り肩）

③ 手の切り込み

X 無いもの・・・・・・・・明確な手としての表現のないもの

Y 下から上方に切り込みを入れるもの

Z 切りとってしまうもの・・・切り取りにより腰から下が細くなる

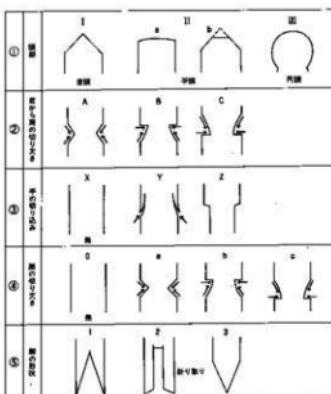
④ 腰の切り欠き

O 無いもの

a 上方・下方とも斜めに切り欠いている

b 上は水平、下は斜めに切り欠いている

c 上は斜め、下は水平に切り欠いている



第31図 人形木製品分類模式図

⑤脚の形状

- 1 脚間を三角形に切り取るもの
- 2 平行に切り込みを入れ脚間を折り取るもの
- 3 脚は一本で、三角形に尖った串状を呈する。

以上のように各要素に分解したうえで形態上の特徴に大きさの大小を加味して、共通項を整理しながら本遺跡の人形木製品をみると、次の様に大まかに類型化することが可能である。

A類

撫で肩・腰の切り欠きをこの類の特徴とする。一般的に頭部は圭頭状をなし、比較的鋭い三角形をなしている。撫で肩、明確な手の表現はなく腰の部分に切り欠きを入れて脚部とを分ける。脚間は三角形に切り取るものと、平行に切り込みを入れて折り取るものとがある。本遺跡の中では比較的量が多い。これをA₁類とする。

また腰の部分が切り欠きではなく切り込みにより表現されている例もわずかではあるが認められる(A₂類)。

B類

撫で肩ではあるが、腰の切り欠きのないものをこの類にまとめた。多いものは圭頭状の頭部をもち、上方、下方とも斜めに切り欠いた撫で肩で、腰部分の表現がなくそのまま脚部に続く。脚間は三角形に切り取られる(B₁類)。

C類

頭頂部が水平に切り落とされ、撫で肩で腰の切り欠きを有するものである。A類と比べると長さが短くなり、巾広となる。

D類

頭頂部が水平で撫で肩、腰の切り欠きのないものである。24がそれであるが、頭部が比較的長く目・鼻・口を表現すると思われる切り込みが認められる。本遺跡で墨描・彫刻を問わず顔等を表現したものは唯一これだけである。

E類

怒り肩・切り込みによる手の表現のあるもので、頭部は圭頭状をなすものが多い。肩は、水平に切り欠いた怒り肩であるが、上部より大きく斜めに切り欠くものも認められる。手は下方より斜めに切り込みを1回入れて表現する。脚間は三角形の切り取りである。

F類

頭頂部が水平あるいは円頭を呈するもので、腰から下を大きく切り取り、脚もあわせて表現するものである。怒り肩を呈したかも手あるいは胸部が突き出しているような印象をうける。非常に小形で全長10cm以下のものが3例認められ、これをD₂類とした。

G類

脚が一本で三角形に尖った串状を呈する。頭部は圭頭状で、撫で肩、手の表現と考えられる下方からの切り込みが認められる。腰の表現と考えられる切り欠きはない。15・16がその典型的な例であ

る。64の脚は一本であるが、他の要素をみるとむしろA類に近いとしたほうがよいであろう。

以上のように類型化してみたが、その変化は大きくこれらの中に入りきらないものも残る。

48は一見すると顔部分はないような印象を受けるが、顔の両側が欠失してしまっていると考えたい。現状ではこの両側部分は生きているとも死んでいるとも判断しかねる。とすればA類に含まれることとなる。67は腰部分が切り込みの様に表現されている。腰が切り込みで表現される例がわずかではあるがC類における手の表現と比較すると1cmにも満たず、またその切り込みも深い。切り欠くつもりで途中で放棄されてしまったとも理解されよう。44は脚が一本で串状を呈するが頭頂部がわずかに平坦につくられ、首及び腰と思われる切り欠きがある。しかしE類が薄い板状であるのに比べ、厚さ1.25cmと非常に厚い作りである。とりあえずは別扱いとしておいた。72は頭部が主頭で脚部を三角形に切り取るものである。71も脚部が変形しているが同類であろう。他に人らしい表現はない。これを人形とするかどうかは議論の分かれるところであるが、とりあえず含めておく。

(2)特徴

以上のような整理の中で本遺跡の人形木製品の形態的特徴として浮かびあがってくるのは、次の様な点であろう。

- ①板状の正面全身人形である。
- ②頭部が三角形に作り出された、いわゆる主頭状をなすものが多い。冠帽あるいは髪形を表現したと考えられるものはない。
- ③顔等を墨で表現するものは認められない。
- ④肩部は撫で肩が多い。
- ⑤切り込みを入れる様な表現での手の表現は少ない。
- ⑥脚部は脚間を折り取りあるいは三角形に切り取ったものがほとんどである。

特に②の主頭状であること、③の墨描のないことは、当遺跡の人形木製品の大きな特徴であり、その位置付けを考える上で大きな要素となるものであろう。

(3)形態と編年

さて人形木製品の形態分類と編年については、金子裕之氏の大きな業績がある。金子氏は人形をA～Dの4類に大別した。そしてA類、B類をA₁・A₂・B₁・B₂と細分し、6類としている。¹⁰⁾

人形A・・・・短冊状の薄板の一端を削って頭とし、側面を切り欠いて顔と肩を作る。この場合側面の上下から同角度で切り欠き、いわゆる撫で肩となる。手は側面下方から浅く切り込む。さらに腰の部分の左右を切り欠くものをA 2類とする。

人形B・・・・A類とほぼ同じであるが肩部の切り欠きの形が異なる。顔の部位は水平に切り込み、肩の下方から大きく切り欠く。腰部の切り欠きのあるものをB 2類とする。

人形C・・・・製作方法はA・Bとほぼ同じであるが肩部の形状が異なる。顔の上の方から大きく切り欠き肩の線を水平にし、いわゆる怒り肩になる。顔は倒卵形に近くなりより写実的となる。腰部以下を切り欠く例はない。墨書きによって顔を表す場合は多くが額鬚を加える。

人形D・・・・手の切り込みを胸に近い部位で切り欠き、後世の立雄に近い形につくる。顔は墨書で写実的に描くものがある。

そして、木製人形は7世紀後半の天武・持統朝に出現するとし、A₁—C—Dの変化を考える。A₁は8世紀の平城宮・京跡に類例が多く、人形Cへの変化は8世紀末、人形Dは9世紀に出現すると編年している。

さて本遺跡の人形をみると、金子分類にそのままあてはまるものはわずかである。A₁に宮川6区S R 313出土の1394・1354・1395の3点、Cに西大谷2区の5020の1点があてはまるのみである。中央と地方という地域差は大きいにしても編年が組めるまでの多量の資料集積の中で、本遺跡の74例中類似するものが4例だけというのはあまりにも奇異である。

本遺跡周辺での人形木製品の出土例としては、静岡市瀬名遺跡がある。1区20層で人形2点、斎串23点がまとまって出土している。斎串の中には先端部を土中に突き刺したままと思われるものが8点認められる。土器より9世紀頃と推定されるものである。頭部のみの破片で圭頭状に作り出し側頭部から肩にかけて斜めに切り落としている肩部は欠損しており、撫で肩になるか怒り肩になるか不明である。墨描で眼、鼻、口、鬚などが写実的に表現されている。肩部の形態は不明ながらも金子分類の人形Cに近いものである。年代観も大きな齟齬はない。金子氏が指摘しているように8世紀にあった地域差も9世紀に解消していったという状況を証明するものであろう。

浜松市伊場遺跡では多量の人形木製品が出土している。典型例は金子氏がA₂類としたもので腰の部分に切り欠きをもつものであるが、この類例も当遺跡では見あたらない。8世紀とされるものでA₁とA₂との違いは地域差であろうと金子氏は推定している。腰部の切り欠きを持つことが伊場遺跡の特徴であるとすれば、それは本遺跡のA類に共通するものである。

祭祀形態が復元できたとして知られる山形県俵田遺跡の場合、典型的な人形はC類で12点あり倒卵形の頭部を持ち、いわゆる怒り肩で、手の部分は下方から切り込みにより表現され股部は台形に切り込んだ後に折取られている。すべて墨書により顔の表現がなされている。9世紀中葉頃の所産と考えられる。

兵庫県日高町川岸遺跡は但馬国府関連の遺跡であるが、溝内より、人形45点、馬形6点、斎串約80点が検出されている。『木器集成図録』分類によるA II bがほとんどであるという。すなわち怒り肩を呈し手を下方から切り込み腰の表現はなく、股部は平行に切れ目を入れ折り取るものである。この溝は8世紀第4四半期から9世紀第2四半期に位置づけられている。

その他の類例を探しても本遺跡の人形木製品の類例は見あたらない。律令体制の浸透とともに地域差は解消したと理解されるとすれば、本遺跡の人形木製品を9世紀の所産と考えることには無理がある。逆に9世紀以前の地域差の中で考えられなければならないであろう。この問題については第V章で検討する。

(1) 金子裕之 「古代の木製模造品」『研究論集VI』奈良国立文化財研究所 1980

(2) 三角形等に切り落としてしまっているものを「切り欠き」、刃物で切れ目を入れただけのものを「切り込み」と表現して区別する。

(3) (1)と同じ

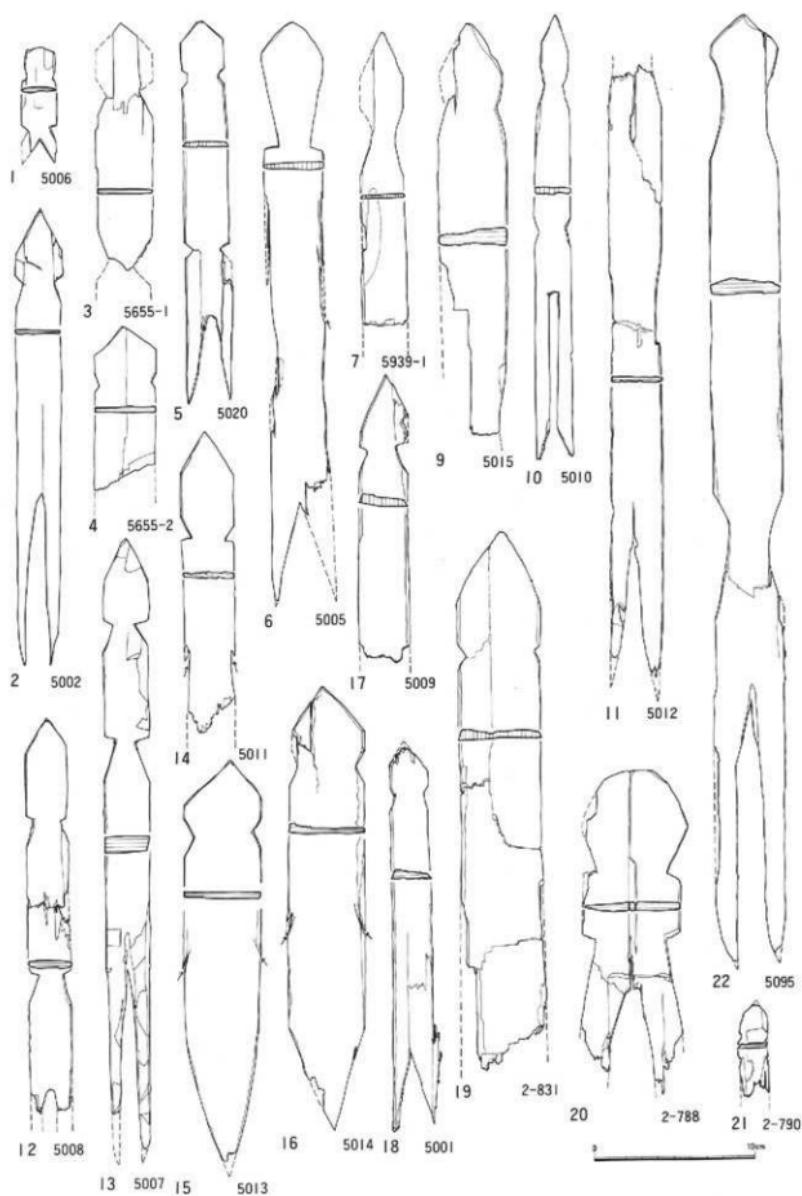
第2表 人形木製品一覧表

() は残存数

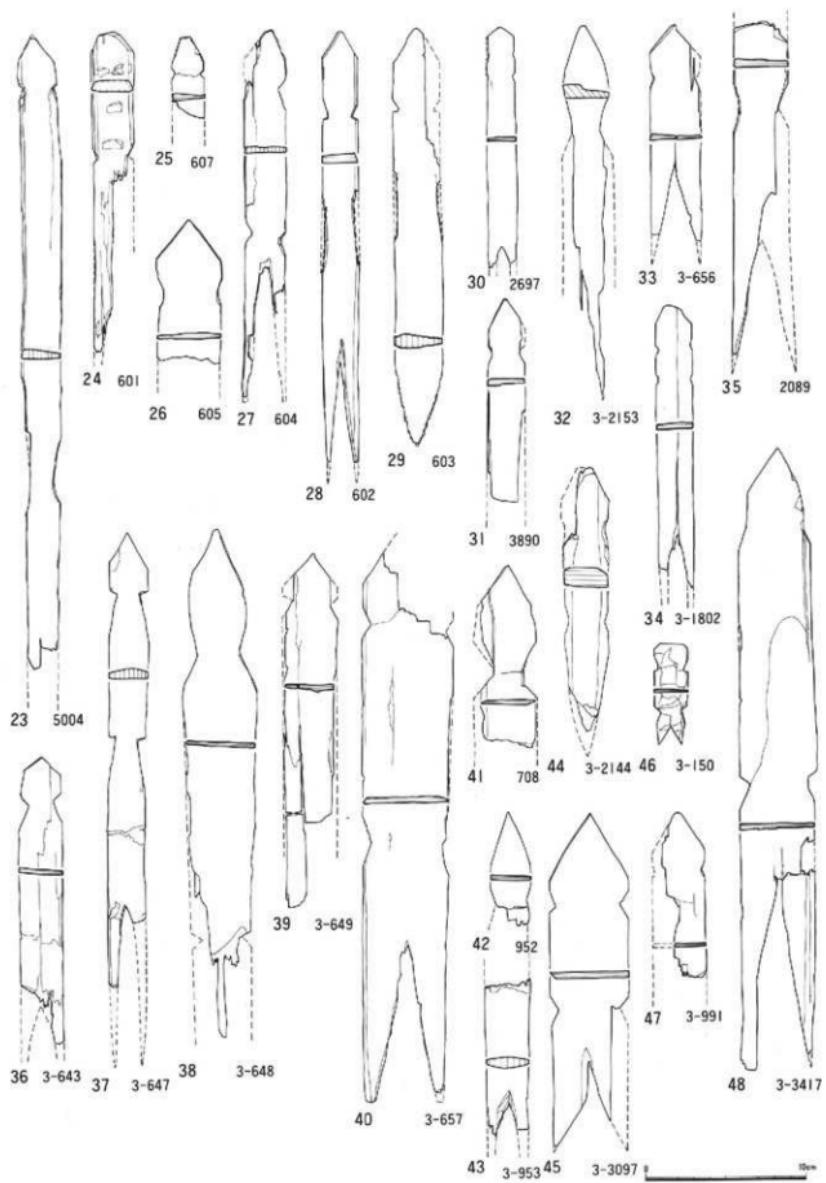
番号	遺物番号	地 区	グリッド	遺構・層位	計測値(cm)			特 微	形態	樹種	木取り	備 考
					長さ	幅	厚さ					
1	5006	西大谷 1区	F39		7.2	2.3	0.3	平頭で非常に小形	F			
2	5002	西大谷 1区	D43	砂礫層	28.5	2.8	0.3	圭頭ナデ肩	B ₁		板目	
3	5655①	西大谷 1・2区	E43	砂礫層	(15.3)	3.6	0.3	破片頭部は圭頭か? 腰の切り欠きあり	A ₁	スギ	板目	
4	5655②	西大谷 1・2区	E43	砂礫層	(10.1)	3.8	0.4	脚部以下欠失。圭頭ナ デ肩		スギ	板目	
5	5003	西大谷 2区	D44	砂礫層	23.8	2.8	0.3	圭頭ナデ肩	A ₁		板目	ほぼ完形
6	5005	西大谷 2区	D45	砂礫下層	35.9	3.7	0.5	頭部は圭頭であるが丸味 を帯びる。首が長い。	E ₁		板目	
7	5939-①	西大谷 2区	E45	砂礫層	(18.2)	2.8	0.3	ナデ肩脚部以下欠失			板目	
8	5939-②	西大谷 2区	E45	砂礫層	(39.3)	4.5	0.8	頭部圭頭状ナデ肩脚部以 下欠失		スギ		人形でない 可能性あり
9	5015	西大谷 2区	D46	灰茶粘土層	(25.8)	4.3	1.1	圭頭状ナデ肩脚部以下欠 失	G			
10	5010	西大谷 2区	D46	灰茶粘土層	27.8	2.3	0.4	圭頭ナデ肩	A ₁		板目	完形
11	5012	西大谷 2区	D46	灰茶粘土層	(38.0)	3.3	0.3	頭部欠失、わずかなえぐ り込みにより腰を表現	A ₁ ?			
12	5008	西大谷 2区	D46	砂層	(24.3)	2.7	0.5	圭頭ナデ肩中央で折れて 破片	A ₁		板目	脚部欠失
13	5007	西大谷 2区	D46	灰茶粘土層	(38.0)	2.8	1.0	圭頭ナデ肩表裏とともにき れいに削られている。	A ₁		板目	脚部先端わ ずかに欠失
14	5011	西大谷 2区	D46	灰茶粘土層	(18.8)	3.3	0.4	圭頭怒り肩下部より切込 みを入れて手を表現	E ₁		板目	脚部欠失
15	5013	西大谷 2区	D46	灰茶粘土層	(24.9)	4.7	0.4	圭頭ナデ肩切込みにより 手を表現一本足	G		板目	
16	5014	西大谷 2区	D46	灰茶粘土層	27.5	4.8	0.6	圭頭ナデ肩切込みにより 手を表現、一本足	G		板目	
17	5009	西大谷 2区	D46	灰茶粘土層	(17.9)	3.2	0.5	圭頭ナデ肩中央に裏にみ ける小穴あり			板目	脚部欠失
18	5001	西大谷 2区		旧河道内	(23.9)	2.8	0.6	圭頭ナデ肩手腰の表現な し	B ₁		板目	
19	2-831	西大谷 4区	T21	粘土混じり 砂礫	(33.5)	5.1	0.7	圭頭ナデ肩下部欠損			板目	脚部欠失
20	2-788	西大谷 4区	R21	暗灰色粘土	(20.2)	6.2	0.5	円頭腰から脚にかけて大 きく抉られる。	F ₁		板目	
21	2-790	西大谷 4区	R21	暗灰色粘土	(5.7)	1.8	0.3	圭頭左右に切込み2ヶ所 ずつ			板目	斎串の可能 性あり
22	5095	西大谷			68.4	4.8	1.0	圭頭頭部が小さい	A ₁		板目	
23	5004	西大谷			(39.2)	2.5	0.6	圭頭大きなえぐりにより 腰を表現	A ₁		板目	脚部欠失
24	601	宮川 2区	H101	灰色粘土砂 層	(20.2)	2.7	0.7	頭部平坦部分が長く切 込みにより目、鼻、口を 表現	D ₂		板目	脚部以下欠 失
25	607	宮川 2区	G102	灰綠色粘土 層	(5.1)	2.0	0.4	頭頂部平頭下半欠失			板目	斎串の可能 性あり
26	605	宮川 2区	G102	灰色粘土層	(9.1)	4.0	0.4	圭頭ナデ肩			板目	脚部以下欠 失

番号	遺物番号	地 区	グリッド	遺構・層位	計 測 値 (cm)			特 徴	形態	樹種	木取り	備 考
					長さ	幅	厚さ					
27	604	宮川 2区	G102	灰緑色粘土	22.8	2.5	0.4	主頭ナデ肩	A:		柾目	
28	602	宮川 2区	H102		(26.9)	2.3	0.6	主頭怒り肩下から上に削り掛けで手・腰を表現	E		板目	脚部わずかに欠失
29	603	宮川 2区	H102	川岸 灰色 粘土砂層	26.1	3.0	0.9	主頭怒り肩削り掛けを数ヶ所入れることにより手、腰を表現 一本脚	G		柾目	
30	3-2697	宮川 4区	J99	暗灰色砂混じり粘土	(15.0)	1.8	0.2	主頭上部に両側より2ヶ所の切込みあり			板目	
31	3-3890	宮川 4区	J99	粘土混じり砂礫	(12.6)	2.3	0.4	主頭ナデ肩		スギ	板目	脚部欠失
32	3-2153	宮川 4区	N94	暗灰色砂混じり粘土	(23.1)	2.8	0.9	主頭ナデ肩か?		スギ	柾目	?
33	3-656	宮川 4区	M93	S R55 暗灰色砂混じり粘土	(13.5)	3.1	0.3	主頭ナデ肩手腰の表現	B:	スギ	板目	
34	3-1802	宮川 4区	O93	S R55 暗灰色砂混じり粘土	(17.6)	2.3	0.3	頭頂部平坦上部に2ヶ所の切込みあり	A:	スギ	板目	
35	2089	宮川 4区	O93	S R55 暗灰色砂混じり粘土	20.6	3.3	0.5	頭部平坦ナデ肩	D:	スギ	板目	
36	3-643	宮川 4区	N94	S R56	(17.8)	2.7	0.3	主頭ナデ肩	B:	スギ	板目	
37	3-647	宮川 4区	N94	S R56	(28.4)	2.5	0.6	主頭ナデ肩	A:	スギ	柾目	脚部欠損
38	3-648	宮川 4区	N94	S R56	(31.5)	4.6	0.3	頭部は鋭く尖るナデ肩		スギ	板目	脚部欠損
39	3-649	宮川 4区	N94	S R56	(15.7)	3.2	0.5	主頭ナデ肩頭部左右側面が欠損しているか生きているか不明		スギ	板目	?
40	3-657	宮川 4区	M94	S R56	(34.2)	5.7	0.4	ナデ肩	A:	スギ	板目	
41	3-708	宮川 4区	M94	S R56	(11.4)	3.4	0.4	主頭ナデ肩		スギ	板目	胸部以下欠損
42	3-952	宮川 4区	N94	S R56	(7.0)	2.5	0.3	頭部は鋭く尖るナデ肩か		スギ	板目	頭部のみ
43	3-953	宮川 4区	N94	S R56	(9.8)	2.8	0.6	脚間は三角の切抜き		スギ	柾目	上部及び脚部先端欠失
44	3-2144	宮川 4区	N94	S R56	(16.4)	2.8	1.3	一本脚			板目	?
45	3-3097	宮川 4区	J99	S R56	(20.6)	4.8	0.4	頭部は鋭く尖る	A:	スギ	板目	
46	3-150	宮川 4区	O92	暗灰色砂混じり粘土	6.4	2.1	0.2	頭部平坦表面はていねいに削られている	F:	ヒノキ	板目	
47	3-991	宮川 4区	O93	粘土混じり 黒色砂礫	(10.3)	2.6	0.3	主頭ナデ肩		スギ	板目	胸部以下欠損
48	3-3417	宮川 4区	J99	暗灰色砂混じり粘土	38.6	4.7	0.4	頭部は小さく主頭そのまま肩部につながる		スギ	板目	
49	3-3418	宮川 4区	J99	暗灰色砂混じり粘土	(16.6)	3.7	0.1	主頭ナデ肩			板目	
50	3-3645	宮川 4区	J99	粘土混じり 砂礫	(16.6)	3.0	0.4	主頭ナデ肩		スギ	板目	
51	3-73	宮川 5区	C106	S R202	27.4	4.5	0.7	主頭ナデ肩か?		スギ	柾目	?

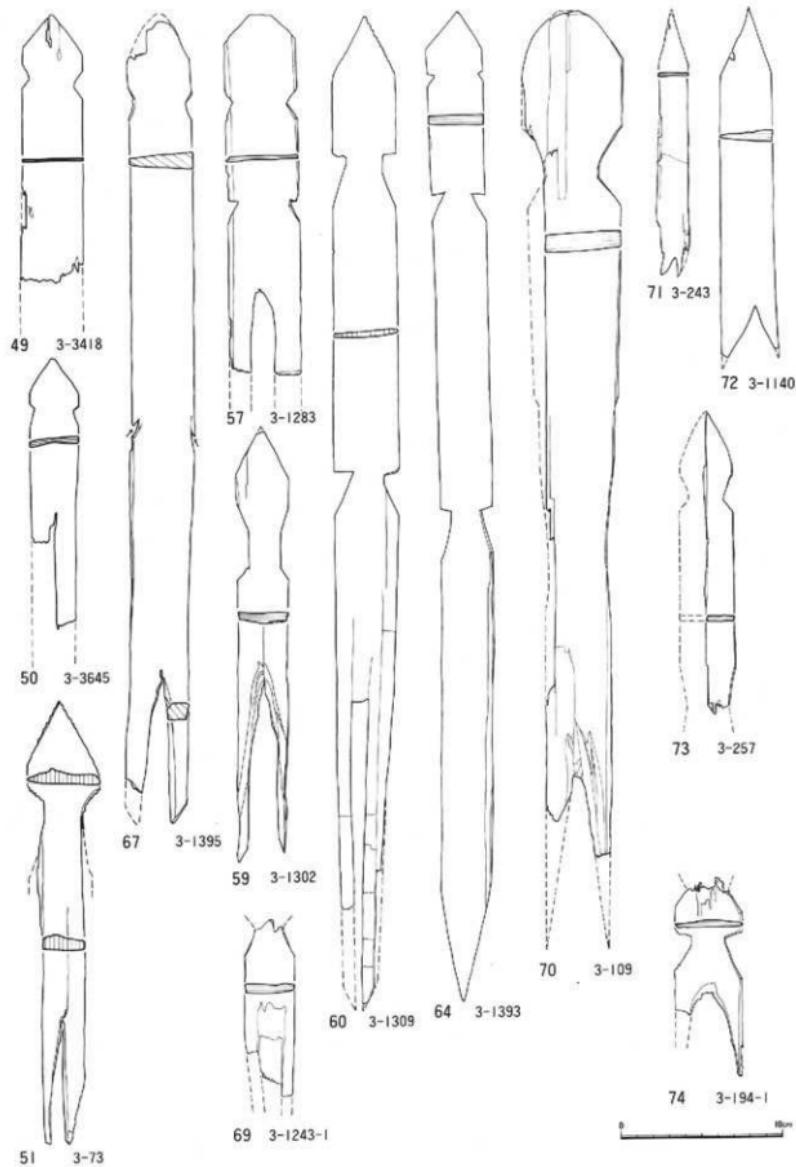
番号	遺物番号	地 区	グリッド	遺構・層位	計測値(cm)			特 徴	形態	樹種	木取り	備 考
					長さ	幅	厚さ					
52	3-105	宮川 6区	G102	S R313	41.7	2.8	0.4	圭頭下方からの切込みにより手・腰を表現	A ₂	スギ	板目	完形
53	3-1012	宮川 6区	G102	S R313	58.1	3.9	0.5	圭頭ナデ肩脚間は折り取りによる	A ₁		板目	
54	3-1193	宮川 6区	G102	S R313	(19.0)	2.6	0.5	圭頭			板目	
55	3-1272	宮川 6区	G102	S R313	52.3	3.1	0.5	圭頭ナデ肩脚間は折り取りによる	A ₁		板目	
56	3-1282	宮川 6区	G102	S R313	46.3	3.7	0.4	圭頭ナデ肩	A ₁	スギ	板目	完形
57	3-1283	宮川 6区	G102	S R313	22.4	4.4	0.4	頭頂部半坦	C ₂	スギ	板目	
58	3-1286	宮川 6区		S R313	(33.3)	3.1	0.5	頭部鋭く尖る腰の表現なし			板目	
59	3-1302	宮川 6区	G102	S R313	26.7	3.2	0.7	圭頭首部分が長い	B ₁	スギ	板目	完形
60	3-1309	宮川 6区	G102	S R313	61.3	4.1	0.4	圭頭ナデ肩	A ₁		板目	
61	3-1335	宮川 6区	G102	S R313	(18.9)	3.9	0.4	脚間は折り取り			板目	
62	3-1349	宮川 6区	G102	S R314	(41.5)	2.8	0.4	脚部のみ脚間は三角形の切り取り			板目	脚部片側のみ
63	3-1354	宮川 6区	G102	S R313	(38.3)	3.3	0.4	圭頭ナデ肩下より斜めに切り込み手・腰を表現	A ₂		板目	脚部欠損
64	3-1393	宮川 6区	G103	S R313	61.5	3.5	0.7	圭頭ナデ肩一本脚			板目	完形
65	3-1312	宮川 6区	G103	S R313	48.0	3.7	0.5	圭頭ナデ肩	A ₁		板目	脚部先端欠失
66	3-1391	宮川 6区	G103	S R313	(16.0)	3.1	0.3	圭頭ナデ肩			板目	下半欠失
67	3-1395	宮川 6区	G103	S R313	(48.5)	3.8	1.1	圭頭ナデ肩腰部に切込み	A ₂			
68	3-1399	宮川 6区	G103	S R313	(18.9)	3.4	0.5	圭頭ナデ肩		スギ	板目	脚部欠失
69	3-1243①	宮川 6区	G103	S R313	(11.0)	3.1	0.6	脚間は折り取りか?			板目	
70	3-109	宮川 6区	F103	暗褐色灰色 砂	(52.6)	6.3	1.5	円頭ナデ肩		ヒノキ	板目	
71	3-243	宮川 6区	F103	旧大谷川	(16.5)	2.0	0.4	脚部三角形切取り		スギ	板目	?
72	3-1140	宮川 6区	F103	S R312	(21.3)	3.4	0.5	頭部は鋭く尖る。脚部は三角形の切取り				?ほぼ完形
73	3-257	宮川 6区	G102	綠灰色粘土	(18.8)	1.8	0.5	頭部は鋭く尖る。		スギ	板目	
74	3-194①	水上 7区	J70	旧大谷川砂 礫	(12.2)	4.1	0.5	腰部が大きくなぐられている。	F?	スギ	板目	



第32図 人形木製品実測図1



第33図 人形木製品実測図 2



第34図 人形木製品実測図 3

4. 斎串状木製品（第35図～第37図）

本遺跡では、旧大谷川から、他の祭祀遺物とともに200点以上の祭祀に用いられたと考えられる板状の串が出土している。「削りかけ」「小塔婆」などとも呼ばれていたこの遺物は、黒崎直氏が提唱されてからは祭祀に用いられる神聖な串という意味で「斎串」と呼称することが多いようである。ここでは200点をこす本遺跡の斎串について検討してみたい。⁽¹⁾

斎串についての体系的な研究を最初にされたのは黒崎直氏であった。氏は「斎串考」において、形状・切り掛けの有無・回数などにより、8形態に分類しそれぞれの年代観を示し、①その初現が6世紀代にあること②7世紀末を境に斎串の出土例が飛躍的に増加すること③8世紀末頃に画期があり、4対以上切り掛けを加えたものや、V字形の切り欠きをほどこしたものが主流を占めるようになること

④丸棒あるいは角棒状の立体感のある斎串がやはり8世紀末頃に出現すること等を指摘している。さらに斎串の用途・性格については、斎串が出土する遺構は井戸・溝に代表されるが土壙や掘立柱建物の柱穴にも出土例があることを指摘した上で、斎串が延喜式にみえる「挿幣帛木」のように限定されたものではなく、広範囲な祭礼の場で多用的な目的を担っていた「神聖な木」であったとし、神の招ぎ代・淨域を画するし、神への供物のし、御贋料として用いられたとした。これに対し、金子裕之氏は、「古代の木製模造品」の中で「削りかけ」の名称を用い、全体の形状により3つに大きく分類し、さらに切り込みの有無・回数等によりそれを3～6形態に細分している。また氏は、「木製模造品」の中で、削りかけ（斎串）の年代について6世紀代と考えられている奈良県和爾遺跡や滋賀県湖西線関係遺跡の例をあげながらも、藤原宮下層溝S D1901Aの資料よりいくつかの形式が並存しながら変化していくこと、削りかけの成立が7世紀を大幅に遡らないことを指摘している。また、用途については広汎な目的に使われたとし、黒崎氏とこの点では同じ考え方をとっている。また、『伊場遺跡遺物編I』では、黒崎氏の分類に準じながらも独自にA～Eの5種類に分けている。このうちの4分類は、切り掛けの有無・数などにより3～4形態に細分されている。さらには出土層位より、長大化や切り掛けの複雑化が新しい傾向であることを指摘している。興味深いのはその性格について『神祇全書』第三輯（1907年）の『豊受皇太神宮年中行事令式』の資料から斎串を鉢の形代とする考え方を示されていることである。ただ、この例は近世を遡るかどうか疑問であり問題がある。最近の研究では『和爾・森本遺跡』において中井一夫氏が、同遺跡内の井戸より出土した斎串が6世紀中頃であるとした上で、木製模造品が対象物を忠実に模造したものからシンボル化し、平面形態のみを模すようになるのが6世紀中頃とし、斎串や土馬もこの頃出現することから、この時期に祭祀形態が大きく変化した可能性を指摘している。大変興味深い説であるが、根拠については見通しが示されているにすぎない。⁽²⁾

この他では斎串の一つの用例として、兼康保明氏が鑿井工程の中での斎串の使用例を示されている。⁽³⁾また形態分類上では、近年、奈良国立文化財研究所編の『木器集成図録』において形状からA～D 4型式に、切り込み（削りかけ）や切り欠きの数や位置によりI～Vの8式に分け、これらの組合せによりA I型式などに形態分類する考え方を示している。

さて、本遺跡の斎串状の木製品は前述したように200点以上にのぼるが、全体の形状が確認できるのは70点あまりで他は一部欠損している。“斎串状の木製品”という言葉をあえて使ったのは斎串の最大の特

徴である削り掛け（切り掛け）が本遺跡ではわずか3点に認められるだけで、大多数が削り掛けを有しない。斎串が黒崎氏がいうように祭祀に用いられる神聖な木とすれば、本遺跡の中で人形・馬形など他の祭祀遺物と共に伴したものは別として、単独で出土したものはやはり斎串状木製品とした方がよいだろう。ともあれ、本遺跡の斎串状木製品の特徴は削り掛け（切り掛け）がないことである。したがって、全体の形状により分類を試みた。以下にその特徴を述べる。なお、樹種はスギ材がほとんどであるが、E₂とした73・141と80の削り掛けを有するものがヒノキ材である。

A. 上端が圭頭状を呈するもの

A₁：上下両端ともに圭頭状を呈する。（黒崎氏のA₁・金子氏のA₁）

図示したものも含めて全体の形状のわかるもので18点を数え、かなり高い割合を示す。

A₂：上端は圭頭状、下端は劍先状を呈する。（黒崎A₁・金子B₁）

図示したものも含めて10点を数える。削り掛けがあるものを含めれば、他遺跡では最もボリュームな斎串である。

A₃：上端は圭頭状であるが、下端は片側から斜めに切り離したもの。（黒崎・金子ともなし）

図示した3点のみである。

A₄：上端は圭頭状で、下半部は幅がせまくなり下端へと続く。（黒崎・金子ともなし）

2点のみ出土している。2点とも50cm近い大型品である。先に述べた斎串＝鉢説に従えば、A₄はまさに鉢の形代と考えられはしないだろうか。

A₅：側辺上部に1対または2対の削りかけを有する。（黒崎B₁とC・金子A₃とA₄）

A₁に1対の削りかけがあるものと、上下方向から2対の削りかけがあるものがある。他に削りかけ痕が認められる破片が1点ある。以上3点だけで他には認められない。

B. 上端が片側から斜めに切り離されたもの。（黒崎A₂）

B₁：上・下の逆方向の切り離しで、台形状を呈する。

図示したものも含め20点が認められ、かなり高い比率を示している。兵庫県姫谷遺跡や福布ヶ森遺跡に類例がある。⁽¹⁷⁾

B₂：B₁と同様であるが切り離しの角度がやや急で、切り離し面は直線でなくやや丸みを持つ。3点出土している。

B₃：上・下同方向からの切り離しで、平行四辺形状を呈する。（金子C₁）

類例は長岡京出土のものに見られる。3点が出土している。

C. 両端が劍先状を呈する。かなり長く、幅は長さに比べせまい。

C₁：両端が比較的シャープなもので、断面は凸レンズ状あるいは偏平で蒲鉾状を呈する。

3点のみである。59.3～80.2cmと3点ともかなり長い。

C₂：両端が圭頭と劍先の中間的な形状を呈する。

基本的にはC₁と同じであろう。12点出土している。この中には2のように断面が片刃状につくり出されたものや、22のように断面三日月状で中央に稜があるものなどがみられる。

D. 上端が平頭を呈する。（伊場E₁）

上端が平頭・下端が片側からの斜めの切り離しの1点のみである。製作途中など偶発的な要素も考える必要があろう。

E. 両側面に複数の切り欠きを有する。

E₁ : 左右対称に三角形に切り欠く。(黒崎E・伊場D)

1点のみである。

E₂ : 両端側面上方に細かな切り欠きを多数有する。

5点出土。平頭・丸頭・圭頭がある。

F. 長さに比し、幅はかなり広く上端はゆるやかな圭頭状で下端は剣先状を呈する。

3点出土している。Fは元興寺境内遺跡や馬場屋敷遺跡にみられるように中世の物忌札や呪符木簡などに多い形態であり、斎串としてよいかどうか問題が残る。本遺跡出土の呪符木簡にもこの形態がみられる。

G. 卒塔婆状木製品・・・圭頭で側面上部を2ないし3カ所左右対称に切り欠き、塔婆様につくる。

6点出土している。なお、切り欠きが一对だけのものもみられる。やはり本遺跡出土の呪符木簡に同様の形態がみられる。

以上、本遺跡の斎串を形状を基に分類した。各分類案と一致するものについてはそれぞれの分類の説明の末尾に()で示した。なお前述した奈文研の『木器集成図録』によると、A₁=B I、A₂=C I、A₃=D I、A₅=C III or C V、B₁・B₃=A I、E₁=C Iとなり、これ以外はすべてD型式ということになる。

さて年代については、①斎串に共伴する土器の年代、②今までの研究結果との比較という2つの観点で考えてみたい。まず土器との共伴関係であるが、他の祭祀遺物同様旧大谷川からの出土であり、明確な共伴関係は認め難い。そこで年代からある程度限定できる河道内の遺物を見てみると、6世紀後半～7世紀前半の土器が出土した宮川6区S R313は、A₁4点、A₂1点、A₄1点、B₁4点、C₁3点、C₂5点が出土している。特にA₁とC₂合わせて9点と上下が圭頭あるいはそれに近い形状をしているものが多い。本遺跡の旧大谷川内で古い河道の一つであるS R313でこのような傾向を示すことは、上・下端が圭頭状のものが古い様相である可能性が高いことを暗示している。やはり6世紀後半～7世紀中頃の土器が出土した宮川4区S R56でもおなじような傾向にあるが、下端が剣先状を呈するA₂も3点みられる。S R313より年代幅がやや大きいS R56でこうした傾向がみられることは、A₂が新しい要素となる可能性があることを示す。さらに、平安時代までの遺物を包含する、宮川4区S R 5 4ではA₂1点、A₅1点、E₂3点が出土している。特に削り掛けを有するものが出土していることは注目される。このことから平安時代には削りかけや、両側面の上部に細かい切り欠きを施す手法が登場したことが十分推定される。

FやGは、中世の堆積層からの出土がほとんどである。

次に、今までの研究結果との比較であるが、まず第一に注意しなければならないのは、本遺跡のものに削り掛け(切り掛け)がほとんど存在しないことである。したがって、削り掛け(切り掛け)の有無・個数を分類の第一義とした黒崎氏および伊場遺跡の分類とは比較してもあまり意味はない。ただ黒崎氏が削りかけがないものを古い要素の一つにしていることは参考になろう。そこで金子分類および奈文研

の分類であるが、前述したように本遺跡の分類が上端の形状を重視したのに対し、全体の形状を重視しているので微妙に異なる。金子および奈文研によれば、両端を一側面から切り落とした不定形のものが6世紀後半に出現し、両端を圭頭状にするもの、上端を圭頭に下端を劍先状にするもの一部が7世紀後半に出現するという。これを本遺跡にあてはめれば、B・A₃が古く、A₁・A₂が7世紀後半からということになる。他はあてはまる分類がないので参考にならない。また新しい時代のものでは和田 萩氏の研究がある。¹⁾氏は呪符木簡および物忌札の形状と機能に着目され、これらが斎串と密接な関係にあると指摘している。この論からすれば、本遺跡のF・Gもその形態から新しい要素とすることができる。

以上、それぞれの観点でみてきたが、まとめるところ。

(1)大きな意味で共伴する土器からA₁とC(C₁とC₂)は、7世紀前半には存在していた可能性が高く、金子・奈文研分類と共伴土器よりB・A₃がやはり7世紀前半までに出現したと考えられる。またA₄も形態上、同類と考えられる。

(2)A₁・A₃・A₄・B・Cに次ぎ、A₂が7世紀代には出現していたと考えられる。

(3)さらに平安時代に至り、A₅やE₂など側辺に削りかけや細かい切り欠きを有するものが登場する。

(4)平安末～中世に至り、FやGのように呪符木簡状のものや卒塔婆状のものが出現する。

これらは傍証によるものであくまで推論にすぎない。またここで述べた以外のD・E₁については出土点数が少ないとともあり、推論もできないまま残された。ともあれ、本遺跡の斎串状の木製品を大まかに分類し検討してみた。このうち主流である、A₁～A₄、B、Cは削りかけもなく、他の遺跡の主流を占める削りかけを有する斎串とは趣を異にしている。これらの年代は、7世紀に遡る可能性を指摘できる。

最後に、この遺跡の性格であるが、本遺跡出土の斎串状の木製品の中で、A₁やB₁・C₁・C₂と分類されたものに、断面が凸レンズ状・偏平でシャープな鉗鉢状あるいは三角形を呈するものがあり、鉗あるいは剣・刀などの武器や刀子・やりがんななどを模した可能性も考えられる。もしこの仮定が正しければ、A₁・A₂・A₄は鉗、C₁・C₂などは剣またはやりがんな、B₁・B₂は刀子と考えられはしないだろうか。

- (1) 黒崎 直 「斎串考」『古代研究』10 1976
- (2) 金子裕之 「古代の木製模造品」『研究論集VI』奈良国立文化財研究所 1980
- (3) 金子裕之 「木製模造品」『神道考古学講座』第三巻 1981
- (4) 浜松市教育委員会 「伊場遺跡遺物編I」 1978
- (5) 奈良県立橿原考古学研究所 「和爾・森本遺跡」 1983
- (6) 齋藤保明 「井戸における斎串使用の一例」『古代研究』19 1980
- (7) 加賀見省一 「但馬国府と歟所」『歴史学と考古学』 1988
- (8) 和田 萩 「呪符木簡の系譜」『木簡研究』 1982

第3表 斎事状木製品一覧表

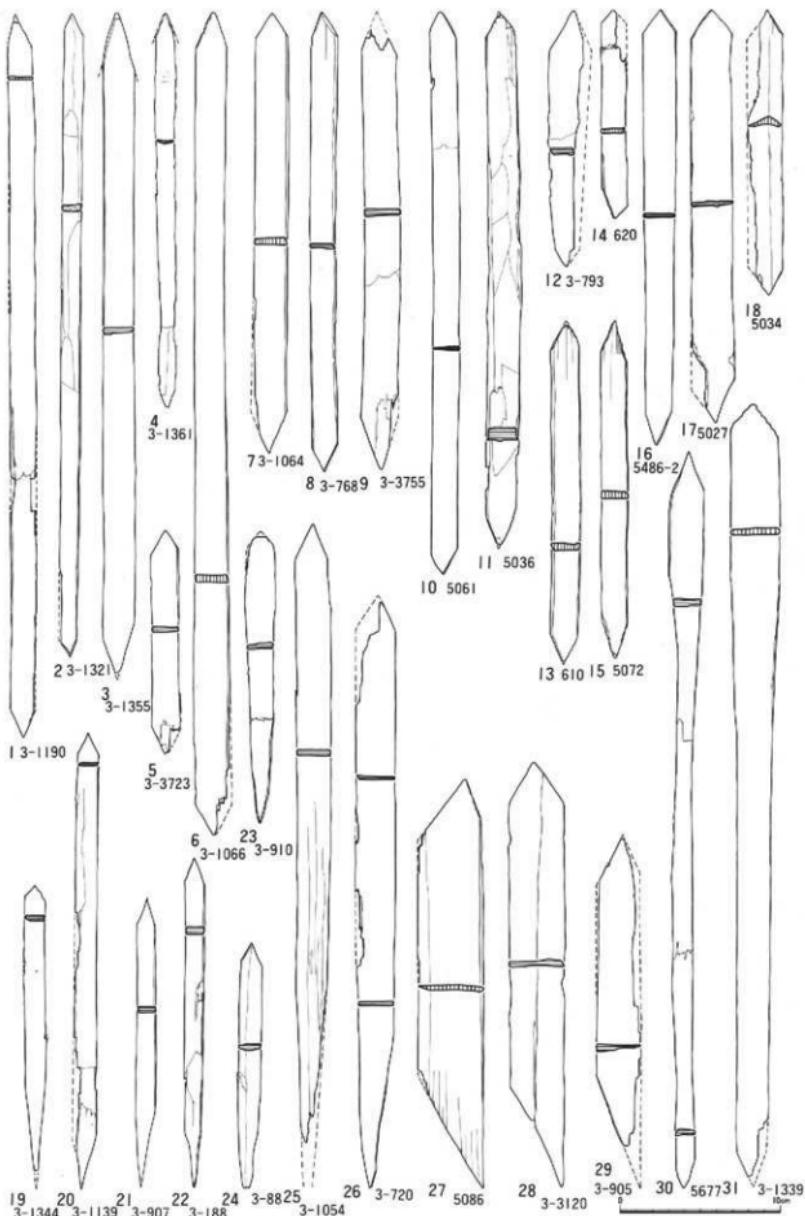
番号	地 区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	形状・調整	形態	備 考	木取	回 番号
1	宮川6区	G102	S R313	3-1188	(13.2)	2.0	0.5	斜めの切離	一部欠損	板目		
2	〃	〃	〃	3-1189	55.2	1.9	0.8	片刃状	C ₂ 完形	〃	61	
3	〃	〃	〃	3-1190	44.7	1.7	0.3		A ₁ ほぼ完形	柾目	1	
4	〃	〃	〃	3-1200	(43.1)	1.9	0.5		B ₁ 片端欠損	〃	35	
5	〃	〃	〃	3-1204	(10.9)	3.3	0.5	圭頭状	—	一部欠損	板目	
6	〃	G103	〃	3-1210	(28.7)	1.7	0.7	劍先状	—	〃	〃	
7	〃	〃	〃	3-1221	(25.7)	1.4	0.4	〃	—	〃	柾目	
8	〃	〃	〃	3-1222	(16.2)	1.3	0.2	斜めの切離	—	〃	〃	
9	〃	〃	〃	3-1232	(27.9)	2.0	0.5	劍先状	—	〃	〃	
10	〃	〃	〃	3-1243 I	(11.9)	1.1	0.5	〃	—	〃	〃	
11	〃	〃	〃	3-1243-2	(7.9)	1.4	0.5	〃	—	〃	追征	
12	〃	〃	〃	3-1243-3	(6.2)	2.0	0.5	〃	—	〃	板目	
13	〃	〃	〃	3-1243-4	(7.3)	1.3	0.5	圭頭状	—	〃	〃	
14	〃	〃	〃	3-1243-5	(6.3)	1.2	0.4	劍先状	—	〃	〃	
15	〃	〃	〃	3-1243-6	(8.2)	0.9	0.6	斜めの切離	—	〃	〃	
16	〃	〃	〃	3-1243-7	(14.0)	0.9	0.6	圭頭状	—	〃	〃	
17	〃	〃	〃	3-1257	(22.4)	1.0	0.2	〃	—	〃	〃	
18	〃	G102	〃	3-1276	(10.8)	2.3	0.2	斜めの切離	—	〃	柾目	
19	〃	〃	〃	3-1277	(9.1)	1.5	0.4	圭頭状	—	〃	板目	
20	〃	〃	〃	3-1278	(14.6)	2.0	0.5	〃	—	〃	柾目	
21	〃	〃	〃	3-1287	17.6	1.6	0.3		C ₂ 完形	板目	56	
22	〃	〃	〃	3-1288	19.2	1.5	0.4	中央に稜	C ₂ 〃	柾目	57	
23	〃	〃	〃	3-1289	(15.2)	1.2	0.6	劍先状	—	一部欠損	板目	
24	〃	〃	〃	3-1290	(22.1)	1.4	0.4	両端欠損	—	〃	柾目	
25	〃	〃	〃	3-1291	(28.4)	2.3	—	劍先状	—	〃	板目	
26	〃	〃	〃	3-1292	(34.8)	2.2	0.4	〃	—	〃	柾目	
27	〃	〃	〃	3-1293	39.6	1.7	0.3		C ₂ ほぼ完形	〃	58	
28	〃	〃	〃	3-1294	(14.0)	2.2	0.4	圭頭状	—	一部欠損	追征	
29	〃	〃	〃	3-1295	(25.2)	2.4	0.5	劍先状	—	〃	柾目	
30	〃	〃	〃	3-1296	(9.6)	1.2	0.3	圭頭状	—	〃	〃	
31	〃	〃	〃	3-1303	(43.3)	2.3	0.8	〃	—	〃	追征	84
32	〃	〃	〃	3-1307	(80.2)	2.9	0.6	断面薄鋸形	C ₁ ほぼ完形	板目	66	
33	〃	〃	〃	3-1308	(36.6)	3.2	0.5	斜めの切離	—	一部欠損	〃	
34	〃	〃	〃	3-1313	(13.0)	1.8	0.6		B ₁ 片端部 欠損	〃	36	
35	〃	〃	〃	3-1315	23.4	0.8	0.3		C ₂ 完形	〃	62	
36	〃	〃	〃	3-1317	(14.5)	2.8	0.4	圭頭状	—	一部欠損	〃	
37	〃	〃	〃	3-1320	(14.0)	1.3	0.6	斜めの切離	—	〃	〃	
38	〃	〃	〃	3-1321	40.1	1.3	0.5		A ₁ 完形	〃	2	
39	〃	〃	〃	3-1333	(25.8)	2.1	0.5	圭頭状	—	一部欠損	柾目	
40	〃	〃	〃	3-1334	(17.7)	1.4	0.4		A ₂ 下端少し 欠損	〃	19	
41	〃	〃	〃	3-1339	(48.1)	3.1	0.5		A ₄ 〃	柾目	31	
42	〃	〃	〃	3-1341	(59.3)	2.9	0.7	断面は凸 レンズ状	C ₁ 片端少し 欠損	〃	64	
43	〃	〃	〃	3-1355	40.9	2.0	0.5		A ₁ ほぼ完形	板目	3	
44	〃	〃	〃	3-1361	24.5	1.4	0.4	断面薄鋸形	A ₁ 〃	〃	4	
45	〃	〃	〃	3-1364	(17.5)	1.3	0.5	〃	B ₁ 片端少し 欠損	〃	37	
46	〃	G103	〃	3-1385	(24.9)	1.8	0.5		—	一部欠損	〃	
47	〃	G102	〃	3-1386	63.0	2.1	0.6	断面薄鋸形	C ₁ 完形	〃	65	
48	宮川6区	G103	S R313	3-1387	(25.5)	2.3	0.3	劍先状	B ₁ ほぼ完形	板目	38	
49	〃	〃	〃	3-1389	(30.5)	2.7	0.8		—	一部欠損	〃	

番号	地区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	形状・調整	形態	備考	木取	図番号
50	〃	〃	〃	3-1390	(13.2)	2.0	0.5	圭頭状	-	〃	板目	
51	〃	〃	〃	3-1419	(42.6)	3.0	0.4	劍先状	-	〃	〃	
52	〃	G102	〃	3-1427	(16.0)	1.8	0.6	〃	-	〃	板目	86
53	〃	〃	〃	3-1433	(40.0)	2.3	0.5	圭頭状	-	〃	板目	87
54	〃	〃	〃	3-1434	(10.2)	1.7	0.4	〃	-	〃	板目	
55	〃	F103	S R312	3-118	(10.9)	2.1	0.5	劍先状	-	〃	板目	
56	〃	〃	〃	3-686	(10.0)	1.7	0.5	〃	-	〃	〃	
57	〃	〃	〃	3-1041	(12.6)	1.9	0.6	圭頭状	-	〃	〃	
58	〃	〃	〃	3-1177	(14.8)	1.8	0.3	斜めの切離	-	〃	〃	
59	〃	D105	S R314	3-532	(17.7)	1.8	0.5	劍先状	-	〃	板目	
60	〃	C108	S R316	3-1139	28.4	1.4	0.2		A ₂	ほぼ完形	板目	20
61	〃	C107	〃	3-1152	(7.6)	2.5	0.2		E ₂	上半残存	〃	72
62	〃	—	山大谷川	3-3000	(10.3)	2.0	0.3		E ₁	〃	板目	68
63	〃	C108	〃	3-88	(15.4)	1.5	0.5		A ₂	ほぼ完形	板目	24
64	〃	G102	〃	3-106	(20.5)	2.9	0.6	斜めの切離	-	一部欠損	〃	
65	〃	〃	〃	3-132-2	(16.3)	1.3	0.6	圭頭状	-	〃	板目	
66	〃	〃	〃	3-1006	51.2	2.3	0.6		A ₁	ほぼ完形	〃	6
67	〃	G103	〃	3-1064	27.4	2.1	0.5		A ₁	〃	〃	7
68	〃	〃	緑灰色砂	3-1065	(39.2)	2.0	0.5	斜めの切離	-	一部欠損	板目	
69	〃	〃	東西土手	3-1220	(23.4)	1.3	0.7	圭頭状	-	〃	〃	
70	〃	〃	暗灰色砂	3-1412-1	(16.4)	2.3	0.3	〃	-	〃	板目	
71	〃	〃	〃	3-1412-2	(17.1)	2.0	0.5		B ₁	端部少し	欠損	40
72	〃	〃	〃	3-1412-3	(10.7)	2.9	0.3	斜めの切離	-	一部欠損	板目	
73	宮川4区	O93	S R54	3-252	15.4	1.1	0.2	上端丸頭状	E ₂	完形	〃	69
74	〃	N93	〃	3-651	21.7	1.4	0.5	〃	E ₂	ほぼ完形	板目	70
75	〃	〃	〃	3-562	(16.0)	1.9	0.3	上端圭頭?	E ₂	上・下端 欠損	板目	71
76	〃	〃	〃	3-653	(29.1)	2.4	0.6	下端劍先状	-	一部欠損	板目	
77	〃	O93	〃	3-970	(4.7)	1.3	0.5	斜めの切離	-	〃	板目	
78	〃	〃	〃	3-972	(7.5)	2.4	0.3	断面は凸	-	〃	〃	
79	〃	〃	〃	3-973	(6.3)	1.6	0.3	斜めの切離	-	〃	板目	
80	〃	〃	〃	3-974	(16.8)	1.4	0.2	上端圭頭状	A ₂	下端欠損	板目	33
81	〃	〃	〃	3-976	(14.2)	1.2	0.1	劍先状	-	一部欠損	板目	
82	〃	〃	〃	3-977	(14.2)	1.6	0.3	〃	-	〃	〃	89
83	〃	〃	〃	3-979	(20.3)	1.7	0.3	斜めの切離	-	〃	〃	88
84	〃	〃	〃	3-980	(24.8)	1.9	0.5	劍先状	-	〃	板目	
85	〃	N93	〃	3-1054	(38.6)	2.1	0.4		A ₂	下端欠損	板目	25
86	〃	O93	〃	3-2275	(6.3)	2.5	0.4	劍先状	-	一部欠損	〃	
87	〃	〃	〃	3-2276	(7.4)	1.1	0.3	〃	-	〃	板目	
88	〃	N93	S R55	3-2115	(12.1)	1.4	0.6	圭頭状	-	〃	〃	
89	〃	O94	〃	3-4077	15.5	1.9	0.6		B ₁	ほぼ完形	〃	39
90	〃	N94	S R56	3-645	26.1	1.7	0.5		B ₁	〃	板目	43
91	〃	M94	〃	3-719	(22.7)	1.6	0.2	圭頭状	-	一部欠損	〃	
92	〃	〃	〃	3-720	(36.5)	2.5	0.3		A ₂	上端少し 欠損	〃	26
93	〃	〃	〃	3-768	28.6	1.7	0.4		A ₁	完形	〃	8
94	〃	〃	〃	3-905	(19.1)	2.8	0.4		A ₂	下端少し 欠損	〃	29
95	〃	〃	〃	3-907	18.2	1.3	0.4		A ₂	完形	〃	21
96	宮川4区	N94	S R56	3-1145	(18.0)	1.4	0.3	圭頭状	-	一部欠損	板目	
97	〃	M94	〃	3-1172	(42.3)	1.9	0.4	〃	-	〃	〃	
98	〃	N94	〃	3-1185	(45.3)	2.5	0.4	〃	-	〃	〃	

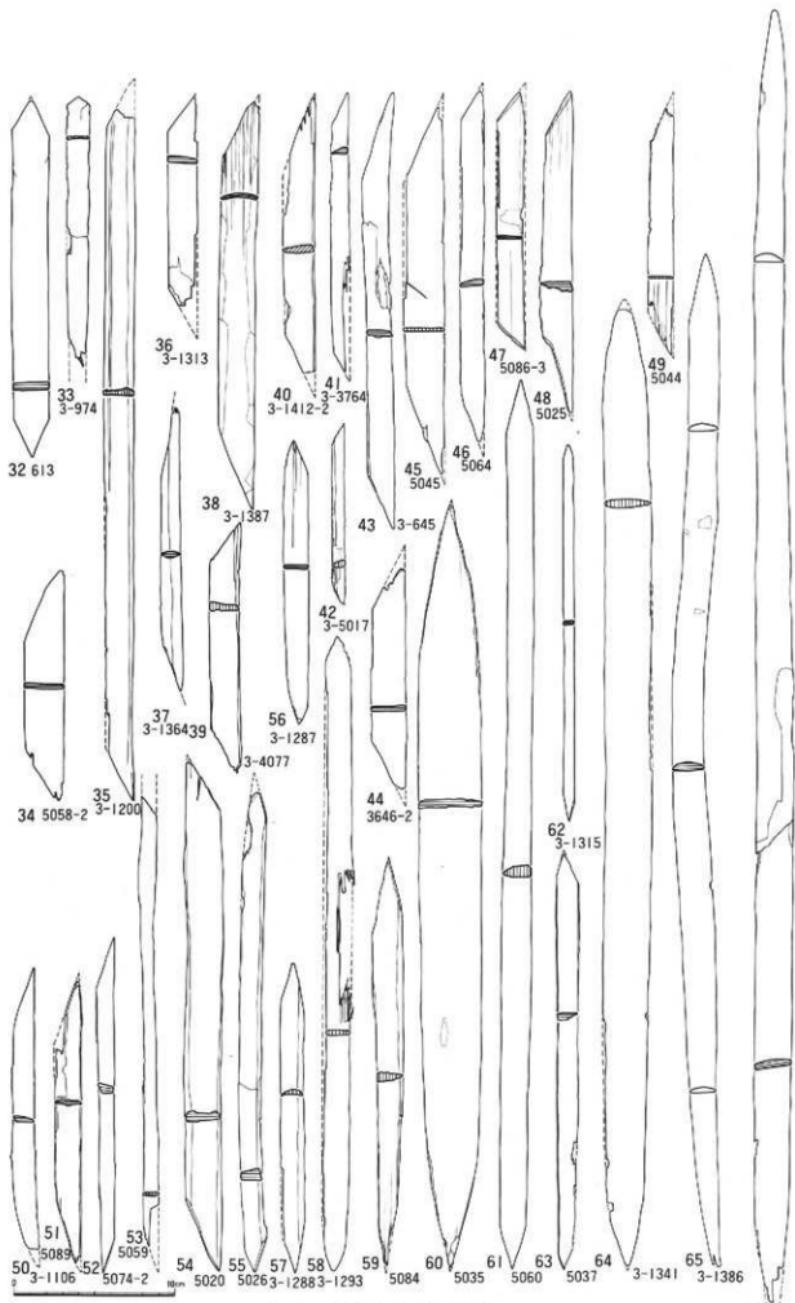
番号	地区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	形状・調整	形態	備考	木取	図番号
99	II	II	II	3-2106	(6.1)	1.7	0.6	II	-	II	II	
100	II	II	II	3-2107	(7.7)	1.2	0.5	斜めの切妻	-	II	板目	
101	II	II	II	3-2108	(9.5)	1.7	0.3	II	-	II	板目	
102	II	II	II	3-2933	(9.0)	1.3	0.3	刺先状	-	II	II	
103	II	O94	II	3-2294	(19.1)	1.4	0.5	II	-	II	II	90
104	II	II	暗灰色粘土	3-2812	(25.6)	1.9	0.5	斜めの切妻	-	II	II	
105	II	II	II	3-2930-1	(18.9)	2.3	0.4	II	-	II	II	
106	II	II	暗灰色砂	3-3179	(17.7)	2.1	0.3	刺先状	-	II	II	
107	II	II	暗灰色粘土	3-3742	(14.2)	2.1	0.3	斜めの切妻	-	II	II	
108	II	I 100	暗灰色砂混粘土	3-3770	(10.7)	2.0	0.2	II	-	II	II	
109	II	II	II	3-3772	(14.5)	2.4	0.6	II	-	II	II	
110	II	J 99	暗灰色粘土混砂礫	3-3116	(10.5)	2.5	0.2	II	-	II	II	
111	II	II	暗灰色粘土	3-3120	21.5	3.5	0.4		A ₂	ほぼ完形	II	28
112	II	II	暗灰色砂	3-3210	(27.6)	2.4	0.5	刺先状	-	一部欠損	II	94
113	II	II	暗灰色粘土	3-3231	(9.8)	1.8	0.3	斜めの切妻	-	II	II	
114	II	II	暗灰色粘土混砂礫	3-3233	(6.1)	1.3	0.4	II	-	II	II	
115	II	II	粘土混砂礫	3-3500	27.9	1.5	0.4		C ₂	完形	II	
116	II	II	II	3-3565	(13.1)	1.8	0.3	圭頭状	-	一部欠損	II	
117	II	II	II	3-3567	(39.9)	1.7	0.6	刺先状	-	II	II	92
118	II	II	II	3-3636	(15.3)	2.2	0.3	圭頭状	-	II	板目	
119	II	II	II	3-3637	(22.6)	1.8	0.2	刺先状	-	II	II	93
120	II	II	暗灰色砂混粘土	3-3722	(16.8)	1.3	0.5	圭頭状	-	II	板目	
121	II	II	II	3-3723	13.9	1.8	0.4		A ₁	ほぼ完形	II	5
122	II	II	II	3-3724	(16.5)	1.5	0.5	刺先状	-	一部欠損	II	
123	II	II	粘土混砂礫	3-3755	(27.0)	2.3	0.5		A ₁	端少し欠損	II	9
124	II	II	II	3-3756	(12.5)	2.0	0.5	圭頭状	-	一部欠損	板目	
125	II	II	II	3-3760	18.9	2.4	0.3	II	-	II	板目	
126	II	II	II	3-3764	(17.3)	1.2	0.5	断面三角形	B ₁	ほぼ完形	II	41
127	II	J 99	暗灰色粘土混砂礫	3-3748	(15.5)	1.0	0.3	刺先状	-	一部欠損	板目	
128	II	K98	暗灰色粘土混砂	3-2598	27.5	3.2	0.3		F	ほぼ完形	板目	75
129	II	L96	暗灰色砂混粘土	3-1253	(13.8)	1.7	0.2	刺先状	-	一部欠損	II	
130	II	M94	粘土混黑色砂礫	3-1117	(10.8)	2.3	0.4	圭頭状	-	II	II	
131	II	II	II	3-1134	(12.0)	2.1	0.5	II	-	II	II	
132	II	II	II	3-1141	(15.7)	2.7	0.3	II	-	II	II	
133	II	N93	黄褐色砂礫	3-1081	(10.4)	1.5	0.3	刺先状	-	II	II	
134	II	II	暗灰色砂混粘土	3-1093	(9.4)	1.3	0.3	圭頭状	-	II	II	
135	II	II	粘土混黑色砂礫	3-1106	(17.6)	1.6	0.4		B ₂	片端少し欠損	II	50
136	II	N94	暗灰色砂混粘土	3-756	(36.7)	1.4	0.2	刺先状	-	一部欠損	II	
137	II	II	II	3-791	(11.8)	2.9	0.4	斜めの切妻	-	II	II	
138	II	II	II	3-793	15.9	2.1	0.5		A ₁	II	II	12
139	II	II	II	3-2154	(11.4)	1.7	0.6	刺先状	-	II	板目	
140	II	II	II	3-2155	(12.4)	1.9	0.5	II	-	II	II	91
141	II	O92	II	3-243	(7.4)	1.5	0.2	細かな切り欠き	E2	II	II	
142	II	-	表採	3-520	(37.2)	2.6	0.4	刺先状	-	II	板目	95
143	宮川 5 区	C106	S R 2 0 2	3-151	41.0	2.7	0.5		(A ₁)	ほぼ完形	板目	
144	II	II	II	3-188	20.6	1.2	0.5		A ₂	II	板目	22
145	宮川 2 区	G102	灰色粘土砂	5323	14.5	3.0	0.3	圭頭状	-	一部欠損	板目	13
146	II	II	灰绿色粘土	610	(21.0)	1.9	0.5		A ₁	ほぼ完形	II	

番号	地 区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	形状・調整	形態	備 考	木取	圖番号
147	〃	〃	〃	611	(23.0)	1.5	0.6	断面三角形	-	一部欠損	〃	85
148	〃	〃	灰色粘土砂	613	22.3	2.3	0.6	両端丸頭状	A ₁	ほぼ完形	板目	32
149	〃	〃	灰色粘土	617	(14.4)	2.0	0.4	圭頭状	-	一部欠損	〃	
150	〃	〃	灰色粘土	5061	35.0	1.7	0.3	断面三角形	A ₁	ほぼ完形	板目	10
151	〃	〃	灰色粘土	618	(13.6)	1.2	0.4	〃	-	一部欠損	板目	
152	〃	H101	旧大谷川	5045	(22.8)	2.6	0.3	〃	B ₁	一部欠損	板目	45
153	〃	〃	灰色粘土砂	5058-1	(13.2)	1.7	0.5	圭頭状	-	一部欠損	板目	
154	〃	〃	〃	5058-2	14.4	2.5	0.4	〃	B ₂	ほぼ完形	〃	34
155	〃	〃	〃	5058-3	(7.4)	2.3	0.6	圭頭状	-	一部欠損	板目	
156	〃	〃	灰色粘土砂	615	(24.4)	2.7	0.8	〃	-	〃	板目	
157	〃	〃	〃	620	13.0	1.6	0.4	〃	A ₁	ほぼ完形	板目	14
158	〃	H102	〃	623	(16.7)	1.4	0.4	劍先状	-	一部欠損	板目	
159	〃	I101	灰色粘土	5055	(15.8)	1.8	0.5	圭頭状	-	〃	板目	
160	〃	-	表探	5064	(21.8)	1.5	0.5	〃	B ₁	ほぼ完形	板目	46
161	〃	-	〃	5066	(24.2)	2.8	0.5	圭頭状	-	一部欠損	〃	
162	宮川3区	J94	灰黒色粘土	3-670	(42.9)	3.2	0.5	劍先状	-	〃	〃	
163	〃	〃	〃	3-752	(13.0)	1.6	0.5	G		下端欠損	〃	76
164	〃	K94	S R486	2380	(17.5)	2.3	0.4	劍先状	-	一部欠損	〃	
165	〃	〃	〃	2386	(12.6)	1.0	0.4	〃	-	〃	〃	
166	〃	〃	灰黒色粘土	2382	(23.3)	1.7	0.3	圭頭状	-	〃	〃	
167	西大谷2区	D45	砂砾	5030	(17.2)	1.8	0.4	〃	B ₁	ほぼ完形	〃	
168	〃	D46	灰茶粘土	5052	(12.3)	2.1	0.6	斜めの切離	-	一部欠損	板目	
169	〃	〃	〃	3646-1	(11.0)	1.8	0.4	〃	-	〃	板目	
170	〃	〃	〃	5042	(15.3)	2.3	0.7	底根状の面取り	-	〃	板目	82
171	〃	〃	〃	5037	(25.9)	1.4	0.5	断面三角形	C ₂	ほぼ完形	板目	63
172	〃	〃	〃	5036	(33.1)	2.1	0.9	〃	A ₁	〃	〃	11
173	〃	〃	〃	5061	(10.8)	0.9	0.4	斜めの切離	-	一部欠損	板目	
174	〃	〃	〃	5041	(18.3)	1.4	0.4	圭頭状	-	〃	〃	
175	〃	〃	〃	5045	(10.0)	1.3	0.3	斜めの切離	-	〃	〃	
176	〃	〃	〃	5038	15.8	2.2	0.4	劍先状	-	〃	板目	
177	〃	〃	〃	5035	(47.3)	3.9	0.6	C ₂	完形	〃	〃	60
178	〃	〃	〃	5051	18.8	1.4	0.4	B ₁	ほぼ完形	板目		
179	〃	〃	〃	5050	(21.2)	2.2	0.3	斜めの切離	-	一部欠損	板目	
180	〃	〃	灰茶粘土	5059	(27.8)	1.1	0.3	B ₂	〃	板目	53	
181	〃	〃	灰茶粘土	5060	21.7	0.8	0.4	D ₂	やや立体制的	板目	67	
182	〃	〃	〃	5040	(14.6)	1.4	0.6	圭頭状	-	一部欠損	板目	
183	〃	〃	〃	5047	(20.0)	1.3	0.6	C ₂	端が少し欠損	〃		
184	〃	〃	〃	5044	(15.5)	1.6	0.2	B ₁	〃	板目	49	
185	〃	〃	〃	5043	(18.6)	2.6	0.8	B ₂	一部欠損	板目		
186	〃	〃	灰茶粘土	3646-2	(13.7)	2.2	0.4	B ₁	両端少し欠損	板目	44	
187	〃	〃	灰茶粘土砂礫	3630	(16.4)	1.6	0.4	圭頭状	-	一部欠損	板目	
188	〃	〃	灰茶粘土	5731	(20.1)	1.2	0.3	劍先状	-	〃	板目	
189	〃	〃	〃	5070	(31.4)	1.2	0.6	〃	-	〃	〃	99
190	〃	〃	〃	5074-2	20.8	1.1	0.6	B ₂	立体的	完形	〃	52
191	〃	〃	〃	5064	(14.5)	1.9	0.3	劍先状	-	一部欠損	〃	
192	〃	〃	〃	5066	(14.3)	1.9	0.3	斜めの切離	-	〃	〃	
193	〃	〃	〃	5072	21.1	1.7	0.6	A ₁	ほぼ完形	板目	15	
194	西大谷2区	D46	灰茶粘土	5071	(24.9)	2.8	0.6	劍先状	-	一部欠損	板目	98
195	〃	〃	〃	5067	(15.7)	2.5	0.6	斜めの切離	-	〃	〃	
196	〃	〃	旧大谷川	5486-1	27.0	2.1	0.3	A ₁	完形	〃	16	

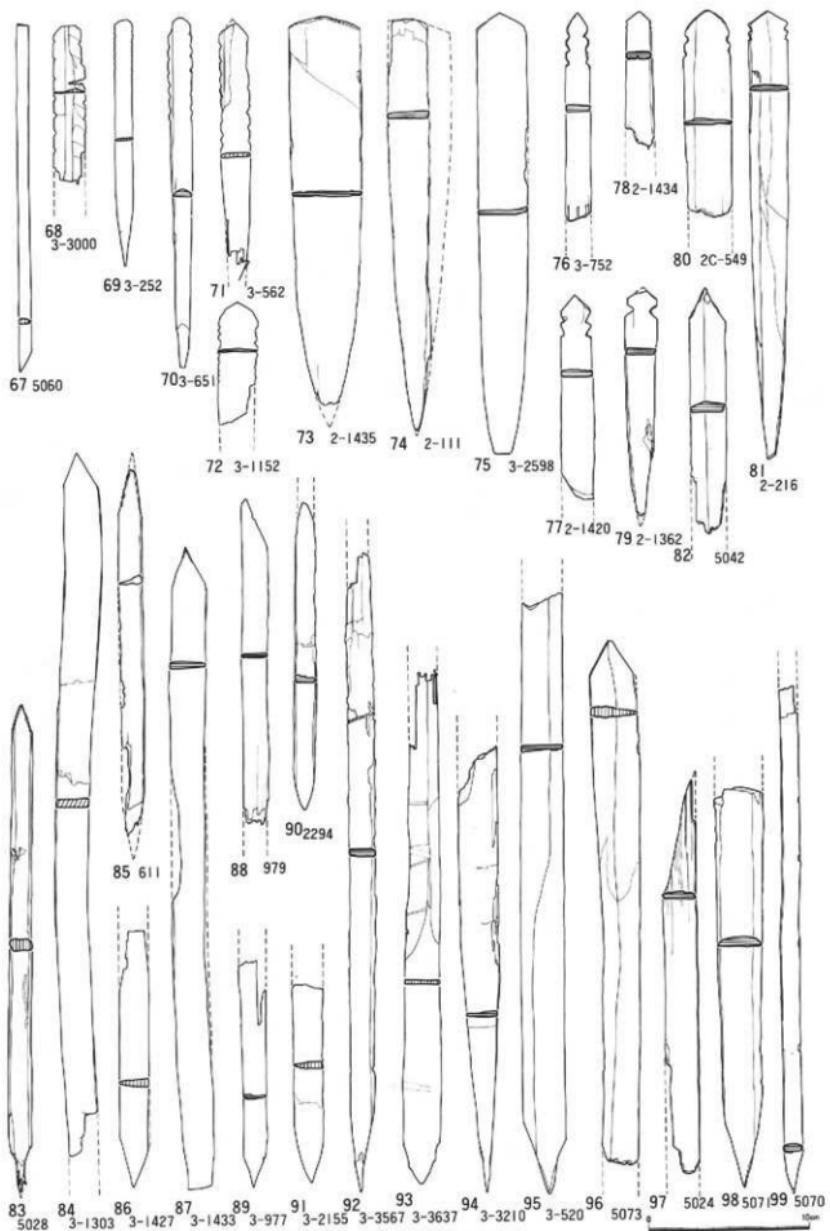
番号	地区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	長さ	幅	厚さ	形状・調整	形態	備考	木取	図番号
197	リ	リ	リ	5486-2	16.0	1.8	0.3		B1	ほぼ完形	リ	47
198	リ	リ	リ	5486-3	(28.6)	1.8	0.5		A2	ほぼ完形	リ	
199	リ	リ	灰茶粘土	5073	(32.5)	2.9	0.8	片刃圭頭状	-	リ	板目	96
200	リ	リ		5077	(13.9)	1.7	0.5	圭頭状	-	リ		
201	リ	リ	灰茶粘土	5082	(23.5)	2.5	0.6	刺先状	-	リ	追征	
202	リ	リ	リ	5084	(25.6)	2.0	0.6	断面三角形	C2	ほぼ完形	板目	59
203	西大谷1区	E41	砂礫	5019	(21.9)	2.3	0.7	刺先状	-	一部欠損	板目	
204	リ	E43	リ	5017	11.0	0.8	0.5	立体的	B1	完形	板目	42
205	リ	リ	リ	5018	(10.7)	1.6	0.2	刺先状	-	一部欠損	板目	
206	リ	リ	リ	5024	(24.5)	2.1	0.5	斜めの切離	-	リ	リ	97
207	リ	リ	シルト上面	5025	(20.2)	2.1	0.7	断面三角形	B1	ほぼ完形	リ	48
208	リ	リ	旧大谷川	5020	31.7	2.3	0.7		B3	リ	リ	54
209	リ	リ	リ	5027	25.7	2.6	0.4		A1	リ	リ	17
210	リ	リ	リ	5026	(29.7)	1.5	0.8	表面は丁寧	C2	一部欠損	リ	55
211	リ	リ	シルト上面	5028	(30.3)	1.5	0.9	下端は先細	-	立体的	リ	83
212	リ	E44	砂礫	5677	47.5	2.1	0.5	下端刺先状	A4	完形	リ	30
213	西大谷2区	E46	灰茶粘土	5089	(17.5)	1.7	0.4		B1	一部欠損	リ	51
214	リ	リ	砂礫	5086	25.6	4.1	0.4	片側に刃状 の面取り	A3	ほぼ完形	板目	27
215	西大谷1区	F43	リ	5632-1	(17.1)	2.6	0.4	斜めの切離	-	一部欠損	板目	
216	リ	リ	リ	5632-2	(9.3)	2.0	0.4	刺先状	-	リ	板目	
217	西大谷2区	-	旧大谷川	5034	17.7	2.2	0.5	断面三角形	A1	片側欠損	板目	18
218	リ	-	リ	5031	(13.6)	1.1	0.4	圭頭状	-	一部欠損	板目	
219	西大谷4区	Q22	粘土混砂礫	2-1362	(13.9)	2.0	0.5	切り欠き 1対	G	ほぼ完形	板目	79
220	リ	R22 Q22	暗灰色粘土	2-1434	(8.5)	1.8	0.5	切り欠き 2対	G	一部欠損	リ	78
221	リ	リ	リ	2-1435	(24.1)	4.4	0.4		F	ほぼ完形	リ	73
222	リ	R21	暗灰色粘土	2-910	(18.0)	1.9	0.4	下端は先細	A2	リ	リ	23
223	リ	R22	暗灰色粘土	2-181	(13.7)	1.6	0.3	斜めの切離	-	一部欠損	リ	
224	リ	リ	リ	2-1183	(12.4)	2.3	0.4	リ	-	リ	リ	
225	リ	リ	リ	2-1188	(14.9)	2.0	0.5	リ	-	リ	リ	
226	リ	リ	粘土混砂礫	2-1307	(13.5)	1.6	0.3	リ	-	リ	リ	
227	リ	リ	暗灰色粘土	2-1420	(12.7)	2.1	0.5	切り欠き 2対	G	リ	リ	77
228	リ	S21	粘土混砂礫	2-924	(46.4)	1.5	0.5		C2	リ	リ	
229	リ	リ	淡黄褐色砂礫	2-929	(17.9)	2.7	0.4	斜めの切離	-	リ	リ	
230	大谷1区	S19	リ	2-111	(25.7)	2.6	0.5		F	片側欠損	リ	74
231	リ	S20	暗灰色粘土	2-1144	(17.5)	1.5	0.5	圭頭状	-	一部欠損	板目	
232	リ	リ	粘土混砂礫	2-216	27.9	2.5	0.4	切り欠き 2対	G	ほぼ完形	板目	81
233	西大谷7区	-	旧大谷川	2C-549	(12.9)	2.9	0.5	リ	G	一部欠損	リ	80
234	水上7区	I72	砂礫	3-927-1	(12.2)	2.1	0.3	圭頭状	-	リ	板目	
235	リ	I76	砂礫	3-935	(22.4)	2.8	0.5		B2	ほぼ完形	板目	
236	西大谷4区	R23	第8トレンチ	2-487	(20.6)	4.0	0.4	切り欠き 4対	G	一部欠損	リ	



第35図 斎串状木製品実測図1



第36図 料串状木製品実測図 2



第37図 蒜串状木製品実測図 3

5. 箸状木製品（第38図）

長さ18~25cmほどで幅0.5~1.0cmほどの棒状をした木製品で、両先端は細く尖る。断面形は円形に近く丸味を帯びたものが多いが、正方形あるいは長方形のものや三角形に近いものも見られる。すべてスギ材であり表面調整は粗い。水上6区S D228や宮川3区S R486など山茶碗が出土する溝・旧河道・井戸から多量に出土しておりその数は全体で48点ほどに達する。特に水上6区S D228では箸状木製品65点が馬骨10点の周辺から出土しており、『大谷川II』において報告者はその祭祀性を指摘している。また宮川3区S R486では481点の箸状木製品が出土しており、これには「南無大日」などの呪符木簡や、「大」などの墨書き土器・ミニチュアの膳や杵の木製品が伴っている。これらの伴出遺物や出土状況からこの箸状木製品を斎串とする考え方が『大谷川II』に示されている。

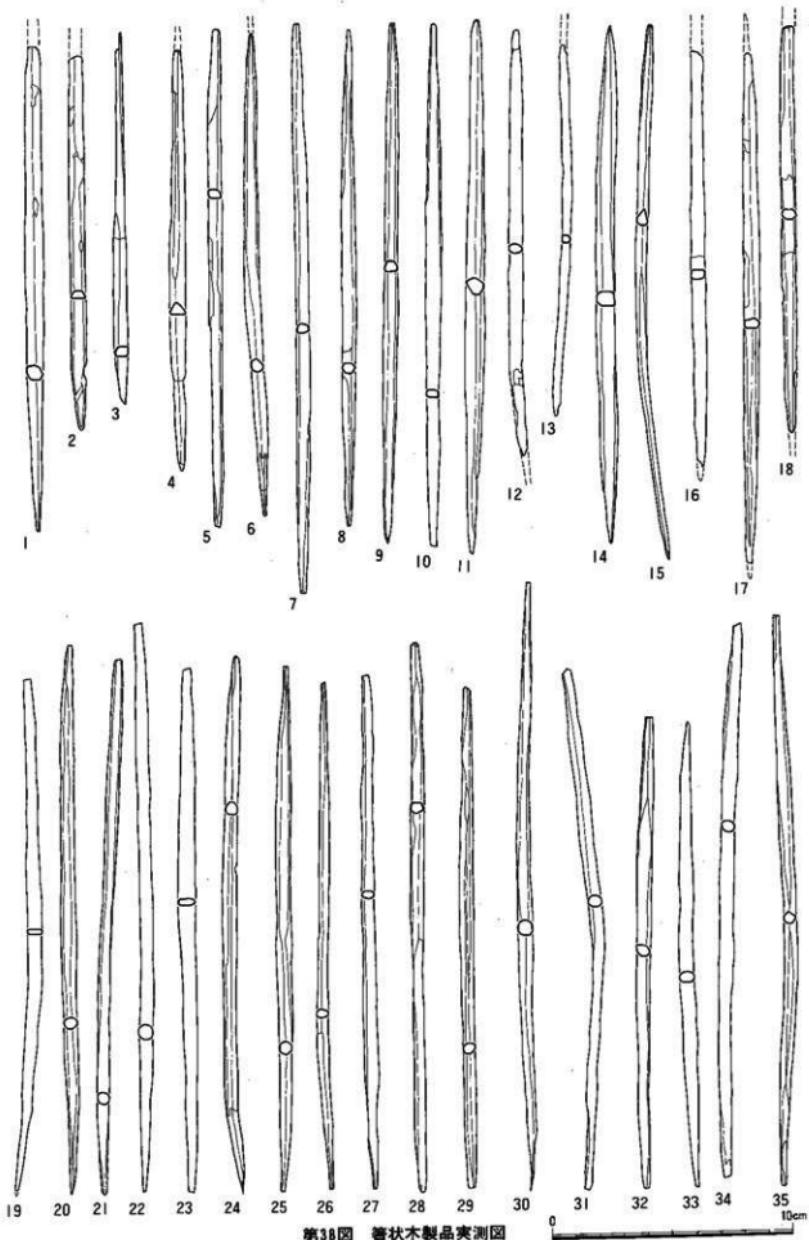
さて近年発掘調査された中世遺跡の資料が増加し、この箸状木製品も多くの遺跡で出土している。『中世の呪術資料』によれば箸状木製品が呪術・祭祀的に使用されている例がある。⁽¹⁾ 福島県古館遺跡では中世の井戸跡から斎串などとともに切り掛けを2~3箇所施した箸状木製品が出土しているという。石川県西川島遺跡群桜町遺跡では13世紀前半の3号土坑から多量の箸状木製品とともに馬形木製品が出土している。⁽²⁾ また同遺跡群御館遺跡においても3号井戸（13世紀中~後）で多量の箸状木製品とともに鳥形木製品が出土している。これらの箸状木製品は全長が18~25cm、厚さ0.5~1.0cm前後と本遺跡のものとほぼ一致する。また箸状木製品の性格について報告者は1万本近くの箸状木製品が祭具を包含していたことを重視し、「古代の斎串のようにそこが聖なる空間であることを示す祭具であった可能性がある。」⁽³⁾ としている。さらに新潟県馬場屋敷遺跡では木簡（呪符木簡が多い）や人形・舟形・鳥形・刀形などの木製品や独楽や羽子板といった遊具類などとともに箸状の串が出土している。⁽⁴⁾ これらは大部分が廃棄・散乱・浮流したものであるが祭祀遺跡と考えられるものが4基あり、このうち2号としたものは15本の木串で方形に囲まれ灰の上に二枚の幅広い板が置かれ、その上で串頭が焼かれた状況が見られ、その周囲に多量の箸状串・人形・呪札が散乱した区域が見られたという。本遺跡でも箸状木製品に焼痕のある木片が伴うことが多く、またS D228では竹とんぼ状の遊具と考えられる木製品も出土しており、共通点があり興味深い。

以上主な類例を示したがこれらは従来は箸と考えられていたこれらの木製品が祭祀・呪術に関係する可能性が高いことを示している。先述したように本遺跡の出土状況もこれらの遺跡に近いものがあり、同様の性格が推定される。しかしながら確実な出土状況とは言えないので「斎串」であるという断定は避けておく。

(1) 広島考古学研究会 「中世の呪術資料」 第4回中世遺跡研究集会資料 1984

(2) 同上 55頁 四柳嘉章 「西川島遺跡群」

(3) 川上真雄 「馬場屋敷遺跡出土の中世木簡と呪術資料」 『日本歴史』第441号 1985

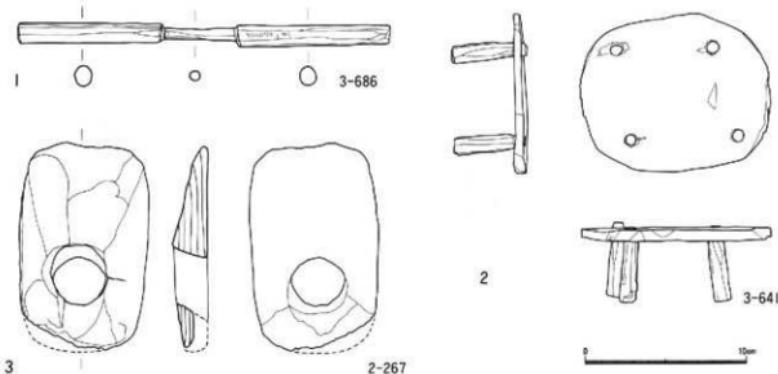


第38図 箸状木製品実測図

6. ミニチュア木製品（第39図）

明らかに、実用には耐えれず、何らかの祭祀的意味で用いられたと考えられる木製品が2点出土している。それぞれ、堅件、四本足の案を模したと思われるミニチュアの木製品である。この2点に加え、ここでは、用途を限定できなかった鉄の身状の木製品も扱いたい。

堅件のミニチュアである1と案のミニチュアである2はともに、宮川3区S R486からの出土である。このS R486は古墳時代後期～鎌倉時代までの旧河道であり、この2点は平安時代末～鎌倉時代の層である。2層から、仏教的文字が書かれた木簡、墨書きされた山茶碗、大量の箸状木製品等と供に出土した。発掘担当者は、これら2層出土の遺物は、「宮川3区を中心とした居住域内で行われた仏教的儀礼」（『大谷川II』P136）で用いられたと考えた。1は、長さ23.1cm 幅1.3cm 厚み1.1cm 握り部分の直径0.65cmを測る。材の樹種はヒノキ。ヒノキ材を用い、削り調整も丁寧であることより、かなり意識的に意味を持って作られたと思われる。用途としては、現在の民俗事例の小正月のツクリモノを可能性として指摘しておきたい。2は案の平板は横11.7cm、縦9.6cmの梢円形をしている。平板に四ヶ所丸い穿孔を1、それぞれに、長さ4.8cm程度の脚を付けている。出土した時、3本の脚が孔に挿入された状態であった。材の樹種はスギである。3は必ずしもミニチュアの木製品とは断定できない。身が長さ12.7cm、幅8.1cmという小型であるということより鉄としての実用には向かない。しかし、柄を装着するためと思われる穿孔は、直径3.5cmあり、柄として十分な太さであること、また樹種がカシであるということより、何らかの道具を想定した方がよいと思われる。今後の資料の比較検討により用途が明らかになることを期待したい。



第39図 ミニチュア木製品実測図

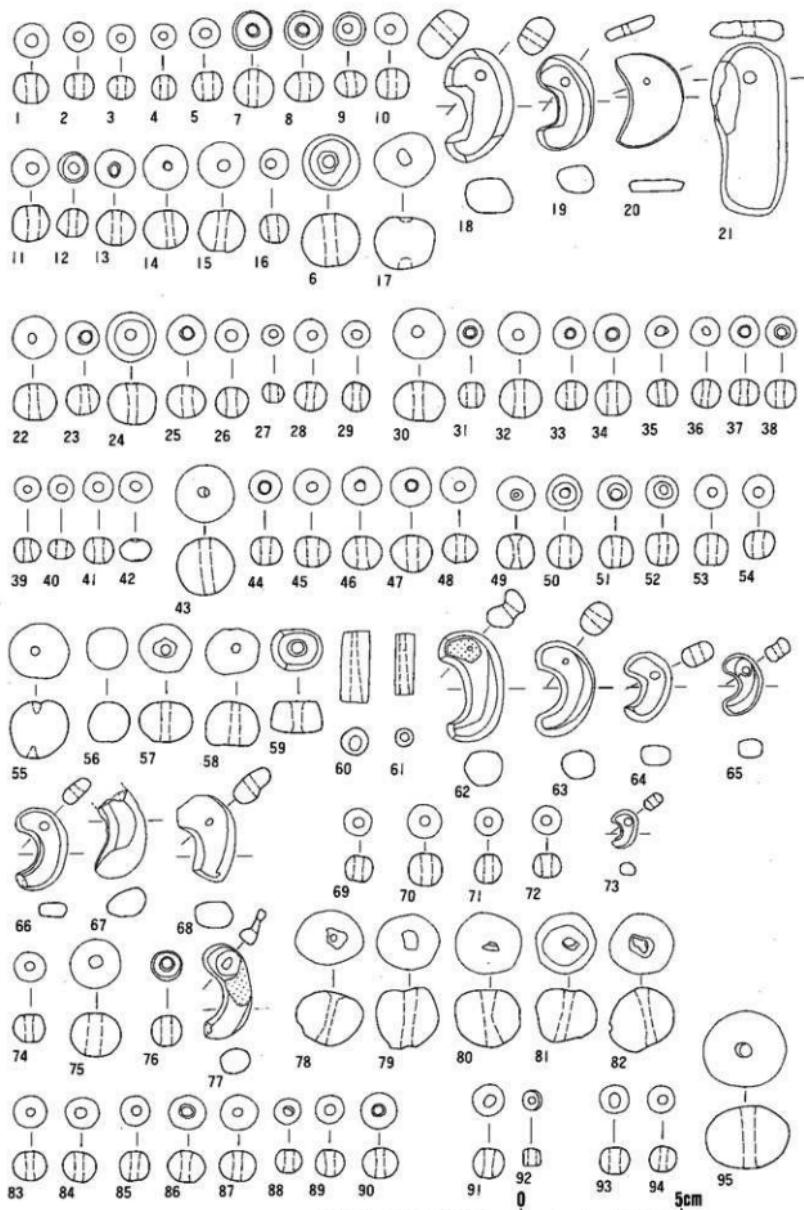
1. 玉類（丸玉・管玉・勾玉・ガラス小玉）（第40図・第41図）

137点の玉類が出土している。その多くは旧大谷川から出土している。丸玉（石製）81点、丸玉（土製）17点、管玉19点、勾玉15点、変形勾玉3点、ガラス小玉2点である。土製のものは丸玉の17点のみである。石製の丸玉は81点と最も多くそのほとんどが黒色または灰黒色を呈する蛇紋岩製のものである。胴径は最も小さいもので0.67cmで最大は1.81cmであるが、0.9~1.3cmほどのものが大多数を占める。勾玉はやはり蛇紋岩製のものが多いが、瑪瑙製のもの（62・63）や水晶製のもの（118）があり、滑石製のもの（68）も認められる。長さは2.0~3.5cmほどのものがほとんどであるが中には73や103のように1.2cmほどと小型のものもみられる。また20のように円板の一部を欠いたような三日月状のものや21のように滑石製で偏平な大型のものもみられる。管玉はそのほとんどが西大谷7区の古墳時代前期の包含層から出土している。旧大谷川からはわずか4点が出土しているにすぎない。ほとんどが碧玉製である。胴径1cm未満のものが多いが117のように胴径1.78cm、長さ3.61cmと大型のものもみられる。土製の丸玉はいずれも粗製で不整球状を呈する。42や55・104・120などは穿孔が途中までのものもあり、56は無孔である。これらのことから土製の丸玉は装身具というより模造品として祭祀等に使用された可能性が高い。

以上本遺跡出土の玉類を概観したが、宮川6区S R312やS R313など旧大谷川内の各流路や低地の包含層などからまとめて出土したものが多くこれらについて少し述べてみたい。

宮川6区S R313はG102・G103グリッドで検出された旧河道屈曲部である。既に『大谷川III』において出土した土器と木製品を紹介している。玉類は石製丸玉16点、土製丸玉1点、勾玉2点、変形勾玉2点が出土した。石製丸玉はほとんどが黒色または灰黒色の蛇紋岩製のものである。胴径は0.79~1.81cmあるが特に6はとびぬけて大きい。勾玉はいずれも調整が難で18は長さ3.53cmで下端から上端に向けて幅が広くなっている。断面は隅丸の長方形を呈し、厚さは1.08cmである。19は長さ3.00cmで断面は長円形を呈し、全体の形状はいわゆるコの字形である。20は厚さ0.35cmの平板状の製品でちょうど有孔円板の1/3程を三日月状に残るように欠いたような形状である。もしはっきりした整形痕がなければ有孔円板が欠損したものと判断されるほどである。ただし滑石製ではなく、蛇紋岩のようである。21は幅1.98cm、長さ5.45cm、厚さ0.63cmの平板状の滑石製品であり20とともに勾玉を意識したものであろう。土製の丸玉は径1.87cmほどで歪んだ球形をしている。これらS R313出土の玉類はその出土状況から伴出した土器の年代と一致する可能性が強く6世紀中葉から7世紀前半と考えられる。

宮川6区S R312はさらに多数を出土した。石製丸玉33点、土製丸玉5点、管玉2点、勾玉7点である。S R312はF103グリッドを中心とする河道屈曲部でありやはり『大谷川III』において出土した土器と木製品・木製品を紹介している。石製丸玉はS R313同様に黒色または灰黒色の蛇紋岩製が大半であるが、42は穿孔が途中まである点注目される。胴径は0.67~1.72cmである。土製丸玉は不整形で雑なつくりである。穿孔が途中までのもの（55）や無孔のもの（56）がある。管玉2点はいずれも碧玉製で片側から穿孔されている。特に61はていねいに研磨されている。勾玉のうち62・63は瑪瑙製である。62はコの字形を呈する。62・63とも片側から穿孔されており、断面は円形に近い。64・65は長さはそれぞれ2.22cm、1.97cmと小型である。断面は隅丸の長方形である。66は長さ2.57cmで偏平な断面をもち、表面調整はきわめて粗い。67は上半を、68は下端1/3程度をそれぞれ欠損する。66は断面が長円形である。67は滑石製



第40図 玉類実測図 1

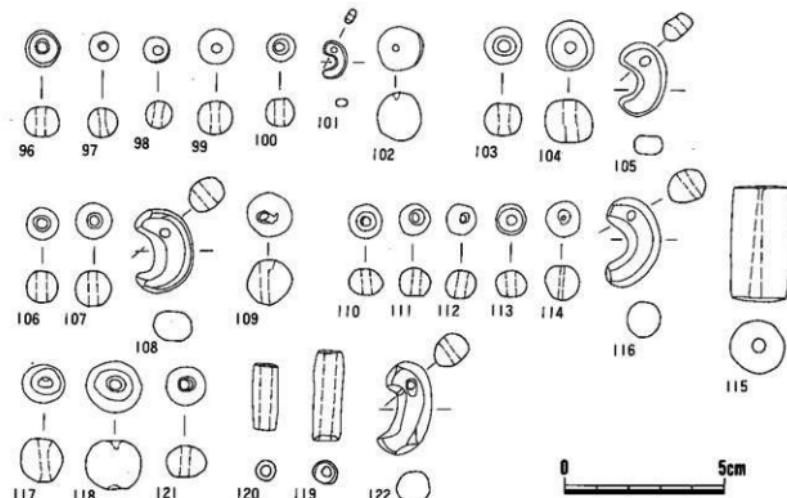
であり、幅1.20cm、厚さ0.82cmとやや偏平で研磨も雑である。S R312は既に報告した通り出土した須恵器は6世紀中葉から11世紀代の年代幅がある。しかしながらこれらの玉類が8世紀以降とは考えられず須恵器のIV期前葉までの時期と考えられ6世紀中葉～7世紀中葉頃のものと推定される。

以上2遺構は同じ河道の屈曲部であり、かなりまとまって出土している。また両遺構とも耳環が出土している。このように旧河道から古墳に副葬されてもおかしくない装身具が多量に出土する例はほとんどなく、本遺跡の祭祀の性格を考える上で重要な点であると考える。この2遺構も含め旧大谷川から出土した玉類は合計で石製丸玉75点、土製丸玉14点、勾玉18点、管玉4点となる。

旧河道以外の出土で特筆すべきものに宮川3区S X479がある。これは宮川3区H96・I96で検出された低湿地内の遺物集中部で須恵器13点と土師器が环を中心にして100点あまりが出土した。これに馬形土製品6点と石製丸玉4点が伴出した。遺物の移動が比較的少ない場所であり、石製丸玉が馬形土製品を伴う祭祀に用いられた可能性が考えられる。なお須恵器から7世紀前葉から中葉の時期と考えられる。

西大谷7区の古墳時代前期(4世紀)の包含層からは13点の管玉と2点のガラス小玉が出土している。管玉は134を除き碧玉であり細身のものが多い。これには片形土器・器台形土器を含む土器群が伴い低湿地にむかう傾斜面上の「水辺の祭祀」の可能性を指摘している(『大谷川II』)。

なおこれらの玉類とは別に一括土器群に伴い滑石製造品も出土しているので別表に示した。旧河道から出土した滑石製の玉類は模造品かどうかの判断がむずかしいので玉類の中に含めた。



第41図 玉類実測図2

第4表 玉類一覧表

番号	地区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	種類	洞径	高さ	孔径	色調	備考
1	宮川6区	G103	S R313	879	石製丸玉	1.06	0.94	0.38	茶色	
2	〃	〃	〃	880	〃	0.93	0.80	0.35	灰黒色	
3	〃	〃	〃	881	〃	0.88	0.71	0.29	〃	
4	〃	〃	〃	991	〃	0.79	0.76	0.25	茶褐色	
5	〃	〃	〃	2062	〃	0.94	0.89	0.34	灰黒色	
6	〃	〃	〃	2109	〃	1.81	1.64	0.40	黒色	
7	〃	〃	〃	2234	〃	1.26	1.18	0.28	〃	
8	〃	〃	〃	2263	〃	1.20	0.92	0.34	〃	
9	〃	G102	〃	2280	〃	1.02	0.79	0.31	〃	
10	〃	G103	〃	2682	〃	1.01	0.95	0.28	〃	
11	〃	G102	〃	2706	〃	1.15	1.11	0.38	〃	
12	〃	〃	〃	2718	〃	0.95	0.86	0.29	〃	
13	〃	〃	〃	2829	〃	1.20	1.10	0.29	淡緑灰色	
14	〃	〃	〃	2835	〃	1.37	1.18	0.24	黒色	
15	〃	〃	〃	2842	〃	1.44	1.30	0.32	灰黒色	
16	〃	〃	〃	2931	〃	0.90	0.87	0.34	黒色	
17	〃	〃	〃	835	土製丸玉	1.87	1.63	0.37	淡茶褐色	
18	〃	G103	〃	2149	勾玉	1.50	3.53	0.33	淡灰緑色	
19	〃	〃	〃	2681	〃	1.12	3.00	0.29	黒色	
20	〃	G102	〃	2823	勾玉形	1.63	2.93	0.19	淡灰緑色	
21	〃	〃	〃	2973	〃	1.98	5.45	0.41	淡黄灰色	滑石製
22	〃	F103	S R312	56	石製丸玉	1.37	1.15	0.24	黒色	
23	〃	〃	〃	282	〃	1.04	0.94	0.24	〃	
24	〃	G103	〃	491	〃	1.47	1.31	0.34	淡灰茶色	
25	〃	〃	〃	492	〃	1.20	1.03	0.33	黒色	
26	〃	F103	〃	493	〃	1.00	0.94	0.37	〃	
27	〃	〃	〃	494	〃	0.67	0.60	0.25	〃	
28	〃	〃	〃	666	〃	0.99	0.88	0.28	〃	
29	〃	〃	〃	708	〃	0.87	0.91	0.28	〃	
30	〃	〃	〃	732	〃	1.57	1.21	0.33	〃	
31	〃	〃	〃	744	〃	0.81	0.77	0.30	〃	
32	〃	〃	〃	746	〃	1.33	1.21	0.32	〃	
33	〃	〃	〃	747	〃	0.98	0.88	0.30	〃	
34	〃	〃	〃	748	〃	1.11	1.07	0.31	〃	
35	〃	〃	〃	772	〃	0.95	0.84	0.27	〃	
36	〃	〃	〃	773	〃	0.89	0.91	0.24	〃	
37	〃	〃	〃	821	〃	0.88	0.80	0.27	〃	
38	〃	〃	〃	822	〃	0.94	0.88	0.30	〃	
39	〃	〃	〃	823	〃	0.81	0.74	0.24	〃	
40	〃	〃	〃	830	〃	0.79	0.62	0.31	〃	

番号	地 区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	種 類	洞 径	高 さ	孔 径	色 調	備 考
41	〃	G103	〃	886	〃	0.93	0.79	0.33	〃	
42	〃	F103	〃	894	〃	0.97	0.67	—	〃	穿孔は途中まで (未製品)
43	〃	〃	〃	999	〃	1.72	1.79	0.34	〃	
44	〃	〃	〃	2002	〃	0.99	0.87	0.36	灰黒色	
45	〃	〃	〃	2032	〃	1.09	0.96	0.38	黄褐色	
46	〃	〃	〃	2063	〃	1.21	1.02	0.32	黑色	
47	〃	〃	〃	2065	〃	1.28	1.16	0.33	灰黒色	
48	〃	〃	〃	2111	〃	1.11	0.89	0.29	黑色	
49	宮川 6 区	F103	S R312	2112	石製丸玉	1.17	1.08	0.34	黑色	
50	〃	〃	〃	2147	〃	1.08	1.05	0.33	〃	
51	〃	〃	〃	2183	〃	1.05	1.02	0.30	灰黒色	
52	〃	〃	〃	2255	〃	1.00	1.02	0.25	〃	
53	〃	〃	〃	2383	〃	1.04	1.01	0.33	〃	
54	〃	〃	〃	2937	〃	0.95	0.87	0.35	〃	
55	〃	G103	〃	218	土製丸玉	1.82	1.80	—	淡茶褐色	穿孔は途中まで
56	〃	〃	〃	219	〃	1.28	1.26	—	〃	無孔 (?)
57	〃	F103	〃	709	〃	1.66	1.28	0.29	〃	
58	〃	〃	〃	824	〃	1.66	1.39	0.25	〃	一部欠損
59	〃	〃	〃	2321-2	〃	1.60	1.00	0.30	〃	
60	〃	G103	〃	2061	管玉	0.88	2.22	0.33	淡緑色	碧玉製片側から の穿孔
61	〃	F103	〃	2355	〃	0.57	1.90	0.27	淡緑色	〃
62	〃	〃	〃	935	勾玉	1.20	3.47	0.28	淡茶色	瑪瑙製
63	〃	〃	〃	2356	〃	1.02	3.00	0.18	茶色	〃
64	〃	〃	〃	2144	〃	0.90	2.22	0.29	黑色	
65	〃	〃	〃	2181	〃	0.73	1.97	0.24	淡緑色	
66	〃	〃	〃	2139	〃	0.90	2.57	0.24	灰黒色	
67	〃	〃	〃	953	〃	1.12	(2.31)	—	〃	上半欠損
68	〃	〃	〃	2360	〃	1.20	(2.74)	0.27	灰白色	滑石製 下端1/3欠損
69	〃	F104	S X339	278	石製丸玉	0.88	0.86	0.31	黑色	
70	〃	〃	〃	279	〃	1.06	1.02	0.34	灰黒色	
71	〃	〃	〃	280	〃	0.86	0.89	0.29	〃	
72	〃	〃	〃	322	〃	0.88	0.75	0.37	黑色	
73	〃	〃	〃	321	勾玉	0.51	1.20	0.25	淡緑灰色	
74	〃	〃	緑灰色砂	2102	石製丸玉	0.97	0.87	0.26	灰黒色	
75	〃	E104	S R 3 1 4	2196	〃	1.57	1.36	0.40	黄灰色	
76	〃	E105	〃	2422	〃	0.96	0.96	0.33	黑色	
77	〃	E106	S R320	872	勾玉	0.97	2.99	0.39	淡緑灰色	一部欠損
78	〃	E104	緑灰色粘土	611	土製丸玉	2.10	1.75	0.24	淡茶褐色	
79	〃	D106	S R320	2457	〃	1.94	1.95	0.44	〃	一部欠損

番号	地 区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	種 類	崩 係	高 さ	孔 径	色 調	備 考
80	〃	D107	S R316	2119	〃	2.04	1.80	0.49	〃	〃
81	〃	〃	〃	2120	〃	1.89	1.65	0.36	淡黄褐色	
82	〃	D105	綠灰色粘土	511 3	〃	1.98	2.08	0.46	淡茶褐色	
83	宮川4区	M94	S R56	767	石製丸玉	1.06	0.91	0.29	茶褐色	
84	〃	〃	〃	863	〃	1.05	0.97	0.30	〃	
85	〃	〃	〃	904	〃	0.94	0.95	0.29	〃	
86	〃	〃	〃	1214	〃	1.17	0.99	0.35	灰黑色	
87	〃	N94	〃	255	〃	1.16	0.96	0.31	茶灰色	
88	〃	〃	〃	642	〃	0.84	0.73	0.29	〃	
89	〃	〃	〃	644	〃	0.90	0.83	0.32	黃灰色	
90	〃	〃	〃	1300	〃	1.13	0.97	0.30	黑色	
91	〃	O93	S R55	2065	〃	0.99	0.95	0.35	灰黑色	
92	〃	N93	〃	1848	小玉	0.54	(0.55)	0.23	黃灰色	一部欠損
93	〃	J 99	暗灰色粘土混	2990	石製丸玉	0.92	0.87	0.35	灰黑色	
			砂礫							
94	〃	〃	〃	3535	〃	0.86	0.81	0.25	黑色	
95	〃	O93	砂礫	251	土製丸玉	2.58	2.00	0.48	淡黄褐色	
96	宮川3区	H96	S X479	391	石製丸玉	1.08	0.94	0.35	灰黑色	
97	〃	〃	〃	1194	〃	0.94	0.93	0.30	淡灰黑色	
98	〃	〃	〃	1110	石製丸玉	0.84	0.87	0.32	黃褐色	
99	〃	〃	〃	1111	〃	1.09	1.06	0.33	灰黑色	
100	〃	H97	S X480	289	〃	0.90	0.87	0.28	〃	
101	〃	J 94	トレンチ内	2745	勾玉	0.34	1.19	0.19	淡綠灰色	
102	〃	I 95	灰黄色粘土	2131	土製丸玉	1.42	1.52	0.20	淡茶褐色	穿孔は途中まで
103	宮川5区	B108	S R201	209-1	石製丸玉	1.15	1.00	0.38	茶褐色	
104	〃	〃	〃	209-2	〃	1.47	1.36	0.39	濃茶灰色	
105	〃	C106	S R202	71	勾玉	0.91	2.30	0.35	黃褐色	
106	宮川2区	I 101	灰色粘土	709	石製丸玉	0.98	0.97	0.30	黑色	
107	〃	〃	〃	710	〃	1.12	1.13	0.24	〃	
108	〃	〃	〃	708	勾玉	1.18	2.61	0.31	〃	
109	〃	〃	〃	711	土製丸玉	1.37	1.42	0.31	淡茶色	
110	水上7区	I 71	砂礫	920	石製丸玉	1.07	0.86	0.30	灰色	
111	〃	I 72	〃	961	〃	0.98	0.92	0.30	淡茶灰色	
112	〃	〃	〃	1216	〃	0.93	0.91	0.29	茶褐色	
113	〃	〃	〃	1236	〃	0.96	0.85	0.31	〃	
114	〃	I 71	〃	919	土製丸玉	1.05	1.10	0.14	淡茶色	
115	〃	I 74?	〃	115	管玉	1.78	3.61	0.43	綠色	碧玉製 片側穿孔
116	〃	H75	〃	921	勾玉	1.03	2.80	0.33	白色	水晶製
117	水上8区	H80	表採	102	土製丸玉	1.36	1.38	0.43	淡茶色	
118	水上10区	E79	旧用水路	41	〃	1.75	1.55	(0.39)	〃	穿孔は途中まで
119	〃	H65	黃褐色粘土	113	管玉	0.91	2.83	0.32	濃黃灰色	
120	〃	E76	S D765	1101	〃	0.79	2.07	0.34	黑灰色	

番号	地 区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	種 類	脛 桨	高 さ	孔 径	色 調	備 考
121	水上11区	B85	S P 558	161	石製丸玉	1.24	1.01	0.32	淡茶褐色	
122	西大谷1区	E43	砂疊	1043	勾玉	1.08	2.96	0.26	黒色	
123	西大谷7区	J 34	暗灰色シルト	2C-183	管玉	0.30	1.08	0.20	濃緑色	碧玉製
124	〃	〃	〃	2C-184	〃	0.48	2.14	0.16	〃	〃
125	〃	〃	〃	2C-185	〃	0.61	2.64	0.15	黄緑色	〃
126	〃	〃	〃	2C-186	〃	0.45	1.92	0.14	〃	〃
127	〃	〃	〃	2C-187	〃	0.49	1.68	0.15	〃	〃
128	〃	〃	〃	2C-188	〃	0.44	2.68	0.24	〃	〃
129	〃	K34	〃	2C-189	〃	0.50	1.65	0.21	〃	〃
130	〃	J 34	〃	2C-190	〃	0.44	1.28	0.16	〃	〃
131	〃	K34	〃	2C-191	〃	0.50	2.60	0.20	〃	〃
132	〃	〃	〃	2C-192	〃	0.47	1.79	0.16	〃	〃
133	〃	〃	〃	2C-193	〃	0.44	2.29	0.17	濃緑色	〃
134	〃	〃	黑色砂	2C-358	〃	0.63	1.47	0.24	灰黒色	
135	〃	J 34	〃	2C-380	〃	0.88	2.16	0.36	淡緑色	碧玉製
136	〃	K34	暗灰色シルト	2C-194	ガラス小玉	0.50	0.32	0.19	青灰色	
137	〃	〃	〃	2C-195	〃	0.45	0.39	0.18	〃	

8. 滑石製模造品（第42図・第43図）

滑石製模造品を含む土器群は2ヶ所で検出されている。水上10区S X624は低湿地に向かう緩斜面上の遺物群で有孔円板6点、剣形品2点、勾玉1点、白玉284点が出土している。土器は土師器のみで故意に破損したような状態で破片が折り重なって出土し、高环と培形土器が高い割合を示した（『大谷川II』）。もう一つは宮川3区S X484で小規模ながら、土師器高环・培形土器・壺などとともに、勾玉、白玉、各1点が出土した（『大谷川III』）。他に水上7区で有孔円板1点と白玉各1点が出土している。

有孔円板7点は全てが双孔である。水上10区S X624では、2が最も大きく、長径2.94cmで、1が最小で、1.94cmである。3～5の3点は長径2.3cmほどで似通っている。孔間距離は比較的長く、中央よりやや周辺よりに穿孔されたものが多い。色調は5が淡茶色のほかは灰緑色を呈する。7は、水上7区の表採資料である。長径3.27cmと大型である。表面調整は大型のもの（2・7）は丁寧であるが、小型の他のものは粗い。

剣形品は2点ともにS X624出土である。2点ともY字の稜を有する片面鎬のタイプで端部に小孔を有する。有孔円板の大型と同じく比較的丁寧な表面調整である。

勾玉はS X624とS X484で各1点出土している。表にみると法量は似通っているが、欠損しているS X484出土品の方が偏平な印象である。断面はどちらも梢円形を呈する。調整は有孔円板、剣形品に比べて丁寧であるが、艶出しなどの仕上げはない。

白玉はそのほとんどが水上10区S X624で出土した。径は0.23cmから0.53cmのものまであるが、0.3～0.4cmのものが多い。断面が丸味を持つものが2/3程度と最も多く、残りの1/3程が側面中央に稜を有する算盤玉に近いタイプである。円筒状で側面が直線的なものはごく少ない。宮川3区S X484の1点は径が0.70cmと他と比べかなり大きい。他に長さ0.7cmほどの管玉と思われる破片もS X624から出土している。

また12は火山岩質のもので、中央に径0.45cmの孔がある。自然遺物の可能性もあるが、一見桃の種子にも似ていて興味深い。

なお年代については、伴出土器から水上10区S X624が4世紀末～5世紀、宮川3区S X484が5世紀代とそれぞれ推定される。

滑石製模造品は5世紀代の祭祀遺物としては最も普遍的であるが、跡あるいは山麓の遺跡または海辺半島などの遺跡や式内社と考えられる遺跡が多い。本遺跡のように低湿地に面した例は少なく重要であると考える。

第5表 滑石製模造品（有孔円板）一覧表

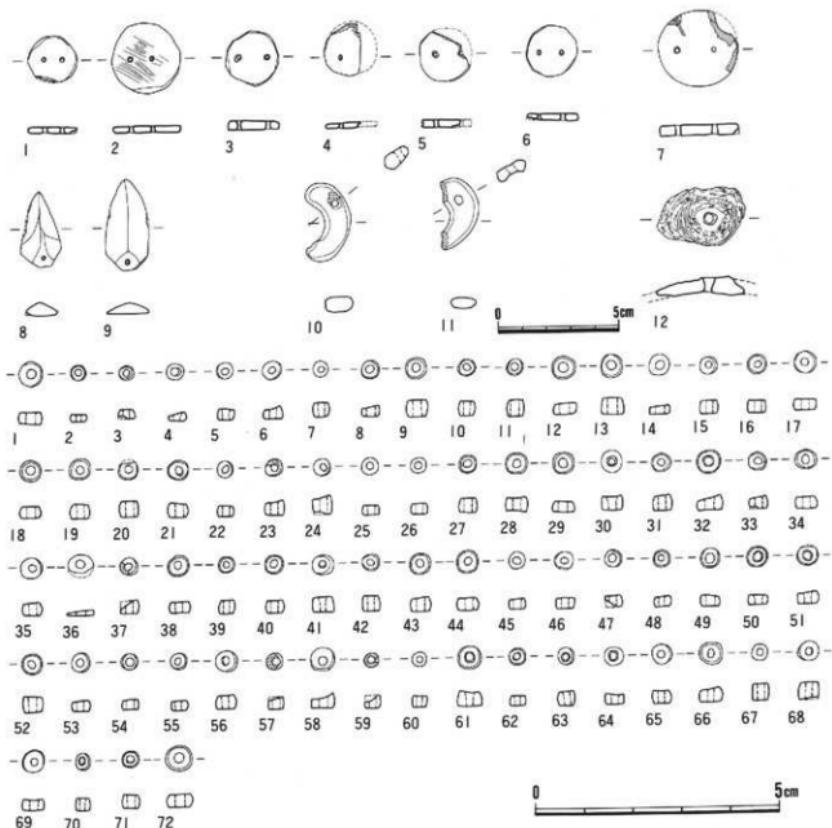
番号	地区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	長径	短径	厚さ	孔径	備考
1	水上10区	G67	S X624 a	3-274	1.94	1.88	0.25	0.14	
2	〃	〃	〃	3-306	2.94	2.82	0.27	0.15	
3	〃	〃	〃	3-832	2.30	2.19	0.41	0.13	
4	〃	〃	〃	3-833	(2.28)	(2.16)	0.25	0.13	
5	〃	G66	S X624 c	3-279	(2.30)	2.16	0.31	0.16	
6	〃	G67	S X624 a	3-228	2.14	2.03	0.28	0.15	
7	水上7区	J69	表採	3-1766	3.27	3.12	0.47	0.19	

第6表 滑石製模造品(刻形)一覧表

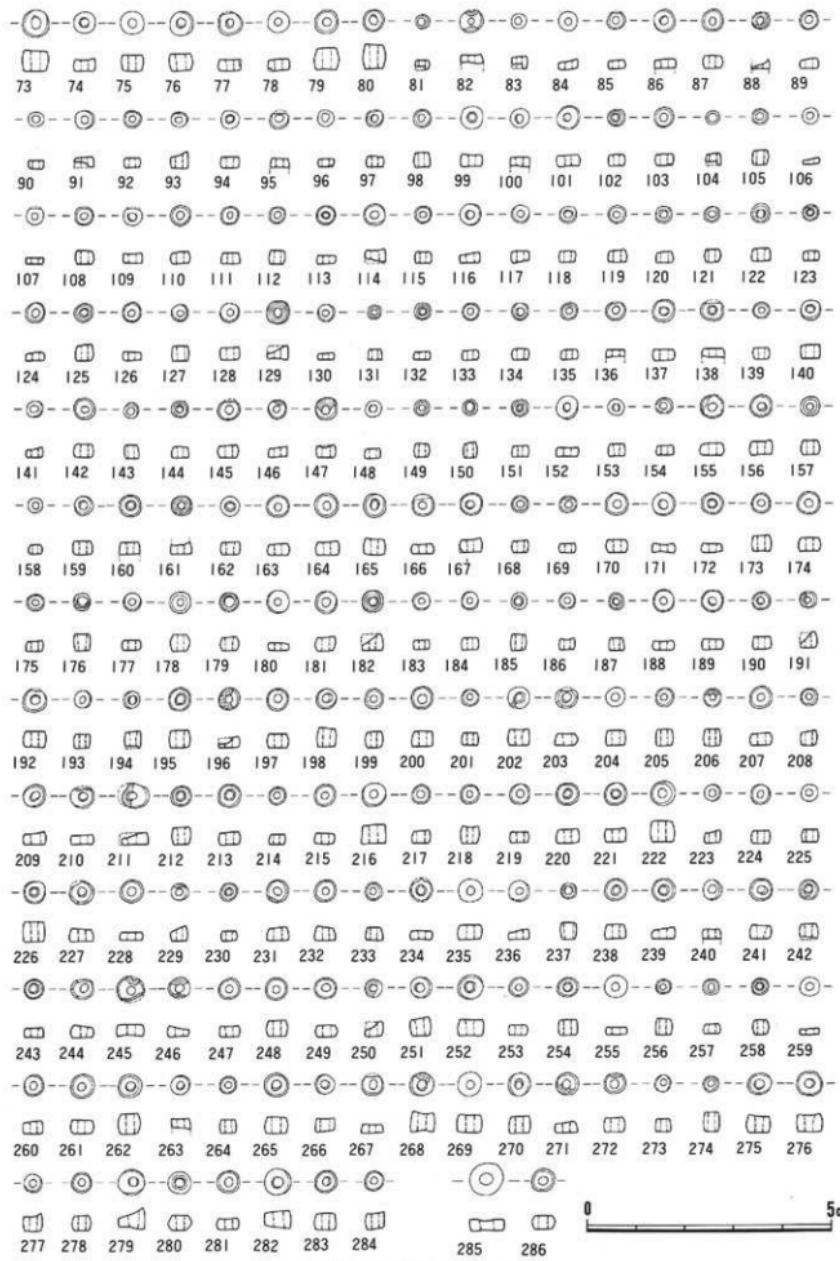
番号	地区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	幅	長さ	厚さ	孔径	備考
1	水上10区	G67	S X624 a	3-611	1.68	3.12	0.52	0.10	
2	〃	〃	〃	3-701	1.75	3.77	0.44	0.13	

第7表 滑石製模造品(勾玉)一覧表

番号	地区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	幅	長さ	厚さ	孔径	備考
1	水上10区	G66	S X624 d	3-280	0.53	1.61	0.30	0.25	
2	宮川3区	I95	S X484	3-572	0.54	(1.46)	0.25	0.21	



第42図 石製模造品実測図1



第43図 石製模造品実測図 2

第8表 滑石製模造品(白玉)一覧表

番号	地区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	径(cm)	厚さ	孔径	備考
1	水上10区	G66・67	S X624(a・b)	3-295	0.46~0.49	0.21	0.19	
2	〃	〃	〃	〃	0.28~0.34	0.16	0.13	
3	〃	〃	〃	〃	0.29~0.32	0.17	0.16	
4	〃	〃	〃	〃	0.35	0.11~0.18	0.16	
5	〃	〃	〃	〃	0.36	0.24	0.18	
6	〃	〃	〃	〃	0.35~0.4	0.19~0.27	0.16	
7	〃	〃	〃	〃	0.33	0.32	0.16	
8	〃	〃	〃	〃	0.33~0.36	0.16~0.23	0.17	
9	〃	〃	〃	〃	0.36~0.44	0.34	0.19	
10	〃	〃	〃	〃	0.29~0.35	0.31	0.14	
11	〃	〃	〃	〃	0.28~0.34	0.35	0.14	
12	〃	〃	〃	〃	0.44~0.47	0.23	0.22	
13	〃	〃	〃	〃	0.39~0.46	0.35	0.20	
14	〃	〃	〃	〃	0.43	0.13~0.19	0.21	
15	〃	〃	〃	〃	0.33~0.35	0.27	0.13	
16	〃	〃	〃	〃	0.34~0.38	0.26	0.15	
17	〃	〃	〃	〃	0.40~0.46	0.25	0.17	
18	〃	〃	〃	〃	0.35~0.43	0.26	0.17	
19	〃	〃	〃	〃	0.35~0.44	0.31	0.17	
20	〃	〃	〃	〃	0.34~0.42	0.35	0.16	
21	〃	〃	〃	〃	0.36~0.43	0.24~0.29	0.17	
22	〃	〃	〃	〃	0.32~0.35	0.24	0.16	
23	〃	〃	〃	〃	0.32~0.35	0.25~0.34	0.16	
24	〃	〃	〃	〃	0.32~0.37	0.38	0.15	
25	〃	〃	〃	〃	0.34	0.20	0.15	
26	〃	〃	〃	〃	0.34	0.23	0.16	
27	〃	〃	〃	〃	0.30~0.35	0.30	0.17	
28	〃	〃	〃	〃	0.39~0.46	0.32	0.16	
29	〃	〃	〃	〃	0.36~0.45	0.23	0.19	
30	〃	〃	〃	〃	0.45	0.30	0.17	
31	〃	〃	〃	〃	0.34~0.40	0.31	0.16	
32	〃	〃	〃	〃	0.45~0.50	0.20~0.30	0.19	
33	〃	〃	〃	〃	0.33~0.36	0.28	0.16	
34	〃	〃	〃	〃	0.36~0.45	0.25	0.15	
35	〃	〃	〃	〃	0.40~0.46	0.27	0.15	
36	〃	〃	〃	〃	0.52	0.13	0.18	
37	〃	〃	〃	〃	0.33~0.37	0.30	0.17	
38	〃	〃	〃	〃	0.37~0.44	0.24	0.14	
39	〃	〃	〃	〃	0.27~0.32	0.28	0.13	
40	〃	〃	〃	〃	0.31~0.37	0.26	0.15	
41	〃	〃	〃	〃	0.37~0.45	0.31	0.12	
42	〃	〃	〃	〃	0.31~0.33	0.34	0.15	
43	〃	〃	〃	〃	0.35~0.41	0.30	0.16	
44	〃	〃	〃	〃	0.38~0.44	0.25	0.15	
45	〃	〃	〃	〃	0.33	0.15	0.22	
46	〃	〃	〃	〃	0.35~0.39	0.23	0.16	
47	〃	〃	〃	〃	0.32~0.34	0.24	0.17	
48	〃	〃	〃	〃	0.29~0.33	0.20	0.13	
49	〃	〃	〃	〃	0.33~0.40	0.19~0.22	0.17	
50	〃	〃	〃	〃	0.37~0.43	0.19	0.16	
51	〃	〃	〃	〃	0.39~0.43	0.25	0.18	
52	〃	〃	〃	〃	0.37~0.41	0.34	0.14	
53	水上10区	G66・63	S X624(a・b)	3-295	0.33~0.36	0.22	0.15	

番号	地 区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	径 (cm)	厚 さ	孔 深	備 考
54	〃	〃	〃	〃	0.28~0.33	0.20	0.16	
55	〃	〃	〃	〃	0.30~0.34	0.10	0.20	
56	〃	〃	〃	〃	0.38~0.45	0.29	0.15	
57	〃	〃	〃	〃	0.23	0.22	0.15	
58	〃	〃	〃	〃	0.46~0.50	0.19~0.28	0.17	
59	〃	〃	〃	〃	0.31	0.26	0.14	
60	〃	〃	〃	〃	0.28	0.23	0.12	
61	〃	〃	〃	〃	0.39~0.47	0.30	0.16	
62	〃	〃	〃	〃	0.27~0.32	0.20	0.12	
63	〃	〃	〃	〃	0.30~0.33	0.29	0.12	
64	〃	〃	〃	〃	0.38	0.21	0.15	
65	〃	〃	〃	〃	0.36~0.42	0.26	0.15	
66	〃	〃	〃	〃	0.36~0.46	0.24~0.29	0.13	
67	〃	〃	〃	〃	0.32	0.34	0.14	
68	〃	〃	〃	〃	0.36~0.42	0.35	0.14	
69	〃	〃	〃	〃	0.39~0.46	0.22	0.15	
70	〃	〃	〃	〃	0.26~0.31	0.26	0.12	
71	〃	〃	〃	〃	0.28~0.34	0.28	0.15	
72	〃	〃	〃	〃	0.45~0.53	0.27	0.20	
73	〃	G66	S X624(c - d)	3-280	0.46~0.53	0.43	0.19	
74	〃	〃	〃	〃	0.46	0.25	0.16	
75	〃	〃	〃	〃	0.50	0.32	0.18	
76	〃	〃	〃	〃	0.42~0.48	0.34	0.17	
77	〃	〃	〃	〃	0.14~0.47	0.22	0.13	
78	〃	〃	〃	〃	0.46	0.23	0.17	
79	〃	〃	〃	〃	0.39~0.46	0.46	0.16	
80	〃	〃	〃	〃	0.37~0.45	0.52	0.19	
81	〃	〃	〃	〃	0.25~0.30	0.19	0.14	
82	〃	〃	〃	〃	0.44~0.48	欠損	0.13	
83	〃	〃	〃	〃	0.31	0.24	0.14	
84	〃	〃	〃	〃	0.39	0.15~0.19	0.14	
85	〃	〃	〃	〃	0.30~0.37	0.16	0.14	
86	〃	〃	〃	〃	0.38~0.45	欠損	0.14	
87	〃	〃	〃	〃	0.36~0.42	0.27	0.16	
88	〃	〃	〃	〃	0.33~0.36	欠損	0.13	
89	〃	〃	〃	〃	0.33~0.38	0.22	0.16	
90	〃	〃	〃	〃	0.32	0.16	0.15	
91	〃	〃	〃	〃	0.35~0.37	0.21	0.14	
92	〃	〃	〃	〃	0.30~0.37	0.21	0.14	
93	〃	〃	〃	〃	0.32~0.36	0.23~0.35	0.14	
94	〃	〃	〃	〃	0.37	0.25	0.16	
95	〃	〃	〃	〃	0.36~0.40	欠損	0.15	
96	〃	〃	〃	〃	0.30	0.18	0.15	
97	〃	〃	〃	〃	0.29~0.35	0.24	0.12	
98	〃	〃	〃	〃	0.29~0.35	0.30	0.13	
99	〃	〃	〃	〃	0.46	0.27	0.17	
100	〃	〃	〃	〃	0.40	欠損	0.16	
101	〃	〃	〃	〃	0.43~0.48	0.24	0.16	
102	〃	〃	〃	〃	0.31~0.34	0.24	0.12	
103	〃	〃	〃	〃	0.33~0.39	0.25	0.17	
104	〃	〃	〃	〃	0.30	0.26	0.20	
105	〃	〃	〃	〃	0.27~0.33	0.31	0.15	
106	〃	〃	〃	〃	0.34	0.07~0.12	0.15	
107	水上10区	G66	S X624(c - d)	3-280	0.37	0.14	0.15	
108	〃	〃	〃	〃	0.32~0.38	0.29	0.17	

番号	地区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	径(cm)	厚さ	孔径	備考
109	〃	〃	〃	〃	0.39	0.22	0.18	
110	〃	〃	〃	〃	0.36~0.42	0.26	0.15	
111	〃	〃	〃	〃	0.30~0.37	0.23	0.12	
112	〃	〃	〃	〃	0.28~0.35	0.28	0.15	
113	〃	〃	〃	〃	0.33~0.40	0.18	0.15	
114	〃	〃	〃	〃	0.42	欠損	0.16	
115	〃	〃	〃	〃	0.29~0.34	0.24	0.14	
116	〃	〃	〃	〃	0.39~0.44	0.17~0.23	0.17	
117	〃	〃	〃	〃	0.33~0.36	0.20~0.25	0.15	
118	〃	〃	〃	〃	0.32~0.34	0.24	0.16	
119	〃	〃	〃	〃	0.31~0.37	0.25	0.16	
120	〃	〃	〃	〃	0.30~0.35	0.23	0.18	
121	〃	〃	〃	〃	0.26~0.34	0.28	0.14	
122	〃	〃	〃	〃	0.30~0.38	0.27	0.16	
123	〃	〃	〃	〃	0.27~0.33	0.21	0.15	
124	〃	〃	〃	〃	0.34~0.37	0.18	0.16	
125	〃	〃	〃	〃	0.31~0.37	0.34	0.15	
126	〃	〃	〃	〃	0.33~0.37	0.16~0.18	0.14	
127	〃	〃	〃	〃	0.30~0.32	0.30	0.15	
128	〃	〃	〃	〃	0.37	0.26	0.15	
129	〃	〃	〃	〃	0.40~0.44	欠損	0.15	
130	〃	〃	〃	〃	0.30~0.34	0.16	0.14	
131	〃	〃	〃	〃	0.23~0.28	0.23	0.12	
132	〃	〃	〃	〃	0.29~0.34	0.18	0.13	
133	〃	〃	〃	〃	0.30~0.36	0.20	0.15	
134	〃	〃	〃	〃	0.31~0.34	0.24	0.15	
135	〃	〃	〃	〃	0.29~0.36	0.20	0.15	
136	〃	〃	〃	〃	0.37~0.41	欠損	0.16	
137	〃	〃	〃	〃	0.39~0.44	0.23	0.19	
138	〃	〃	〃	〃	0.42~0.48	欠損	0.17	
139	〃	〃	〃	〃	0.30~0.36	0.22	0.14	
140	〃	〃	〃	〃	0.38	0.29	0.16	
141	〃	〃	〃	〃	0.30~0.35	0.17~0.24	0.17	
142	〃	〃	〃	〃	0.35~0.42	0.27	0.17	
143	〃	〃	〃	〃	0.28~0.31	0.28	0.18	
144	〃	〃	〃	〃	0.28~0.34	0.24	0.13	
145	〃	〃	〃	〃	0.39~0.46	0.26	0.15	
146	〃	〃	〃	〃	0.36	0.21	0.16	
147	〃	〃	〃	〃	0.40~0.44	0.23	0.16	
148	〃	〃	〃	〃	0.34	0.20	0.15	
149	〃	〃	〃	〃	0.26~0.31	0.27	0.16	
150	〃	〃	〃	〃	0.24~0.29	0.29~0.31	0.15	
151	〃	〃	〃	〃	0.30~0.34	0.22	0.14	
152	〃	〃	〃	〃	0.42	0.18	0.14	
153	〃	〃	〃	〃	0.31	0.26	0.12	
154	〃	〃	〃	〃	0.30~0.36	0.18	0.15	
155	〃	〃	〃	〃	0.43~0.48	0.24	0.17	
156	〃	〃	〃	〃	0.36~0.45	0.27	0.17	
157	〃	〃	〃	〃	0.30~0.39	0.29	0.15	
158	〃	〃	〃	〃	0.29	0.20	0.13	
159	〃	〃	〃	〃	0.34~0.38	0.28	0.15	
160	〃	〃	〃	〃	0.36~0.44	欠損	0.16	
161	水上10区	G66	S X624(c+d)	3-280	0.39~0.42	欠損	0.14	
162	〃	〃	〃	〃	0.39	0.24	0.19	
163	〃	〃	〃	〃	0.41~0.47	0.24	0.15	

番号	地区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	径(cm)	厚さ	孔径	備考
164	〃	〃	〃	〃	0.44~0.50	0.29	0.14	
165	〃	〃	〃	〃	0.39~0.47	0.33	0.16	
166	〃	〃	〃	〃	0.41~0.47	0.19	0.17	
167	〃	〃	〃	〃	0.41~0.47	0.29	0.18	
168	〃	〃	〃	〃	0.30~0.35	0.27	0.16	
169	〃	〃	〃	〃	0.31~0.36	0.21	0.16	
170	〃	〃	〃	〃	0.41~0.48	0.28	0.17	
171	〃	〃	〃	〃	0.45~0.48	0.19	0.17	
172	〃	〃	〃	〃	0.39~0.44	0.18	0.17	
173	〃	〃	〃	〃	0.34~0.39	欠損	0.16	
174	〃	〃	〃	〃	0.40~0.46	0.27	0.16	
175	〃	〃	〃	〃	0.30~0.34	0.21	0.15	
176	〃	〃	〃	〃	0.31~0.34	0.34	0.20	
177	〃	〃	〃	〃	0.31~0.37	0.21	0.15	
178	〃	〃	〃	〃	0.32~0.45	0.34	0.15	
179	〃	〃	〃	〃	0.34~0.39	0.29	0.21	
180	〃	〃	〃	〃	0.43~0.47	0.13~0.16	0.16	
181	〃	〃	〃	〃	0.39~0.44	0.27~0.30	0.19	
182	〃	〃	〃	〃	0.38~0.45	0.35	0.17	
183	〃	〃	〃	〃	0.31~0.34	0.20	0.13	
184	〃	〃	〃	〃	0.32~0.36	0.26	0.14	
185	〃	〃	〃	〃	0.32	0.33	0.14	
186	〃	〃	〃	〃	0.29~0.32	0.26	0.15	
187	〃	〃	〃	〃	0.27~0.31	0.25	0.14	
188	〃	〃	〃	〃	0.40~0.45	0.19	0.17	
189	〃	〃	〃	〃	0.39~0.47	0.24	0.17	
190	〃	〃	〃	〃	0.32~0.38	0.27	0.15	
191	〃	〃	〃	〃	0.30~0.35	0.33	0.14	
192	〃	〃	〃	〃	0.43~0.49	0.35	0.16	
193	〃	〃	〃	〃	0.33~0.35	0.30	0.14	
194	〃	〃	〃	〃	0.30~0.34	0.35	0.15	
195	〃	〃	〃	〃	0.41~0.46	0.35	0.18	
196	〃	〃	〃	〃	0.39~0.44	0.23	0.16	
197	〃	〃	〃	〃	0.39~0.44	0.29	0.18	
198	〃	〃	〃	〃	0.37~0.40	0.40	0.17	
199	〃	〃	〃	〃	0.30~0.39	0.32	0.15	
200	〃	〃	〃	〃	0.39~0.44	0.32	0.18	
201	〃	〃	〃	〃	0.30~0.35	0.26	0.13	
202	〃	〃	〃	〃	0.44	0.34	0.18	
203	〃	〃	〃	〃	0.36~0.47	0.25	0.18	
204	〃	〃	〃	〃	0.40	0.30	0.18	
205	〃	〃	〃	〃	0.32~0.37	0.34	0.14	
206	〃	〃	〃	〃	0.29~0.36	0.33	0.12	
207	〃	〃	〃	〃	0.39~0.45	0.24	0.16	
208	〃	〃	〃	〃	0.30~0.35	0.26~0.32	0.16	
209	〃	〃	〃	〃	0.41~0.46	0.22~0.27	0.19	
210	〃	〃	〃	〃	0.45~0.48	0.18	0.17	
211	〃	〃	〃	〃	0.48~0.52	0.24	0.15	
212	〃	〃	〃	〃	0.35~0.42	0.35	0.18	
213	〃	〃	〃	〃	0.40~0.46	0.27	0.18	
214	〃	〃	〃	〃	0.29~0.35	0.23	0.14	
215	水上10区	G66	SX624(c+d)	3-280	0.38~0.44	0.23	0.15	
216	〃	〃	〃	〃	0.48~0.52	0.40	0.20	
217	〃	〃	〃	〃	0.33~0.40	0.24~0.29	0.18	
218	〃	〃	〃	〃	0.33~0.38	0.38	0.14	

番号	地区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	径(cm)	厚さ	孔 径	備 考
219	〃	〃	〃	〃	0.35~0.40	0.23	0.17	
220	〃	〃	〃	〃	0.39~0.47	0.30	0.15	
221	〃	〃	〃	〃	0.38~0.45	0.27	0.17	
222	〃	〃	〃	〃	0.40~0.50	0.43	0.18	
223	〃	〃	〃	〃	0.32~0.34	0.20~0.26	0.17	
224	〃	〃	〃	〃	0.34~0.40	0.27	0.15	
225	〃	〃	〃	〃	0.35	0.28	0.18	
226	〃	〃	〃	〃	0.43~0.46	0.42	0.18	
227	〃	〃	〃	〃	0.44~0.52	0.27	0.17	
228	〃	〃	〃	〃	0.41~0.47	0.17	0.18	
229	〃	〃	〃	〃	0.31~0.34	0.18~0.32	0.13	
230	〃	〃	〃	〃	0.30~0.34	0.21	0.13	
231	〃	〃	〃	〃	0.38~0.45	0.30	0.19	
232	〃	〃	〃	〃	0.39~0.44	0.26~0.30	0.15	
233	〃	〃	〃	〃	0.29~0.34	0.29	0.15	
234	〃	〃	〃	〃	0.43~0.46	0.20	0.16	
235	〃	〃	〃	〃	0.51	0.30	0.17	
236	〃	〃	〃	〃	0.40~0.44	0.16~0.22	0.16	
237	〃	〃	〃	〃	0.27~0.33	0.36	0.18	
238	〃	〃	〃	〃	0.39~0.46	0.31	0.15	
239	〃	〃	〃	〃	0.40~0.46	0.19~0.25	0.17	
240	〃	〃	〃	〃	0.36~0.40	欠損	0.17	
241	〃	〃	〃	〃	0.43~0.45	0.30	0.17	
242	〃	〃	〃	〃	0.34~0.40	0.32	0.16	
243	〃	〃	〃	〃	0.35~0.40	0.21	0.17	
244	〃	〃	〃	〃	0.39~0.48	0.22~0.28	0.17	
245	〃	〃	〃	〃	0.53~0.58	0.25	0.17	
246	〃	〃	〃	〃	0.42~0.45	0.13~0.23	0.17	
247	〃	〃	〃	〃	0.40~0.43	0.24	0.16	
248	〃	〃	〃	〃	0.39~0.45	0.35	0.17	
249	〃	〃	〃	〃	0.39~0.44	0.23	0.17	
250	〃	〃	〃	〃	0.36	0.30	0.16	
251	〃	〃	〃	〃	0.40~0.45	0.32~0.37	0.18	
252	〃	〃	〃	〃	0.48~0.52	0.34	0.18	
253	〃	〃	〃	〃	0.33~0.40	0.21	0.13	
254	〃	〃	〃	〃	0.38~0.42	0.33	0.17	
255	〃	〃	〃	〃	0.47	0.17	0.17	
256	〃	〃	〃	〃	0.27~0.32	0.34	0.15	
257	〃	〃	〃	〃	0.28~0.33	0.22	0.16	
258	〃	〃	〃	〃	0.28~0.33	0.32	0.13	
259	〃	〃	〃	〃	0.40	0.15	0.17	
260	〃	〃	〃	〃	0.36~0.40	0.23~0.28	0.15	
261	〃	〃	〃	〃	0.40~0.48	0.30	0.16	
262	〃	〃	〃	〃	0.38~0.48	0.42	0.17	
263	〃	〃	〃	〃	0.37~0.41	欠損	0.16	
264	〃	〃	〃	〃	0.29~0.34	0.28	0.14	
265	〃	〃	〃	〃	0.41~0.50	0.34	0.21	
266	〃	〃	〃	〃	0.35~0.40	0.25~0.30	0.20	
267	〃	〃	〃	〃	0.40~0.47	0.17	0.15	
268	〃	〃	〃	〃	0.46~0.49	0.44	0.18	
269	水上10区	G66	S X 624(c · d)	2-280	0.47	0.38	0.18	
270	〃	〃	〃	〃	0.40~0.45	0.35	0.15	
271	〃	〃	〃	〃	0.40~0.46	0.23	0.18	
272	〃	〃	〃	〃	0.37~0.44	0.30	0.16	
273	〃	〃	〃	〃	0.28~0.34	0.25	0.13	

番号	地区	グリッド	造構・層位	遺物番号	径(cm)	厚さ	孔径	備考
274	II	II	II	II	0.29~0.31	0.40	0.15	
275	II	II	II	II	0.42~0.47	0.33~0.37	0.19	
276	II	II	II	II	0.47~0.53	0.36	0.18	
277	II	II	II	II	0.35~0.37	0.28~0.37	0.16	
278	II	II	II	II	0.33~0.40	0.30	0.17	
279	II	II	II	II	0.53	0.13~0.45	0.20	
280	II	II	II	II	0.30~0.46	0.32	0.21	
281	II	II	II	II	0.40~0.46	0.24	0.18	
282	II	II	II	II	0.52~0.54	0.25~0.37	0.22	
283	II	II	S X 624(d)	II	0.38~0.47	0.35	0.17	
284	II	II	II	II	0.35~0.40	0.33	0.16	
285	宮川3区	I 95	S X 4 8 4	3-390	0.70	0.23	0.29	
286	水上7区	J 74	茶黒色粘土層	3-1683	0.38~0.46	0.26	0.20	

9. ト骨（第44図）

旧大谷川から3点の出土をみた。いずれも西大谷1・2区から出土している。このうち1点は肩胛骨を用い、他の2点は肋骨を用いている。3点ともシカと推定される。ト骨について神沢勇一氏の研究⁽¹⁾が知られ、その研究は緒についたばかりという感が強い。ここでは神沢氏の研究成果をふまえ本遺跡のト骨を観察することとする。

神沢によればト骨は全国22遺跡73例の出土が確認され、その年代は弥生時代前期から古墳時代・奈良時代へとよどんでいる。また形式的には第I～第V形式に分類している。各形式の特徴を神沢氏の「弥生時代・古墳時代および奈良時代のト骨・ト甲について」から抜き出すと次のようになる。

第I形式=整形を全く施さないで素材の片面に点状に焼灼を加えたもの。

第II形式=素材の表面の一部を鋭利な刃物で僅かに削り、その部分に点状の焼灼を加えたもの。

第III形式=素材の片面を大きく削り平面が不整円形を呈する粗雑な鑽を彫りこんで鑽の内側に焼灼を加えたもの。

第IV形式=整形した素材の片面に平面が円形を呈する整美な鑽を設け、鑽の内側に焼灼を加えたもの。

第V形式=素材をおもに切削によって整形し、片面に平面が長方形を呈する鑽を彫りこみ、その内面に焼灼を加えたもの。

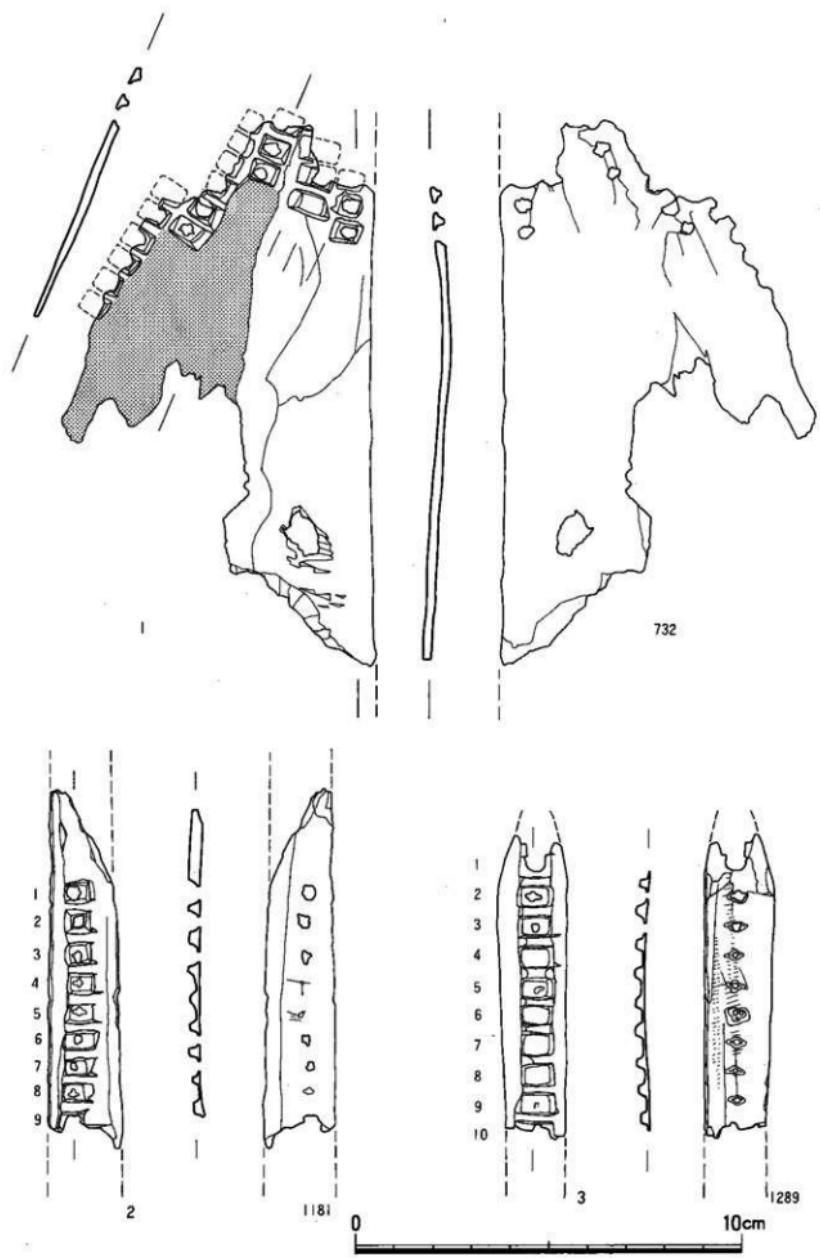
これらは第II形式～第IV形式～第III形式（第I形式）～第V形式という推移をたどるという。

さて本遺跡出土の3点はいずれも方形の鑽を有し、第V形式にあたる。以下にこれら3点について詳述する。

1は肩胛骨を用いている。欠損のため全体の形状は明かではないが、残存長14.0cm、最大幅8.0cmである。表裏を平坦に整形され、厚さ0.3cmほどに削られている。方形鑽は図の上方に集中し、5列認められた。右側2列と左側3列は方向をほぼ同じにしているようではあるが、全体に上方から下方へ放射状になっているようである。21個の鑽が認められたが下端は欠損しておりまだ多いようである。方形鑽の全体の形状がわかるものは7個だけで0.5×0.7cmほどである。このうち6個は焼け抜けている。右側から2列目の1個は底面がそのまま残り、焼灼を受けているかどうか判然としない。

2・3は肋骨である。2は残存長9.2cmで最大幅1.9cmである。骨を縦位に半載し、半載した面に0.5×0.7cmほどの方形鑽を彫りこんでいる。反対側の面はていねいに整形してあるものの両端は骨本来の弯曲を残している。方形鑽の内面底部に焼灼を加えているようでそのほとんどが焼け抜けているが、4の鑽は反対面にわずかに亀裂が見える程度で焼け抜けてはいない。

3は2とほぼ同じ手法を示すが、こちらは焼け抜けていない鑽が多い。10の方形鑽のうち焼け抜けているのは1・2・3・10であり、残りの4～9は鑽の底面がそのまま残る。奥味深いのは焼け抜けていないこれらの鑽の反対側の面に明確な焼灼痕が認められていることである。4・6・7・8などは鑽の底面には外見上焼灼痕は認められないが、反対面は明確に認められている。一見反対側の面から焼灼が加えられたようにも見えるがいずれも鑽の中央に位置していることから反対側から焼灼されたとは考え難い。またこれらの焼灼痕のうち6・7・9は十字形にちかい。2のト骨の4・5・8なども十字形に近い焼灼痕が認められる。類例は伊場遺跡、宮城県裏杉入遺跡に認められ、伊場遺跡例は奈良時代、裏



第44図 ト骨実測図

杉入遺跡例は古墳時代後期であるという。⁽²⁾

以上本遺跡のト骨を概観したが、先述したように旧大谷川からの出土であり、他の祭祀遺物、大量の土器とともに出土しており、伴出土器の年代幅が大きく年代推定は困難である。そこで神沢氏の考え方を基に年代を推定してみたい。神沢氏の分類によれば本遺跡の3例は第V形式にあたることは前に述べた。第V式形式は氏によればその最も新しい形式で、8例のうち5例が古墳時代後期、3例が奈良時代であるという。⁽³⁾ とすれば本遺跡の3例の伴出土器の幅が6世紀代から平安時代であることを考えれば、古墳時代後期～奈良時代と考えても差し支えないと思われる。十字形を呈する灼痕もこの年代と合致する。

さて本遺跡のト骨は古墳時代後期～奈良時代にかけて河川内に投棄されたということになる。神沢氏によれば弥生時代に水田跡に伴う水路遺構中から出土した例はあるようであるが、旧河道からの出土例がないようである。⁽⁴⁾ また他遺跡の例もト骨を特別な注意や関心を払って扱われたものはないようである。しかし、近年奈良県坪井遺跡や唐古・鍵遺跡において壺・高坏などの土器や他の動物の骨・ミニチュア土器などとともに土壌内より出土しており、その性格が注目され始めている。本遺跡例も類例の増加を待つて慎重な検討が必要となろう。

(1) 神沢勇一 「弥生時代・古墳時代および奈良時代のト骨・ト甲について」『鞍馬史学』38号 1976

神沢勇一 「ト骨」『弥生文化の研究』8 1987

(2) (1)に同じ

(3) (1)に同じ

(4) (1)に同じ

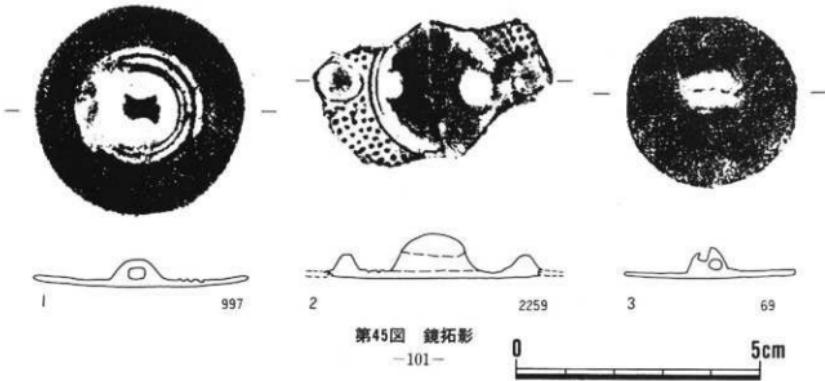
10. 鏡・儀鏡・銅鏡（第45図・第46図）

(1) 鏡・儀鏡

銅鏡が3面（1～3）、土製模造鏡が1面（4）出土している。1は西大谷7区において重機で表土除去中に法面より出土した。直径4.4cm、厚さ1.0～1.5mmの小鏡である。表面は緩い曲線を描き凸面を呈する。裏面は摩耗のため明瞭ではないが重圓文状の文様が認められる。同型のものが焼津市小深田遺跡第7地点D-23号住居址から出土している。こちらは直径3.9cmとやや小さめであるが、文様・全体の形状はよく似ている。小深田遺跡では古式土師器が伴っており、本遺跡のものも同地区で出土した古式土師器群および壘玉製管玉などと関係する可能性も十分に考えられる。小野真一氏は重圓素文鏡として祭祀専用の可能性を指摘し、兵庫尼崎市下坂部遺跡・和歌山市北田井遺跡・奈良県見田大沢古墳の出土例を示されている。口径は3.8cm～4.5cm、年代は4世紀ということで、本遺跡例・焼津市小深田遺跡例とも似通っている。

2は宮川6区の旧河道S R313から出土した。鋤及び内区の一部しか残存していない。鋤座径は約2.6cm、鋤高は0.93cmであるが摩耗が激しい。内区には径0.6cm弱の乳を配しており、周囲に多数の珠文を施している。珠文鏡は東京都武蔵伊興遺跡や静岡県南豆洗田遺跡・神奈川県勝坂などで出土している。いずれも珠文と鋸歯文を持ち、武蔵伊興遺跡・南豆洗田遺跡では滑石製品・土製品等の祭祀遺物が伴出しており、勝坂でも石製模造品が伴出している。本遺跡例は大きめの乳を有している点が他遺跡とは異なるが、2が出土したS R313は多くの須恵器・土師器とともに勾玉・丸玉・滑石製勾玉・耳環などが出土しており祭祀的な色彩が強い。特に神奈川県勝坂例は周辺の地形や式内有鹿神社との関係で、5世紀前半から6世紀にかけて水霊をまつた遺跡と考えられており大変興味深い。

3は宮川5区の旧河道S R201から出土している。直径3.5cm、厚さ0.13cmの縁をつくり出さない粗製の素文小鏡である。鏡芯からややはざれ幅0.8cm、厚さ0.1cm、高さ0.45cmの板状の鋤がつき径0.2cmの孔が中央よりはずれてついている。周縁をつくる素文鏡は静岡県内では熱海上多賀宮脇遺跡、下田市洗田遺跡で出土しているが、平面的なものは初めてである。奈良県山ノ神遺跡で平面的なものが出土しているが、近年平城京跡や石川県寺家遺跡などで周縁をもつ唐式鏡を模した素文鏡と縁がない平面的な素文鏡が共に出土しており、本遺跡例も奈良時代以降となる可能性が高い。

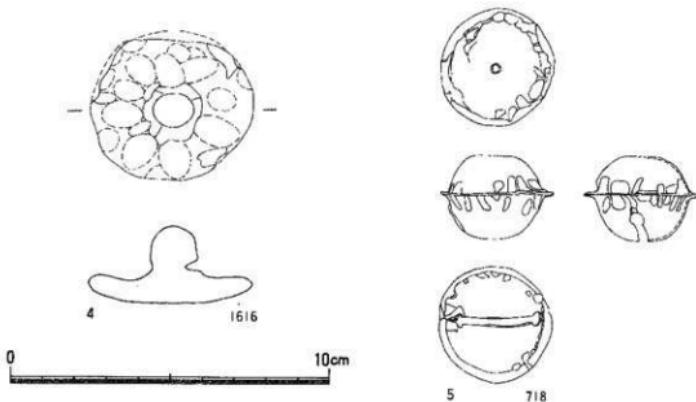


第45図 鏡拓影

4は土製の模造鏡である。水上7区175グリッド旧大谷川内より出土した。長径5.1cm、短径4.4cmの不整円形を呈する。面厚は0.6~1.0cmで中央で厚く反りを持っている。裏面中央に径1.4cmほどの円柱状の鉢があり端部は丸く仕上げられている。鉢孔は両側から途中まで穿たれている。裏面は指頭による調整だけであるが、表面はナデ調整により指頭痕が消されている。類例として県内では浜松市中津坂上遺跡をはじめ下田市洗田遺跡、伊東市上生戸遺跡、南伊豆町日詰遺跡、同町下条遺跡など伊豆半島の各遺跡に類例が多く、年代的には古墳時代中期～後期である。全国的には埼玉県今泉遺跡、東京都伊興遺跡、福島県岩谷などの関東から東北南部の各遺跡が有名であるが、高知県四万十川支流域の古津賀・東神木などの各遺跡や福岡県の八並・野黒坂をはじめとする20弱の遺跡、佐賀県の伊勢山遺跡をはじめとする数遺跡の他熊本県にも数遺跡認められるようで四国・九州に多い祭祀具ということができよう。また特異なものとして千葉県つとるば遺跡や栃木県矢板市長井、静岡県口詰遺跡などからは鈴鏡の模造品も出土している。出土地は古墳時代後期の旧河道内であり遺物の年代も概ね同じ時期としてよいであろう。

(2)銅鏡

宮川6区の旧河道S R312で1点出土している。球形の鏡であるが接合部が大きく張り出す。接合は大きめにつくった下半部を上半部に折り曲げ重ねている。周長は接合部で10.1cmを測る。鉢は欠損しているが、球頂に鉢をさしこんだ径0.25cmの孔がみられる。下面は幅0.2cm程の一文字の切り口があり、切り口の両端部は径0.4cmの円孔で止めている。内部には径1.0cmほどの不整形の小石が丸として封じ込まれている。鏡金等の痕跡は認められない。素文儀鏡と同様に平城京や石川県寺家遺跡等に出上例がある。本遺跡例も出土したS R312の土器の年代幅の中の奈良時代以降である可能性が高い。



第46図 土製模造鏡・銅鏡実測図

- (1) 烧津市教育委員会 「焼津市埋蔵文化財発掘調査概報II」 1982
- (2) 小野真一 「祭祀遺跡」 ニューサイエンス社 1982
- (3) 大場智雄 他 「武藏伊勢遺跡」 1975
- (4) 大場智雄 他 「南豆洗田の祭祀遺跡」 『考古学雑誌』28 3 1938
- (5) 横山林織 「関東」 『神道考古学講座』第二巻 1972
- (6) (5)に同じ
- (7) 小野真一 「伊豆・駿河・遠江」 『神道考古学講座』第二巻 1972
- (8) (4)に同じ
- (9) 奈良國立文化財研究所 「平城京右京八条一坊十一坪」 1984
- (10) 石川県立埋蔵文化財センター 「寺家-1980年度調査概報」 1981
- (11) 向坂綱二 「浜松市都田町中津坂上出土の祭祀遺物」 『考古学雑誌』第50巻1号 1964
- (12) (4)に同じ
- (13) 小野真一 「祭祀遺跡地名表総覧」 ニューサイエンス社 1982
- (14) 南伊豆町教育委員会 「日蔚遺跡(第III次発掘調査概報)」 1978
- (15) 外岡龍二 「伊豆の祭祀遺跡」 『駿豆考古』20・21合併号 1978
- (16) 文化財保護委員会 「埋蔵文化財要覧」 2 1959
- (17) (3)に同じ
- (18) 亀井正道 「建跡山」 1966
- (19) 岡本健児 「四国」 『神道考古学講座』第二巻 1972
- (20) 小田富士雄 「九州」 『神道考古学講座』第二巻 1972
- (21) (4)・(14) 国立歴史民俗博物館 「祭祀関係遺物出土土地地名表」 『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 共同研究「古代の祭祀と信仰」附篇 1985
- (22) (20)に同じ
- (23) 亀井正道 「土製模造品」 『神道考古学講座』第三巻 1981
- (24) 南伊豆町教育委員会 「日蔚遺跡(第III次発掘調査概報)」 1978
- (25) (19)に同じ、他に東堀河や左京一条三坊でも出土している。
- (26) (19)に同じ

11. 手捏土器・ミニチュア土器（第47図～50図）

手捏土器及び、手捏とはいえないが、実用とは考えられない非常に小型のものを含めてここで扱う。いずれも、非常に小型あるいは雑なつくりで、日常生活に用いられた実用品と考えるよりは、むしろ、なんらかの祭祀的な用途を想定した方がよいものである。

各調査区では、まんべんなく検出されている。まとまっているものとしてはすでに紹介した水上1区SX323（『大谷川II』P56参照）宮川6区SR312（『大谷川III』P87参照）がある。以下調査区ごとに紹介する。形態のわかるものを中心を選んだため小破片のものは省略してある。

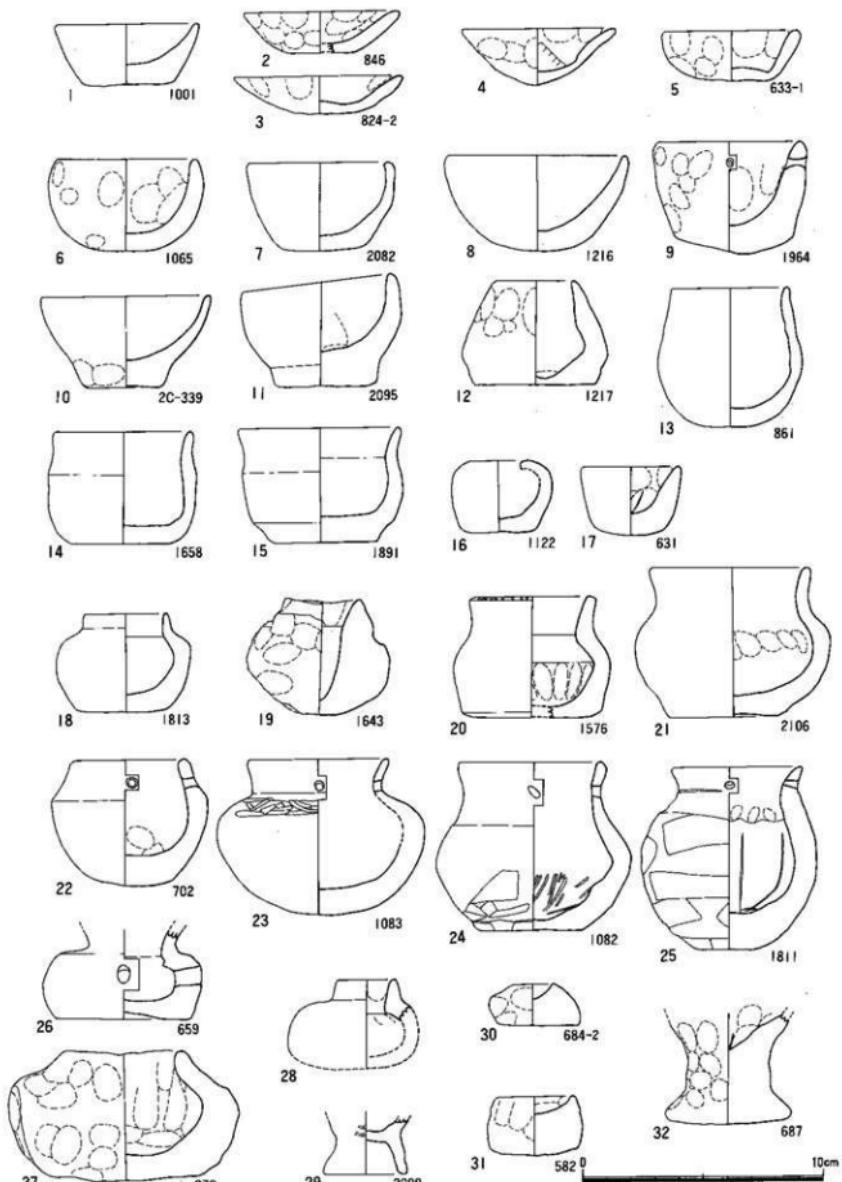
第47図は西大谷1・2区より出土したものである。旧大谷川の流路中よりの出土であり、その年代幅も広いと思われる。2・3のように环あるいは皿状を呈するものは注目されよう。1は手法的には土師器環の技法であるが口径5.8cmと非常に小型のものである。27は皮袋形土製品などと呼ばれたりもするが、形態から横瓶（俵壺）を模したものであろう。最大幅9.5cm高さ5.3cmと大型のものである。28も下部の大半が欠失しているが、同様のものと推定される。30・31は円板状の粘土の塊の上部を指で軽く凹ませた程度のものである。本遺跡では類例は比較的多い。32はいわゆる白形と呼ばれるものの下部である。白形の場合、高环を模したのではないとの見方もあり、34の場合には38・39との類似を考えた方が良いかもしれない。

第48図43～68が水上地区の出土である。特に水上7区出土のものについては全体に厚手のものが多いことが指摘できよう。53・54とともに非常に厚手で口縁部に穿孔のある点が注目される。また64・65のように台付甕の形態をとるものがあり特異なものとして注目したい。

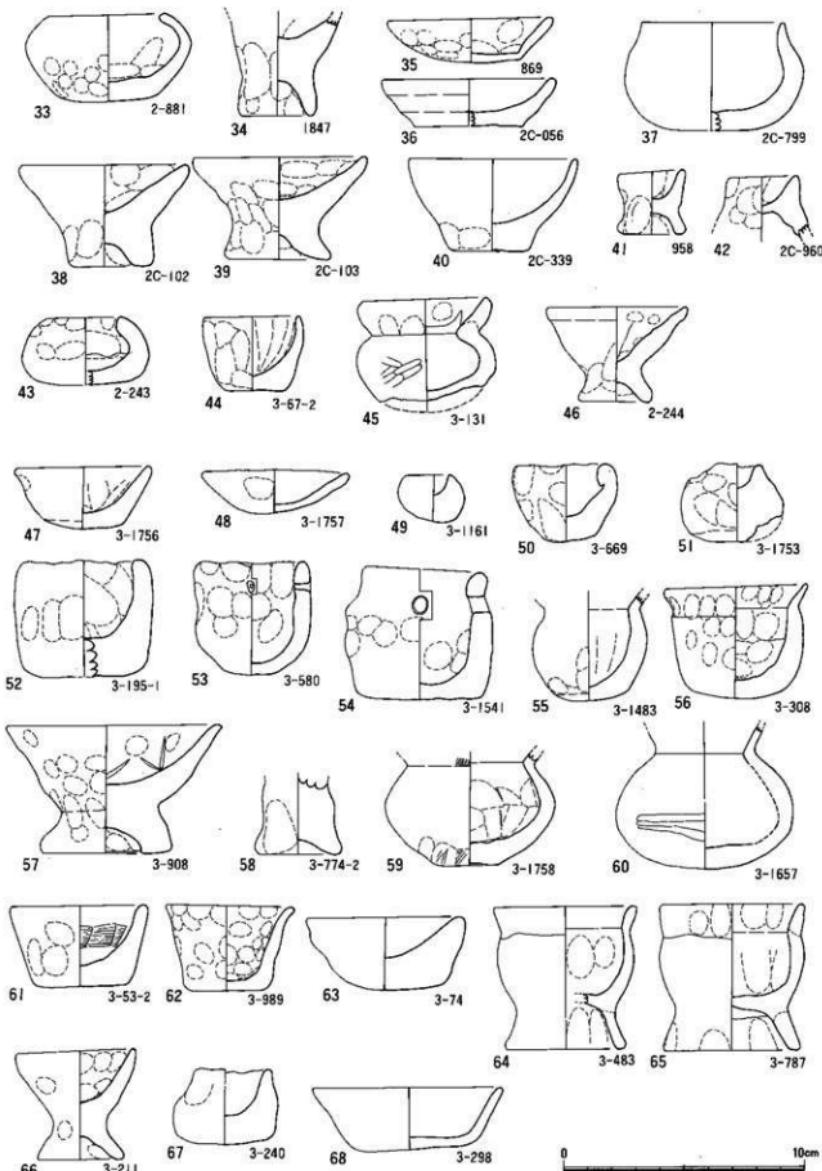
第49図は宮川3区・4区のものである。SR55・SR56・SR60が比較的まとまっている。特にSR55は形態的にも類似した物があるが須恵器によると時期幅がかなりあり、良好な資料とはいえない。

第50図は宮川6区のものである。98は大振りの皿状を呈するものであり、比較的大きな粘土塊を指で皿状におしあげた雑なつくりで、本遺跡では他に例を見ない。ここで特徴的なのは先述した横瓶を模したと思われる物が多くみられる点である。112・113・114などがそれであり、直方体を呈する粘土塊の中央を横長に凹ませ口縁部を指でつまみ出している。106・107・108・115なども不明瞭ながら同類と考えたい。

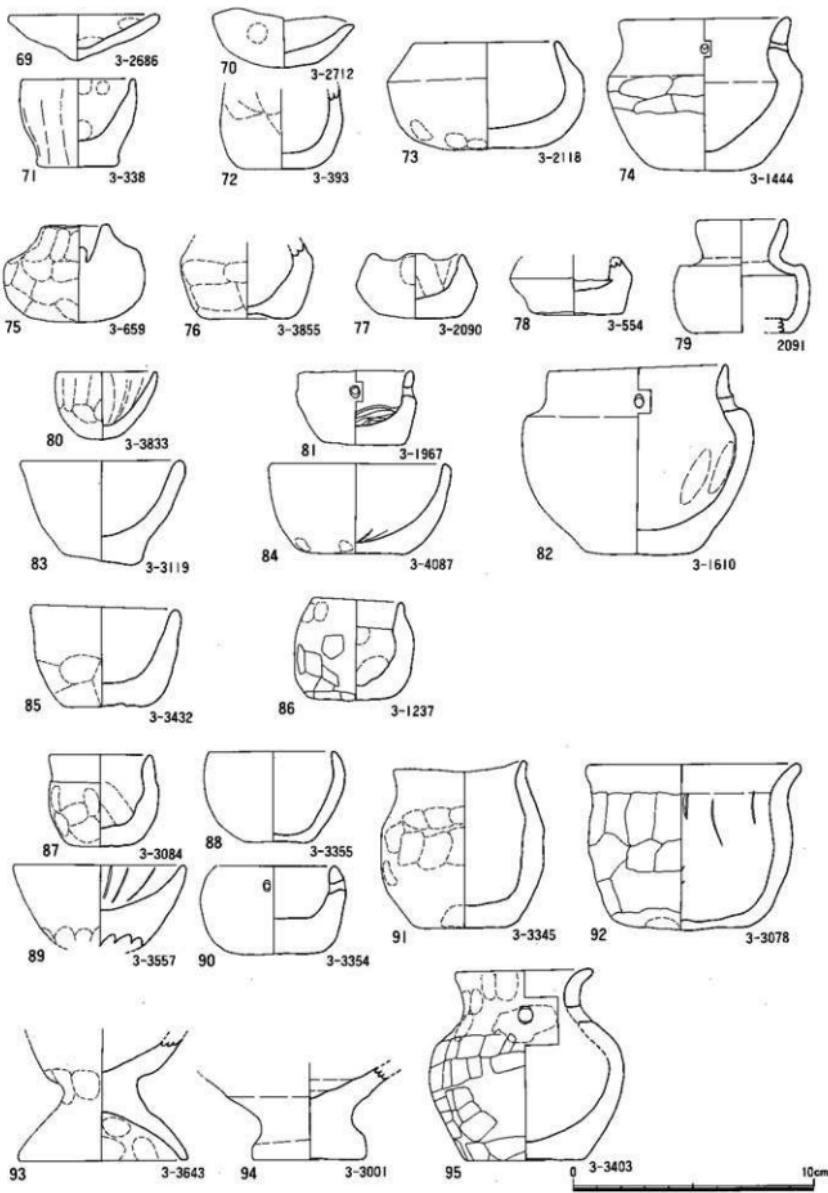
出土地点により形態上の差異を指摘できるが、いずれも流路内の出土であり、明確に時期を特定することはできない。他遺跡との比較の中で編年的位置づけは考えたい。



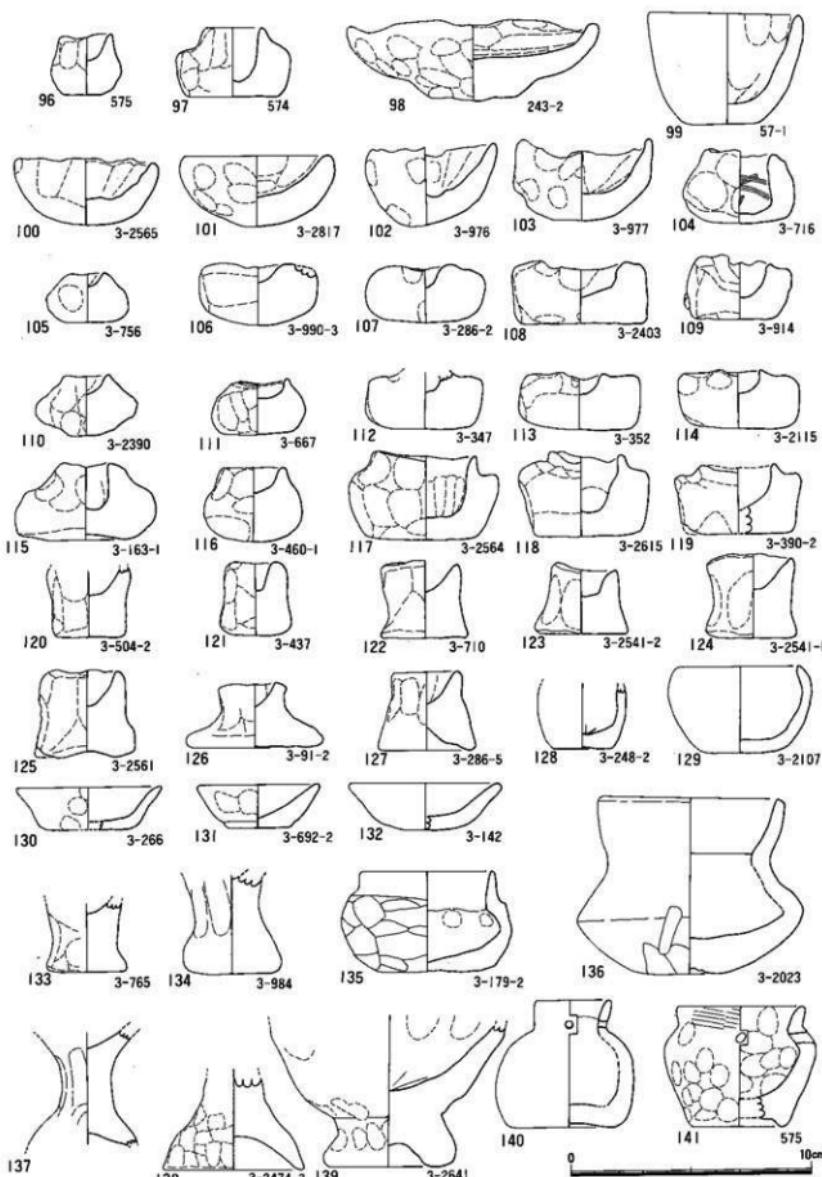
第47図 手捏土器・ミニチュア土器実測図1



第48図 手捏土器・ミニチュア土器実測図2



第49図 手捏土器・ミニチュア土器実測図 3



第50図 手捏土器・ミニチュア土器実測図 4

第2節 生産用具

ここでは生産用具として農具、工具、魚撈具について報告する。形状から見ると生産用具と分類出来はするものの、ここで扱う生産用具は祭祀的意味を全く含まぬものと断定できず、その大半が流路内出土という条件、及び作りが粗雑または材質が用具として耐えられぬなどの条件をもつものもあるという事実を考え合わせると、この生産用具は、逆に祭祀的意味を指摘できるものがある。

1. 農具（第51図～第56図）

農具と判断し得るものは27点ある。うち木製農具23点、鉄製農具4点、計27点である。細分すると、柄付鋤1点、鋤の身5点、鋤の柄3点、鉄製の鋤先1点、豎杵4点、横槌4点、鋤の柄4点、鉄製鋤の刃3点、田下駄1点、大足の杵1点、計27点である。概ね、鋤、豎杵、横槌、鋤の4種に大別出来る。

(1) 鋤

横鋤の身1点、緊縛着柄の狭鋤の身1点、ナスピ形鋤の身1点、緊縛着柄の鋤の身2点、鋤の柄3点が出土している。

横鋤1は水上1区S E261という井戸の下層から出土した。中層より弥生時代の要素も残す古式土師器が出土しており、この横鋤の身は古墳時代前期以前といえる。⁽¹⁾発掘者により井神に対する豊水祈願の目的で納置されたとの説も出されており、その可能性も指摘できよう。形態的には池上遺跡出土の「えぶり」と類似しており、横鋤の用途とともに「えぶり」の可能性も念頭に置きたい。角の穿孔の意味は池上遺跡では「おそらくは対をなし、支木を挿入したもの」としている。⁽²⁾また広沢の中に泥除け具を装着するための穿孔が柄の孔両側に施されているものがある。今ひとつ転用された可能性も指摘できよう。大谷川遺跡出土の鋤は1を除いては、緊縛着柄が大半である。2は黒崎直氏の分類によると狭鋤とされる⁽³⁾緊縛着の鋤の身である。鬼虎川遺跡における「組合せ鋤」に類似する。⁽⁴⁾ただ鬼虎川遺跡では弥生時代第II～第IV様式の土器との共伴があると報告されており、2の出土地がS R312であることからも、この一点のみで形状、用途、時代の判定は困難である。

3はほぼ完形に近い状態で出土したナスピ形鋤として注目を浴びたものである。特に身と柄とを緊縛した状態までもが解明できるとして意義をもつ。黒崎直氏の分類によれば「ナスピ形着柄鋤（鋤）」のうち「U字形鉄製刃先をもつもの」である。他遺跡出土のナスピ形着柄鋤と比して、(1)傘状の突起部が小さい。(2)傘状の突起部下部の幅が狭い。(3)身の肩が直角に近い張り出しをしている。(4)鉄製刃先の装着部分がU字型をしている。以上4点をすべて兼ね備えている例は他にみないようである。鉄製刃先は松井和幸氏の分類によれば、A 2類（「U字形を呈していて、刃先部の幅が耳部の幅とあまり変わらないもの」）またはA 3類（「刃先部はU字形であるが、その長さがかなり長く出ているもの」）のどちらかになる。大谷川遺跡において唯一出土している鉄製U字型鋤先が25である。試みに25の鉄製U字型鋤先を3のレプリカに装着したところ、多少の緩みはあるものの、ほぼ間隙なく装着できた。もっとも3は宮川4区S R55、25は宮川6区C107グリッド出土と同一個体のものとは考えられないが、25に類似した鉄製U字型鋤先が装着されるものと考えられる。ただ25が松井和幸氏の分類のA 2類に該当するのかA 3類に該当するか判断は難しく、年代観も示し難い。4もナスピ形着柄鋤の身の部分である。4になるとさ

らに傘状の突起部が小さくなり、緊縛のためのストッパーの役割しかしていない。5、6は、樹種がカシ（5はアカガシ）であり、形状からも着柄式の鉄の身と考えられる。7、8、9は着柄式の鉄の柄である。3の着柄式の鉄の柄とはほぼ同じ方法で身を緊縛したと考えられる。7、8も身との接着面裏に溝または方形の隆起帯を設けて緊縛時のヒモのズレを防ぐ工夫が施されている。

(2)堅杵

10、11の堅杵は重量、大きさ、樹種、いずれとも十分に堅杵の脱穀、精白という機能に叶う。ただ10とも他遺跡出土の堅杵（伊場遺跡¹⁰、唐古遺跡¹¹、捨六町ツイジ遺跡等）に比して粗雑な作りで、使用痕も顕著でない。12、13は形状からすれば堅杵であるが脱穀、精白するにはあまりに軽量で小さい。木下忠氏が指摘するように、小型のものは片手使いであった可能性が強いものの、大谷川遺跡の性格上、祭祀的要素も指摘しておきたい。現在の民俗事例においても簡単に作った堅杵を小正月の祭祀具として用いたり、田遊び田楽の所作の中にとり入れられたりしている。

(3)横槌

14、15、16、17は横槌である。17は残存状態が悪く検討できない。また15は堅杵の可能性も依然残る。14、16は渡辺誠氏の研究成果に照らして検討すると14は豆打ち用、16はワラ打ち用という用途が浮かび上がってくる。ただ14は重量的に中途半端な770g（水分多量に含む）という重さであり、ろくろ挽きによる制作と思われる。6も表採という制限上、時代及び機能を明確に出来ない。

(4)鎌

鎌の柄4点、鉄製の鎌の刃3点が出土している。18、19は「柄込みの末端が折り返しをなす柄差しによる着柄」の鎌であり、鉄製の刃を装着するために柄の先端近くに縦長の柄穴を彫っている。特に18は柄先端を丁寧な仕上げをしており定型化した形態を示す。伊場遺跡出土の鉄刃装着の鎌は律令期とされており、この鎌の柄と類似する。18は宮川4区S R55（古墳時代後期～奈良時代の流路）出土であり、奈良時代の幅におさまるものと思われる。19は柄が外側に反るやや大型の鎌であり刃を装着すると握り具合いでかなり鈍角の刃の当りとなる。古墳時代に「稻等の刈り取り」鎌と「なぎ鎌」の2形式に分化していく中で、19は「なぎ鎌」の用途を意識したものと思われる。鉄製の鎌の刃は26、27、28の3点である。26、27は都出比呂志氏が「B類（曲刃鎌）」と分類されるものである。26、27は刃が湾曲する。28は刃身部の幅があるのに対し装着部の幅は狭く長い。後出の大坂府堺市長曾根遺跡の鎌（鎌倉時代）に類似し、目釘を打ち固定する新段階の鎌に属するものと思われる。これら3点はいずれも柄穴に差し込んだ後、端を折り返して固定したと思われる折り返し部分が残存する。鎌と柄を目釘と口金でとめる形式のものより前段階の鎌である。

(5)その他

23は田下駄と考えられる。これだけ厚い板を用いる類例がなく今後の資料の増加を待ちたい。24は大足の足板をほぞ穴に差し込んで固定する横棒と思われる。友井東遺跡出土の大足（古墳時代前期）の「第8横木」と報告されているものと類似し、また捨六町ツイジ遺跡出土の大足の横木とも類似します大足の横木と考えてよいだろう。

- (1)『大谷川Ⅱ』 P54
- (2)（財）大阪文化財センター『池上遺跡四ヶ池遺跡発掘調査報告書第4分冊の2 木器編』 1978
- (3)（財）大阪文化財センター『池上遺跡四ヶ池遺跡発掘調査報告書第4分冊の1 木器編』 1978
- (4)黒崎直「農具」『弥生分化の研究』 5
- (5)東大阪市文化財協会『鬼鹿川の木質遺物 第7次発掘調査報告書第4分冊』 1987
- (6)黒崎直「古墳時代の農耕具」『研究論叢Ⅲ』 奈良國立文化財研究所 1976
- (7)松井和幸「古代の鉄製歎先・鍛先」『考古学雑誌』第72巻第3号 1987
- (8)浜松市教育委員会『伊場遺跡遺物編1』 1978
- (9)福岡市教育委員会『拾六町ツイジ遺跡』 1983
- ⑩木下忠「弥生時代の木器（生活用具）」『日本農耕技術の起源と伝統』 雄山閣 1985
- ⑪渡辺誠「ヨコヅチの考古・民具学的研究」『考古学雑誌』第70巻第3号 1985
- ⑫木下忠「鍬」『日本農耕技術の起源と伝統』 雄山閣 1985年
- ⑬(8)に同じ
- ⑭田中義昭「古代農業の技術と発展」『講座・日本技術の社会史第一巻 農業・農産加工』 日本評論社 1983
- ⑯都出比呂志「農具鐵器化の二つの面相」『考古学研究』第13巻 3号 1967
- ⑰(2)に同じ
- ⑱（財）大阪文化センター『友井東（その2）』 1983
- ⑲(9)に同じ

第9表 木製農具観察表

番号	遺物名	寄託番号 出土地点 遺構名 出土層位	法量(cm)	形態	技法	木取り種
1	歎	2-763 水上1区 S E261	身の長さ 13.6 身の幅 18.2 身の厚さ 1.1	鉄歎の身。刀縁の長さが18.2cm、身の長さが、13.6cmと横に長い歎である。現在使われるジョレンの形状を示す。着柄部の隆起部分は、精巧に削り出しているため、故意に彌強にすべく隆起させたにはあまりに強弱に出来ている。よって隆起部分の歎の身の後面には用いないと推定できる。すると、着柄角度は锐角と考えられる。ただ、刃縁の部分は、使用痕らしきものは観察できず、刃縁部の薄いため、実用されたかは疑問である。舟形刃起を上にしたときの左角に1cm四方の穿孔がある。転用されたときのもの、捕強のために緊縛したときのもの、停歎するための工夫のときのもの等、考えられるが、断定できない。着柄角度は約68°	全体的に丁寧な仕上げをしている。本取りは紐目であるが着柄孔を上にしたとき木目が横に走り、強度の面で疑問が残る。角は丸みをつける剛りが入り隅丸方形状をなす。後面になる部分はフラットに削り出している。着柄部の隆起は鉄製の鋭利な刃物で削り出したと思われるほどシャープな切り口が観察できる。	板 カシ
2	抜歎	3-1047 宮川6区 S R312	身の全长 28.15 身の幅 7.85 着柄部長さ 9.2 身の厚さ 1.13	緊縛着柄の鉄歎の身。ナスピ形着柄の着柄部と似た形状をなす。ナスピ形着柄の身では、傘状をする着柄部がただ機能的にだけ緊縛のため、くびれている。形態上「腰柄のうなぎ」を装着したことは確実であろう。身の幅が、7.75cmと狭く、着柄孔があれば躊躇なく狭歎にするところの身である。用途的には狭歎の用途に類似するとと思われる。鉄歎の形状で緊縛着柄する例は珍しい。刃縁部分は欠損しており、武蔵の刀を装着したかどうかわからない。身の中央近い部分に穿孔されており、この穿孔の意味は不明である。	紐目取りで、かなり頑強な作りである。後面と思われる面は、やや丸みをつけながら削り出し、前面と思われる面はフラットに削り出している。特に着柄部は緊縛を意識してかフラットな面を明確に削り出している。刃先に向かって薄く削り出している。	板 カシ
3	歎	3-1000 宮川4区 S R55	柄の全長 77.8 身の全長 36.8	着柄のナスピ形鉄。身と柄を藤原と思われる要で緊縛したままの形状で出土した。柄は、握りの部分で内側にストッパーのため突起を作り出している。2ヶ所の緊縛部分は、削り込みを入れ、緊縛した柄が離れないようにしてある。特に、内側の身と接する部分や上部に、やはり削り込みを入れ、T字状に緊縛した箇所を固定している。身はナスピ形とし、着柄部の先端は有頭状をなし、第1の緊縛部を固定し、次に傘状の突起部を作り出し、刃を装着するようになされている。	精緻な作りの歎である。柄のカーブ、握りも锐利な刃物で削り出しており、着柄部も堅固に固定できるよう細かい配慮がなされている。身もカシ材を、ここまで丁寧に仕上げ時間を用了したことであろう。後面は丸みを帯びて薄く削り出し前面はフラットに削り出している。	身は板目 身はカシ
4	歎	3-927 水上7区 (I 72) 砂礫	残存部全長 (22.8) 身の幅 (推定) [10.0] 着柄部長さ 13.4	ナスピ形の身。3の着柄ナスピ形の身とほぼ同じ形のものと思われる。着柄部先端は、長さ1.6cm、幅2.6cmの有頭状をなしている。着柄部の削との接面は、フラットに削り出している。傘状突起直下は一条の溝状の切込みがあり、裏の固定をより強固なものにしている。刃縁に近い部分は、欠損しているため不明であるが、U字形鉄刃を装着するものと思われる。	後面の方は、立体的に削り出している。有頭状の先端部、傘状の突起部は、意識的に隆起方に削り出し、緊縛するには好都合のようにしている。前面は、フラットに削り出しているが、身の部分はやや丸味を帯びて削り出している。	板 カシ
5	歎	3 1023 宮川4区 (O 93) 暗灰色砂 混粘土	残存部全長 (19.2) 厚さ 1.25	緊縛着柄の歎の身。身の半分及び刃縁に近い部分が欠損している。欠損していない着柄部先端部と緊縛部のくびれの形状、および樹種より歎の身と判定する。着柄接面はフラットである。実測図左下部が加工痕の残る状態であり、その形状より二又歎の底部の付根部分に当たると考えられる。左半分及び底部の大半が欠損している以上断定はできない。	残存状態不良のため、技法の観察は細かくできない。後面の柔らかい線は、かなり丁寧な調整のためと思われる。	板 アカガシ

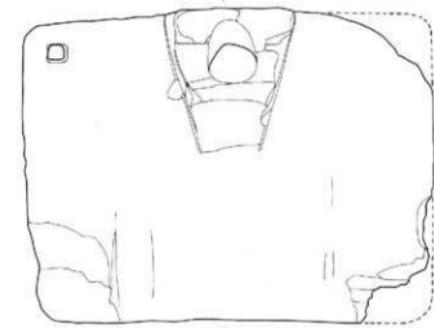
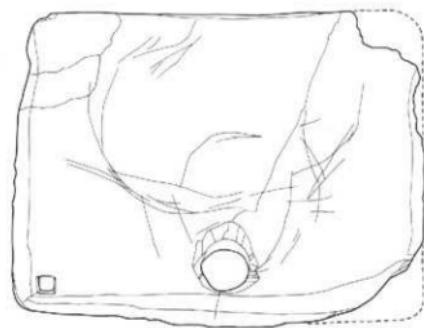
番 号	遺 物 名	登録番号 出土地點 達 様 名 出土層位	法量 (cm)	形 態	技 法	木 取 り 率	樹 種
6	鍔	5350 西大谷 1・2区 (D46) 灰茶粘土	残存部全長 (12.3) 着柄軸長さ 6.6 着柄軸の幅 2.8	緊縛着柄の鍔の身。残存状態が良好でなく、刃部は着柄軸近くが残存するのみで、着柄軸の形状および樹種より鍔の身と判断した。緊縛用のくびれは長さ2.8cm幅2.4cmである。やはり、着柄接面はフラットである。刃部は2つ鍔の身に比べて幅があり、形状を推定することができない。着柄軸部の後面に2つの貫通していない穿孔がある。何のためか不明である。	残存状態不良のため技法の観察は細かくできない。緊縛部のくびれは、鋭利な刃物で丁寧に削り出している。	低	カシ
7	鍔の 柄	706 宮川2区	残存部全長 (22.8) 着柄接面長 (残存) (12.6) 着柄接面幅 1.6	緊縛着柄の鍔の柄。3の着柄鍔とはほぼ同類の微の柄と考えられる。柄の身との装着部分のみ残存し、握り部分は欠損している。着柄接面は、フラットに削り出している。全体的に藤蔓のような蔓で巻いた痕跡と思われる緊縛痕が規則正しく横線を描き残る。ただ、着柄3の緊縛方法とは違う。身との接面と反対側に巻茎の痕跡が残る。少なくとも14条は数えられ、かなり頑強に緊縛したのだと思う。緊縛した蔓のズレを防止するため削り込みが2箇所観察できる。これは、ちょうど着柄鍔3にも観察できる削り込みである。	針葉樹の枝材を用い、幹に近い方を身との装着部分にしている。断面が梢円形になっているのは、土圧等で偏平になったものと思われ。もともとは芯持ちの丸材であったものと思われる。	枝材	針葉樹ヒノキ?
8	鍔の 柄	6904-1 宮川4区 (H17)	残存部全長 (22.2) 厚み 2.2	緊縛着柄の鍔の柄。3の着柄鍔と似た緊縛をした鍔の柄と考えられる。柄の身との装着部分のみ残す。着柄接面はフラットに削り出している。身との接面と反対側に巻茎の痕跡が残る。少なくとも14条は数えられ、かなり頑強に緊縛したのだと思う。緊縛した蔓のズレを防止するため1cm四方の突起を削り出している。	この鍔の柄は広葉樹の材をミカン削状に削ったものを加工している。緊縛のズレを防ぐ突起は、鋭利な刃物で丁寧に四角に削り出している。	粗材	広葉樹
9	鍔の 柄	5366 西大谷 1・2区 (F43)	残存部全長 (65.2) 握柄最大径 9.6	緊縛着柄の鍔の柄。着柄鍔3の柄とはほぼ同形である。握り先端部及び身との装着部が欠損している。身との接面は、一部残存するため装着角度を測ることができる。装着部に近い部分で、横位に巻茎の緊縛痕が残っている。	広葉樹(サカキと思われる)の材をミカン削状に削ったものを加工している。表面は滑溜で、丁寧な調整がなされている。着装部及び握り部は欠損しているものの、丁寧な削り出しが施されている。	粗材	広葉樹
10	堅 秆	3-3349 宮川4区 (199) 暗灰色砂 混粘土	全長 102.6 握部最大径 9.6	長大な堅秆である。一方の敲打部は、刃痕とともに使用痕らしき摩耗が見られる。しかし、握部外面には、樹皮が少しではあるが残り、長時間使用されたことは思われない。加工が粗雑なため握り部は歪んでおり、使用上あまり使い安い形状をしていない。	粗雑な削りが、全体的に観察できる。特に握部は、刃痕一つ一つが大きく均整のとれた調整になっていない。一方の敲打部は、丁寧に刃を何度も当てる削り出しているが、その削りは観察できない。	芯持ち丸太	広葉樹
11	堅 秆	3-3383 宮川4区 (1100) 暗灰色砂 混粘土	全長 93.2 握部最大径 9.8	表面は残存状態があまり良くないので、使用痕は確認できない。脱穀に十分使用できる重量と大きさの堅秆である。実測団右半分は欠損が多く、特に敲打面は、明確でない。芯持材であるが故か、全体的に割れが入っている。	握り部の削り出しは、鋭利な刃物で大きな動きで削られている。表面は、大きな削りとノミまたは手斧で削ったと思われる。細かい刃痕が残る。	芯持ち丸太	広葉樹
12	堅 秆	3-273 宮川4区 (N94) 暗灰色砂 混粘土	全長 58.85 握部最大径 4.4 握部最大径 3.4	表面の摩耗がかなり進んでいる。敲打部に使用痕と思われる摩減した部分が観察できるが、表面全体の摩耗と同じものかもしれない。重量は、水分を含んで995gを測る。若干重さが足りないように思われるが、抜く力を考えれば堅秆と判断してよさそうである。	握り部のくびれはそれ程ないが、人間の手の大きさを考えれば、握り安い大きさと思われる。表面の残存状態不良のため調整等不明。	芯持ち丸太	カシ

番号	遺物名	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法量 (cm)	形態	技法	木取り種	樹種
13	堅杵	3-1004 宮川 6 区 (G 102) 緑灰色粘土	全長 49.6 搗部最大径 5.2	全長49.6cm、重量550gを測る。堅杵にしては、大きさ重複とも物足りない。搗部に不自然にフラットな面からが観察でき、搗部だけを見ると脱穀用堅杵の用途は考えにくい。特に実測図左側正面図の下の搗部にあるフラットな面は、刃痕が斜めに大きく残り、故意に削り出しているように窓われる。形状は堅杵と思われるが、用途には問題点が多い。	カシ材を大きくミカン削状にしたものを加工調整して、削り出されている。搗部のフラットな面は、鋭利な刃物で大きく斜めに削り出している。	割材	カシ
14	槌	3-909 宮川 4 区 (M96) 粘土混黑色砂礫	全長 41.2 槌部最大径 5.6	重量770gを測る。握部が欠損しているが、一部残しているため、握りの形状は窓われる。握部は有頭状にバットのグリップのように削り出している。ろくろ挽きで削り出しているように同心円状に、刃痕を残さず加工されている。	ろくろ挽きで削り出していると思われる。手持ちで刃を当てた跡は観察できない。	芯持ち丸太	マツ
15	槌	3-3349 宮川 4 区 (199) 粘土混砂礫	残存部長さ (48.2) 槌部最大径 8.0	握部が欠損しているため、堅杵か槌か判断できないが、残っている部分だけの形状から槌としておく。槌部に使用痕がない先端の搗部は角がとれ、摩耗痕が若干観察できるため、槌と同様の搗く機能をはたしてみたいように思われる。槌部の太さに比して握部が細い気がする。重量は1280gである。	芯持ちの広葉樹の丸太材で、表面を削ぎ握り部を削り出して作ったものと思われる。表面は、残存状態が悪く調整痕は観察できない。	芯持ち丸太	広葉樹
16	槌	2C 613 西大谷 8 区	槌部長さ 15.8 槌部最大径 15.6	重量2350gである。握部が欠損している。槌部に使用痕が見られ、横槌として用いられたと思われる。握部の中位はかなり使用され、使用のために削られた溝が一回りする。	かなり使用された後高粱させたもののらしく、制作、調査の時の刃痕を残さない。芯持ち丸太材から握りを削り出している。	芯持ち丸太	広葉樹
17	槌?	2 030 大谷 1 区 (V15)	残存部全長 (14.1) 槌部最大径 6.2	槌の可能性を指摘することができる木製品である。握部の大半及び握部の先端部が欠損している。握部から握部を削り出しているため、ここでは一応槌にしておく。残存部重量は170g。重量、大きさより、横槌の用途を予想する。	残存状態不良のため、細かいところは不明。槌から握部を直角に削り出している。	芯持ち丸太	広葉樹
18	柄の柄	3-1853 宮川 4 区 S R55 茶褐色 砂礫	全長 35.1 握部幅 3.2 厚さ 1.6	握の柄。ほぞ穴が鉄製の鍛刃を装着するために彫られている。ただこの細長い穴のため弱くなり、片側が欠損している。ほぞ穴は縦3.8cm、幅3mmで彫られている。ほぞ穴は、鉄製の鍛刃を装着していたためか、かなり上部に摩耗している。柄の先端は丸い。握りはやはり引いて用いる農具だけに、しっかりと内側に突起をつくるストッパーを設けている。柄は真直ぐであり、断面が横円形をしており、握り部分だけは内側方向がやや尖ったオムスビ形をしている。	全体的に非常に丁寧な削り出しをしている。特に柄の先端の丸い部分や、握りのストッパーの部分は鋭い刃物で何度も刃を入れ、細かい調整を施している。握る部分は、握り安いように内面をやや薄く削っている。	牛糞材	イヌマキ
19	鍔の柄	3-760 宮川 4 区 (N94) 暗灰色砂 混粘土	全長 42.95 握部幅 2.6 厚さ 3.7	鉄製の鍛刃を装着すべく、細長いほぞ穴が空いている。柄は、渦曲している枝材を用いたのか、故意に渦曲させたのか、判明しないが、用途を考えて反った柄を用いているようだ。鉄製の刃を柄に刺して直角に装着したとしても、手で握りの部分を持ったときは鍔の刃がかなり純角に装着されていることになる。柄の中位より先端にかけての断面は長方形をし、中位より握り部にかけては横円形をなす。握り部は、内側にストッパーとしての突起を削り出している。	反った芯持ちの枝材を用いて先端の方が幹に近い方を用いている。柄の中位より先端にかけては、断面が長方形になるよう、表面を削り出しながら調整している。柄の中位より削り部にかけては、断面が丸くなるように丁寧に調整している。	芯持ち丸太	マツ
20	鍔の柄	3 717 宮川 4 区 (N94) 粘土混黑色 砂礫	残存部全長 27.6 握部幅 2.6 厚さ2.4	鍔の柄と考えられる木製品。鉄製の鍛刃を装着するほぞ穴が残存していないため、鍔の柄とは断定しきれない。柄の太さ、握り等で判断して、鍔の柄としてもおかしくない。	針葉樹の枝材を割り材にして断面を横円形になるように加工している。	割材	ヒノキ?

番号	遺物名	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法量(cm)	形態	技法	木取り 樹種
21	鎌の柄	3-1803 宮川4区 S R55 暗灰色砂 泥粘土	残存部全長 11.5 握部幅 3.3 厚さ 1.5	鎌の柄と考えられる木製品。握り部しか残存していないため、鎌の柄と断定しにくいが、その形状、大きさより、その可能性を指摘できる。	ミカン削状にした棒状の木片を加工している。握り部の突起は丁寧に削り出している。	削材 カシ
22	田下駄	3-2165 宮川3区 (J 95) 黒褐色 粘土	縦長さ 21.9 横長さ 21.6	田下駄と考えられる木製品。四角い板に4つの穿孔という形状から田下駄とも考えられる。横の孔の距離は約7.5cm、縦の孔の距離は約5cmである。足を緊縛して固定するには、適当な距離と思われる。田下駄と判断仕切れないのは、厚さ3.0cmを測ることである。	残存状態が悪く、表面の観察はあまり出来ない。	板 スギ
23	大足	3-1046 宮川6区 S R312	横長さ 43.2 縦長さ 7.2	大足の枠の一部と考えられる木製品。弧状に盛り上がりっている部分を上にし、異方形に空いたぼぞ穴に足板を差込み、両端は大足の綫枠のぼぞ穴に差込み固定したものと思われる。他に大足の一部らしきものが出土していないため、これ一点をもって大足の枠の一部と判断するにはやや無理があろう。	板状の材を片方を弧状に片方を直線的に削り、中心部分に長方形のぼぞ穴を設ける。角は、丸みをつけるよう削ってある。	板 スギ

第10表 鉄製農具觀察表

番号	遺物名	登録番号 出土地点 遺構名 出土層位	法量(cm)	形態
24	歎先	3-2193 宮川6区 (C 107)	全长 17.1 刃の最大幅 5.4	鉄製U字形歎先。歎のため表面がかなり劣化しているが、形状はとらえられる。やや開きざみのU字を示す。断面はV字をなし、木製の身にはめ込んで用いるようになっている。刃は、肥厚で頑強にできている。
25	鎌	3-2254 宮川4区 (H 39)	推定全長 (24.8) 刃の最大幅 5.4	鉄製の鎌の刃。歎片を接合復元すると、鎌刃の幅が広く、装着部が細い曲鎌の刃であることがわかる。刃の最大幅は5.4cm。装着部では1.8cmと細くなる。柄のぼぞ穴に差し通し、反対に通り抜けた部分を折曲げて刃を固定する。折り曲げた部分も残存する。
26	鎌	3-4102 宮川4区 (J 98) 粘土混砂	残存全長 13.0	鉄製の鎌の刃。銷による劣化が激しく、刃の原型を復元することは困難である。やや湾曲した曲鎌の刃と思われ、湾曲下内側には薄く刃と思われる部分がある。歎片の端が、ほぼ直角に折曲げてあり、鎌の柄のぼぞ穴に差し込んだ後、折曲げたものとおもわれる。
27	鎌	3-2683 宮川4区	残存全長 9.9	鉄製の鎌の刃。劣化し、原型を殆ど留めない。小さな鉄の板があるが、一方の端が折曲げてあり、柄のぼぞ穴に装着した可能性を指摘できる。



2-763

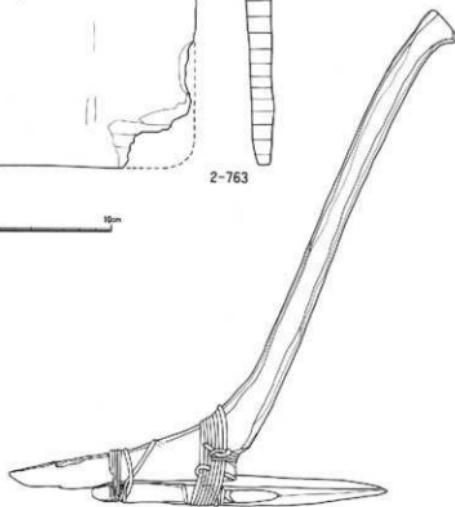


2

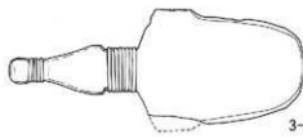


3-1047

10cm



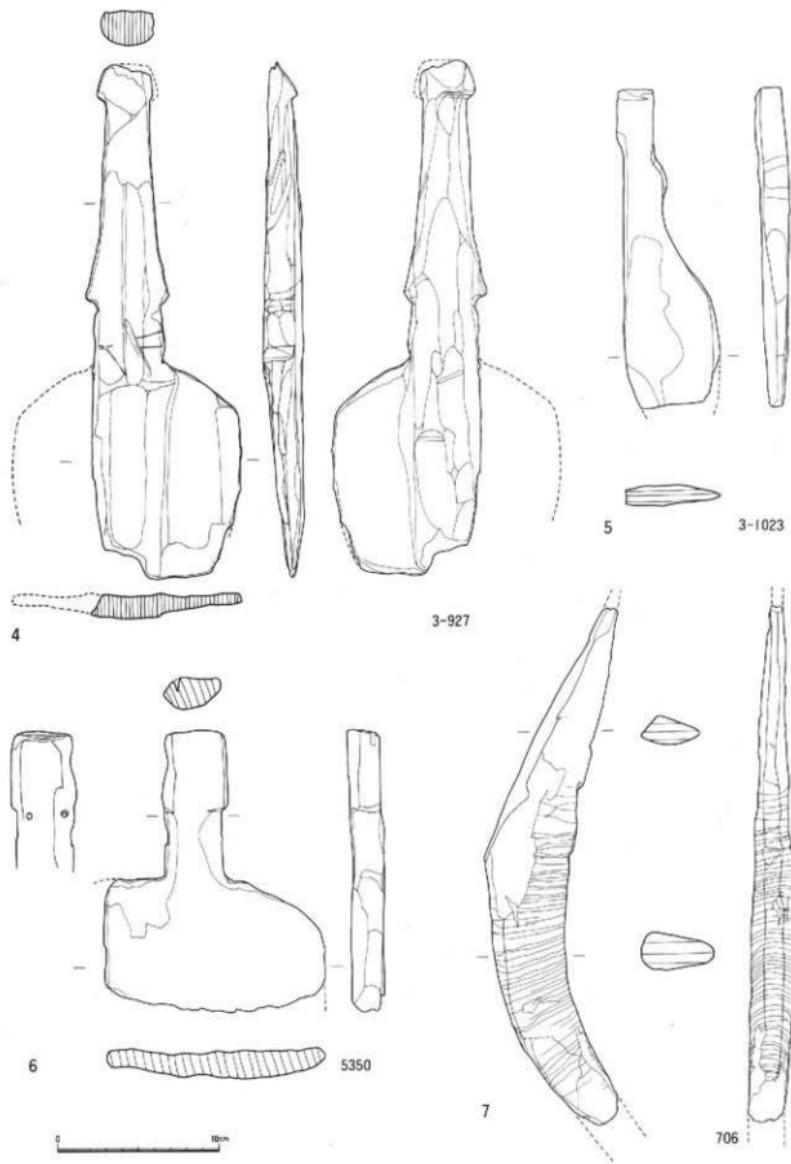
3



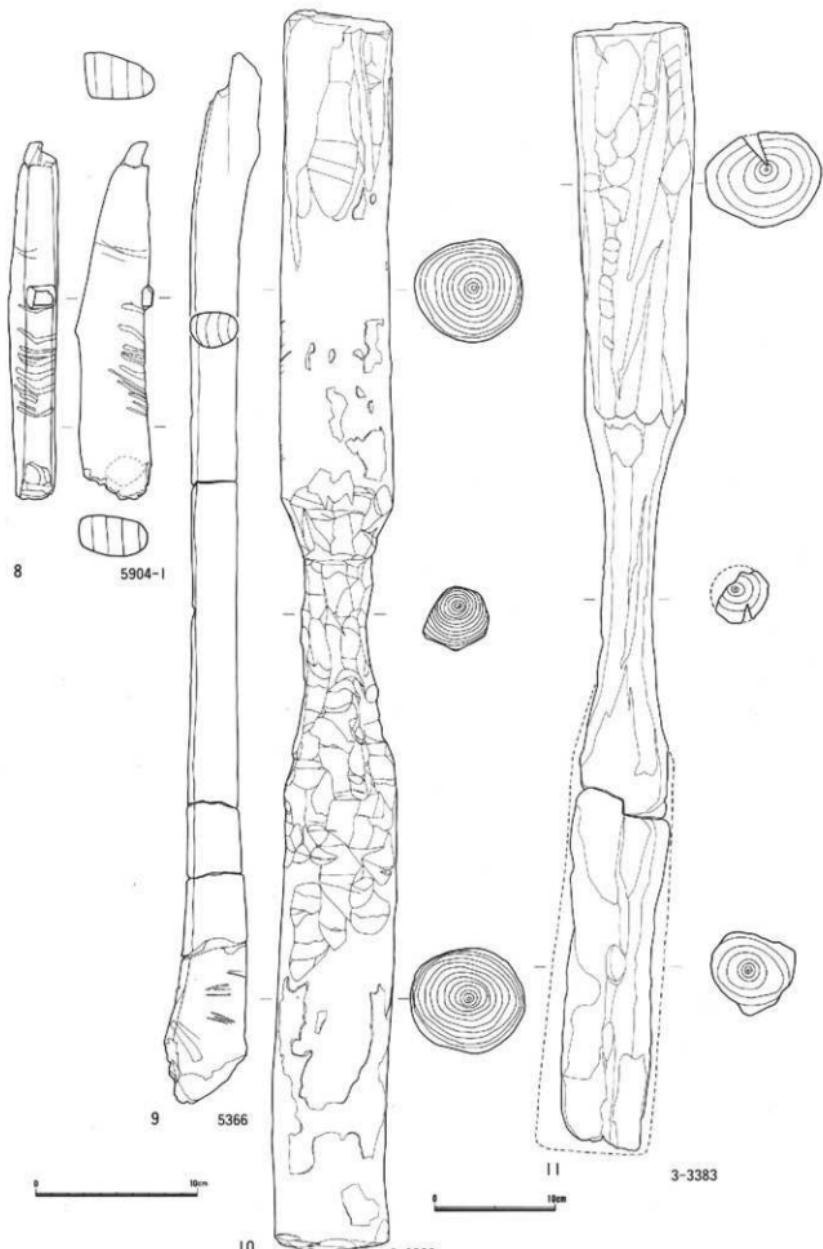
3-100

10cm

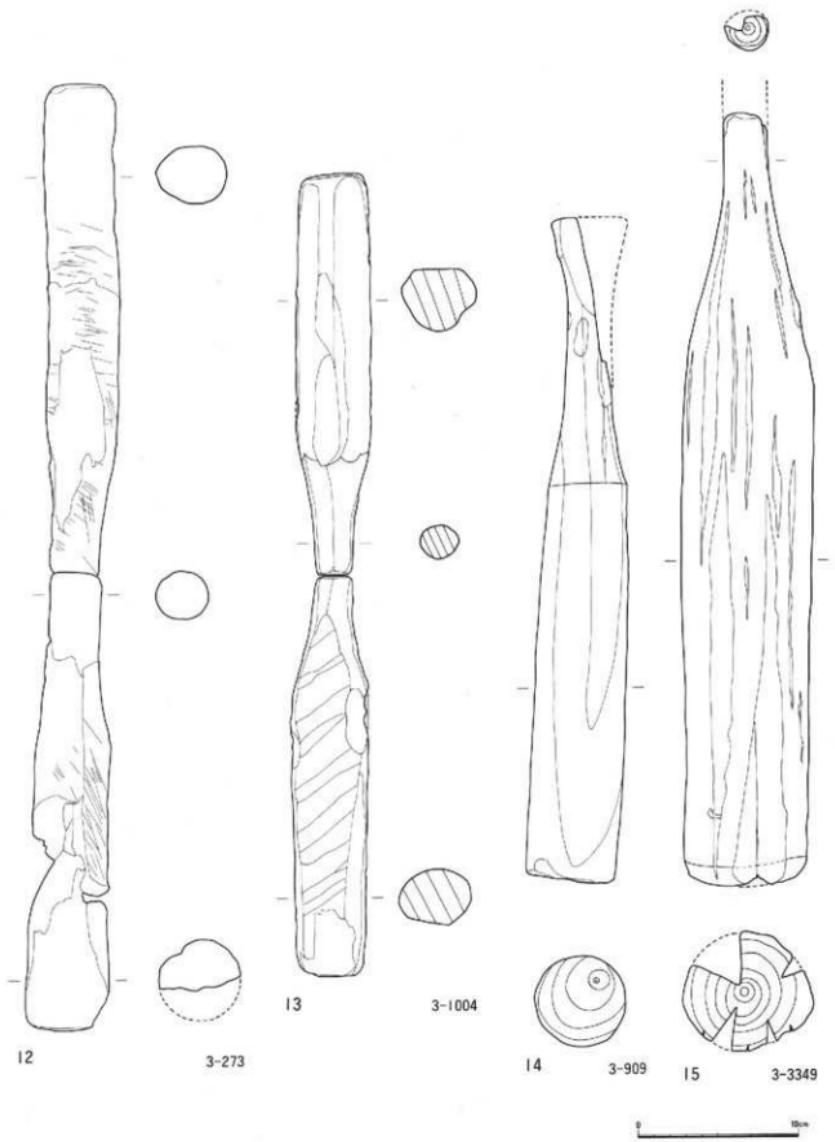
第51図 農具実測図1



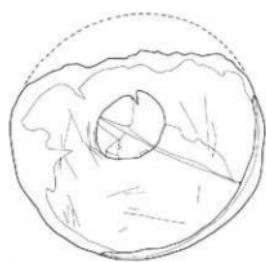
第52図 農具実測図 2



第53図 農具実測図 3

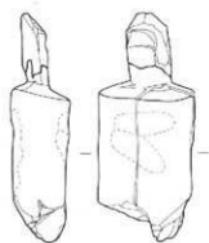


第54図 農具実測図 4



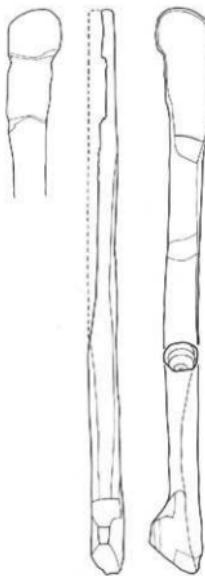
16

2C-613



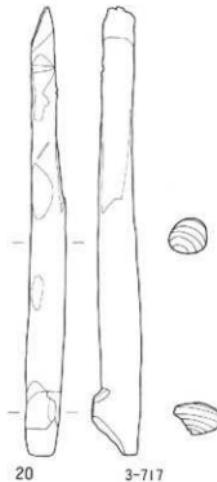
17

3-030



18

3-1853



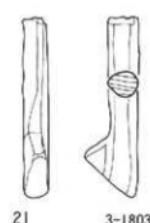
20

3-717

19

3-760

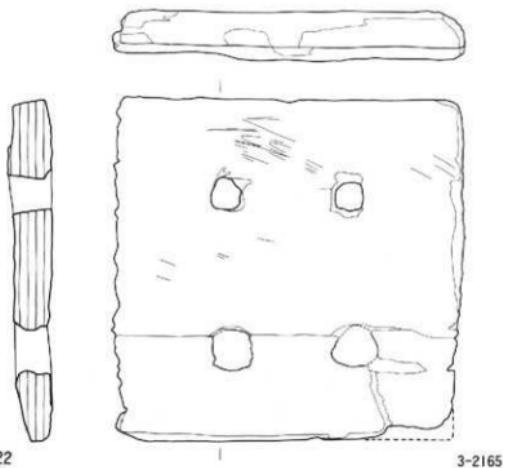
6 10cm



21

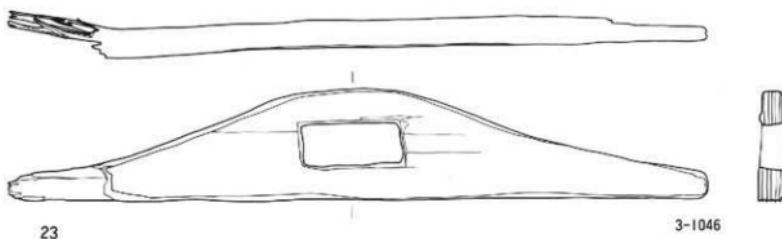
3-1803

第55図 農具実測図 5



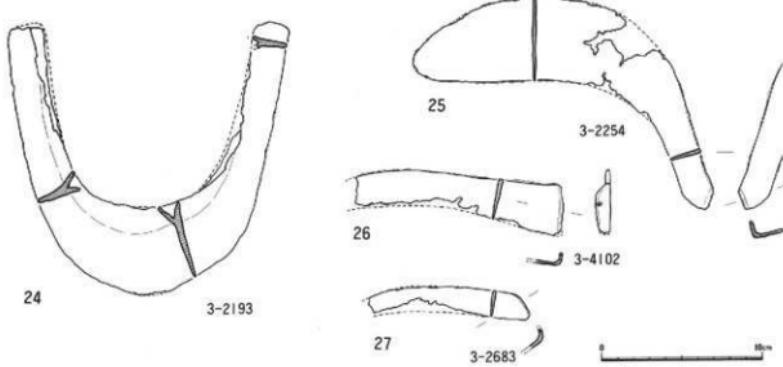
22

3-2165



23

3-1046



24

3-2193

25

3-2254

26

3-4102

27

3-2683

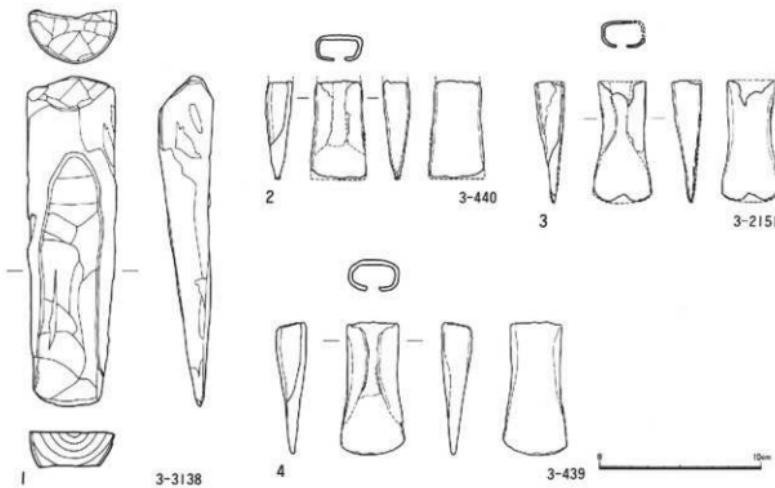
第56図 農具実測図 6

2. 工具（第57図）

工具に分類できるものとして木製品にクサビ形1点、鉄製品で斧3点がある。農具が27点と多量であるのに比してその量は圧倒的に少なく、前項で指摘した農具の祭祀的意味を逆に際だせるものとなる。

1は楔と考えられるもので全長20.4cm、直径6cm程度の丸材を半割し表側を斜めに切り落としきさび形としたものである。材はミツバウツギで部分的に樹皮が残存している。宮川4区の流路中よりの出土である。しかし、矢として使用されたとすれば、その使用痕が観察されなければならないが、それらしい痕跡はない。形態の類似のみからここに入れておくものである。

2～4の3点の鉄斧はいずれも宮川6区の流路出土のものである。2は現存長6.0cm刃部幅3.4cm基部幅2.9cm厚さ1.6cmを測る。表面のサビならびに剝離が著しく特に刃部の先端はかなり大きく剥落していると考えられる。3は現存長7.4cm刃部幅3.6cm基部幅2.9cm厚さ1.7cmを測る。保存状況は最も不良で剝離欠損が著しい。4は全長8.2cm刃部幅4.0cm基部幅3.2cm厚さ1.9cmを測りこの中では大形である。刃部はゆるやかな曲線を持っているが左右対称とはならず一方のカーブが大きくなっている。



第57図 工具実測図

3. 漁撈具 (第58図・第59図)

(1) 網鉤

石鉤 2 点、金属鉤 1 点、土鉤 40 点、合計 43 点が出土している。

a. 石鉤

1 は、宮川 3 区、J 95 グリッド、暗灰色粘土混砂礫層から出土している。全長 7.22cm、幅 5.26cm、厚さ 5.19cm、重さ 265.3g を測り、完形品である。丁寧に整形され、表面は細かく敲打しているようである。断面はほぼ円を呈し、最大幅を頂部より 4.86cm の所に有す。頂部より 0.70cm の所に幅 0.53cm の溝が刻まれ、くびれ部を形成している。駿河湾沿岸地域を中心に、弥生時代後期～古墳時代前期に盛行する有頭石鉤（中部型石鉤）としては最も小型の部類に属する。⁽¹⁾

2 は、水上 4 区の S E 8 から出土している。遺構の年代から古墳時代前期のものと推定できる。頂部には網紐を通したと思われる孔（直径は 4mm 程度と推定される）が穿たれ、その孔より上の部分が欠損している。残存部長 14.33cm、幅 6.76cm、厚さ 5.5cm、残存部重量 440.9g を測り、断面は梢円形である。粒子が粗く、かなり脆くて中央部付近で 2 つに割れている。表面は丁寧に整形され滑らかであるが、使用によりかなり摩耗し欠損している部分も多い。長卵形の大型石鉤で孔を有するものは、有頭石鉤と供に駿河湾沿岸地域特有のものと思われるが、清水市飯田遺跡、静岡市登呂遺跡、同川合遺跡など類例は少ない。⁽²⁾ ⁽³⁾ ⁽⁴⁾

b. 金属鉤

3 は、宮川 6 区、G 103 グリッドから出土している。中張管状の形態で材料は鉛である（鉛鉤は平安時代から出土例がある）。全長 4.89cm、径 2.29cm、孔径 0.94cm を測る。重量は 101.2g である。⁽⁵⁾

c. 土鉤

全て管状土鉤であり、溝を有するものはない。大半が土師質のもので、須恵質のものは 2 点（4・5）である。両端をヘラ切りし、指ナデによる調整を施し、指圧痕を丁寧に消したものが多い。形態は、和田晴吾氏の分類に従い A～E 類に分けた。⁽⁶⁾

A 類（4～12）軸断面が梢円形か隅丸長方形のすんぐりしたもの。

B 類（13～27）A 類を縦長にした形で長さに対して幅が 2 分の 1 未満のもの。

C 類（28～33）軸断面が長方形をなす端正な形のもの。

D 類（34～41）C 類を短くした形で軸断面が正方形に近いもの。

E 類（42・43）断面が円形に近い、いわゆる「球形土鉤」。

A 類のうち須恵質の 2 点は土師質のものに比して孔径が大きい特徴を有す。5 は自然釉の付着が認められる。土師質のものは、やや灰色がかった小型のもの 3 点（9・10・12）と、胎土も粗く褐色を帯びた中型 4 点（6・7・8・11）に分けることができる。最も数の多い B 類は、小型（10g 未満のものが多い）が 8 点（20～27）、中型が 4 点（16～19）、大型が 1 点（15）、超大型が 2 点（13・14）ある。重量差が非常に大きく、型によりそれぞれに異なった用途に用いられたものと思われる。小型のものを除いては端部のヘラ切り痕をほとんど残さず、細くすぼまる。超大型の 2 点は灰色を呈し、他のものより焼成も良く、端部の孔の縁には糸（紐）により摩耗したと思われる痕が明瞭に残る。B 類は、古墳時代後

期に超大型化するので、同時期のものである可能性がある。C類は小型が1点(33)、中型が4点(28・30・31・32)、大型が1点(29)ある。29の胎土は砂粒を多く含みかなり粗い。D類は中型5点(37~41)、大型3点(34~36)である。中型のものは色調、形状、重量など類似し、時代も出土層位から、古墳時代前期と想定されるものが多い。胎土は砂粒・小石などを含みかなり粗い。大型のものは中型と比べて、胎土はやや密であり、色調は明るい。34はSP464から出土し、古墳時代前期のものである。E類は、2点(42・43)とも小型である。大型の土玉である可能性もある。

(2)四ツ手綱の部品 (44)

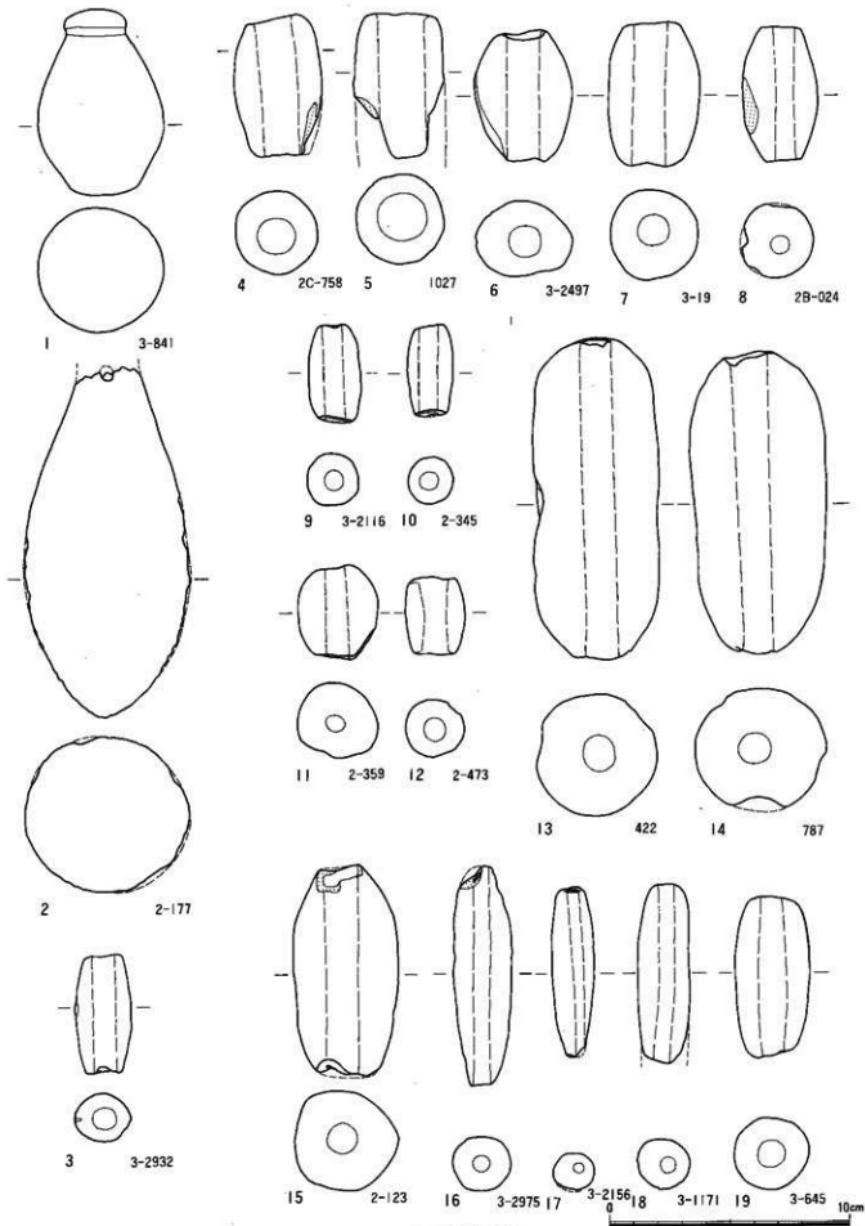
宮川2区、H101グリッド、旧河道内の出土である。類似の形態のものが、伊場遺跡、御殿・二之宮遺跡、城山遺跡から出土しており、それぞれ、「有縫十字形木製品」、「有縫木製品」、「四手綱の部品」とされている。城山遺跡でその用途を限定した後、神野善治氏の民族学の見地からの論文が発表されている。その成果をも踏まえて、本遺跡出土品も、四ツ手綱の中央にある十字形木製品の下部部品と認定したい。法量は、長さ33.0cm、幅4.6cm、高さ0.95cmを測る。上面は下面に比べ、丸みを帯び、中央に幅4cm程度、深さ1cm程度の割り込みがある。他遺跡出土のものには、割り込み部の中央に、上部部品と結合するための1孔が穿たれているので、本遺跡のものは、未製品である可能性がある(上部部品と縄、蔓などで繋ぐタイプかもしれないが、その痕は全く認められない)。下面是平坦に削られ、両端部から、幅2cm、長さ12cm、深さ2cm程の縫状の割り込みがある。さらに、両端部には、竹製の綱枠を結わえ易くするために幅2cm程の浅い凹みが廻されている。調整は全体に丁寧であるが、上面割り込み部、下面の縫状部の内側(見えなくなる部分)は粗い。樹種はスギだと思われる。

- (1) 江藤千萬樹「衛生式末期に於ける原始漁労聚落」『上代文化』第15輯 1987
- (2) 埼藏文化財研究会『海の生産用具』1986
- (3) (2)と同じ
- (4) 静岡県埋蔵文化財調査研究所資料(山田成洋氏教示による)
- (5) (2)と同じ
- (6) 和田晴吾「弥生古墳時代の漁具」『考古学論考』平凡社 P308
- (7) 小型、中型などの呼称も前掲書にしたがった。 P310
- (8) 浜松市教育委員会『伊場遺跡出土物編』1978
- (9) 碧田市教育委員会『御殿・二之宮遺跡発掘調査報告書1』1981
- (10) 可美村教育委員会『静岡県浜名郡可美村城山遺跡調査報告書』1981
- (11) 神野善治「四ツ手綱考—伊場遺跡出土の十字形木製品をめぐって—」『物質文化』第41号 1983

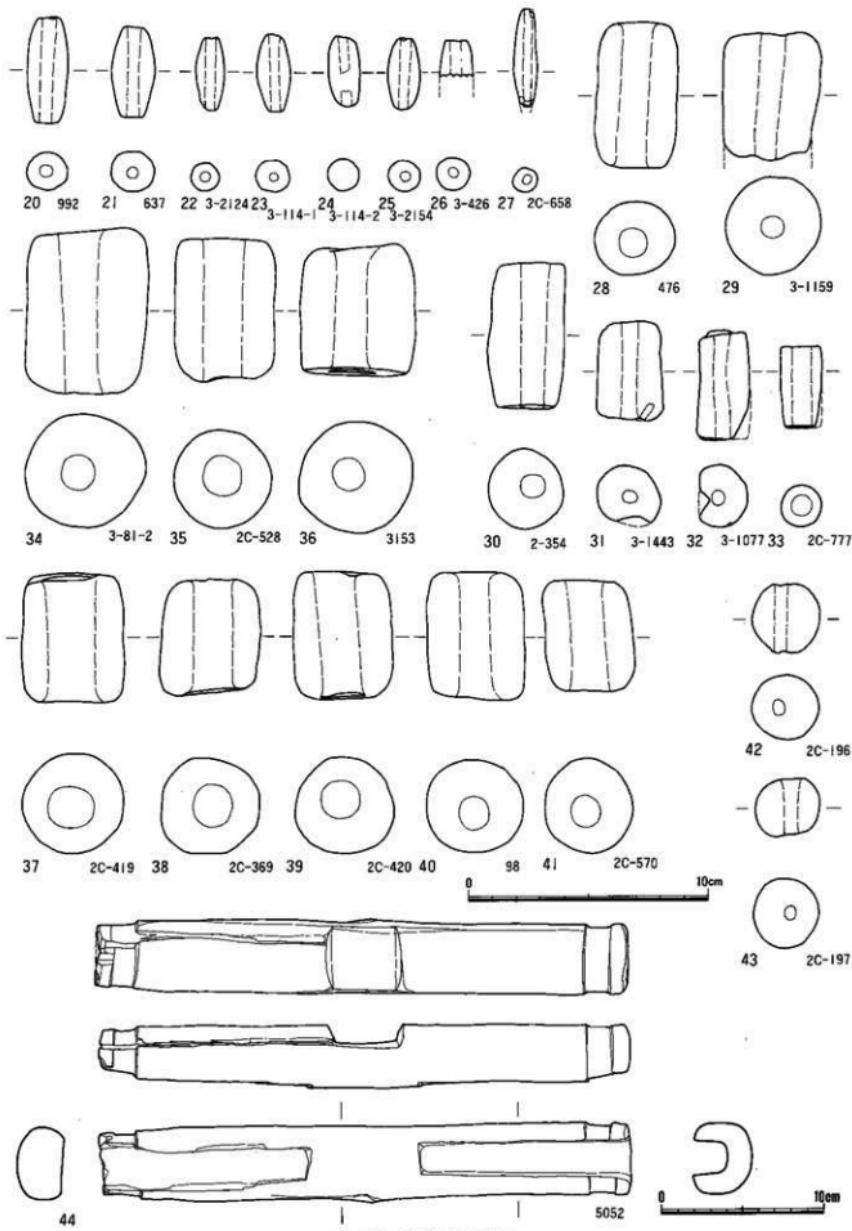
第11表 土錠一覧表

()は残存値

図 番 号	地 区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	形態	全 長 (cm)	径 (cm)	孔径 (cm)	重 量 (g)	備 考
4	西大谷8区	A44	灰色シルト層	2C-758	A	5.65	3.72	1.76	(58.9)	1/4欠損
5	西大谷1区	E43	砂礫下層	1027	A	(5.94)	3.66	1.92	(54.8)	1/2欠損
6	宮川4区	J98	粘土混砂礫層	3-2497	A	5.41	3.96	1.31	50.1	完形
7	水上11区	C85	S D658暗茶褐色粘土層	3 19	A	5.98	3.73	1.28	74.6	〃
8	西大谷6区	M30	暗灰色粘土層	2B-24	A	5.54	3.14	0.74	(45.3)	1部欠損
9	宮川6区	E104		3-2116	A	4.06	2.14	0.79	16.5	完形
10	水上1区	K56	S R90	2-345	A	3.80	1.90	0.75	15.4	〃
11	〃	"	S R150	2 359	A	3.86	3.27	0.76	34.7	〃
12	水上1区			2-473	A	3.12	2.46	0.94	(16.0)	1部欠損
13	西大谷1区	F40	砂礫層	422	B	13.50	5.03	1.28	(370.1)	〃
14	〃	F42	〃	787	B	12.58	5.46	1.35	(380.6)	〃
15	水上6区	I52	灰色砂質層	2-123	B	(8.82)	4.37	1.22	159.5	〃
16	宮川6区			3-2975	B	9.03	2.43	0.66	(41.0)	〃
17	〃	C108		3 2156	B	7.08	1.72	0.41	(20.1)	〃
18	宮川4区	M94	S R56	3-1171	B	(7.37)	2.13	0.66	(30.0)	指頭圧痕あり
19	宮川6区	F103	S R312	3-645	B	6.52	3.00	0.98	58.7	完形
20	西大谷1区	E43	砂礫層	992	B	4.38	1.68	0.55	13.7	〃
21	水上7区	I75	旧大谷川砂礫 茶褐色粘土層	3-637	B	3.62	1.79	0.47	8.3	〃
22	宮川6区	C108		3-2124	B	3.05	1.19	0.39	(3.4)	1部欠損
23	水上10区	H66	黃褐色白色 ブロック粘土層	3-114-1	B	3.20	1.40	0.36	4.8	完形
24	〃	〃	〃	3-114-2	B	2.79	1.31	0.36	(4.5)	完透孔でない
25	宮川6区	C108		3-2154	B	2.91	1.34	0.40	4.3	1部欠損
26	〃	E104		3-926	B	(1.48)	1.39	0.35	(2.7)	1/2欠損
27	西大谷8区	B43	中世シルト層	2C-658	B	3.88	0.94	0.41	(3.4)	1部欠損
28	西大谷1区	E41	砂礫層	476	C	6.04	3.27	1.26	74.3	完形
29	水上10区	F75	砂礫混灰青色 粘土層	3-1159	C	(5.18)	3.92	0.84	(75.2)	1/3欠損
30	水上1区	K55	S R150	2-354	C	6.08	3.18	1.04	66.3	完形
31	水上7区			3-1443	C	4.20	2.63	0.65	(29.8)	1部欠損
32	水上10区	E76	S D765	3 1077	C	4.51	2.04	0.57	(21.4)	〃
33	西大谷8区	B44	砂礫層	2C-777	C	3.30	1.73	0.82	(9.7)	1/5欠損
34	水上3区	J66	S P464	3 81 2	D	6.77	5.00	1.40	174.0	古墳前期
35	西大谷7区			2C 528	D	5.90	4.15	1.70	93.6	〃
36	水上3区	K67		3-153	D	5.41	4.77	1.36	127.7	〃
37	西大谷7区	J34	8層	2C 419	D	5.20	4.17	1.95	79.8	古墳前期
38	〃	〃	〃	2C-369	D	4.78	4.07	1.63	56.4	〃
39	〃	〃	〃	2C-420	D	5.29	4.05	1.65	68.6	〃
40	西大谷1区	I35	灰黒色粘土層	98	D	5.34	4.00	1.26	79.0	〃
41	西大谷7区			2C 570	D	4.60	3.60	1.32	63.1	〃
42	〃			2C-196	E	2.85	2.80	0.50	18.7	丸玉か?
43	〃			2C 197	E	2.35	2.62	0.55	16.8	〃



第58図 渔捞具実測図 1



第59図 漁撈具実測図 2

第3節 生活用具

1. 木製容器 (第60図～第67図)

(1) 挞物

a. 白木作り (第60図)

ロクロ仕上げだけを行い漆をかけないものが7点出土している。椀が3点と皿が4点である。いずれも加工は粗く、ロクロ整形痕を残すものが多く、底部外面にロクロの爪痕を残すものが4点ある。木取りは全て横木取りである。

1は、平高台を持つ椀で腰が張らずに口縁部は外傾する。2の椀は推定口径15.8cmに対して器高3.0cmと1よりさらに体部が外傾して扁平である。わずかな掘り込みにより、底面外縁に形式的な輪高台を作り出している。3は、口径が9.8cmと1・2と比べかなり小型の椀であり平高台を有する。体部は緩やかに立ち上がり、口唇部が直立気味である。

皿はいずれも高台を有しない。4は底部の器壁が特に厚く、口縁部はあまり外傾しないと思われる。底部には顯著なロクロ爪痕が5つ残る。5も4同様直立気味に立ち上がり、底部と体部の境は明瞭で皿としては深めのものである。6・7は口径20cm以上とかなり大型で、口縁がかなり外傾するタイプである。特に6は扁平であり、内面底部には無数の刃痕が認められる。

なお、4は中世河道S R201から、その他のものもいざれも旧河道内からの出土である。

b. 漆器 (第61図)

漆椀22点、漆盤1点、合計23点が出土している。旧河道内の中世流路・中世層位から出土したものが多いため。全て横木取りで、ロクロを使用して挽きだされている。漆が厚く丁寧に塗られているものは、表面も滑らかに仕上げられているが、塗りが薄いものには、ロクロ削りの稜線が明瞭な粗い仕上げのものが多い。器体は、腐食が進みろくなつたものが多く、土圧で亞んだものも數点あり、残存状態は良好ではない。(完形品ではなく、特に高台が欠損したものが多い)。

内外面とも黒漆塗りのものが12点、内外面とも朱漆塗りのものが2点、内面朱漆塗り、外面黒漆塗りのものが8点、外面のみ黒漆塗りのものが1点ある。下地塗りを施したと思われるものが5点認められるが、黒漆を使用したのか、その他の黒色塗料を用いたのか判別しにくいものもある。文様は全て、黒漆の上に朱漆で、外面体部に描かれている。筆で描かれ、スタンプを用いたものはない。

漆椀の形態は、平面形が円形のもの(1～19)と、長橢円形のもの(20～22)に大きく分かれる。長橢円形のものの側面形は両端が高い舟形を呈する。口径が15cm～16cmと大きいのに比し、器高は4cm～5cmと低くて浅い形態で、汁椀とは違う用途のものであると思われる。平面円形のものは、さまざまの形態が見られるが、高台の形状により一応以下のように分類を試みた。

A類——厚い平高台をもつもの (1・2)

2点とも大型で器壁が厚く、腰が張る。1は、口縁に向かい垂直的に立ち上がる。

B類——高い輪高台をもつもの (3・4)

2点とも大型であるが、A類と比べ、器壁は薄い。4は、体部が内湾ぎみに立ち上がる。

C類——低い輪高台をもつもの（5～12）

5の高台はやや高く、6・12の高台は外傾する。7・8・9・11は輪高台の痕跡だけが残り、欠損しているので、高さは推定できないが、体部の形状からこの類に入れた。A類、B類に比べて体部は緩く立ち上がるものが多く（10は腰部に稜があり、かなり垂直に立ち上がる）やや浅いタイプの椀である。口径17cm近い大型から、10cm程度の小型のものまである。

D類——薄い平高台をもつもの（13～19）

5mm～1cm程度の低い高台を削りだし（17は、ほとんど無高台に近い）、体部はゆるやかに立ち上がり、B類よりさらに口径に比し器高が低いタイプが多い。口径17cmを超す大型品から13cm程度の中型品まである。

1点のみ出土している漆盤（23）は、器壁はかなり厚く、体部はゆるく立ち上がり、高台はない。体部外面の下部のみに黒漆が塗られており、同部分には明瞭なろくろ痕が認められる。他の椀類と異なり素地は明茶色を呈し、木目もかなり細かい。

（2）削物（第62図～第64図）

全部で10点出土している。全て白木作りで、横木取りをしている。内外面とも刃痕を残し粗い削りのものが多い。10点のうち容器は7点であり、残り3点は、物をすくうための道具と思われる杓子状木製品であるが、この項目で扱うこととする。1～4は長方形盤とした。槽とするには小型のものであり、底面に平坦面を有しないものもある。1・2は、平面形が長方形を呈す。1の底部は内外面とも中央部がやや盛り上がり、底部から口縁部が斜めに立ち上がる。器壁は短辺が厚く、長辺が薄い。2は平坦な底部から口縁部が斜めに立ち上がるが、短辺はかなり外傾し（片側は外反気味である）、長辺は直立する。上端部は短辺の方が厚い。3は1・2と比べ深く、長辺部はやや湾曲し、中央部が低く、両端部が高く、側面形は、舟形を呈する。4は、底部外面は平坦であるが、内面は口縁部からV字状に割り込まれ、平坦面はない。加工も粗いので未製品かとも思われる。5は、把手付の槽である。長さ5cmほどの断面円形の把手が短辺側壁に現存するが、欠損している反対側の側壁にも、存在していたものと推定される。6は、平面形が長方形でかなり深い角鉢の未製品と思われる。短辺と推定される方の内面は垂直に近い角度で削り込まれ、外面は底部から斜めに立ち上がる所以器壁はかなり厚い。長辺側は、内外面の立ち上がり角度が近似しており器壁は薄く、大きな切削面をいくつか残す。7は円形の皿であるが、ロクロ整形はなされていない。底部は内外面とも平坦で、口縁部からの割り込みは浅く、かなり肥厚である。体部の壁も厚く、内外面とも調整は粗い。以上7点はいずれも旧河道内出土であり、古墳時代後期の多量の土器を中心とする遺物の集中部からのものが多い。

7～9は大型杓子状木製品とした。7・8はほぼ同一の形態を呈するが、8の方がやや浅い。断面が円形に近い把手を身の上端に作り出し、身の内面はV字状に割り込み、外面をかなり削って薄い先端部を作っている。現在の塵取りによく似た形状である。『弥生文化の研究』で十能形容器と呼んでいるものにやや類似するが、それらと比べ底部が狭く、容器とは言い難い。伊場遺跡出土の類似品は漁具に分類され、「あかだし？」とされている。9は、把手の付き方、底部と先端部の角度等7・8とはかなり異なり、別の形態、用途のものである可能性も強い。未製品であると思われる所以判断できない。本品と7

はいずれも弥生時代後期末～古墳時代初頭の溝状遺構 S D215出土であり、8は旧河道内出土である。

(3)曲物（第65～第67図）

全部で33点出土し、そのうち円形曲物が30点、楕円形曲物が1点、折敷が2点ある。

円形曲物のうち側板と底板ないし蓋板が結合した状態で存在するものはわずか2点（1・2）しかなく（1は側板の2箇所に径2cmほどの円形の穴があけられており、柄杓と思われる）、側板のみのものが10点、底板と思われるものが6点、蓋板と思われるものが12点である。

側板は厚さ0.2cm～0.3cmの板が用いられ、曲げやすくするために内面に平行する数条のケビキを入れたものが4点、内外面ともに入れたものが1点ある。上下端とも欠損しないものは7点で、その幅は6.4・6.4・6.0・4.5・3.1・2.7・2.6cmである。桜皮、木釘で蓋板ないし底板と結合した痕跡を残すものではなく、蓋の側板か身の側板か判断できるものはない。木取りは板目材が2点あり、その他は柾目材である。側板が縫じられていて径がわかるものが5点あり、それぞれ17.8・15.8・15.5・13.3・12.8cmと極端に大型のものや小型のものはない。縫じ方は全て1列のものばかりである。なお内面全体に黒漆を塗布したもののが1点ある（10）。

次に底板と蓋板であるが、側板の中にすっぽりはめ込まれ、外側から木釘を打ち込んで固定する「クレゾコ」の作りのものを底板、内周に段や刻線を有し、桜皮で側板と結合され、側板の外側にはみ出す「カキイレゾコ」の作りのものを蓋板として一応区別した。底板の厚さは1.1～0.5cm、径は推定長27.0cm⁽⁴⁾の大型のものから11.0cmのものまである。27.0cmの大型のもの（13）が板目材であり、他は柾目材を使用している。板がほぼ完存するものが3点あり、木釘による結合箇所は、それぞれ3箇所、2箇所、1箇所である。その他のものは結合の数を推定できない。なお、14の内面と思われる側には、黒漆が全面に塗布され、無数の方向が定まらない刃物痕が認められる。

蓋板は、周縁を低く削り、内周が段をなすものがほとんどで、内周を線刻しているものが、1点、段も刻線もなく内周相当部分に桜皮が残存することにより、蓋板とわかるものが2点ある。形態としては、段をなすの方が古いようである。大きさは、内径が18cm台のものから11cm台までむらなく存在し、分類はできないが、底板に見られたような大型のものはない。厚さは0.9～0.5cmであるが、0.5cmのものが4点と最も多く、底板と比べ薄い傾向にある。木取りは、柾目材6点（1点追柾）、板目材6点とほぼ半々である。内周の内側と外側に桜皮を通す切れ目があけられ、多くのものに桜皮が残存する。板の残存状態の良いものから推定すると、側板との結合箇所は4箇所のものが多いと思われる。

31は把手付の楕円形曲物の底板である。長さ57.6cm、幅37.1cmと大型のもので、左右対称に長さ14cm、幅2cmほどの把手を割り出している。内周は、外縁部をわずかに残した所から斜めに深く削り込まれて段をなし、その段に側板を結合するための木釘を12箇所ほど均等の間隔で打っている。そのうち木釘が残存するものは3箇所である。

30は折敷である。長さ29.1cm、幅25.5cmと方形に近い。両短辺のほぼ中央部には棟を結合する桜皮が残存する。両長辺の中央部にも桜皮が残存するが、皮を通す切れ目は、内面には棟と直交する方向に1つしかなく、外面には2つあり、どのように棟を結合したか推定しにくい。棟は4隅部で折損しており、重なる端部は桜皮で縫じられている。29も折敷の棟である。

これらの曲物は、15が水上10区のS E 651から出土している他は旧河道出土である。そのうち特に宮川4区が16点と多いのが目立ち、遺構出土のものは、宮川4区S R 55・1点、SR56・2点、宮川6区S R 312・3点、S R 313・1点といずれも古墳時代後期～奈良時代の遺構からである。これら遺構の性格からしても曲物が単なる生活用具以外の用途で使用された可能性もある。

- (1) 『弥生文化の研究5 道具と技術1』 雄山閣 1985 P202
- (2) 浜松市教育委員会『伊場遺跡遺物図録1』 1978
- (3) 奈良国立文化財研究所『木器集成図録・近畿古代編』 1985 P47～P48
- (4) 註(3)及び福島県教育委員会・日本国有鉄道『御山千軒遺跡』東北新幹線関連遺跡発掘調査報告VI 1983
- (5) 註(3)に同じ

第12表 挽物（白木作り）一覧表

[] は推定値 () は残存値

図 番号	地 区 グリッド	遺構・層位 遺物番号	名稱	法 量 (cm)				樹 種	木取	特 徴
				口 径	器 高	高台径				
1	西大谷4区 Q23	暗灰色粘土 2-1405	椀	15.9	4.3	9.2		ケヤキ	横木 取り	内外面ともロクロ整形痕あり。高台部にロクロの爪痕が明瞭に残る。口縁部欠損。
2	西大谷4区 Q23	セクション 2-1500	#	[15.8]	3.0	[6.4]			#	亞があり、木の状態が悪く、ロクロ整形痕を観察できない。浅い椀で1/6が残存する。
3	宮川4区 199	黒色砂 3-2759	小碗	[9.8]	1.9	[6.4]			#	小型の浅い椀で、外面にロクロ整形痕がある。底部が多少変形し、ロクロの爪跡が3ヶ所認められる。1/2欠損。
4	宮川5区 A108	S R201 3-133	皿	(11.9)	(1.6)	10.7			#	底盤の器壁が厚い皿である。外面底部には明瞭なロクロの爪痕を5つ残す。口縁部欠損。
5	宮川4区 N93	暗灰色砂混粘土 3-555	#	13.7	2.6	10.9			#	かなり丁寧な削りの皿で黒色を呈す。体部は、あまり外傾しないで立ち上がる。底面及び体部に小孔が4ヶ所認めてある。外面底部にロクロの爪痕が残る。口縁部一部欠損。
6	西大谷 1・2区 E44	7009	#	20.4	1.2	17.6			#	大型で体部がかなり緩く立ち上がる。口縁部もかなり滑らかで、丁寧な作りである。内外面ともロクロ整形痕が明瞭に残る。1/10欠存。
7	宮川4区 J98	粘土混砂器 3-2577	#	22.8	1.2	18.8			#	大型で体部がかなり外傾する。偏平な皿である。器体の状態が悪くかなり脆い。内面底部に無数の刃痕が認められる。一部欠損。

第13表 挽物（漆器）一覧表

〔 〕は推定値 () は残存値

図 番号	地 グリッド	区 遺構層位	遺 物番号	器 種 遺 物状態	口 径 高 度 高台径(底径)	樹 種	文 様	特 徴
1	西大谷 6区 N29	暗灰色 シルト 2B-022	椀 3/5欠損	[16.2] [9.8] [8.0]	ケヤキ 不明	高台が高く、器壁が厚いタイプである。内面朱漆、外面黒漆塗であるが、残存部分は少ない。外面部には、朱漆で線が記されているが、図柄は不明である。		
2	宮川	5015	椀 1/4欠損	[15.3] [8.3] 6.6	鶴と 松？	内面は黒漆の上に、朱漆の重ね塗。外側は黒漆塗の上に朱漆で数ヶ所に鶴と松の葉かと思われる文様が描かれている。高台は高く、器全体がかなり歪んでいる。		
3	西大谷 6区 N30	暗青灰色 粘土 2B-055	椀 1/2欠損	[14.0] [8.7] [6.8]	ブナ 梅の 花弁	内面朱漆塗、外面黒漆塗、外面部には朱漆で、梅の花弁を描く。盤は丁寧で全体的に残りも良い。器体は激しく歪んでおり、やや脆い。		
4	西大谷 4区 B42	中世 シルト 2C-587	椀 1/2欠損	[14.1] 8.7 [8.8]	鶴と 葉	内面は朱漆塗。外側は黒漆の上に朱漆で鶴と植物の葉を2組描く。口縁部がわずかに内溝し、器壁は比較的薄く丁寧な作りである。		
5	宮川4区 J99	黒色砂 3-2462	椀 1/2欠損	[16.9] 6.8 [8.3]	無文	内外面ともにハケ様のもので黒漆を塗った痕跡があり、非常に薄く部分的に残存する。体部にはロクロ削りの幾筋かが明瞭に認められ、高台内部にロクロのツメ痕が残る。		
6	西大谷 8区 B42	中世 シルト 2C-586	椀 2/3欠損	[13.6] [5.8] 7.6	ケヤキ 不明	内外面とも黒漆塗。比較的塗は厚いが剥落が激しい。朱漆の線が内外面とも數ヶ所認められるが、図柄は推定できない。高台内部中央に1本の沈線。		
7	宮川6区 E105	S R314 3-1496	椀 2/5欠損	(15.0) (5.0) 4.0	無文	内外面とも黒漆塗（外面底部には漆は残存しない）。塗は薄いが残存状態は良好。刷毛に刃の跡が残る。		
8	宮川4区 L95	暗灰色砂 混り粘土 3-1209	椀 口縁部 欠損	(13.9) (5.0) [7.0]	//	内外面とも黒漆塗。残存状態が良好であるが、外面底部には漆はほとんど認められない。用途不明の小孔が底部を中心に10ヶ所穿たれている。		
9	西大谷 1区 H37	旧大谷川 内 303	椀 2/5欠損	(13.7) (3.6) 7.6	鶴と 葉	内面は黒漆の上に朱漆を重ね塗している（底部は殆ど剥落）。外側は黒漆を塗り、朱漆で鶴と植物の葉2組を描く。高台内部に朱漆が一部付着。		
10	水上10区 F75	近世砂礫 3-823	椀 1/2欠損	(12.4) (5.5) 6.7	無文	内外面とも黒漆の上に朱漆を重ね塗している。朱漆の剥落が激しく、器体も脆い。		
11	宮川4区 L97	3-3862	椀 5/6欠損	(11.0) (3.8) [6.0]	//	内面朱漆、外面黒漆塗。塗りは非常に丁寧で厚く、剥落もない。高台部欠損。		
12	大谷川 試掘坑	2-456	椀 2/5欠損	[10.3] [3.7] [6.4]	三ッ 巴紋 刷毛？	内面は黒漆の上に朱漆を重ね塗し、外側は黒漆の上に朱漆で丸の中に三ッ巴紋と扇形の図柄を描く。		
13	西大谷 2区 D45	灰茶粘土 3620	椀 3/4欠損	[17.4] (5.4) [8.8]	無文	内外面とも黒漆塗（外面底部には漆なし）。塗りは薄い。器体は脆くかなり歪んでいる。内外面ともロクロ整形痕が明瞭で削りが粗い。		
14	西大谷 4区 Q22	暗灰色 粘土 2-1221	椀 1/3欠損	[15.5] [4.9] [8.7]	ケヤキ 無文	内面は朱漆（底部剥落）、外側（底部を除く）は黒漆が塗られ、朱漆で文様が描かれている。器の状態、漆の状態とともにやや良好である。ロクロ成形痕は認められない。		
15	西大谷 6区 N29	暗灰色 シルト 2B-023	椀 2/5欠損	15.0 5.7 7.6	ケヤキ 鶴と 葉	内面は朱漆（底部剥落）、外側（底部を除く）は黒漆が塗られ、朱漆で文様が描かれている。器の状態、漆の状態とともにやや良好である。ロクロ成形痕は認められない。		
16	西大谷 2区 D45	灰茶粘土 5019	椀 口縁部 一部欠損	[14.1] 8.5 [4.3]	ケヤキ 無文	内外面とも黒漆塗。塗りは粗い。体部に刃物による大きな削り痕が6つ残る。高台のつけ根部分に左右対称に小さな孔が穿たれています。		

図番号	地 グリッド	遺構・層位 遺物番号	器 種 遺存状態	口 幅 高 台 径 (底径)	樹種	文様	特 徴
17	宮川3区 3-860	暗灰色 粘土	楕 3/5欠損	(14.0) (4.0) [7.8]		不明	内外面とも黒漆塗(外面底部には漆は認められない)。体部内外面には朱漆で文様が描かれているが認柄は推定できない。器体はかなり脆い。
18	西大谷 4区 R22	暗灰色 粘土 2-1191	楕 2/3欠損	(13.8) (3.5) [9.0]	ケヤキ	無文	内外面とも黒漆塗、内面底部及び高台部には剥落により漆は殆ど認められない。外面部の上部に、平行する沈線が3条刻まれている。
19	宮川3区 M92	S R 487 3-764	楕 3/4欠損	[14.7] [3.3] [8.0]		//	内面朱漆塗。外面は黒漆を下塗りし、朱漆を上塗りしている。器の状態はかなり脆く。漆の剥落も激しい。
20	宮川3区 J94	S R 486 3-467	楕 ほぼ完形	16.3 (5.0) 8.6		//	内外面とも黒漆塗。器の状態は良好である。器高は中央部が低く、両端部に向かって緩やかに高まる。平面形は長橈円形容である。
21	宮川4区 I99	3-2579	楕 1/5欠損	15.1 (4.0) 8.2		//	内外面とも黒漆塗(外面底部には、漆は残存しない)。器高は、中央部が低く、両端部に向かって緩やかに高まる。平面形は長橈円形容を呈す。
22	宮川3区 K94	S R 486 3-639	楕 1/3欠損	[15.6] (4.2) [9.3]		//	内外面とも黒漆塗(高台部には残存しない)。器の状態漆の状態とも良好で、器形はやや横長である。
23	西大谷 4区 T21	黒色砂礫 2-884	皿 1/3欠損	14.4 2.0 9.1	ヒノキ	//	円形・平底の皿で、外面部の下部に、黒漆が部分的に残存している。材は全体に明茶色を呈し、木目是非常に細かい。体部の下部にロクロ痕が明顯に残る。

第14表 考物一覧表

〔 〕は推定値 () は残存値

図番号	地 区 グリッド	遺構・層位 遺物番号	名 称	法 量 (cm)			樹種	木取	特 徴
				長 さ	幅	高 さ			
1	宮川2区 H101	5008	長方形盤	27.6	11.3	2.4	スギ	横木取り	かなり偏平なタイプであり、内面底部が盛り上がっている。木目の粗い材を使用し、調整もやや難である。外面底部には加工痕が6ヶ所残る。1/3欠損。
2	西大谷 1・2区 D46	灰茶粘土 5528	//	22.8	10.5	2.4	カシ	//	体部の底部からの立ち上がりは明瞭であるがかなり外傾し、器高は低い。底部に2ヶ所小孔がある。内部側面には3条の大きな削り痕がある。ほぼ完形。
3	宮川2区 H102	5017	//	25.0	16.1	4.3	スギ	//	中央部がやや膨らみを持つ。端正な形態で加工も精緻で表面は滑かである。内面において底部と体部の区別が不明瞭で僅く立ち上がり。一部欠損。
4	宮川2区 H101	5002	//	19.4	12.5	4.5	スギ		中央に向かってV字形に割り抜かれ、内面底部には平坦な面はない。内厚で調整も粗く、内面には多くの刃痕が残る。一部欠損。
5	宮川2区 H101	灰色粘土 5382	楕	(33.3)	(11.8)	3.4		//	5.1cmの柄を有する。面取りがされて丁寧な仕上げである。底部からの立ち上がりは明瞭で、体部器壁はやや厚い。2/5欠損。
6	西大谷 1・2区 E43	5374	角鉢	(32.8)	(9.9)	9.3	スギ	//	製作途中で大きく二つに破損したものと思われ、加工は粗い。腐食が進んでいるため刃痕等は認められない。底部は比較的薄い。側板は1面が非常に厚く、1面は薄く作られ、いずれも直立気味に外傾する。かなり深目の容器であるが、欠損のため全体の形状は不明。

回 番号	地 区 グリッド	遺構・層位 遺物番号	名 称	法 量 (cm)			樹種	木取	特 徴	
				長 さ	幅	高 さ				
7	宮川4区 J98	粘土混砂礫 3-2599	皿	(口徑) 13.3	(底径) 8.7	(器高) 2.3		//	刺込みがかなり浅い円形の皿である。外外面とも削りは粗く、刃痕が残る。体部に1つ貫通孔があり、外面底部を横断する4.2cmほどの孔が穿たれている。いずれも目的は不明。	
8	西大谷5区 O26	S D125 2B-007	大型杓子 状木製品	26.6	18.7	8.7	スギ	//	上部はU字形をなし、底部に向かってかななり鋭い角度で削込まれている。そして、その面には明瞭な跡をもって先端部に向かって緩く立ち上がる平坦面が作られている。柄は上面だけが平坦に削られ、あとは丸く、先端まで1cmを余すところには幅3mm程度の溝を有す。この溝から先の部分には削り痕が見られるが、全体の加工は丁寧である。一部欠損。	
9	水上7区 174	3-1655 3-1656		//	43.0	(14.0)	5.5		//	大型で浅いタイプである。底部から先端部に向かって緩く、基部に向かっては急角度で削り込まれている。材の木目は細い。加工は比較的丁寧であるが所々に刃痕が残る。1/4欠損。
10	西大谷5区 O26	S D125 2B-121	大型杓子 状木製品?	(39.4)	24.2	(6.8)	スギ	//	加工が粗く未製品と思われる。表側は周辺部から中央部に向かって浅くならだかに削り込まれ、中央に一段深く窪んだ部分がある。多くの刃痕が残る。裏側は、割った面がそのまま残り、側面も切り取っただけで調整はなされていない。柄の先端が欠損している。	

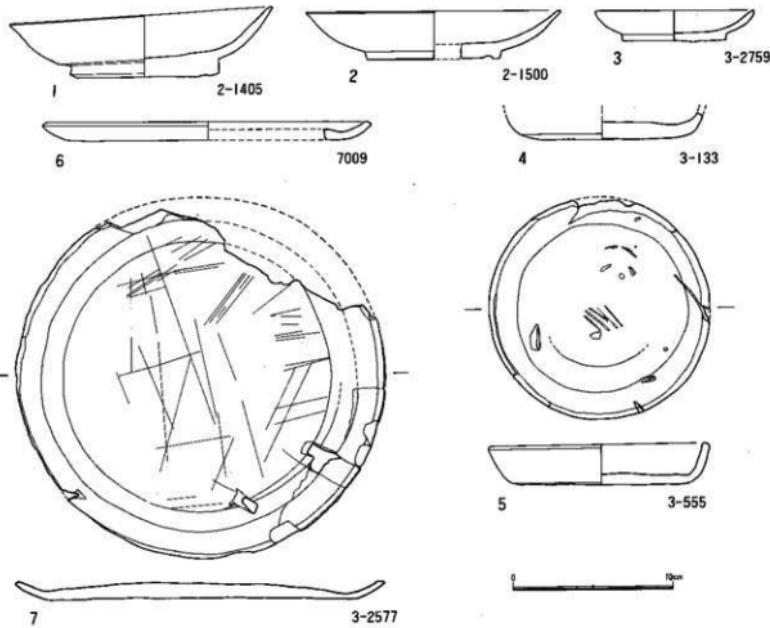
第15表 曲 物 一 覧 表

〔 〕は推定値 () は残存値

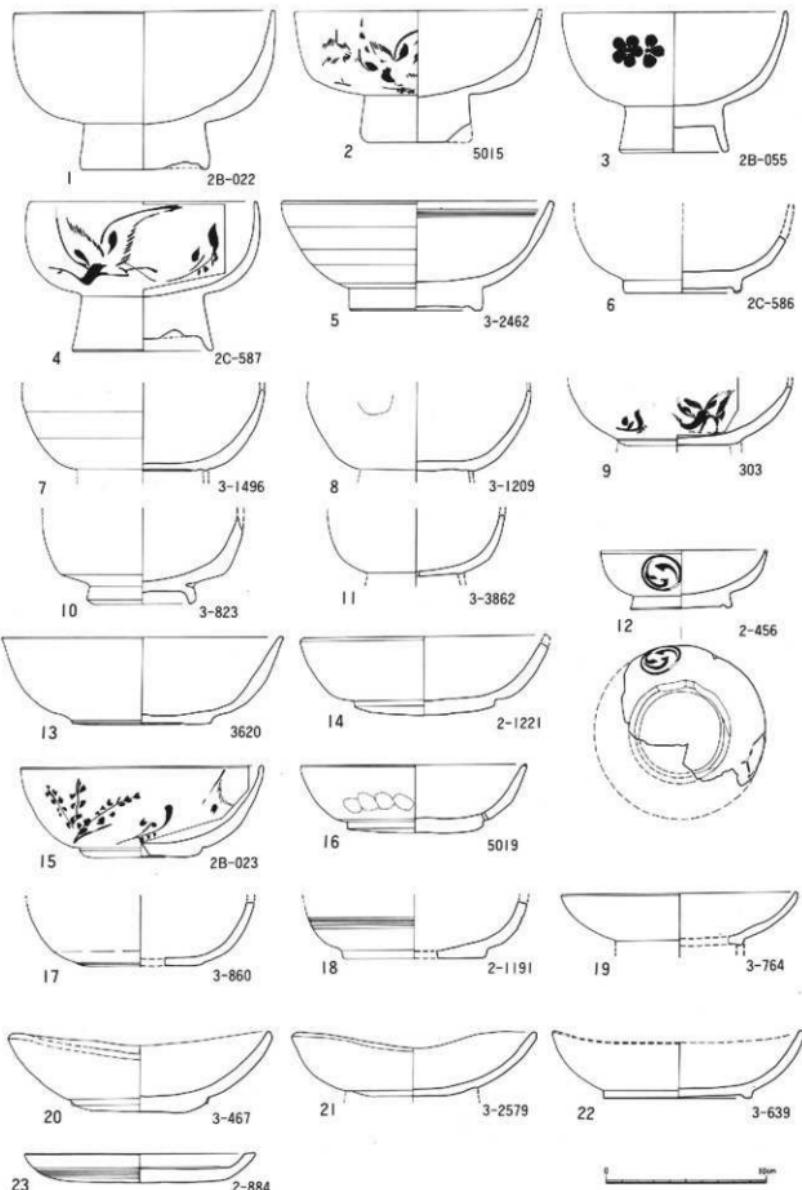
回 番号	地 区 グリッド	遺構・層位 遺物番号	名称	法量(cm)	樹種	木取	特 徴
1	宮川4区 O93	暗灰色砂混粘土 3-193	円形 曲物	径13.3 円周41.8 幅(7.0)	側板 板目 底板 板目		側板は1箇所板皮で縫じられる。下部には側板の上にもう1重ねがめられ縫は1箇所板皮で縫じられている(1列外2段)。底板には2箇所木釘で結合されている。側板の2箇所が円形に削り抜かれているので、柄穴かと見られる。
2	宮川4区 N93	暗灰色砂混粘土 3-295		径12.8 円周40.2 幅(2.25)	側板 板目 底板 板目		下部には側板に重ねて幅1.5cmほどの縫がめられ縫は1箇所板皮で縫じられている。木釘は縫の上から3箇所ほど均等な間隔で打たれ、うち2本が残存する。
3	宮川6区 E105	S R312 3-1235-2	円形 曲物 側板	径15.5 円周48.7 幅6.0	板目		外側端近く(1列6段)と内側端近く(1列内3段)の2箇所を縫じている。その他下部に2箇所板皮が残存する。3-1235 1とセットをなす可能性もある。
4	宮川6区 E105	S R312 3-1235-1		径15.8 円周49.6 幅2.6	//		上下端とも残存し、縫は抜く縫の側板と思われる。2箇所を板皮で縫じる(1列内1段)。側板が重ならない所にも1対の切り目があり、桜皮残存。4つの穴があけられているが不ぞろいで木釘穴と考えにくい。
5	宮川6区 G103	S R313 3-1230		径17.8 円周55.9 幅6.4	//		左回りに曲げ、1箇所を桜皮で縫じる(1列外3段縫じ)。上下端とも残存するが、底板はなく、結合した木釘穴も認められない。
6	宮川4区 J98	粘土混砂礫 3-3199		長さ(23.3) 幅4.5 厚さ0.2	板目		外側の端の上下を弧状に削り、縫を抜くした部分と内側の板をまたいで桜皮によって縫じる。変則的な3列内1段縫じである。さらに内面の縫は1列内2段で縫じられている。
7	宮川4区 N93	暗灰色砂混粘土 3-1099		長さ(14.7) 幅2.7 厚さ0.3	//		上下とも残存し、縫が狭く、弯曲していないので、長方形曲物の側板の可能性もある。1cm間隔の1列内1段縫じである。

番号	地 区 グリッド	遺構・層位 遺物番号	名称	法量(cm)	樹種	木取	特 徴
8	宮川4区 O93	S R55 3-2469	//	長さ(22.9) 幅(3.0) 厚さ0.2	//	//	かなり脆く数片に分離している。内面に縦平行線のケビキが入れられている。
9	宮川4区 N94	S R56 3 604	//	長さ(17.0) 幅(3.1) 厚さ0.2	//	//	2.2cmと広い間隔で1列内1段継じされていたことがわかる。桜皮の下に、結合された側板の断片が残る。内側に斜平行線のケビキ痕あり。
10	宮川4区 O93	暗灰色砂混粘土 3-190	//	長さ(9.8) 幅(3.1) 厚さ0.3	//	//	内面に縦平行線のケビキが入れられている。内面のみに黒漆が塗られている。
11	宮川3区 L92	粘土混砂礫 3-2488	//	長さ(37.7) 幅(6.4) 厚さ0.3	//	//	端部に1列内2段継じをした切れ目が存在し、5cm程内側にも狭い間隔で1対の切り目がある。斜平行線のケビキがなされている。
	宮川3区 J94	灰黑色粘土 3 583	//	長さ(14.1) 幅(5.0) 厚さ0.3	柵目		内外面に10数条の斜平行線のケビキが入れられている。桜皮が1箇所に残存する。
12	宮川4区 J99	粘土混砂礫 3-3572	円形 曲物 底板	径[17.5] 円周[55.0] 厚さ1.1	板目		木釘穴が3箇所認められる。3/5残存。
13	西大谷 1・2区 F40	砂礫 5337	//	径[27.0] 円周[84.8] 厚さ1.1	板目		かなり大型の曲物の底で木釘が1箇所に残存する。内面に黒漆が塗られ、無数の刃物痕が見られる。
14	水上10区 G72	S E651 3-1022	//	径15.7 円周[49.3] 厚さ0.75	柵目		木釘穴が1箇所認められる。ほぼ完存。
15	宮川4区 N93	暗灰色砂混粘土 3-1092 3-1095	//	径11.0 円周34.5 厚さ0.9	板目		木釘穴と思われる穴が1箇所あいている。かなり脆い状態である。3/4残存。
16	大谷1区	表採 2-025	//	径[15.4] 円周[48.4] 厚さ0.8	柵目		木釘穴が3箇所に分かれて計5つあけられ、内2つには木釘が折れて残存する。1/4残存。
17	宮川4区 L96	粘土混砂礫 3-2676	//	径[12.3] 円周[38.6] 厚さ0.5	//		径6mmほどの穴があけられ、側面から打たれた長い木釘が見える。1/4残存。
18	水上7区 H79	砂礫 3 867	円形 曲物 蓋板	内径15.2 円周[47.7] 厚さ0.6	//		内面内周は段をなす。側板を結合した桜皮は1箇所残る。2/3残存。
19	宮川2区 I101	灰色粘土 5049	//	内径[14.5] 円周[45.5] 厚さ0.7	//		内面内周は段をなす。破損して数片に分裂していく端部が炭化している。切り目が1箇所残る。2/5残存。
20	西大谷 1・2区 H39	砂礫 5334	//	内径13.9 円周[43.6] 厚さ0.8	//		内面内周は段をなす。側板を結合した桜皮が2箇所残る。3/5残存。
21	宮川4区 K98	暗灰色粘土 3-2899	//	内径[16.9]	//		内面内周は段をなす。側板を結合した桜皮が1箇所残る。1/4残存。
22	宮川4区 N94	S R56 3 658	//	内径17.3 円周[54.3] 厚さ0.8	板目		腐食が激しく9個に割れている。内面内周は段をなし、桜皮を通したと思われる切り目が2箇所認められる。1部欠損。
23	宮川4区 J99	粘土混砂礫 3-3593	//	内径[17.8] 円周[55.9] 厚さ0.9	//		内面内周はしっかりと段を作り出している。段をまたいで側板を結合した桜皮が2箇所残る。1/2残存。
24	大谷1区 T19	第4トレンチ 2-066	//	内径[13.1] 円周[41.1] 厚さ0.5	柵目		内面の内周は段をなす。段をまたいで側板を結合した桜皮が2箇所に残る。2/5残存。

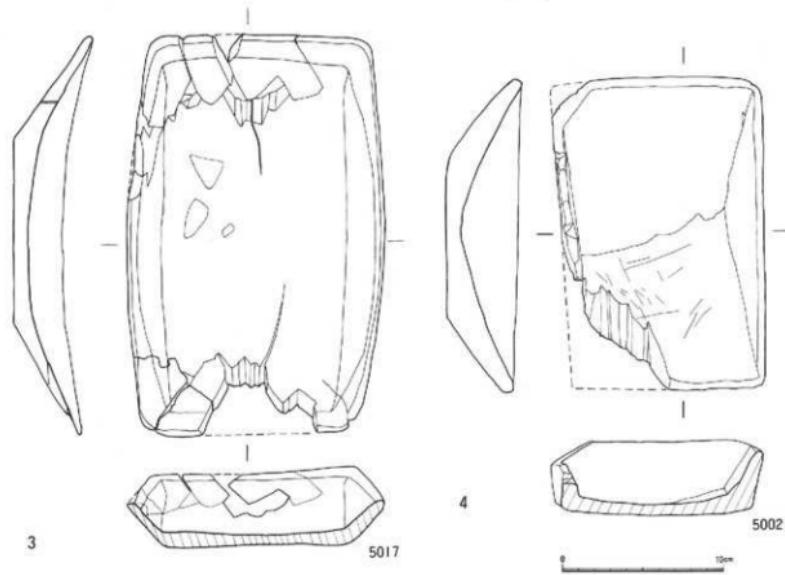
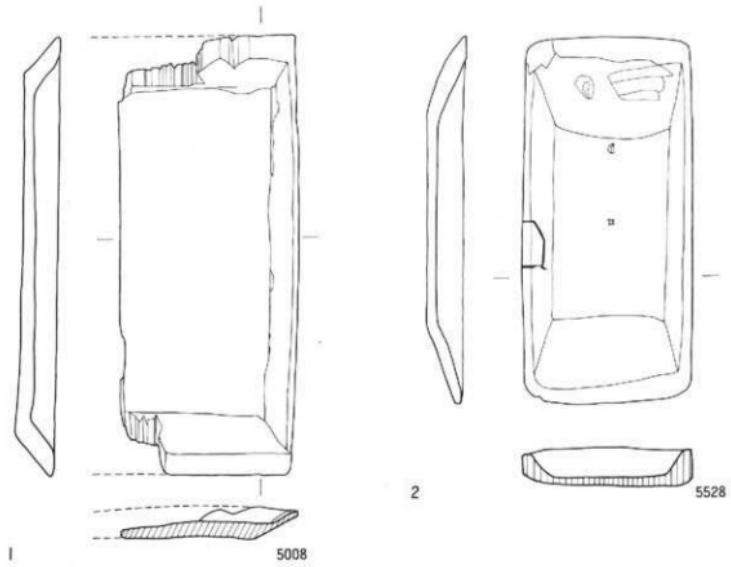
図番号	地・区 グリッド	遺構・層位 遺物番号	名称	法量(cm)	樹種	木取	特 徴
25	宮川4区 N94	暗灰色粘土混砂礫 3-328	"	内径[14.4] 円周[45.2] 厚さ0.5		板目	内面内周は段をなす。かなり調食が進んでいる。桜皮が1箇所残る。2/5残存。
	宮川4区 N94	暗灰色砂混粘土 3-556	"	内径18.7 円周[58.7] 厚さ0.9		造板	周縁の低い部分は、段に向かって斜めに削り込まれている。側板を結合した桜皮が2箇所対称な位置に残る。5/6残存。
26	宮川6区 F103	旧大谷川 3-246	"	内径[12.0] 円周[37.7] 厚さ[0.5]		板目	内面に段、線刻とも有しない。桜皮が1箇所に残る1/8残存。
27	西大谷 1・2区 E44	5330	"	内径13.2 円周[41.4] 厚さ0.5	"		内面内周は線刻され、それに沿うように、側板が当たった跡が黒く残っている。側板を結合した桜皮は4箇所に残存する。1/5欠損。
28	宮川6区 F103	S R312 3-111	"	内径[11.9] 円周[37.4] 厚さ0.7	"		内面にわずかに側板の当たった痕が残る。段もなく線刻も残らない。内周相当部分に桜皮が2箇所に残る。1/2残存。
29	宮川3区 J05	暗灰色粘土 標3 2151	折敷	長さ(21.8) 幅0.75 厚さ0.45		板目	断面四角形の細い棒状を呈し、やや湾曲している。桜皮が1箇所残存。両端欠損。
30	大谷1区 V18	粘土混砂礫 2-189	折敷	長さ29.1 幅25.5 高さ1.0		"	正方形に近い形状を呈し、四隅を面取りする。細い角棒状の模を有するもので、その模は隅部で4本に折れている。板には模が当たった痕が認められ、4箇所に桜皮を通した切れ目が認められる。
31	宮川4区 O93	粘土混黑色砂礫 3-654	把手 付搭 円形 曲物 底板	長さ57.6 幅37.1 厚さ1.7	スギ	板目	構造形を呈し、左右対称に把手部がある。内周の外側が溝状に掘られている。木釘穴が均等な間隔で12箇所あけられ、内3箇所に木釘が残存する。完形品。



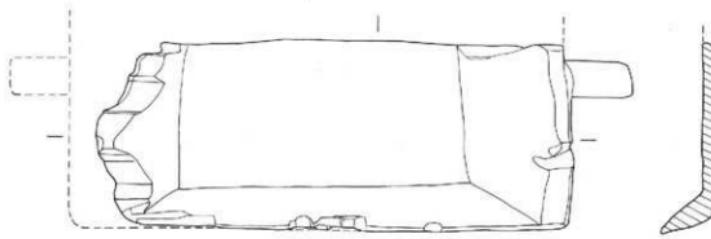
第60図 木製容器実測図1 挽物



第61図 木製容器実測図2 漆器

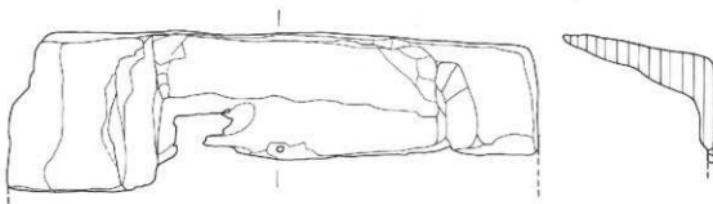


第62図 木製容器実測図 3 制物



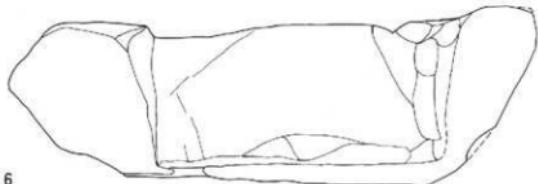
5

5382



6

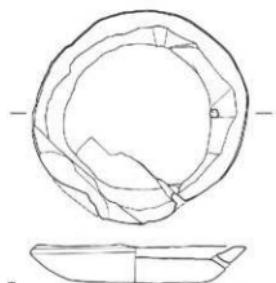
5374



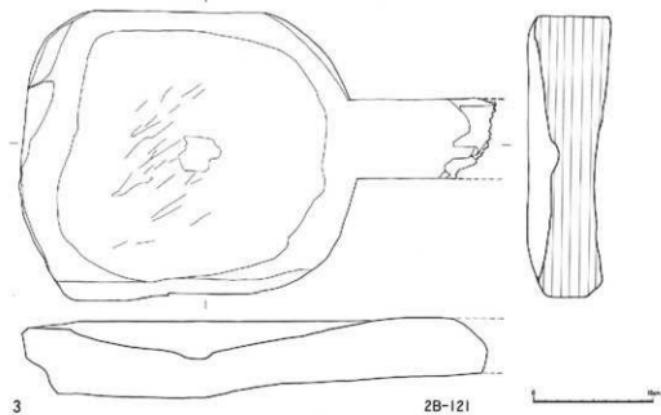
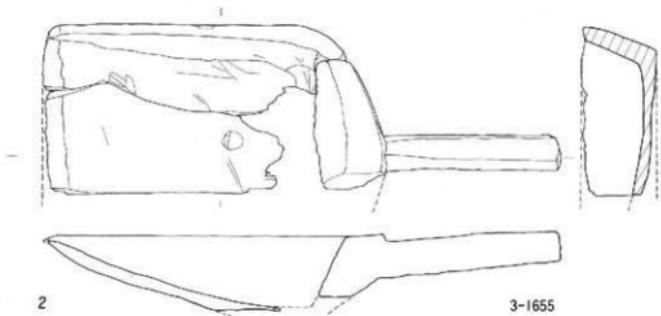
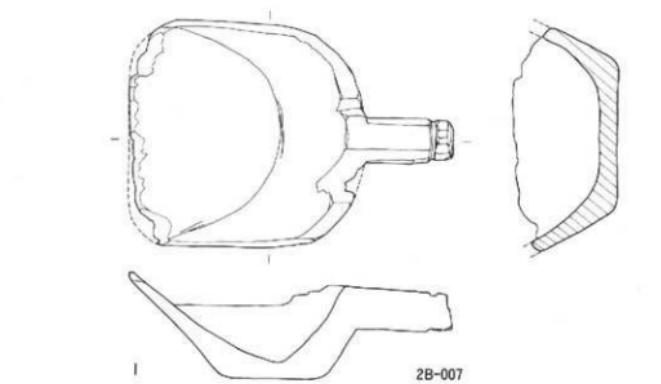
7

3-2599

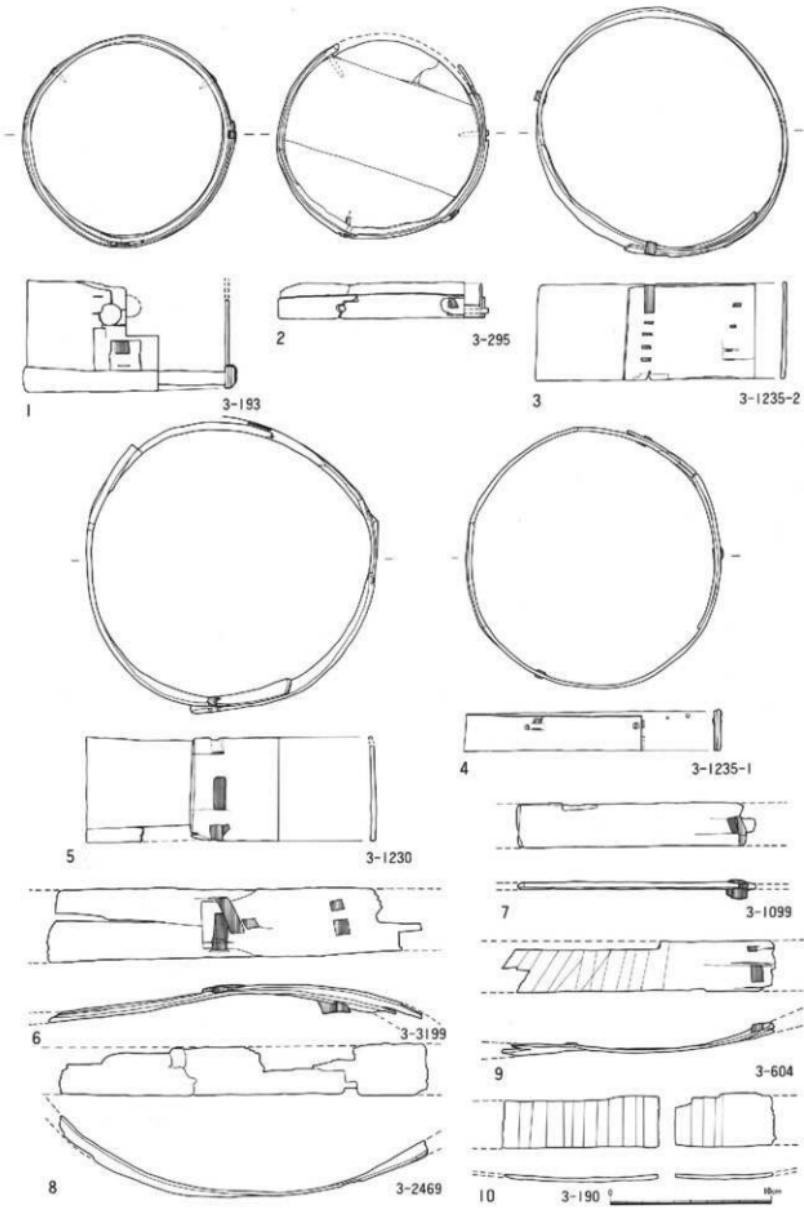
10cm



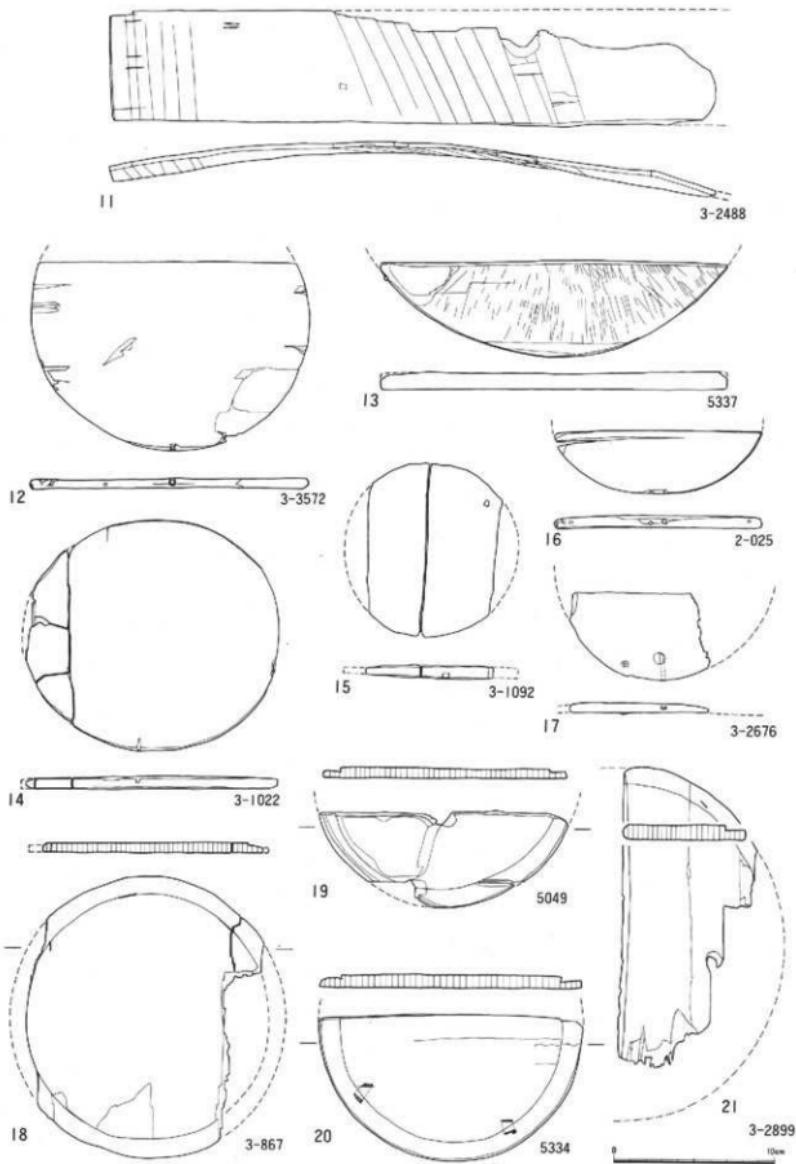
第63図 木製容器実測図 4 刻物



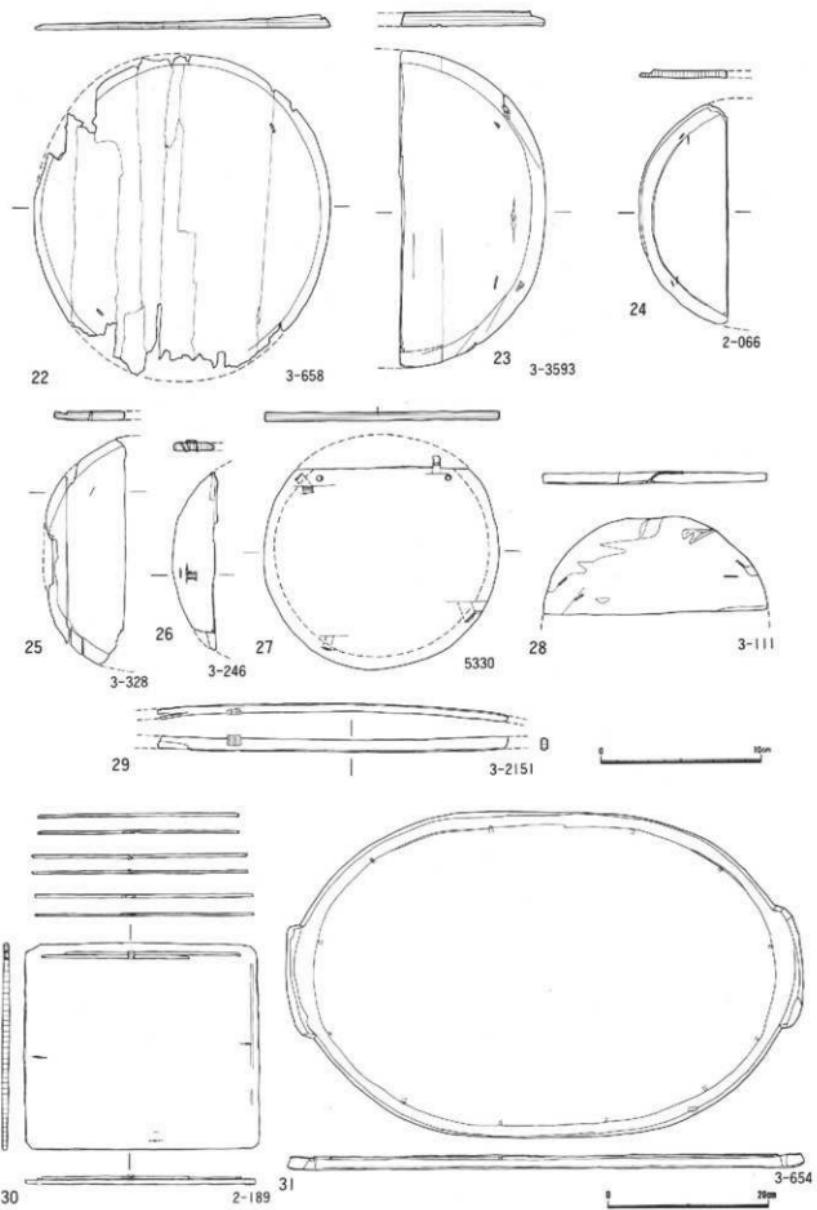
第64図 木製容器実測図 5 制物



第65図 木製容器実測図 6 曲物



第66図 木製容器実測図 7 曲物



第67図 木製容器実測図 8 曲物

2. 紡織具

(1) 紡錘車 (第68図)

土製紡錘車12点、石製紡錘車18点、木製紡錘車1点、合計31点が出土している。いずれも中心部に1ヶ所の貫通孔を有す。木製のものは円盤状を呈す。土製、石製のものは截頭円錐形を呈すが、斜辺の形状の違いを中心下の通り形態分類した。

A類・・・斜辺部が直線的なもの。

B類・・・斜辺部が若干盛り上がっているもの。

C類・・・斜辺部がへこむもの。

D類・・・高さに比して直径が大きい扁平なもので上辺が狭いもの。

E類・・・上辺と斜辺の陵がはっきりせず曲線を描くもの。

F類・・・斜辺部の下部に垂直面を有するもの。

径は大半が3~5cmの範囲に入り、他遺跡の出土遺物の状況と同様である。重量は、最大83.2g、最小10.9gでありかなりの幅がある。

孔内部に摩耗がなく、上底面にも規則的な擦痕が認められるものは少ない。

a. 土製紡錘車

A類5点(1~5)、B類4点(6~9)、C類2点(10・11)、E類1点(12)が出土している。全体的に焼成は良好で、ナデ整形が施され、丁寧な作りのものが多い。そのなかで、3は胎土に粗砂粒を含み、作りもやや雑である。また、1は、上面から下面にかけてミガキが入り、光沢を持ち、斜辺部もしっかりと面をなす精品である。土製紡錘車には、摩耗、擦痕など使用痕は認められない。

b. 石製紡錘車

A類4点(13~16)、B類7点(17~23)、C類2点(24・25)、D類3点(26~28)、E類1点(29)、F類1点(30)が出土している。28を除いては、丁寧な作りで表面は滑らかである。丁寧に磨かれ、光沢を持つものも多い。24の上面には孔縁から周辺に向かう放射状の擦痕が無数認められる。15は、斜面と底面が光沢があるにもかかわらず、上面には光沢がなく、変色している。14は、全面丁寧に磨かれた精製品であるが、斜面にナイフ状工具の削り痕が明瞭に残る。30の斜面上部には一周する2本の線が刻まれている。さらに、下の線に三角形の頂点を接して鋸歯文が線刻されている。三角形の内部には、三角形のそれぞれの斜辺に平行な十条ほどの線が交差して刻まれている。鋸歯文が施されるものは他遺跡の出土例では古墳時代後期のものとされているので、同時期のものと思われる。⁽¹⁾

c. 木製紡錘車

水上6区のSD228(平安時代末~鎌倉時代の溝状遺構)から1点のみ(31)出土している。同遺構からは、箸状木製品、木製羽根、馬骨などが出土し、祭祀の場として重要な地点とされている。円盤状を呈し、法量は下径4.2cm上径4.2cm、孔径0.6cm、高さ1.3cmを測る。遺存状態は比較的良好である。樹種は肉眼観察によるとスギであり、木取りは板目取りである。

(2) 機織具部品 (第69図)

宮川4区、I99グリッド(旧河道内)から1点(32)出土している。残存長30.3cm、最大径4.3cmを測

る。丸木材の中央部を太く、端部に向かって徐々に細く削り込み、端部には、突起部を作り出している。ほぼ、左右対称に作られているので、両端に突起部があったものと推定される。織りあげた布を巻き取る布巻具（千巻）ないし、経糸をそろえて巻いておく経巻具（千切）であると思われる。他遺跡の多くの出土品に比べ短く、中太である点に特色がある。愛知県瓜郷遺跡の出土品（長さ27cm）同様、幅の狭い布を織るためにものと推定される。⁽³⁾

(3)糸巻き（第69図）

いずれも宮川3区の旧河道S R486出土である。33は、組み合わせ式の糸巻きの棒木2本が、それぞれ折れた横木1本を差し込まれたまま発見されたものである。横木は同一のものであり、復原できた。棒木の内面は平坦に削られ、外面は糸と接するためか丸く丁寧に削り出され、断面は蒲鉾形を呈す。内面の上下2ヶ所には横木を差し込むためのぼぞ穴があけられ、側面の同一箇所には横木を固定するために小孔があけられている。このぼぞ穴から端部、中央部両方向に向かって削り込みがなされている。棒木の一本は完形であり、他方は先端部が欠損している。横木は棒状で断面は円形を呈し、中央に貫通する孔が穿たれている。十字形に交わるもう一本の横木と結合するためのもので、本品は、2本の棒木と、2本の横木からなる棒を2つ十字形に組み合わせるタイプであると思われる。棒木長21.3cm、同幅1.4cm、同厚1.6cm、横木長10.4cm（推定）同幅0.8cm、同厚0.8cmを測り、復原直径は12.1cmである。⁽⁴⁾

34は、33と近接して出土しており、形態的には、棒木の一部分で中央で破損したものと考えられるが、33と異なり板状を呈し、ぼぞ穴をあけにくい厚みである。未製品とは考えにくく、糸巻ではない可能性もある。残存長11.2cm、幅1.4cm、厚さ0.6cmである。

35は、やはり33と近接して出土しているが、33とは異なるタイプの横木であると思われる。板の中央を幅広く残し、徐々に細く削り、棒状の枝部を作り出している。幅広部分の厚さの約半分が溝状に丁寧に削られており、相交わる横木と咬み合うように作られている。軸孔部分は破損により確認できない。残存長5.4cm、残存幅2.0cm、厚さ0.8cmを測る。

(1) 水野精一・小林行雄『岡解考古学辞典』東京創元社 1969

(2) 静岡県埋蔵文化財調査研究所『大谷川II（遠横編）』1987 P74

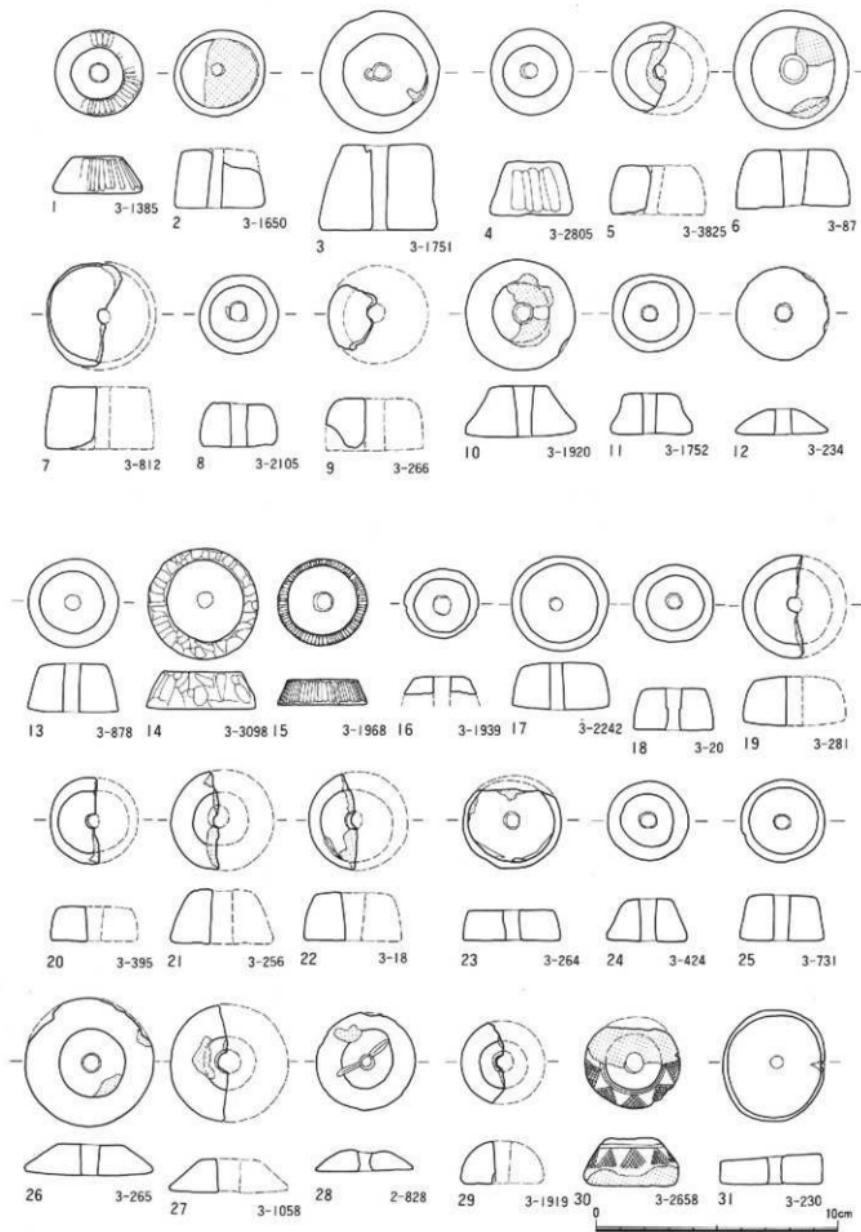
(3) 金閑惣・佐原 真『弥生文化の研究5』雄山閣 1985 P179に掲載

(4) 奈良国立文化財研究所『木器集成図録近畿古代篇』1985 に類似例が多く掲載されている。

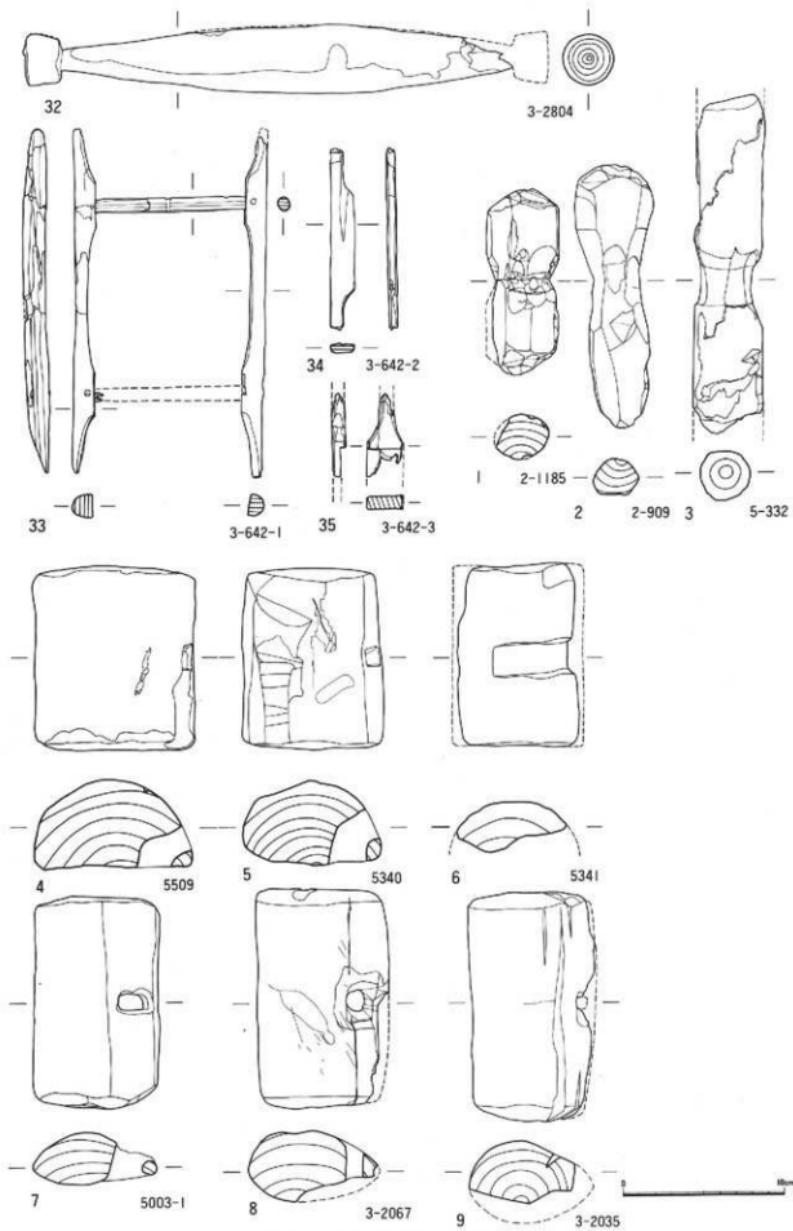
第16表 土製・石製紡錘車一覧表 (1~12: 土製・13~30: 石製)

[] 内は推定値 () 内は残存値

図 番号	地 区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	型	色	調	上 径	下 径	高 さ	孔 径	重 さg	備 考
1	水上7区	I73	茶褐色砂層	3-1385	A	淡	茶	2.2	3.7	1.6	0.8	26.0	完形
2	"	I76	砂礫層	3-1550	B	淡茶褐	[3.1]	3.8	2.5	0.6	(32.6)	5/6残存	
3	"	J73	茶褐色砂層B	3-1751	B	淡灰褐	3.4	4.9	3.6	0.9	83.2	完形	
4	宮川4区	I99	暗灰色砂混粘土層	3-2805	B	"	2.2	3.4	2.3	0.6	25.8	完形	
5	"	N93	粘土混黑色砂礫層	3-3825	B	淡明褐	[3.5]	[3.9]	2.1	[0.6]	(14.4)	1/2残存	
6	水上9区	C90	SD577	3-87	B	"	3.5	4.9	2.5	1.2	(60.8)	ほぼ完形	
7	宮川3区	L92	S R487	3-812	B	茶褐	[4.0]	[4.5]	2.6	[0.6]	(34.1)	2/5残存	
8	宮川6区	D108		3-2105	B	"	2.3	3.2	1.8	.06	(18.8)	ほぼ完形	
9	水上7区	J71	旧大谷川砂礫層②	3-266	B	黑	灰	[3.0]	[4.1]	(1.7)	[1.1]	(8.5)	1/4残存
10	宮川4区	N94	S R56	3-1920	C	淡黃褐	2.5	4.5	2.1	0.8	(34.4)	7/8残存	
11	水上7区	II76	砂礫③層	3-1752	B	茶	褐	2.3	3.4	1.7	0.6	16.9	完形
12	宮川4区	N92	S R53	3-234	E	"	1.1	3.9	1.1	0.7	10.9	"	
13	宮川6区	G103	S R313	3-878	A	黑	2.7	3.7	2.0	0.7	(44.0)	ほぼ完形	
14	宮川4区	J99	④砂礫層	3-3098	B	"	3.2	4.5	1.6	0.7	55.3	完形	
15	"	N94	S R56	3-1968	B	綠	灰	2.8	3.6	1.0	0.8	22.6	"
16	"		表鉄	3-1939	B	黑	2.3	(3.0)	(0.7)	0.7	(9.3)	1/3残存	
17	宮川6区	F103	S R312	3-2242	B	"	3.2	4.0	2.0	0.6	53.5	完形	
18	水上9区	B90	黃褐色粘土層	3-20	B	淡綠灰	2.6	3.3	1.7	0.7	(28.6)	ほぼ完形	
19	宮川6区	F104		3-281	B	黑	3.1	4.3	2.1	0.6	(31.3)	1/2残存	
20	"	G103	S R311	3-395	B	黑	2.6	3.6	1.4	0.6	(17.3)	"	
21	宮川4区	N94	S R56	3-256	B	黃灰白	[2.3]	[4.3]	2.3	[1.0]	(14.6)	2/5残存	
22	水上11区	C85	S D08	3-18	B	淡	褐	[3.3]	[4.0]	2.0	[1.2]	(23.3)	"
23	水上7区	J70	旧大谷川砂礫層	3-264	B	淡綠灰	3.6	4.1	1.3	0.7	(31.5)	3/4残存	
24	"	I76	砂礫層	3-424	C	淡灰茶	1.9	3.3	1.8	0.7	(27.2)	ほぼ完形	
25	宮川6区	F103	S R312	3-731	B	黑	2.9	3.4	1.9	0.7	(36.8)	8/9残存	
26	水上7区	J70	①旧砂礫	3-265	D	黃	灰	2.7	5.3	1.3	0.9	(49.1)	5/6残存
27	水上10区	G69	S P700	3-1058	B	綠	灰	[2.3]	[4.9]	1.4	[1.0]	18.2	1/2残存
28	水上1区		S X157	2-828	B	淡綠灰	2.1	4.0	0.9	0.6	(18.2)	ほぼ完形	
29	宮川4区	N94	S R56	3-1919	E	淡灰黃	[2.0]	[3.5]	1.7	[0.8]	(12.8)	2/5残存	
30	宮川3区	I94	S P134	3-2658	F	淡灰茶	2.3	3.8	1.9	1.0	(22.4)	1/2残存	



第68図 織織具実測図1



第69図 紡織具実測図2 織具実測図

3. 編具 (第69図)

(1)木製編錘

俵や、ムシロ、コモなどを、ワラやカヤなどの材料で編む時用いられたと思われる木製の錘が9点出土している。木製の編錘については、渡辺誠氏の詳細な研究があるので、それに依拠して記述をしたい。
⁽¹⁾ 形態は3つに分類される。渡辺氏の言うI Y f型と、I Y d型と、II Y a型である。

I Y f型 (1・2) ・・・丸太の中央に向かい自然に細くなるようにした典型的な鼓形で、両端に旧丸太面を残し、時には樹皮さえ残す形態（本遺跡のものは、典型的なものと比較すると、形もかなり崩れていて、粗雑な作りである。）

I Y d型 (3) ・・・・丸太の中央に溝が一周する形態（両端欠損しており、棒状で細身なので錘錘でない可能性もある。）

II Y a型 (4~9) ・・・丸太材を輪切りにし、さらに鉛で2等分し、長方形を呈す側面の中央に穿孔された形態（本遺跡のものは、半割りにしたものうち、芯のない方を用いているものが多く、丸味を持つ面から穿孔されている。）

全て旧河道からの出土であり、3~6は古墳時代後期の土器や、祭祀遺物の集中部から、8は奈良時代の遣構、9は古墳時代後期の遣構からである。渡辺氏の時期別分布資料によると、I Y f型は各時代に普遍的に見られ、I Y d型は弥生、古墳、鎌倉以降、II Y a型は古墳、奈良~平安初期に出土例がある。本遺跡のものも、各型ごとの時代範囲に入るであろう（なお6例あるII Y a型は5遺跡からの出土が報告されているが、最も近い浜松市伊場遺跡では、大溝の分層発掘の結果、同類を7世紀後半~9世紀初めのものとしているので参考になる）。
⁽²⁾ ⁽³⁾

(1) 渡辺 誠 「御山千軒遺跡出土木製品の民具学的研究」『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告IV (付編)』 埼玉県教育委員会 1983

(2) ハ 「もじり編み用木製錘の考古資料について」『考古学雑誌』 第66巻4号 1981

(3) 浜松市教育委員会 「伊場遺跡遺物編1」 1978 P18

第17表 木製編錠一覧表

〔 〕は推定値 () は残存値

図 番号	地 区 グリッド	遺物・層位	遺物番号	形 態	長 さ 径・幅 (cm)	樹 種	木取り	特 徴	備 考
1	西大谷4区 R22	暗灰色粘土層	2-1185	I Y f	11.6 4.6		半割り	中央部に削り込みがなされ、荒い加工痕が明瞭に残る。腐触が激しい。	一部 欠損
2	西大谷4区 R21		2-909	II	16.4 4.9		割材	中央部に向かう荒い加工痕が明瞭に残る。断面は6角形に近い。	完形
3	西大谷1・2区 E43	砂疊層	5344	I Y d	(20.7) 4.3	クヌギ	芯持	中央部が溝状に削られている。溝部以外は樹皮が残存。断面円形	両端 欠損
4	西大谷1・2区 D46	灰茶粘土層	5343	II Y a'	11.5 10.0	カシ	半割り	加工痕はなく原材を割っただけ。穴は直交せず折り返している。	完形
5	西大谷1・2区 D46	灰色粘土層	5340	II	11.2 8.8	クヌギ	II	両端は切れ味のよい刃物で削りとられ、丸味を持つ面には方向のわかる切削痕がある。	II
6	西大谷1・2区 E43		5341	II	11.5 [7.4]	カシ	II	中央部に孔を穿つために削られた溝状の痛みがある。穴より下は、製作中に削れたか。	1/3 欠損
7	宮川1区 H102	灰色粘土砂層	5003	II	13.3 7.8	カシ	II	丸味を持つ面の孔劇1/3程に、加工がなされている。孔は、他の例より大きい。	完形
8	宮川4区 O93	S R55	3-2069	II	13.9 8.3	カシ	II	長方形を呈す。孔の穿たれ方が粗雑であり、丸味を持つ面には、横に割れ目が走る。	一部
9	宮川4区 N94	S R56	3-2035	II	14.3 [7.9]	カシ	II	長方形を呈し、半割りした側が大きく欠損している(孔を穿った時の破損か)。孔とは対側に小さな四角の穿孔が2つある。	1/3 欠損

4. 装身具（第70図～第71図）

(1)耳環（第70図）

計17点、いずれも旧河道内出土である。全て、中実の棒銅を環状に曲げ、切り口の突合せ部に若干隙間をもたせた作りである。表面に金張りを施したものと思われるが、剥落や、綠青銹化（1・2・4）、銹付着（6）により素銅環としか認められないものが大半であり、5のように、地金の色が完全に露呈しているものもある。金の遺存がはっきり確認できるものは、16のみである。形態的には、以下のように4分類される。

A類・・・梢円形を呈し（正円形のものはない）、断面も円形に近い梢円形を呈するもの（1～12）。外径は、最大3.37cm、最小2.44cm、重量は、最大34.0g、最小4.9gと、法量にかなりの違いが認められる。

B類・・・ハート形を呈し、断面はほぼ円形を呈するもの（13）（圧縮による変形品の可能性もある）。

C類・・・梢円形を呈し、断面がかなり偏平な梢円形を呈するもの（14～16）。A類と比較すると小型で、3点の法量は近似している（14・15は対をなす可能性がある）。

D類・・・針金状の細い銅棒でつくられ、かなり軽量のもの（17）。出土例は少ないようである。

耳環は、古墳時代後期（針金状のものを除いては6世紀初め～7世紀前半に主に使用される）にのみ使用されたものとされ、古墳からの出土が多い。⁽¹⁾本遺跡のものも出土状況から同時期のものとして不都合なものはない。集落遺跡、祭祀遺跡からの耳環の出土例は少なく、⁽²⁾河道内に意図的に投棄されたと思われる点でも注目される。

(2)腕環（第70図）

水上7区J71グリッド（旧河道内）から1点（18）出土している。譲を有する細い棒銅を曲げて作られた銅鉤である。金の遺存は確認されない。扁梢円形を呈し、突合せ部が分離しているが、端部が破損状態を呈しているので、本来は接合されていた可能性もある。法量は、外径5.65～7.05cm、内径5.25～6.58cm、身径0.23～0.28cm、重量7.3gを測る。

(3)銅帯金具（第70図）（19）

宮川6区、旧河道S R314出土である。同遺構の年代は古墳時代後期～奈良時代・平安時代とされ、土製形代類や、墨書き器、和同開珎などが検出されており、本品も意味を持って投棄された可能性がある。丸輪の表金具であり、3分の1程が欠損している。法量は、横幅3.8cm（残存幅）、縦幅2.65cm、高さ0.75cmを測る。透孔は、横2.6cm、縦0.5cmである。断面の形状が偏平な台形を呈するタイプで、内面の三隅に鋸足が鋤出されているが、いずれも欠損している。外面は鍛で研磨され、滑らかで、黒色の光沢をもつ（側面には、鍛の調整痕が部分的に認められる）。それに対して内面は、鍛放しのままで調整はなされていないようである。周縁部は、透孔部分を除き面取りされている。外面周縁部の一部と、内面の透孔の上部には黒漆の残存が認められる。なお、外面には製造後に付けられたと思われる条線状の明瞭な傷跡が認められる。

(4) 櫛 (第71図)

横櫛16点、縦櫛1点、合計17点が出土している。全て木製であり、表面から工具を挿入して歯を挽き出した挽櫛である。漆などを塗布したものはないが、丁寧に削られて作られたものが多い。

櫛は、全体の形状、棟の断面形、切通し線のありかたにより形態分類される。

—— A類・・・棟を山形に作り全体の形状が半円形に近いもの。(1・2)

—— B類・・・棟上部が曲線を描くもの(A類、C類の中間型)。(3~8)

—— C類・・・棟上部が直線を描き、全体の形状が長方形に近いもの。(9~15)

—— a類・・・棟の断面上端が直線のもの。(1・2・4・6・7・8・10・14)

b類・・・〃丸いもの。(3・5・11・12・13・15)

c類・・・〃圭頭状のもの。(9)

—— 1類・・・切り通し線が、ほぼ直線のもの。(6・7・10・14)

—— 2類・・・〃棟の形状に沿って曲線を描くもの。(1~5・9・11)

歯の本数は、1cm当り6、7本のかなり粗いものから、14本というかなり細かいものまである。古代の櫛は、棟の形状や、歯の粗密などによりある程度の編年がなされているが、本遺跡のものは、古代以降の新しいものを含む可能性があり、形態だけから年代を推定することはできない。⁽³⁾

以下、特色あるものについて述べてみる。1は、山嵩の棟部に透かし彫りがほどこされている精品である。西大谷1・2区、D46グリッド、砂礫層という古墳時代の遺物のみが集中した地点から出土したもので、山嵩の棟、1cm当り6本という粗い歯という形態からも古墳時代のものである可能性を指摘できる(ただし、非常に精巧にできているので、新しい時代のものという印象を受ける)。⁽⁴⁾

2は、1と同一グリッドの出土である。透かし彫りこそなされていないものの、形状は1とよく似ており(1cm当りの歯数は6本と同数である)、同時代のものである可能性がある。

12は、水上1区のS E192の下層「水溜」内部から単独出土しており、祭祀的意味で廃棄されたものと思われる。なお中層からは、10世紀後半の灰釉碗、綠釉皿が出土している。⁽⁵⁾

16は、宮川4区の旧河道S R56から出土している(S R56は、古墳時代後期の旧河道であり、多くの祭祀遺物が検出されている)。明らかに櫛の形状をしているが、はっきりした棟部もなく、歯と歯の間の溝が完全に彫られていない。未製品とも考えられるが、厚さ0.4cmと極端に薄いので模造品と考えた方が良さそうである。遺構の性格とその他の装身具(耳環)も検出されていることを、考え合わせると、葬祭具として意図的に制作されたものである可能性がある。

縦櫛(17)は、宮川4区の奈良時代の旧河道S R55から出土している。法量は、現存幅3.9cm、現存高15.3cm、厚さ0.8cm、歯の長さ3.9cmを測る。現存する歯の本数は、6本、1cm当り2本を数える。握り部の上部(端部欠損)に2つの円形の小孔が並列して穿たれているが、用途、目的は不明である。歯を鋸で挽き出す以前に、作り出し部に孔を穿つておいたようである。全体的に加工は粗く、実用には不向きと思われる。樹種はアカガシ属1種である。

(1) 菅谷文則 「古墳時代の耳飾りについてーとくに金環を中心としてー」『古代国家の形成と展開』 大阪歴史学会 吉川弘文館 1975

(2) (1)の注 (62) によると 2 遺跡、国立歴史民族博物館研究報告第七集附録によると 4 遺跡からの出土が報告されている。

(3) 奈良國立文化財研究所 『木器集成図録 近畿古代篇』 1985

浜松市教育委員会 『伊場遺跡遺物編 1』 1978

(4) 註(3)と同じ

龜井正道 「衣服と装身具」『日本の考古学古墳時代下』 河出書房新社 1966 P222に、「・・・山形の頂辺部には透彫がある。このような横櫛は後期にはいって出現したものと考えられるが、堅櫛の強い伝統におされて一般化しなかったようである。」という指摘がある。

(5) (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 『大谷川II (遺構編)』 P58

第18表 耳環一覧表

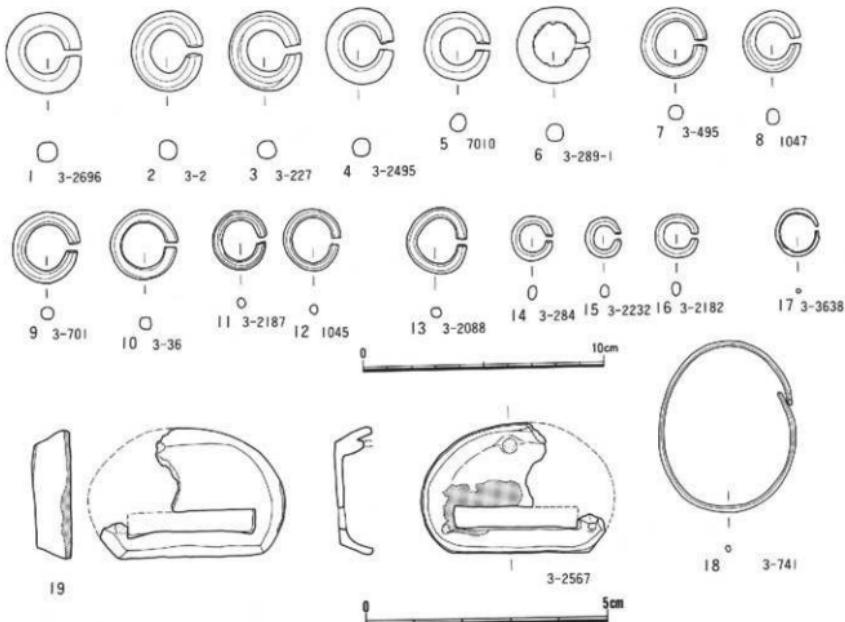
番号	地区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	形態	外径 (cm)	内径 (cm)	身径 (cm)	突合部間隔	重量 (g)
1	宮川4区	J 98		3-2696	A	3.10~3.37	1.65~1.73	0.83~0.88	0.29 (cm)	34.0
2	水上7区		砂礫	3-2	A	2.90~3.31	1.43~1.79	0.74~0.81	0.29	30.2
3	宮川5区	B108	S R201	3-227	A	2.99~3.27	1.62~1.70	0.77~0.79	0.31	28.7
4	宮川4区	J 97		3-2495	A	2.80~3.15	1.50~1.73	0.71~0.72	0.35	22.3
5	西大谷 1・2区	D45	砂礫 (中)	7010	A	2.68~2.83	1.54~1.55	0.64~0.74	0.29	20.8
6	水上7区	I 72	砂礫	3-289-1	A	2.95~3.25	1.72~1.84	0.70~0.76	0.20	17.6
7	宮川6区	G103	S R312	3-495	A	2.70~2.91	1.58~1.78	0.58~0.62	0.18	16.0
8	西大谷 1・2区	E43	砂礫 (中)	1047	A	2.38~2.58	1.46~1.58	0.51~0.67	0.23	12.9
9	宮川4区	N93	S R55	3-701	A	2.78~2.95	1.82~1.90	0.52~0.53	0.26	12.3
10	宮川5区	B108	茶褐色砂礫	3-36	A	2.74~2.88	1.75~1.90	0.49~0.54	0.19	9.8
11	宮川6区	E104		3-2187	A	2.19~2.44	1.40~1.65	0.38~0.40	0.22	5.0
12	西大谷 1・2区	F41	砂礫	1045	A	2.24~2.59	1.62~1.90	0.34~0.38	0.27	4.9
13	宮川4区	N94	S R56	3-2088	B	2.52~2.67	1.77~1.90	0.41~0.42	0.22	8.2
14	宮川6区	G103	S R312	3-284	C	1.70~1.83	1.10~1.20	0.32~0.58	0.21	6.1
15	"	"	S R313	3-2232	C	1.49~1.67	0.85~1.03	0.33~0.50	0.21	3.9
16	"	F103	S R312	3-2182	C	1.77~1.83	1.16~1.58	0.34~0.58	0.21	5.4
17	宮川4区	J 99	粘土混砂礫	3-3638	D	1.78~1.98	1.48~1.58	0.18~0.19	0.17	0.9

第19表 横櫛一覧表

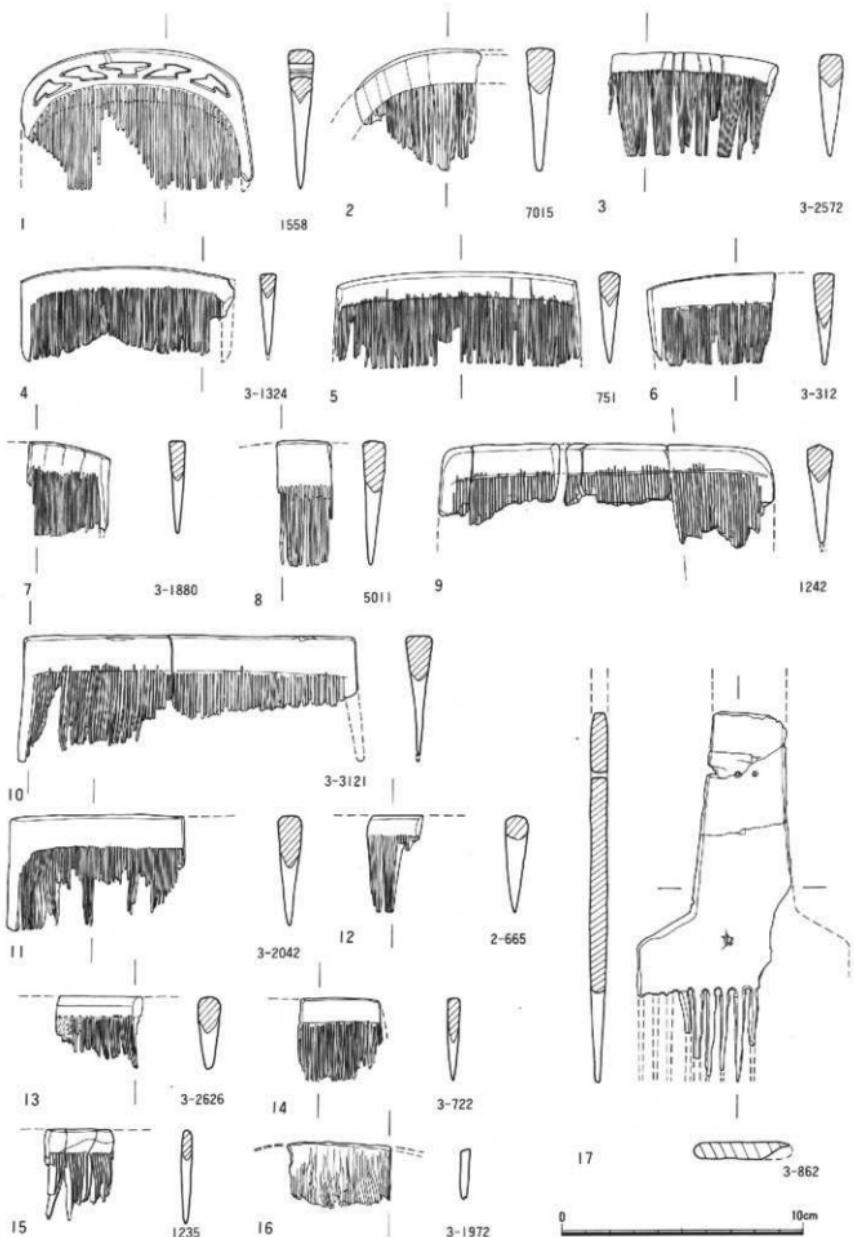
()は残存値

図番号	地区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	A	B	C	D	E	形態分類	備考
1	西大谷 1・2区	D46	砂縫	1558	(9.6)	5.8	1.1	4.2	6	A-a-2	一部欠損
2	"	"	灰茶粘土	7015	(5.2)	4.9	1.2	3.7	6	A-a-2	両端欠損
3	宮川4区	J98	粘土混砂縫	3-2572	(6.9)	4.3	1.0	3.5	12	B-b-2	イスノキ・ガ
4	宮川6区	C108	暗灰色砂	3-1324	(8.8)	(3.5)	0.7	(2.6)	10	B-a-2	一部欠損
5	宮川4区	J94	灰黑色粘土	3-751	(10.2)	3.8	0.9	2.8	10	B-b-2	ほぼ完形
6	"	N94	黒色砂縫	3-312	(5.3)	3.7	0.9	2.6	9	B-a-1	ツゲ・片側欠損
7	"	M94	S R56	3-1880	(3.9)	3.5	0.7	2.9	11	B-a-1	ツゲ・ガ
8	西大谷 1・2区	D46		5011	(2.3)	5.1	1.2	3.3	6	B-a-不明	両端欠損
9	"	E43		1242	(13.9)	(4.1)	1.1	(3.1)	7	C-c-2	ツゲ・一部欠損
10	宮川4区	J99	暗灰色粘土	3-3121	(13.9)	(5.2)	1.1	(3.2)	9	C-a-1	2つに割れる・ガ
11	"	O94	S R56	3-2042	(7.4)	4.8	1.0	3.3	9	C-b-2	ツゲ・片側欠損
12	水上1区	L59	S E 1 9 2	2-665	(2.3)	4.1	1.0	3.2	14	C-b-不明	両端欠損
13	宮川4区	J98	粘土混黑色 砂縫	3-2626	(3.6)	3.0	1.0	2.2	11	C-b-不明	ガ
14	"	M94		3-722	(3.5)	3.5	0.6	2.4	11	C-a-1	ガ
15	西大谷 1・2区	E42	砂縫	1235	(2.9)	3.8	0.3	2.8	10	C-b-不明	偏平化・ガ
16	宮川4区	N94	S R56	3-1972	(4.3)	2.8	0.4	2.6	9	不明 不明 不明	ガ

※A : 幅 (cm) B : 高 (cm) C : 厚 (cm) D : 歯の長さ (cm) E : 1 cm間の本数



第70図 装身具実測図1 耳環ほか



第71図 装身具実測図 2 棚

5. 腹物

(1) 下駄 (第72図)

合計6点出土した。全て台と齒とを一本からつくる連歯下駄である。対になるものではなく、右足用か左足用か限定できるものも4のみ（親指痕と思われるくぼみがある）である。鼻緒孔は方形のものではなく全て円形であり、前壺は台の中央にあけられ、後壺は後歯の外側にあけられたものが1点（6）あり、内側にあけられたものが4点（1・2・4・5）ある（3は不明）。平面形は、長さに比して幅がせまく、前・後部とも半円形を呈すもの（1～3）、それに比べて幅広で小判形を呈すもの（4・5）、幅広で隅丸長方形を呈すもの（6）に分けられる。齒は、台と同じ幅のもの（1・5・6）と、やや外開きに作られ、台の下辺幅が台の幅より広いタイプ（2・3・4）がある。歯の形態で特徴的なものとして2があげられる。前歯の前側は垂直的に削り出されず、いわゆるめり下駄のように台部の前端部に向かって斜めに削られたものと推定される。後歯も8cm近くとかなり縦幅があり、台部の後部と言える部分がほとんどない。3の後歯と思われるものも、2の前歯と同様のつくりをなす。なお技法上では、鋸で挽いた後、のみで割り取って歯を作ったもの（4・6）と、のみで掘り出したと思われるもの（1・2・3・5）に分けられる。台部は中央部が厚く、前後端部がやや薄く作られるが、4・5は特に薄く削られている。

木取りは、柾目取り、板目取り3点ずつであり、板目取りのものは全て木表を上面にしている。

6点とも旧河道からの出土である。層位により時代が推定できるものとして、西大谷8区中世シルト層出土のものがある。4は古墳時代後期の遺構S R313出土であるが、形態的には前壺が台の中央にあり、より新しい時代のものと思われる。⁽¹⁾

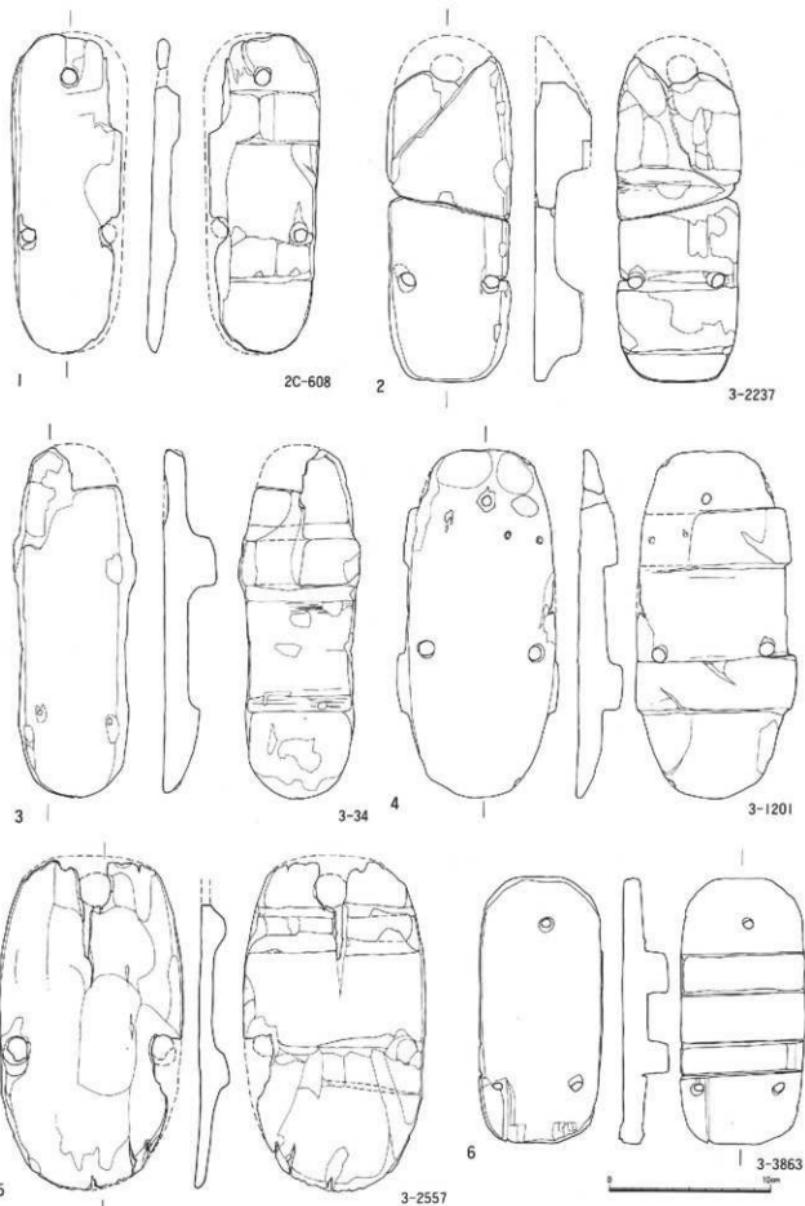
(2) 金剛草履 (第73図)

金剛草履の芯をなすものと推定される。草戸千軒町遺跡などの中世遺跡から出土し、藁などの纖維が付着するものもあるが本遺跡出土品にはその痕跡は認められない。⁽²⁾ 合計6点出土し、いずれも厚さ0.3～0.4cmの板目取りの薄板である。全体の形状が判るのは1点（1）のみであるが、左右対象形をなし、前方部に1個ずつの小孔を穿ち、側縁のやや後方よりに1対の切り込みを有す（切り込みの形状は、方形のものと三角形に近いものがある）。長辺部はゆるやかな曲線を描き、短辺部は直線をなす。（1）は長さ22.2cm、幅9.7cmを測り、（2）（3）も長辺はほぼ完結しており、それぞれ24.0cm・24.6cmを測るので、平均的な大きさが推定される。なお6点とも旧河道内の出土である。

(1) 静岡市立登呂博物館『特別展・はきもの』1980 参照

国立奈良文化財研究所『木器集成図録・近畿古代篇』1985によると、平城京では、前壺が中央にあるものと左右いずれかによせる古い形態のものの双方が出土している。

(2) 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編『草戸千軒町遺跡－第28・29次発掘調査概要－』1980では「草履状木製品」と呼称している。



第72図 履物実測図1

第20表 下駄一覧表

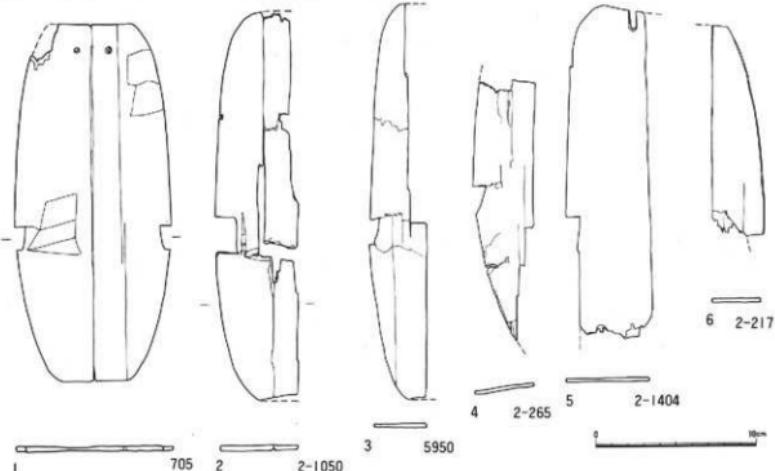
()は残存値

図 番号	地 区 グリッド	遺構・層位 遺物番号	法 量(cm)			樹種	木取	特 徴
			長 さ	幅	高 さ			
1	西大谷8区 C41	中世シルト 2C-608	(19.3)	(8.9)	1.3		柾目	台も扁平で歯もほとんど残存していない。
2	宮川4区 J98・K98	暗灰色粘土 3-2923・3-2237	(20.1)	7.5	3.5		板目	木表を上面にする。保存状態が悪く脆い。
3	宮川4区 A91	暗灰色粘土 3-34	(21.2)	7.5	3.3	"		木表を上面にする。上面の後壁に想定される場所に、下面に貫通しない穴が2つあけられている。未製品か。
4	宮川6区 G102	S R313 3-1201	21.3	9.2	3.1		柾目	台上右上に難指の痕と思われるくぼみがあるので、左の下敷と思われる。前歯半分が欠損している。歯は鋸で挽き出す。
5	宮川4区 199	暗灰色砂混粘土 3-2557	(20.3)	11.4	1.8	"		台部が先端部に向ってかなり薄く削られている。歯もかなりすり減っている。鼻緒孔は円形でかなり大きい。
6	宮川4区 L98	赤褐色砂礫 3-3863	16.4	7.6	2.9		板目	やや小型の下駄である。木表を、上面にする。歯は鋸で挽き出している。完形品。

第21表 金剛草履一覧表

()は残存値

図 番号	地 区 グリッド	遺構・層位	遺物番号	法 量(cm)			樹種	木取	備 考
				長 さ	幅	厚 さ			
1	宮川2区 I100		705	22.2	9.7	0.4	スギ	板目	ほぼ完形
2	大谷1区 S20	暗灰色粘土層	2-1050	(24.0)	(5.2)	0.4	"	"	1/2残存
3	西大谷1・2区 D45		5950	(24.6)	(3.6)		"	"	2/5残存
4	大谷1区 S20	粘土混砂礫層	2-265	(16.2)	(3.7)	0.3	"	"	1/4残存
5	タ "	砂混茶褐色粘土層	2-1404	(19.9)	(5.2)	0.3		"	1/3残存
6	タ T19	粘土混砂礫層	2-217	(13.1)	(3.2)	0.3	"	"	1/4残存



第23図 履物実測図2

6. その他の生活用具（第74図）

(1)火鑊臼

火鑊臼2点が出土している。いずれも破片である。1は幅5cm厚さ0.7cmのスギの板で現存長15.2cmをはかる。片側に6ヶ所の火鑊棒があたって焼けこげた痕跡が残る。片側には桜の皮が残り小さな穴も2ヶ所に観察される。容器等の生活用具からの転用が考えられる。水上1区SR150からの出土である。

2は広葉樹の棒状品で幅1.5cm厚さ1.1cmである。片側に4ヶ所の火鑊棒があたって焼けこげた痕跡が残る。反対側にも3ヶ所のえぐり込みが認められ、内1ヶ所には焼けこげが認められ、これらも火鑊臼として使用されるものであったと考えられる。両面から利用されたものである。宮川2区の灰色粘土層よりの出土で古墳時代に位置付けられよう。

(2)遊具

3は独楽ではないかと考えられるものである。他に分類するところもない。ここに入れたがはたして独楽でよいかどうか非常に疑問である。2.6cm×2.5cmで若干方形に近い断面形をしている。一方のはしは鋸く尖っている。全長3.9cmを測る。

4は“竹とんぼ”ならぬ“木とんぼ”と考えられるものである。両端は欠失しているが、中央に方形の孔があけられ、羽の部分は相互に対称的に薄く仕上げられている。現存長10.1cm幅2.44cm厚さは中央の最も厚いところで0.7cmである。⁽¹⁾類例は静岡市駿府城三の丸跡より出土しているものがある。現存長11cmほどで両端部が欠失している。流路からの出土で16世紀代の年代が与えられている。また、平城宮跡内裏東方の溝より出土したもののが非常によく類似する。⁽²⁾8世紀後半の年代が与えられている。単なる遊具ではなく吉凶を占う要素を持っていたと考えたい。

(3)木札

5～10は木札である。頭部に刻み目を入れられており紐などで荷にしばり付けられたものと思われる。大小さまざまであるが、形態は一定している。墨痕は観察できない。11も頭部の両側が失したものと推定される。

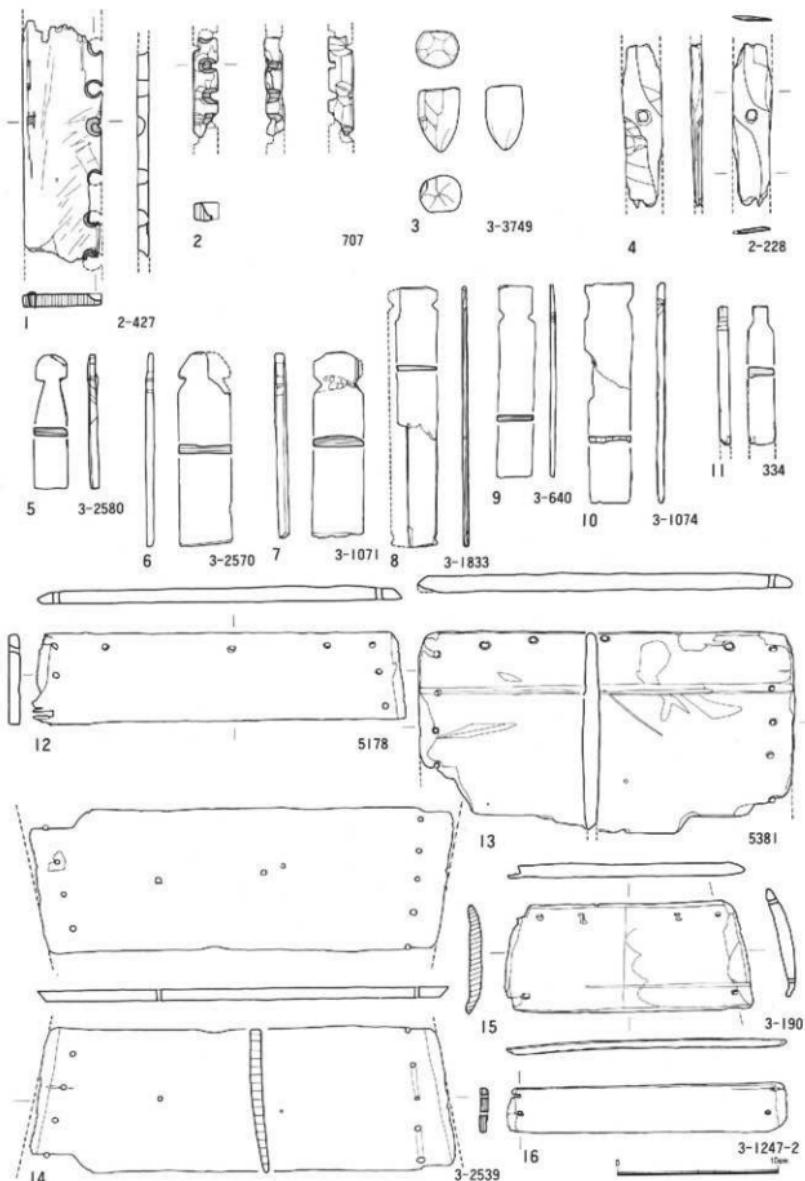
(4)箱状木製品

12～16は箱状木製品の各部材であろうと思われる。台形を呈し、両斜辺に沿って小さな孔があけられている。12・14・15・16のいずれも両側端が斜めに切り落とされておりこの部分を合わせて方形の箱形をつくり、つる等で結びつけたものと考えられる。13は他のものが、台形を呈するのに対し方形を呈しており、各辺ともに小孔があけられている。また端部が斜めに切り落とされていない。底あるいは蓋となる可能性が高い。三重県北堀池遺跡に完形の類例があるが、これには底はついていない。⁽¹⁾県内では伊場遺跡、川合遺跡等に類例があるが、その用途については明らかではない。箱=容器との類推からここで取り上げておく。

大、中、小があり、法量のちがいが認められる。類例の増加をまって考えたい。

(1) 静岡県教育委員会『駿府城三の丸跡発掘調査報告書』1987

(2) 三重県教育委員会『北堀池遺跡発掘調査報告書』第1分冊 1981



第74図 火燭台・遊具・木札・箱状木製品実測図

第4節 武器類

銅鏡・鉄鏡・短刀等が検出されている。いずれも旧大谷川の流路中よりの出土であり、時期を明確にすることはできない。刀子は本来工具で扱わなければならぬが、その量も少なく、時期も特定できないので、短刀とあわせてここで一括して扱っておく。その他に木製品として弓がある。大谷・西大谷地区のものが主体で、縄文時代に遡る可能性のあるものも多い。

(1)銅鏡・鉄鏡（第75図）

銅鏡2点、鉄鏡11点他に鉄鏡の茎部分の破片と思われるもの3点がある。

銅鏡2点は共に西大谷1、2区の旧大谷川の流路中より出土している。いずれも有茎の柳葉形で、ほぼ同じ大きさである。川の中のシルト上面よりの出土のため腐食が著しい。1の茎部分は損耗して、わずかに残存しているが、当初は2と同様と考えてよい。逆刺はもたないが、関は比較的明瞭で茎部分とを明確にわけている。この地区での流路は基本的には古墳時代～平安時代と考えられるが、弥生時代の包含層を削り取ったと思われ、弥生時代の土器も混入する。出土状況からの時期の特定はできないが、形態上から弥生時代後期～古墳時代前期においておきたい。

鉄鏡は11点を数える。3は有茎三角形式で茎部分は大半が失われており形状不明である。4は大きな藤抜を有するもので、後藤分類による有茎藤抜三角形式のうちのいわゆる飛燕形式のものである。5～9の5点は雁股式のものである。また10・11は先端部を欠失しているが、10は方頭広根の矛箭式である可能性が、11は雁股式である可能性が高い。12は方頭細根矛箭式で、両端部を欠くもののほぼ全形をうかがうことができる。13は後藤分類の椿葉式あるいは菱形式に分類されるものである。全長25.1cmの完形で関部分に黒漆が残存している。

(2)短刀・刀子（第76図）

短刀が4口、刀子が8点検出されている。

17は宮川4区の旧流路S R53から出土したもので、保存状況は非常に良好である。全長30cm、刃部長19.7cm、幅2.2cmを測る。S R53は、古墳時代後期から中世までの年代幅をもつものであり、その主体は山茶碗にある。5の雁股鏡もS R53出土である。18は西大谷8区の旧大谷川砂礫層中のもので欠損が著しい。17とほぼ同じ大きさのものであろうと推定される。19は現存長27.1cmで切先部をわずかに欠く。木製の柄が残存していたが腐朽が著しい。茎部分が長4.7cmと比較的短い。20は木製の柄が残存しているものである。ヒノキかと思われる材で作られているが、腐朽し残存部分はわずかである。木質内部の茎部分の観察は不能であった。21は木製の柄をもった刀子である。柄の部分の遺存状況は非常に良好である。それに比して鉄製部分の遺存状況は悪い。柄の全長は13.8cmを測る。

(3)弓（第77図・第78図）

弓およびそれの可能性のあるもの、また形態的に類似しほかで取り扱えなかったものもあわせてここにまとめた。一本の材料をそのまま削った丸木弓と木・竹・骨角などの各種の材料をはり合わせて作った合わせ弓がある。丸木弓として2点、合わせ弓として1点を認定している。

a. 丸木弓

第22表 銅鏡・鉄鏡一覧表

() は残存値 [] は推定値

番号	地区	グリッド 遺構・層位	遺物 番号	刃部(cm)			茎部(cm)			備考
				全長	長	幅	厚	長	幅	
1	西大谷	F39 砂礫	1044	2.7	2.1	0.85	0.3	0.6	0.2	0.2 銅鏡
2	西大谷	E43 シルト上面	1046	2.9	1.9	0.75	0.3	1.0	0.3	0.25 鉄鏡
3	宮川6	G103	3-876	(5.9)	(3.9)	(3.0)	0.3	(1.9)	0.6	0.3
4	宮川6	E105	3-2421	7.0	4.5	(2.7)	0.35	2.4	0.3	0.2
5	宮川4	O93 暗灰色砂混粘土	3-195	(9.9)	(6.9)	(4.8)	2.0	(3.0)	0.45	0.5
6	西大谷	F40 砂礫層	3-7008	(10.1)	(6.1)	(3.9)	3.0	(4.0)	(0.2)	(0.2) 離脱
7	宮川3	J94 流路12	3-853	(7.65)	(6.2)	(3.9)	0.35	(1.4)	0.5	0.5 離脱
8	宮川6	E105 S R314	3-642	(10.2)	(6.1)	(4.3)	0.25	(4.3)	0.35	0.35 離脱
9	西大谷	B42 粘土混り砂礫	2C-710	(10.4)	(5.2)	(3.5)	0.3	5.2	0.35	0.35 離脱
10	宮川6	E104 S R312	3-927	(7.8)	(5.7)	(3.0)	0.3	(2.0)	0.4	0.4 離脱?
11	宮川6	E104 S R312	3-927	(16.5)	(4.0)	(2.2)	0.2	(12.5)	0.4	0.4
12	西大谷4	R22 暗灰色粘土	2-1114	(18.0)	(11.0)	1.0	0.3	(7.0)	0.5	0.45
13	宮川3	L93 流路3	3-770	[25.1]	(6.6)	1.6	2.5	18.3	0.4	0.4 先端部わずかに欠失
14	宮川6	F103	3-2938	(5.0)				(5.0)	0.5	0.3 茎のみ
15	宮川6	G103	3-2064	(6.1)				(6.1)	0.5	0.2 茎のみ
16	宮川6	C108 S R315	3-968	(6.2)				(6.2)	0.45	0.25 茎のみ

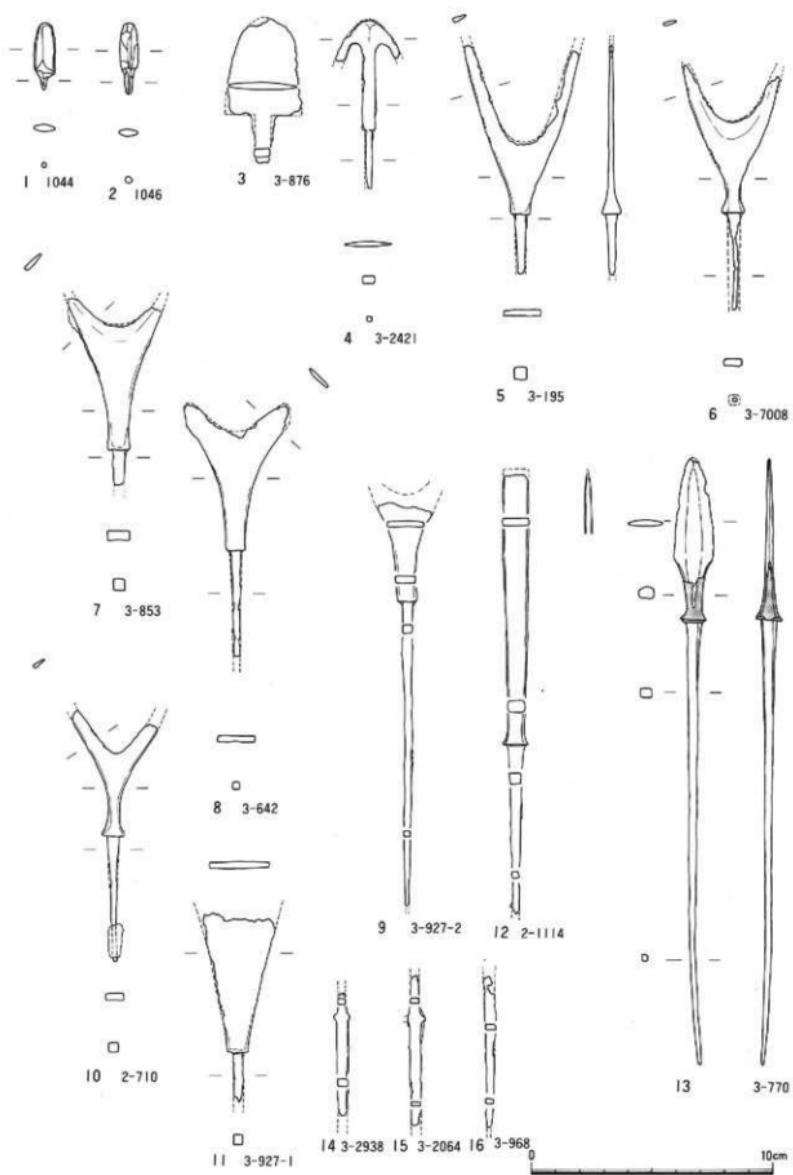
完形のものはない。

1は西大谷1区砂礫層中より出土したもので現存長109.6cm。イヌマキの丸木をほとんどそのまま使い、両端部を削りだしている。端部は1段削り落して彌を作り出している。もう一方の端部は欠失しているが、形状からして失われたのはわずかと思われ全長120cm前後と推定できよう。中央より若干下方に手ずれのあとらしき痕跡がわずかに認められる。

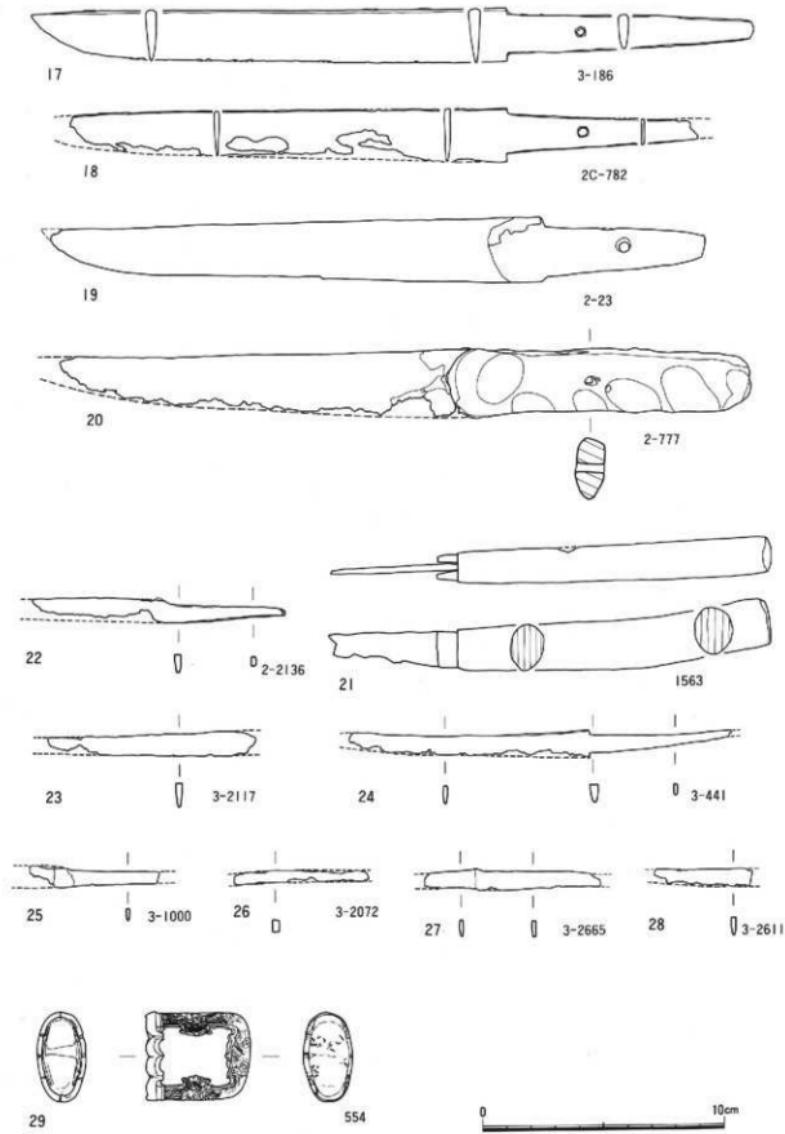
2は端部のみの破片である。カーブが大きいが1と非常に類似しており形状から丸木弓と考えてほほまちがいないと思われる。末であるか本であるかは不明である。

3は現存長112cmを測るもので、全体の2/3程度の破片である。大きな材のごく一部をていねいに削り出してつくられている。彌の部分は片面に溝を一本刻み込んでいる簡単なつくりである。用材の方法・彌の形状等若干疑問の残るものである。

4~6の3点は端部の形状から弓の可能性のあるものである。4は現存長93.0cmを測る。5と6は同一個体の可能性のあるもので現存長は5が83.2cm、6が56.0cmである。弓だとすればカーブより彌弓の



第75図 武器実測図1 鉄鎌・銅鎌



第76図 武器実測図2 刀・刀子

可能性が高い。丸木弓には直弓が多いとのことでありこの点いかがであろうか。

7・8も先端部の形状より弓とした。現状ではカーブは認められない。

9は全長59.8cm先端部をするとく削りだしている。弦の部分を特に加工した痕跡はない。弓とできるかどうか疑問である。

b. 合せ弓

弓と確実に認定できるのは1のみである。その他のものは長く弓として取り扱われてきたのでここに入れたが、筆者としては他の用途を考えたほうがよいと考えている。

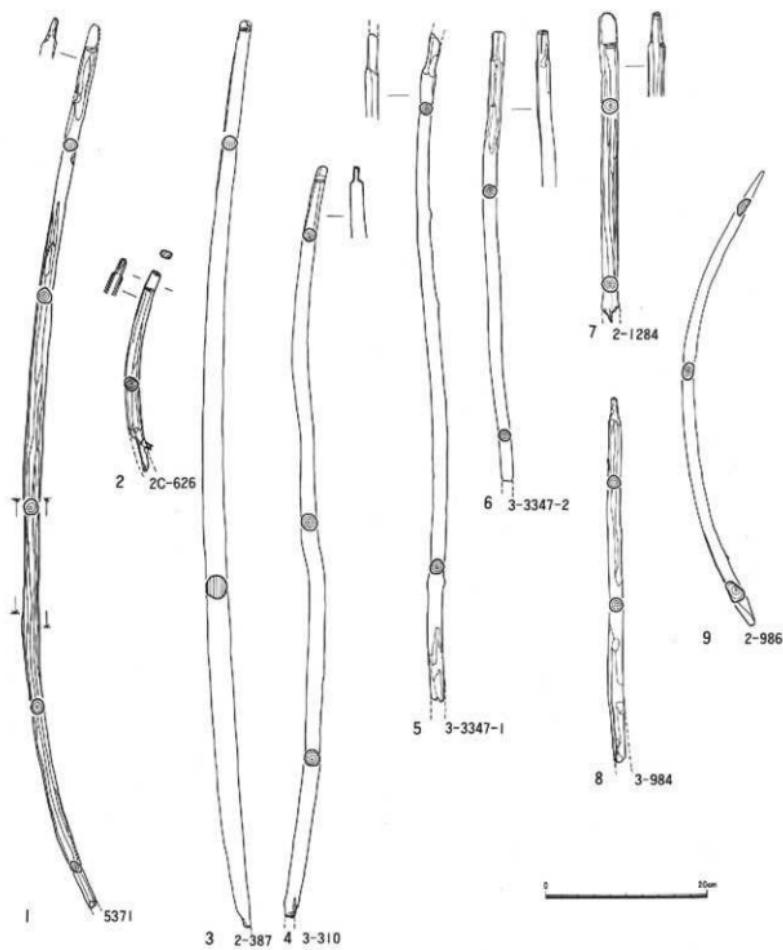
1は現存長142.3cmで両端部を欠いている。柾目材をていねいに削り断面がまぼこ形に仕上げている。他の材と合わせて植物質の皮でていねいに巻いている。植物質がわずかに残存している部分もあるが、その種は不明である。他は痕跡のみである。中央部分約12cmあまりはこの痕跡が認められない。大谷1区V16グリッドの出土である。

2と3、4と5、6と7はいずれも2点がいっしょに出土したもので2点の組み合せと考えてよい。特に4と5は一体となって出土し取り上げている。

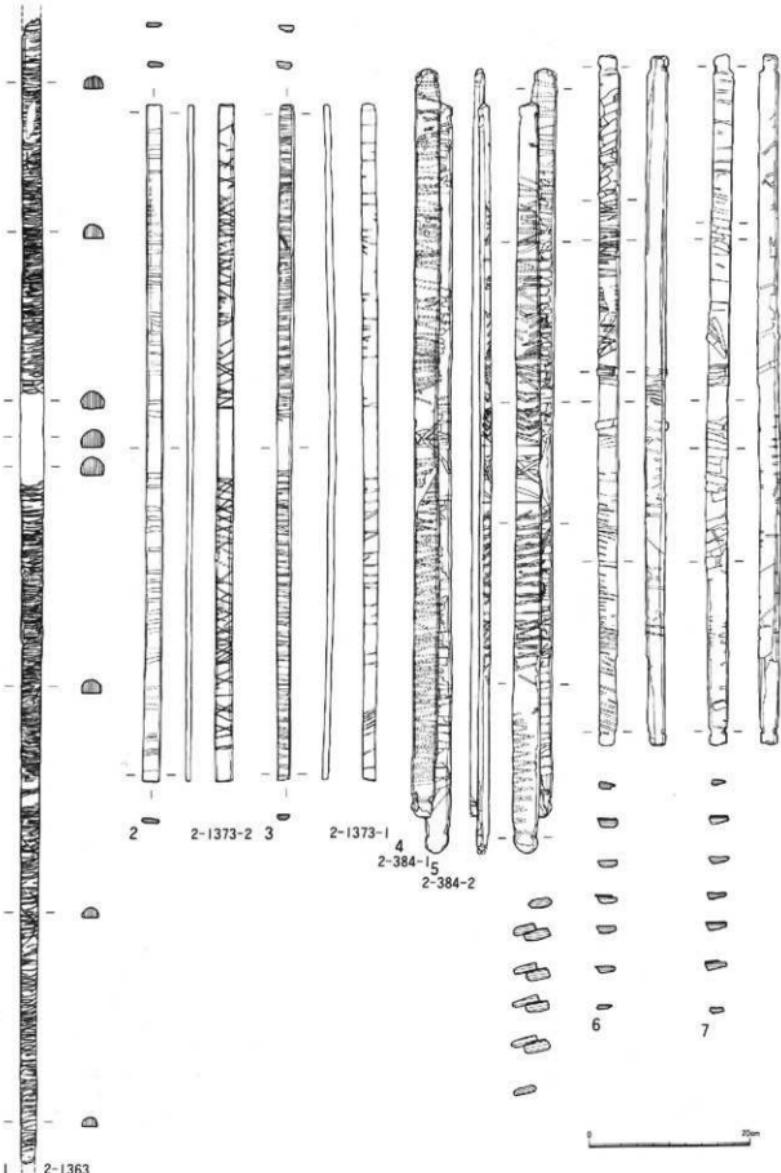
2は全長83.6cm幅1.9cm3は全長83.7cm幅2.0cmでほぼ重ね合わせることができる。紐様のもので巻かれていた痕跡が残るが、一面だけでなくもう一面にもわずかではあるが痕跡を観察することができる。また両端ともほぼ完形と思われるが何の加工も認められない。

4・5・6・7は長さに若干の違いはあるもののほぼ同様のつくりである。特に4・5の出土状態から明かなように2枚の板の間に植物質のものがはさみこまれている。樹種はスギである。当初合せ弓として取りあげられていたが、山内先生よりスギは弹性に乏しく通常弓には用いられないとの指摘を受け検討を加えた。建築の部材すなわちアシ・ヨシあるいはササ竹等をはさみ込んでとめた戸あるいは壁状のものを想定したいが、いずれにせよ類例を待ちたい。

(1) 後藤守一「上古時代鉄器の年代研究」『人類学雑誌』54巻4号 昭和14年



第77図 武器実測図3 丸木弓等



第78図 武器実測図4 合せ弓等

第5節 その他の遺物

1. 繩文時代の遺物

(1)丸木舟（第79図）

大谷2区第5層（黄褐色粘土と灰色粘土の互層）下部で検出された。標高約4mである。中央を鋼矢板で切断されてしまっていたため拡張して鋼矢板の反対側を調査し全容を確認した。

全長670cm最大幅は後方にあり65cm、現状での深さ10cm板の厚さ2~10cmを測る。遺存状況は悪く、土圧により大きく変形しているが全体としては鰐節形を呈している。船首部分は約20°~30°船尾は約40°~60°に尖っている。一方の先端に穴があけられており、角度とあわせて船首と判断した。内面には14ヶ所の焼けこげがあり内面割り抜きの技法をうかがうことができる。用材はクスノキである。⁽¹⁾

土圧により大きく変形しているが、復元すると深さ30cm幅60cm程度を想定することができる。全体として非常に浅いもので、内水面での使用を考えるのが妥当であろう。

年代観については弥生時代中期との考え方もあるが、現在では繩文時代晩期と考えられている。伴出する遺物はなくその根拠は土層の層序関係と放射性炭素による年代測定の結果である。①丸木舟の検出された第5層の下部に大沢スコリア類似の火山灰層がある。大沢スコリアは富士火山に起源を有するもので、約2700年前の年代が与えられている。丸木舟はこの直上より検出されている。②上層の第3層では弥生時代中期の土器片が採集されている。③放射性炭素による年代測定によれば、丸木舟の用材はBC730±100年という結果が出ている。また第4層採集の木片はBC930±100年の測定値が出ている。⁽²⁾これらを総合すると繩文時代晩期と考えてよいと思われる。

形態からみると繩文時代の早い段階での主流は割竹形であるといわれ鰐節形を呈するものは繩文時代後期あたりに出現する。しかし舟尾部は半円に近く削られ前後を同じように尖らせたものは少ない。しかし類例がない訳ではなく繩文時代後期といわれる千葉県高谷川出土のものは先端部をかなり鋭く尖せたものであり、千葉県八日市場市米倉大境出土例も小形ではあるが内面の加工を無視すれば同類といえよう。⁽³⁾

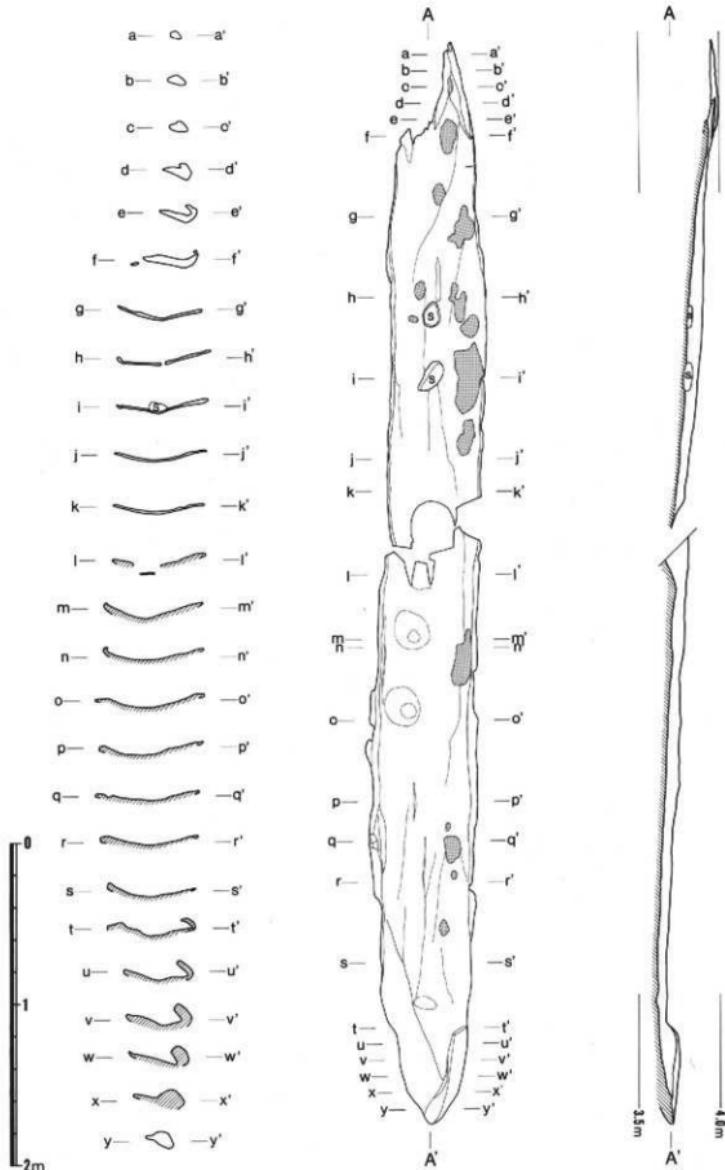
同時に櫂が1点検出されている。同じ第5層（黄褐色粘土と灰色粘土の互層）中よりの出土であるが、丸木舟より若干高い位置で検出されている。

(2)櫂（第80図）

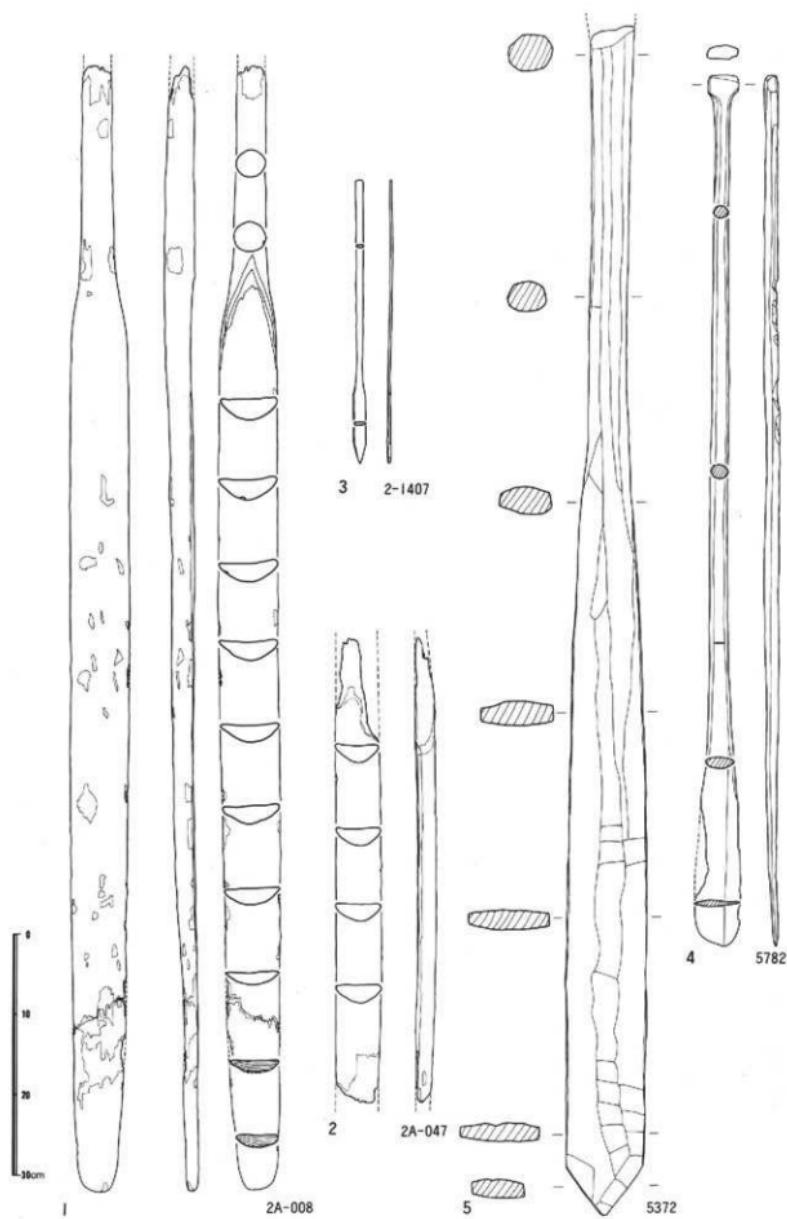
繩文時代とは限定できないもの、また櫂以外の用途の考えられるものもあるが形態の類似からここで取り扱うこととした。

1は大谷2区より前述の丸木舟とともに検出されたものである。現存長139cm、握り部の先端が欠失しており、全長は不明である。水かき部分116cm幅7.2cm厚さ1.5cm~2.5cmである。木取りには注目しておきたい。かなり大きな材の1/3程度の割り材を使用し木表の方を平に仕上げ中心側を丸く仕上げている。

2は櫂の破片で同じく大谷2区より検出されたものである。水かきにあたる部分の破片で現存長57.2cm幅5.6cm厚さ2.1cmを測るものである。1より上層の茶褐色粘土層より出土しておりこの層は弥生時代に比定されている。



第79図 丸木舟実測図



第80図 権実測図

3は非常に小型なものである。全長35.0cm幅1.53cm厚さ0.36cmを測る。櫂とすれば実用に耐えうるものではなく、ミニチュアということができる。斎串とするには基部が直角に切りおとされており、とりあえずははずしたが、なんらかの祭祀的な意味を捨てきれない。西大谷4区、旧河道内の出土で、樹種はスギである。

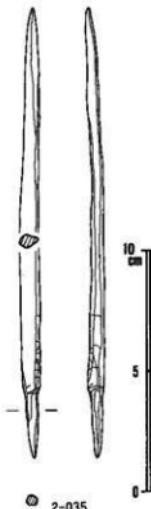
4は本遺跡では唯一の完形の櫂である。全長108.1cm最大幅5.7cm。柄が長く水かきとなる部分は比較的短い。

5は、西大谷1.2区旧河内E43グリッドより出土したものである。現存長147cmこれに続く同一個体の破片があり全長は180cm程度にはなると思われる。幅広で両面ともていねいに削られており、最大幅9.6cmを測る。先端部は三角形につくられている。櫂としてよいか非常に疑問である。『大谷川I』では鉢形木製品としている。いますこし類例をまち検討を加えたいものである。旧流路内よりの出土ではあるが、この付近では古墳時代後期の土器が主体を占めており、同時期の可能性が高い。

(3)ヤス

その他に、縄文時代の遺物として重要なものに、木製のヤスがある。全長18.5cm径0.8cm、基部を径0.5cm細くけずり、長さ2.8cmの茎をつくり出している。大谷1区V14グリッド黒色砂層より検出されており、この層より縄文後期と考えられる土器片が出土している。

- (1) 元興寺文化財研究所による
- (2) 当初第3層出土の弥生時代中期の土器片を指標として、弥生時代中期とし、新聞報道され、所報等でも紹介している。その後検討を加えた結果『概報』では縄文時代晩期と修正している。
- (3) 学習院大学測定。報告は『大谷川III』付載1として収録した。
- (4) 清水謙三「日本古代の舟」『舟・日本古代の探求』 1975



第81図 ヤス実測図

2. 錢貨（第82図～第84図）

本遺跡から出土した錢貨は148枚を数え、その内訳は錢種別一覧表の通りである。判読可能な枚数は135枚で、錢種、書体別にすると、31種、41書体である。初鋤年からする最古のものは、621年の「開元通寶」で、最新のものは、1863年の「文久永宝」である。

渡来錢は全て中国錢であり、時代を追ってみると、まず、唐錢は10枚で、全て「開元通寶」である。北宋錢は、968年の「宋通元寶」より、1111年の「政和通寶」まで合計93枚と他の時代のものより圧倒的に枚数が多い。南宋錢は「嘉定通寶」と「大宋元寶」の2種3枚であり、明錢は「永樂通寶」が1枚のみである。これら渡来錢の内出土枚数が多い錢種は、「皇宋通寶」12枚、「元祐通寶」12枚、「開元通寶」10枚、「元豐通寶」8枚、「紹聖元寶」8枚、「熙寧元寶」7枚などであり、これは、各地の出土錢の有り方と類似している。^[1]

次に、国内錢についてみると、「和同開珎」、「萬年通寶」、「長年大寶」の3枚の皇朝十二錢が注目される。「和同開珎」は、完形品で摩滅もほとんどない。県内では、伊東市井戸川遺跡、袋井市坂尻遺跡などからも出土している。他の2銭は多少摩滅しているが、出土例は少なく貴重なものと言える。この他、^[2]「寛永通寶」24枚（四文錢5枚を含む）と、「文久永宝」が出土している。「寛永通寶」は摩滅や青銅の付着^[3]が著しいものが多く見られる。

さて、これらの錢貨の内特徴があるものをあげてみると、まず背面に文字や模様を有するものがある。「開元通寶」に、背上に月文があるもの（5）が2枚、同じく「興」（？）を記したもの（6）が1枚見られる。「開元通寶」の背の文字は鑄造地を表したものである。「嘉定通寶」には背上に「九」を記したもの（40）が1枚、背上下に「十」「三」を記したもの（41）が1枚あり、「大宋元寶」には背下に「二」を記したもの（42）が1枚ある。これらは鑄造年を示しており、それぞれ嘉定9（1216）年、嘉定13年（1220）年、大宋2（1226）年鑄造のものである。国内錢では「寛永通寶」に背上に「文」のある、いわゆる文錢（初鋤造1668年）が2枚見られる。^[4]

次に故意に加工されたものをあげてみる。中央の孔が5角形や6角形に近い不整形のもの（48, 49）（星形状とした）が8枚みられる。この他円形に近いものもある。さらに小孔が穿たれたものが見られ、きれいな円形のもの（50）と、不整形のものがある。1枚に數個穿たれたものもある。このほかに、2分の1程度欠損しているものが3枚ある（51, 52）。これらは故意にたがねなどで切ったもの（類似のものを切錢とする報告例がある）かどうか判断しがたい。無名錢としたもの（遺物番号2-838）は故意に磨り研かれ直径は小さく、孔径は大きく、著しく薄い（こうした加工は、函館志海苔古錢を初め各地の出土錢にも見られる）。

次に選別の重要性が脱かれている私鋤錢（鋸錢）については、文字のくずれ、不鮮明、長崎錢のような特殊な字体、鋤直しによる直径の縮小、孔径の拡大、扁平化などがその特徴としてあげられている。それらをもとに判別を試みたが、どの特徴とともにここからは私鋤錢という基準を設けられず、明確に判断できるもののがなかった。なお、直径、孔径厚さを測定し、渡來錢については直径の分布表を作成してみた。表によると、24.6mm～24.7mmを頂点にほぼピラミッド型の分布が見られ、基本錢の直径を想定できるが、各錢種ともばらつきが見られ、それが摩滅によるものか、それとも鋤型の違いによるものか判断^[5]

しにくい。孔径は6.5×6.5mm、厚さは1.40mm前後が基本的なものと思われるが直径と同様のことが言える。

さて、これら銭貨の性格を考察するために注目すべきものをいくつかあげてみる。まず大谷1区のSX01及び近接地点から一括出土した92枚の銭貨がある（唐銭6、北宋銭80、南宋銭3、不明3であり遺跡出土の渡来銭の大半をしめる）。SX01は旧河道の中州状部分の縁辺にある集石遺構であり、人頭大からこぶし大の礫間から銭貨が集中出土している。同遺構からは馬骨が共伴している。隣接グリッド（鎌倉時代の旧河道）からは、呪符木簡や人形木製品などの祭祀遺物が出土している（大谷川II本文編P25及び第14図、図版編図版11参照）。次に宮川5区の旧河道跡SR201出土の北宋銭7枚があげられる。人頭大のものを含む礫の間からは集中出土しており（この遺構をSX340としている）、同一グリッド、隣接グリッド（SR201内）からは、墨書き土器、馬形土製品、人形土製品、儀鏡、獸骨、壺などが出土地で出土している（大谷川II本文編P171及び第100図、図版編図版86参照）。次に水上1区の中世大型水路状遺構SR150の礫群の間から出土した一括投棄と思われる銭貨4枚（唐銭、北宋銭、明銭、不明各1枚）がある（大谷川II本文編P67参照）。さらに、宮川6区の旧河道跡SR314出土の「和同開珎」があげられる。SR314からは、人形土製品、馬形土製品、獸骨などが出土している（大谷川II本文編P185及び第106図参照）。以上まとめてみると、次の3点が指摘できる。

①銭貨はその大半が旧河道（中州状部分も含み）と水路状遺構から出土している（近世銭の出土も旧河道からである）。

②自然流出とは考えられない礫群の間から出土している場合が多い（SX01の9個の礫は焼けた痕跡がある）。

③同一遺構または近接地点から多量の祭祀遺物が出土している。

①から、銭貨の本来の性格からして自然に埋没したものと考えにくく、目的を持って投棄されたものだと言えよう。平安期以降盛んになった水盤信仰に基づき、湖、沼に投棄された銭貨の出土例が想起され、同一の性格を持つ可能性もある。②から、礫が人為的に投棄されたものとすれば、往古からの祭場に石を配する風習（歴史時代にも山神信仰の場に組石遺構や敷石遺構が多く見られる）が想起され、本遺跡の銭貨が呪物として用いられたことの傍証となるであろう。③も銭貨の持つ祭祀的意味を示唆するものであるが、特に、SX01の馬骨が注目される（他の銭貨出土地点でも、同一時期とは限定されないものの獸骨の出土が見られる）。馬と水盤信仰との関係は從来から指摘されており、沼（長野県大清水遺跡）、溝（浜松市伊場遺跡等）、井戸（沼津市藤井原遺跡）から祭祀遺物とともに骨、馬齒が出土している。また、民俗例にも水盤信仰に関して、川や滻に馬骨、獸骨を投げ込む風習が広く認められる。馬骨にこのような意味があり、同遺構には他の遺物が混在していないことからしても銭貨の性格をある程度限定できるのではないかろうか（ただし、千葉県市川市市営運動場遺跡の住居群の中の特殊窓穴から馬骨と和同開珎が出土している例もあり、馬骨と銭貨のセットを水盤信仰と直結することはできない）。

以上出土銭貨について分類整理した結果を報告し、さらに出土地点等からその性格に関しても若干の考察を加えた。しかし、銭貨については從来等閑視される傾向があり、参考文献が少なく、本遺跡のような出土例が少ないとことからも（意図的に埋藏された例としては、備蓄銭や経塚・墳墓への奉賽銭が多

い) 十分な検討ができたとはいえない。

- (1) 入田整三 「発掘鏡についての考察」『考古学雑誌』20-12 1930 の統計によれば、1位「元豊通寶」、2位「皇宋通寶」、3位「熙寧元寶」、4位「開元通寶」、5位「元祐通寶」である。
- (2) 袋井市史編纂委員会 「目でみる袋井市史」 1986
- (3) 栄原永遠雄 「日本古代錢貨出土一覽および附表」『続日本紀研究』169 1973によれば県内出土例は「万年通寶」が1例あり、「長年大寶」は例がない。
- (4) 石川県立埋蔵文化財センター 「門前町下元町遺跡」 1985
- (5) 市立函館博物館 「函館志海苔古鏡」 1973
- (6) 大場磐雄 「水盤信仰の考古学的考察」『祭祀遺跡—神道考古学の基礎的研究』 1970
- (7) 井上正一 「上代水信仰の一形態」『史元』6 1968等
- (8) 小野真一 「祭祀遺跡」 ニューサイエンス社 1982
- (9) 高谷重夫 「兩乞習俗の研究」 法政大学出版局 1982
- (10) 市川市教育委員会 「昭和55年度埋蔵文化財発掘調査報告」 1981

第23表 錢種別一覧表

錢種番号	錢貨名	時代 (王朝)	初鑄年 (西暦)	書体別 枚数	合計 枚数	錢種 番号	錢貨名	時代 (王朝)	初鑄年 (西暦)	書体別 枚数	合計 枚数
1	和同開珎	奈良	708	楷1	1	19	熙寧元寶	北宋	1068	楷4	
2	萬年通寶	〃	760	〃1	1	〃	〃	〃	〃	篆3	7
3	長年大寶	平安	848	〃1	1	20	元豐通寶	〃	1078	行3	
4	開元通寶	唐	621	隸10	10	〃	〃	〃	〃	篆5	8
5	宋通元寶	北宋	968	楷1	1	21	元祐通寶	〃	1086	行6	
6	至道元寶	〃	995	草1		〃	〃	〃	〃	篆6	12
		〃	〃	行2	3	22	紹聖元寶	〃	1094	行6	
7	咸平元寶	〃	998	楷3	3	〃	〃	〃	〃	篆2	8
8	景德元寶	〃	1004	〃5	5	23	元符通寶	〃	1098	行3	
9	祥符元寶	〃	1008	〃5	5	24	聖宋元寶	〃	1101	〃1	
10	祥符通寶	〃	1008	〃1	1	〃	〃	〃	〃	篆2	3
11	天禧通寶	〃	1017	〃2	2	25	大觀通寶	〃	1107	楷2	
12	天聖元寶	〃	1023	〃2		26	政和通寶	〃	1111	〃3	
		〃	〃	篆3	5	〃	〃	〃	〃	篆3	6
13	景祐元寶	〃	1034	〃2	2	27	嘉定通寶	南宋	1208	楷2	2
14	皇宋通寶	〃	1039	楷3		28	大宋元寶	〃	1225	〃1	1
		〃	〃	隸2		29	永樂通寶	明	1408	〃1	1
		〃	〃	篆7	12	30	寛永通寶	江戸	1636	〃19	
15	至和元寶	〃	1054	〃1	1		(四文鏡)	〃	1768	〃5	24
16	嘉祐通寶	〃	1056	楷2	2	31	文久元寶	〃	1863	〃1	1
17	嘉祐元寶	〃	〃	〃1	1		判読不明				13
18	治平元寶	〃	1064	篆1	1						
合計											148

第24表 出土錢貨一覧表

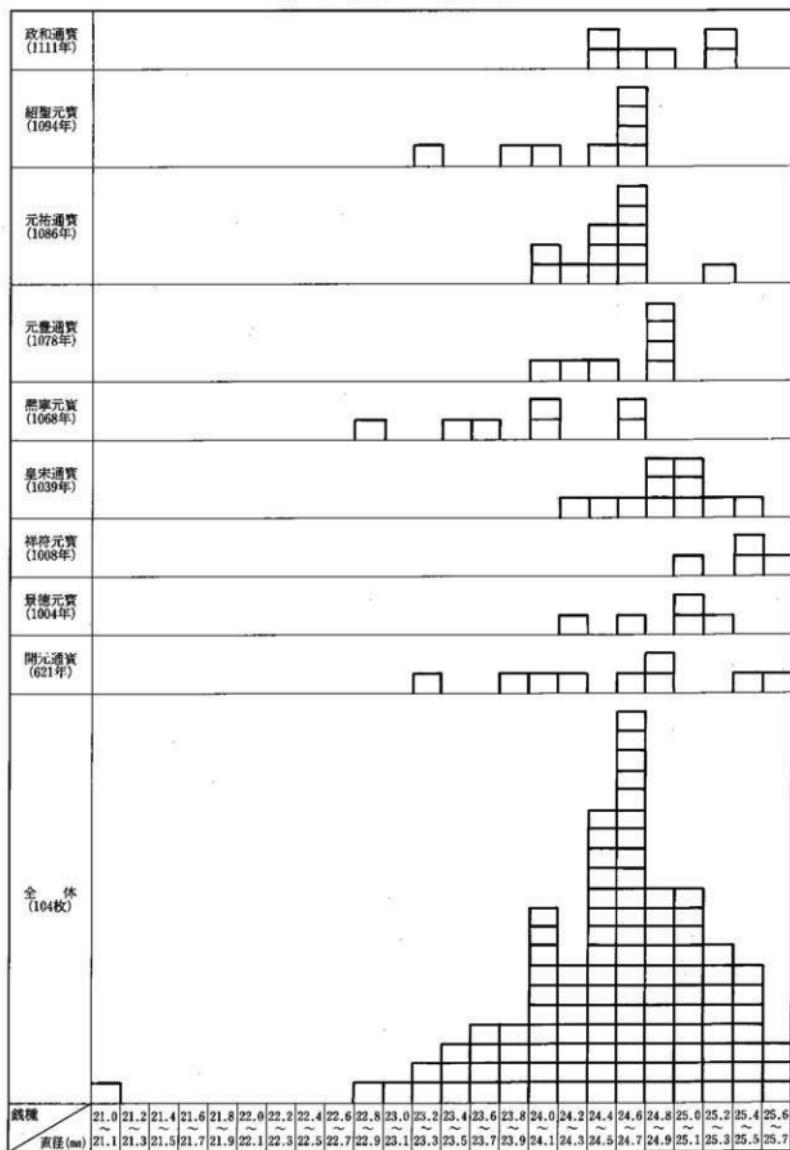
単位:mm

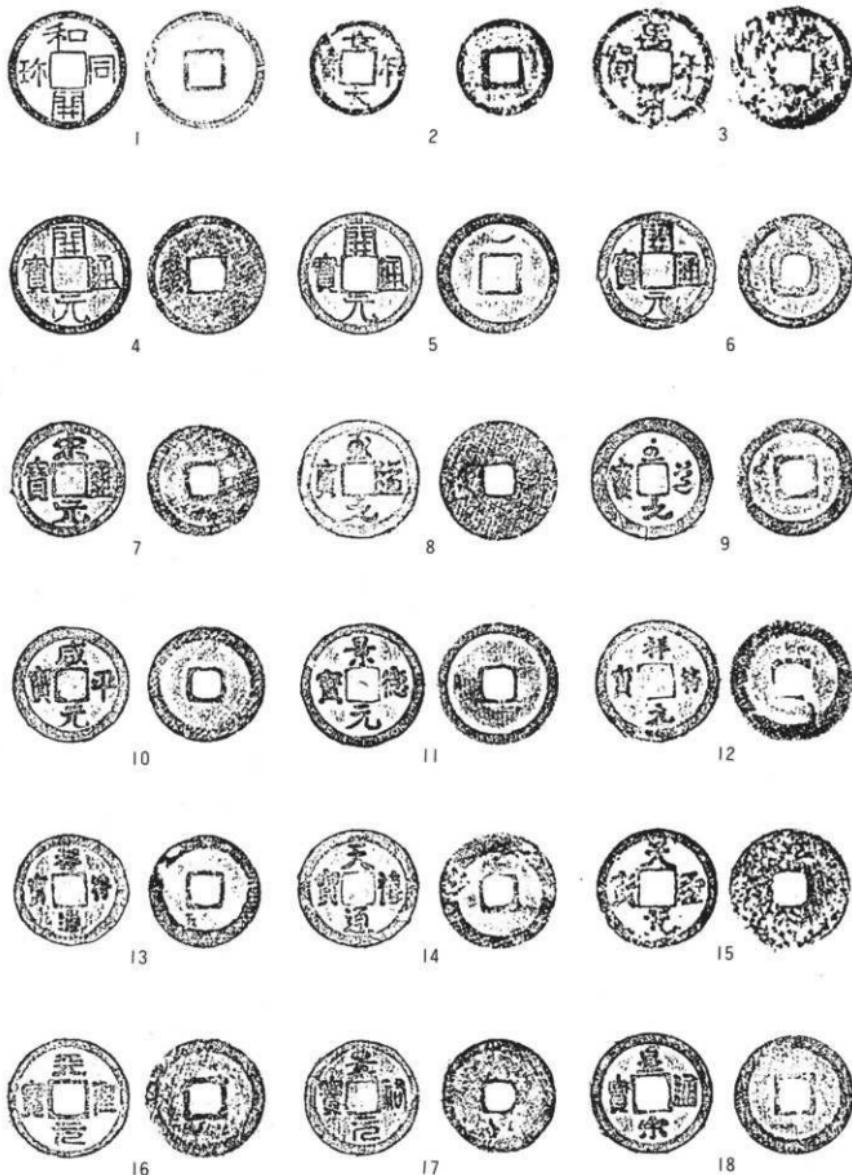
番号	地区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	錢貨名	書体	直徑	孔 径	厚さ	備 考
9	大谷1区	S20	S X01	2-436	至道元寶	篆書	25.0	5.5×5.5	1.45	
4	〃	〃	〃	2-519	開元通寶	隸書	24.8	6.5×7.0	1.40	
16	〃	〃	〃	2-520	天聖元寶	篆書	24.7	6.5×6.5	1.40	
31	〃	〃	〃	2-521	元祐通寶	〃	24.4	7.0×6.0	1.40	一部欠損
11	〃	〃	〃	2-522	景德元寶	楷書	25.2	6.5×6.0	1.35	
	〃	〃	〃	2-523	紹聖元寶	行書	24.6	6.5×6.5	1.35	
	〃	〃	〃	2-524	皇宋通寶	篆書	24.8	6.5×7.0	1.35	
28	〃	〃	〃	2-525	元祐通寶	行書	24.5	7.0×6.5	1.35	一部欠損
	〃	〃	〃	2-526	元祐通寶	篆書	24.7	6.5×6.5	1.35	
	〃	〃	〃	2-527	景德元寶	楷書	24.3	6.5×6.5	1.45	孔形鷗丸
	〃	〃	〃	2-528	元符通寶	行書	23.9	6.5×6.5	1.50	
	〃	〃	〃	2-529	天聖元寶	楷書	25.0	6.8×7.0	1.60	
	〃	〃	〃	2-530	祥符元寶	〃	25.4	6.5×6.5	1.40	
	〃	〃	〃	2-531	聖宋元寶	篆書	23.4	6.5×6.5	1.40	一部欠損
	〃	〃	〃	2-532	咸平元寶	楷書	24.6	6.0×6.0	1.10	周縁部に切削痕
36	〃	〃	〃	2-533	聖宋元寶	篆書	24.4	5.8×5.8	1.50	
	〃	〃	〃	2-534	皇宋通寶	〃	25.0	6.5×6.3	1.10	
48	〃	〃	〃	2-535	〃	〃	24.7	不整形	1.50	孔形は星形状
	〃	〃	〃	2-536	〃	〃	25.3	不整形	1.30	〃
19	〃	〃	〃	2-537	〃	篆書	25.0	7.0×7.0	1.30	
42	〃	〃	〃	2-538	大宋元寶	楷書	23.0	7.0×7.0	1.70	背下に「二」
40	〃	〃	〃	2-539	嘉定通寶	〃	24.6	7.0×7.0	1.30	背上に「九」
	〃	〃	〃	2-540	不明	不明	24.2	6.2×6.2	1.40	
37	〃	〃	〃	2-541	大觀通寶	楷書	25.3	6.0×6.0	1.70	小孔1
41	〃	〃	〃	2-542	嘉定通寶	〃	23.7	6.5×6.5	1.25	背上に「十」背下に「三」
32	〃	〃	〃	2-543	紹聖元寶	行書	24.0	6.0×6.0	1.30	
38	〃	〃	〃	2-589	政和通寶	楷書	24.7	6.5×6.5	1.25	
	〃	〃	〃	2-611	元祐通寶	篆書	24.5	7.5×7.2	1.25	
27	〃	〃	〃	2-629	熙寧元寶	〃	23.6	6.0×6.2	1.25	
39	〃	〃	〃	2-630	政和通寶	〃	25.2	6.0×6.5	1.45	
12	〃	〃	〃	2-631	祥符元寶	楷書	25.4	6.5×6.5	1.55	一部欠損、亀裂有り
26	〃	〃	〃	2-632	熙寧元寶	〃	23.4	6.5×6.5	1.40	
14	〃	〃	〃	2-633	天禧通寶	〃	24.7	6.0×6.5	1.40	
	〃	〃	〃	2-634	政和通寶	篆書	25.2	6.0×6.0	1.30	
22	〃	〃	〃	2-635	至和元寶	〃	23.6	6.2×6.2	1.35	
23	〃	〃	〃	2-636	嘉祐通寶	楷書	24.5	7.5×7.3	1.10	
	〃	〃	〃	2-637	元豐通寶	篆書	24.3	不整形	1.10	孔形は星形状
	〃	〃	〃	2-638	熙寧元寶	楷書	24.0	6.0×6.2	1.30	
24	〃	〃	〃	2-639	嘉祐元寶	〃	23.8	5.9×5.9	1.20	一部欠損
	〃	〃	〃	2-640	元祐通寶	行書	24.9	6.9×7.1	1.20	
33	〃	〃	〃	2-641	紹聖元寶	篆書	24.6	6.5×6.5	1.30	
	〃	〃	〃	2-642	元祐通寶	行書	24.6	不整形	1.50	孔形は星形状
25	〃	〃	〃	2-643	治平元寶	篆書	24.2	6.3×6.1	1.45	
	〃	〃	〃	2-644	大觀通寶	楷書	24.4	6.3×6.5	1.20	一部欠損
30	〃	〃	〃	2-645	元祐通寶	行書	24.7	6.7×6.5	1.30	
20	〃	〃	〃	2-646	皇宋通寶	篆書	24.3	7.0×6.5	1.20	
8	〃	〃	〃	2-647	至道元寶	行書	25.0	5.8×5.8	1.30	
	〃	〃	〃	2-648	元祐通寶	篆書	24.7	不整形	1.20	孔形は星形状
49	〃	〃	〃	2-649	熙寧元寶	〃	22.9	不整形	1.20	〃
5	〃	〃	〃	2-650	開元通寶	篆書	25.4	7.0×7.0	1.35	背上に「月文」
	〃	〃	〃	2-656	咸平元寶	楷書	24.4	6.0×6.0	1.60	
	〃	〃	〃	2-657	熙寧元寶	〃	24.6	6.8×6.5	1.45	一部欠損
	〃	〃	〃	2-658	紹聖元寶	行書	24.6	6.5×6.5	1.10	

番号	地区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	銭貨名	書体	直径	孔 径	厚さ	備 考
29	〃	〃	〃	2-659	元豊通寶	篆書	24.8	7.0×7.0	1.20	
	〃	〃	〃	2-660	元祐通寶	行書	24.6	7.0×7.0	1.20	
13	〃	〃	〃	2-661	祥符通寶	楷書	23.6	6.2×6.2	1.20	小孔3
	〃	〃	〃	2-662	紹聖元寶	篆書	24.5	6.0×5.8	1.25	
17	〃	〃	〃	2-663	景祐元寶	〃	24.1	5.8×6.0	1.20	
	〃	〃	〃	2-664	皇宋通寶	隸書	25.4	7.5×7.5	1.20	一部欠損
	〃	〃	〃	2-665	天聖元寶	篆書	25.2	6.5×6.6	1.30	
6	〃	〃	〃	2-666	開元通寶	隸書	24.1	6.0×6.2	1.30	背上に「興」(?)
	〃	〃	〃	2-667	元豐通寶	行書	24.5	6.0×5.8	1.40	
50	〃	〃	〃	2-668	元祐通寶	〃	25.2	5.8×5.8	1.25	小孔(円形)2
	〃	〃	〃	2-669	〃	〃	24.6	7.0×7.0	1.10	
	〃	〃	〃	2-670	景祐元寶	篆書	24.9	7.0×7.0	1.35	
	〃	〃	〃	2-671	元祐通寶	行書	24.0	6.5×6.5	1.40	
	〃	〃	〃	2-672	開元通寶	隸書	24.6	6.3×6.3	1.50	小孔2
18	〃	〃	〃	2-673	皇宋通寶	楷書	24.8	6.5×6.5	1.40	
51	〃	〃	〃	2-674	口宋通し	〃			1.35	1/2欠損
	〃	〃	〃	2-675	皇宋通寶	篆書	24.4	6.3×7.0	1.30	
34	〃	〃	〃	2-676	元符通寶	行書	24.4	6.7×6.5	1.40	
	〃	〃	〃	2-677	不明	不明	22.6	6.5×6.5	1.10	
	〃	〃	〃	2-678	紹聖元寶	篆書	23.9	7.0×7.0	1.45	
	〃	〃	〃	2-679	〃	行書	24.7	不整形	1.20	孔形は星形状
	〃	〃	〃	2-680	開元通寶	隸書	24.9	7.2×7.2	1.30	背上に「月文」
	〃	〃	〃	2-681	政和通寶	楷書	24.4	5.5×5.5	1.20	孔形圓丸
	〃	〃	〃	2-682	皇宋通寶	〃	24.8	6.8×6.8	1.30	
	〃	〃	〃	2-683	景德元寶	〃	25.0	6.0×6.0	1.20	孔形圓丸
35	〃	〃	〃	2-684	蔡宋元寶	行書	24.1	6.0×6.2	1.45	
	〃	〃	〃	2-685	不明	不明	23.6	不整形	1.20	孔形は星形状
	〃	〃	〃	2-686	熙寧元寶	楷書	24.6	6.5×6.0	1.35	
21	〃	〃	〃	2-687	皇宋通寶	篆書	25.1	7.2×7.0	1.20	
	〃	〃	〃	2-688	祥符元寶	楷書	25.7	5.5×5.7	1.35	小孔1
	〃	〃	〃	2-697	祐祐通寶	〃	25.6	7.0×7.5	1.30	
	〃	〃	〃	2-698	大聖通寶	篆書	25.4	6.9×7.0	1.45	
	〃	〃	〃	2-699	不明	不明	23.4	6.9×6.5	0.90	小孔1
10	〃	〃	〃	2-700	咸平元寶	楷書	24.1	5.5×6.0	1.40	
7	〃	〃	黒色砂礫層	2-1200	宋通元寶	〃	23.4	5.8×5.8	1.30	
	〃	〃	表採	2-1246	開元通寶	隸書	24.2	6.5×6.5	1.35	
	〃	〃	〃	2-1256	政和通寶	楷書	24.8	6.1×6.1	2.20	
	〃	〃	黄褐色砂礫層	2-1314	元祐通寶	篆書	24.2	6.4×6.0	1.70	
	〃	〃	土層帶	2-1348	天禧通寶	楷書	25.0	5.9×6.0	1.60	
西大谷6区	〃	〃	赤褐色砂礫層	2B-216	不明	不明	24.0	6.4×6.2	1.30	
52	西大谷	F39	砂礫層	321	口元口寶	隸書	25.0		1.00	1/2欠損
	〃	赤褐色土層	1344	祥符元寶	楷書	25.1	6.0×6.0	0.80	歪み有り	
15	水上1区	K55	S R150	2-379	天聖元寶	〃	24.5	6.8×6.8	1.20	
	〃	〃	〃	2-414	開元通寶	隸書	25.5	7.2×7.1	1.20	
43	〃	〃	〃	2-837	永樂通寶	楷書	25.0	5.7×5.6	1.10	小孔2
	〃	〃	〃	2-838	無名	〃	21.5	8.3×8.0	0.80	故意の摩耗顯著
	〃	〃	S D162	2-557	紹聖元寶	行書	23.2	6.8×6.0	1.20	一部欠損
水上2区	L64	〃	〃	2-86	不明	不明	23.0	6.9×7.0	1.00	
水上8区	G83	黄褐色粘土層	3-12-1	寛永通寶	楷書	28.0	6.8×7.0	1.00	背に青海波文、四文錢	
水上10区	〃	〃	3-12-2	〃	〃	28.1	6.0×6.3	1.10	背に青海波文、四文錢	
	〃	表採	3-159	〃	〃	23.0	6.5×6.7	1.20		
47	〃	G74	近世砂礫層	3-491	文久永宝	〃	26.5	6.6×6.5	1.20	
46	〃	G98	表採	3-781	寛永通寶	〃	28.0	6.5×6.2	1.10	背に青海波文、四文錢
	〃	F75	旧流路	3-878	元豐通寶	篆書	24.9	6.2×6.5	1.10	

番号	地区	グリッド	遺構・層位	遺物番号	銭貨名	書体	直径	孔 径	厚さ	備 考	
水上 宮川2区		G69	暗灰色砂質 粘土層	3-1160	寛永通寶	楷書	28.1		1.10	背に青海波紋、四文錢 1/2欠損	
		H100	黄色砂疊層	713	寛永通寶	楷書	24.9	6.4×6.4	1.00		
		"	"	714	"	楷書	25.5	6.5×6.5	1.10		
		"	"	715	不明	不明	27.6		1.50		
		"	"	716	寛永通寶	楷書	23.1	7.0×6.9	0.90		
		"	"	717	"	楷書	23.7	6.0×5.9	1.30		
		"	"	718	"	楷書	24.3	6.1×6.3	1.20		
		"	"	719	"	楷書	23.0	6.4×6.4	1.30	青銅付着顯著	
		"	"	720	"	楷書	22.0	6.0×6.0	1.10	一部欠損	
		"	"	721	"	楷書	24.7	5.5×5.3	1.00		
44		"	"	722	"	楷書	22.4	6.4×6.4	1.00		
		"	"	723	"	楷書	22.5	6.3×6.5	1.10		
		"	"	724	不明	不明	24.5	6.5×7.0	1.00	青銅付着顯著	
		"	"	725	寛永通寶	楷書	24.1	6.4×6.4	1.00		
		"	"	726	"	楷書	22.8	6.4×6.5	1.10		
		H101	表採	727	"	楷書	24.3	5.6×5.6	1.20		
		"	"	728	"	楷書	24.1	5.0×5.1	1.10	青銅付着顯著、孔形隅丸	
		"	黄色砂疊層	729	不明	不明	22.1	6.9×7.0	0.70		
		"	"	730	寛永通寶	楷書	24.1	6.2×6.2	1.10		
		"	"	731	不明	不明	23.1	6.5×6.5	1.20	一部欠損、青銅付着顯著	
2		G102	表採	732	元寶通寶	篆書	24.9	6.1×6.0	1.10		
		I 100	灰色粘土層	733	寛永通寶	楷書	22.9	5.9×5.9	1.20		
		"	"	734	應寧元寶	篆書	24.0	6.5×7.0	0.80		
		宮川3区	灰褐色粘土層	3-174	開元通寶	隸書	23.9	6.8×6.8	0.90	小孔1	
		F98	暗灰色砂層	3-1814	元祐通寶	篆書	24.0	7.0×7.3	1.10		
		宮川4区	砂疊層	3-1310	不明	不明	27.9		1.90		
		"	J99	暗灰色粘土層	3-2461	"	23.5	6.0×6.0	1.30		
		"	J98	粘土砂疊層	3-2573	長年大寶	楷書	18.5	5.5×5.5	1.20	
		"	"	3-2574	萬年通寶	楷書	23.7	6.3×6.3	1.10		
		宮川5区	B108	S X340	祥符元寶	楷書	21.0	6.0×5.7	1.30		
45		"	"	3-62	元豐通寶	篆書	24.0	6.5×6.5	1.40		
		"	"	3-63	政和通寶	楷書	24.5	6.2×6.0	1.10		
		"	"	3-64	開元通寶	隸書	23.3	6.8×7.0	1.00		
		"	"	3-65	景德元寶	楷書	24.7	6.0×6.0	1.10	青銅付着顯著	
		"	"	3-66	至道元寶	行書	24.5	6.0×6.0	1.40		
		"	"	3-67	元祐通寶	楷書	24.5	6.5×6.5	1.30		
		"	"	3-68	寛永通寶	楷書	24.6	5.7×5.7	1.20	一部欠損	
		C102	褐灰色粘土層	3-425	寛永通寶	楷書	23.3	6.7×6.7	1.40	背上に「文」文錢	
		宮川6区	表採	3-020	"	楷書	26.5	6.5×6.5	1.10	背に青海波紋、四文錢	
		"	F103	3-53	"	楷書	23.5	5.9×6.0	1.20	背上に「文」文錢	
1	"	E104	S R314	3 2500	和同開寶	楷書	23.3				

第25表 直径による錢貨分布表





第82図 錢貨拓影 1



19

20

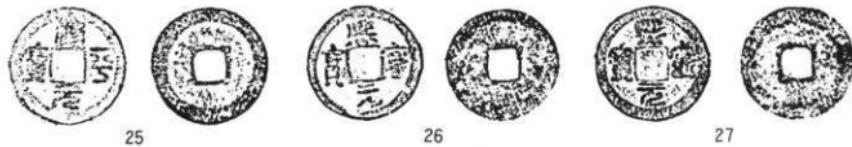
21



22

23

24



25

26

27



28

29

30



31

32

33



34

35

36

第83圖 錢貨拓影 2



37

38

39



40

41

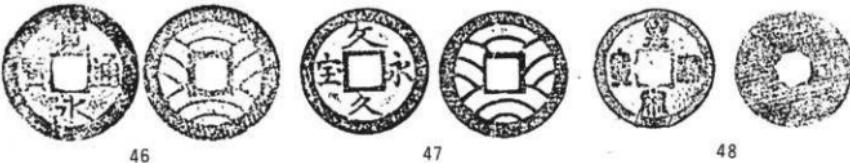
42



43

44

45



46

47

48



49

50

51



52

第84図 錢貨拓影 3

3. 用途不明木製品（第85図・第86図）

大量の用途不明の木製品がある。その中で、特徴的なもの・特異なものを二・三あげてその形態を紹介したい。類例あるいは用途について御教示願えれば幸いである。

1～3は『8の字』状を呈するものである。1は大型品で二つの輪を連結したような8の字状を呈するもので、全長10.8cmを測る。穴は径2.2～2.4cmのほぼ円形で内側はなめらかで紐等によるそれが考えられる。二つの穴の中心での間隔は5.2cmである。2は小型のもので長さ9.5cm幅2.45cm、穴の径は1.0cm～1.4cm、二つの穴の間隔は1に比して大きく、二つの穴の中心で測って6.4cmあまりある。3は板状のものの両端に2孔をうがったもので中央部分を若干けずつて細く作りだしている。全長9.8cm穴の径0.7cm～1.0cm中心での間隔6.5cmをはかる。

類例としては東京都日野市落川遺跡にみられる。¹¹⁾ 2に非常に類似するもので、全長16cm穴の径約1.2cmで、古墳時代末期に位置付けられている。民俗例を探してみると綱などを張るとき用いる「自在」が思い浮かぶ。現在でもテントの張り口をしめる時などに用いられるものである。3が形態的には最も類似している。

4は穴が3ヶ所にあるものである。ただし左右に割れ破損も著しいので穴の状況は不確かであり、特に中央の穴が意図的にあけられたものかどうかの判断は難しい。他の二つの孔は確かにあるが、その径は1cmに満たないもので円形を推定すると穴の間隔は5～6cmといったものであろう。形態的類似からここにまとめた。5も同様である。

6は刻み目を持った丸棒である。端部は一周し頭状の部分をつくり出しているが、他は一側面のみの刻みである。現存長13.8cmで刻み目は8ヶ所まだ続くものと思われる。7も刻み目を持った棒状品である。

8はヘラ状の木製品である。全長15.2cm幅5.2cm厚さ0.7cmを測る。基部と身部との間がわずかにひびが入り折れ曲がっている。ここに大きな力がかかることが推定でき、その用途を考えるうえでのひとつの手がかりとなろう。

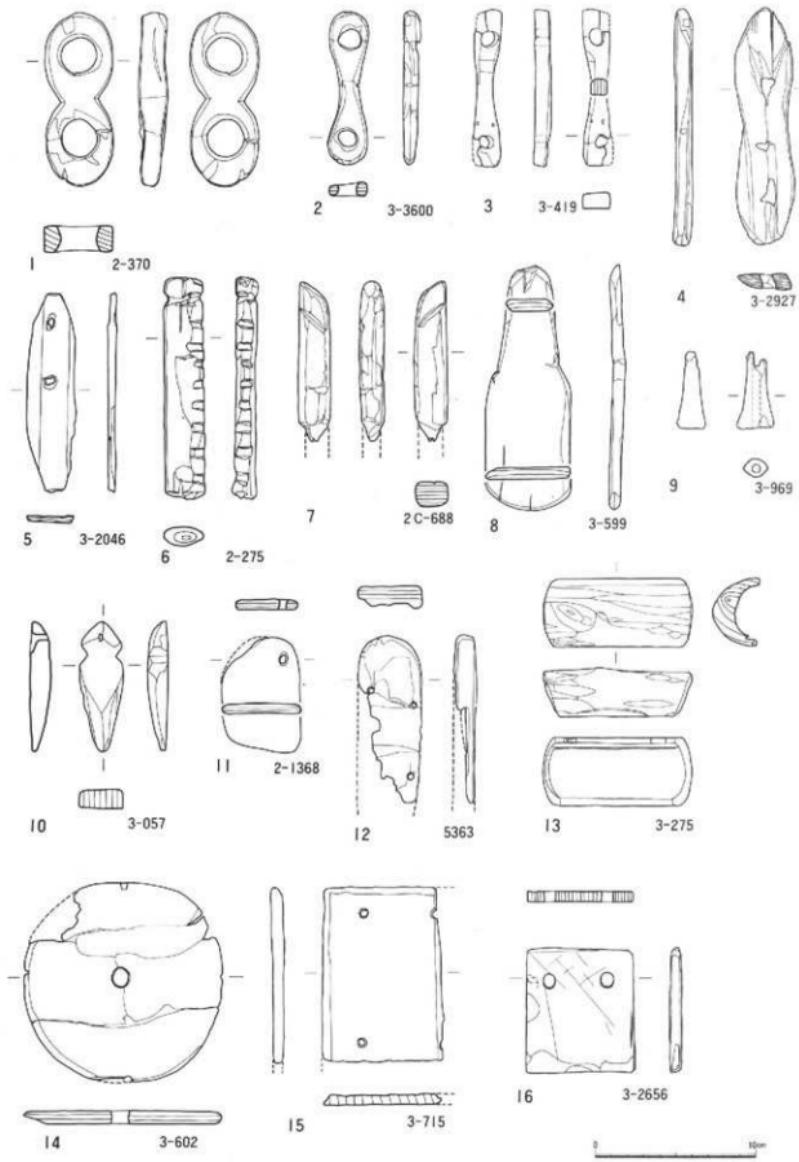
9は栓状の製品であるが、中心部分に孔のあいていることが特異である。

10は半立体的な人形あるいは鳥形とも考えられるものである。全長8.1cm頭部は圭頭状で一本脚である。顔にあたる部分の中央に裏側にねじる小孔があけられている。

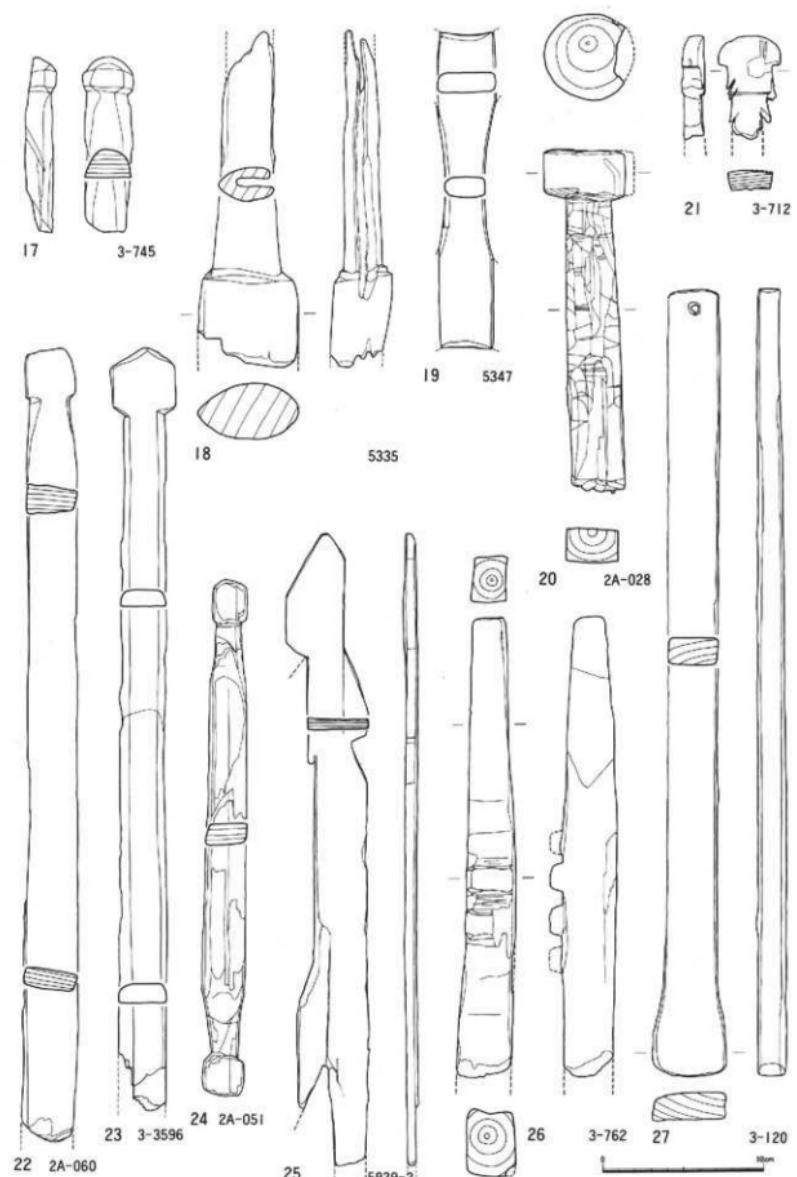
11はなんの変てつもない板であるが隅の一ヶ所に穴があけられている。このような例がかなり認められる。ペンダント風ではあるが装飾的加工は特に認められない。

12は同じく板に孔があけられたもので現状では3ヶ所であるが、対称的と考え4ヶ所の孔を想定することが可能であろう。

13は全長9.25cm断面半円形で中央部分がくり抜かれている。一方の側縁の内側に溝が刻み込まれている。この溝に鉄製の刃部が埋め込まれていたとも考えられるが、溝の深さは2～3mmと浅い。材はイヌマキで表面は非常になめらかに仕上げられており、手で握るとちょうど手ごろな大きさということができる。民俗例で東北地方にみられるコウガイと呼ばれる穂摘み具との共通性も指摘できるがいささか飛躍がすぎよう。類例をまちたい。



第85図 用途不明木製品実測図 1



第86図 用途不明木製品実測図 2

14は径12.2cmの円板である。中央に径1.02cmの孔があけられまた二方の縁に小さな割り込みが認められる。

15は方形の板状品で4ヶ所に小孔がうがたれている。破片のため全形を知ることはできない。16は完形で同様に方形の板に2ヶ所の孔があけられている。

17はいわゆる有頭棒といわれるもので、頭部をていねいに造りだしている。

18は一見刀かと思われるもので、刃のようなものをはめこむ溝が切られている。

19は全長19.8cm幅3.6cmの短冊状の板の中央部分を大きくえぐり込んである。

20～24いわゆる有頭棒として一括されてしまうが、それぞれ用途は異なるであろうと推定される。20は円形の芯持ち材をていねいに削り出したもので中央部分の断面は長方形である。23の3点は短冊状の板に頭部を平面的に造りだしている。片側は欠失しており、全形を知り得ない。

25は短冊状の板の両側から数ヶ所の切り欠きを入れたもので、欠損が著しく、どのように原形を想定できるか興味深い。人形あるいは鳥形の模造品を想定できなくもないが、とりあえずははずしておく。

26は角棒の一側面に突起が4ヶ所認められるものである。

27は全長48.8cmのヘラ状の木製品である。先端部は幅が広がり4.6cmを測る。基部での幅は3.0cmあまりで、小孔がうがたれている。完形品である。

(1) 日野市落川遺跡調査会『落川遺跡調査概報I』1981

(2) 岩手県立博物館『岩手の雜穀—北部北上山地にコメ以前の文化を探る』1989

第V章 考察・特論

第1節 神明原・元宮川遺跡におけるいわゆる「祭祀」に関する二・三の問題

1. はじめに
2. 祭祀的遺構及び遺物の状況
3. 木製模造品の形態と編年
4. 祭祀形態の多面性

1. はじめに

すでに『大谷川II』の「第IV章まとめ」において祭祀的な遺構・遺物についてその概要が報告され、大まかな年代観が示されている。これは「遺構編」としての考え方であるが、その後2年間の遺物の検討の結果修正をしなければならない事項やより慎重にならなければならぬ新たな問題も生まれてきた。ここでは出土状況・遺物の形態的分類や他遺跡との比較あるいは多くの方々の研究・助言を踏まえて本遺跡の祭祀遺物が内包する問題を考えてみたいと思う。現地調査からの6年間で10人を越す調査員が本遺跡にかかわってきた。この中には現地の状況を全く知らずに整理にあたった調査員もある。そんな中で個々の調査員の考え方は実に様々であり、祭祀に関しての調査団の統一した意見を得ることはできなかった。大谷川の一連の報告書のまとめとして本遺跡の祭祀を概観するが、ここに示すのは筆者の考え方であり一個人の考えにすぎないことを断わっておきたい。

2. 祭祀的遺構及び遺物の状況

既に『大谷川I』及び『大谷川II』の「遺跡の概要」で報告したものであるが、本遺跡を祭祀という観点でながめるため遺物の検討を踏まえた年代観を示しながら年代順にまとめてみたい。すなはち一定のまとまりを持ち、資料整理の中で一定の年代観を与えることができたものに限定する。

(1) 古墳時代前期

古墳時代前期では祭祀的な遺物を出土した遺構は2個所認められた。一つは水上10区の土坑状遺構S P727である。これは平面プランが長径1.41m、短径1.18mの長円形で深さ0.85mの2段階の掘り方を有する土坑で、その上半部に多数の木片とともに舟形木製品（第27図3）が出土した。これより上層で出土した土師器壺の形状から弥生時代末～古墳時代初頭と判断された。舟形の他はいわゆる祭祀遺物は認められなかったが、木片のなかには焼痕があるものも認められた。舟形木製品は弥生時代から多くの出土例があり中・近世へと続いている。しかしながらその性格についての研究は民俗学的なアプローチが多く必ずしも明らかであるとは言えない。出土場所は溝や旧河川がほとんどであるが、本遺跡のように土坑より出土した例もある。その代表的なものは奈良県纏向遺跡の4号土壙出土のものがある。この土壙からは舟形木製品のほか黒漆塗木製皿・水鳥形木製品・大型木製高环などが出土している。舟形には⁽¹⁾艤部外面に焼痕があり、舷側外面に線刻がなされていたという。年代は纏向3式期とされる。舟形木製

品の土坑出土例は古墳時代までは縦向例以外にはほとんどないが本遺跡例も縦向遺跡と年代・出土状況等が似通っており、特に焼痕がある木片あるいは木製品が存在することは注目される。また本遺跡の場合単独出土といってよく、例はすくないがこれ以降検出されておらず、他の木製模造品とは異なる取り扱いが必要である。

今一つ古墳時代前期の祭祀的遺構として重要なものに西大谷7区の8・9層出土の土器群及び玉類がある。8・9層は南西から北東に下降する傾斜面上に堆積した包含層で、北東の最も低い部分は窪地となり比高差は0.6mほどある。出土した土器は100点弱で高環・器台・小型丸底土器など祭祀性の強い土器が1/3ほど含まれていた。この他に台付壺と壺がある。これに管玉13点とガラス小玉2点が伴出した。玉類は窪地中央部に、高環・器台・小型丸底土器などはこれら玉類の周囲の窪地の縁辺で、台付壺はさらにその周囲の標高の高い所で検出された(『大谷川II』第18図)。さらに同区では法面の表土除去中に小型重圓文鏡(第45図1)も出土している。これらの状況は祭祀あるいは祭祀の行われた後に投棄された跡を示しているものと考えられる。特にいわゆる供獻用の土器(高環・器台・小型丸底土器)と煮沸用土器(台付壺)の出土場所が分かれることは注目すべきことであり祭祀の性格を考える上でも重要である。年代的には土器の特徴から4世紀後半と推定される。

この他では西大谷1区S D15で高環(器台?)や小型坩形土器などの祭祀用と考えられる土器も出土しているが、出土状況に特記すべきものが認められない。なお水上1区の井戸S E261でその祭祀性が『大谷川II』において指摘されているが、祭祀的遺物の出土をもって祭祀性を認める現在の考古学においては簾や腰掛などの木製品や壺だけで埋井祭祀とするのは難しいと考えられる。

(2) 古墳時代中期

古墳時代中期でまずふれなければならないのは水上10区のS X624である。これは須恵器を伴わない土師器のみの土器群と滑石製模造品の一括であり、先述した西大谷7区8・9層と同様に溝状の低地に向かう南東向の緩斜面に立地している。出土遺物はa~dの4群に大別でき複数回にわたり投棄された様子が窺えた。土師器の特徴から4世紀末~5世紀前半と考えられる。土器は高環・坩形土器・壺・甕・台付壺などで高環が半数近くを、坩形土器が1/5を占めていた。形状が認識できるものは168点であったが破片が多く故意に割られたような状況であった。滑石製模造品は有孔円板6点、剣形2点、勾玉1点、白玉284点であった。S X624に類似する遺構としては宮川3区S X484があるがこちらは調査区の端で検出されたこともあり小規模で高環・坩形土器など小数の土器と滑石製勾玉・白玉各1点が出土している。やはり低湿地の岸部とも考えられる地点である。

水上8区S X775は微高地状地形の端部に位置する土師器群である。ほぼ東西の方向の直線上に高環5点、壺2点、甕2点がそれぞれまとまって検出された。高環と壺の間は1.5m、壺と甕の間は3mあまりである。人為的に置かれた状態で、そのまま土圧で押しつぶされたと判断される。高環が多いこと、意図的に配置されたと考えられることなどにより、祭祀性が強いと判断される。同様な例として清水市長崎遺跡のS X17、S X119などがある。^②

次に述べなければいけないのは水上1区S X323である。これは井戸S E261の埋積土が陥没して形成された掘鉢状窪地内にみられた土器集中部である。壺31点と全体の39%を占め、高環15点、手捏土器14

点が続く。土器以外の遺物は認められていないが、小型壺の比率が高いこと、高環、手捏土器が多いことなどにより、祭祀性が強いと判断される。

その他には須恵器甕が注目されよう。宮川3区S D181では溝内にさらに1段掘りくぼめられた土壤状部分がありこの中より甕1点が単独で検出されている。また水上10区S R673は溝状低地で前述のS X624と接する位置にあるものであるが、須恵器甕が土師器とともに検出されている。甕が祭祀性をもつ土器であったかどうかの判断はむずかしいが、完形品が単独で出土すること、水辺であること、旧河道では大量の祭祀遺物に伴出して須恵器甕が相当量出土していることなどから、祭祀性をもったものと考えておきたい。

(3) 古墳時代後期

古墳時代後期の祭祀の遺物を出土した遺構として、まず取り上げられるのは宮川3区のS X477～S X483の一連の遺物集中部分である。縄文時代にさかのほる河道が粘土の静穏な堆積の中で埋没していくが、この低湿地縁辺部に投棄されたと考えられる遺物群である。

S X478は中心部に甕・瓶が集中し、周辺部に須恵器・土師器の环および碟が投棄され、動物形土製品1点と手捏土器1点が共伴している。動物形土製品はA類とされた鞍を持った比較的ていねいなつくりのものである。須恵器は第III期後葉に位置づけられるもので、実年代で6C末～7C初があたられ、本遺跡では最も古く位置づけられる資料である。

S X479は土師器環主体の投棄であるが完形が多く口径の異なるものが2～3点重ねられて投棄されている。動物形土製品8点、石製丸玉4点が共伴している。須恵器は第III期後葉～第IV期前葉に位置付けられる。

水上7区S X801は旧河道が新しい河道の砂礫の堆積によって埋められて形成された蛇行川上に立地する。1.6×1.1mほどの範囲から土師器環31点、甕1点、手捏土器1点のほか動物型土製品4点が検出された。出土土器の大部分は底部が正位で接地し、完形のまま検出されている。環の出土状況は円形に配置されたように見ることも可能である。須恵器はないが7世紀後半に位置づけて大きな誤りはあるまい。

また同じくS X802では1.1m×0.6mほどの範囲に人形土製品3点、動物形土製品5点が検出されている。

南北1km以上に及ぶ本遺跡にあって、旧河道部のいたるところから古墳時代後期の土器が検出されている。しかし古墳時代から現代までずっと続いた川でありその流路は入り乱れて、遺物の混入はさけられず、純粹に古墳時代の流路と確認できるものは非常に少ない。今までの検討の中では宮川4区S R56、宮川6区S R313の2ヶ所である。しかし長い流路の中での遺物であり、ある遺物に祭祀性を認めたとしても、それをもってすべてを一括することはできず、資料としては一ランク落として考えざるを得ないことはもちろんである。

宮川4区S R56は大谷川が蛇行の過程で河道が順次南側に移動したことを跡づける7本の旧河道の中の1本で、延長23mを確認している。土師器環を主体とする多量の土器のほかに動物形土製品7点、石製丸玉8点、耳環1点、紡錘車4点、人形木製品10点、馬形木製品6点、刀形木製品3点、斎串16点以

上、獸骨及齒48点、桃の種実2044点などが出土している。須恵器は第Ⅲ期前葉～第Ⅳ期前葉の幅をもつ。

宮川6区S R313は旧河道の擂鉢状の部分である。上層は古墳時代～奈良時代の河道により削られてい るのに対して、下層の遺存状態は良好であった。人形土製品1点、動物形土製品6点、手捏土器1点、 石製丸玉16点、土製丸玉1点、勾玉2点、紡錘車3点、耳環2点、錐1点、鐵鑄1点、砥石2点、石錘・ 土錘18点、獸骨等約20点、桃の種901点、乳文鏡1点が検出されている。しかしながらこの流路 の特徴は斎串・木製模造品の大量の出土である。人形木製品18点、馬形木製品2点、斎串60点、刀形木 製品14点などがある。しかし、流れ、流すことに意味を持つであろう木製品と上記遺物を一括と理解す ることに関しては大きな疑問が残る。時期の認定についても含め、疑問が提示されている。これについ ては後述したい。

以上が本遺跡における古墳時代後期の祭祀に關わる遺構及びそれに準ずるものであり、多量の祭祀関 係遺物に比してその数はすくない。

(4) 奈良時代

宮川5区溝状遺構S D219から手捏土器2点が検出されている。幅0.5m、深さ0.18mあまりの小さな 溝である。須恵器が伴出している。この溝は井戸S E217により壊されている。

宮川3区S E170は木組みの井戸である。検出面で深さ0.94mを測る。覆土中層より須恵器・土師器の 小片にまじって手捏の皿状土器が2点出土している。

水上11区S E554も木組みの井戸である。底面の小礫上には須恵器の肩部から口縁部にかけての破片が 口縁を下にする状況で検出され、底面より0.2～0.3m上の埋土中より須恵器1点と土師質小皿4点、手 捏土器1点がヒョウタン・モモ・スモモなどと共に検出されている。須恵器は古墳時代にさかのぼりう るが、土師器より井戸の廃棄は奈良時代と考えられる。

(5) 平安時代

水上1区S E192は確認面で径約2.6m、深さ1.8mを測る円形素掘りの井戸である。中層より墨書きされた灰釉陶器3点、綠釉陶器1点、曲物状木製品が出土している。「同一面からの出土」の表現には疑問が 呈されているがレベル差はあっても井戸埋没の過程の中で、これらの遺物を近接した時期と考えても大過はあるまい。この上層からは人頭大の躰96個が密集した状態で検出されている。井戸廃棄時の状況を 知る資料である。灰釉陶器は10世紀後半に位置づけられる。

(6) 中世

平安時代末から鎌倉時代以降については、宮川3区S R486が注目されよう。古墳時代後期から鎌倉時 代の流路であるが2層（平安時代～鎌倉時代）より木簡・墨書き土器・箸状木製品などが一括して出土し ている。木簡は5点検出されておりいずれも卒塔婆形で「南無大日」「仁王」などの文字が書かれている。 山茶碗にみられる墨書きは、内容より「大」「み」「背」「みやいめ」の4種に分けることができる。「大」 が8点と最も多い。箸状木製品は481点を数え、完形品は少なく大半が先端から3cmほどのところで折れ ている。

箸状木製品はこの他水上6区の溝状遺構S D228（43点）宮川3区溝状遺構S D145（3点）同じく井 戸状遺構S E424（6点）などからも出土している。①井戸ばかりでなく溝状遺構等からも出土し必ずし

も生活用具としての箸を考える必要はない。②先端部が折れているものが多く通常の箸の廃棄の状況とは考えられない。これらからなんらかの祭祀に用いられたものすなわち斎事的な用途を考えている。

西大谷4区の中世河道跡S R 2は古墳時代の河道と重なるが覆土が暗褐色粘土に変わり川幅を広げる。木簡2点のほか人形木製品・箸状木製品・小型板形塔婆・金剛草履・鐵鍔・短刀等が出土している。人形木製品はF類としたもので他のものとは明らかに異なる形態をとるものである。鐵鍔及び短刀の出土には注目しておきたい。

大谷1区のS X01は旧河道の中州部分にある集石遺構である。礫は6m四方に広がり、周辺に人頭大以上の礫が、中心部にこぶし大の円礫がおかれる。馬骨2点、92枚の宋銭が検出された。初鎌621~845年の「開元通寶」から初鎌1225年の「大宋元宝」まで24種類がある。明銭を含まないことなどより13世紀を下限とすることができよう。

3. 木製模造品の形態と編年

(1) 出土状態の検討—S R313の場合

さて、本遺跡の祭祀を語るとき、どうしてもさけて通れないのが多量の木製模造品である。これらがどの時期に比定できるかは、大きな問題である。当時の調査主任栗野克巳・調査担当矢田勝氏によれば、当遺跡の祭祀を特徴づけている多量の木製模造品は確実に古墳時代後期の土器に伴っているとの強い感触を持てたという。その例として宮川6区のS R313の小型壺に刀形木製品がささった状態で検出されたケースを挙げている。(『大谷川II』図版94参照)

我々はこの点を検証するため、現地調査の担当が指摘した遺構(厳密な意味で遺構とはいえないものもあるが)の遺物を一つ一つ検討していった。いずれも古墳時代後期の遺物を主体とするものの、それ以降に位置づけられる土器も含み、時代幅をもつものであることが明らかとなってきた。その作業の中で残ったのが宮川4区S R56と宮川6区S R313である。

S R313は宮川6区の南東部G102~103で検出された旧河道屈曲部である。幅4~5m長さ8mほどの範囲である。北東から屈曲しながら南へ流れ、流路の両側から多量の木製品が出土した。この木製品のうちには、簀串・人形・刀形の木製模造品が多く含まれていた。『大谷川III』においてこの流路の土器を①上層②下層③(河床面)とに分け、検討を加えた。結果は『大谷川III』P89~P102を参照されたいが、①上層出土須恵器はⅢ期中葉と考えられ②下層はⅢ期後葉に位置付けられるものである。また③下層(河床面)はⅡ期後葉~Ⅳ期前葉の幅をもつものである。いずれも古墳時代後期(6世紀~7世紀)に位置付けられるもので伴出する土師器も積極的に8世紀まで下げるものは見あたらない。さて、この出土状況から想定されるのは次の三つのケースである。①多量の土師器及び木製品は同一の祭りに使用され、同時に廃棄された。②多量の土師器を用いた祭りがおこなわれ、それが投棄された場所に、別の場所で投棄された木製模造品が流されてここに堆積した。③多量の土師器を用いた祭りがおこなわれ、河に投棄され埋積されていった。その後、強い流れにより再び洗われ顔を出したところに木製模造品が流されてきて堆積した。

ところで、土層の検討より推定されるS R313の状況は次の通りである。「S R313中央には2cmほどの

幅で弧状に拳大から人頭大の様が河床面に多量に検出された。この部分が本来の河道の範囲と考えられる。ここから出土した土器（③河床面出土）の上限から6世紀中葉にはこの河道は存在していたと考えられる。この流れにより、木製品は運ばれ、屈曲部の内側を中心堆積していった。そして河床面出土土器の下限（7世紀前半）以降に多量の砂礫の押し出しにより比較的短期間のうちに埋没したと思われる。』（『大谷川III』P.92参照）

この状況の中で明確になってくるのは、土器と木製品とが一括のものであると考えなくてよいということである。河道はかなりの速さで流れていたと考えられることは、同一時期に土器と木製品が投げ込まれたとすれば逆に、浮き・流すことに意味を持ったと考えられる木製模造品はその場にとどまるケースのほうが考えにくいということがいえよう。すなわち①のケースよりも②又は③のケースの可能性が高くすくなくとも木製模造品と大量の土器とが、同一の祭祀に用いられたと考える必要はないということは指摘できよう。

さて当遺跡において木製模造品の時期を限定できる可能性を持ったままとすることは、これ以外にS R 56があり、その状況は S R 313と同様である。他の同様な遺構の検討では今まで紹介してきたように古墳時代～平安時代あるいはそれ以降までの年代幅を持つてしまうものばかりであった。否定し無視することはやさしいが、検討の中でこのような事実関係があることは確認しておかなければならない。

（2）人形木製品の形態と編年

さきに、本遺跡の人形木製品を8類に大別した。そして本遺跡の人形木製品の特徴として、次の6点を挙げた。

- ①板状の正面全身人形である。
- ②いわゆる圭頭状をなすものが多い。冠帽あるいは髪形を表現したと考えられるものはない。
- ③顔等を墨で表現するものは認められない。
- ④肩部は撫で肩が多い。
- ⑤切り込みをいれる様な表現での手の表現はほとんど無い。
- ⑥脚部は脚間に折取りあるいは三角形に切り取ったものがほとんどである。

特に②の圭頭状であること・③の墨描のないことは当遺跡の大きな特徴であることを指摘した。

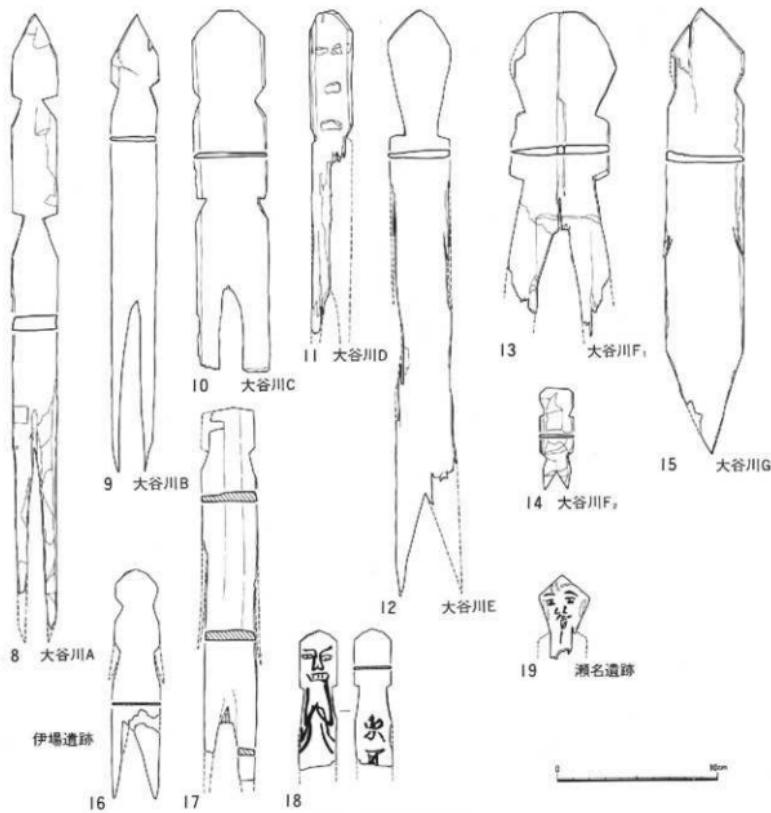
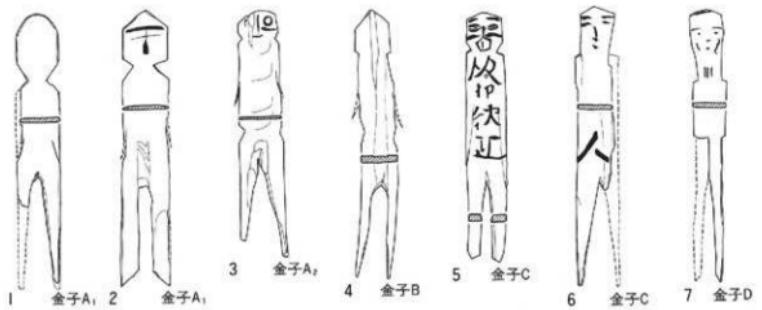
さて人形木製品の形態分類と編年については、金子裕之氏の大きな業績がある。⁽⁴⁾まずこれとの比較検討から始めたい。

金子氏は人形をA～Dの類に大別した。そしてA類、B類をA₁・A₂・B₁・B₂と細分し、6類としている。

人形A・・・・・短冊状の薄板の一端を削って顔とし、側面を切り欠いて顔と肩を作る。この場合側の上下から同角度で切り欠き、いわゆる撫で肩となる。手は側面下方から浅く切り込む。さらに腰の部分の左右を切り欠くものをA2類とする。

人形B・・・・・A類とほぼ同じであるが肩部の切り欠きの形が異なる。顎の部位は水平に切り込み、肩の下方から大きく切り欠く。腰部の切り欠きのあるものをB₂類とする。

人形C・・・・・製作方法はA・Bとほぼ同じであるが肩部の形状が異なる。顎の上方から大きく切



第87図 人形木製品分類図

り欠き肩の線を水平にし、いわゆる怒り肩になる。顔は倒卵形に近くなりより写実的となる。腰部以下を切り欠く例はない。墨書きによって顔を表す場合は多くが額顎を加える。

人形D・・・・手の切り込みを胸に近い部分で切り欠き、後世の立雄に近い形につくる。顔は墨書きで写実的に描くものがある。

そして、人形木製品は7世紀の後半天武・持統朝に出現するとし、A₁—C—Dの変化を考える。A₁は8世紀の平城宮・京跡に類例が多く、人形Cへの変化は8世紀末、人形Dは9世紀に出現すると編年している。

本遺跡の人形をこれにあてはめようとしてみると、金子分類にそのままあてはまるものはわずかである。A₁に宮川6区S R313出土の1394・1354・1395の3点、Cに西大谷2区の5020の1点があてはまるのみである。編年が組めるまでの多量の資料に対して、類似が4例だけというのではありませんにも奇異である。

さて本遺跡周辺での人形木製品の出土例としては、静岡市瀬名遺跡がある。1区20層調査中に人形2点、斎串23点がまとまって出土している。斎串の中には先端部を土中に突き刺したままと思われるものが8点認められる。土器より9世紀頃と推定されるものである。⁽⁵⁾

頭部のみの破片で圭頭状に作り出し側頭部から肩にかけて斜めに切り落としている。肩部は欠損しており、撫で肩になるか怒り肩になるか不明である。墨書きで眼、鼻、鬚などが写実的に表現されている。肩部の形態は不明ながらも金子分類の人形Cに近いものである。年代観も大きな齟齬はない。金子氏が指摘しているように8世紀にあった地域差も9世紀になると解消していったという状況を証明するものであろう。

静岡県内での人形木製品の出土例は5遺跡30例にすぎない。

伊場遺跡では多量の人形木製品が出土している。第87図3は金子氏がA₂類としたもので腰の部分に切り欠きを持つ物であるが、この類例も当遺跡では見あたらない。⁽⁶⁾8世紀代とされるものでA₁とA₂との違いは地域差であろうと金子氏は推定している。⁽⁷⁾腰部の切り欠きを持つことが伊場遺跡の特徴であるとすれば、それは本遺跡のA類に共通するものである。

もう少し範囲を広げて比較してみるとどうだろうか。祭祀形態が復元できたとして知られる山形県俵田遺跡の場合は、典型的な人形はC類で12点あり倒卵形の頭部を持ち、いわゆる怒り肩で、手の部分は下方からの切り込みにより表現され股部は台形に切り込んだ後に折取られている。すべて墨書きにより顔の表現がなされている。9世紀中葉ごろの所産と考えられる。本遺跡の人形に類似するものはない。⁽⁸⁾

兵庫県日高町川岸遺跡は但馬国府関連の遺跡であるが、溝内より、人形45点、馬形6点、斎串約80点が検出されている。『木器集成図録』分類によるA II bがほとんどであるという。すなわち怒り肩を呈し手を下方から切り込み腰の表現はなく、股部は平行に切れ目を入れ折取るものである。この溝は8世紀第4四半期から9世紀第2四半期に位置付かれている。

その他の類例を探しても本遺跡の人形木製品の類例は見あたらない。律令体制の浸透とともに地域差は解消したと理解されるとすれば、8世紀末から9世紀の人形は全国的に類型化されたと考えられ、事

実、但馬と山形の例にも共通項を見出すことができる。逆に共通項のない本遺跡の人形木製品は9世紀の所産と考えることにはむりがあるといわざるを得ない。9世紀以前の地域差の中で考えられなければならないであろう。

(3) 刀形木製品の形態と編年

刀形木製品については22点を確認し5類に分類した。いずれも短冊状の板の側面に加工を加えたもので「柄頭が作り出され、柄が弧状に反り鶴の表現がなく平造りの直刀」である。

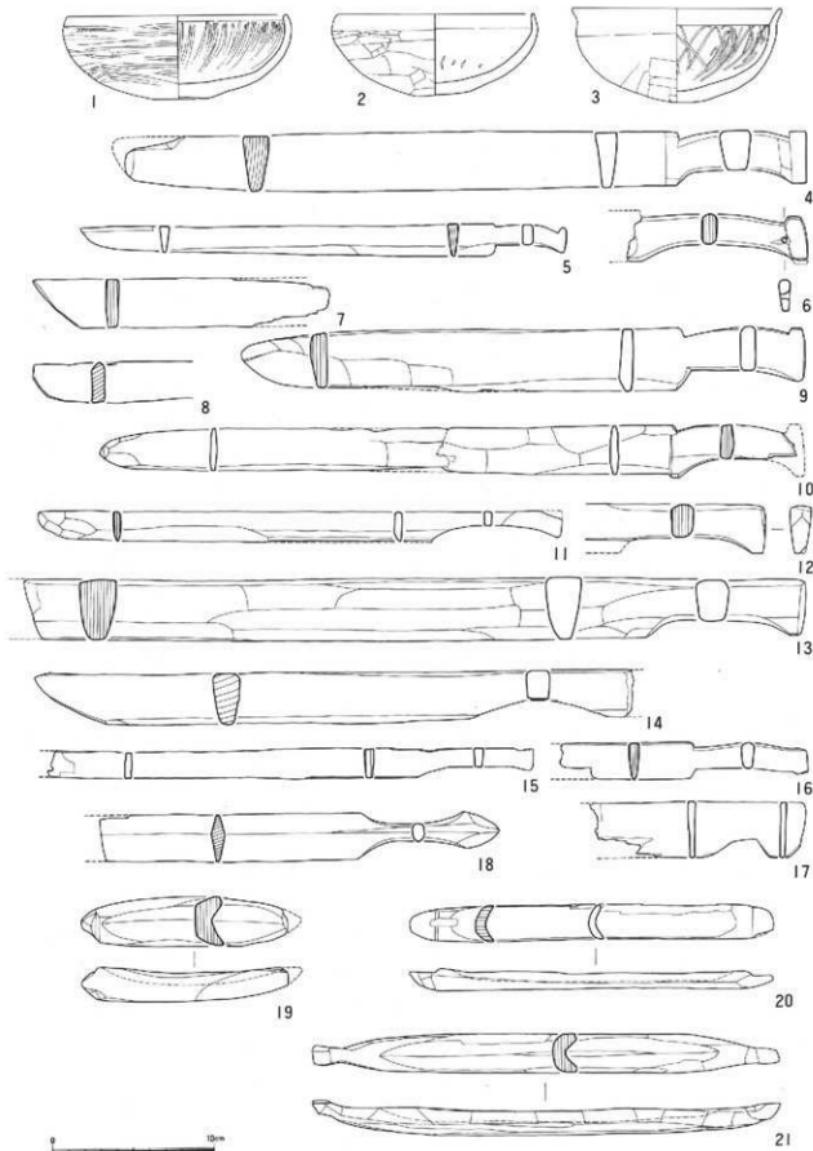
刀形木製品の時期を考える資料として、静岡市川合遺跡のS R1101の一括がある。川合遺跡のS R1101は長尾川の支流の1本と考えられる旧流路で、埋土は下部の砂礫層と上部の粘土・砂層の2層に大別できる。河道は深さ2m以上において、下部砂礫層の厚い堆積はかってかなりの流速をもっていたことを示している。上部は流速が衰えた段階で堆積したもので、上層下半の有機物および有機質に富む暗褐色土中からは土器類はじめ木製品・骨角製品・自然遺物など多量の遺物が出土している。土師器は宮之腰II式に比定されるもので環が圧倒的に多い。須恵器は环・高环・甕・甌がありTK208、ON46に比定される。木製品には鍔・鍔・鎌柄・堅杵・横槌・編錘・削物・有頭棒・刀形・舟形・陽物などがあり多種多様である。特に刀形は破片も含めると50点あまりに達する。刀形は柄頭をていねいにつくりだしたもので、形態的にはA類の先行形態と考えられる。人形・馬形を伴っていないことには注目しておきたい。この流路は上部を古墳時代中期後半の水田で覆われており、6世紀代であることは確実といえる。^註

しかし詳細に観察し川合遺跡S R1101の刀形木製品と神明原・元宮川遺跡の刀形木製品を比較すると、明らかに川合遺跡のもののほうが、ていねいなつくりである。柄頭が作り出され、断面も刃を意識した三角形を呈するものが多く、切先も単純に切り落とすではなく写実的である。本遺跡例では最もていねいなつくりのA類でも板状のままで刃を意識したつくりとはなっていない。形態的には一段階あるいは二段階後出の要素を持っているといえる。^註

板状のため破片で出土した場合、簫串等他の遺物にまぎれてしまう可能性もなきにしもあらずであるが、本遺跡の刀形木製品に類似する例は非常にすくない。類例としてあげられるものに滋賀県穴太遺跡出土のものがある。柄頭部を圭頭状とした本遺跡のB類に近いものである。調査継続中であり詳細は後日を持ちたいが、6世紀末から7世紀初頭に位置づけられるという。^註

刀形木製品についての、いまひとつの問題点はその量である。宮川6区S R313では14点検出されており、川合遺跡S R1101では50点以上を数える。律令的祭祀のそれぞれの時期の典型例として金子裕之氏があげている藤原宮跡下層S D1901A、平城宮跡東大溝S D2700、平城京跡東三坊大路側溝S D650の三例の場合刀形木製品の数は数点ずつと比較的すくなく、この傾向は地方における律令的祭祀の典型例どされる兵庫県川岸遺跡、山形県俵田遺跡においても同様である。短絡的に用法の違いに結びつけられはしないが、検討を加えなければならない点のひとつといえよう。

結論的には、神明原・元宮川遺跡の刀形木製品は形態的には後出の要素を持っているものの古墳時代の大刀を模したと考えられ、他遺跡の類例からして古墳時代の刀形の伝統を強く受けていると考えられ、古墳時代後期あるいは、それに近い時期の可能性が高い。またその量も比較的多くその用法も典型的な律令的祭祀とは異なる可能性もある。



第88図 川合遺跡SR1101出土遺物実測図

4. 祭祀形態の多面性

神明原・元宮川遺跡の祭祀については現地調査中より、“水辺のまつり”としてひとり歩きしてきた。しかし旧大谷川の河川内及び低湿地より出土したことをもって水辺のまつりとするほど単純ではない。様々な祭の要素が入りまじり、一見複雑な様相をていいしているのである。以下時代を追ながら概観し諸要素の細分と変化を考えてまとめてかえたい。

古墳時代前期

舟形木製品は静岡市川合遺跡、清水市長崎遺跡などに弥生時代～古墳時代の類例があり、流路だけでなく水田中あるいは畦畔中などに例が多く稻作に伴う儀礼に用いられたのではという推定がなされている。本遺跡の場合、土壇出土ということで纏向遺跡例とともにその用法については検討を用するところであろう。この時期以降に舟形は認められず、悪神の乗り物あるいは他界への乗り物としてツミやケガレの戯いに用いられた舟形の系譜とは異なるものであろう。

古墳時代前期の祭祀形態を知る手がかりは、西大谷7区の8・9層の低地及びその周辺の斜面にある。管玉・ガラス小玉を中心とし、高环・器台・小型丸底土器などが供獻されている。龜井正道氏のいう第1期碧玉製品を主体とする時期にあたるものであり、大谷川の“まつり”的祖型といつてよいものであろう。

古墳時代中期

古墳時代中期は2つの類型に整理できよう。①は高环などの土師器主体のもの、②は土師器に滑石製模造品が共伴するものである。①の土器の集積は焼津市宮之腰遺跡など各所で見られ、环・高环・手捏土器などが多く壺などの日常生活の必需品が少ないとことなどにより祭祀と理解されている。中でも浜松市伊場遺跡の祭祀跡K11では柱穴列で方形に区画された中に47個体の土器が集積されていた。この東西5.6～6m、南北5.2mの柱穴列は祭祀の場の外側を画する構列と考えられている。②もまたいわゆる祭祀遺跡のみならず、河津町姫宮遺跡、南伊豆町日詰遺跡など県内の集落遺跡内の祭祀遺構においても認められ、鏡(有孔円板)、玉(勾玉形・白玉)は古墳の副葬品と共に通する要素である。共伴する土器は高环・壺・壺・壺などがあり、特に高环の比率が高い。例えば水上10区S X624では全土器の半数近くを占める。いずれも集落内祭祀と共に通するもので特に水辺であるという限定された要素は認められない。

古墳時代後期

6世紀代になると土師器及び須恵器の环を一括投棄する遺構が出現する。宮川3区S X482が6世紀前半に位置づけられ、以後7世紀後半まで続く。环を主体にしながらも壺が加わる例(水上7区S X803、S X804)や壺・横糞なども加わる例(宮川3区S X478・S X481)がある。

7世紀になると土器を中心に投棄する祭祀が行われる一方で大きな変化が表れる。すなわち人形土製品・動物形土製品・刀形木製品・馬形木製品等の祭祀具が大量に出土してくるようになる。

古墳時代後期の祭祀は①土器を中心とした祭祀、②土製模造品を中心とした祭祀、③木製模造品を中心とした祭祀、の3類型に整理することができる。

後期における土器を中心とした祭祀の初期の例としては5世紀中葉～6世紀前葉に位置づけられる宮川3区S X483がある。高环を主体とし壺・壺が伴うもので、古墳時代中期にみられた高环を中心におく

祭祀の伝統を受け継いでいる。7世紀に入るとその主体は壺となっていく。圧倒的な量の土師器の壺に若干の甕及び須恵器が伴う。若干動物形土製品や手捏土器を伴う例があるが、基本的には土器を投棄することに意味があったと考えられる。流路の中で膨大な量の土器が一括して出土するなかで原初の位置を比較的よく保っていると考えられるのが水上7区S X801・宮川5区S X336で土師器の壺を径65~70cmの円形に配置している。(7世紀後半)

土製模造品はそれら単独で検出されている例が多い。特に土器と共に伴う例はあるが木製模造品と確実に組み合わされる例はない。水上7区S X802は人形土製品4点馬形土製品5点が一括で検出されている。周囲の状況からして土製品のみの単独の投棄である。

さて、古墳時代後期の祭祀の実態にせまろうとするとき常に引合いに出されるのが『日本書紀』皇極天皇三年(644年)の常世の神の記事である。この記事と当遺跡との関係についてはすでに成島仁氏が『大谷川II』のまとめにおいて述べている。宮川4区S R56の遺物の分析を通して「①財宝・珍財が農具・紡織具・耳環・玉類・横櫛などにあたり②路側にならべた六箇が動物遺存体となる。さらに③河道内にみられた大・小551の礫群は割り崩していることから清座として利用した仮設祭壇の石材であった可能性もある。」と推論している。非常に魅力的なものであるがしかしその後の整理ではその当否を結論づける資料はない。ひとつの仮説として考えておかざるをえない。

ところで、この記事の中でもう一つ注目すべきことは秦河勝をして大生部多を打たせたという点である。すなわち中央政権がこれをよしとせず弾圧を加えたとの解釈がよく行われる。皇極天皇三年が正しいとすれば7世紀中葉に祭の形態に大きな断絶を考えなければなるまい。しかし土器の投棄は7世紀を通じて行われむしろ途絶えていくのは7世紀末葉から8世紀初頭である。この矛盾に対する解決策として、我々は古墳の喪送儀礼すなわち殯（もがり）とそれに伴う食物供献・共食儀礼ではないかとの仮説を提示した。（詳細は本書第V章第2節を参照されたい。）しかしながらこれも一つの仮説である。

人形木製品・馬形木製品を中心とする木製模造品は律令的祭祀の祭料と考えられているが、先に検討したように、本遺跡においては、律令的祭祀が体系づけられる以前に行われていた可能性がある。

井上光貞氏は沖の島の祭祀を分析し、沖の島祭祀の第二期と第三期の様相のちがいに注目し、「延喜式にみられるような『律令的祭祀』ないしその『先駆的形態』が第二期と第三期の間のインターパルすなわち6世紀中葉から7世紀中葉までの間に出現していくことを物語っているのであろう」と6世紀中葉から7世紀中葉に大きな画期を考えている。いいかえれば「律令的祭祀形態は7世紀末・8世紀初めに形成・完成した大宝律令の実施によってはじめて確立したのではなく、それ以前に律令的祭祀の『先駆的形態』なるものが存在し、それは6・7世紀の交すなわち推古朝の前後にはすでにおこなわれはじめていたのであり、神祇令とそれに伴う式はこの先駆的形態としての律令的祭祀を中国的、法律的に整備し成文化したものであった」というのである。沖の島という特異な祭祀形態の分析であり、この成果を直ちに駿河の一地方にあてはめる訳にはいかないが顧慮すべき考え方である。

この断絶がなによりておこるのかその原因の解明はひとつの大きな課題となろう。

奈良時代

奈良時代の祭祀遺構は後半期に集中しており7世紀末から8世紀前半代が希薄である。

古墳時代後期に始まる土製模造品や木製模造品が継続して用いられることに加えて墨書き土器・手捏の小皿などが新しい要素として加わる。宮川6区S R312では蓋に「神」と墨書きされた8世紀中葉の須恵器壺のセットが出土している。多量の木製模造品・土製模造品を前代のものと仮定したとき、律令的祭祀の色あいは薄いといわざるを得ない。

平安時代

平安時代は河道内への墨書き土器の投棄が増えるとともに書かれる文字も変化する。水上1区S E192の状況は埋井の祭祀の実態を明らかにした。特に埋井の祭祀については水上1区S E261(古墳時代前期)宮川3区S E103(奈良時代)、水上11区S E554(奈良時代)などがあり、その系譜を考えることができる。手捏の小皿、ひょうたんなどが構成要素となろう。

馬骨の検出例の多くなるのはこの時期以降であろう。殺馬祭祀として明確に跡づける証拠には乏しいが、まとまった形での多量の馬骨の検出は、特殊な用途を想定せざるを得ない。

中世

平安時代末期から鎌倉時代になると仏教的色彩を持つものがあらわれてくる。宮川3区S R486などがその例で、塔婆形の木簡に「大日」「仁王」の文字が墨書きされたものが出土している。墨書き土器も「大」「み」など花押風の文字の書かれた物が多くみられる。またこの時期より出現するものに箸状の木製品がある。S R486では481点が出土しその大半が、先端から2~3cmほどの位置で折れている。これは地面などに立てて用いた際に折れたと考えられ、斎串としての用途を考えたい。銭貨の投棄は初見は不明であるが皇朝十二銭にはじまり、鎌倉期になると宋銭が一括投棄される。

以上概観したように祭祀の形態を大きく変えながらこの大谷川の川辺でとり行われてきたことを知ることができる。しかし、どのような人々が何の目的のためにそれらの祭を行ったのか、またその祭祀形態の変化がどんな条件により起きたのか、その理由は、などもっとも基本的で、かつ最も重要な問題については明確にすることはできなかった。これは本遺跡の祭祀を考えるうえでの最も大きな課題であろう。今後これらのこの問題の解明に努めていきたい。

(寺田甲子郎・佐藤達雄)

- [1] 優原考古学研究所『趣向』
- [2] 『長崎遺跡 静清バイパス(長崎地区)埋蔵文化財発掘調査概報』静岡県埋蔵文化財調査研究所 1988
- [3] このことについて『大谷川III』において森下氏が述べている。
- [4] 金子裕之『古代の木製模造品』『研究論集IV』奈良国立文化財研究所 1980
- [5] 静岡県埋蔵文化財調査研究所で調査中 畠野克己・佐野五十三氏の教示による。
- [6] 浜松市教育委員会『伊場遺跡遺物編1』1978
- [7] [4]に同じ
- [8] 佐藤庄一、安部実『猿田遺跡第2次発掘調査報告書』山形県教育委員会 1984
- [9] 日高町教育委員会『川岸遺跡発掘調査概報』1985
- [10] 以下の推論は、律令的祭祀が完成された段階ではほぼ全国的に統一された体系と祭料を用いるという前提にたっている。いまでこし全国の例を挙めなければならないのがこの前提が大きく崩れることはないであろう。秋田県秋田城跡では、外郭東門外の沼沢跡S G463の西側部分より、人形・馬形・人面墨書き土器・壺串が大量に検出されている。この人形木製品は頭部を斜めに切り落としたもので、瀬名道跡のものに非常に類似する。
- [11] 静岡県埋蔵文化財調査研究所で調査中。山田成洋氏の教示による。
- 平野哲郎・山田成洋『川合遺跡I・昭和60・61年度静清バイパス(川合地区)埋蔵文化財発掘調査概報』1987
- [12] 以上の検討より、川合遺跡の資料により本遺跡の刀形木製品の年代を決めるることは早計であるが、逆に年代の上限を考える資料にはなりうるであろう。
- [13] 滋賀県埋蔵文化財センターにて調査中。同センターの教示による。
- [14] 川合遺跡の刀形木製品の類別は比較的多く、滋賀県入江内湖遺跡・服部遺跡などがあり、6C代の年代観が与えられている。三重県草山流田遺跡出土の刀形木製品は川合遺跡(第88図11~13)に類似するもので全長約45cmである。5C末に位置づけられ下っても6C初頭とのことであり、川合遺跡の年代観と同様である。松坂市教育委員会 榎本義謙氏の教示による。
- [15] [9]に同じ
- [16] [9]に同じ
- [17] [8]に同じ 2点ありそれぞれ形態が異なる。Iは刃にあたる部分をていねいに削り出している。
- [18] [10]に同じ
- [19] 静岡県埋蔵文化財調査研究所で調査中。足立順司氏の教示による。
- [20] 亀井正道『建絆山』1966
- [21] 増井義己ほか『宮之腰遺跡』焼津市教育委員会 1960
- [22] 浜松市教育委員会『伊場遺跡遺構編』1977
- [23] 宮本達希『昭宮遺跡発掘調査概報V』河津町教育委員会 1986ほか
- [24] 鈴木敏弘ほか『南伊豆下賀茂日陰遺跡』南伊豆町教育委員会 1978ほか
- [25] 『日本書紀』皇極天皇三年七月条
- [26] 成島 仁『まとめ』『大谷川II(遺構編)』静岡県埋蔵文化財調査研究所 1987
- [27] 葛巣には律令祭祀が体系づけられ地方に波及する以前、すなわち8世紀末から9世紀初より前のこととなる。当遺跡の出土状況から初見の可能性のある時期としてここに入れたが、8世紀代であるかもしない。
- [28] 井上光貞『日本古代の王権と祭祀』東京大会出版社 1984
- [29] さりに井上氏は「中央ではすでにこれ以前に律令的祭祀が形成されていてそれが例の国家的祭祀のルートを通じて沖の島に達したためであるとみなくてはならない」(同書P.239)としているがこれはいささか飛躍にすぎよう。金子裕之氏のいうように藤原京・平城京およびその周辺の調査の膨大な資料から、木製模造品の初現は天武・持統朝とされており、大きくくつがえることはないであろう。むしろ、各地域で行われていた地域的な・土俗的な「まつり」の再編成と考えたほうが妥当性が高いといえよう。
- [30] この時期の駿河国に間連する出来事として注目しておかねばならないものとして「白村江の戦」がある。唐・新羅連合軍と戦った将軍の中に藤原を本貫とする藤原君がいる。おそらく彼に従い、駿河湾沿岸の海人も「伊豆丸」に乗り渡海したと思われる半島の文物にも接したであろう。

第2節 古墳時代後期の大谷川祭祀と喪葬儀礼

1. はじめに
2. 古墳時代後期の出土土器の実態
3. 古墳時代後期の土器と共に伴う遺物
4. 有度山西麓古墳群と大谷川祭祀
5. 古墳から離れた所で行われた喪葬儀礼
6. まとめ

1. はじめに

古墳時代前期から13~14世紀まで継続する大谷川の水辺の祭祀の変遷についてはすでに『大谷川II』の第IV章でまとめられている。この内、遺物の出土量が最も多い古墳時代後期の祭祀については、①⁽¹⁾ 土器を中心とした祭祀、②土製模造品を中心とした祭祀、③木製模造品を中心とした祭祀、④「常世の神」信仰との関連付けが可能な祭祀の4つにまとめられている。水辺の祭場において目的、形態の異なった複数の祭祀が取りおこなわれたことは想像に難くなく、例えば、木製模造品からは「祓え」を目的とする祭祀、土製模造品からは祈雨祭祀や荒神鎮めのための祭祀などが想定可能である。しかしながら、従来「...コンテナ約2,500箱にも及ぶ出土品のうち9割以上は旧大谷川から出土し、さらにその半数以上は古墳時代の土器類、しかも夥しい量の完形品。古墳を中心とした送葬祭式に使われた量をはるかにうわまわる量の供獻土器は何を意味するのか。...」⁽²⁾ 「...この場合土器は祭料そのものであるか、または祭料をのせる補助的用具であるかが問題となるが、...」⁽³⁾ いざれにしても土器は奉獻する祭料の中心をなすものであり、もっとも普遍的な構成要素でもある。...」⁽⁴⁾ と注目されている土器を中心とする祭祀については積極的な意味付けがなされていない。

この古墳時代の土器を中心とする祭祀については、小出義治氏が「祭祀と土器」で、喪葬祭祀と神祇祭祀に分けて論じられており、その前文で「...祭祀儀礼の多くは、当然弥生時代の継承的発展の様相としてとらえることができ、とくに喪葬に関する儀礼のなかには供獻具としての土器が弥生時代よりも伴っていることが知られている。」と指摘している。また大場磐雄氏は『祭祀遺跡の考察』の中で、小形丸底壺と小形手捏粗造土器を除く土師器について、「祭祀遺跡からもしばしば発見されているが、...」⁽⁵⁾ 次の祭祀用品と比較して、はるかに量が少なく、特記するほどの事例に接しない。」と述べ、また須恵器について「...古墳の副葬品や、住居址からは多量に発見されている。しかし、祭祀遺跡からはすこぶる少量で、土師器よりも少ない。」と述べられている。また、いわゆる祭祀分化については小出義治氏、⁽⁶⁾ 桜山林雄氏、井上光貞氏、岩崎卓也氏、白石太一郎氏などにより多くの論稿が発表され、古墳時代のある時期までは祭祀が分化しておらず、出土遺物も互いに類似していることが指摘されている。

本論は以上の指摘も踏まえて、古墳時代後期の大谷川祭祀、特に大量に投棄された土器の持つ意味に神祇祭祀からではなく喪葬祭祀からのアプローチを試みようとするものである。無論、祭祀の性格を出土遺物や出土状態から明確に且つ実証的に規定することは、特に長期間にわたる多様な祭祀遺物が旧河道内に混在する本遺跡の場合非常に困難であると思われる。その上、私自身の全くの力量不足もあり、

推論に推論を重ね1つの可能性を指摘しただけの、「考察」にはふさわしくない非常につたないものであることを最初にお断りしておかなくてはならない。

2. 古墳時代後期の出土土器の実態

現在までに4,557点が実測されているが、旧河道内出土の膨大な数の土器については全て実測し終えたという状態には残念ながら至っていない。従って、これから上げる数字には多少の歪みが生じている可能性は否定できないが、大概の傾向をつかむデータとしては信頼に足るものと考えられる。なお、以下の表に掲載する数は、総数の大半を占める低温地帯の岸部・河川の岸部・河道内出土のものであり、微高地部の土坑・溝・井戸出土のものは除いてある（かっこ内の数字は出土量も多く、実測可能なものはほぼ取り上げ終ったと考えられる西大谷1・2区のものであるので参考にされたい）。

まず、表26は須恵器の器種構成を示したものである。环が450点（79.2%）と圧倒的に多いのと、壺35点（6.2%）出土し、壺類と同数であり注目される。また「・こうした長頸壺の類の中で、いわゆるフ拉斯コ形や横瓶の類は、末期の古墳ないし横穴に多くの出土が知られているにもかかわらず集落からの発見例は寡聞して確証を知らない。」と指摘される横瓶が2点、フ拉斯コ形長頸壺（壺に含まれる。）が2点出土しているのも注目される。

表27は土師器の器種構成を示したものである。やはり环が2150点（81.9%）と断然多く、須恵器の环の構成比とほぼ等しく約8割を占める。次に、壺、甕、高环と続く。住居址出土のものと一概に比較できないが、三島市中島下舞台遺跡の古墳時代後期の住居址においては、环55点（49%）、甕39点、壺11点、高环5点、鉢1点、塊1点である。函南町伊豆遙信病院敷地内遺跡の古墳時代後期の住居址では、环49点（56%）、甕19点、塊14点、高环2点、鉢2点、鍋1点、壺1点が出土している。比較すると、环の構成比の高さが指摘できるようである。

表28は环類の完形数を示している。古墳時代後期の土師器375点、須恵器72点が完形品である。更に、口縁部一部欠損などの完形品に近いものはそれぞれに倍する数が存在するものと思われる。河道内という条件も考えると、破損品を投棄した状況とは言えないようである。さらに、奈良期以降のものと比較すると完形率が高く、使う目的に相違があった可能性が考えられる（なお、灰釉陶器・山茶碗の時期の土器については本報告書の「考察」の足立氏の論稿で、一般集落出土土器と比較して貯蔵形態、煮沸形態の土器のきわめて少ないと、供膳形態のうち土師器の占める割合がきわめて少ないと、祭祀遺物が出土することから供献土器の可能性の高いことが指摘されている。）。

以上、表26～28をもって土器の特殊性、祭祀性、を述べようとしたのであるが、本遺跡と同じく奈良期以降において官衙的要素を指摘されている。袋井市の坂尻遺跡において、古墳時代後期を中心とする数本の溝から祭祀性を持つ土器が集中出土しているので参考になると思われる。担当者の分析によると、环類を主体とするものと高环類を主体とするものがあり、前者の場合には他の器種と供に廃棄されているということ、さらに同じ古墳時代後期の他の溝からの一般的な廃棄と考えられる出土土器は残存率が低く、小片化した土器が大半を占め、甕の占める割合がかなり多いことが明らかになっている。

表29は、須恵器の环を奈良期のものも含めて、『大谷川III』に示された須恵器編年の時期区分にそって

分けたものである。これを数字のままに理解すれば、Ⅲ期後葉～Ⅳ期前葉にかけて河道内及び河岸に須恵器を投棄または置く行為が最も盛んに行われたということになる。河道においては最も純粹な古墳時代後期の遺構と考えられる宮川4区のS R56においても25点の内20点が同時期に属しており、古墳時代後期の大谷川祭祀のピークと考えられるのである。しかしながら、これが消費地における須恵器の供給量の変化を示しているという考え方方が当然出来る。従来からの指摘されている通り、群集墳の築造と共に須恵器の需要が飛躍的に拡大し、地方にも多くの生産地が成立し、築造の集結と共に生産を停止する窯も少なくないという状況を良く示しているとも言える。乳頭状つまみの出現以降のⅣ期中葉及びⅣ期後葉（速考研編年Ⅳ期後葉）においては、宮廷や官庁の要求する供膳用の器形に対する需要は当地方では大変少なかったようであり、掛川市原川遺跡のように全く欠如したり、また少なかったりすることは他の遺跡でもしばしば見られる現象のようである。そして、「第V期には地方的要望と相まって、中央律令官司制のもとに生産され」⁶⁰供給量が増したという状況を示していると理解されるのである。このように考えると表29の数字は、単に祭祀に使われた土器の中に含まれる須恵器の数を表しているに過ぎなくなり、土器を用いる祭祀のピークや終息を表しているとは言いたいことになる。ピークや終息の時期を言うには土師器を含めた土器の総体量を検討してみなければならないのである。

表30は土師器の大まかな変遷を捉えるために环を分類したものである。宮川3区のS X477～S X484出土土器を基に作成された『大谷川Ⅲ』の土師器編年に従ったもので、A類は伝統环で底径が小さく、あげ底風の平底のもの、B類はA類以外の伝統环である。C類は口縁部を屈曲させたいわゆる“鬼高峰期並行”の环である。B類については、丸底から平底へという傾向が指摘されているので分類の基準とした。C類については13～14cmから11～12cmと口径の小型化が指摘されているので、12.5cm及び14.5cmを境に分類をしてみた。まずⅢ期中葉で消えるとされているA類（大塚淑夫氏の試案ではV段階のa類に該当すると思われ、V段階に盛行し次のVI段階=6世紀前葉、中葉のはじめのころ一部で残るとされている）は14点と非常に少ない。次にⅢ期前葉から出現するとと思われる模倣环（大塚氏はVI段階を通じて盛行する特徴的タイプであると述べている）も18点と非常にすくない。そして、Ⅲ期後葉に丸底から平底へと変化しⅣ期前葉には非常に少なくなるとされるB類は総数580点とA類、模倣环と比べ非常に多く、丸底タイプより平底タイプのほうが多い。B類より後出のタイプであるC類（大塚氏の編年試案ではVII段階=6世紀後葉から7世紀前葉に出現するc類に該当すると思われる）は、他のタイプと比べると圧倒的にその数が多く、しかも其中でも小型のもの（Ⅲ期後葉に小型化する傾向があり、Ⅳ期前葉には小型化するとされる）の数が非常に多いことを指摘できる。

当地方における土師器編年が確立されていない状況下にあって、断定的なことは言えないものであるが、以上をまとめると、土師器の出土量のピークは須恵器のピークと同じくⅢ期後葉からⅣ期前葉頃にあったことは指摘してよいと思われる。だとすれば須恵器の量的変化は供給量の変化を示しているだけだとは言いたいのではなかろうか。やはり須恵器もふくめた土器を投棄する祭祀はⅢ期後葉～Ⅳ期前葉に最も盛んになり、その後急速に衰えていくと捉えられるのではないかと思われる。

ところで、表30でもう一つ注目されるのは、奈良・平安期の土師器が30点と古墳時代後期と比較し著しく少ない点である。表28に示したように奈良・平安期の須恵器や灰釉陶器はかなりの点数が出土して

第26表 古墳時代後期須恵器器種構成

() 内は西大谷1、2区

器種	环	甕	壺	高环	壺	鉢	平瓶	提瓶	塊	横糸	合計
总数	450 (100)	35 (12)	35 (11)	20 (5)	7 (3)	6 (2)	6 (1)	4 (1)	3 (0)	2 (10)	568 (135)
比率%	79.2 (74.1)	6.2 (8.9)	6.2 (8.1)	3.5 (3.7)	1.2 (2.2)	1.1 (1.4)	1.1 (0.7)	0.7 (0.7)	0.5 (0)	0.4 (0)	100 100

第27表 古墳時代後期土師器器種構成

() 内は西大谷1、2区

器種	环	甕	壺	高环	壺	鉢	瓶	合計
总数	2150 (424)	158 (51)	128 (22)	77 (20)	70 (29)	25 (8)	17 (5)	2625 (559)
比率%	81.9 (75.8)	6.0 (9.1)	4.9 (3.9)	2.9 (3.6)	2.7 (5.1)	1.0 (1.4)	0.6 (0.9)	100 100

第28表 坯類完形数

() 内は西大谷1、2区

	古墳後期土師器	古墳後期須恵器	奈良須恵器	平安須恵器	灰釉陶器	山茶碗
总数	2150(424)	450(100)	85(33)	34(3)	51(12)	169(9)
完形	375(104)	72(8)	4(0)	3(0)	1(0)	13(1)
完形率%	17.5(24.5)	16(8)	5(0)	9(0)	3(0)	8(11)

第29表 須恵器環個体数

() 内は西大谷1、2区

	II期 後葉	III期 前葉	III期 中葉	III期 後葉	IV期 前葉	IV期 中葉	IV期 後葉	V期 前葉	V期 中葉	V期 後葉	統計
环身	4 (0)	14 (2)	41 (7)	125 (38)	100 (19)	0 (0)	0 (0)	13 (5)	15 (6)	33 (12)	345 (89)
环蓋	0 (0)	7 (1)	5 (3)	68 (14)	64 (12)	20 (4)	2 (0)	6 (3)	12 (3)	6 (4)	190 (44)
計	4 (0)	21 (3)	46 (10)	193 (52)	164 (31)	20 (4)	2 (0)	19 (8)	27 (9)	39 (16)	535 (133)

第30表 土師器個体数

() 内は西大谷1、2区

	A類	模倣环	B類		C類			奈良、平安	総計
			丸底	平底	~14.6cm	14.5~12.6cm	12.5~cm		
总数	14(1)	18(3)	226(37)	354(78)	86(21)	438(106)	1014(178)	30(7)	2180(431)
			580(115)		1538(305)				

いるのであるから、集落の縮小・消滅などは考えられない。むしろ、宮川地区を中心に井戸や掘立柱建物など古墳時代後期より多くの遺構が検出されているのである。そして土師器の一般的な使用が須恵器の増産に伴い急速に減少したということも考えにくい。地方官衙跡とされる伊場遺跡や城山遺跡では同じ西部地方の一般集落である下瀧遺跡と比較して土師器の占める割合が少ないのであるがこれほど極端ではないし、当方でやはり官衙的要素が指摘されている静岡市内荒遺跡においても駿東環を中心として、須恵器環に匹敵する量の土師器が出土している。30点のうち9点を墨書き土器が占めることも含めて特異な出土状況といえよう。そして、同じ特異性を持った投棄でも、古墳時代後期のものは土師器を中心とする投棄であり、奈良期以降のものは須恵器・灰釉陶器を中心投棄しており、その性格が変化していく。

ることを指摘できるのではなかろうか。なお、須恵器の数が6・7世紀に比べ8・9世紀には大幅に減少することも、古墳後期から奈良期以降への変化を示していると思われる。

以上、南北1キロメートル以上に及ぶ本遺跡の旧河道部・河川の岸部出土の古墳時代後期の土器について概観した。そして、非常に難解な推察の上に立ってではあるが一応の結論を得た。①古墳時代後期及び奈良・平安期の土器は特殊な出土状態を示し祭祀性を指摘できる。②古墳時代後期のものと奈良・平安時代のものでは大きな相違が見られ、祭祀の変化を窺うことができる。③古墳時代後期の土器投棄にはⅢ期後葉～Ⅳ期前葉にかけてのピークが認められる。

3. 古墳時代後期の土器と共に伴する遺物

旧河道内出土の遺物は、例え同一遺構出土といつても一概に共伴関係を認めることはできない。そこでまず、明確な共伴関係が指摘できる低湿地縁辺部＝川岸部（河道に向かう斜面上）の静穏に堆積した粘土層から出土した一括遺物を取り上げたい。

- ・宮川3区、SX478——Ⅲ期後葉に位置付される遺構であり、中心部に土師器の甕が9箇所、瓶が2箇所に集中し、周辺には須恵器・土師器の环及び碟が投棄され馬形土製品1点と手捏土器1点が共伴している。
- ・宮川3区、SX479——Ⅲ期後葉～Ⅳ期前葉に位置付けられる。土師器の环を主体に投棄され、完形品が多く、2、3点が重なって出土している。馬形土製品8点と石製丸玉4点が共伴している。
- ・宮川3区、SX480——Ⅲ期後葉に位置付けられ、土師器環を主体に投棄されているが、手捏土器1点と、石製丸玉1点が共伴している。

次に、明確な共伴関係とは言いたいが、河道内の遺構のなかで、古墳時代後期の土器のみを出土し、後世の流路の影響を受けていないと考えられる遺構出土の遺物を取り上げたい。但し、水に浮き、また流すことに意味があったと考えられる木製品はとりあえず除外して考えたい。

- ・宮川4区、SR56——Ⅲ期前葉～Ⅳ期前葉と幅のある遺構である。土師器環をはじめとする多量の土器とともに、動物形土製品7点、石製丸玉8点、耳環1点、纺錘車4点、獸骨及び齒（馬が多い）48点、桃の種2044点、こぶし大の碟398個、人頭大以上の碟153個が出土している。
- ・宮川6区、SR313——Ⅱ期後葉～Ⅳ期前葉の幅がある。人形土製品1点、動物形土製品6点、手捏土器1点、石製丸玉16点、土製丸玉1点、勾玉2点、纺錘車3点、耳環2点、錐1点、鉄鎌1点、砥石2点、石錘・土錘18点、獸骨・齒20点、桃の種901点、小型の鏡1点が出土している。
- ・水上7区、SR811——Ⅲ期中葉～Ⅳ期中葉の幅がある。大量の土師器・須恵器と共に動物土製品4点が出土している。

以上、土器と共に伴すると考えられる遺物を羅列したが、まず注目されるのがほとんどの遺構で出土している動物形土製品である。馬形土製品（土馬）を中心とする総数210点の動物形土製品については、す

第31表 墳墓出土土馬一覧

番号	遺跡名	都道府県	出土地点	時代	数	伴出遺物
1	神送塚古墳	長野	古墳・墳丘	古墳後期	1	墳丘からはなし
2	(各務原市)	岐阜	古墳	奈良	1	なし
3	大林古墳	三重	古墳	古墳後期	1	なし
4	鏡山古墳	滋賀	古墳		1	なし
5	以久田野17号墳	京都	古墳	奈良か	1	須恵器(高环・环蓋)
6	内田山1号古墳	京都	古墳周濠	古墳中期	2	円筒埴輪・朝顔形埴輪
7	内田山2号古墳	//	//	//	1	上層：円筒埴輪・家形埴輪 須恵器
8	トヨオカ2号墳	奈良	古墳墳丘	奈良	1	なし
9	蛭穴山古墳	奈良		不明	1	土製人形(3)
10	富雄木島古墳	奈良	古墳墳丘上	白鳳・奈良	不明	なし
11	富雄丸山古墳	奈良	古墳墳丘上	奈良	不明	なし
12	瓦塚1号墳	奈良	古墳	奈良	1	なし
13	石光山古墳群47号墳	奈良	墳丘端	奈良	1	なし
14	新沢千塚212号墳	奈良		奈良	不明	なし
15	// 310号 //	//		//	2	なし
16	キトラ古墳	奈良		白鳳	1	なし
17	鶴池(古墳)	奈良		奈良	1	なし
18	(奈良市大和田)	奈良	古墳封土か		不明	なし
19	谷丸山古墳	//	古墳墳丘出土か		1	なし
20	(東郷町)	鳥取	古墳封土内	奈良	1	なし
21	ハンボ遺跡	鳥取	古墳周溝	奈良	4	須恵器・土師器
22	駄田1号墳	鳥取	古墳横穴式	奈良	1	なし
23	狼谷古墳	鳥取		//	1	なし
24	勇免4号古墳	広島	前方後円墳	古墳後期	1	鐵劍・鐵鋒・鐵矛・刀子 須恵器・土師器
25	蚕葉試験場遺跡	熊本	墓	奈良~	4	土製人形(8)・須恵器骨器
26	岡野遺跡	鹿児島	火葬墓	奈良	10	土製人形(10)・土製模造品
27	塞ノノ遺跡	鹿児島	火葬墓	奈良	多數	土製人形(多數)・須恵器
28	津栄野遺跡	鹿児島	火葬墓	奈良	1	土製人形(1)・須恵器

で『大谷川III』でまとめられているように、出土地点もまちまちで(旧河道・低湿地だけでなく、微高地の土坑や溝状遺構からも出土している)、形態もかなり異なり、時期も古墳時代後期から平安時代にかけて用いられたようで、有機的にその性格等を論じることは困難である。同一の祭祀具であっても、異なる祭に異なった目的で用いられることは当然だと思われる。古墳時代後期の土馬(全国出土例は30例と少ない)についても、祈雨祭祀や祓えなどに使用されたと考えられるが、喪葬儀礼に用いられた可能性も否定できない。土馬の墳墓(古墳封土中・石室・古墳周濠・火葬墓)からの出土は28例に及ぶ(表31)。500を越える出土例の中では多いとはいえないが、都城からのものを除くと、集落70例、窯跡40例に次ぐ数となり、官衙15例、河川10例、祭祀遺跡9例を上回る(なお、単独出土が多く遺跡の性

第32表 祭祀関連遺物出土状況

番号	遺物	大谷 1区	西大谷 4区	西大谷 6区	西大谷 1,2区	西大谷 8区	水上7区 10b区	宮川 3区	宮川 4区	宮川 2区	宮川 5区	宮川 6区
1	動物型土製品		2		18		23	1	17	7	4	98
2	人形土製品				15		10		2		1	77
3	手握ね土器	2	2		41		16	4	28	5	5	88
4	土製丸玉						1	1	1	1		11
5	石製丸玉						4		11	2	2	56
6	勾玉				1		1	1		1	1	13
7	管玉						1					2
8	耳環				3		2		5		2	5
9	人形木製品				9				19	7		20
10	馬形木製品				10				14	3		7
11	刀形木製品				3		2	2	6			17
12	斎事状木製品	3	11		52		2	5	69	17	2	72

格が不明のものが167例の多くにのぼる)。

その使用意義については、小田富士雄・真野和夫両氏の「土馬」に「このような古墳からの土馬の発見には、まず墓前祭の場合を考えられるが、古墳の靈の崇りを和める場合もあったという説も考慮すべきであろう。・・・墳墓を対象とする葬祭に馬が関与した例はいくつか報告されている。・・・これらの実例は、馬を神聖視し、それに一種の呪力を求める宗教的意味を認めることができよう。一方『魏誌』韓伝には牛馬に乗る風ではなく、葬送に用うることがみえ、烏桓・鮮卑の葬礼では馬に死者の靈魂を乗せ、これを犬に導かせ、死者の靈魂が陰阻をこえ、悪鬼にさえぎられることなく守護していくことを命じてから、その犬馬を殺して死者の生前の衣服とともに焼いて他界におくる風があったという。・・・大化2年の薄葬令のなかに、人や亡人の馬を殉死させることを禁じているのは、あるいは大陸系のこのようないくつかの葬礼に起源を求むべきであろうか。・・・」と述べられている。

次に耳環であるが、上記の2遺構も含め、いずれも旧河道内から計17点出土している。古墳時代後期に特有の遺物であるが、集落址や祭祀遺跡からの出土は多くはなく、これだけの点数が出土した例は希であると思われる。意味なく川に投棄する遺物ではなく、また一般祭祀より喪葬との関連を窺わせるものである。更に、上記4遺構から出土し、点数も多いものに石製丸玉があげられる(同じ蛇紋岩質のものが本遺跡の近隣にある井庄段古墳や伊庄谷横穴墳からも出土している)。

また、S R313からは勾玉2点が出土している。滑石製のものではなく実用の装身具として使用されたものと思われる。実用品としての玉類も8世紀以降の使用が考えにくい遺物なので、時代幅の広い遺構のものも含めて旧河道内出土の点数をあげてみると石製丸玉75点、勾玉18点、管玉4点である。これらも、耳環と同じく一般祭祀というより、副葬品としての性格の強いものであり、小出義治氏や橋山林継氏の脱くように5世紀前半には葬と祭が分離していたとするならば、喪葬儀礼との関連を考慮しなければならない遺物であると思われる。なお、南伊豆町の日野遺跡では、本遺跡の祭祀のピークと同じ6世紀末~7世紀前半にあたるIV期の祭祀址から碧玉製勾玉、碧玉製管玉、水晶製切子玉、ガラス小玉、耳

環が木製祭祀具と共に出土しており、「川岸に及んで『捨てて、流し去る（あるいは沈める）こと』に目的があった。」点も類似しており注目される。^⑨

さらに付け加えると、木製品であるので、上記遺構出土品からははずしたが、S R 56から2点、S R 313から12点出土している刀形木製品があげられる。本報告書第IV章第1節の2で中山正典氏により、小墓古墳の周溝の出土例を初めてする全国例の集積を基にした検討がなされ、「他遺跡の類例は、古墳時代の幅で収まるものが多い。模したと思われる上代太刀も古墳の副葬品の中に見いだせる。これらを考え合わせると、律令制祭祀の祭料であるとするより、それ以前の古墳時代の葬送儀礼に用いられたと考えるとしたらどうだろう。」という指摘がなされており、古墳時代後期のものとすることができる遺物である。

以上、古墳時代後期に投棄された土器に伴う可能性の高い（少なくとも同時期に使用された）遺物を上げてみた。S X 479において土器との明確な共伴関係にある馬形土製品と石製丸玉、S R 56及びS R 313出土でしかも8世紀以降の使用の可能性が少ない耳環と勾玉、同遺構出土で形態的に古墳時代のものと考えられる刀形木製品である。これらはいずれも喪葬儀礼との関係を多少なりとも指摘できる遺物である。

4. 有度山西麓古墳群と大谷川祭祀

古墳時代後期の大谷川祭祀に喪葬儀礼からアプローチしようとする場合、大谷川の眼前の丘陵に築造された有度山西麓古墳群を抜きにすることはできない。有度山西麓には多くの古墳が分布することが知られているが、特にその西南部に分布の密度が高く、特徴的なものも多い。以下、本遺跡に近接するものをこれまでの研究、報告に基づいて簡単にまとめてみたい。

①宮川古墳群

古くから「七つやぐら」と呼ばれる大型古墳が7基存在していたと考えられる。その中で、丸山古墳（宮川1号墳）は2度の調査がなされ、1辺20mの方墳であることが認識されている。内部主体は全長約13.5mの横穴式石室であり、玄室内には、組合式箱型石棺1と家形石棺1を蔵している。畿内支配者の古墳であり、豊富な副葬品からもかなりの有力者のものであると思われる。時期は6世紀末～7世紀初頭に比定される。次に現存する唯一の古墳であり、全長40mの帆立貝式古墳であることが判明している諏訪神社古墳が上げられる。さらに全長13.5mをはかる県下でも最大規模の横穴式石室を持つアサオサン古墳がある。一辺18mの方墳で、時期は6世紀末～7世紀前半に比定される。^⑩

②井庄段古墳群

これまでに2基が調査されている。1号墳からは円筒埴輪が出土しており、時期は6世紀初頭にさかのぼる可能性がある。中型の規模構造を有する2号墳は、家父長的にかなり実力を持った人物の墳墓と考えられ時期は7世紀初頭から7世紀前半が比定される。^⑪

③伊庄谷横穴群

4次にわたる発掘調査で、南谷支群で31基、北支群で30基以上が確認されている。断面形態はランセット・アーチをなし、平面形態は両袖式であり規模構造は大同小異である。いずれも2、3個の組合式木

棺を有し、高塚古墳と比較して土師器の出土量が多く、装身具などの副葬品は貧弱である。被葬者には一般的の高塚古墳より低い階級のもの、または、ある特異的な性格を持つ集団が考えられ、時期は6世紀中葉～7世紀中葉が比定されている。⁶⁰

④上ノ山古墳群（不動山古墳群）

有度山西麓古墳群の最南端に位置する。1983年以降の調査により、8基の方墳が検出されている。1辺は16m前後の規模のものが多く、横穴式石室はすべて10m以上を測る。なお6号墳には組合式箱型石棺2が置かれていた。時期は後期後半と考えられている。⁶¹

以上であるが、まず、これらの古墳が形成された時期を見てみると伊庄谷横穴墳のように6世紀中葉～7世紀中葉に及ぶものもあるが、その中心は6世紀後葉～7世紀前葉にあるようである。この点について辰巳和弘氏は、これら大谷古墳群の各支群は密集型を呈し、多くの支群が6世紀後葉～7世紀前葉の短期間に形成され、中央権力の造墓への介入を窺うことができるものであるとされている。また、(各地の密集型群集墳も6世紀後葉～7世紀前葉に形成され、それは畿内や西日本において群集墳の最も集中的に築造される時期であることも指摘されている。さて、この時期が(1)で述べた大谷川祭祀のピーク（Ⅲ期後葉～Ⅳ期前葉）とほぼ一致していることが注目される。言いかえれば古墳時代後期に大谷川の水辺に投棄された土器の量と眼前的丘陵に築かれた古墳の数がほぼ同様の変化をたどるということであり、祭祀の性格を考える上で重要であると思われる。川の神や農耕神の祭りはこれ程急激に盛んになり、衰退していくとは考えにくいものではなかろうか。やはり、古墳形成になんらかの関係を持った祭祀と考えたほうがより妥当だと思われる。⁶²

次に上記の古墳群には普遍的に見られる中小円墳以外にかなり規模もおおきく、特徴的なものが存在することに注目したい（中野宥氏はこれら有力な方墳や大型円墳を中心に、各台地性丘陵毎に中小の古墳からなる古墳群が同時に形成されたものと推測されている）。特に①の宮川古墳群は6・7世紀におけるイホハラの国の支配者層の奥津城と推定されていて、約100m×約100mに基域が統一されていることから中央権力による規制を窺うことができるものであるとされている。④の上ノ山古墳群も多くの方墳からなり特異な存在であり石室も大型であるが、石室を藏するものは1基のみで、副葬品も宮川古墳のそれより見劣りがある。②の井庄段古墳群には方墳ではなく、①、④と比較すれば下位に列せられる集団のものと思われる。性格の異なると思われる③の伊庄谷横穴墳を除き、3つの古墳群を強いて序列化すれば、①～④～②としてよいと思われる。

ところで、大谷川の旧河道部及び川岸部出土の祭祀遺物を地区（図89参照、微高地に当たる地区は除いてある）ごとにまとめるときのようになる（古墳時代後期にも使用された可能性のある人形土製品や木製祭祀遺物も含めてある）。祭祀遺物は川の上流から下流まで出土するのであるが、その数、密度にかなりの差があることがわかる。大変大雑把な言い方をすれば、宮川地区に最も集中する傾向を見せ（なかでも宮川古墳群に最も近い宮川6区の出土数が際立って多い）、次に多いのが西大谷1・2区を中心とする西大谷・大谷地区、そして水上地区ということになろう。そしてこの傾向は、それぞれの地区の眼前の台地性丘陵に築かれた古墳群の優劣の傾向と一致していると思われる。古墳群の本質地を推定することは、当該期の集落が発掘されていない現時点では困難なことであるが、「古墳時代に入ると、



第89図 有度山西麓古墳群分布図

水田農耕集落は台地性丘陵には目立たなくなり、小扇状地上や低湿地帯に弥生の集落と重複するよう拡大されていったものと思える。そして、台地性丘陵上はこれらの集落の奥津城として多数の古墳が造営されていったものと思える。・・・平野部における集落遺跡の分布をみると、静岡平野南部の中央付近の独立丘陵である八幡山から西大谷原方面に向かって舌状台地状の微高地が続き、その東側の西麓地帯との間は沼沢地が形成されていたと思われる。・・・集落遺跡はこれら微高地上に分布している。そして、これら集落遺跡群と西麓地帯の古墳群の分布には共通した状態を読み取ることも可能である。」とすれば、大谷川の西側微高地に古墳群と対応するようにそれぞれの本貫地が並んでいたことになる（奈良平安期のものではあるが掘立柱建物や井戸などの遺構が大谷川右岸に集中して検出されているのもそれを示唆するものであろうか）。そして、これらの集落が大谷川祭祀を主宰したのであろう。そう考えて

初めて、先に指摘した古墳群の優劣と祭祀遺物の優劣の一貫性は理解できるのである。有力な集団は有力な古墳を造営し、豊富な祭祀遺物を用いて祭祀を執り行つたと考えられよう。

5. 古墳から離れた所で行われた喪葬儀礼

森浩一氏が古墳以外から出土する埴輪は河川の流域からの発見例が多いことから、水神へのいけにえの代用品として使われたのではないかとされたのに対して、春成秀爾氏は「古墳以外の出土品にかぎって、葬送とは無関係で、しかも祭式過程で直接的に用いられたものであるとは考えにくい。」という忠告をされている。ではいったいこの時代、古墳及び古墳の周辺以外の場所で行われた喪葬儀礼には何が考えられ、また、考古学的にはそれはどんな遺構・遺物・出土状況となって現れるのであろうか。以下、諸先学の研究の中から本遺跡に関係に深いものをいくつか紹介してみたい。

まず、大場磐雄氏は、古墳時代の葬制を（1）殯斂儀礼（死後直後から本葬に到るまでの殯の期間に行われるもの）、（2）葬送儀礼（死が確認され、いよいよ墓所に送り埋納する儀礼）、（3）墓前儀礼（本葬後家族その他の日を定めて墓前で靈を慰和するためにする儀礼）に分けられ、（1）の儀礼が古代においては最も重要であったこと、そして、7世紀ごろには前代からの習慣が暫時固定し葬制が制度化しそれが大化改新での薄葬令で改变が行われたことを指摘されている。

また、古文献にしばしば表れる殯の記事を基に、「殯宮即ち喪屋を作つて屍を安置し、毎日種々の所役が奉仕して御饌を供え、誄詞を述べ、歌舞を奏し火を燃き、又は鴉を行なわしめる等がその一部であつた。この期間は上流階級ほど長く、天皇においては數ヵ月から數年甚だしきは數十年に及んだ例もある。『隨書倭國伝』に『貴人三年殯於外、庶人ト日而』と見えるもこの風をよく示している。恐らくこの期間に墳丘の築造が行われたと思う。勿論一部には生前から築造された所謂寿陵（墓）があったとしても、本葬に必要な石室石棺の作成や、埴輪、副葬品類の製造等が大体この期間になされたと推定する。」（傍縁は筆者による。以下同様。）と述べられている。

さらに殯宮（喪屋）と墳丘の関係については、「後世殊に庶民に近い人々は墓所に喪屋を設けたこともあったが、それは本来の意義ではあるまい。故に殯宮は一応墳丘とは別な死者の邸宅に近い箇所に設けられたと見てよいであろう。副葬品の一部とされる鏡や玉や劍はこの時既に屍体に副え置かれたと思う。」とされている。

また、葬送（本葬）の後に、「葬列のおもな人々は付近の海辺または河原に赴いて禊祓の儀を行つて帰つたことと推定される。」と述べられている。埋葬した後に禊をして穢を祓うことは、『魏誌』倭人伝に「始メ死スルヤ停喪十余日、時ニ当リテ肉ヲ食ハズ、喪主哭泣シテ他人就イテ歌舞飲酒ス。・・・已ニ葬レバ拳家水中ニ詣リテ澡浴シ以テ練沐ノ如クス」と見えるように殯とともに古くから行われた習慣であったことが窺われる。

次に和歌森太郎氏は「大化前代の喪葬儀について」において近代の多くの民俗例も含めて殯について考察されている。氏はまず646年のいわゆる大化の薄葬令について、「文辭の表面上のことはともかく内容にかんすることは少なくも飛鳥時代前後、後期古墳文化期のころの事実を投影しているものとして扱いたい。」とされ、その中で王より以下庶民に至るまで殯を禁じているのは「巨大な墓を作るために日数

と労力を多く要しその間殯を営むふうがあったのを遮断して殯を無視させることにより、いきおい小規模の墓をつくる様にした。」だけでなく、殯を皇室の独占にして權威の強大化をはかるためのものであったこと、そして、殯の禁止は『統日本紀』以下の正史によればその後も実際守られていたことを指摘している。^四

また殯儀礼の内容については「喪屋で故人の遺族や関係者が当人がさながら生きていますの如く接して食事や歌舞を共にしたり哭泣してよみがえりを切願したりする。それを連日連夜にわたって、つまり通夜して行う。これがモガリである。」とされている。死体の仮の安置所である喪屋の位置については民俗例をも示しながら、本来は墓にすべきところからはなれた場所であったが、喪葬の礼が大化以降平安時代に至る間に急激に変化し、「喪におけるモガリよりも、葬後のタマツリに力が入れられるようになる」と墓の傍につくられるようになったとされている。

このモガリからタマツリへの変化は岡田清子氏も「喪葬制と仏教の影響」の中で説いている。大宝令のなかの喪葬令にはモガリの禁止事項はなく、ハフリのあととのモが主要な問題となており、「モガリ・ハフリからハフリ中心の過渡期をへて、ハフリ・モへ移行させていく一つの契機となった。」と述べられている。

また、同じ喪葬令に、唐令には存在する墳丘・墓室の規定がなく（大化の薄葬令では身分別に規制をしている）、支配者にとって權力の誇示という性格をもっていた古墳はその築造意義を失ってしまったことを指摘されている。大化の薄葬令から半世紀の間に古墳の築造もほぼ停止され、それと同時に殯も行われなくなっていたという社会情勢を反映しているものと思われるのである。

この点に関して和田翠氏も、殯について集大成された労作「殯の基礎的考察」の中で、大化の薄葬令が効果をあげ、さらに仏式葬儀の導入や火葬の採用が急激に殯を消滅させたことを指摘している。また、日本古来のモガリと中国の葬礼に見える殯（ヒン）は本来別のものであるが、百濟系帰化人の大規模な波来により（百濟などには殯（ヒン）が早くから定着していた）、中国の葬制が徐々に日本にも浸透して儀礼としての殯（モガリ）（誅を奏上し、和風證号を獻上することに象徴される、首長位繼承のための政治的色彩の濃いもの）が完成したこと、そして、それは安閑朝末年頃（6世紀前半）であり、その時期と皇陵における横穴式石室の採用の時期がほぼ一致することを指摘されており注目される。

斎藤忠氏も『東アジア葬・墓制の研究』において、殯を中心に日本の古代葬制について詳細な論述をされている。その中で、葬送後の禊祓いの行為について「みそぎが、流動する河海の呪力により、身体を清めるという行為であるとき、その徵証を考古学的に求めることはできない。しかし、汚れを祓うるという広い意味の行為を関連づけるとき、葬儀に用いた品々の汚れを焼却せずに、河泉に流し、祓い清めた場合のあったことも考えてよく、もし、旧河床等においてこの種のものが発見された場合、この問題をも検討すべきであろう。」とされているのは、本遺跡を喪葬儀礼との関連で理解しようとする上で注目されよう。

なお、葬送後の禊祓いに関しては、先にあげた『魏誌』倭人伝の他に『記紀』にもその風習を表すと思われる記事がある。『古事記』には伊耶那岐命が黄泉の国から脱出して後、「吾はいなしめしこめき穢き國に到りて在りけり。故吾は御身の禊為な。」とのらして、竺紫の日向の橋の小門の阿波岐原に到り

まして、禊祓したまいき。」と述べられている。また、『日本書紀』にも同様に「吾前到於不須也凶目汚穢之処。故當 祓 去吾身之濁穢。則往至 筑紫日向小戸橘之禮原。而祓除焉。」と見えている。

また、斎藤氏は前掲書において、喪屋の位置について「とにかく、喪屋或は殯宮は必ずしも葬地に接近するなどのような密接な関係ではなかったようである。」とされ、さらに、この喪屋の前でなす行為の一つとして供膳の行為をあげられている（『日本書紀』にも、卷三十、持統天皇元年八月条の「嘗 干殯宮 此日 御 青飯 也。」など殯宮における供膳行為を示す記事がいくつか散見される）。

この供膳の行為について小出義治氏は「一般的の『もがり』の場は、多くは他の場所（古墳以外）で執りおこなわれたとみるべきであろう。この『もがり』の場では同族多数の飲食も伴ったとみられるから、多くの土器が炊さん用具とともに使用されたであろう。それらは死體に触れた土器として、多くは破碎され、その場に散布埋納されたと思われる。」と、供膳だけなく同族多数による共食のあったことを推測されている。¹⁰

河村好光氏も「後期古墳の編成秩序とその展開」において殯の際の食物供献について詳しく考察され、結論として、横穴式石室の普及とともに食物供献儀礼が発達すること、炊さん一供獻一埋納という一連の過程を食物供獻儀礼と呼ぶとすれば、炊さんと供獻の主たる場は喪屋であること、さらに、食膳は死者のみに対するものでなく、死者と祖先間の共食であり、この行為が「祖先系譜とともにその親族が秩序づけられている同族的関係の確認の舞台とならざるを得ない。」ことを述べられている。

以上長きにわたって紹介した諸成果をすべて是認できるものとしてまとめてみると以下の点が指摘されよう。

①本論が対象としている古墳時代後期においては、喪葬の中心は死者の復活を願う（死の確認をする）

殯であり、それは広く行われていたと考えられる。

②モガリは日本古来の慣習であったが、中国の殯（ヒン）の影響をうけて完成した儀礼としての殯（モガリ）は、首長位繼承儀礼的意味合いが強く、諸豪族にとっても同族関係を確認し、祖孫意識を強めるために重要なものであったと考えられる。

③殯は古墳を營む階層にとって必然的に行わなければならぬ要素を持った儀礼であったが、その場は古墳から離れていたと考えられる。¹¹

④7世紀中葉に発布された大化の薄葬令後、8世紀初頭の大宝の喪葬令までの間に古墳の築造がほぼ停止され、同時に殯も行われなくなり喪葬の中心は葬へ、さらに葬へと移っていったと考えられる。

⑤殯にはいくつかの行為を伴うが、そのうちの1つに食物供献及び共食儀礼があり、そのためには多くの土器や炊さん用具が使用されたと思われる。

⑥それらの土器の中で葬送の列に加わった人々により、食物を乗せて埋葬の場まで運ばれたであろうもの以外は、穢れたものとして殯の場に埋納されたか、河川に流したと思われる。

⑦この食物供献・共食儀礼は横穴式石室をもつ古墳の普及とともに発達したと思われる。儀礼としての殯自体も、6世紀前半の安閑朝頃に完成し、それと同時期に皇室も横穴式石室を採用している。

⑧殯の場ですでに副葬品が副えられていたと思われる。

⑨古墳から離れた場所で行われた喪葬行為として、殯以外には、葬送後の海・河川での禊祓が考えられ

る。

次にこれら従前の研究により指摘されていることと、(1)～(3)で述べたことを併せて検討して本論のまとめをしてみたい。

6. まとめ

本論の出発点は、古墳時代後期の生活廃棄物とは考えられない膨大な量の土器に何等かの意味付け、解釈を行うことにあった。そして、同時期の古墳の副葬品と同一の遺物が出土すること、また、土器の量的変化が本遺跡から500m～800mほど離れた有度丘陵上の古墳群の形成過程と一致することから、神祇祭祀からではなく、喪葬祭祀からのアプローチを試みたのである。その結果得られた、結論は以下の通りである。

(1) で検討した出土土器のピークと(3)でみた古墳築造のピークの一一致は、特に豪族層においては首長位繼承儀礼という意味で重要視された殯儀礼を通してみると理解が可能ではないかと思う。膨大な土器・祭祀遺物の出土量からして、古墳時代後期の大谷川祭祀に豪族層が関与していたことは想像に離くない。しかも眼前に当時のイホハラの国の支配者層のものと考えられるほどの有力古墳が存在していたのであるからなおさらである。彼ら豪族層は、おそらく横穴式古墳とともに、皇室が行っていた儀礼としての殯を取り入れ、古墳築造の間、各集団ごとにそれを行っていたと考えられる。そして、殯儀礼の中でも重要な意味を持つ食物供獻・共食儀礼において、多量の土器を使用し、穢れたものとして大谷川に流したのではなかろうか。その儀礼は有度山西南麓に横穴式石室を持つ古墳が築造され始めた6世紀中葉ごろから始まり、7世紀中葉頃まで続いた。その後、大化の薄葬令に象徴されるような政治体制の変革や葬制の変化により、古墳の築造が停止されるとともに行われなくなってしまったのである。古墳時代後期の土器には、多量の土師器壊とある程度の量の煮沸形態の土師器が認められるのに、それ以降の時期には土師器はほとんど出土していないのは、多量の壊と炊さん具を必要としたであろう食物供獻・共食儀礼の終息を物語っているのではなかろうか。

以上で論は尽きるのであるが、この時期のものと思われる土器以外の遺物も喪葬祭祀に使われたものと仮定したならばこのような解釈も可能ではないかということを次に示したい。

まず、耳環・丸玉などの装身具類であるが、これらは殯の場すでに死者の傍らに置かれ、その中で埋葬の場まで運ばれなかったものを穢れたものとして流したと考えるか、または、喪葬儀礼への参列者が着用したものを、葬送終了後（または殯終了後）に流したと考えられなくもない。馬形土製品（土馬）については、(2)で紹介した鳥桓・鮮卑の葬法のように死者の靈魂を乗せて運ぶ馬、または、殉葬される馬の形代として、殯の場で副えられたものという解釈が可能ではなかろうか。さらに、身についた死の穢を祓うための形代として葬送後（または殯終了後）の禊祓の場で使用したとも考えられる（水野正好氏は、律令期以前の土馬に関して、「禊祓の許で理解されるべきものであろう。」とされ、「馬形の成立はそうした大祓の場に加わるために、従前から存在した土馬をめぐる祓除の祭式を改め新しく創出したものである。」と述べられている）。

また、刀形木製品も殯に用いられたと考えられている遺物であり、死の穢れを祓うために使用された

という解釈を与えても不都合はないであろう。さらに、(2)では特に取り上げていないが、人形土製品も古墳時代後期のものがあると考えられ、やはり葬式の際、形代として使用されたとしてもよいものであろう。

人形木製品・馬形木製品・斎串状木製品については、より慎重な扱いが必要であるが、発掘当初からの見解に従い、古墳時代後期のものも存在するとすれば、人形、馬形は葬式の場で使用された可能性を指摘してもさしつかえないものである。斎串は、この葬式の場を区画したものと考えることもできるが、悪霊の侵入を防ぐために喪屋を囲んだものという仮説も可能ではないかと思う（和歌森太郎氏は、殯に参じるハハキモチ（持帯者）の持つ幕は、喪屋を清掃するものではなく、喪屋に外から悪いものが入ってこのいようにおさえるものであるとされ、木を斜め十文字に組んで立てておく、青竹を割って周囲に柵を結ぶなどの民俗例をあげられており興味深い）。

殯儀礼に中国の葬礼の強い影響が認められるのであるから、人形など中国道教思想と関連したものが喪葬の際に使用されても不自然とは思われない。道教思想といえば、S R313、S R56からだけでも3,000個近くが出土している桃の種が思い当たる。桃は邪気を祓うものとされるが、記紀には、伊耶那岐命が黄泉国から脱出しようとして黄泉国とこの世との境で、桃の実を投げて八くさの雷神や五百の黄泉つ軍を追い返したことが見えている。桃の実がこのような意味でも用いられていたとすれば、殯終了時（死靈を完全に黄泉の国に追いやり、戻ってこないようにする）または、葬送後の葬式の場で使用されたものとする解釈が可能かと思われる。

以上、古墳時代後期の大量の土器と、同時期に使用された可能性がある祭祀遺物について、殯の場における食物供獻・共食儀礼と葬送後（または殯終了後）の葬式儀礼から1つの解釈を試みた。平野の本貫地は生者の世界（現国）であり、山上の奥津城は死者の世界（黄泉国）である。静岡平野南東部と有度山西南麓との境をなす大谷川は生と死の境で行う殯儀礼の場（少なくとも殯で使用した穢れたものを流す場）として、また、葬送に加わった人々が黄泉国から現国に戻るために葬式をする場としてふさわしい所ではなかったかと思うのである。

しかしながら、このような仮説の基となる、(1)～(3)で述べた資料操作や理解に誤りや無理があるのでないかという危惧がある。それに加えて、殯の場に必要な喪屋の跡が検出されていないのであるから極めて非実証的な内容と言わざるをえない。事実を積み重ねて導き出された解釈ではなく、ある解釈が先にあり、それに当てはまる事実を積み重ねたものに過ぎないことは最初に述べた通りである。

ただし、「こうしたテーマに最も関係のある考古学からの研究は乏しいようである。・・・喪屋は葬地である古墳とかなり離れた地に起こされるのが普通であるから、殯の痕跡が容易に見出しえないところに起因するのだろう。・・・発掘に際して、わが国古代の葬制にあっては、殯に付されることが普遍的であったことを考慮すれば、もっと新しい知見をうることができるのでなかろうか。殯に対する研究が考古学の分野からもっと突っ込んでなされることを期待したい。」という和田翠氏の言に少しでも応えるためにも、特に古墳時代の遺跡においては、例え古墳からある程度離れていても、多量の土器出土や祭祀遺物出土を神祇祭祀と結びつけるだけではなく、喪葬祭祀との関係でとらえようすることは、喪屋が仮設の建物で検出されにくいものだけに、無駄なことではないと考えられる。本遺跡の場合河床出

土であるからなおさらであろう。神祇祭祀に用いたものを神への供獻品として投棄することもあるが、穢れたものであるからこそ川に流し去る必要があったと考えられるからである。そして、人々にとって最も恐れ、最も身近な穢れとは死の穢れではなかったろうか。

無論、大谷川で営々と続いた水辺の祭は様々な形態、目的のものが重複し、また消長したと思われる所以、古墳時代後期に限っても全てが喪葬に帰結するものではないと思う。この時代に川に流した多くの穢れの1つとして死の穢れが考えられてもよいのではないかというのが本論の結論である。

終わりに当たって、浅学の筆者に様々な御教示をして下さった多くの方々に感謝の意を表したい。

(竹山喜章)

- (1) 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所『大谷川II(遺構編)本文編』1987
- (2) 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所『神明原・元宮川遺跡、大谷川放水路建設に伴う発掘調査概報』1986のまとめ
註(1)と同じ
- (4) 小出義治「祭祀と土器」『神道考古学講座・第三巻』雄山閣 1981
- (5) 大場哲雄『祭祀遺跡の考察』角川書店 1970 第三章
- (6) 小出義治「祭祀」『日本の考古学V・古墳時代下』河出書房 1966
- (7) 堀山林雄「祭と葬の分化—石製模造遺物を中心として—」『國學院大學日本文化研究紀要29』1972
- (8) 井上光貞『日本古代の王權と祭祀』東京大学出版会 1984
- (9) 岩崎卓也『古墳時代祭祀の一側面』『史叢35』1986
- (10) 白石太一郎『神まつりと古墳の祭祀』『國立歴史民俗博物館研究報告』第7集
- (11) 章、斐類には奈良以降のものも若干含まれると思う。
註(4)と同じ
- (12) 奈良以降のものと明確に分け難いものもあるが、本報告書も含めてこれまで数多く紹介されてきたように大半は古墳時代後期までのものである。
- (13) 三島市教育委員会『中島下舞台遺跡』1983
- (14) 面南町教育委員会『伊豆源信病院敷地内遺跡』1984
- (15) 平野吾郎「東海地方における都鄙推定遺跡とその立地について」『考古学叢考・中巻』吉川弘文館 1988
- (16) 報告書は未発表である。静岡県教育委員会文化課五島康司氏の御教示による。
- (17) 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所『大谷川III(遺物編)本文編』1988
- (18) 中村 浩『須恵器生産の諸段階—地方窯成立に関する一試考』『日本考古学論集5』吉川弘文館 1987
田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
- (19) 静岡県埋蔵文化財調査研究所 鈴木基之氏の御教示による。
- (20) 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所『坂尻遺跡—昭和63年度袋井バイパス(袋井地区)埋蔵文化財発掘調査概報—』1989のまとめに掲載されている。
- (21) 山村 宏他『瀬江の須恵器生産』『古代学研究』50
- (22) 静岡県考古学会『静岡県考古学シンポジウム6・古墳時代の土器』1985
- (23) 県西部の伊場遺跡(浜松市教育委員会)、伊場遺跡・遺物編2』1980)・城山遺跡(浜名郡可美村教育委員会『城山遺跡』1981)・下流遺跡(浜松市遺跡調査会『下流遺跡』1985・東部の東平遺跡(日本道路公团名古屋建設局 静岡県富士土木事務所 静岡県教育委員会 富士市教育委員会『東・平遺物・考察編』1981)
- (24) 三新田遺跡(富士市教育委員会『三新田遺跡発掘調査報告書』1983)・中島下舞台遺跡(註(14)と同じ)に資料および、『静岡県の土器と須恵器』(加藤学園考古学研究所 1980)を参照して古須期のものと区別した。
- (25) 『大谷川III』の墨書き器実測図や本報告書S P54実測図等に見られるように、平底で腰部がやや張り口縁部は斜く立ち上がり体部下半にへラケズリがほどこされたものや、平底ナメ整形で腰部がやや張り口縁部がかなり外傾するもの同タイプで標高が低く凹状を呈するもの、底部と体部とが腰をなし、底部中央に余切り痕を残すもの(いわゆる「駿東坏」)などが見られる。
- (26) 註(14)と同じ
- (27) 註(24)に示した『伊場遺跡・遺物編2』・『城山遺跡』・『下流遺跡』参照
- (28) 静岡県埋蔵文化財調査研究所、山田成洋氏の御教示による
- (29) 註(28)と同じ

- 29 国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告第7集・附篇』1985による。
以下の土馬に関する数字は同様である。
- 30 小田富士雄・真野和夫「土馬」『神道考古学講座・第三巻』雄山閣 1981
- 31 本報告書第IV章第3節4・装身具の註2参照
- 32 静岡市教育委員会『駿河伊庄谷横穴墳』で6号墳A号棺から「ちょっと見られない珍しいもの」として径0.2~0.3cmの細い環の出土が報告されているが、本遺跡からも径0.2cm近くの耳環が1点出土しており共通性が見い出しうる。
- 33 静岡市教育委員会『駿河井庄段古墳』1979
- 34 註8掲載書
- 35 本報告書第IV章第1節の6に関する詳しい記述がある。
- 36 註6に同じ
- 37 註7に同じ
- 38 岩崎卓也氏は註8掲載書において井上光卓氏の説く「葬と祭の分化」の動きを横穴式石室導入と前方後円墳の消滅にみる古墳祭祀の葬への回帰とされている。葬に完全に回帰した横穴式石室内に普遍的に見られる遺物が祭祀に用いられたとはやはり考えにくい。
- 39 南伊豆町教育委員会『日野遺跡発掘調査報告書』1987の考察「祭祀構造の復元」において渡辺康弘氏は木製祭祀具と玉類が同時期に併行するかどうかを確定できないとしている。また装身具の出土をもって葬と祭との一致を考えられ、同稿註12では玉の出土が葬からも祭祀遺跡からも微減する7世紀中頃を「葬と祭」の分化の時期とされている。
- 40 大澤和夫「有度山城の考古學的調査」1930、『静岡県郷土研究第三巻』所収
- 41 望月薰弘・手島四郎『駿河丸山古墳』1962
- 静岡市教育委員会『駿河宮川遺跡』1975
- 42 長巳和弘「静岡県中部における群集墳分析の一視点」『静岡県考古学研究4』1978
- 43 静岡市教育委員会『駿河宮川遺跡』1975
- 44 註24に同じ
- 45 註25に同じ
- 46 註26掲載書、静岡県教育委員会『伊庄谷横穴群上』(兼編) 1984・静岡市教育委員会『駿河・伊庄谷横穴群』1984
- 47 静岡市教育委員会・上ノ山遺跡発掘調査団『上ノ山遺跡発掘調査(第1次)概報1』1984
- 48 中野 宥『静岡市域の古墳分布について』『静岡県博物館学会学芸職員研究紀要』8.9 1984
- 49 長巳和弘『静岡県中部における群集墳分析の一視点』『静岡県考古学研究4』静岡県考古学会
- 50 «大谷川III』(註18に同じ)によれば、三期後葉～IV期前葉は6世紀末～7世紀中葉となり絶対年代の比定には多少のずれがあるが、上記古墳群の報告書を見る限りIII期後葉～IV期前葉の須恵器が圧倒的に多い。
- 51 南北1km以上にわたる範囲で祭祀を行なったいくつかの集落が1度に古墳墓地に合わせるようにして、急激に発展し、衰退といった結果であるとも考えられないこともない。しかし、奈良期以降に都衙的要素が指摘されるとなれば郡司に任用されたであろう有力地方豪族の集団までも7世紀後半という時期に衰退するということは考えにくい。
- 52 註26に同じ
- 53 註27に同じ
- 54 註28に同じ
- 55 静岡市教育委員会『駿河・伊庄谷横穴墳』1984 4. 立地と環境及び6. まとめ
- 56 森 浩一「形象埴輪の出土状態の再検討」『古代学研究』29 1961
- 57 甘柏編『地方史マニュアル6. 考古資料の見方』『遺物圖』柏倉房 1977 P235
- 58 大場善雄「葬製の変遷」『古代の日本』第2巻 角川書店 1971
- 59 大場氏は人物埴輪は、この豫宮における諸役を示したものと、葬列の人々を表したものと開拓者が含まれるとされている。又この点について和歌森太郎氏は、註8掲載書において、豫宮において、いろいろの役割をもつ人々を形象埴輪に立て表現したものと理解すべきだとされている。
- 60 『常陸鏡塚』國學院大學考古学研究報告1 1956
- 61 註26に同じ
- 62 註27に同じ
- 63 和歌森太郎「大化前代の喪葬製について」『古代史研究』第4集 1958
- 64 大化の薄葬令をめぐって、多くの論が展開されているが、森浩一氏も「大化の薄葬令は、646年の事件と考えているのではなく、その前後の状態を反映したものとして資料的価値を見出している。」と和歌森氏同様のとらえ方をしている。(森 浩一「古墳時代後期以降の埋葬地と葬地」『論集終末期古墳』堺書房 1973)
- 65 むろん、一般庶民の間の豫の風習は連絡と続き、近代まで残存していると述べられている。
- 66 同田清子「喪葬制と仏教の影響」『日本の考古学』V、河出書房 1966
- 67 和田 幸「豫の基礎的研究」『史林』52-5 1969
- 68 萩藤 忠『東アジア葬・墓制の研究』第一書房 1987 第一章 第一節

網 註(4)と同じ

例 河村好光「古墳後期の編成秩序とその展開」『考古学研究』27-1 1980

例 ただし森泉岐氏が褒美跡である可能性がきわめて強いとして紹介している8例ば、いずれも古墳都内のものである。

森泉岐「古墳と兩辺施設—古墳の墓域と褒美跡について」『関西大学考古学研究室開設参拝周年記念考古学論叢』1983

例 この鳥桓・鮮卑の葬礼にみる馬と犬のセット（死體を馬に乗せその馬を犬に導かせる）は、本遺跡に犬と思われる形状をした土製品があることや、各地のか形土製品の出土が報告されていることと考え合わせると興味深い。

例 水野正好「馬・馬・馬—その語りの考古学」『奈良大学文化財学報』第2集 1983

例 人形土製品については『大谷川里』（註18）において、寺田甲子郎氏によって考察がなされており、馬形土製品や、犬形土製品を伴う出土例があげられている。また各出土地の共通点として付近に古墳を有していることが指摘されており本論との関係で興味深い。

例 註(4)と同じ

例 下出積典『道教と日本人』講談社現代新書

例 『日本書紀』卷第一 神代上および『古事記』上巻

例 敷地部には古墳時代後期のものと判明できるものも含めて多くの小ピットが存在するが、建物跡となるものはない。

古墳後期の小ピットから土師器片とともに、祭祀性をもつと思われる繊維紋をもつ滑石製鉢が出土しているのが注目される程度である。

例 註(4)と同じ

第3節 祓いと人形 —考古資料と民俗資料との接点—

1. はじめに
2. 古代遺跡出土の板状木製人形
3. 文献資料に見える祓いと人形
4. 現行の大祓神事
5. 『雜祭式典範』と明治以後の大祓
6. 人形の民俗事例概観
7. 人形の民俗事例の検討
8. まとめ及び問題点

1. はじめに

木製人形は神明原・元宮川遺跡より74点出土しており、その用途としては従来の学説通り「祓い」を想定した。ただし板状をした木製人形は平城宮内裏東方の東大溝S D2700より出土した「左目病作口」と墨書きした人形より病等疫魔を託し流したと考えられる祓いの人形と、やはり平城宮大膳職井戸より出土した人名「坂部口建」と墨書き両眼と胸に木釘が打たれていた人形より厭魅呪詛の人形という2つの用途が考えられている。神明原・元宮川遺跡出土の人形はその形状およびその出土状態より祓いの人形と解するが無難と考えられる。ここで「祓い」と代表させている機能は神事としては大祓、地鎮祭、七瀬祓い等において人間の罪、穢をはらうという広義の祓いの機能である。果して古代遺跡より出土する板状の木製人形は厭魅呪詛の人形の用途を除けばほぼ祓いの人形と限定できるのであろうか。この疑問に答えるべく民俗事例を検討してみた。現在、多くの神社で行われている大祓神事に用いられる紙人形は果たして古代遺跡より出土する板状の木製人形と結び付くのであろうか。また現在残る神送り等の民俗事例の人形も古代の木製人形と結び付くのであろうか。

現在の民俗事例の人形が律令期の木製人形と結び付くか否かは慎重にして実証的な検討が必要であろう。筆者にはその検討を加える力量があるとは到底思えないが、ひとつの試論として以下の方法で検討を加えてみた。先ず古代遺跡より出土する板状の木製人形の資料を検討する。次に『古事記』『日本書紀』より近世までの文献資料において「人形」の使用例を検討する。そして現在の人形の民俗事例を検討する。以上、古代の人形という点と現在の人形という点を文献資料という線で結ぶという作業を試みた積もりである。当初、報告者は人形の民俗事例を収集し、分析整理することによって、古代遺跡より出土する木製人形の用途およびその人形を用いる民間信仰を考え得ると想定した。しかし、諸先生方より民俗資料と考古資料の安易な結び付けは短絡に過ぎるとのご指摘を頂き、上記の方法をとることになった。この試論の当初からのねらいは考古資料の木製人形を民俗資料の人形によって検討を加えてみようというものであった。やはりこの点に重点が置かれていることを予め述べておきたい。

2. 古代遺跡出土の板状木製人形

板状木製人形の出土遺跡については『祭祀関係遺物出土地地名表』によって全国的に把握できる。ここでは代表的な出土遺跡についてその遺跡の性格、木製人形の出土状態、共伴する木製形代などについて

て確認しておきたい。

山形県鮫海郡八幡町後田遺跡は具体的に祭場としての形を残した状態が発見された非常に貴重な祭祀遺跡である。平安期の出羽国府と擬定されている「城輪跡」⁽⁴⁾南東1キロほどとのところにこの遺跡は位置する。祭祀遺構SM60は祭料となる木製の人形、馬形、刀形、斎串が人面墨書き土器とともに祭場として配置させた状態で検出され、祭場の復元ができたと報告されている。「議鬼坐」と墨書きされた人面墨書き土器の中には斎串30本、刀形、人形の股部が入っており、まわりには刀形、馬形、人形、斎串がそれぞれ規則性をもって配されていた。このSM60は河幅1メートルあまりの河川SG61のすぐ西岸に設定されている。人面墨書き土器、須恵器より年代は9世紀中葉とされ、『文徳実記』の嘉祥三年(850)六月廿八日条に出羽國に陰陽師が派遣されたこととの関連も注目される。

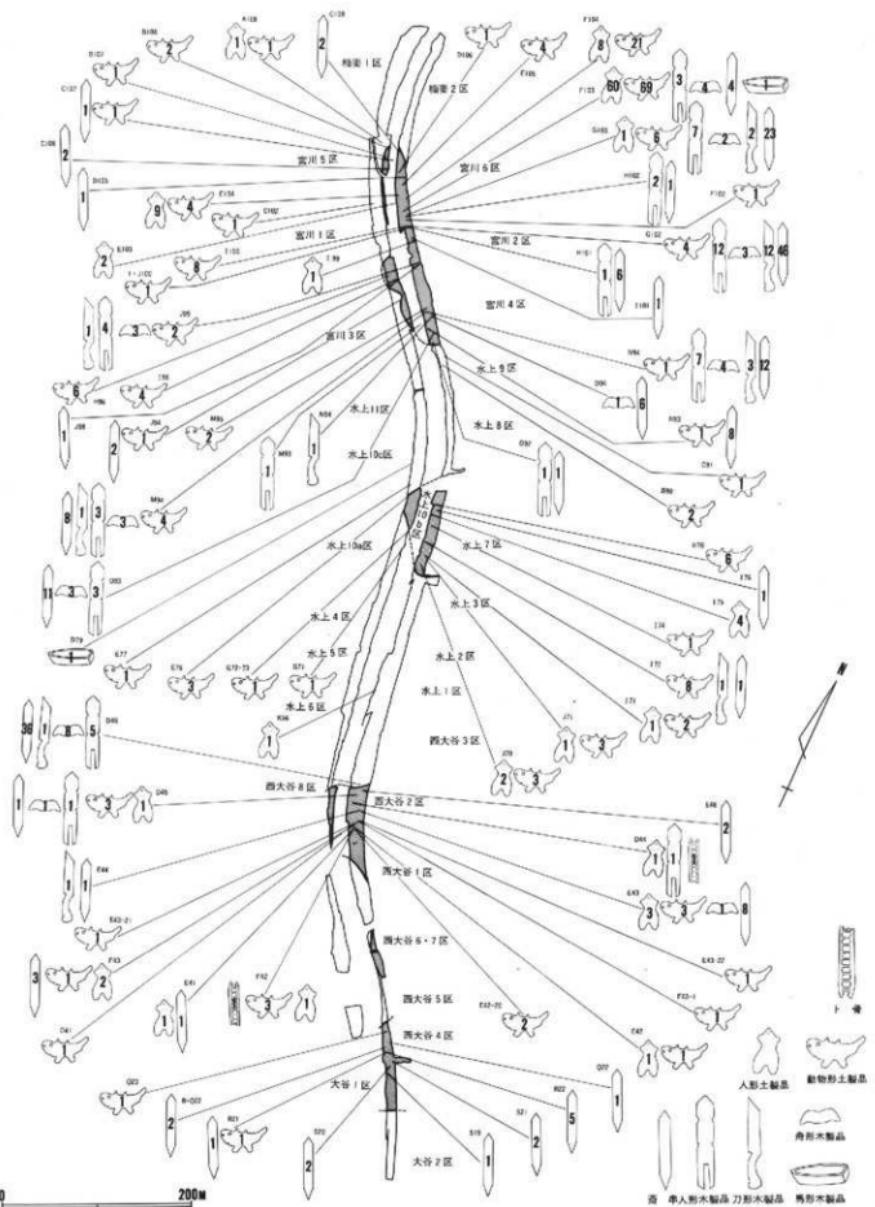
神明原・元宮川遺跡において木製人形は74点出土しており、すべて旧大谷川流路内より出土している。祭祀具の出土地点に関しては第90図を見ると土製品の一部を除いては大半が旧流路より出土しているのが解る。特に西大谷2区D46グリッド、宮川4区S R56、宮川6区S R313に集中して、木製人形が出土する。いずれも川幅10メートル以上もの旧流路内で、投棄されたと思われる大量の土器とともに木製の馬形、刀形、斎串等を伴って出土する。またこれらの旧流路では人形、動物形土製品を伴う。(詳しくは第IV章第3節人形木製品を参照されたし。)

静岡県浜松市伊場遺跡では大溝と呼ばれる川幅20メートル弱程の旧流路より木製祭祀具を含む大量の木製品が出土した。⁽⁵⁾特にV層と呼ばれる7世紀後半より9世紀初頭の層を中心に農具などとともに木製人形23点、馬形11点、舟形64点、斎串167点、絵馬6点等の祭祀遺物が多数出土した。舟形が64点も出土していること、枝溝2区の第61号木簡に「若倭マ小刀自女病有」との文字が読めることなど特記に値する。第61号木簡のこれらの文字が人形に記されていたと仮定すると、悪疫を祓う願いと直結するであろうが、木簡の形状だけでは用途の限定は難しい。

愛知県春日井市勝川遺跡では苗田地区の奈良～平安時代の旧地蔵川流路N R01より木製人形が出土する。⁽⁶⁾折戸10号窯式期のC・D地点では「巫」の墨書きを持つ陶器とともに舟形、斎串、曲物が出土した。また黒窓90号窯式期のA地点では「寺」の墨書きを持つ陶器とともに人形4点が出土した。報告者も「祭祀具の構成、祭祀行為の場が川であることなどから、祓いが最も近いものと思われる。」とし、「人名、吉祥句を描いた墨書き土(陶)器は自らのケガレ・災いを託し、流す、一種の墨書き人面土器の要素を持ったものと考えたい。」としている。

奈良県大和郡市稗田遺跡は平城京羅城門から下ツ道を南に約1.5キロ下ったところにある。川幅約15メートルの人工河川、及び下つ道に架かる木造橋も検出され、川の堆積層より人面墨書き土器、ミニチュアカマド、土馬、土器、人形、斎串、絵馬、獸骨、皇朝鏡が出土した。「遺物の多くは橋周囲のシガラミ周辺と下流部から出土し、下ツ道及び橋の上から、祭祀遺物が川中に投じられたことがわかる。」という。また下流部の発掘で、薦にくるまれた小児の死体が検出されている事実より、「稗田遺跡は、平城京の正面にある祭場のひとつで、京の穢れをここに祓うとともに、百姓の『死穢』をも流す場所であった。」とされている。

平城京左京八条・九条三坊で検出された東堀河は東市を南北に貫流する奈良時代の川跡である。左京



第90図 神明原・元宮川遺跡祭祀遺物分布図(グリッド別) 遺物内の数字は出土点数を示す

八条三坊九坪では土馬123点、人面墨書き土器56点、人形2点、斎串4点等が出土した。左京八条三坊十一坪北辺では土馬47点、人面墨書き土器62点、人形6点、斎串1点等が出土した。左京九条三坊では土馬58点、人面墨書き土器55点、人形9点、刀形1点、斎串4点、ミニチュアカマド3点等が出土した。東堀河は「東市への物資運搬」という目的で開墾されたが、京の住民にとっては全く別の機能を果たすことになった。」その「全く別の機能」とは「京住民の祓川」としての機能であった。¹⁰

平城宮壬生門前では二条大路北側溝 S D1250¹¹が検出された。人形207点、鳥形1点、舟形1点、斎串1点、土馬1点がこの溝より出土した。金子裕之氏は『法曹類林』卷二百の「式部記文 六月十二月晦。百官会集。大祓儀。・・(略)・・於大伴壬生門大路各有常儀。・・」を平城宮における大祓と推定し、このS D1250より出土した多量の木製人形は大祓の祭料と考えた。平城京宮の他の溝と違ってこの溝から木製人形は多量に出土するが、他の溝で見られる土馬や人面墨書き土器やミニチュアカマドが極僅かしか見られない。

その他、平城京において人形木製品の出土地点としては、羅城門とその周辺、左京八条三坪境小路側溝 S D1155、右京八条一坊々間路西側溝 S D920などがあり、平城宮には南東隅東一坊大路側溝 S D4951、東大溝 S D2700などがある。平城京宮においては人形は旧流路より出土しており、奈良時代の主要な溝¹²からその多くが出土している。いま一つ押さえておきたい事実は「大和型土馬」と呼ばれる土製の馬形代を多く用いることである。地方では土製馬形は殆ど用いず、木製馬形を用いる。逆に平城京宮では木製馬形はあまり用いず、むしろ土馬を用いる。

兵庫県城崎郡日高町の但馬国府推定地周辺には、「祓所」とされる一連の遺跡がある。但馬国分寺跡川岸遺跡、瀬布ヶ森遺跡、そして姫谷遺跡等である。但馬国分寺跡第五次調査では寺域の東南隅の築地外側に溝が検出され、この溝の下層より人形6点、馬形1点、舟形2点、斎串等が出土した。川岸遺跡は¹³国分寺の北東約1.2キロのところにあり、シガラミで護岸した溝 S D01を検出した。このS D01は溝幅1.2~1.9メートルあり、S字に蛇行した流路跡とされる。このS D01より人形45点、馬形6点、斎串約80点等が出土した。瀬布ヶ森遺跡には国分寺の南西約500メートルにある。氾濫原跡を検出したが、その幅は40メートルを越える規模のものであった。下層より人形33点、馬形12点、斎串多数、刀形1点、舟形1点等が出土している。姫谷遺跡は国分寺西方約7キロにあり、河川跡と考えられる層より多量の木製祭祀具を出土した。人形23点、馬形15点、鳥形3点、斎串58点等が出土した。これらの「祓所」遺跡では小さな溝から大きな河川まで様々な溝より人形を初めとする木製祭祀具が出土している。木製馬形が多いこと、またこれだけ人形が多いにもかかわらず刀形は殆ど略されていることに注目したい。1987年度より日高町の勝町である出石町で砂入遺跡等の発掘が進み日高町に優る数の人形、馬形木製品が出土している。今後の資料整理を待ちたい。

以上木製人形が出土している主要遺跡を概観してみた。時代観はそれぞれ若干異なり、短い時代幅に収まる事例を引いた訳ではない。平城京宮の場合はほぼ8世紀代に収まるが、それでもかなりの時代幅を持っている。他の遺跡にいたっては8世紀後半より10世紀の幅がある。しかし、拙論における主眼はこれら古代遺跡より出土する木製人形の用途を考察することにあり、特に民俗事例を用いる以上、これ程の時代幅は捨象出来ると考える。

さて上記の資料及び他の律令期の木製人形の資料を概観したとき、次の3点を事実として確認しておきたい。第1点は板状をなしており、人の正面を型どっている。形状に関しては金子裕之氏等が律令期の人形を時代差をもって形態別に細分している。¹⁰ここでは、弥生時代までに見られる立体的な木偶ではなく、中世以降みられる横向きの板状人形とも違う律令期一般に言える「板状、正面」という形状を押さえておきたい。第2点はこれらの木製人形は旧河道または溝状遺構、つまり水が流れていた場所から出土しているという事実である。古代の木製品は当然旧河道や溝のような地下水位の高い層において初めて良好な保存状態が維持できるという指摘もあるが、その他低湿地等、木製品が遺存しやすい所からは木製人形はあまり出土せず、旧河道または溝状遺構より専ら出土する。第3点はこれらの遺跡における祭祀具は木製人形、木製馬形、木製刀形、木製舟形、斎車、土製馬形、人面墨書き土器、という祭料の構成をもつ。もっとも地域性が認められ、中央においては、土馬が専ら用いられ木製の馬形はあまり用いられず、ミニチュアカマドが頻繁に用いられたり、地方においてはこれらの祭料のうち一部を省略している実態が把握できる。つまり神明原・元宮川遺跡をはじめ全国の「律令制祭祀」の遺跡の普遍的要素として指摘できることは、板状で正面を向いた人を模した木製人形を他の祭料、木製馬形、木製刀形、木製舟形、斎車、土馬等とセットで用い、集落の中またはそばを流れる河または溝に流したという事実である。

3. 文献史料に見える祓いと人形

ここで古代より文献史料に残る祓い、大祓またはこれらに関連する人形の記録を管見ながら列挙したい。¹¹明治以降国家により統制されていった大祓神事は、古代特に律令期から間断無く伝承されてきた事実を確認するとともに、その変遷、人形の果してきた役割について検討したい。

現在、神社で行う「禊ぎ」「祓い」は、その起源を『古事記』に求める。「禊ぎ」は次のように、伊耶那伎命が黄泉国での穢を祓う場面をその起源とする。

「是を以ちて伊耶那伎命大神詔りたまはく、吾はいなしこそめしこめき穢き國に到りて存りけり。故、吾は御身の禊為む」とのりたまひて、筑紫の日向の橋の小門の阿波岐原に到り坐して、禊ぎ祓へたまひき。」

ここでは、死をイメージする黄泉国=「いなしこそめしこめき穢き國」へ入った穢を拭い去るために水の靈力を用いて「禊ぎ」が行われている。死穢を浄化するのが禊ぎである。一方「祓い」の起源はやはり『古事記』の須佐之男命の天津罪贖いの箇所とする。¹²

「是に八百万の神、共に議りて、速須佐之男命に千位の置戸を負せ、亦鬚を切り手足の爪をも抜かしめて、神やらひやらひき。」

須佐之男命は、天津国で犯した天津罪を贖うために自らの鬚を切り、爪を抜いた。つまり、我身の罪を贖うため、我身の一部を差しだしたのである。後、この「我身の一部」には我身の「罪」が託されることになり、「祓い」が実現する。もう一点ここで押さえておきたい点は、多田一臣氏が論ずるように「穢」は「禊」がれるのであり、「罪」は「祓」われるのである。もともとは、「穢を禊ぐ」「罪を祓う」という使われ方をされていたが、後に混用されてしまった。「祓い」とは本来「罪」を除去することを目的としていたのであり、祓柱、贋物、形代等に託して、その「罪」の解除を企図するものであった。後述する

が『延喜式』大祓祝詞で祓い流される対象は「穢氣」ではなく、あくまでも「罪」であり、少なくとも『延喜式』の成立期までは大祓により祓い除去されるのは「罪」であるという意識が人々の念頭にあったことは確かである。「祓い」の対象が不明確になり、平安時代になると『源氏物語』などにはまだ濃厚にその対象が「罪」であることが解るが、他の「祓い」を見ると「罪」を意識することが徐々になくなっていることが窺われる。

『日本書紀』の「祓い」の記載箇所を2箇所挙げると

「履中天皇五年冬十月・・・則負_シ惡解除。善解除。而出_シ於長崎嶋_{シマ}令_シ祓禊_{ハクシ}。」

「雄略天皇十三年春三月・・・狹穗元玄孫齒田根命窃奸采女山辺小鳴子。・・・(略)・・・齒田根以_シ馬八匹。大刀八口。祓_シ除罪過。」

「履中天皇五年十月条」では「車持君」の罪を数え上げた後、「解除」＝「祓い」を課している。また「雄略天皇十三年三月条」では采女を奸した「齒田根命」は雄略天皇の怒りに触れ、「馬八匹、大刀八口」の獻納と「祓除」を命じられている。このように罪に対しては、律令時代に入り律の規定により犯罪者に対し刑罰が科せられるようになったが、それ以前においては「祓い」が科せられた。青木紀元氏はこの「祓除」を科すという刑罰が一個人の勝手な処置で行われるようになったため、日本書紀「孝德天皇大化二年三月二十二日条」が示すように、「祓除」を科すことを禁止せざるをえなくなったと説く。大化年間前後「相手に対し難癖をつけて、無理やり罪を構え、『祓除』を強要して、『祓へつ物』の品物を横領しようとする」弊風が豪族の間に横行する。そして、天武、持統朝において整備されていく「大祓」はこれらの弊風としての「祓除」に國家の下に高い精神を賦与していくものであった。ここに「祓い」の起源とともに「大祓」に発展していく過程を読み取ることができる。

『日本書紀』の「大解除」についての記載箇所を3箇所挙げると

「天武五年八月・・・辛亥。詔曰。四方為_シ大解除。用物則國別國造輸_シ祓柱_{ハクツ}。馬一匹。」

布一常。以外郡司各刀一口。鹿皮一張。鍼一口。刀子一口。鎌一口。矢一具。稻一束。且毎戸麻一条。」

「天武十年七月・・・丁酉。令_シ天下悉大解除。當_シ此時_シ。國造等各出_シ祓柱奴婢一口而解除。」

「朱鳥元年七月・・・辛丑。詔_シ諸國大解除。」

「天武五年八月辛亥条」は「大解除」の初見と考えられている。勿論『古事記』仲哀天皇の条に見える「国之大祓」は除外して考え、この天武天皇の頃、国家の「大解除」として整備され、全国諸国にも命ぜられた様子が窺われる。

『続日本紀』には「大祓」の記載は多く、16箇所以上に上る。そのうち8箇所を挙げてみた。

「大宝二年十二月・・・壬戌。廢_シ大祓。但東西文部解除如_シ常。」

「天平元年二月・・・己卯。・・・(略)・・・長屋王昆弟姉妹子孫及妾等合_シ縁坐_シ者。不_シ問_シ男女。咸皆祓除。是日。百官大祓。」

「天平宝字二年八月・乙卯。遣_シ使大_シ祓天下諸國。欲_シ行_シ大嘗_シ故也。」

「宝龜六年八月・・・辛卯。大祓。伊勢美濃等國風雨之災也。」

「宝龜六年十月・・・甲申。大祓。以_シ風雨及地震_シ也。」

「宝亀七年五月・・・乙卯。大祓。以_レ災変屢見_レ也。」

「宝亀七年六月・・・甲戌。大祓京師及畿内諸國。奉_レ黒毛馬丹生川上神。旱也。」

「宝亀八年三月・・・辛未。大祓。為_レ宮中頻有_レ妖椎_レ也。」

「大宝二年十二月壬戌条」はこの「大宝二年十二月」三十日に大祓が執行されてより大祓が定例化したと考えられている箇所である。また私刑としての「祓い」の横行を禁じ、年二度に定期化した。「天平元年二月己卯条」は長屋王の変を治め、処罰を決定した後、文武百官に大祓をさせている。百官の中には半ば変に連座したが罪を免れた者もいたろうし、また今後この種の謀反が起らないように事前に「祓い」をしておく必要があったのだろう。これこそ「惡解除」(犯してしまった罪を祓うために行う祓い)と「善解除」(これから犯すおそれがある罪を祓うための祓い)がまだ混然としている状態を示すものである。「天平宝字二年八月乙卯条」は天下諸国に使いを出して諸国にて大祓をさせていることが解る。律令国家体制の中で、大祓は天皇、文武百官にとって重要な儀礼をして整備されていく。その整備のされ方は「國家の宗教的イデオロギー装置」として祭祀が精神支配のうえで不可欠のメソッドになっていく。宝亀六・七・八年にはそれぞれ「伊勢美濃等國風雨之災」「風雨及地震」「災変屢見」「旱」等天変地異のため大祓を盛んに行っている。特に「宝亀八年三月辛未条」では宮中に妖怪が頻りに出没するため大祓を行っている。

『延喜式』では、次の4箇所を挙げておきたい。

「六月晦日大祓 五色簿施 各二尺。緋帛一丈五尺。絹二疋。金装横刀二口。金銀塗人像各二枚。・・・
(中略)・・右晦日申時以前。親王以下百官会_レ集朱雀門。ト部読_レ祝詞。」

「木工寮 御贋料 金銀人像一枚(長一尺。広一寸)。料。鉄四両。・・・(中略)・・木人像。(長八寸。広八分。其面飾_レ金銀。)・・・(中略)・・鉄偶人卅六枚。(押金銀。薄各十六枚。無_レ飾四枚。)木偶人廿四枚。」

「左京職 二季大祓 凡六月。十二月大祓。預令_レ掃除其處。亦兵士禁_レ人往還。元日賀明。掃除薔_レ露。」

「大祓祝詞 ・・・官官_レ仕奉_レ人等_レ過犯_レ雜雜罪_レ。今年六月晦_レ之大祓_レ祓給_レ清給事_レ。諸聞食_レ宣。・・・(中略)・・過犯_レ雜雜罪事_レ。天津罪_レ畔放。溝埋。櫛放。頻時。串刺。生剝。逆剝。屎戸。・・・(中略)・・氣吹戸_レ氣吹戸主_レ云神根園底之國_レ氣吹放_レ。如此_レ氣吹放_レ。根國底之國_レ坐速佐須良比咩_レ云神。持佐須良比失_レ。如此_レ失_レ。天皇_レ朝廷_レ仕奉_レ官人等_レ始_レ。天下四方_レ自_レ今日_レ始_レ罪_レ云_レ罪不_レ在_レ。」

大祓の記録において『延喜式』より以降、祓いの人物がしばしば登場するようになる。「六月晦日大祓条」では金銀鉄製の「人像」＝「人形」が天皇の御贋物として用いられている。「木工寮」では御贋物として金銀鉄製の人物と同時「木人像」「木偶人」が用いられている。これが平城京宮で出土する木製人物であるとされる。「左京職 二季大祓条」では六月十二月の大祓に多くの「薔_レ露」が用いられたことが解る。「薔_レ露」とは現在の薬製の人物と考えられる。

「大祓祝詞」に関しては、次の3点について注目したい。まず、大祓の本義は「過ち犯しけん雜雜の

罪」を被うことである。天皇を初め百官の犯した罪または犯すであろう罪を大赦を執行することにより流し去ることが出来ると考えられたのである。ここでは後世の「穢氣」を被うのではない。第2に、罪の最も根本的な罪である「天津罪」「國津罪」を被う。「天津罪」「國津罪」に関しては諸学説があり筆者には検討する力はないが、「天津罪」は須佐之男が天津國にて犯した「畔放。溝埋。燔放。頻薄。」等の農耕作業妨害に対する罪であると考えられる。また「國津罪」は人間として生きていく上において犯してしまいがちな罪であるが、共同社会においては許され難い罪である。つまり村落共同体において決して許すことができない罪が「天津罪」「國津罪」とされているのである。第3に、この罪の消滅の過程である。この罪を速川の瀬に流すと、その瀬の女神、「瀬織津比咩」が、人々の罪を大海原まで運ぶ。大海原の女神、「速開者比咩」がこれを呑み込み、「気吹戸主」という神が罪を吹き飛ばしてしまう。そして最終的に根の国、底つ国にいる「速佐須良比咩」が、これらの罪をなくしてしまうという。水神としてよく祀られる「瀬織津比咩」を介し、罪は川を流れ下り、大海原の彼方または底にあるという根の国、底つ国に押しやられ、消滅してしまう。罪は、神の手を借りて、根の国=死者の世界=他界へと流し去られることにより、人は罪から解放されるのである。

平安時代に入ると祓いの人形の記録が多く見い出される。

「二季晦日御贋儀 神祇官預前_備其料物。鉄偶人卅六枚（金銀粧各十六枚無_飾四枚）	
木偶人廿四枚御輿形四具。挾_弊帛_木廿四枚金粧横刀二口・・・（中略）・・・培坏各二口・・・（中略）・・・乾皆退出解_除河上。・・・	『貞觀儀式』
「十二月十日、早旦、供御浴、午刻内藏寮官人供御贋物、（七種、五寸人形、盛折敷、居高坏御等身人形七枚、裏小籠一枚、リリ）、・・・（中略）・・・作物所（車七、木、鉄、錫、五寸人形各七、仰豊明、以紙可彫造作物所請取彫云々、・・・	『親信卿記』
「一応用神故事・・・（中略）・・・	
一所用物 檀百二十本 桃 九十枝 桑 九十本 薑注連三條 蕉注連三條 木綿十五斤 五色綿帛卅枚 同紙帛卅枚 金人形卅 銀人形卅 鉄人形・・・（中略）・・・	
寛平元年十二月廿六日	『宇佐八幡宮行事例定文』
「延久三年十二月、四年六月依_勅定_改-直御座敷_（東面）今夜殿上并大盤所料令_進_人形首拔等_、（入_柳筥_献_之、六月晦夜事獻）・・・	『江家次第』
「『はらいのさい物註文』」	
清祓祭物 合計三十五種	
御禰二百七十本 御鉢十五本 大刀三腰 御馬三疋 銀人形卅（高一尺） 金人形卅 (高一尺) 銅人形卅(高一尺) 鉄人形卅(高一尺) 青人形(高同上) 黄人形 (高同) 赤人形卅(高同) 白人形卅(高同)・・・（中略）・・・馬形七十具 牛形七十 具 散米三石 粟三石 砂三石 菩人形七十具	
右、件清祓祭物等、依官符旨、注進如件、	
保安元庚子八月	『豊後國柞原八幡宮祓祭物注文』

『貞觀儀式』には六月と十二月晦日に「木偶人」「横刀」「塙」等を用いた「解除」が行われており現

在でも宮中で行われていると云う大祓、節折の儀式そのものがここでは記載されている。『親信御記』『宇佐八幡宮行事例定文』『江家次第』各々の抜粋部分はいずれも六月または十二月の祓いの記録である。宇佐八幡宮にても作原八幡宮にても地方の神社において祓いを行うとき人形は不可欠な祭料であったことが窺われる。ここで注目しておきたいのは、『豊後國作原八幡宮祓祭物注文』における「清祓祭物」の種類である。「銀人形」「金人形」「銅人形」「鉄人形」「青人形」「黄人形」「赤人形」「白人形」が用いられるが、銀金銅鉄製の人形は『延喜式』以来、度々記録されているが、ここにある「青」「黄」「赤」「白」の人形とは何を指示するのであろうか。現在、静岡市内の神社における大祓神事の際、しばしば赤白2種の紙人形が用いられていることが想起せられる。また「馬形」および「牛形」が「清祓祭物」にあがっている。神明原・元宮川遺跡において、旧流路内より、木製馬形、土製馬形が多量に出土しており、牛形とも思われる土製品も伴っている。そしてもう一点ここで注目しておきたいことは、「菅人形」が「清祓」に用いられていることである。菅人形とは、菅、茅、蘆でできた人形である。現在の民俗事例においても、三重県松阪市日野町の八雲神社では、夏越しの祓いのときに茅で作った人形（蘆人形）を用いているし、その他神送り行事では、蘆人形が村の厄除を背負って焼き流されている。

『源氏物語』には平安時代の宮廷官人たちの年中行事が詳細に書き綴られている。この物語中「人形」が度々登場する。

「弥生の朔日に出で來たる巳の日、『今日なむ、かく思すこのある人は、禊したまふべき』と、なまさかしき人の聞こゆれば、海ずらもゆかしうて出でたまふ。いとおろそかに、歎障ばかりを引きめぐらして、この国に通ひける陰陽師召して、祓せさせたまふ。舟にことごとしき人形のせて流すを見たまふに、よそへられて、

知らざりし大海の原に流れきてひとがたにやはものは悲しき

とて、ゐたまへる御さま、さる晴れに出でて、言ふよしなく見えたまふ。『須磨の巻』『思うたまへわびにてはべり。音なしの里求めまほしきを、かの山里のわたりに、わざと寺などはなくとも、昔おぼゆる人形をも作り、絵にも描きとりて、行ひはべらむとなん思うたまへりにたる』とのたまへば、『あはれなる御願ひに、また、うたて御手洗川近き心地する人形こそ、思ひやりいとほしくはべれ。・・・』

『宿木の巻』

「かかる御心をやむる禊をせさせたてまつらほしく思ほすにやあらん、かの人形のたまひ出でて、・・・（中略）・・『いでさらば、伝へはてさせたまへかし。この御のがれ言葉こそ、思ひ出づればゆゆしく』とのたまひても、また涙ぐみぬ。

見し人のかたしろならば身にそへて恋しき瀬々のなでものにせむ

『東屋の巻』

『源氏物語』にはその文学の底流に「罪の意識」が流れている。物語の前半に主人公「光源氏」は、父帝の妃である藤壺との不義のため、後に帝となる子を孕ませてしまう。その罪の深さに戦慄しながらも、政敵の娘、鷹月夜との密通を重ねてしまう。これが発覚し、追われる如く須磨の浦へ流浪していく。この須磨の海岸で、陰陽師に「上巳の祓い」をさせる。そのとき「ことごとしき人形」を舟に乗せて流している。神野善治氏は、この「ことごとしき人形」を蘆または茅でできた人形と解する。この祓いが暴風雨を呼ぶ。恰も源氏の罪深さ故に、海神、根の国の神の憤怒をかってしまったかのようである。義

母との不義の罪は、自らの女三の宮と柏木との不義を招来する。この不義により、源氏は生来罪を背負つた子、薰を得ることになる。『源氏物語』後半の宇治十帖における主人公薰は、こうして罪深い出生に加え、多くの罪を重ねてしまう。深い恩恵の対象となった大君に強引に近付き、病死させてしまう。宇治の邸に薰は、大君の形代として「人形」を据えようとするが、大君の妹宮は、「人形」は邪氣を祓うべく川に流される不吉なものだと言い、薰を「人形」より引き離して、浮舟に引き合わせる。この不吉な「人形」が出会わせた浮舟も、ライバル匂宮と薰との激しい争奪戦の中、疲弊し、入水自殺をはかる。罪が罪を招来し、ますます増殖されていく過程がここにある。亡き理想の人を「人形」と呼び、その「人形」は、形代として、亡き人の靈魂を宿らせようとするが果たせず、薰の罪深さは、現世の浮舟という女性を人形の代わりとして瀕にがしてしまうという悲劇を生んでいる。ここにも罪が託され、流される不吉な「人形」が強く意識されている。

平安時代後半から末期にかけての記録に葬送に人形の使用例がある。

「寛弘八年六月廿五日　亥四刻御入棺、后宮儲君又他宮之御形代、各有縁人々、密々入、之例也。」
『權記』

「天喜元年六月十五日　今日依、仰參、京極殿、令、作、御形代、長八尺許、以、紙作、比々奈、令、著、束帶并冠、作、御衣切。」
『定家朝臣記』

「大治四年七月十五日　官々人形被、入、御棺。」
『中右記』

どれも、棺の中に、妻や子供の形代として人形を入れるという。民俗事例で確認できる「葬送の人形」と全く同じ機能を果たしている。

中世に入っても人形は祓いにおいて重要な役割を果たし続ける。

「毎月事

一日賢所供、神物。召、刀自、給、之。又内待為、御使、參。七瀬御祓。陰陽師進、人形、(入、折櫃、有、蓋書、其所并名) 女房令、着、色々絹、・・・(中略) ・・・次主上懸、御氣、撫、身。返、入折櫃、置、並盤所西御簾下。侍臣各取、之。向、河原。代厄具、之。帰參之後。主上着、御衣。

『禁秘抄卷上』

「嘉吉元年三月八日　上已祓也、如例、在貞朝臣昨日送人形、着衣副撫物今朝遣之、祓了撫物返給之也、十疋令下行了。」
『建内記』

「文明九年三月一日　御人きやうともいつる。おんやうの督はかりに御なてものそいていつる。」

「文明十五年二月廿九日　みの日の御はらゑの御人きやうともまいる。」

『御湯殿の上の日記』

『禁秘抄』は順徳天皇（在位1201～1221年）の著であり、古代の七瀬祓いが忠実に継承されており、現在の大祓にも通ずる普遍性をもつ内容になっている。特に現在の大祓（後述の「現行の大祓」参照のこと）との類似性を指摘しうる。『御湯殿の上の日記』には、初めて「人形」を「にんきやう」と読ませる箇所が出てくる。「人きやう」と読ませても機能としては、罪、祓を祓うことである。

近世文書はその量、膨大なため、筆者には、追い切れない。しかし、ここに三例を示して、事足りると考える。

「六月晦日 ○夏越えの祓 閏月あれば閏月に行ふ。橋場神明宮社前の川辺に執行あり。諸人群集す。亥の半刻に終る。」

佃島住吉明神社 芝神明宮 神田明神社 新川太神宮 鳥越明神社 五条天神社・・・

其外諸神社あり。神前祝詞を奏し、御輿興行あり。神事終りて参詣の輩茅の輪を越さしむ。

河辺に隔りたる所には、盤に水もりて、身曾貴川に比するなり。

○此日庶人形を以て衣類の形に切って撫でものとし、川へ投ず。『東都歲時記』

この『東都歲時記』が書かれた幕末には、少なくとも江戸市中の多くの神社で、茅の輪潜りを伴った「大祓神事」が行われていた。そして「紙を以て衣類の形に切り」という如く、室町時代から江戸時代初期にかけ、「御湯殿の上の日記」に見られるように「人形」に衣類を着せる風習が衣類のみを強調し、「撫物」の代表になったのが窺われる。この「紙を以て衣類の形に切り撫でもの」にしたものは、明らかに、明治以後、大祓神事で用いられる立雛型の紙人形に直結するものである。江戸時代後期の立雛と現在の浜松八幡神社等の紙人形とを比べてみれば、一目瞭然と思われる。また、「川へ投ず」ということから、現在地方の多くの神社が罪、穢を託した人形を近くのまたは、村境の川に流している習俗は、既に、近世には村々の社で行われていたことが了解できる。

また静岡の地方においても

「年中行事 六月三十日 府中新谷町少将井の社夏越祓有り。今宵安弁河原にて神司新谷氏是を執行す。町奉行、与力、同心、警護す。里人此神事を称して、祭りと云也。」

『駿國雜志一』

この史料が示すように、安倍川の河原で夏越の祓いが行われていた。大祓調査表が示すように、現在静岡市街地の神社の多くは、静岡浅間神社を筆頭に紙人形を安倍川に流している。

最後に浜松市有玉の高林家に伝わる通称『高林家文書』と呼ばれる文書の中に、次の2つの文書がある。どちらも国学者高林方朗（1769～1846年）が「舎人」として文中に出てくるため、記録された年代が寛政十一年（1799年）より天保の中頃（1836年前後か）と絞ることが出来る史料である。

「祓具・・・（中略）・・・大麻 散米 偶人八枚（檢 長八寸廣八分人面ヲ画 草にても作又紙雛ヲ用 紙ニテ裏 撫物トモツミ物トモ云） 解繩八筋 耆十六枚

解除之式・・・（中略）・・・

次散米 口伝 祓清 左祓清 右

次偶人 口伝 吉棄物凶棄物諸乃罪 吹掃清・・・

『大祓袖中記』

「大解除式・・・（中略）・・・

祓柱 馬一疋 祓柱 太刀二口 同弓二張 同箭二具 同鏑二口 同鎗二口

祓主行事

次ニ偶人撫物トモイフ紙ヨリヲ解テ偶人ヲ一枚ツゝ執持テロノホトリニアテ 例口祓詞ヲ唱ヘ偶人ノ首ヨリ下マデ右ノ手ニテ一撫シテ氣ヲ二息吹カケ息ヲ吹カケテハ祓机ノ前萬ノ上ニ投ル

ナルハ枚畢テモトノ如クニシテ机ニ返シオクナリ・・ (中略) ••

退下 祀柱 持退出 川瀬 投棄 流却

『大祓式』

『大祓中記』を見ると長さ八寸幅八分の桧で作った「偶人」を「撫物、ツミ物」と呼び大祓の祭料として用いているのが解る。長さ八寸幅八分という細長い形状、顔を描くこと、そして桧という木製であることは、古代の木製人形を連想させる。ただ、板状であったかどうかが大きな問題ではあるが。また『大祓式』を見るとこの「偶人」を口にあてて「祓詞」を唱え、「偶人」を撫で、息を吹きかける。そして祓柱一式とともに「川瀬」に流してしまう。古代の木製人形と現在の紙人形を結び付ける要素がここにはある。

4. 現行の大祓神事

現在でも大祓は多くの神社で6月30日(夏越しの大祓)、12月31日(年越しの大祓)に神事として催されている。静岡県下の主な神社で行われている大祓神事の概要は、「大祓調査表」にしめした。

まず地方で行われている大祓の典型として、静岡浅間神社(静岡市宮ヶ崎)の大祓神事(12月31日)⁽⁵⁾を紹介し、現在の大祓を考えるひとつの資料としたい。

静岡浅間神社は、大己貴命を祀る神部神社、木花開耶姫命を祀る浅間神社(以上二社同殿)、及び大歲御祖神社、以上三社を総称してこの名が付けられており、特に『延喜式、神名帳』に記せられている「神部神社」「大歲御祖神社」はその名の通り現在でも残り、また駿河國總社としても中心的に栄えた社である。

現在では、6月30日と12月31日の両日に社殿前の舞殿北隣に祓所を設け、大祓神事が行われる。年2回の神事の内容に差はないものの、現代の氏子の気質か、夏越しの祓いの方が納められる人形の数も参列する氏子の数も多く、派手で華美である。

まず大祓神事の準備段階として、紙の人形と御札の氏子への分配の方法、またそれを収集する方法と茅の輪の作り方について述べる。紙人形は11月に入って神官により用意される。男性用は白い和紙を、女性用は赤い和紙を型で押し切りつくり、祓い清め方法を書いた紙に包む。この包には下記の言葉が添えられている。

大祓について

大祓は神代以来のわが国の淳風美俗です。

毎年6月30日の午後4時と12月31日の午

後3時、一年の半期毎に罪や穢(罪=道

徳に反する行為、過失、災厄、穢=心身

のケガレ不淨)を祓い清めることにより、

もとの正しい心身にたちかえって、明日

からのさわやかな生活に溌剌と踏み出

ことができる訳です。大祓式に参列して

人形(形代ともいう)を神社に納め、茅

の輪をくぐりワクグリをすると、一切の



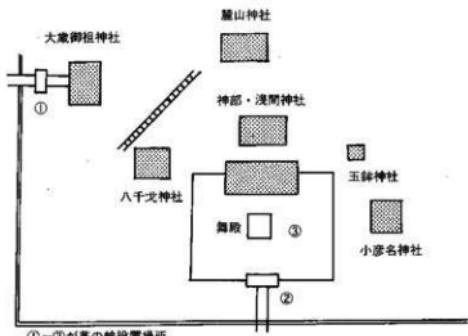
写真1 茅の輪くぐり(静岡浅間神社)

災厄を逃れることができるといわれております。皆さまのご参列を歓迎いたします。人形は、その人の代わりに罪や穢を背負って行ってくれるもので、この形代に氏名、年齢を書いてそれで身体をなで、息を吹きかけてから、包紙に包み、大祓の日の夜9時までに神社に納めて下さい。

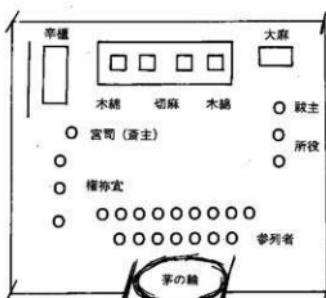
この人形と御札は、町内会長を経て氏子に配られる。現在、静岡浅間神社の氏子町とされる町は10ヶ町を数える。大岩本町、丸山町、宮ヶ崎町、西草深町、片羽町、安部町、馬場町、八千代町、葵町、錦町。これらの町の町内会長に、その町の氏子の戸数分の紙人形を御札をまとめて渡す。町内会では、それを6月上旬または12月上旬に各戸に配る。各戸では、配られた御札を年末までに神棚等に貼る。人形は、包紙に書かれている如く、男性は白人形に自分の氏名、年齢を書いて、身体を撫で、息を吹きかける。一体の白人形に家族の男性の名前が複数羅列されることになる。女性は、同様なことを赤人形にする。そして、これらの罪、穢が移された2体の人形を包紙に包んで、6月30日または、12月31日に各戸の代表が、浅間神社に納めに行く。大祓神事當日前でも神社は人形を受け取ってくれ、辛櫛の中に納め、神事を待つことになる。

静岡浅間神社では、夏越しの大祓のときも、師走大晦日の大祓のときも、茅の輪を作る。年2回茅の輪を作る神社は、県下でも、浜松八幡神社とここ2箇所程度と思われる。浅間神社では3箇所、大歲御祖神社神門、浅間神社樓門前、浅間神社本殿前の舞殿北隣に据え付けられる。この茅の輪は毎回、安倍川支流薬科川左岸の建徳の人々によって作られる、神事当日、午前中より建徳の氏子数名が薬科川の河原等で刈りとってきた茅を浅間神社に運び込んで、茅の輪は組まれる。建徳と浅間神社との関係は、注目される。

祓所は、本殿前の舞殿北隣に設けられる。入口に茅の輪が据えられ、四方に斎竹が立てられ、斎竹間に注連縄を回して15メートル四方の結界を設け、これを祓所とする。その中に第92図のように大麻、木綿、切麻、辛櫛（この中には既に氏子が直接持ってきた紙人形や古い御札が入っている）を配して、神事の準備は整う。



第91図 浅間神社社殿及び斎場配置図



第92図 祓 所

さて、いよいよ神事が始まる。下に大祓式次第を書き出した。

大祓式次第

当日、社頭の庭上に祓所を弁備する。

時刻、宮司以下祭員及参列者参入、祓所所定の座に著く。

次に、典儀、大祓式を始むる由を申す。

次に、宮司、祓を仰す。其の儀、祓主が宮司に一揖（一步進みて）宮司、目礼をする。

次に、祓主、大祓詞を宣る。

次に、諸員、切麻を執りて祓ふ。其の儀、奥義の指示に依り、切麻を執りて左、右、左と祓い舉りて元に復す。

次に、所役、大麻をとりて天の下を祓ふ。其の儀、所役、大麻を執り宮司以下祭員、参列者、天の下の順にて祓ふ。

次に、所役、木綿を裂く。其の儀、所役二名紙包を集めた後、三方の木綿を裂き、舉りて切麻三方、木綿三方、大麻を辛檀に納める。

次に、所役、祓者を執りて海河に向かう。

次に、典儀、大祓式を畢る由を申し、並びに茅の輪潜り神事に移る由を申す。

次に、茅の輪潜り神事を行う。

次に、大拝殿にて宮司玉串を奉りて拝礼。

次に、宮司、挨拶。

次に、退出。 ※大拝殿にて神酒配戴、御神供授与。

明治以降、国家神道整備の中で、洗練されていった大祓神事の典型をここに見ることができる。この神事の中で用いる「切麻」とは、紙包の中に、2センチ四方に切った和紙と、やはり2センチほどに細かく切った麻とが混じっているものを指す。これを参列者は、肩に左、右、左とかけ祓い、紙包で身体を撫で、息を吹きかけて、元にもどす。この切麻の入っていた紙包と氏子が持参した人形とを辛檀に納め、海河に向かうのである。また「木綿（ユウ）を裂く」とは、一般に八針神事と呼ばれているもので、『大祓祝詞』の中で「八針に取り辟きて」とあるように、八条に木綿を手で切り裂く所作をする。これは「天津罪」「国津罪」を細かく切り裂いて海河に流してしまうことを意味する。「所役、祓物を執りて海河に向かう。」ところで、控えていた椎栗宜たちが、人形、切麻の包紙、木綿の入った辛檀を肩に担いで、祓所より運び出す所作をする。実際には海河へそれから直接向かう訳ではなく、形式的に罪、穢を祓所より運び出すのである。その後、茅の輪潜りの神事に入る。茅の輪の起源は、しばしば『備後國風土記』の蘇民将来と巨旦将来の逸話をもって説明されるが、筆者には、茅の輪の出現と変遷については、把握しきれない。

こうして大祓神事が終了し、辛檀に入った罪、穢の集積された後、贋物が処理されて、大祓は無事終了となる。静岡浅間神社では、大祓神事を執行した当日の夜21：00頃、世話人が辛檀ごと安倍川の河原に出て、川の流れにこれらの贋物を投げ棄てる。安倍川の流れによって、罪、穢の託された人形は、大海原へと、根の国へと流されるのである。

第33表 大祓調査表

No	現神社名	式内社名	所在地	夏越祓い	筋走大祓	茅の輪神事	人形	人形の分配の仕方	人形一體	人形の処分の仕方	氏子町
1	松尾神社		浜松市元魚町	6/30	なし	6/30あり	白一種紙	10ヶ町に御幣1本とその町の氏子の戸数分の人形をまとめて届け、回してもらう。人形は、当日各自持参。御幣は、総代が持参。	1戸	10年前までは、表の浜(米津の浜)に流しに行く。今は焼却。	10町
2	浜八幡宮	許部神社か	浜松市八幡町	6/30	12/31	6/30あり 12/31あり	白一種紙	6月上旬、11月下旬に礎布祭を催し、12ヶ町の総代に人形と大麻を配ってもらうようまとめて渡す。各自当日、本殿前の辛羅に入れておく。	1戸	1/28の焼納祭で焼却	12町
3	県居神社		浜松市東伊場	6/30	12/31	なし	白一種紙	参拝に来る人に人形を配る。氏子をもっていないため、希望者に人形を直接渡す	1人	以前(10年前か)は前の浜(遠州浜)に、流していた。また時に、船頭さんに頼んで沖で流してもらった。今は焼却	なし
4	秋葉神社		浜松市三郷町	6/30	12/31	なし	なし	総代が大祓神事に加わるのみ	—	なし	—
5	蒲神明宮	大歳神社か	浜松市神立町	なし	なし	なし	なし	—	—	—	—
6	賀茂神社		浜松市東伊場	6/30	12/31	なし	白一種紙	東伊場には12の地区があり、それぞれの地区の氏子総代にまとめて渡し、各戸に配ってもらう。各自が当日持参する。	1戸	以前より(宮司の記憶にある限り)焼却	12地区
7	五社神社		浜松市利町	6/30	12/31	なし	白一種紙	6/30は、神事参列者のみに人形を配る。年末は、氏子世話役にまとめて渡し、各戸に配ってもらう。	1戸	10年前までは、天龍川に流していた。今は焼却。	6町 兼務社の町を入れるとかなりの数
8	白山神社		浜松市高林	6/30	12/31	なし	白一種紙	町内で注文を聞き、五社神社より人形を分けてもらい配布する。	1戸	五社神社へ納め、五社神社の祓いを受けた後、処分してもらう。	2町
9	高千穂神社		浜松市三方原	なし	なし	なし	—	—	—	—	—
10	井伊谷宮		引佐町井伊谷	6/30	12/31	6/30ある 12/31なし	昭和47年 頃までは 白一種紙	昭和47年頃までは、参拝者の中に希望する者に配る。	(1人)	—	氏子はない
11	浜名惣社	英多神社か	三ヶ日町三ヶ日	6/30	12/31	なし	白一種紙	三ヶ日町33区の各区長さんに人形をまとめて渡し、各戸に配ってもらう。各自持参の場合も区長が集める場合もある。	1戸	町内を流れる約鶴川に流す。	33区
13	府八幡宮	御祖神社か	磐田市中泉	なし	12/31	なし	10年 以上前は 白一種紙	現在では人形は用いない。	—	—	—

No	現神社名	式内社名	所在地	夏越祓い	御走大祓	茅の輪神事	人形	人形の分配の仕方	人形一體	人形の処分の仕方	氏子町
14	矢奈比売神社	同左	磐田市住吉町	なし	12/31	なし	なし	大祓の御札を希望者に配る。	—	—	—
15	住吉神社		磐田市住吉町	7月最終土曜日	なし	あり	なし	茅の輪くぐり神事のみある。	—	—	—
16	浜松天王宮	大歳神社	浜松市天王町	6/30	12/31	6/30あり 12/31なし	白一種紙	6月は、神事参列者に人形を配る。12月は、御札と一緒に氏子總代を通じて各戸に配る。各自または總代を通じて集める	1戸	昔(戦前より以前)は、天王宮の裏を流れていた天龍川の支流に流していた。今は焼却。	2町 3000軒
17	山住神社	芽原川内神社	禹智郡水窪町	6/30	12/31	6/30あり 12/31なし	白一種紙	御札で代用している希望者に配る。配り方は決っていない。集めない。	1人	各自祓い清めに用いた御札を各戸の側を流れらる(例えば水窪川、気田川など)に流す。	—
18	貴船神社		磐田郡竜洋町	6/30	12/31	なし 末社の津島神社では6/14に設ける	自祓の麻(竹串に糸と麻をついたもの)の用いる	總代が各町の世話人を通じて各戸に配る各自祓った麻は、頭社に納めず各自で処分する。	1戸	以前は天龍川に流していた。今でも流す人があるという。各自で焼却。	800戸
19	大頭龍社		菊川町加茂	8月の第4日曜日	なし	なし	なし(戦前まであつた)	詳細はわからず各自で人形を神社に納めに来た。	1戸	焼却した。	140戸
20	池宮神社		浜岡町池ノ山	6/30	12/31	6/30あり 12/31なし	白一種紙	夏越祓いの時は、希望の氏子に人形を配る。年末には氏子には配らない。	1人	紙人形を集め、茅で作った舟のような乗り物に乗せ、新野川に流す。	600戸
21	別雷神社		静岡市七間町	6/30	なし	6/30あり	白一種紙	各町内会長を通じて人形を各戸に配る。氏子總代が各戸の人形を集め、当日納める。各自持参するものもいる。	1人	現在は、境内で焼却し、その灰を用家の海岸へ流しに行く。以前は人形をそのまま用家の海岸で流した。	13町
22	井宮神社		静岡市井宮	6/30	12/31	6/30あり 12/31なし	赤白2種紙	各町の町内名簿に従って、町内班長さんに各戸に配ってもらう。各自持参する。	1戸	焼却。	25町
23	伊河麻社	同左	静岡市稻川	6/30	12/31	6/30あり 12/31なし	赤白2種紙	各町の氏子總代にまとめて渡し、各戸に配つてもらう。各自持参する。	1戸	大浜海岸に流す。	6町
24	静岡浅間神社	神部神社 大歳御祖神社	静岡市宮ヶ崎	6/30	12/31	6/30あり 12/31あり	赤白2種紙	町内会に御札と人形を渡し、各戸に配つてもらう。各自、当日までに社務所に納めに来る。	1戸	当日21時頃、世話人が安倍川の川原に出て流す。	10町
25	白鬚神社		静岡市	6/30	なし	6/30あり	赤白2種紙	各町の氏子總代にまとめて渡し、各戸に配つてもらう。各自持参する。	1戸	当日21時頃、安倍川に流す。	—

No	現神社名	式内社名	所在地	夏越祓い	御走大祓	茅の輪神事	人形	人形の分配の仕方	人形一休	人形の処分の仕方	氏子町
26	熊野神社		静岡市安東1丁目	6/30 なし	6/30あり	赤白2種紙	各町の氏子総代にまとめて渡し、各戸に配つてもらう。各自で持参する。		1戸	安倍川に流す。	-
27	小槌神社	小槌神社	静岡市掛原町	6/30 なし	6/30あり	赤白2種紙	各町の氏子総代にまとめて渡し、各戸に配つてもらう。各自で持参する。		1戸	当日21時頃、安倍川に流す。	14町
28	先宮神社		静岡市構内	6/30 なし	6/30あり	赤白2種紙	各町内会にまとめて渡し、各戸に配つてもらう。総代がまとめて納めるところも各自が持参するところもある。		1戸	今は焼却。 以前は、安倍川に流していた。	4町
29	草薙神社	草薙神社	清水市草薙	6/30 12/31	6/30なし 12/31なし	今はなし。 以前は赤白2種の人形あり。	各氏子に直接配っていた。		1戸	草薙川に流していた	8ヶ町 2800戸
30	美濃輪稻荷神社		清水市美濃輪	6/30 12/31	6/30なし 12/31なし	今はなし。 以前まで白1種の形あり。	現在は神事のみ残っており、以前のことは伝承されていない		1戸	巴川に流していた。	9ヶ町 1000戸
31	小芝八幡神社		清水市小芝	6/30 なし	6/30あり	白1種紙	各町の氏子総代にまとめて渡し、各戸に配る。今は総代がまとめて、当日の午前中までに神社に納める以前は、人形を入れた辛羅を持って街角をめぐると、その辛羅に各人が人形を納めていた。		1戸	今は境内で焼却する以前（昭和40年頃まで）は、巴川にかかる稚児橋の中央から巴川に流していた	20町
32	大井神社		島田市大井	6/30 なし	6/30あり	赤白2種紙	各町の西詫人を遣じて、各戸に配つてもらう。各自持参する。		1戸	人形の一部は大井川に流す。大部分は境内にて焼却する。	50町
33	栄田神社		焼津市田尻	6/30 なし	なし	赤白2種紙	各町内の自治会総代を通じて、各戸に配つてもらう。各自持参する。		1戸	今はまとめて焼却する。 昔は、各自で川や海に流していた。	16町
34	洗津神社	同左	焼津市焼津	6/30 なし	6/30あり	赤1種紙	各町の氏子総代にまとめて渡し、各戸に配つてもらう。各自持参する。		1戸	今はほとんどが焼却する。 以前は、前の海に流していた。	3000戸
35	三輪神社		岡部町三輪	6/30 12/31	6/30あり 12/31なし	赤白2種紙	各町の氏子総代にまとめて渡し、各戸に配つてもらう。総代がまとめて納めるが各自で持つて来れ人もある。		1戸	焼却する。 以前は、朝比奈川に流していた。	-
36	三島大社	伊豆三島神社	三島市	6/30 12/31	6/30あり 12/31なし	白1種紙	参拝者、祈祷者に人形を鄭送する。当日まで鄭送で送り返してくる。		1人	社の西を流れる疏水桜川に流す。	氏子なし

他の神社（静岡県中西部）の現行の大祓神事について、その特徴を若干、挙げてみよう。まず、氏子が明確にされている神社では、大半、大祓を行っている。神官等の不在により氏子と関係の切れている神社では大祓は行われていない。逆説的に言えば、氏子との関係を維持するため大祓神事は、各神社で大切にされている。大祓の紙人形と一緒に御札や御幣を各戸に配り、回したり、大祓神事に多くの氏子の参列を見、この神事のときに、少なくとも氏子総代は、すべて参集するという神社が多い。現在、特に市街地において、大祓は氏子と神社との精神的な結合に、祭典それ以上に大きな役割を果たしている。紙人形は白一種が多いが、静岡市特に、市街地において赤、白二種が多い。この赤白二種の人形を配る神社では、罪、穢を託した人形を安倍川に流す例が多い。人形一体をひとりで用いるか、家族全員で用いるのかの違いは、人形の配り方に関係がある。つまり、総代がまとめて神社より人形を押領して、氏子が各戸に頒布する場合は、各戸で一体の人形となる。氏子町が明確でなくして氏子と直接的関係を大切にする神社では、各個人に頒布することになる。節走大晦日の大祓は略されている神社が目立つ一方、夏越しの大祓は、各神社で盛大に行われる場合が多い。夏越しの大祓では茅の輪瀧り神事を伴う場合が多く、近世以降、特に町衆に好まれた夏祭りの中に茅の輪が採用され、現在に伝承されていると考えられる。最後に、罪、穢を託した人形の処分方法である。現在は焼納祭等で焼却される場合が多いが、海河に流される事例も多い。戦前の記憶がある神官に訪ねると、大半は近くを流れる川、村境を流れる川、その地方を滔々と流れる大河、または近くの海岸に、人形を流していたという。静岡市の別雷神社（静岡市七間町）では、人形を焼却し、その灰を遠路用宗の海岸まで流しに行くという。多くの焼却している神社の神官に尋ねると、昭和40年頃から市等の自治体の衛生課から指導があり、本来海河に流していくのが流せず、不本意にも焼却するようになったという答えが多く聞かれた。この別雷神社の場合、制限の中にも、回帰し、古えの慣習、主旨を守ろうという庶民の意識が、この灰を海へ流すという変則を生みだしている。

5. 「雜祭式典範」と明治以後の大祓

滋賀県犬上郡多賀町多賀大社の大祓次第と、静岡県三島市三島大社の大祓次第、または静岡浅間神社、浜松八幡神社のそれとかなりの部分類似している。大祓を行う多くの神社で、忘却しそうになると典拠している本が『雜祭式典範』（平岡好文著 昭和13年4月発行）と『神社祭式同行事作法附祝詞例文及解説』（神社本庁刊 昭和23年7月発行）の二著である。特に、『雜祭式典範』は、各神事の意味、起源等を詳細に記述しているため、現在でも多くの神官たちは、この本に依拠して神事を執り行っている場合が多い。近世までは、祓いについても、地方差があり、明治以降ほどの画一性は見られない。国家神道を国家における民衆の精神支配の方便とした明治以後の宗教政策があった。國家の指導による神社神道の統一が計られ、大祓も例外なく、国家の干渉のもと、全国でほぼ統一した次第になっていたものと思われる。その名残が、現在でも『雜祭式典範』の典拠として、大祓神事を行う神社の数が多い事実にある。明治以後の大祓神事について国家的統制の事実を若干押さえておこう。

明治4年6月太政官布告として「節折、大祓式の旧儀を復興し、天下一般に修行せしむべきよし布告」が出される。これにより宮廷内では、節折、大祓式が典故考証によって再興されるようになる。宮中では、応仁の乱の後廃絶されていたものを元禄4年6月に再興を期したが、旧の如くに戻らず明治に到つ

ているという。

明治5年6月教部省達「大祓の旧儀再興につき祓式制定」され祓式を一定にし、各府県に通達された。明治22年6月の官報にて「御節折及大祓御式」が国民に示された。これは、宮中での節折、大祓の式内容を知らしめたものである。一部を挙げる。

「大祓次第

午後一時三十分庭上ノ舗設並ニ祓物ヲ具備ス同二時掌典長以下着床 同時各勅奏判任ノ官員各一人

次掌典補二人御麻ヲ拂ケテ庭中ノ案上に置キ祓ノ稻ヲ拂ム

次掌典長掌典ヲ召テ祓の事ヲ仰ス。・（中略）・

次掌典大河道ニ向ヒテ祓却レト宣ル

次掌典補祓物ヲ執リテ大河に向フ

次各退出。」

明治27年12月の官報にも「御大祓御式」がしめされた。

大正3年3月内務省訓令が出され、その中で「官国弊社以下神社における大祓次第」が発表される。その次第は以下の通りである。

「当日、社頭ノ庭上ニ祓所ヲ弁備ス。

正面ニ新薦ヲ舗キ案ヲ立テ祓物ヲ置キ其前ニ祝詞ノ座ヲ設ケ便宜ノ所ニ地方官神職ノ座ヲ設ク。兩儀等ニ在リテハ、便宜ノ所ニオイテコレヲ行フ。

時刻、官司以下所定ノ座ニ著ク。

次、地方官所定ノ座ニ著ク。

次、主典切麻ヲワカツ。

次、官司祓ヲ仰ス。

次、祓宣祓詞ヲ宣ル。

次、諸員切麻ヲ行フ。

次、主典大麻ヲ行フ。

次、主典切麻ヲ撒ス。

次、主典祓物ヲ執リテ河海ニ向フ。

次、各退下。」

ここに村々の社まで漫透した大祓次第の原型がある。

昭和13年3月に『雜祭式典範』が刊行される。この中には「大祓式の意義、起源、節折の儀、諸祓具、大麻、切麻、麻の葉、形代（人形）、薈靈、撫物、茅の輪、解縄、大祓式次第、式次第説明」と詳細な説明を加えている。特に、「形代（人形）」の形状や、「茅の輪」潜りのやり方等、現在でも多くの神社でこの本の内容を模範としている。

昭和21年1月内務省訓令第一号により、今までの祭祀に関わる政令が廃止となる。

以上の事実より、政府により大祓神事の内容は統一されていったことが了解できる。しかし、ここで

いくら国家による精神支配の方便としての祭祀統一を述べたところで、現在、村々の小社にまで大祓事が残っていることの説明にならないように思われる。戦後、民主化政策が実施され40年以上経た今も、盛んに紙人形が配られ、罪、穢をこれに託して海河に流し、神社に参拝しては茅の輪を潜ることが平然と当然の如くなされている。戦後になって戦前の習俗の多くが消滅したにもかかわらず、大祓の心意は益々盛んである。やはり人々の深層心理の中に、古代より連綿と継承されてきた、人形代に罪、穢を託して祓い流すことが、自然と発露する民俗心意のメカニズムが出来上がっていたのではないだろうか。その民俗心意に近づくために、次に民俗事例の人形の機能を検討してみたい。

6. 人形の民俗事例概観

罪、穢を人形に託して流し去ってしまうという民俗心意は、現在においては、明治以後、国家統制されていった神社における大祓にだけ見られるであろうか。現在なお伝承されている民俗事例のなかに人形を用いるものが数多くある。そこで人形の民俗事例にまで拡大して「人形（ヒトガタ、ニンギョウ）」の機能を考えてみよう。ただここで予めお断りしておかねばならぬことは、小論中にて検討を加える事例は「罪、穢を人形に託して流してしまう」という機能が窺われる事例に留まり、これらの事例について検討したにすぎず、現在伝承される全ての人形を網羅的に扱ったというわけではないということである。

民俗事例の人形を概観するには、古くは「神送り」の視点から柳田国男が資料収集し、考察を加えている。最近の研究においては、神野善治氏の一連の論文が大変参考になる。神野氏は人形を機能により、4つに分類している。①人間の身体についている正常な魂を移す場合、②人間の身体についた罪や穢を移す場合、③死靈、怨念など恐ろしく厭しい靈魂を移す場合、④神や祖靈など平和善良な魂を移す場合の4分類である。①については「呪いの薫人形」に代表されよう。現在でも、神社の鎮守の森で発見される「丑刻参り」の薫人形はこの典型であろう。道教の厭魅呪詛の一形態と考えられる。先述の平城宮跡大膳職S E311出土の木製人形もこれに属する。②は、所謂「祓いの人形」と呼ばれるもので、大祓のとき用いられる紙製の人形の他、「流し雛」の人形、「あまがつ」、「ほうこ」、「七夕人形」、「葬送儀礼の人形」などが挙げられる。③は「虫送り」「神送り」の行事に登場する荒々しく勇ましい人形である。東日本を中心に分布する「ショウウキサマ」「カシマサマ」などや、西日本を中心に分布する「実盛人形」、「弥五郎ドン」などがこれに属する。④神像に代表される。仏像もこの範疇にはいるであろう。

この②と③との峻別は神野氏も論じている通り難しい。特に後述する「事例5」の「大倉戸のチャンチャコチャン」はこの分類では、③の「神送り」に入るが、機能上は、むしろ②である。また、「事例8」の「ショウウキサマ」は、その薫の体内に、願主の名と病む箇所を書いた紙が組み込まれている。これも明らかに③に分類されながら②の機能を有する。②と③とは場合によっては、ひとつの事例において複合して具備される属性と考えられる。②と③との間の機能上の相違を敢えて言えば、②は各個人または各戸（各家族）の罪、穢を「人形」に託するのに対し、③は集落全体の罪、穢を集積した形で「人形」に託する点、そして、②はただ専ら厭わしい対象なのに対し、③は守護神として村境に屹立し、災厄を祓う役割を担うという点が挙げられる。更にいえば②は個人的な「祓い」であるのに対し、③は集団的な「祓い」という性格を指摘しうる。ここに②から③への変遷を考えられる。個人的祓いが集落祭祀へ

と変遷した経緯と考えられないだろうか。これについては最後に述べる。

次に習俗として現在に残る人形の使用例を列挙してみる。下記に挙げた例が全てでなく、まだ多くの事例が残ることは容赦願いたい。

- (1) 大祓の人形・・・・・・紙製の人形、藁製の人形、木製の人形等
- (2) 小正月の人形・・・・・・人形道祖神、「カドニユウドウ」、「ドウラクジン」等
- (3) 神送り、虫送りの人形・・・「ショウキサマ」「実盛人形」「オカタ送り」「コト神送り」等
- (4) 離流しの人形・・・・・・上巳の祓い、「ヒイナグサ」
- (5) 七夕人形・・・・・・「タナバタ人形」「ネブタ人形」等
- (6) 重陽に節句の人形・・・・「ハンマサマ」「オカズラ人形」等
- (7) 葬送儀礼の人形・・・・人形の葬式、「友引人形」
- (8) 雨乞の人形
- (9) 子供の玩具、子供の守護神の人形・・・・「ホウコ」「アマガツ」等
- (10) 建築儀礼の人形・・・・棟上げ式の人形等
- (11) 地鎮祭の人形
- (12) 船靈祭

(2) は小正月の行事の中で重要な役割を演ずる人形である。神野氏の調査によると山梨県、東京都、神奈川県、静岡県、群馬県、長野県、新潟県に分布している。所謂「人形道祖神」として一括できる人形である。丸木に目鼻腕等を削り出した簡単なものである。家または集落の守護神として機能しながら、最後は焼かれてしまう場合が多い。(3) の神送り、虫送りの人形は現在でも盛んに行われている。もとは悪疫を人形に託して村境に追いやってしまう行事であるが、現在残る形は多様性を示し、その変化は顕著である。(3) に関しては次の民俗事例の検討で「大倉戸のチャンチャコチャン」、「ほうとう祭」「ショウキサマ」、「八日オクリ」、「鹿島ナガシ」について触れる。(4) は有名な鳥取県用瀬町の「流し雛」を初め、奈良県五条市南阿田の「流し雛」、そして静岡県小山町の「ヒイナグサ」等、近年事例は少なくなつたものの、依然「上巳の祓い」として三月の節句に雛人形を流す習俗が残っている。『源氏物語』の須磨の巻で挙げた「巳の日」の祓いもこれに相当したと思われ、(1) の大祓の人形と起源は一にするものと思われる。(5) の七夕人形は、代表的な事例として長野県松本市の「七夕人形」が挙げられる。しかし、それ以前の形態として注目されるのは長野県安曇地方の「川越人形」であり、これは木片や板で作った男女の人形に紙の着物を着せ、男女背中合わせにし、柴舟にのせ、藁に火をつけて川に流すというものである。また七夕人形は現在、秋田県、青森県を中心に行われる「ネブタ」と民俗心意を同じくするものと考えられる。精靈を記るために盆の前に罪、穢を人形、笹竹に託して流してしまう行事であったものである。(6) の重陽の節句の人形は雛人形と同系等のものと考えてもよいであろう。静岡県東伊豆町稻取の「ハンマサマ」、愛知県三河の海岸線沿い地方の「オカズラ人形」などを見ると、重陽の節句に人形を流したのがもとの形態であり、上巳の離流しはこの重陽の節句の人形流しの一つにすぎないと思われる。(7) は葬送の際、棺の中に入れられる人形で形代として入れられた。『権記』『定家朝臣記』『中右記』など文献にも見られる通り葬送儀礼の人形は古代にまで遡るものと思われる。「二人続けて葬式が出た時、三人目が出ないようにワラ人形をこしらえ、棺には入れず持っていき、墓地に埋めた。」という

事例も報告されており、形代としての機能は現在までも伝承されている。(8)の雨乞においても人形は用いられ、流されるか焼かれる場合が多かった。高谷重夫氏も指摘されているが雨乞の人形は本来神送り行事の人形の同じで、早魃をもたらす悪神を追い払うべくなされたのであろう。静岡県浜名郡北部では、次のような事例がある。昔、海坊主が陸に上がったが、旱り続きで海に帰れなくなり、村人に海に帰してくれたら雨を降らせるし、またその時は前もって海を鳴らし知らせると約し、海へ帰してもらうという伝説があり、これに基づき旱魃の時、海坊主の人形を作り木の枝に吊るし、雨が降ったらその人形を海に流すという習俗があったという。また雨乞には操り人形も屢もちられ、芸能化することがあった。(9)は赤子の枕元などに置き子供の守護神として、玩具として用いられた。これは室町時代には、既に「あまがつ」「はふこ」という名称があり、子供の穢を託して処分する機能を有していた。雛=「ひひな」と元は同一の機能を有していたと考えられている。(10)の建築儀礼の人形、(11)の地鎮祭の人形、(12)の船靈様はそれぞれ神野善治氏の詳細な研究があるので割愛させていただくが、いずれも元来同じ鎮魂儀礼に用いられた人形である。その他これらの人形に漏れた事例もあり今後の事例収集検討が必要であることは言うまでもないであろう。

(1)～(12)の人形の中で(1)～(9)は、その役割が終了した段階で、海や川に流されたり、焼却されたりすることが解る。そして各々の人形の機能中でこの「流され」「焼かれ」ることが大きな機能の一つであったことが解る。(10)～(12)の人形がその後も丁重な扱いを受けるとの対照的である。

(1)～(9)の人形には多かれ少なかれ、人間の罪、穢が託されており、流され焼かれなければならない必然性がある。

7. 人形の民俗事例の検討

次に、流され焼かれる必然性を持つ人形の事例を検討してみよう。

[事例1] 流し雛 (奈良県五条市南阿田)

この雛流しは吉野川を流れる五条市の南阿田の地で現在では4月の第1日曜日におこなわれ、春の風物詩となっている。もとは上巳の節句に行われていたといふ。雛が流される吉野川は経ヶ峰に発して北東流し、和歌山県橋本市で紀ノ川となる。雛流しの起源を持続女帝の吉野川にての修禊に求める。吉野川は淨めの川であり、雛流しの際に朗読される「願いの文」は人々の穢を雛に託し禊ぎをすることを物語っている。雛作りは以前は当日の朝、出来るだけ早く作るとよいというので夜明けとともに作り始め、朝早くから雛壇の前に祀られたといふ。現在では南阿田の母親たちが1ヶ月ほど前から近くの牛頭神社の一隅に集まり、竹舟づくりや紙雛折りをする。父親たちは当日、雛を流す「淨めの場所」に桃の花や菜の花を飾る。雛流しに先だって近くの浄土宗源龍寺空川院で雛供養が行われる。女の子たちは晴れ着で着飾り雛供養に立ち会う。男の子も参加を許されている。法要が終了すると子供たちは手に手に雛を持って吉野川に向かう。用意されている「淨めの場所」で注連縄をくぐり流れに向かって、代表の女の子が「願い文」を読んだ後、一齊に竹舟に乗った雛を清流に流す。伝承では、これらの雛は紀ノ川を流れ下り、加太浦にある淡島神社に流れ着くといふ。少彦名命を祀る淡島神社は婦人の病気平癒、子授けなどの靈験とともに豊饒の靈験も説かれる。

[事例2] 栄田神社の大駕 (静岡県焼津市田尻)

大祓調査表の33にあるが、特徴的であるため若干詳細を記述する。現在の大祓は6月30日に行われ別段特筆すべき特徴を備えているわけではない。人形は赤白2種の紙製であり、茅の輪潜りの神事ではなく、人形の分配の仕方も氏子の各戸へ氏子総代を通じて分けるという一般的なものである。ただ処分の仕方だが、現在では他社と同様にまとめて焼納祭で焼き上げてしまうが、戦前ごろまでは各自、各戸で6月30日前後の日に近くの川に流していたという。やはり市の衛生課の指導により河川の汚濁防止のため、配付主体の神社が責任もって集め、焼却することになった。ここで注目したいのは以前は各自めいめいが側の川に流していたということである。

これに類した処分の仕方として注目されるのは、静岡県周智郡水窪町山住にある山住神社の大祓である。調査表17にあるように、この社では御犬様の描かれた御札もあって人形の代用をする。各家々では山住神社に参り、直接御札を頂いてくる場合もあれば、総代を通じて受け取る場合もあり分配の仕方は一定していない。やはりこの御札で身体を拭い、息を吹き懸けた後、近くの川（水窪川、草木川、気田川など）に各自、各戸で流している。この神社では神社が主体となって集めない。なおこの水窪川、草木川、気田川の流域では今でも七夕の飾り物、盆行事に用いた供え物やオショロサマを川へ流すことを盛んに行っている。殆どの地域で川に流す習俗が廃絶している中、頗るにこれらの物を流すことを続けているのは特筆に値する。罪、穢が移された人形、御札等の処分の仕方の中に以前は各自、各戸で流していたという地域があることは確かである。

[事例3] 七夕人形（長野県松本市）

七夕流しは全国的に見られる行事である。現在でもよく七日の夕、色紙の短冊に歌や願い事を書いて笹竹に結んで、庭に飾り、8日の朝には七夕の笹を近接の川に流す習俗がある。松本市周辺および北安曇郡では、特に人形を用いる七夕の習俗が残っている。現在、松本市立博物館（日本民俗資料館）には、4つの形式の七夕人形が収蔵されている。（1）人形形式（2）紙雛形式（3）流し雛形式（4）着物かけ形式の4形式である。もともと源は一になると思われ、後世の変様が4形式に分岐したと思われる。（1）人形形式とは大祓の流れをくみ、毎年紙を切って、人形をつくり貼重ねていく人形である。（2）紙雛形式とは色紙を折ったり墨書で目鼻等を描くなどして作った平面的な紙雛の人形である。（3）流し雛形式とは、三月の雛祭りの流し雛と同じく、身の穢れを託して祓うもので、一年かぎりで川に流してしまう人形である。（4）着物かけ形式とは七夕に縁先や室内にかけられたもので、つるして飾る人形である。本来の穢れを祓う意味とのちには、衣類の虫干しも兼ねて、子供の着物をかけてつるし、季節の野菜やほうとうを供えるようになった。4形式のうち特に（3）の流し雛形式は東筑摩郡明科町南陸郷で採集されたもので、人形に各人の穢れを託し、犀川に流したという。ま



写真2 七夕人形(長野県松本市)

た安曇地方では川越人形があったと報告されている。これは木片や板で作った男女の人形で紙の着物を着せ、男女を背中合わせにし柴舟にのせ藁に火をつけて川に流した。

[事例4] カドニユウドウ（静岡県御殿場市沼田）^⑨

中部日本には小正月に丸木（特にヌルデノキ）で作った人形を各戸の門口や村にとって重要な場所（道祖神、村の祠など）に立てる習俗がある。この御殿場市沼田でも小正月の一連の行事に伴って「カドニユウドウ」と呼ばれる木偶が作られる。1月4日の初山の日に山に入り、小正月のツクリモノをつくるための材料となるカツノキ（ヌルデノキ）を探ってくる。（最近では雑木林が少なくなりカツノキが自生しなくなったため、このカツノキを手に入れるのも容易ではない。）このカツノキは小正月の行事を通じて頻繁に使われる。1月13日は朝より小正月のツクリモノを作り出す。アーボ（栗穂）、ヒーポ（稗穂）、ハナをそれぞれカツノキで丁寧に作る。3つをセットにしたもの「大神さん」、「エビスさん」、「荒神さん」、床の間にそれぞれ吊るす。「ナーリモソ」と呼ばれる成木責めの木をこれもやはりカツノキで作る。次いで「カドニユウドウ」一対（ひとつは「ハー」のカドニユウドウ、もう一方は「ムー」のカドニユウドウである）をカツノキで作る。それぞれ仁王様のように出来るだけ恐ろしい顔つきにしないと、邪鬼を追い払えないと筆使いも慎重に厳しい形相を墨書きする。このカドニユウドウを玄関の戸口の両脇に立てる。「ハー」のカドニユウドウは玄関に向かって右側に「ムー」のカドニユウドウは左側にそれぞれ立てる。14日は「ダンゴバナ」を作る。「大神さん」、「エビスさん」、「荒神さん」、「仏さん」、物置、倉庫、作業部屋などに飾る。この夜、サイト焼きが村の道祖神の前で行われる。カツノキの先を三つ又にして餅ダンゴを刺し火に焼って食べる。15日の早朝、実の成る木の成育を祈願する「ナーリモソ」という子供の行事がおこなわれる。これらが沼田に伝わる小正月の行事である。大正月で用いられた飾り物はサイト焼きの時に焼却されてしまうが、この小正月の一連のツクリモノは2月の初午の日に焼かれる。この初午の日、朝近所の御稻荷さん（この沼田の集落では旧家には必ず御稻荷さんの小祠がある。）にお参りに歩き回る。その日の夕刻、近くの畑にて小正月で用いたツクリモノ、アーボ、ヒーポ、ハナ、カドニユウドウ、ダンゴバナ、ナーリモソを焼却する。



写真3 カドニユウドウ（御殿場市沼田）

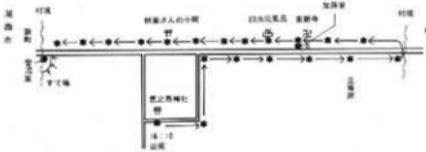
[事例5] 大倉戸のチャンチャコチャン（静岡県浜名郡新居町大倉戸）^⑩

静岡県新居町大倉戸にコト八日の神送り行事として「チャンチャコチャン」が今でも厳格に伝承されている。大倉戸は新居町の西端に位置し、集落の中央を旧東海道が貫通している。集落の北は丘陵がせりだし、南は遠州灘の荒波が打ち寄せる海岸になっている。地形上、東西の関係が特に注目される。西隣は新町、東隣は松山という集落になり、それぞれ村境に疫神を送る行事を行ってい

たと考えられる。この大倉戸ではコト八日の2月8日と12月8日に子供の行事として神送り「チャンチャコチャン」が行われる。

前日の7日、大倉戸地区の副区長宅で「デックラボー」と呼ばれる藁人形が作られる。藁束を作り、半分のところで折り曲げ、藁で縛るとこれが人形の頭と胴になる。それに棒と藁で腕を作り、人形全体を白い和紙で包む。2体分作り、1体は男、もう1体は女とする。男は男らしく、女は女らしく墨で顔を描く。現在の顔は、少女漫画に出てきそうな柔軟な表情だが、以前は、恐ろしい顔を故意に描いたという。区長は翌日デックラボーを乗せる舟「バンドーブネ」になる椿の枝を裏山へ採りに行く。

当の8日、午前中に、区長、副区長が恵比寿神社（集落のほぼ中央に位置する村社）に集まり椿の木のバンドープネに2体のデックラボーを結び付ける。やはり、裏山で探ってきた笹竹に御幣を付けた「オンビ」を呼ばれる煤払いの道具で、恵比寿神社を払い清める。払い終ったオンビは社西に立て掛けておく。各戸でもこの日の午前中に、裏山で探ってきた笹竹に各自で作った御幣（和紙に鉄を入れたもの）を付けたもの（「オンビ」）を用意し、このオンビで家中を煤祓いし、清める、そのオンビを各戸の門または門口に立てておく。午後3時過ぎるとこの大倉戸の小学生達が三々五々帰ってくる。ランドセルを置いた子供達は、自分の家のオンビと、近所で小学生の子のない家のオンビを持ち、恵比寿神社に集まってくる。恵比寿神社に大倉戸全戸のオンビが集まる。午後4時になると大倉戸の東新寺の住職がきて読経し、区長、副区長が参拝する。それが終わると、子供達はデックラボーの乗ったバンドープネを社殿前の広場に引き出す。鉦の音を合図に、「オークラドーノチャンチャコチャン」と大声をはり上げながら、手に持ったオンビでデックラボーを思い切り叩く。暫く叩いているとまた鉦が鳴り、叩き止め、バンドープネを引きながら町中を一団となって歩く。



第93図 大倉戸の神送り順路



写真4 バンドーブネに乗った
デックラボー(新居町大倉戸)

この道順は昭和63年12月8日の場合は、恵比寿神社をでて、旧東海道に出、集落の東村境（隣の松山の集落との境）まで行く。そして今度は旧東海道を西へ向かい、西村境へ行くそれが2月8日の場合は先に西村境へ行き、最後に東村境へ行くという逆コースを辿る。道中は旧東海道の辻々で止まり、鉦の音を合図に、何度も何度もオンビでデックラボーを叩く。東村境でひとしきり叩いた後、今度は、西村境（西隣の新町との村境）へ向かう。デックラボーは何度も子供達に激しく叩かれるため、この頃にはもう原形を留めない。立ち止まり、デックラボーを叩く場所は明確には決まって

いないが、昭和63年12月8日には、21箇所で叩いた。この場所は辻々であるが、立場跡、東新寺門前、以前の共同風呂前、秋葉さん小祠前というように、集落にとって重要な場所の前で叩いていたようである。後半になると子供達も疲れてきて声が小さくなる。すると区長が「そんな小さい声では厄が払えんぞ。」と励ます。西村境に着く頃は、陽も沈み、暗闇となる。最後ということで、子供達は有らん限りの力でデックラボーの残骸をこれでもかと打ち叩く。鉦の音を合図に、今度はパンドープネごと、西村境の小さな谷に投げ棄てる。以前は、この小さな谷の下に小川が流れていたことがある。また、以前は、表の海へも流していたことがあるとも語る人がいた。最後にオンビも子供達によって谷底に投げ棄てられて、この行事は終了する。

[事例6] ほうとう祭り（山梨県須玉町若神子）⁶⁰

「ホウトン祭」「ミソギ祭」「ドンドンビ祭」「ていねい（胎内）こぐり」などとよばれる夏越しの祭である。若神子は旧甲州街道の宿場町で大きく上宿中宿下宿に3分されている。この祭が行われる三輪神社は、下宿の全ての戸と中宿の南の一部の戸が氏子になっている。下宿は60戸あり、中宿は氏子戸数が30戸ほどある。ほうとう祭は毎年7月30日に行われる。当日午后になると氏子総代が三輪神社に集まり、夕刻までに祭の準備をする。等身大よりやや大きめのワラニンギョウをまず作る。昨年の秋の収穫の藁を用い、顔を墨書きし「仁王さま」のような形相にする。ハラガケを障子紙で作り、ここに祓いに用いた半紙を入れるようにする。藁で土俵のような輪（他の神社でみられる茅の輪とまったく同じものである）を作り、ワラニンギョウを、中心に社の庭の地面に置く。斎竹を四方に立て注連縄を回し結界を設る。参拝者用に、10cm四方の半紙を「ムシキリ」と呼ばれる水口に立てる札を用意する。氏子達は夕刻になると、各戸で作った「小豆ほうとう」を食べ、三輪神社に向かう。神官が祝詞奏上し、ムシキリ、祓いの半紙を祓うと、氏子ひとりひとりがこの2つを氏子総代からうけとり、ワラニンギョウのまわりの結界の中に入り、祓い用の半紙で身体をぬぐい息をふきかけ、その半紙をワラニンギョウのハラガケの中に入れ、ワラニンギョウに手を合わせて退出する。参拝者が途絶えたところで神官は大祓祝詞を奏上し、ワラニンギョウを大麻で祓い、各人の穢れを託した半紙をハラガケにつめこんだワラニンギョウはドンド火の中に投げ入れられ炎上し焼却される。以前（昭和40年代頃まで）は三輪神社に隣接して流れる須玉川へ夜半12時頃流しに行ったという。翌朝各戸では、もらって来た「ムシキリ」を水口立てておく。

[事例7] 八雲神社の大祓（三重県松阪市日野町）⁶¹

八雲神社は貞觀12年（870年）諸国に疫病が流行した折、悪疫退散のため京都の祇園社を伊勢の国



写真5 ほうとう祭り（山梨県須玉町）

使が勧請した七社のうちの一社であり、夏越祭は毎年7月25日に行われる。この夏越祭には茅で作られた1個体の人形と紙製の多数の人形が用いられる。当日まで紙人形（男女一対）は各戸に氏子総代を通して配られる。当日の夕刻神事が注連縄で結界した祓所内で行われる。祭壇には”ユウ”と”形代（茅の人形）”がそなえられて神事が行われる。神事の内容は一般的な大祓神事とほぼ同じである。ただ輪くぐり神事において、茅の輪は鳥居に固定されておらず、1回くぐるたびに上下がひっくり返される。またこの輪をくぐるとき、氏子総代の一人が祭場にあった茅の人形を手にもつてくぐる。その後の御饌祭が終るとただちに祓所で茅の人形が焼却される。次に参詣者用に、茅の輪が鳥居に固定されると、各戸では身の纏れを託した紙人形を三々五々八雲神社に納めに来る。納められた紙人形はその晩のうちに、焼却される。やはり以前には焼却ではなく近くの川へ茅の人形も紙の人形もながしに行ったという。

【事例8】ショウキサマ（新潟県東蒲原郡津川町大牧）^註

津川町大牧では新暦3月6日にとうや（または当前とも呼び、この人形作りの世話を代々交替でしてきている4軒の家のことである。）の家に部落中で集まり、藁で大きな武者人形を作り、弓、槍、大小刀、甲冑をもって武装させる。また股間には大きな陽物を付ける。藁は各家々より一束づつ持ち寄るものと、とうやが用意するものとでこの巨大な人形を作る。各家々より持ち寄られた藁の束は紙で包まれており、その紙には顔主の名と病む部分が記されている。人形を組み立てるとき各々のその相当する人形の部位に組込んで貰う。頭、胴、金玉、甲冑、帯、武具など分担した部を奥まつた室の床の間の前で組み立て、前の座敷で一同酒宴となる。酒宴が終わると、再び部分に分解し、これを村の東はずれの山の中腹にある小祠に持ち込み安置する。一年間ここに安置され参詣されるが、前年のものは新しいショウキサマが運び込まれる直前、堂から取り出し分解され、直下の崖下に投げ棄て去られる。これを「隠居させる」という。新しいショウキサマが運び込まれたところで前年の大小刀の内1本に長い注連縄を結んで祠の前の老木の枝に投げ掛ける。屈強な男が数回かけてようやく掛かると彼は皆から胸上げされる。

【事例9】八日オクリ（愛知県北設楽郡田峯西区南組）^註

「ヨウカオクリ」は奥三河、北遠、南信濃ではかなり盛んに2月8日または4月8日または6月8日に神送り、厄病神送りとして行われていた。現在ではほとんど消滅してしまっている。以前には藁人形を用いていたらしいが、今はその伝承すら殆ど追えない状況に立ち至っている。僅か奥三河の田峯に伝承が残り、若干事例を追う事が出来る。奥三河でも藁人形を用いて「ヨウカオクリ」をしていたのは大正年間までであったという。この頃までは少なくとも田峯では全域で行われていた。この日南組の20戸ある家々から12才以下の子供達が組長の家に集まり、ワラ人形である「デコロボー」を3体作った。組長宅では米のダンゴを作り子供達に持たせる。子供達は3体の「デコロボー」を先頭に一群を組み、鉢をたたきながら全員で大声を出し「ナンマンダー」と唱えながら村中をまず歩き西隣村である三都橋部落との境である首塚に向かう。この首塚の前にこの3体の棒のついたデコロボーを地面にさし三都橋部落の方に向ける。そして3体のデコロボーの足元に組長宅で用意してくれた米ダンゴを供え帰って来る。南組では「カミオクリ」とも呼んでおり、これによっ

て悪病送りが行われたといわれ、その後も佇立するデコロボーは隣村から侵入しようとする悪疫を討ちはらってくれるという。

[事例10] 島本新田の虫送り（愛知県中島郡祖父江町島本新田）

島本には6つの瀬古（小守の集落）がある。昭和30年頃までは5つの瀬古で盛んに虫送りが行われていた。今では18戸あるこの島本新田のみがサネモリ人形を用いる虫送りを伝承している。18戸の家で2戸づつ年番が回ってくるがその年番の家に各戸から人々が集まり、毎年7月10日過ぎから、サネモリ人形と馬を作りだす。人形と馬は小麦の稈でつくられる。稈以外には馬の尾とタズナはその年の田植の時余った苗を乾燥させたのを用い、馬の耳はビワの葉、馬の男根はナス、金玉は、サツマイモを用いる。夕刻には、馬上に乗ったサネモリ人形が完成し、年番の家の前に立て、人形の前に御神酒と塩を供える。各戸の人々は、ご馳走を持ち寄り直会したのち各戸で用意した大松明を持ってくる。提灯を先頭にサネモリ人形、太鼓、鐘、大松明の大行列をつくり、島本新田の南東のはずれに行き、ここをスタート地点とする。太鼓、鐘を打ちつつ村の田の畦を通って行く。大松明は大きく振り回され地面にたたきつけながら「ムシオーケレ」と唱えながら行く。村の田を一巡し、集落の北のはずれに鎮座する神明社にたどりつく。神明社の庭で松明の残りを集め、大きな焚火を燃やす。その中に馬に乗ったままのサネモリ人形を投げ込み、焼却する。その後神社で宴があり終了する。

[事例11] 鹿島流し（秋田県秋田市新屋町・同県平鹿郡大森町末野）

鹿島流しとか鹿島送りとかいわれる行事は、関東北部から東北地方に広く分布している。秋田市新屋町の鹿島流しはもと旧暦5月5日、のち月遅れの6月5日、現在は6月の第1日曜日に行われている。家々の軒には菖蒲とヨモギがさされ、子供のいる家では色紙で美しくつくられた鹿島人形を飾り柏餅や、笹巻を食べる。そして各町内の鹿島舟の大きな山車が出発するときには、家々から幼い男の子や女の子が鹿島人形を持ち出してこれを舟にのせてもらう。舟は次々に持ち込まれる鹿島人形であふれあざやかな原色の氾濫となる。やがて14ヶ町各一隻ずつの舟が町中を引き回され、最後には雄物川へ流される。また平鹿郡大森町末野では村人が「カシマサマ」と呼ばれる大きな藁人形を作り、門口の柱にくくりつけておく。これを6月9日の鹿島流しの日に集め、木の枝とムシロで作った舟に乗せて川へ流す。

以上の〔事例1〕より〔事例11〕までをそのケガレの流し方に注目しながら検討してみたい。検討する前に今まで用いていた「罪、穢」ということばを「ケガレ」に代表させようと思う。「2 文献の整理」で既に述べた通り、元来は人形に託し「祓う」対象は「罪」であった。しかし後世、「禊ぐ」対象の「穢」



写真6 サネモリ人形
(愛知県祖父江町)

と区別がつかなくなる。それは「罪」も「穢」も人々に災厄を齎らす元凶と考えられ、これらは様々な手続きと人々の懸念なる奉仕により祓えやり流してしまわねばならぬものであったが故である。ここでは別段「罪」と「穢」を使い分けているのではないため、民俗学で用いる「ケガレ」ということばにこれらを代表させても差し支えないと考える。

〔事例1〕の「流し雛」は上巳の節句に行われる祓いである。特に子供達が一人一人そのケガレを託した雛人形を舟に乗せて清らかな瀬にながしてしまう。流す場所は「浄めの場所」と呼ばれ、雛を流すという行為が「浄め」に繋ることを示している。また流しさる先は淡島神社であり、常世からの漂着神伝承が色濃く残る淡島信仰と考え合わせると、ケガレの漂着先は根の国、常世の国であるという心意がここには表れていると思われる。〔事例2〕の栄田神社および山住神社の大祓は、現在多くの神社で行われている大祓と大差はないものの、次の1点において異なる。殆どの神社においては各氏子に配付した人形は各自でケガレを人形に託した後、回収をし、神社でまとめて祓いをした後、やはりまとめて流したり、焼却したりする。ところがこの2社は大祓に必要な人形または御札を氏子に配付したまま回収しない。(前述のように栄田神社では今は回収している。)つまり、氏子が各自でケガレを託した人形、御札を各自で身近な川に流すのである。〔事例3〕の「七夕人形」のうち(3)の流し雛形式のものはほぼ同系統のものと思われる。これら〔事例1〕～〔事例3〕は流し方に共通性がある。あくまでも個人個人が主体であって、個人が自分のケガレを1体の人形に託し、それを個人として川に流す。確かに人形の制作、配付、流す場所の用意等は集落における共同作業であるが、それ以上に個人の「祓い」の性格が強い。

〔事例4〕の「カドニユウドウ」はケガレを祓うという心意が強くない。むしろ各戸の守護神としての性格が強く、単純にケガレを託して流しさってしまう一連の人形と機能を同じくすると考えられない。しかし、守護神として邪気を遮断する役割を終えた後、稻荷様の祭りの日に焼かれてしまうことよりケガレの集積されたものとして廃棄しようとする心意が窺われる。また長野県下水内郡栄村では同じ人形を道祖神として役割を終えた「ドロクジン」は正月15日夕刻に川に流されるとの事例もある。⁶⁵そして髪をはやし、出来るかぎり恐ろしげな形相を墨書きするのは、古代の木製人形または人面墨書き土器の人面の墨書きを想起させる。現在は意識されていないが、各戸のケガレを託し、また邪気のケガレをも背負い焼かれ、流される人形であったと思われる。〔事例1〕～〔事例3〕の主体が個人であった祓いがここでは家、各戸が主体となっており、各戸の守護神として、各戸に入ろうとする悪疫を門口で遮断する機能を果している。

〔事例5〕の「チャンチャコチャン」は神送りの典型を示している。各戸のケガレは「オンビ」に託され恵比寿神社に集積される。そしてその集落全体のケガレは2体の人形に託され、「バンドープネ」と呼ばれる舟に乗せられ、子供達に叩かれながら村向こうへ追われてしまう。ここには各戸のケガレが集落を代表する人形に託され祓い流されてしまう構造が読み取れる。〔事例6〕の「ほうとう祭り」の人形にも集落全体のケガレが集積される。〔事例7〕の「八雲神社の大祓」の1体の藁人形も同様である。ただここで注意したいのは、これらの集落のケガレを集積した人形はあくまでも忌み畏れられる対象であり、丁重にして残酷にこれらの人形は処分されてしまう。ケガレが集積した人形はそのケガレの集積と

いう莫大なエネルギーのため、人々を恐れさせ、そのあまりに恐ろしいエネルギーが故に畏敬の念でもつて見られる要素が垣間見られる。ほうとう祭のワラニンギョウは村人がそれに向かって手を合わせ、神官、氏子総代がぬかずき、拝礼を捧げられる対象であるがこれら【事例5】～【事例7】においては、村のケガレを集積する人形はケガレの集積が故に恐れられるが、その恐れと表裏一体に畏敬の念が込められており複雑な民俗心意を示している。

【事例8】の「ショウキサマ」もまた集落のケガレの集積して託される人形である。村人が各自病む部位を書いた紙をショウキサマの部位に託すという見事なまでのケガレの集積である。その巨大な人形は村はずれの小祠に安置され一年間信仰の対象となる。つまりケガレが集積した人形が守護神に転化するのである。ここには、新谷尚紀氏が説かれているように、「ケガレがさまざまな儀礼的手続きをもつてハラヘヤラレたとき、たちまちのうちに逆転して、威力あふれる神としてわれわれの前に立ちあらわれる、」という民俗の基礎構造^{脚注}が読み取れる。【事例9】の「八日オクリ」の人形は【事例5】の「チャンチャコチャン」の神送り行事と同類と考えられるが、「八日オクリ」の人形は村境で隣村に向かって屹立し、一年間村に訪れる悪疫を駆逐させる村の守護神の役割を果たすことになるのである。【事例10】の「サネモリ人形」も【事例11】の「カシマサマ」もいすれも巨大な人形を作る。そして「サネモリ人形」の場合は焼かれ、「カシマサマ」の場合は村境の守護神でありながら川に流される。しかし、これらの人はある一時期信仰の対象となり、供物が捧げられ祀られる。つまり守護神の役割も担っている人形である。これら守護神の人形の背景には、「『村人を代表する形代』が『疫病神の像』に、さらに『守護神の像』へと性格を転換させ」^{脚注}てきた変遷を読み取ることができる。

8.まとめ及び問題点

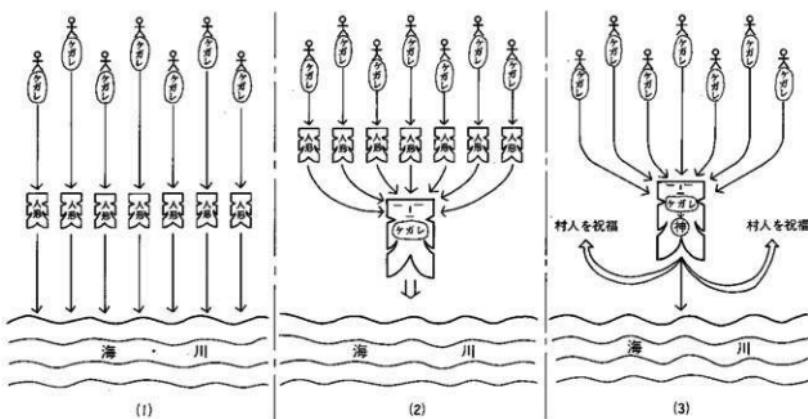
以上人形を介したケガレの流し方は次の3つに大きく分けることが可能かと思われる。

- (1) 各々個人（各戸でもよいだろう）のケガレを各々個人の人形に託し、その人形を各々個人によって祓い流（または焼却）してしまう。
- (2) 各々個人（各戸でもよいだろう）のケガレはまず各々個人の人形（場合によっては御札であったり、笛竹であったりする。）に託され、次に集落全体の人形が集められケガレを集積し、1体（数体でもよいだろう）の人形に代表してケガレを託しこれを祓い流す。
- (3) 各々個人（各戸でもよいだろう）のケガレは人形を介さずに、集落で代表して作られた巨大な人形に託される。この人形はケガレを流しきる役割をすると同時に、村の守護神として災厄から村をまもり、村人を祝福する。

【事例1】【事例2】【事例3】は（1）ケガレの流し方を示している。流し難も大藏の人形も七夕の人形（特に流し難形式）も、個人のケガレを一本の人形に託し、それを河川に流しちゃってしまう。ここではあくまでも、個々人が主体となりケガレを人形に託し流すことが行われる。ただ、個人が兄弟、夫婦、家族をまとめて「イエ」という単位でケガレを一本の人形に託し、流す場合も見られる。この家族「イエ」という複数の人の間のケガレを集積することは次の（2）（3）の集落「ムラ」のケガレを集積する一本の人形の萌芽とも考えられ、ケガレは集積するという指向性を示すものと考えられる。

【事例5】【事例6】【事例7】は（2）のケガレの流し方を示している。個人のケガレは各々そのケ

ガレを託すべく、個々に用意された人形や、オンベや、紙の半紙にまづ託され、ムラにおいて回収され一体（または複数）の人形にケガレが集積される。このムラのケガレが集積された人形をムラの責任として、さまざまな儀礼を経て焼却され、川に流される。ここでは（1）の個人がケガレを祓う主体であったものが、ムラがその主体にとって替わっている。経るべき儀礼も丁重で複雑であることがただ人々の忌み嫌うケガレを集積させたというだけでなく、ムラにとって、日常の健善さを維持すべく豊饒なる日常＝「ケ」の回復を目指す大切な儀礼になっていることに気づく。[事例6] [事例7] は（3）のケガレの流し方に共通するケガレの集積した人形に対し守護神とまではいかないが畏敬の念が看取できる事



第84図 人形を介するケガレの流し方

例である。

[事例8] [事例9] [事例10] [事例11] は（3）のケガレの流し方を示している。（3）が（2）と大きく異なる点はムラのケガレが集積された人形が、ムラの守護神に転化していることである。キョウキサマ、八日送り人形、サネモリ人形、カシマ人形すべて、ムラの守護神としての莫大なエネルギーをムラのひとりひとりのケガレの集積から生んでいる。ここで人形はムラの人々のケガレを集積し祓い流すとともにムラを悪疫から守る機能をはたしている。

以上ケガレを祓い流す人形を検討すると、明確になることがある。つまり、古代より嘗々と間断なく、人々は自らのケガレを人形に託し、ムラに近接する川に流してきた。そのケガレを人形に託す託し方は個人が主体となったものからムラが主体となったものまである。そのとき人形の機能として一体で一個人のケガレを背負い流すもの、一体でムラ全体のケガレを背負い流すもの、一体でムラ全体のケガレを背負い流してしまうと同時にその集積したケガレのあまりに莫大なエネルギーのため守護神に転化してしまうもの、の3種が把握できる。神明原・元宮川遺跡を初めとする古代遺跡から出土する木製の人形において、ケガレの流し方を検討してみると明らかに（1）つまり各々個人のケガレを各々一体の人形

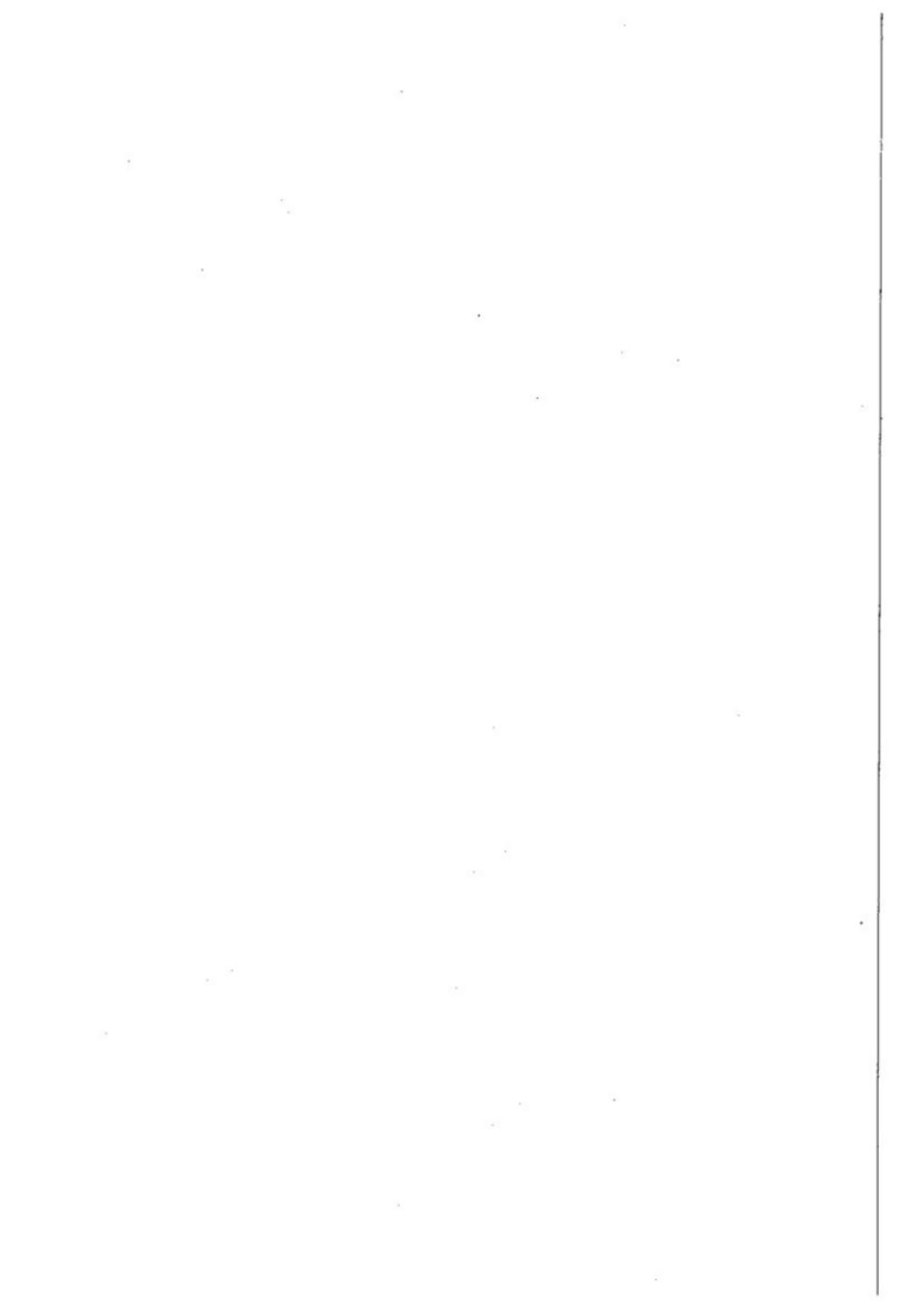
に託し各々個人でムラに近接した川に流したといえる。その理由としては一時期に多数の人形が投棄されていること。また人形が小型であり、個々人で容易に作成可能な形状をしていることなどが挙げられる。

最後に「ケガレ」の内容について補足しておきたい。波平恵美子氏はケガレとは「人にとて惡であるところの事柄、不幸や病氣、怪我、死、罪さらには不淨性を含むことがらをまとめて範疇化するところの觀念」と規定している。ここでは「ハレ」「ケ」「ケガレ」論について深く立ち入らないが民俗学でいうケガレの範疇が上記の規定であると考えられる。さらにその具体例として新谷尚紀氏は身体においては「糞尿、血液、体液、垢、爪、毛髪、怪我、病氣、死など」社会においては「貧困、暴力、犯罪、戦乱など」自然においては「天変地異、旱魃、風水害、病害虫、飢饉、不漁、不獵」等を挙げている。さらに新谷氏は「生と対立する死へのイメージを呼び起こすもの」と規定している。民俗事例の人形はすでに「ケガレ」が具体的なものとしてイメージされるものは少なく殆どが【事例6】【事例8】で具体的に身体のうち煩っている箇所がイメージされている。それ以外は「ケガレ」という概念で範疇化してしまっている。しかし『日本書紀』『続日本紀』の記載内容で検討したこと、古代においてはより具体的であったとも考えられる。

神明原・元宮川遺跡の祭祀を葬送儀礼と結びつける論考がある。神明原・元宮川遺跡の木製人形が託した「ケガレ」は死と規定できる可能性をここでは指摘しておきたい。尚、人形が託す「ケガレ」が具体的に何を指示するのかは、今後検討すべき重要な問題であろう。(中山正典)

- (1) 金子裕之「平城京と祭場」『國立歴史民俗博物館研究報告第7集共同研究「古代の祭祀と信仰」本篇』1985
- (2) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告書IV官衙地域の調査-』奈良国立文化財研究所学報第17冊1965
- (3) 「祭祀関係遺物出土地名表」『國立歴史民俗博物館研究報告第7集共同研究「古代の祭祀と信仰」附録』1985
- (4) 山形県 山形県教育委員会『使田遺跡第2次発掘調査報告書』1984
- (5) 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究会『大谷川I』『大谷川II』『大谷川III』1984 1987 1988
- (6) 浜松市教育委員会『伊場遺跡遺物篇1』1987
- (7) 浜松市教育委員会『伊場遺跡遺物篇2』1980
- (8) (財) 愛知県埋蔵文化財センター『年報昭和62年度』1988
- (9) (1)と同じ
- (10) (1)と同じ
- (11) (1)と同じ
- (12) (1)と同じ
- (13) (1)と同じ
- (14) 加賀見省一「但馬国府と歌詞-第二次但馬国府の所在をめぐって-」『高井健三郎喜寿記念論集 歴史学と考古学』1988
- (15) 兵庫県姫路市立高町教育委員会『川岸遺跡発掘調査報告書』1985
- (16) 金子裕之「古代の木製模造品」『研究論集IV』奈良国立文化財研究所学報 第38冊 1980
文献整理に当たっては泉武「人形祭祀の基礎的研究」及び北村哲郎「人形とは一人形の存在意義」『日本の美術』No.11 1967を特に参考した。
- (17) 平岡好文『雜祭式典範』東京京文社 1938
- (18) 多田一臣「天津罪・国津罪と『大祓詞』『語文論叢』9 1981
- (19) 青木記元「祝詞古伝承の研究」国書刊行会 1985
- (20) 西宮秀紀「律令国家の『祭祀』構造とその歴史的特質—宗教的イデオロギー—装置の分析」『日本史研究』283 1986
- (21) 同じ同じ
- (22) 高崎正秀「源氏物語論」『高崎正秀著作集第6巻』
- (23) 神野善治「人形送り」『講座日本の民俗6 年中行事』有精堂 1978

- 24 小山正『高林方朝の研究』高林方朝顕彰刊行会 1963
- 25 筆者調査1987 1988
- 26 文化庁文化部祭事課監修『宗教関係法令書』第一法規 1962 その他浜松縣居神社宮司三浦巖氏 清水市小芝八幡社宮司中路陽一氏等の御教示を得た。
- 27 柳田国男「神送りと人形」『定本柳田国男集』第13巻
- 28 同じ
- 29 神野善治「小正月の人形－中部日本におけるモノツクリの一つとして－」『小正月行事とモノツクリ』日本民俗文化研究所調査報告第1集 1978
- 30 竹折直吉『日本の民俗・静岡』
- 31 宮本常一「ひなとひなまつり」『月刊文化財』1974 3月号
- 32 鈴木栄三『日本年中行事辞典』角川書店 1977
- 33 柳田国男「年中行事観書－ネブタ考」『定本柳田国男集』第13巻
- 34 同じ
- 35 西角井正蔵編『年中行事辞典』東京堂出版 1958
- 36 神野善治「人形の葬式」『西郊民俗』第83号 1978
- 37 「沼津内浦の民俗」
- 38 高谷重夫『雨乞習俗の研究』法政大学出版局
- 39 静岡新聞社『まるさと百話』第6巻
- 40 松崎達三『雨乞習俗における”人形”』『日本佛教』54 1982
- 41 山田徳兵衛『日本人形史』角川書店 1961
- 42 神野善治「建築儀礼と人形」『日本民俗学』146号 1983
- 43 神野善治「舟置と樹靈－舟置信仰研究の課題－」『沼津市博物館紀要10』 1986
- 44 読光新聞社『郷人形の世界』1987 及び89を参照
- 45 筆者調査
- 46 筆者調査
- 47 筆者調査
- 48 筆者調査及び静岡県浜名郡新居町教育委員会『新居のこと八日行事』1985参照
- 49 筆者調査
- 50 筆者調査
- 51 佐久間繁一『北中部の歳時習俗 新潟県』明文書房 1975
- 52 山口健俊『日本の民俗・新潟』第一法規 1972
- 53 筆者調査
- 54 筆者調査
- 55 文化庁監修『日本民俗芸能事典』第一法規 1976
- 56 ケガレについては、波平恵美子氏、宮田豊氏、新谷尚紀氏、桜井健太郎氏等の労作を参照した。
- 57 同じ
- 58 新谷尚紀『ケガレからカミへ』木耳社 1987
- 59 神野善治「郷人形の民俗～境の神像の成立～」『企画展・境の神・風の神』福島県立博物館 1988
- 60 波平恵美子『ケガレの構造』青土社 1988
- 61 同じ
- 62 本報告書第V章第2節



第4節 神明原・元宮川遺跡出土の灰釉陶器と山茶椀

- 1.はじめに
- 2.神明原・元宮川遺跡出土の灰釉陶器・山茶椀
- 3.皿山古窯跡出土の灰釉陶器と山茶椀
- 4.生産地の動向
- 5.まとめ

1.はじめに

小論は神明原・元宮川遺跡から出土した土器のうち、とくに10世紀から13世紀の灰釉陶器、山茶椀について焦点をあて、2、3の問題を考えることとするが、その際、つぎのような資料操作の前提がある。

第一に神明原・元宮川遺跡のうち灰釉陶器、山茶椀が集中して出土したS R53、54、S R486の資料を取り扱うこととし、それ以外の遺構および単独出土例については原則として取り上げないこととする。ただし検討する遺物は流路内出土であり、流路の重複もあって、同じ河床からの出土であっても、古墳時代後期の遺物が併出しており、層位や資料の一括性を問題とすることは、ほとんど有効ではないという制約がある。そのため既成の編年観を基準とし、明らかに当該期以外と考えられる古墳時代から奈良、平安時代前期の須恵器、土師器については除外した。

第二に時間的制約もあって、全ての小破片についてまで実見することはせず、実測可能な大破片や完形品について観察するという方法をとった。そのため小論での集計値は厳密なものではなく、あくまでも便宜的なものである。しかしながら、データの傾向性はほぼ知りえると考えられる。

第三に小論で取り上げる資料は、従来、駿河地方でほとんど留意されなかつた当該期の消費地遺跡の土器群を取り扱うが、一般集落出土の土器群と異なり、器種構成の上で、貯蔵形態、煮沸形態の土器がきわめて少ないと特徴をもつている。同様に供膳形態のうち、土師器の占める割合がきわめて少ない点も指摘できよう。おそらく、供膳具主体の在り方は遺跡の性格に起因すると考えられる。そのため小論では煮沸器、供膳器の土師器は、検討を省略した。

つぎに分析の視点についてふれてみたい。小論の時間軸の設定であるが、県内における灰釉陶器と山茶椀の画期については、緒についたばかりの研究状況なので、あらかじめ各産地の窯式区分の統一や併行関係についての統一をおこなわず、大づかみに10世紀から11世紀の灰釉陶器、12世紀以降、13世紀代までを山茶椀として記述をすすめる。

さて神明原・元宮川遺跡出土の灰釉陶器、山茶椀は、静清平野に生産窯が確認されていないので、当然のことながら、他地域からの流通品である。これらの土器については胎土、焼成、色調、技法の肉眼的観察によって、ある程度まで生産地の識別が可能である。小論では灰釉陶器を大きく県内産（清ヶ谷窯と旗指窯の製品の岐別は困難であろう）、県外産と二大別し、さらに県外産については東濃、猿投・尾北窯など産地の同定できたものについては記載した。山茶椀についても県内の渥美・湖西窯、東遠諸窯、⁽¹⁾県外の産地の同定できるものとに大別した。無論、岐別が困難で産地比定できなかったものもある。

したがって、さきの時期区分にもとづき、10世紀から13世紀代では消費地としての神明原・元宮川遺

跡の中で灰釉陶器、山茶椀が、産地別にどのような在り方を示したかを検討し、あわせて陶器生産と流通の問題まで及ぶことが小論の主旨である。

2. 神明原・元宮川遺跡出土の灰釉陶器・山茶椀

S R54出土土器

宮川4区S R54は幅5.5M、河床最深部標高3.5Mを測る流路で、灰釉陶器11点糸切り未調整の須恵器瓶、綠釉陶器1点が出土した。これらの中には「中万」や「水」と墨書きされた土器10点が認められる。これらの土器は、ほかに齊車、馬形土製品などの祭祀遺物が出土しているところから供獻土器の可能性が高い。

出土した代表的な灰釉陶器をみると、椀2317は、口端部を外側に屈曲させ、体部が外側に開く形態で、やや崩れた三日月高台をもつ。底部の脇にヘラ削り調整がみられ、さらに底部内側の糸切り痕をヘラ削り調整で消している。施釉方法は刷毛塗りであり、明るい発色である。この椀については齊藤孝正氏によつて猿投産の黒笠90号窯式の椀であろうという指摘を受けた。また椀772は口端部を外側に屈曲させ、体部が外側に開く形態で、やや崩れた三日月高台をもつ。底部の脇にヘラ削り調整がみられ、さらに底部内側の糸切り痕をそのまま残す。施釉方法は漬掛けで、胎土に黒色粒子がみられる。これらの特徴から清ヶ谷窯、旗指窯などの県内産であると考えられる。椀2321は口端部を外側にわずかに屈曲させ、体部が大きく外側に開く形態で、三日月高台をもつ。底部の脇にヘラ削り調整がみられ、底部内側の糸切り痕をヘラ削り調整で消している。これらの特徴から県内産の可能性が強く、清ヶ谷窯における四番山窯式か、旗指窯のⅠ期かⅡ期（6-III-7、8号窯、14号、17号窯）に相当するだろうと考えられる。椀783は、口端部を外側にわずかに屈曲させ、体部が外側に開く形態で、高台は外側に開き、端部をわずかに膨らませたタイプの形態を呈する。底部の脇は横ナデ調整である。胎土はやや荒く刷毛塗りされた灰釉は所々にムラがある。県内産と考えられる。皿778は口端部をやや膨らせ、高台は外側に開き端部の面取りされた形態で、漬掛けされた灰釉は余り発色がよくない。底部内側の糸切り痕は未調整である。胎土は灰白色で緻密であり、焼成も良好である。猿投かその周辺の製品であろう。

以上のように、S R54から出土した灰釉陶器を概観すると、全体的には県内産と県外産ではほぼ互角の比率でみられるが、黒笠90号窯式段階では猿投産の灰釉陶器が、折戸53号窯式古段階ではよく実体が判明しないが、県内産が明瞭とはいはず、それ以降の四番山、旗指窯Ⅰ期かⅡ期（6-III-7、8号窯、14号、17号窯）の段階とそれ以後の段階では圧倒的に県内産の灰釉陶器が出土している。ついでながら、付け加えると在地産と推定される糸切り未調整の須恵器は、黒笠90号窯式までは残る可能性が指摘できよう。

S R53出土土器

宮川4区S R53は、確認面で幅8.1M、河床部の標高3.5Mを測る流路で、山茶椀、灰釉陶器など49個体が出土した。これらの中には「大」など3種類の墨書きの書かれた土器4点が認められる。土器のほかには箸状木製品が出土した。

つぎに出土した代表的な灰釉陶器、山茶椀についてみると、椀297は口端部をわずかに膨らませてその

まま丸く收める。体部中位、高台脇にヘラ削り調整が施され、底部の糸切り痕をヘラ削り調整で消す。漬掛けかと判断される薄い灰釉が施されている。高台は変形した三日月高台をもつ。焼成は良好で、色調は灰白色を呈し、県外産と判断される。瓶480は底部内面にナデ調整、体部下半に調整が認められる。胎土に荒く黒色粒子が含まれ、清ヶ谷窯、旗指窯の製品かと判断される。椀492は体部の大きく外側へ開く形態で、三日月高台を持つ。底部内面は糸切り未調整で、底部脇は横ナデ調整を施す。色調は茶褐色に近く、産地は不明だが、浜北窯の可能性も残る。椀(皿)306は体部上位が屈曲しながら外反する形態で、高台の形態は直角三角形に近い。底部内面は糸切り未調整であるが、高台の調整の際、周辺部に横ナデ調整を施すため、糸切り痕は周辺部が消されている。胎土はやや荒く、漬掛けの灰釉はうまく発色していない。これらの特徴から県内産の可能性が強いが、それ以上の産地は比定できない。清ヶ谷窯における四番山窯式か、旗指窯のIかII類に相当するだろうと考えられる。椀307は半球形の体部に口端部をわずかに外反させている。底部は糸切り未調整で先端のやや尖った三角高台を持つ。胎土はなめらかで、色調は青灰色を呈する。11世紀末から12世紀前半の東遠諸窯の製品と判断される。S R53ではこのタイプの椀が多い。椀505はゆるやかに外反する体部で、高台部の形態は台形に近く、端部をナデしており、モミ痕がつく。焼成は良好で、胎土は砂粒が多く荒い。色調は淡灰色で、以上の特徴から渥美・湖西窯の山茶椀と判断される。小椀466はわずかに内弯気味に丸く收め三角高台をもつ。また器高が低く偏平な印象のする形態を呈する。底部は糸切り未調整である。色調は青灰色で、胎土はわずかに砂粒を含む。東遠諸窯の製品と判断される。小皿363は器高が高く、口端部も外反する形態は比較する類例がなく、灰釉陶器の無高台の製品か、山茶椀に伴う小皿か判断を留保しておく。小椀299については灰釉陶器終末か初期山茶椀にみられる形態であるが、県内産の可能性が強い。

以上のように、S R53から出土した灰釉陶器、山茶椀を概観すると産地不明の製品を除外し、県内産で占められる。年代的には清ヶ谷窯の四番山窯式、旗指窯のIないしII段階から始まり、12世紀後半あるいは末という幅におさまりそうである。また灰釉陶器については県内産なかでも清ヶ谷窯、旗指窯の製品が多く、山茶椀の時期は11世紀末から12世紀前半には東遠諸窯の製品が、12世紀後半には渥美・湖西窓の製品が優位を占める。

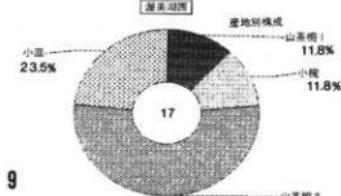
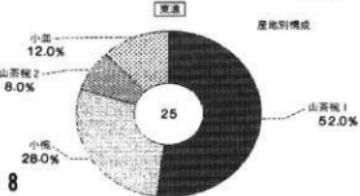
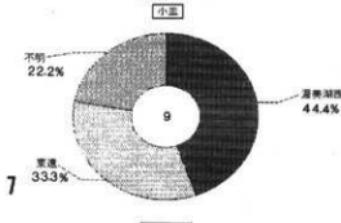
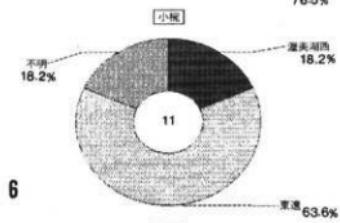
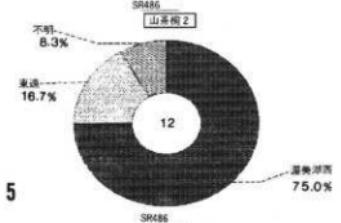
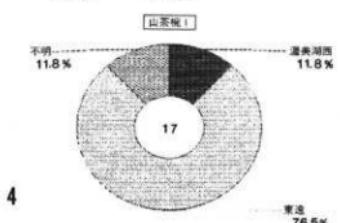
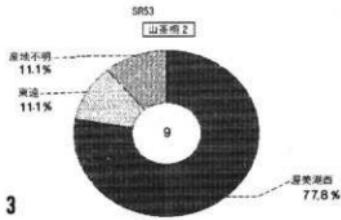
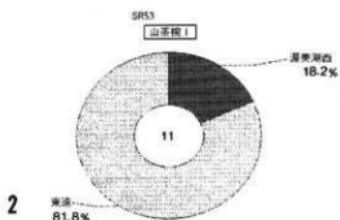
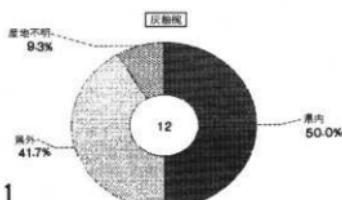
S R486出土土器

宮川3区S R486は宮川4区S R53、S R54に続く流路で、第2層の灰黑色粘土層から「南無大日」、「仁王」と書かれた木簡5点、箸状木製品とともに灰釉陶器、山茶椀が出土している。これら土器には、4種類の墨書がある土器41点が含まれており、たんに生活容器の廃棄というより何處かの宗教儀礼に伴う供獻あるいは供獻土器の廃棄という現象を現していると推定できよう。

S R486から出土した代表的な土器をみると、椀2090は、口端部をわずかに外側に屈曲させ、体部が外側に開く形態で、外側に開く高台をもつ。底部の脇に横ナデ調整がみられ、さらに底部内側の糸切り痕をヘラ削り調整で消している。施釉方法は漬掛けであり、明るい発色である。胎土はやや荒く、表面に黒色粒子の吹き出しがみられ、これらの特徴から県内産の可能性が強いが、それ以上の産地は比定できない。清ヶ谷窯における四番山窯式か、旗指窯のIかII類に相当するだろうと考えられる。椀2322は体部の大きく外側へ開く形態で、やや崩れた三日月高台を持つ。底部内面は糸切り未調整で、底部脇は横

凡例

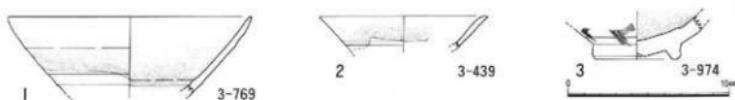
遺構名



第95図 產地別・器種別構成グラフ

ナデ調整を施す。施釉方法は漬掛けである。胎土は緻密で、県外産の可能性が強い。椀574は深椀タイプで底部内側の糸切り痕を横ナデ調整で消している。施釉方法は漬掛けかとも考えられるが、釉の発色のきわめて悪いか、無釉の製品かとも考えられる。胎土はやや荒く、表面に黒色粒子の吹き出しがみられ、これらの特徴から県内産と考えられ、白山2号窯式、旗指窯のIIあるいはIIIの段階の可能性が強い。椀2326は中挽で、口端部をわずかに外側に屈曲させ、体部の大きく外側へ開く形態で、やや崩れた三日月高台を持つ。底部内面の糸切り痕の再調整の有無は破片のため不明で、底部脇は横ナデ調整を施す。施釉方法は漬掛けである。胎土は緻密で、齊藤孝正氏によって東濃産の可能性が強いと指摘をうけた。瓶809は脚部をつけない形態で、底部をヘラ削り調整している。胎土は緻密で、明灰白色を呈する。東濃産の可能性が強い。椀2040は半球形の体部に口端部をわずかに外反させている。底部は糸切り未調整で先端のやや尖った三角高台を持つ。胎土はなめらかで、色調は青灰色を呈する。11世紀末から12世紀前半の東遠諸窯の製品と判断される。S R 486においてもこのタイプの椀が多い。椀638はゆるやかに外反する体部で、高台部の形態は三角高台で、端部をナデしており、モミ痕がつく。焼成は良好で、胎土は砂粒が多く荒い。色調は淡灰色で、以上の特徴から渥美・湖西窯の山茶椀と判断される。小椀534はわずかにふくらみをもち丸く収め口端部で、直角三角形気味の三角高台をもつ。底部は糸切り未調整であるが、高台部の調整痕が周辺を消している。色調は青灰色で、胎土はわずかに砂粒を含む。東遠諸窯の製品と判断される。それに比較して、小椀473は器高が低く偏平な印象を受ける形態である。底部は糸切り未調整である。色調は暗青灰色で、胎土はわずかに砂粒を含む。東遠諸窯の製品と判断される。小椀1970は口端部をわずかに面取りし、玉縁状につくられている。高台は三角高台で、器高が低く偏平な印象を受ける形態である。底部は糸切り未調整である。色調は淡灰色を呈し、以上の特徴から渥美・湖西窯の山茶椀窯の製品と判断される。小皿449は口端部をわずかに外反気味に丸く收める。また器高が高く深い形態を呈する。底部は糸切り未調整である。色調は淡灰色を呈し、以上の特徴から渥美・湖西窯の山茶椀窯の製品と判断される。

なおこの流路には中国陶磁がともなっており、別図に掲げた。1は体部から口縁部へ外側に大きくラップ状に開き、口縁部先端をとがらせている。見込み下部に傾斜変換点の段を有する。おそらく直立した高台をもつタイプであろう。体部下半は露胎で、青緑色の釉がかけられている。2は皿で体部から口縁部にかけて大きく開く。体部下半は露胎で、見込み下部に段をもつ。釉色はやや黄色味をおびた白色である。3は体部に櫛描き紋をもついわゆる同安窯系青磁である。高台端部を面取りし、底部内面が露胎で目痕を残す。いずれも11世紀末から13世紀初頭までの灰釉陶器や山茶椀にともなっても矛盾はないで



第96図 中国陶磁実測図

あろう。

以上のように、S R 486から出土した灰釉陶器、山茶椀を概観すると、つぎのように要約できる。

第一に灰釉陶器にあっては県外産では折戸53号窯式、東山72号窯式あるいは東濃、虎渓山1号窯式の段階の製品がみられるが、県内産では清ヶ谷窯の四番山窯式、旗指窯のI、あるいはII段階から出土するようになり、それ以降の灰釉陶器は県内産の清ヶ谷窯、旗指窯の製品が大半を占めるといえよう。

第二に山茶椀窯の製品であるが、11世紀末から12世紀前半において東遠諸窯の製品が優位を示し、渥美・湖西窯の製品を上まわる。ところが12世紀後半になると、渥美・湖西窯の製品が優位にたち、東遠諸窯の製品を上まわるようになる。

第三にS R 486出土土器の下限に関してである。この点は神明原・元宮川遺跡における土器供獻あるいは供獻土器の廃棄が行われた時期の終末に示していると考えられる。S R 486への宗教儀礼は、出土した小皿からすれば12世紀末から13世紀初頭まで続き、それ以後途絶えるようである。神明原・元宮川遺跡への宗教儀礼の終末の時期を現すものと推定しておきたい。

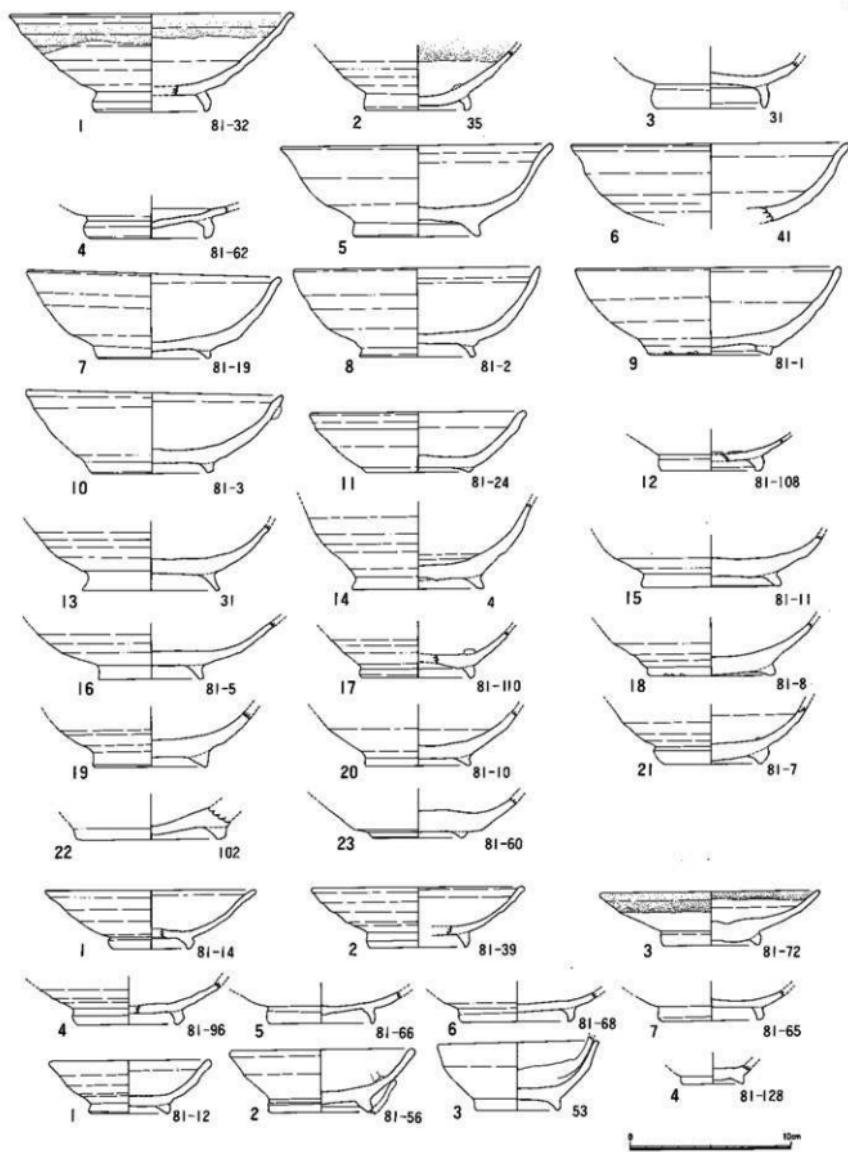
第四に灰釉陶器、山茶椀の墨書き土器の年代について述べてみたい。S R 486の墨書き土器には、S R 54、53と共に「大」、「みやいめ」など共通する墨書きが認められた。森下春美氏はこの墨書きの内容を検討した結果、同一人の手になる可能性、あるいは同時期に書かれた可能性を指摘した。⁽⁷⁾ 土器の型式をみた場合、これらの墨書き土器は12世紀中頃を前後する時期に収まり、短期間であるといえよう。

第五に灰釉陶器、山茶椀の使用痕について述べてみたい。山茶椀がどのような用途で使用されたかという問題に直接かかわってくる問題でもある。S R 54、53出土土器にもいえることであるが、見込み部分に摩耗痕が認められる製品が8、9割を占めた。ただし摩耗痕がみられないものも存在する。では摩耗痕は使用痕と考えてよいのだろうか。出土した灰釉陶器、山茶椀が祭器として使用されたとすれば、一時的に使用され、その都度廃棄されるともいえる。つまり一過性の容器である。しかしながら神明原・元宮川遺跡出土の灰釉陶器、山茶椀も含め、集落出土の製品と比較し、摩耗痕について大きな差異は感じられない。また墨書きの有無によって異なることもなかった。したがって、神明原・元宮川遺跡の山茶椀についても生活器の転用とも考えられるのではないだろうか。

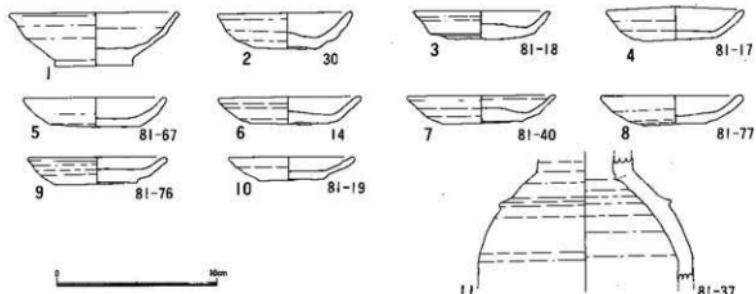
3. 皿山古窯跡出土の灰釉陶器と山茶椀

さきに神明原、元宮川遺跡出土の灰釉陶器と山茶椀についてふれた。その際、静岡県下の12世紀代の製品に横岡古窯群や皿山古窯群などの東遠諸窯の製品が多く認められていることを指摘した。ただし東遠諸窯は発掘資料の公表がきわめて少なく、一部、山村宏氏⁽⁸⁾、渡辺康弘氏⁽⁹⁾が、また消費遺跡の例として渋谷昌彦氏とともに発表しているほか、資料の提示は少なく、県下の中世窯として湖西窯に比較し、名称のみ先行している觀がある。

ところで、東遠諸窯は金谷町横岡古窯跡群（キツネ沢、ホロン沢、サン沢の小枝群に分かれる）、菊川町皿山古窯跡群のよう一ヵ所に集中して形成されるグループと相良町蛭ヶ谷窯、榛原町土器ヶ谷窯のように単独、もしくは数基で形成されるグループに大別される。もっとも中心となった横岡古窯跡群の状況が判明していないので、一概に東遠諸窯としての共通性は十分には指摘できないが、県下の中世



第97図 皿山古窯跡群採集陶器実測図1(椀・小碗)



第98図 皿山古窯跡群採集陶器実測図2(小皿・壺類)

窯としては湖西窯に匹敵する規模であり、さらに小論の論旨に深く関連し、灰釉陶器から山茶椀への転化をみるとことと産地別の構成を述べるに当たって必要となるので、採集資料ではあるが、資料紹介の意味をかねて横岡古窯群に続く規模の菊川町皿山古窯跡資料を提出し、本文の立論の前提としたい。なお、この資料は県立掛川西高校郷土研究部によって採集されたもので、在学中には足立を中心に、卒業後は後輩達によって整理されたものである。

皿山古窯群は、別名、長者ヶ原古窯群と呼ばれ、菊川町上ノ原の段丘斜面に所在する。灰釉陶器窯と山茶椀窯によって構成され、それぞれ別のグループを形成している。資料はなお、この窯跡群の存在について『静岡県史 第一巻』に記述がみられ、さらに昭和33年、静岡大学教育学部浜松分校歴史学研究部によって、3基の窯が発掘調査された。調査報告の公表がないので、詳細は不明だが、調査された窯は山茶椀窯であったようである。

では、採集資料について述べてみたい。資料のバラエティは椀、皿、小椀、小皿、長頸瓶、平瓦がある。椀1は体部が外反するタイプで、高台端部を内湾させた三日月高台を呈する。高台脇をヘラ削り調整を施す。胎土は荒く黒色粒子を含む。漬掛けの釉は明瞭に発色している。皿24から26は端部をややふくらませたもの、外反させたものがみられる。高台端部を内湾させた爪形もしくは三日月高台を呈するものと直立気味の両者がある。高台脇をヘラ削り調整を施すものもみられる。漬掛けの釉は明瞭なものと不明瞭のものが認められる。これらは皿山窯における灰釉陶器窯の製品であろう。

椀5、13、14、16、19は体部下半をややふくらませ、高台は三角形を呈する。粗痕は認められない。椀7、8、15、17、18、20は体部下半から口縁部に緩やかに立ち上がり半球形を呈する。高台は外側に開き不定形を呈し、粗痕が付着する。椀9は体部下半から口縁部に緩やかに立ち上がり半球形を呈する。高台はやや崩れた台形を呈し粗痕が付着する。椀23は高台の張り付けを底部の内側に近い位置でおこない、体部を切り放した平底の底面がそのままみられる。また高台端部を尖り気味にした低い粘土紐を巻き付け形だけの高台を付けている。

小椀31は体部上半から口縁部にかけて緩やかに外反し断面三角形の高台をつける。底部内面は糸切り痕をナデて消す。小椀32、33はやや器高が高く、外側に聞く崩れた三角形の高台をつける。

小皿35は器高が高く口縁部が外反する形態で、底部脇わずかに直立し体部に続く。小皿36は35に比べ

器高が低いが、口縁部を丸くおさめている。小皿37から43は器高が低く、偏平な形態を呈する。体部から口縁部にかけて直線的に開く。端部は丸くおさめている。小皿44はさらに偏平で薄くつくられている。

長頸瓶は肩部のやや下位に断面三角形の突体を巡らす。量産されない特殊な器種であろう。なお椀、皿、小椀、小皿は重ね焼されたことが観察できた。

灰釉陶器の窯は1、2基かもしくは数基と考えられ、四番山窯式に併行する時期のものが、短期間操業していたであろうと考えられる。しかもその後、灰釉陶器の生産は確認できず、地点を替えたところで初期の山茶椀製品がみられるので、皿山窯の生産は継続的な展開は認められずには断絶があると考えられる。

初期山茶椀と考えられる製品は、椀5、13、14、16、19のように体部下半をややふくらませ、高台は三角形を呈するタイプで、初痕は認められない。それに伴う小椀は、32、33と推定しておく。第一段階としておく。つぎの段階の山茶椀は椀7、8、15、17、18、20のような体部下半から口縁部に緩やかに立ち上がり半球形を呈するタイプで、高台は外側に開き不定形を呈し、初痕が付着し、丁寧につくられており、普遍的なタイプではないだろう。第二段階としておく。それ以降の製品は、椀と小皿の伴出關係が不明瞭なのであくまでも製品の型式分類に終始するが、大きくは第三段階とし、2分類に区別しておく。I類は椀9、10のタイプで体部下半から口縁部に緩やかに立ち上がり半球形を呈する。高台はやや崩れた台形を呈し初痕が付着する。小皿も器高が低いタイプの37から43が伴うものと推定できよう。II類は椀23のように高台の張り付けを底部の内側に近い位置でおこない、体部を切り放した平底の底面がそのままみられるタイプで色調も法量も他と異なる。小皿44あたりが伴うと推定しておこう。

こうしてみると、皿山第一段階の製品は形的には旗指窯の最終段階の12世紀前半代の20、21号窯とアザミ沢窯の中間的様相を呈している。第二段階は小椀から小皿に生産の転化が行われた最初の頃と推定される。第三段階は定形化、定量化のすすんだ小皿の段階としたい。

このような東遠諸窯の一つである皿山窯の製品の推移を神明原・元宮川遺跡出土の灰釉陶器、山茶椀と比較すると、神明原・元宮川遺跡の山茶椀は皿山窯第二段階までの製品がほとんどを占め、それ以降の製品はほとんど認められないといえよう。

4. 生産地の動向

灰釉陶器生産の中心地帯、猿投西南麓古窯址群（以下 猿投窯に略）ではすでに指摘されたように、折戸53窯式以降、陶器生産が急速に縮小する。それにかわって灰釉陶器の生産は東濃が大きく台頭し、生産の中心が移動した観を呈する。¹⁰

一方、折戸53号窯式以前の段階に、灰釉陶器の生産は拡散し、猿投窯以外にも生産地が出現するが、その生産は猿投窯の比ではなく、むしろ零細な規模といえよう。ところが東濃や三河、遠江、西駿河、など後発の生産地が、生産規模を拡大するのは、折戸53窯式以降であり、先にふれた猿投窯の拡散と呼ぶべき現象と軌を一にするといえよう。しばらく、小論に関係する範囲で、県内と及びその周辺の灰釉陶器窯から山茶椀窯の動向についてふれてみたい。

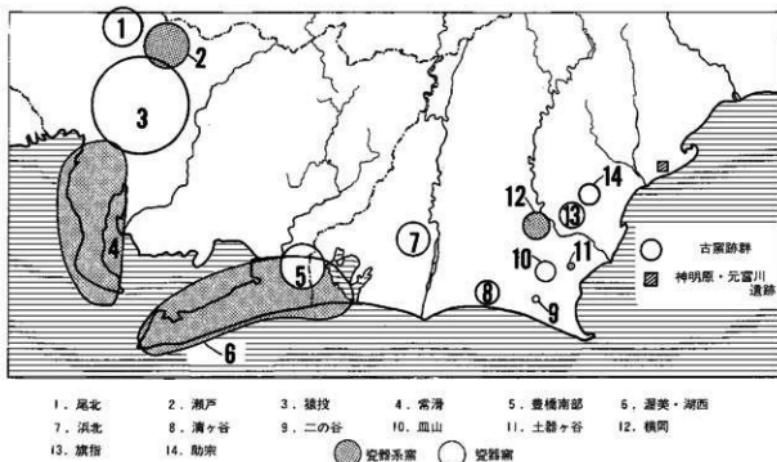
近年、浜北市吉名第5、6号窯の発掘調査が行われた。すでに吉名窯の名は出土した画花紋椀とともに

に知られているが、今回、第6号窯跡煙道部より出土した黒笠14号窯式の椀形態を写したともいべき角高台をもつ椀があり、一部の資料に体部内面に灰釉が掛けられているが、焼成は須恵器に近いものもある。ただし窯体部出土の資料と明らかに型式差があって、第6号窯跡の年代を示すものとは判断出来ないが、吉名窯跡群の成立年代と成立経緯を考える上で、きわめて重要な鍵となろう。いまのところ、猿投窯以外では東三河と同様に最も古く、灰釉陶器の生産が始まっていたといえよう。

また黒笠90号様式に併行すると考えられた画花紋椀は全体の生産量からすればきわめて特殊な例といえるが、椀で普遍的に生産されたタイプは、精選された胎土で典型的な三日月高台と外反する口縁部をもつ例から三角高台で糸切り未調整の漬掛けの例まであって、椀や皿を見る限り吉名古窯跡群では数窯式にわたって生産が行われていたと判断される。

すでに清ヶ谷窯では須恵器や国分寺への瓦を生産していたが、宮東窯では精選された胎土で典型的な三日月高台と外反する口縁部をもち、底部の糸切り痕をヘラで調整して消している灰釉椀が出現する。現状ではそれ以前の須恵器生産との連続性は確認できていないが、もともと清ヶ谷窯では遠江国衙に近いこともあって国衙工房的性格が強く、いち早く灰釉陶器窯が出現したと考えられる。

ところで古墳時代後期から遠江の須恵器生産の中心であった湖西窯では9世紀に入り、須恵器生産が急速に衰退し、9世紀中頃から灰釉陶器窯へは転化しないまま須恵器生産は終焉する。このような生産地の動向からすれば、遠江においては9、10世紀段階ある時期にあっては須恵器や灰釉陶器が多器種を一定量生産するためのもので、日常容器の一翼を担うために生産されたものとはいはず、量産を指向する要素は弱いといえよう。一方、清ヶ谷窯では四番山窯式、白山2号窯式段階になると生産が拡大されるようになり、旗指窯、助宗窯の灰釉陶器生産も開始される。前時期とはやや異なる様相を呈している。製品をみると、もはや精選された胎土ではなく生地そのままといえる荒い胎土で灰釉の発色も悪い椀、



第99図 器物・瓷器系陶器の生産地

皿主体の製品が焼成されている。こうした多数を占める製品と共に長頸瓶や陶甕（陶甕は日常的に文書を処理する場を前提にしていたと考えられる）、瓦など特殊な階層や特定の場所を指向した製品も生産している。駿河西部においても助宗窯、旗指窯が清ヶ谷窯四番山窯式に併行する時期に入り、成立したと考えられる。こうした遠江、駿河における灰釉陶器生産が開始された時期の生産形態が、何を指向していたかを考えると、地方官衙主体の生産形態が浮かび上がってくる。

つぎの段階にはいると、あらたに吉名窯の周辺で、地点を異にする灰釉陶器窯が成立するが、椀皿主体のせいぜい数期単位の小規模な窯業が分散している。一方、清ヶ谷窯では白山2号窯期にはいると、それ以前と異なることなく、各支谷に灰釉陶器窯が認められ、継続的な発展が考えられる。また旗指窯では22号窯期の窯が量的に増加し、つづいて駿河助宗窯においても灰釉陶器窯の生産が継続していた可能性が強い。ただし助宗窯に関しては、表面採集に基づく分布調査であるので、詳細は検討できないが、遠江の湖西窯や清ヶ谷窯と同様に律令期には須恵器生産が行われ、国衙工房的性格が考えられるので、須恵器生産と灰釉陶器生産が、技術的な系譜は別としても連続的な生産としてが考えられるかが課題であり、評価の分かれ目であろう。しかしながら、灰釉陶器窯の生産では駿河にあっては旗指窯が主体になったことは想像に難くない。

ところでその後の展開であるが、浜北窯では讓栄窯（森島窯とも呼ぶ）椀、小碗、長頸瓶、短頸壺が焼成されている。1、2基の小規模な生産と考えられている。また清ヶ谷窯では守屋雅史氏の樹木ヶ谷、釜ヶ谷窯式白山2号窯式以降として設定されているが、採集資料で点数、完形品も少なく、実見したところ白山2号窯式との駿別も困難で、窯式として安定性を欠くとの印象をえた。ともかく清ヶ谷窯では白山2号窯式以降、急速に衰退したことはほぼ間違いないであろう。さらに旗指窯では20号窯期（6-II-1号窯併行）、21号窯期（8-I-2号窯期）に入り、生産規模は前時期に比較し、縮小した。小笠町二ノ谷窯もこの時期と判断される。⁶⁵

いずれにせよ灰釉陶器窯が遠江、駿河をとわず、浜北窯、清ヶ谷窯、旗指窯というように規模の大小を問わず、一定の地域に集中することが多數であり、例外的に菊川町皿山窯、小笠町二ヶ谷窯、金谷町釜谷窓窯が、単独ないし数基で存在するが、これらはなんらかの理由で、短期間、出づくりの形で生産されたと考えられ、窯場としての継続的な性格はもたなかつたものと判断したい。

つぎに山茶椀窯の生産について述べることとするが、その前提として、山茶椀と灰釉陶器の移行期や研究の視点についてごく簡単にふれてみたい。とりあえずは本場、尾張地方の研究史をふりかえって、問題点を探ることとしたい。

第一には昭和10年の赤塚幹也氏をとりあげてみたい。氏は「陶器製作史概説一」『陶器講座 第6巻』の中で山茶椀窯の製品を山坏、小坏として斎翁（須恵器）末期に誕生したとし、その成立を灰釉陶器に求めた。さらに氏の所説は『瀬戸市史 陶磁史編一』にまとめられ、山茶椀の変遷を上手、中手、下手の三階級にわけ、さらにその中を各3段階の計9段階に細別した。近年、藤沢良祐氏は「瀬戸古窯址群1」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要1』で赤塚氏の考え方を継承し、独自の編年案をまとめた。⁶⁶

第二に樋崎彰一氏は猿投窯の成果や常滑、渥美の調査に基づき、山茶椀窯の成立を中世的窯業の成立とした。第三に田中稔、久永春男、杉崎章氏らの考え方をとりあげてみたい。氏らの考え方には、ほぼ共

通の理解の上に成立しており、尾張、三河の窯出土資料に基づき、椀、皿を大づかみに3時期にわけ、それぞれに過渡期を設定した。年代観では熱残留磁気による年代測定を重視している。^註

これらの研究史をふりかえると、藤沢良祐氏が指摘するように、椀、皿の灰釉の有無では解決できない形態変化を無視するわけにはいかない。しかしながらこうした型式論のみをもって中世東海地方における窯業生産を律しきれるか再検討する必要があろう。ところで檜崎彰一氏はその所論の中で壺、甕、擂鉢の三者の出現と椀、皿窯の存在を東海地方における中世窯業の成立とみた。また別に瓷器、瓷器系陶器の東濃をはじめとする各窯業地帯でそれぞれ共通する椀、皿窯と別に特色のある器種を生産しており、いわば、普遍的部分と特殊な部分が存在する。以上が研究史を概観した際の主な論点であろう。

問題を遠江、駿河における山茶椀窯の生産に引き戻してみたい。かって、湖西中世窯についてふれた際、早稻川窯の中に渥美、湖西窯における成立期の山茶椀を設定したが、それ以外の窯場では良好な資料に恵まれず、単に窯業集団の系譜と椀形態や窯構造の差異をもつ東遠諸窯（東遠系と略）の存在を指摘したにとどまった。さて灰釉陶器窯としての旗指窯は東遠諸窯の成立に深く関係するが、21号窯期（8-I-2窯期）以降、前筋で指摘したように、おそらく窯業集団は、旗指窯の終焉とともに横岡古窯群への移動が想定される。21号窯期（8-I-2窯期）の製品以前においても、22号窯期に椀、皿の無釉化がすすみ、20号窯期においては、ほとんど皿から小椀への転化し、ほとんど椀、小椀専用窯に近い様相を呈している。つまり長頸瓶、短頸壺、大平鉢、無釉甕、耳皿、という器種が例外的に生産される体制に徐々に転化していく状況を認めることができよう。いいかえれば、旗指窯の中では灰釉陶器窯から山茶椀への転化は明確な画期を設定できず、連続性を認めざるをえないといえよう。おそらくこうした傾向は清ヶ谷窯でも認められ、守屋氏が苦心して設定した樹木ヶ谷、釜ヶ谷窯式の存在に現れているものと考えておこう。したがって、すでに後半期の旗指窯、清ヶ谷窯の中に山茶椀窯の要素を見出しえるが、遠江や駿河では、それ以降が、生産体制の上で画期ではないかと推定したい。

つづいて横岡古窯群や皿山古窯群では多数の椀、小椀が生産されているが、12世紀前半から中頃には例外的に長方形の陶磚、陶製絆筒、平瓦、壺の生産が認められる。ただし後者は、周辺の有力寺社の受注を受けたものと推定され、瓦の葺替えや絆塗造営に伴うあくまで例外的な部分であったと考えられ、基本的には椀、小椀主体の生産であったと考えられる。おそらく小椀が小皿に転化したのはむしろ横岡古窯群では生産が拡大する傾向にある。また12世紀末から13世紀初頭には榛原町土器ヶ谷窯や相良町蛭ヶ谷窯が短期間生産されるが、継続せず出づくりの様相が強い。それ以降は横岡古窯群が生産の中心であろう。

一方、渥美、湖西窯においては12世紀末から13世紀初頭には、絆塗壺や蓮弁紋壺、蔽骨器用の小壺など宗教色の強い生産は急速に衰退し、大量生産の椀、皿窯に転化し、湖西地域がその中心になる。それはすでに指摘のあるように、瀬戸における古瀬戸様式の成立や無釉の常滑壺の普及にみられるように、東海地方瓷器系陶器圈内における分業体制の確立（いいかえれば瀬戸、常滑の特定器種における市場の確立）に遠江の生産地も無縁ではなかったといえるであろう。

5.まとめ

以上、神明原・元宮川遺跡出土の10世紀から12世紀末、13世紀初頭の灰釉陶器と山茶椀製品を見、あわせて、瓷器系陶器生産圏の東限にあたる遠江、駿河の生産地の動向について述べた。

そのなかでは、資料の制約もあって、従来、注目されることのなかった遠江、駿河の椀、皿と尾張、東濃の椀、皿製品の産地別構成を重点的にとりあげることとなった。神明原、元宮川遺跡出土資料の灰釉陶器の傾向を今、一度ふり返ってみたい。

10世紀段階（折戸53号窯式まで）にあっては猿投窯など県外産の製品が主体を占めるが、全体量からすれば少ない。清ヶ谷窯の四番山窯式期、旗指窯のⅠ期かⅡ期（6-III-7、8号窯、14号、17号窯）以降、量的にも増加し、ほとんどが県内産で占められる。ところでこれら身近な生産地は、当初、ある程度の比率で、長頸瓶、短頸壺、大平鉢、無釉甕、耳皿、という器種を少ないながら生産していたが、白山2号窯式、旗指窯22号窯期以降、ほとんど椀、小椀専用窯に近い様相を呈している。つまり長頸瓶、短頸壺、大平鉢、無釉甕、耳皿、という器種が例外的に生産される体制に徐々に転化していく状況をみせている。さらに椀、皿については荒い胎土の製品で、無釉化と省力化、規格化という量産に向けての傾向が、進行している。

つまり消費地である神明原・元宮川遺跡の灰釉陶器の需要と生産地である清ヶ谷窯、旗指窯の供給の在り方がみごとに整合しているといえよう。浜北窯についても、誠栄窯にみられるようにほぼ同様の事実が指摘できる。県内に灰釉陶器窯が生産を開始して以降、一つの画期となろうか。

ところで山茶椀窯の生産は、横岡、皿山窯でみられるように、灰釉陶器窯からの移動という現象が推定される。渥美・湖西窯についても灰釉陶器窯からの連続した生産は考えられず、それ以前の豊橋市南部窯や浜北窯からの陶工集団の移動によって成立したと推定している。渥美・湖西窯の場合、吉岡氏が指摘したように、連弁紋壺など藏骨器、経甕など宗教器を椀、皿とともに生産しており、これらは12世紀中頃には、遠隔地までも交易の対象としている。また窯構造の上でも全長15、16mと大型化し量産化は一層進行したといえよう。しかしながら湖西窯でみられるように、12世紀末、13世紀初頭には椀、皿専用窯に転化している。

ところが遠江・駿河地域の椀、皿をみるとかぎり灰釉陶器からの量産化の傾向の中で、技術的には連続していると評価せざるをえない。しかも灰釉陶器末期の椀、皿とあまり変化のない量で、消費地の需要に急激な変化がみられない。ところが、

さて神明原・元宮川遺跡出土の山茶椀製品の産地別構成は、12世紀中頃までの東遠諸窯優位、12世紀末、13世紀初頭の渥美・湖西製品優位の推移をたどっている。この現象をどう考えるかである。両者を窯構造の上で比較した場合、東遠諸窯の皿山窯やアザミ沢窯（西駿河旗指窯周辺に存在、東遠諸窯の一群としておく）の例のように全長で渥美・湖西窯の約半分を計り、渥美・湖西の窯が密集した在り方を示すのに比べ、散在的であり、量産の規模の違いを現している。この点では清ヶ谷窯、旗指窯末期の状況とあまり変化は感じられない。また渥美・湖西窯が12世紀末、13世紀初頭には椀、皿専用窯に転化し、さらに湖西にその中心を置くようになって交易圏が近くなったことも起因していると推定したい。神明原・元宮川遺跡出土の山茶椀製品の産地別構成は、生産地の量産の規模を現したものと評価したい。

ところで神明原・元宮川遺跡出土の灰釉陶器から山茶碗の椀、皿をみると遠隔地からの供給がほとんどみられないということである。このことは常滑窯や古瀬戸製品と異なり、本地域の瓷器の道は地元および近国の需要に応じるものと理解されよう。

神明原・元宮川出土の灰釉陶器から山茶碗を扱いながら、はからずも10世紀から13世紀までの政治史の転換点の問題をできるだけ正面にすえないようにしてきました。ひとえに資料操作の前提に予断をいれず、陶磁史から何をもって中世とするかあるいは中世的生産と流通を探らんとしたからである。

かつて檜崎彰一氏が壺、壺、擂鉢の三者の出現と椀、皿窯の存在を東海地方における中世窯業の成立とみたが、その要素は遠江や駿河の生産窯では、すでに片口鉢の存在に現れているように、10世紀後半に成立している。ところが椀、皿窯への転化は11世紀中頃からはじまり、例外的に焼かれていた長頸瓶、短頸壺、耳皿が器種構成から消えるのは12世紀中頃から後半であり、本来的な意味での椀、皿専用窯は12世紀末、13世紀初頭に現れるということになろう。瓷器、瓷器系陶器圈の東限では、政治史区分の古代末期から中世への転換点では連続的な要素が強く、常滑や古瀬戸製品の流通と普及が中世的世界の幕開けとなろうか。

最後に小論をまとめるにあたって、御教示をいただいた檜崎彰一氏 柴垣勇夫氏 赤羽一郎氏 橋本久和氏 藤沢良祐氏 齊藤孝正氏 守屋雅史氏 前川要氏 後藤建一氏 松井一明氏 久野正博氏 平野吾郎氏の諸先生に厚く感謝の意を表したい。

(足立順司)

- (1) 清ヶ谷窯と旗指窯製品の岐別については渋谷昌彦氏の見解がある。渋谷昌彦他『居倉遺跡発掘調査報告書』1987
(2) 県外産の灰釉陶器については齊藤孝正氏の御教示による。
(3) 清ヶ谷窯の窓式編年に関しては、守屋雅史「遠江清ヶ谷古窯跡群における灰釉陶の展開」『大阪市立美術館紀要 第4号』1984、市原寿文他「清ヶ谷古窯跡群白山窯跡」1979
(4) 旗指窯の灰釉陶器編年は渋谷昌彦他『旗指古窯跡発掘調査報告書』1983
渋谷昌彦他『居倉遺跡発掘調査報告書』1987
山村宏他『旗指古窯址群』1976
ただし清ヶ谷窯と旗指窯の併行関係の理解は渋谷昌彦氏の見解と異なるため、小論では下記の足立の見解によっている。また守屋雅史氏には在地産灰釉陶器の併行関係について大いに教示を得た。

灰釉陶器窯の併行関係

浜北窯	清ヶ谷窯	旗指窓 1	旗指窓 2
+	宮東		
吉名	四番山	6-IV-7, 8	14号、17号
+	白山2号	2-1-1	22号
+		6-II-1	20号
		8-I-2	21号

- (5) 足立順司 「東海地方東部地域の中世陶器・土器」『中近世土器の基礎研究』1985
(6) 足立 前掲論文1985
後藤建一 「瀬美・西湖中世古窯跡群」『マージナル 7』1987
(7) 森下春美 「神明原・元宮川遺跡出土の文字資料」『大谷川 III』1988
(8) 赤羽一郎 「山茶碗に関する若干の考察」『マージナル 7』1987
(9) 山村宏 他 「静岡県の古窯跡」『静岡県の古代文化』1964

- 04 渡辺康弘『駿河山2号墳』1983
- 05 芝谷昌彦他『田ノ谷遺跡』1985 ただし金谷町白山姫塚は經簡が複数あることから數時にわたって埋納されたことが推定され、ただちに和鏡の墨書と山茶碗が一致するわけではない。注意すべきであろう。この機会に訂正しておく。
- 06 横崎彰一他『北丘古窯跡群・古墳群発掘調査報告書』1981
前川要『猿投塚における灰釉陶器生産最末期の諸様相』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要III』1984
- 07 浜北市吉名古窯跡は、昭和34年静岡大学教育学部浜松分校歴史学研究部によって発掘調査。その後の調査は久野正博『浜北市吉名第5号・第6号窯跡』1988 松井一明『浜北市宮口古窯跡群の検討[1]』『静岡県考古学研究』17号 1985による。また採集資料については松井・久野氏の御教示による。
- 08 伊藤應『豊橋市南部における平安朝笠器古窯址群』1979
- 09 平野吾郎「遠江国分寺跡出土瓦と瓦屋について」『古代探査II』1985
平野氏とは別に国衙工房としての性格について指摘したことがある。「中世陶器生産と消費・序説」『東笠子（HK）第27号遺跡発掘調査報告書』1982 守屋雅史氏は、前掲論文の中で清ヶ谷窯は官衙・寺院等地方上級階級用の製品と地元消費用の製品を焼成としたとし。
- 10 後藤建一他『東笠子遺跡群発掘調査概報』1983
- 11 八木勝行他『助宗古窯址群分布調査報告書』1979
- 12 渡辺康弘『二ノ谷古窯跡発掘調査報告書』1985
- 13 赤堀幹也「陶器製作史概説一」『陶器講座』第6巻 1935
- 14 藤沢良祐「瀬戸古窯跡群1」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要I』1982
- 15 横崎彰一「古代末期の窯業生産」『日本史研究79』1965
横崎彰一他『日本の考古学VI』1966
- 16 田中 稔「尾張・三河の陶質土器」『古代学研究17』1957
久永春男「刈谷市における古窯の分布とその製品の様式について」『刈谷市古窯』1958
杉崎章他『常滑窯業誌』1974 他 三氏に対する批判は藤沢良祐 前掲書に指摘されている。
- 17 たしかに政治史の上では古代から中世へと大きく転換する時期であり、窯業生産がその転換点に大きく影響を受けたことは尊重されなければならないであろうが、それが輪、皿という器種にどう反映したか、あるいは伝統的技術系譜が大きく作用し、あまり変化しなかったのか、器種構成や窯構造に変化がおこったか、消費地の動向に変化がおこったかなどがキーとなろう。その点では横崎彰一氏の「古代末期の窯業生産」の学史的意義は大きい。
- 18 足立 前掲書 1982
19 足立 前掲書 1985
- 20 横崎彰一「中世の社会と陶器生産」『世界陶磁全集3』1977
- 21 吉岡康輔「北東日本海域における中世窯業の成立」『国立歴史民俗博物館研究報告』1988
- 22 赤羽一郎「関東平野における中世常滑窯製品の出土分布」『愛知県陶磁資料館研究紀要3』1984
- 23 横崎彰一「壺器の道（1）」『名古屋大学文学部20周年記念論集』1969
齊藤孝正「灰釉陶器の研究！」『名古屋大学文学部論集X C V』史学32号 1985

第5節 神明原・元宮川遺跡の土層と静清平野の地学的環境

加藤 芳朗 (静岡大学名誉教授)

- 1.はじめに
 - 2.遺跡周辺の静岡平野
 - 3.微高地と低湿地
 - 4.火山灰
 - 5.静清平野のOs、Kgp包含層の層相
 - 6.海浜砂礫層
 - 7.大谷川旧流路の発生と変遷
 - 8.まとめ
- 付属論文1 西大谷5区茶褐色粘土と砂の
互層中の火山源粒子について
- 付属論文2 大谷1区・水上4区土層中の
火山灰起源粒子について

1.はじめに

大谷川遺跡（神明原・元宮川遺跡）の発掘によって得られた土層情報のうち、静清平野の地学的環境を考える上で重要なものを取上げて、その意義を吟味してみたい。ただし、調査記録のかなりの部分を下記の報告書に依っていることをお断りしておく。なお、yBPは年前を表わす。

- (引用略称) (報告書名)
- 大谷川I 静岡県埋蔵文化財調査研究所(1984)『大谷川I』昭和58年度巴川(大谷川)総合治水対策特定河川事業埋蔵文化財発掘調査報告書(神明原・元宮川遺跡) 127頁、61図版。
- 大谷川II 静岡県埋蔵文化財調査研究所(1987)『大谷川II(遺構編)本文編』昭和59・60年度巴川(大谷川)総合治水対策特定河川事業埋蔵文化財発掘調査報告書(神明原・元宮川遺跡) 209頁。
- 大谷川III 静岡県埋蔵文化財調査研究所(1988)『大谷川III(遺物編)本文編』昭和59・60年度巴川(大谷川)総合治水対策特定河川事業埋蔵文化財発掘調査報告書(神明原・元宮川遺跡) 224頁。
- 概報 静岡県埋蔵文化財調査研究所(1986)『神明原・元宮川遺跡』大谷川放水路建設に伴う発掘調査概報 35頁。

2. 遺跡周辺の静岡平野

すでに、東海道線以南、安倍川左岸の静岡平野の地学的性格について考察を試みたことがある(加藤、

1983)。その特徴を摘記すると、

- イ. 平野の西半部を安倍川扇状地が占める。
 - ロ. その扇状地の末端は指を開いたような微高地を形成している。
 - ハ. 平野の中に孤立丘（八幡山、有東山）がある。これらと谷津山とが安倍川扇状地の東方への張り出しを規制している。
 - ニ. 平野の東部、有度山丘陵の前面に大谷一池田一長沼低地がある。これは、さらに北方の巴川一麻機低地に連続する。
 - ホ. 駿河湾沿いに砂礫州・砂丘が2列存在する。
 - ヘ. 有度山丘陵の西麓に同山内の谷から押し出した疊が小扇状地群を作っている。
- 大谷川は大谷一池田低地の水を集めて南流し、駿河湾前面の砂礫州にさえぎられて、東に流れを曲げた後、同湾に注ぐ。本遺跡は大谷川の下流部にあり、大谷一池田低地の中心に位置するので、低地に堆積する土層を主とするが、西の安倍川扇状地、東の有度山麓扇状地、南の砂礫州からの砂、礫の流入も認められる。

3. 微高地と低湿地

発掘の各区で、微高地とそれを切り込む低湿地が検出された。前者は縄文中期ごろまでの土層よりも、後者の覆土は縄文後期以降の土層よりもなることがわかった。したがって、微高地を切り込む面（地質学でいう不整合面）の形成は縄文中期から後期にかけてのある時期、ということになる。静清平野における最初の発見である。その後現在までに、3ヶ所で類似のものが見出され、この現象が静清平野でかなり普遍的だと考えられるにいたった。

A) 微高地土層

- (a) 構成 微高地を構成する土層は、上から、つぎのように区分される（大谷川II、p.7；概報）。
 - A 層（白～灰白色粘土）
 - B 層（黒～黒灰色粘土）
 - C 層（灰白または灰黑色粘土または両者の互層）入江が砂礫州で淡水性沼澤化したときの堆積物
 - D 層（青灰色海成シルト）縄文海進時にできた入江の堆積物
- 淡水性、海成の根拠は未報告であるが、かりにこれを正しいものとして以下の論を進める。
- (b) 縄文海進時の海水準 いくつかの区で記録されている、微高地土層と海成シルト層の頂部の標高は第34表のごとくである。

海成シルト層の頂部 (+ α) が縄文海進時の海水準を示すものとすると (α は水深。地盤変動の影響を無視して)、その値は 3 ~ 5 (+ α) m となる。微高地土層 A ~ C (淡水成) を堆積させるきっかけとなつた砂礫州による入江の閉塞は縄文海進のピーク（縄文前期、約6,300yBP頃）が過ぎて海水準が安定または緩やかな下降を始めたときに起こったと思われる。その時期は C 層の泥炭層の ^{14}C 年代（下述、約5,000 yBP.）をさかのぼる。そして、閉塞した入江（ラグーン）が埋積しあわったときの標高は 5 ~ 6.4m と推定される。

第34表 微高地土層と海成シルト層の頂部の標高(m)

区	微高地土層	海成シルト層	削りこみ*	出典(大谷川)	備考
大谷1、2	5.2	4.3	2	II p.6 第2図	
西大谷2	5	4.2	3+	I p.9 第4-1図	
西大谷8	5.6	4.2	-	II p.38 第23図	17層**
水上1	6	5.3	-	II p.51 第30図	19層**
水上2	6.0-6.2	-	-	II p.63 第12表	
水上3	6.0-6.4	-	-	II p.69 第14表	
冰上9	5.5	5.3	1	II p.119 第68図	
宮川4	5.4	-	-	II p.169 第99図	
宮川1	6	3.3	-	I p.9 第4-3図	

*微高地土層の削り込みの深さ(m)

**この層を海成とみなして

(c) 年代 宮川1区でC層に当たる泥炭層の¹⁴C年代値は5,090±180yBP.(同層下位)、4,500±150 yBP.(同層上位)である(大谷川I p.9-10,図4-3)。また、大谷1-2区最下位層産出の木片(G)の¹⁴C年代値として、6,520±120yBP.が得られている(大谷川III、P.210-211)。この土層が微高地層であるかどうかは明示されていない。しかし、¹⁴C年代測定試料カード(高橋 豊氏作製)の柱状図によれば、この土層に対して、上位のシルト・腐植の互層が斜交関係にあり、かつ、同互層は、縄文後~晩期の遺物包含層であり、その¹⁴C年代値(複数)も、3,380±110yBP.かそれより若い。従って、最下位層が微高地に、その上位の互層が低湿地に、それぞれ、属する可能性が高い。

B) 低湿地土層

特色を列挙すれば、①最下部層(微高地土層の切り込み面の直上)が細砂~砂質層であることが多い(西大谷、水上、宮川の各区)。②その上位の土層のほとんどは粘土質である。③有機質(泥炭質)土層が多い。④縄文後期から古墳後期までの遺物が含まれる。古墳前期または中期層の下面が軽い不整合をなす場合もある。(西大谷、水上、宮川の各区。大谷川II、p.6-8)。⑤¹⁴C年代値の測定された大谷1-2区では、縄文後期遺物包含層が3,380±110yBP.、3,550±120yBP.(木片)、大沢スコリア(約2,700yBP.、後述)上位の縄文晩期丸木舟の木片が2,680±100yBP.と妥当な値を示す。しかし、その上位から弥生中期遺物包含層にかけては予想よりかなり古くでいる(大谷川III、p.210-211)。

C) 静清平野における他の例

(a) 神明原・元宮川遺跡大正寺沢川区 大正寺沢川は有度山西麓から大谷小学校の横を流下して、西大谷5-7区あたりで大谷川に合流する。その改修工事にともない静岡市教育委員会が発掘調査をした(昭和61年度)。筆者はその現地を訪れ、かりに下部層と名付けた土層と、これを深さ1m以上するどく削って堆積した土層(かりに上部層と命名)とを認めた(加藤、1987d)。後者の下底には前者を構成する粘土の塊がふくまれることから、削りこみは侵食によることが判明した。上部層の中ほどにカワゴ平軽石(約2,900yBP.、後述)をはさむ黒褐色粘土がある。その最上部に古墳時代後期(?)の遺物が含まれるという(発掘担当者による)。このことから、上部層が大谷川地区の低湿地土層に、下部層が同微

高地土層に、それぞれ、対応する可能性が大きいと推定された（加藤、1987d）。

(b) 姪田遺跡 大谷小学校の西側、市農協うらにある（平成元年度、静岡市教育委員会が発掘調査）。筆者の現地観察によると、灰色の粘土、シルト、砂質層を1.5m以上削り込んで溝状凹地（西方に傾斜）がある。溝の覆土は下から、疊層、縄文後期土器包含層、カワゴ平軽石・大沢スコリア類似（Os'）火山灰薄層、弥生～古墳中期遺物包含層、さらに、軽い削りこみ面をへだてて、古墳後期遺物包含層の順に重なる（遺物は発掘担当者による）。溝を充填する土層が大谷川の低湿地土層に、その下位層が同微高地土層に、それぞれ、対応するとみられる（加藤 1989）。

(c) 長崎遺跡（静岡県埋蔵文化財調査研究所、昭和62～63年度調査） 2区で、内湾櫻の貝、珪藻を含む土層とその上位の縄文後期（？）土器包含層を数m以上削りこんだ旧河道が発見された。旧河道の覆土は、下から、厚い疊層、砂層、カワゴ平軽石、大沢スコリアをはさむ黒色粘土層、泥炭層、弥生中～後期遺物包含層、古墳前期水田遺構とつづく（静岡県埋蔵文化財調査研究所、1989）。これも大谷川の微高地、低湿地の関係に似ている。

D) 微高地の削りこみの意義

表1によれば、微高地の削りこみの深さは最大3m余に達する。削りこみの原因として、本地区のような海に近い場所で、しかも、安倍川、巴川水系の数ヶ所でそれが起こっていることから、考えられる有力なものは海水準低下（>3m）による侵食力の復活であろう。削りこみの時期は、微高地の泥炭層の¹⁴C年代（約4,500yBP.）と低湿地の縄文後期包含層のそれ（約3,500yBP.）との間であるから、海水準低下のピークの時点もそこに置くことができる。このとき、海岸線は沖合に退いていたこと、削りこみが下流から上流に向かって進行することを考慮すると、ピークは4,500yBP.に近い時期とみてよいであろう。

4. 火山灰

本地区で筆者が確認した火山灰はつぎの通りである。ただし、Osは大沢スコリア、Os'は大沢スコリア類似、Kgpはカワゴ平軽石である。

宮川2区、大谷川旧河道の基盤層（黒色粘土層） Os 加藤、 1984

水上4区、古墳～鎌倉遺構面下の基盤層（砂層中の粘土層） (Kgp) 付属論文2参照

西大谷5区、低湿地土層（砂質粘土と粘土の互層） Os', (Kgp) 同上 1参照

大谷1-2区、低湿地土層（泥炭+粘土層） Os, (Kgp), 同上 1,2参照

カッコを付したものは、洗いだした砂を顕微鏡観察してはじめて確認されたもの、その他は現地ではっきりした層としてわかったものである。

Os, Kgpは静清平野の各所で発見され、今や有力な年代指示者として役だっている（加藤、1985b）。Osは富士火山から南西方向に飛来したスコリア質火山灰で、白色粒子が目立つ褐色砂質の薄層をなす。上下の層の¹⁴C年代値から約2,700yBP.と推定されている。Kgpは天城火山のカワゴ平側火山から西方に噴出された軽石質（火山ガラス質）火山灰で、白色粒子に富む黄白色の砂質薄層をなす。¹⁴C年代資料から約2,900yBP.という中間値が使用される。両者が2つそろってはっきりした層として認められることも

珍しくない。常にOsが上位にくる。主な産出遺跡として、有東梶子、川合、長崎、長崎新田、押切石川、下野Bがある。一方、層をなさずに散乱帶として出現することも多く、Kgp粒子がOsの上位に、あるいは、Os粒子がKgpの下位になることもある。この例は本地区的Os、Kgpにも適用される（付属論文参照）。

考古学的遺物との関係はどうだろうか。富士山麓では、Osの下位に縄文後期堀之内式土器が（天間沢、流戸遺跡）、Osの上位の砂沢スコリア（約2,500yBP.）の上に縄文晩期大洞A式土器が（関屋塚遺跡）、それぞれ、産出する（増島、1978）。また、伊豆では、Kgpの下から、縄文後期の加曾利B、堀之内式（修善寺大塚遺跡）や称名寺式（中伊豆上白岩遺跡）の諸土器が見出されている（沼津市歴史民俗資料館、瀬川氏による）。OsとKgpに挟まれる土器は未発見である。従って、本県東部で両火山灰にもっとも年代が近い土器は、今のところ、上が大洞A式、下が加曾利B式、ということになる。

Os'はOsの約5～10cm上位にあり、よく似た褐色砂層であるが、これよりも細粒で、かつ、層も薄い。押切石川遺跡（加藤、1987a）、長崎新田遺跡（加藤、1987b）、長崎遺跡で存在が確認された。富士火山噴出と想定される。土層の堆積速度を一定として、Kgp、Osの年代から外挿したOs'の年代は約2,300yBP.である（加藤、1989）。

以上のような最近までの知見と符合するように、本地区でも、Os（またはOs'）とKgpが共存する；Osの下から縄文後期の土器が、上から縄文晩期の丸木舟が出土し、それぞれの¹⁴C年代も3,550～3,380yBP.、2,680yBP.である（上述（2）B参照）。また、蛭田遺跡でも、Os'、Kgpの下から縄文後期末の土器（安行II式平行）が検出されている（静岡市教育委員会、岡村氏による）。

5. 静清平野のOs、Kgp包含層の層相

上記のように、静清平野の多くの地点でOs、Kgpが見出されると、この時期あるいはその前後の時代の環境が、包含層やその上下の土層の層相（地層の堆積環境を指示する特徴）から推定できるようになる。そこで、平野内の遺跡で、両火山灰の時代（縄文後期から同晩期への移行期）を挟んで、縄文後期から弥生ないしは古墳時代までの環境が分かるものを拾い出して、下表のようにまとめた。環境を表の左端のように大胆に区分すると、イとロに属する遺跡が圧倒的に多い。

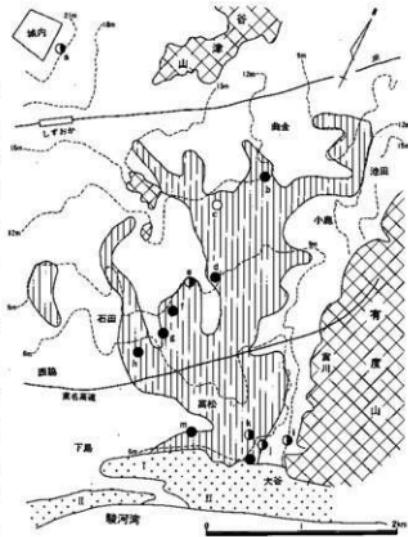
第35表 静清平野のOs、Kgp包含層の層相・堆積環境と遺跡名

堆積環境		Os、Kgp包含層と 上下層の層相	遺 跡	
			安 部 川 水 系	巴 川 水 系
イ.	湿地	黒色粘土・泥炭層	有東梶子、有東、高松中、宮竹沙入、登昌、曲金、 大谷1区	長崎、長崎新田、押切 石川
ロ.	河川隣の流入 する湿地	砂礫と粘土の互層	駿府城三の丸城内小、市立商、大正寺沢川、蛭田、 水上4区、西大谷5区	川合、瀬名
ハ.	礫質微高地	砂礫上位の土壤	豊田III（豊田中）	
ニ.	砂堆	砂層		下野B

安倍川水系、静岡駅南にある遺跡（上表にでているもの）の位置と環境（イ～ハ）を示したものが第100図である。図には地表下10～15mまでの表層地質が泥質堆積物を主とする部分も記入してある。これは『有東遺跡』の報告書で、筆者が大谷一池田低地の特徴であると指摘したものである（加藤、1983）。遺跡の環境の湿地（イ）がすべてこの範囲に入ることが明瞭である。これから、同低地が縄文後期から弥生ないしは古墳時代まで、とくにOs、Kgp堆積時を中心として、かなり長い期間にわたって湿地であつたことが示唆される。ただし、湿地状態が侵食期をはさんで中断したことを否定するものではない。一方、環境のロ（河川疊の流入する湿地）は疊質表層地質を主とする部分（扇状地、同末端の微高地）に見出される。注目すべきことは、このような疊（砂）の堆積が優勢な場所でも、Os、Kgp包含層だけは粘土～シルト層だということである。静清平野では、この時期に河川の流勢が弱まり、湿地が拡大されたとしか考えられない。これが海水準の上昇に結びつくのかどうか、検討すべき課題である。巴川水系については、表層地質が未検討なので、上と同じ関係が成立するか、論議を保留したい。なお、環境のハ（疊質微高地）は一ヶ所（豊田Ⅲ）だけだが、図で泥質表層地質に入っているのは、その当時のデータ不足によるものである。Kgp堆積時に土壤化した表面をもつ疊質微高地の存在することはすでに扇状地がそこまで進出したことを物語っている。

6. 海浜砂疊層

大谷2区で、弥生中期包含層をおおって海浜（波打際）堆積の砂・疊層が存在する（大谷川II p.24、第13図の7～10層）。その特徴は、層理がよく発達していること、疊が基石のように丸くて扁平なことである。しかも、扁平疊の多くが上面を南向きに傾けており（写真7）、これらを打ち上げた波が南、つまり、海側からやってきたことを暗示する。弥生中期後、海面が高まり、標高4～7mにまで波が及んで砂疊層を堆積させた（砂疊州が形成された）時期があつたことになる。おそらく、大谷から高松にわたる砂疊州I（海から2列目、国道150号線が走る、第100図参照）はこの時できたのであろう。淡水性の高地土層や低湿地土層が堆積した縄文前・中期～弥生中期にも、これらと海とを隔てる砂疊州Xがあったはずである。その位置は砂疊州Iより海側にあつたに違いない。このとき、有度山南麓の海食崖ももっと沖合にあって砂疊州Xに砂疊を供給していたと考えるのが自然である。砂疊州Xはその後破壊された



第100図 Os・Kgp包含層とその上下層の
堆積環境と表層地質

- 湿地、① 河川疊の流入する湿地、○ 疊質微高地、■ 泥質の表層地質、□ 砂疊質、■ 山地・丘陵、△ 砂丘・砂疊州（I・II）。
- a 駿府三の丸跡城内小谷、b 尚金、c 墓田畠田中、d i 綾田、e 市内高、f 有東櫻子、高松中、h 里山、i 綾田、j 大正寺沢川、k 水上4区、l 大谷I区、m 富川沙入の各遺跡、点線 等高線（m）。

か、地中に埋没したのであろう。

7. 大谷川旧流路の発生と変遷

発掘区のかなりの部分で、低湿地土層を削りこんだ大谷川の旧流路が復元されている。(大谷川Ⅰ、Ⅱ)。中には6~7筋の流路が判別された区もある(水上7、10b区、宮川4区)。もっとも古い旧流路の覆土中には古墳中期の遺物が含まれるので(大谷1区・西大谷4区、水上8区、宮川4区)、流路の削りこみの始まりは、この時期か、それより前であった。それらの覆土は礫、砂を主とするので、かなりの水勢によって削られたことが分かる。上の各区で検出された最古の流路はいずれも南流しており、流路底の最深標高は、北より、宮川で5.2m、水上で5.3m、大谷で0m、である。

これ以後の各時代の旧流路底の最深標高を調べてみると、その推移は変化にとみ、一上一下するもの(水上7、10b区)、上昇するもの(大谷1・西大谷4区、宮川5区)、下降するもの(宮川4区)、とまちまちである(第101図)。しかし、全体的に、古墳中期から平安にかけて低くなり、以後、中世、近世にかけて少し高まる、といった傾向のようである。これが何を意味するのか、いまのところ、よく分からぬ。

8.まとめ

(a) 繩文海進時の堆積物と推定される微高地土層が遺跡の基盤をなす。海成シルト層の上限高度から海進ピーク時の海水準は標高3~5(+α)mと推定された。

(b) 繩文中期ころ、おそらく、海水準低下に関連して、この微高地土層を削りこむ、侵食期があった。

(c) この削りこみによって生じた低湿地に繩文後期~古墳時代の土層が堆積した(途中に侵食期が挟まるかもしれない)。

(d) 大沢スコリア(Os)、カワゴ平軽石(Kgp)などの火山灰を確認した。これらの、従来から知られた年代(2,700~2,900yBP、繩文後期~晩期移行期)と、上下層から出た考古学遺物、¹⁴C年代値とは調和的である。

(e) 両火山灰の時期を中心として、静清平野の低地部が広範かつ長期(繩文後期~古墳時代)にわたる湿地化を受けた。砂礫の堆積の活発な扇状地で

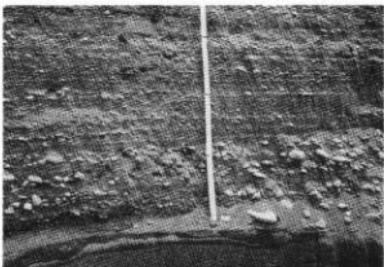
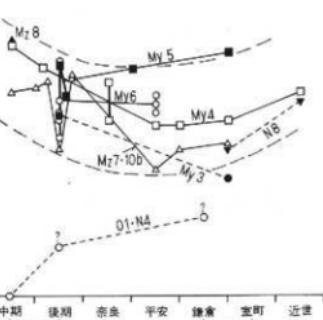


写真7. 大谷1区東壁の海浜砂礫層 (右が海側)
スケールは約60cm



第101図 大谷川旧流路底最深部の
標高と時期別変遷

○ 大谷、N 西大谷、Mz 水上、My 宮川

も火山灰堆積期に湿地堆積層が出現する。

(f) 低湿地の弥生中期土層をおおう海浜砂礫層（標高4～7m）の存在から同時期以後の海水準の上昇が推定される。

(g) 大谷川旧流路は古墳中期かそれより前に誕生し、以後複雑な流路変遷をへて現在に到った。

付属論文 1

西大谷5区 茶褐色粘土と砂の互層中の火山源粒子について

1. まえがき

表題の土層中に大沢スコリア（Os）と似た砂層のあることが現場発掘担当者（成島氏）によって発見された。その真偽を鉱物学的に検討するため以下の実験、調査を行った。

2. 試 料

西大谷5区東壁のセクション（第102図）の茶褐色粘土と砂の互層中の砂薄層から、図に示した位置で、試料を採取した。

また、対照試料として、大谷1区V-15区の大沢スコリア（以下Os）を選んだ。その採取位置は付属論文2第103図に示してある。

第36表 粗砂、細砂の重量割合（重量%）

試 料	西大谷5区			大谷1区
	①	②	③	Os
粗 砂	80.6	9.2	91.4	54.8
細 砂	19.4	90.8	8.6	45.2

3. 実験方法

すでに報じた方法に従って行った（加藤、1984）。

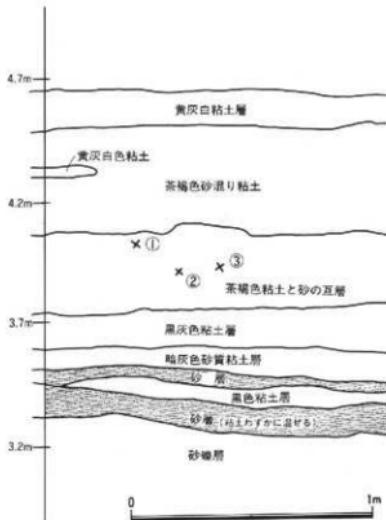
4. 結果

(1) 粗、細砂の割合

第36表によると、①、③は粗砂の割合が、それぞれ、きわめて高いが、②は逆に、細砂の割合がきわめて大きく、対照的である。これに対し、Osでは両者の含量が接近している。

(2) 粗砂

すべて黒色味を帯びるが、①、③は石英、長石などの白色粒子を、②は透明な長石粒子を、Osは赤色粒子を、それぞれ、少しづつ含む。



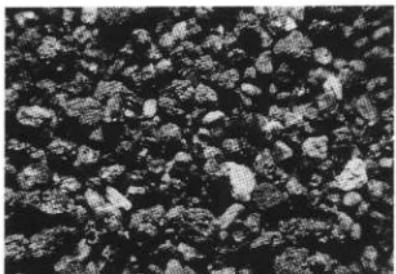
第102図 西大谷5区東壁土層断面図
(発掘担当者による) ×印試料採取位置



a. 大谷 1 区 大沢スコリア(Os)現地状態



d. 同 ① 粗砂



b. 同上 粗砂



e. 同 ③ 粗砂



1 mm

c. 西大谷 5 区 茶褐色粘土・砂互層② 粗砂

写真 8

黒色粒子のうち、①、③は頁岩（粘板岩）を主とし安山岩を従とする。②、Osはスコリアを主体とする。赤色粒子はスコリアである。頁岩は安倍川流域から搬出されたものであるが、それが直接堆積したものか、洪積世に堆積した有度山丘陵の砂礫が同丘陵から運ばれて再堆積したものは不明である。スコリアは富士山噴出のそれと酷似する。赤色スコリアの存在、かんらん石の存在（Os）もその傍証となる。（写真8a～e）

（3）細砂

第37表に観察結果を示した。表中の火山灰起源粒子とは、火山ガラスやスコリア、それらを表面に付着させた粒子を指す。

第37表 細砂の火山灰、非火山灰起源粒子の割合（粒数%）と火山灰起源粒子の鉱物学的内容

試 料	西 大 谷 5 区			大谷1区	有東遺跡*
	①	②	③	Os	カワゴ平軽石
火山灰起源粒子 %	5	63	9	86	56
非火山灰起源粒子 %	95	37	91	14	44
かん定粒数	329	325	412	274	436
火山灰起源粒子の内容%	扁 平 型	5	—	8	6
	織 繩 型	24	—	20	42
	多 孔 型	15	—	11	28
	結 晶 子 型	4	—	3	5
	ス コ リ ア	7	100	29	—
	火 山 ガ ラ ス	斜長石	41	—	16
		シソ輝石	2	—	2
		角閃石	3	—	+**
		磁 鉄 鉱	—	—	-**
	纖維型対多孔型	1.53	—	1.77	1.53
備考	かん定粒数	123	205	193	235
備考	非火山灰起源粒子の内容	頁岩>安山岩	斜長石	頁岩>安山岩	斜長石

*加藤（1983）

**+ < 1%、- 0%

（a）火山灰起源粒子

この粒子の割合は①、③が5～10%未満と少ないので、②、Osは60%以上ときわめて高い。また、それらの内容は、第37表でわかるように、①、③は、織維型、多孔型火山ガラス、および火山ガラス付着粒子の斜長石ほかがそれぞれ、目立つ。また、纖維型対多孔型の火山ガラス比が1.5～1.8である。これは、同表に参考のためかかけた有東遺跡のカワゴ平軽石の特色ときわめてよく似ている。砂層堆積時にカワゴ平軽石が混入したことは疑いがない。この他にスコリア粒子の混入も認められる。②、Osの火山起源粒子はほとんどがスコリアからなり、粗砂の場合と同一傾向である。②のスコリアの方がOsのそれより、斜長石の小斑晶を多く含み、石基がやや明るみをもつ。

(b) 非火山灰起源粒子

第37表には備考として定性的にしか示さなかったが、①、③では頁岩を主とし、安山岩を從とする。安山岩はスコリアと似た組織（班状）をもつが、前者は石基が半透明（暗褐色）なこと、斜長石の屈折率が中程度なこと、粒形が丸味をおびること、後者は石基が黒色で不透明、斜長石が小短冊形、高屈折率なこと、粒の輪郭が凹凸にとむことによって識別される。粗砂が頁岩を主体とすることと対応する。

②は①、③と同質の粒子を少量含むが、多くは斜長石である。これは屈折率が高いなど、スコリア粒子中のものと似ており、同粒子と同時に噴出したと予想されるが、暫定的にこのグループに含めておいた。

Osの場合も上と同様な斜長石が主体だが、他にシソ輝石、普通輝石、カンラン石も存在する。

(4) 結論

以上のことから、火山起源粒子として、①、③は副成分としてカワゴ平軽石（Kgp）を含み（主成分は安倍川流域由来の頁岩）、②はOsと同質のスコリアを主体とすることがわかった。しかし、②は赤色スコリアがほとんどないこと、透明な無色粒子が多いこと、粒子が細かいこと（粗砂／細砂含重量比=0.10）から、最近発見された大沢スコリア類似（Os'）に対比されるとした方がよい（加藤、1987a, b）。Os、Kgpは、静岡平野の遺跡（有東掘子、有東、宮竹汐入、高松中、登呂など）では、いずれも弥生中期、後期の遺構、遺物包含層の下位にある。両者が明瞭な層として同時に出現するときは（有東掘子遺跡、加藤、1987c）OsがKgpの上にくる（富士、愛鷹山麓でも同様）。しかし、はっきりした層をなさないときは原因不明の擾乱作用を受けて、本来の層位の上下方向に拡散する傾向がある。大沢スコリア類似（Os'）はOsの上位5~10cmのところにあり、Osと似た褐色砂層であるがこれより細かくて、層も薄い。清水市の押切石川遺跡（加藤、1987a）、長崎新田遺跡（加藤、1987b）、長崎遺跡で発見されている。噴出源はOs同様富士火山と想定される。

今回の場合は含まれる層が砂層なので二次堆積の形で火山灰が流入した可能性がある。

付属論文 2

大谷1区、水上4区土層中の火山灰起源粒子について

1. まえがき

大谷1区で発見された大沢スコリア層（Os、付属論文1）の下位土層中にカワゴ平軽石（Kgp）があるかないか、水上4区の土層中にOsやKgpに相当する火山灰層があるかどうか。これらを検討するため、以下の実験を行った。

2. 試料

第103・104図のセクション図中の土層より発掘担当者によって採取された試料は、大谷1区で11ヶ（Nos.1~11、約5~6cm間隔）、水上4区で29ヶ（Nos.1~29、約5~7cm間隔）である。

3. 実験

すでに報じた方法に従って行った（加藤、1984）。

4. 結果

(1) 大谷1区

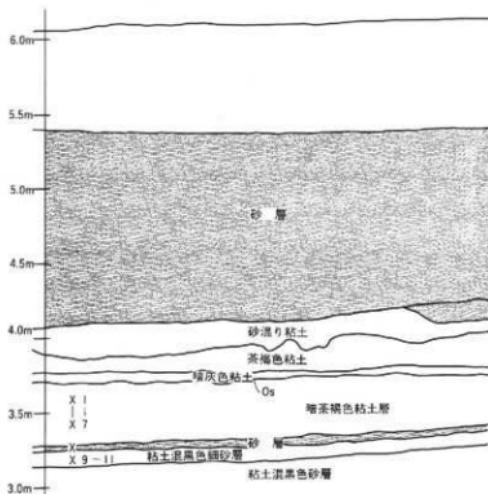
第103図Bに砂、細砂中の植物片・火山灰起源粒子の割合を示した。ただし、左端の数字は試料番号、T S、C S、F Sはそれぞれ、砂全体(2~0.05mm)、粗砂(2~0.2mm)、細砂(0.2~0.05mm)、Osは大沢スコリア、Kgpはカワグ平軽石を示す。暗茶褐色粘土層のNos. 1~7では下層ほど砂全体、粗砂の%が減少し、反対に、植物片がふえる。砂層、黒色砂層のNos.8~11では砂全体と粗砂が増加し、それぞれ、75~90%、60~85%を占める。一方、植物片はほとんど全く含まれない。ここでいう植物片とは、ヨシなどの湿地植物の破片で、顕微鏡下では暗褐色~黄褐色を呈し、細胞組織が認められ、光学的等方性である。

細砂中の火山灰起源粒子の割合をみると、Nos. 1～5で90%以上に達し、しかも大沢スコリア(Os)を主体とする(第38表)。No. 6以下では一旦減少するが、Nos. 9、10で再び増加する。これらのはとんどがカワゴ平経石(Kgp)であることは第38表から推定される。つまり、火山灰起源粒子が火山ガラス、斜長石、角閃石、シソ輝石などからな

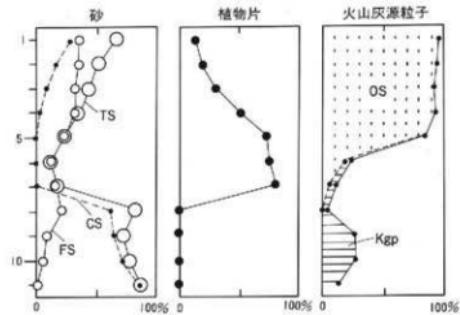
り、また、火山ガラスの纖維型多孔型の比が1.2~1.7を示すなどKgpの特徴と一致するからである（付属論文1参照）。なお、非火山灰起源粒子は頁岩片を主とする。

細砂%を考慮すると、Os層直下のNos. 1～5では風乾細土試料の30～35%をOs粒子が占めることとなる。一方、Nos. 8～11のKgpは最大で3%程度にすぎない。

土層中で、火山灰起源粒子が上下、数10cm以上の範囲に拡散する現象はきわめてふつうのことである。その含有率の極大部に降灰の層準があると假定すると、 K_{dp} はノルマニウム9-10の境界部付近に位置するものと推定される。ノルマニウムはNo. 1の直上に純粋な層として出現している（付属論文1参照）。



第103図 A 大谷1区土層断面図と試料採取位置
(発掘担当者による)



第103図 B 砂・植物片・火山灰源粒子の割合

第38表 細砂中の火山灰起源粒子の含有割合(%)と鉱物組成

試 料	大 谷 1 区											水上 4 区	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	19	21
火山灰起源粒子割合	98	95	93	94	87	25	13	3	27	27	14	10	10
鑑定粒数	284	250	220	135	76	76	56	305	349	350	312	285	324
斜長石	1	2					14	16	23	25	45	3	1
角閃石							9	1	2	3			
火	シソ輝石	+					4						
山	カラン石	+					4						
灰	不透明鉄鉱物							+	+	+			
起	扁平型							2	8	4	9	18	15
源	火山ガラス	多孔型					16	43	20	22	24	15	32
粒	繊維型								31	39	39	18	43
子	結晶子型								4	5	3	4	3
%	スコリア	98	98	100	100	100	84	43	9	+			
	鑑定粒数	278	237	204	127	66	19	7	45	171	231	212	68
	繊維型/多孔型								1.56	1.74	1.65	1.19	1.32
													1.55

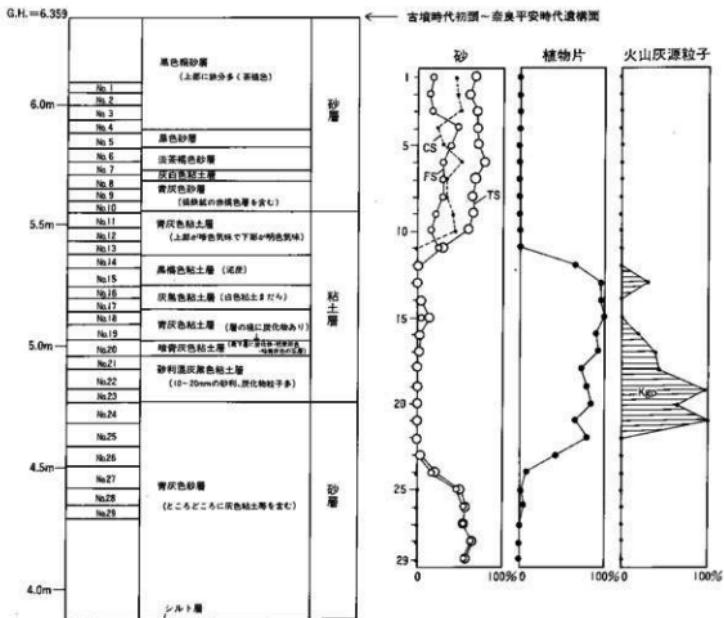
+ < 1%

KgpがOsの下に位置するのは県東部で確認されており、静清地区でも有東振子(加藤、1987c)、川合、長崎、押切石川(加藤、1987a)、下野(加藤、1985a)の各遺跡でその例がある。

(2) 水上 4 区

第104図に大谷1区と同様なものを示した。これによると、No.10までの砂層で砂全体が60~80%に達するが、Nos.12~23の粘土層では砂がきわめて少なく、かわりに細砂中の植物片の%がふえる。しかし、No.25以下では再び砂(ほとんどが細砂)がふえて50~60%に達する。細砂中の火山灰起源粒子をみると、Nos.12~22にわたってKgpの粒子(ほとんどが火山ガラス)が検出された。その極大はNo.19と21にあり、いずれも約10%である。第38表によると両試料中の火山灰起源粒子はほとんど大部分が火山ガラスからなり、それらのうち、繊維型対多孔型の比が1.3~1.6であることからKgpと同質と判断される。風乾細土当たりの絶対量を、細砂含量から推定すると、いずれも0.1%未満である。

既述の大谷1区と同様に上下にわたって散在するが、その極大部の位置からみて、No.19~21付近にKgpの降灰層準があるものと推定される。なお、Os粒子は検出されなかった。



第104図 A 水上4区土層模式図と試料番号
B 砂・植物片・火山灰源粒子の割合
(発掘担当者による)

文献（本文、付属論文共通）

- 加藤芳朗（1983）「有東遺跡をめぐる地形、地質的背景」『有東遺跡I』48-56頁、静岡県教育委員会
- 加藤芳朗（1984）「神明原・元宮川遺跡 宮川2区の火山灰層について」『大谷川I』122頁、静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 加藤芳朗（1985 a）「清水市下野遺跡（B地区）の遺物包含層をめぐる地質学的検討」『下野遺跡』152-156頁、清水市教育委員会。
- 加藤芳朗（1985 b）「静清平野下の火山灰」静岡地学、52号、地学散歩（32）、i-iii頁。
- 加藤芳朗（1987 a）「清水市押切石川遺跡の土層の地質学的検討（続）」『石川遺跡』18-22頁、清水市教育委員会。
- 加藤芳朗（1987 b）「清水市長崎新田遺跡の土層中の火山灰の地質学的検討（続）」『静清バイパス（長崎地区）埋蔵文化財発掘調査報告、昭和61年度』13-16頁、清水市教育委員会。
- 加藤芳朗（1987 c）「有東振子遺跡第一次発掘区の火山灰層について」『有東振子遺跡』63-67頁、静岡市教育委員会
- 加藤芳朗（1987 d）「神明原・元宮川遺跡大正寺沢川改修工事発掘調査区の土層と火山灰について」（静岡市教育委員会に提出）
- 加藤芳朗（1989）「静岡市蛭子遺跡の土層の地学的検討」（静岡市教育委員会に提出）
- 増島淳（1978）「富士・愛鷹山麓の火山灰層と先史時代遺跡との関係」静岡地学、38号、1-10頁。
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所（1989）『静岡の原像をさぐる』22-25頁。

第6節 神明原・元宮川遺跡の古環境—珪藻遺骸分析を中心にして

高 橋 豊 (静岡県立教育研修所)

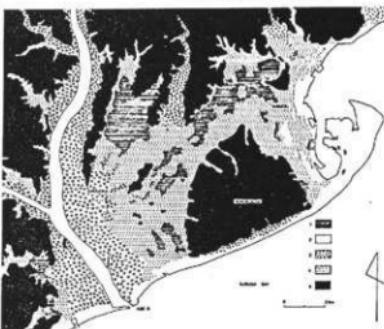
1. 安倍川下流平野
2. 大谷低地の沖積層の層序
3. 微高地にみる「旧期古大谷湾」の堆積物
4. 「新期古大谷湾」期にみる縄文後期～弥生中期の堆積物
5. 大谷低地の古環境の変遷
6. 珪藻遺骸群集

1. 安倍川下流平野

静岡・清水平野とも呼ばれる。静岡平野は安倍川下流から河口にかけての扇状地性平野で、賤機山の先端、静岡浅間神社付近の海拔27m付近を扇頂として勾配50/0で扇状地が広がり、末端に向かって高度を下げる。扇状地末端と有東丘陵との間には、後背湿地、大谷川低地と池田低地が、谷津山のかげに長沼低地がみられる。清水平野はその東方末端に続く海拔5m～7mの三角州性平野で、現在は静岡北方の浅畠沼に源をもつ巴川の流域にあたる。静岡平野では、安倍川の現河川に沿って一様に河成礫が分布するが、北方、東方へはそれほど広がっていない。流れの方向からいって北方は当然のことであろうし、東方は埋積された庵原山地の南に延びる尾根がその拡がりを妨げている。河成礫層の厚さは静岡市街中心部で少なくとも120mあり、この間に洪積世との境界があると思われ、大谷川付近では40m～80mに境界が予想されるが、まだ明らかではない。北部の浅畠低地、西部の丸子・小坂低地、東部の長沼低地、東南部の大谷低地など、安倍川氾濫原の陰になる地域では、泥層が広く分布するが、表層部数m特に顕著で、長沼や大谷低地では10m～15mまで、20m以下になると、東南部では疊相が卓越する。浅沼沼の泥層の厚さは25m、小坂のそれは30m以上に達し、下部に海棲貝化石を含み、より古くから入江ないし



第105図 静岡・清水平野の地形図
(2 mごとの等高線を示す)

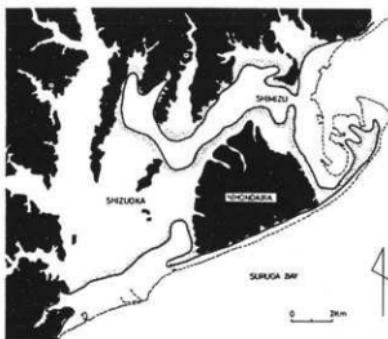


第106図 静岡・清水平野の表層地質図
表層5mまでに卓越する地質を示す
1:シルト 2:砂 3:裸
4:泥砂礫互層 5:山地

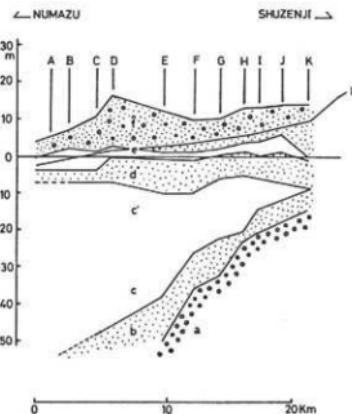
低湿地としての条件が続いてきたよう見える。清水平野では巴川低地の泥質相は厚い所では40mに達し、しばしば、海棲貝化石を含んでいる。清水市永楽町付近の沖積層上部にも貝化石を産するが、海成層上端の海拔高度は約4mを示し、地盤の変動を考えなければ、縄文時代前期の高海水準は現在よりも4~7m高かったと推定されている。Lunula cardia retusa モクハチアオイや造礁サンゴの破片の产出から考えて、当時の水温は現在より若干高かったと思われる。第105図~第107図に静岡・清水平野の2mごとの等高線図、表層5mまでに卓越する地質をあらわした表層地質図、縄文時代前期とされる高海面期の古地理図を示す。等高線図と表層地質図・古地理図はよく対応している。(土・高橋1972)

2. 大谷低地の沖積層の層序

三角州性扇状地平野である静岡の海岸平野は、背後の隆起する山地を侵食する安倍川の下流から河口にかけて形成されている。大谷低地は、この三角州性扇状地平野の東の末端が有東丘陵に達したところに拡がる後背湿地で、この低地は表層堆積物からみて、北の池田低地、谷津山のかげの長沼低地へ、西の登呂遺跡周辺の低地へと続く。一般に、大きな河川の下流平野の形成過程を示す層序は、ボーリング資料から推定できる。沖積平野を南北に截った断面図(第108図北伊豆平野の例参照)では、下位から下部疊層(河成)、下部砂層(汽水成-海成)、下部シルト層(海成から汽水成-淡水成)、上部砂層(非海成)、上部シルト層(汽水成-海成)、最上部泥砂疊層(陸成)(ただし、大谷川沿いの大谷低地の沖積層は、前述の様に安倍川の砂疊層がとどかない後背湿地にあたるため、最上部泥砂疊層(河成)相当の大部分はシルト・粘土からなる)の順になっており、海成シルト層を中心とした2つの輪廻が認められる。大谷低地の沖積層も例外ではないと思われる。縄文海進に伴う沖積層の一般的な堆積輪廻は108図の例の



第107図 静岡・清水地域の古地理図
縄文時代前期とされる高海面期の
頃の海岸線を推定したもの



第108図 北伊豆平野“沖積層”の模式的断面図

L: 対野川の現河床面
A-Kはボーリング地点
a: 下部疊層 b: 下部砂層 c,c': 下部シルト層 d: 上部砂層 e: 上部シルト層 f: 最上部泥砂疊層

ような模式断面で示される。つまり、約1.8万年前のウルム冰期の極相期に、100m程の海水準低下に伴って80~100mの深い谷が削り込まれた。その後、この谷には、温暖化に伴う海水準の上昇により、内陸深く海が入った。この内湾を埋め立てて、ここに厚い沖積層を堆積し、海岸平野を形成した。最終氷期以降の温暖化に伴い、縄文早期の9000年~8000年前以前、速い速度で海面上昇するといわゆる縄文海進が進み、海水準が現在より少なくとも+3m前後まで上昇し、内陸深く海が入った。海水準の上昇速度に応じ、海岸線の後退に対応し、海岸線からの距離に応じて、この内湾には、山地からの多量の堆積物や沿岸流で運ばれた堆積物が、第108図に見られる層序で堆積した。

下部シルト層は北から南へ向かって急に厚さを増し、海面上昇に伴って南から北に海進が進み、やがて全域にわたる内湾「旧期古大谷湾」(古安倍川の谷に拡がった大きな内湾のうち、大谷川に沿った地域に限って、旧期古大谷湾と呼ぶことにする)が形成されたことを示している。この内湾は下部シルト層上部層から上部砂層にかけて一時陸水化した。再び上部シルト層の堆積時期には、内湾、つまり安倍川の三角州性扇状地平野の東の末端が有東丘陵に達したところに拡がる後背湿地に拡がった内湾「新期古大谷湾」がつくられた。この間の変化には海面上昇の一時的停滞または小海退が関係しているかもしれない。旧期古大谷湾の時におそらく縄文前期の高海面期があると考えているが、この時の海水準はどのくらいだったのであろうか。

大谷低地の沖積層の具体的層序はつぎのとおりである。

大谷川に沿って北に、大谷、西大谷、水上、宮川、東名高速道路を挟んで直ぐ北側の片山には、ボーリング資料で描かれる沖積層の断面をみると、前述の沖積層の基本層序が認められる。

地表から約40mの標高-30m以深には砂礫層が卓越するのが認められるが、沖積層の基底の「下部礫層」、「下部砂層」相当層かどうか確認できない。標高-30m~-10m付近には、「下部シルト層」相当の内湾の堆積物とみられるシルト・粘土層が卓越するが、古安倍川や有東丘陵からの砂礫を頻繁に挟む。標高-10m付近には、シルトを挟み礫を含む砂層が発達する。「上部砂層」相当層と思われる。標高士0m付近から標高数mの地表までは、「上部シルト層」相当のシルト・粘土層が數m堆積し、その上には、発達した安倍川の三角州性扇状地の後背湿地の堆積物としての腐植混じりシルト・粘土層(「最上部泥砂礫層」相当)が數m堆積する。

大谷川沿いの標高士0m付近から地表までの層序については、現地踏査結果に基づいて第109図に示した。

3. 微高地にみる「旧期古大谷湾」期の堆積物

大谷低地の表層数mの沖積層を代表する層序は、第109図Aの水上3区、第109図Bの大谷1.2区、宮川1区(大谷川I p.121参照)の表層の地質柱状図で代表されると考えられる。これらの沖積層は腐植混じりシルト・粘土層から成り、次のような特徴がみられる。

第109図Aで示される大谷1、2区の標高+1.5mの沖積層中の木片のC14年代測定値は 6520 ± 120 y.B.P.(縄文早期後半)の値を示す。これらシルト・粘土層からなる一連の堆積物の上限直下には、写真9、第109図Aの水上3区の標高+5mと標高+4.4mの層間に2枚の腐植土がみられる。これらの腐植土に対比される宮川1区の標準土層(大谷川I P.120~P.121)上部の2枚の「腐植土A」、「腐植土B」のC

14年代測定値は4500±150y.B.P.（縄文中期中葉～後葉）、5090±180y.B.P.（縄文前期）を示す。

このことは、第109図Aの水上3区の標高0m～+5.5mにみられるシルト・粘土層からなる一連の堆積物は、およそ8000年～9000年前に始まった縄文海進の急速な海水準上昇に伴って、縄文中期にかけて拡がった「旧期古大谷湾」の内湾を急速に埋積していく堆積物であることを示している。また、これを裏付けるように、第109図Bの大谷1、2区の標高+0.2mの青灰色粘土には、珪藻遺骸分析の結果、第39表のように、海水域ないし汽水域が拡がっていたことを示す珪藻遺骸群集がみられた。また第109図Bの水上3区の標高+5.3mの暗褐色腐植土の珪藻遺骸分析の結果は、第40表のように、汽水域が拡がっていたことを示唆し、縄文中期にかけて拡がったとおもわれる「旧期古大谷湾」の存在を裏付けている。

これらの「旧期古大谷湾」堆積物の上部は、次の海水準の一時的停滯、ないし小海退時に河川によって侵食され、「微高地」と呼ばれる地域にしかその堆積面を残していない。水上3区の微高地を形成する

沖積層の上部の腐植土Aの標高は、西大谷で+5.0m、宮川1区で+4.7mである。このことは、縄文海進極相の海水準が+4mから+5mに達していたことを示しているようにおもわれる。

古安倍川や有度丘陵からの漂砂礫は、縄文海進極相の高海水準に対応して漂移し、湾口を塞ぐようにして砂礫嘴Iを形成した。「旧期古大谷湾」の湾口を閉ざし、厚いシルト・粘土層を堆積させたであろうこの砂礫嘴Iは、現海岸線より冲合いに在って、標高+4m～+5m以上の高まりをみせていたらしい。

4. 「新期古大谷湾」期にみる縄文後期～弥生中期の堆積物

下部シルト層上部層堆積後一時陸水化したよう、再び上部シルト層の時期には内湾「新期古大谷湾」が拡がった。この間の変化には海面上層の一時的停滯または小海退が関係しているかもしれない。

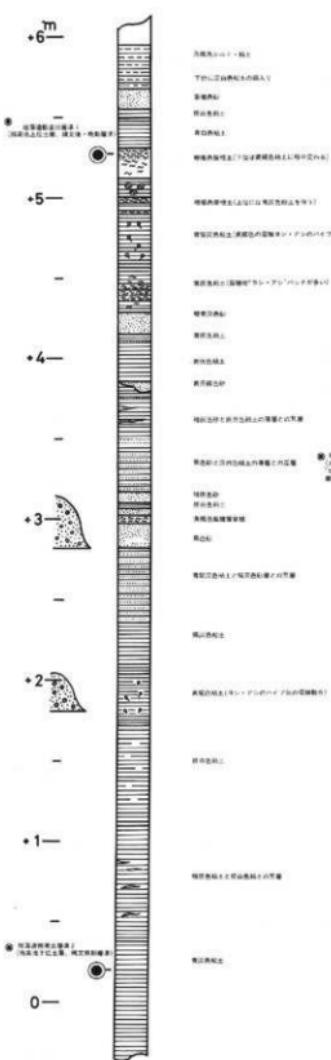
これらの現象は、第109図Bの大谷1、2区の微高地堆積物と、これを侵食して拡がった内湾に堆積したシルトや腐植からなる堆積物との関係にみられる。第109図Bの下位にみられる大谷1.2区の厚いシルト・粘土層からなる沖積層の堆積年代は、標高+1.5mの粘土層に埋積していた木片のC14年代測定値が6520±120y.B.P.の値を示すことから、縄文早期の縄文海進時の堆積物とみられる。これらは、第109図Bの水上3区の一連のシルト・粘土層同様「微高地」を形成する沖積層に相当する。

「微高地」を形成する沖積層を侵食し拡がった「新期古大谷湾」の深さについては、大谷1、2区では標高+2.8mのレベル以上にこの微高地を切って侵食する谷地形が発達し、周辺の微高地の標高が西大谷

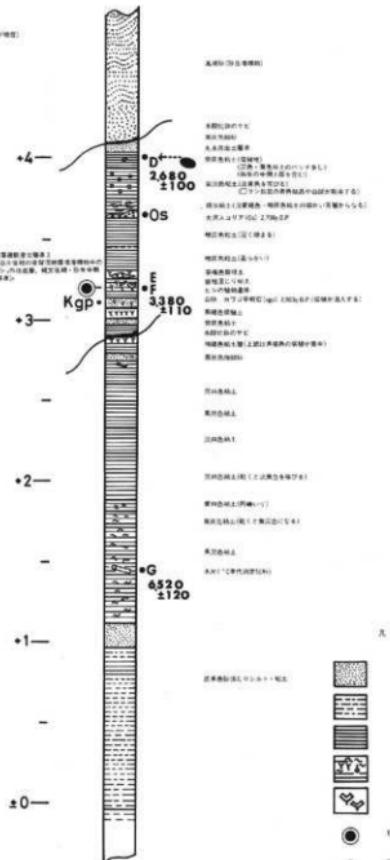


写真9 大谷低地の沖積層の層序

A. 水上3区(地層はぎとり地点)の沖積層・
微高地堆積物の地質柱状図



B. 大谷1・2区の微高地堆積物を侵食して
堆積する縄文後期～弥生中期の堆積物の
地質柱状図



第109図 微高地にみる「旧期古大谷湾」期の堆積物とこれを侵食する「新期古大谷湾」期の堆積物

で+5.5m、水上3区で+6.0mであることから、およそ3m~4m程度であろうと考えられる。

「新期古大谷湾」が拡がった時期については、次の2点が鍵になる。この水域のシルト・腐植からなる堆積物中に、大沢スコリヤOs(降下年代2700y.B.P.)やカワゴ平軽石Kgp(降下年代2900y.B.P.)など、堆積年代決定の指標となる火山灰がみられること(第109図B)。さらに、標高+4.0mの同層最上部のシルト層には丸木舟が弥生中期の遺物を伴って埋積しており、この舟の木片のC14年代測定値が 2680 ± 100 y.B.P.(縄文晚期~弥生初期)の値を示していること。つまり、大谷1、2区の「微高地」を切って侵食する谷地形には、大沢スコリヤ-Osやカワゴ平軽石-Kgpを挟む縄文後期から上部の弥生中期の遺物包含層までが堆積していることから、縄文後期から弥生中期に「新期古大谷湾」の水域が拡がったと考えられる。

これらの内湾の堆積物の一部が最上部を3m程度の風成砂丘堆積物で覆われていることは注目される。

「新期古大谷湾」の堆積物の厚さについては、大谷1、2区の沖積層の断面が注目される。より海岸に近い地点の大谷川河口部には、標高-3.87m~+3.43mに縄文海進極相から縄文中期にかけての高海水準の時に形成された漂砂礫からなる砂礫嘴IIがみられ、この漂砂礫はさらに標高+5.5m~6.75mまで風成砂丘で覆われる。この砂層の1部が第109図Bの上位にみられる。大谷川低地には、漂砂礫からなる砂丘に流路を断たれたかのように、大谷1、2区から北に向かって、微高地堆積物を侵食した凹地に堆積する粘土混じりシルト・腐植土層がみられる。標高と厚さは次の通りである。大谷1、2区の断面では、+1.67m~+3.77mに厚さ2.10m、+1.67m~3.57mに厚さ1.90m。この値は東名高速道路の北の片山では+0.46m~+3.46mに厚さ3.00m程度で、場所によっては、+0.25m~+3.65mに厚さ3.90m、さらに特定地域では、この上部に砂層を挟んで地表+9.85mまで腐植混じり粘土や腐植を厚く堆積するのがみられる。

「新期古大谷湾」の堆積環境については、珪藻遺骸群集からみて次のように考えられる。

第109図Bの標高+3.2mのヒシの実などを混入する腐植土混じり粘土層中の珪藻遺骸群集は、第40表のように、汽水域にもみられる珪藻遺骸が30%をしめ、砂礫嘴IIで閉塞された内湾がしだいに淡水域化し、後背湿地化していくことを示している。

5. 大谷低地の古環境の変遷

つまり、大谷低地には、縄文海進極相から縄文中期にかけての高海水準時以後、縄文後期にかけて海面上昇の一時的停滞または小海退がみられ、「微高地」を形成する沖積層は広い範囲にわたって2m~3m程侵食された。この時、古大谷川河口には、古安信川や有東丘陵からの漂砂礫からなる縄文海進極相から縄文中期にかけて高海水準が保たれた時期に成長した砂礫嘴が、標高+3.5m以上の高まりをみせ陸上に姿を表わし砂礫嘴を形成し、古大谷川河口を塞いでいった。弥生中期にかけて小海進、海水準の上昇が再びみられたようで、微高地の浸食の後の大谷低地には再び内湾「新期古大谷湾」が広がった。やがて、砂礫嘴IIや風成砂丘で閉塞された「新期古大谷湾」には、厚さ2m前後の粘土混じりシルト・腐植土層が堆積した。同種の堆積物の分布からみて、「新期古大谷湾」は大谷、高松、登呂、池田、長沼と広い範囲にわたって拡がったようである。「新期古大谷湾」の拡がった時代は、堆積物中に指標火山灰の大沢スコリヤ-Osやカワゴ平軽石-Kgpを挟み、同堆積物が縄文後期から上部の弥生中期の遺物包含層に

第39表 水上第3区の+0.2mの層準の青灰色粘土層にみられる珪藻遺骸群集



■M-----	2%
■M-B-----	4.8%
■B-----	1.9%
■B-F-----	1.8%
□F-----	12%

Aegicula	hemiculus(Bhr.) Karst.	6
Amora	retusa Greg.	2
Cyanoptychus	schaefferi Bhr.	13
Cyclotella	laevisata(Ag.) Ag.	3
Cyclotella	costata(Bhr.) Mots.	4
Dialonectis	suborbicularis(Greg.) Cleve	2
Diplosira	ovalis(Greg.) Cleve	10
Dulomella	elliptica (Kutz) Cleve	4
Gonytremma	constrictum Bhr.	1
Grammatophora	undulata Bhr.	3
Hyalodiscus	scuticum(Kutz) Grun.	5
Navicula	concentrica Grun.	13
Navicula	persimilis(Bhr.) Mots.	6
Navicula	merina Kutz.	1
Nitzschia	punctata(W. Smith) Grun.	10
Pinnularia	divergens W. Smith	2
Pinnularia	sp.	1
Rhomidiella	gibberula(Bhr.) J. G. Meij.	10
Sphaerocystis	phenomenalis(Kutzsch) Bhr.	1
Stedera	tubulata(Ag.) Mots.	2
Tabellaria	flourensii(Bhr.) Kutz.	1

100%

第40表 水上第3区の+5.3mの微高地部の黒褐色腐植土にみられる珪藻遺骸群集



■M-----	4%
■M-B-----	5%
■B-----	4%
■B-F-----	3.5%
□F-----	47%

Cyclotella	ciliata(Gmelin) Grun.	7
Diatoms	ovalis(Greg.) Cleve	23
Diatoms	elliptica (Gmelin) Cleve	2
Bacotia	granulata(Bhr.) var. bidens (W. Smith) Grun.	6
Bacotia	diadema Bhr.	2
Bacotia	pectinifera	1
Bacotia	sp.	4
Gonytremma	angustatum(Greg.) Park	1
Nitzschia	ambiguus(Bhr.) var. minor Grun.	9
Navicula	serpentina(Bhr.) Mots.	4
Navicula	decimata(Bhr.) W. Smith	4
Navicula	mitica Kutz.	5
Navicula	radicans Kutz.	1
Navicula	sp.	1
Nitzschia	pales W. Smith	2
Nitzschia	planata W. Smith	1
Nitzschia	dissipa(Gmelin) Grun.	1
Pinnularia	viridis(Nitzsch) Bhr.	8
Pinnularia	isthmea Gmelin	4
Pinnularia	divergens W. Smith	1
Pinnularia	sp.	4
Rhopalodia	gibberula	4
Staurosia	sp.	1
Thelassosira	fluvialis Rost.	4

100%

第41表 大谷第1・2区のヒシの層準の珪藻遺骸群集



■M-----	1%
■M-B-----	2%
■B-----	1.4%
■B-F-----	1.3%
□F-----	7.0%

Actinocythere	infusa(Gmelin) Grun.	1
Caloneis	tuuliensis(Greg.) Cleve	1
Cyanoptychus	naviculiformis Avera.	4
Bacotia	arcuata Bhr.	6
Bacotia	diadema Bhr.	4
Bacotia	sectinoides(Gmelin) Bhr. var. minor(Gmelin)	2
Bacotia	Bhr.	2
Bacotia	subtrigona Gandhi	1
Bacotia	ovalis Bhr.	14
Bacotia	sp.	1
Prasinula	viridis(Tomomatsu) Bhr. Toni	
	var. elliptica Bhr.	1
Gonytremma	acuminatum Bhr. var. cornuta(Bhr.)	
	K. Smith	3
Gonytremma	exochroisticum Bhr.	3
Gonytremma	gracile Bhr.	3
Gonytremma	istraticola Kutz. var. pusilla Grun.	1
Gonytremma	parvum(Gmelin) Grun.	3
Gonytremma	sp.	2
Gyrosigma	spencerii(Gmelin) Griff. Hemfr.	1

Hausmannia	ambiguus(Bhr.) var. major Grun.	2
Navicula	costulata Kutz.	1
Navicula	decisa(Bhr.) W. Smith	3
Navicula	granulata Bhr.	1
Navicula	hungarica Grun.	2
Navicula	peregrina(Bhr.) Kutz.	12
Navicula	pusilla Kutz.	10
Navicula	pusilla Kutz. var. rectangularis(Greg.) Grun.	1
Navicula	radicans Kutz.	1
Navicula	subbrachiocephala Bhr.	1
Nitzschia	tryblionella Bartsch	1
Pinnularia	divergens W. Smith	2
Pinnularia	gibba Bhr. var. parva(Bhr.) Grun.	1
Pinnularia	subcostata Greg.	1
Pinnularia	viridis(Nitzsch) Bhr.	1
Pinnularia	sp.	2
Rhopalodia	gibberula(Bhr.) J. G. Meijer	2
Spirula	similis var. dentata(Kutz) Grun.	4

100%

あたることから、縄文後期から弥生中期と考えられる。この時期の海水準は「新期古大谷湾」の堆積物の層準から+3.5m程度と考える。

6. 珪藻遺骸群集

“沖積層”の堆積環境を調べるために、数mの遺跡断面の腐植、シルト・粘土に含まれる珪藻遺骸を検討した。試料は10cmごとに採集した。その中から25gの試料約105点を選び、酸化分解処理を経て、ランダムに各200個体の珪藻を同定した。そのうち、代表的な試料とそれに含まれる珪藻遺骸群集3組の組成を第38表～第40表に示した。なお、生態区分による組成、即ち各試料における海棲、汽水棲、淡水棲の区分については、MILLER (1964) に従って次の5つに区分し、それぞれの比率を算出した。

1. 海棲種M：これは海棲種と海棲ときに汽水棲の種を加えたもの。
2. 海棲ないし汽水棲種M-B
3. 汽水棲種B：汽水棲ときに海棲、及び汽水棲ときに淡水棲のものを加えてある。
4. 汽水棲ないし淡水棲種B-F
5. 淡水棲種F：淡水棲種と淡水棲ときに汽水棲の種を加えたもの。

文 獻

- 土 隆一・高橋 豊 (1972) ; 東海地方の沖積海岸平野とその形成過程。地質学論集 第7号、p.27-37.
土 隆一 (1971) ; 静岡・清水平野の地形・地質について。竹原記念論文、p.183-189.
高橋 豊・小泉 格 (1987) ; 浜名湖の珪藻遺骸群集。地質学雑誌、Vol.93、No.6、p.419-429.

第7節 神明原・元宮川遺跡出土木製品の樹種について

山内文(元国立科学博物館)

遺物の大半は古墳～奈良時代のもので多くは祭祀具である。調査した木製品と樹種とは表92に示してあるが、以下に遺物と樹種名および材の同定に用いた解剖学的特徴を簡単に記した。なお木製品のいくつかについて多少の考察を試みることとした。

丸木弓

イヌマキが5点ある。これまで最も出土例の多い丸木弓はイヌガヤであるが、本遺跡ではイヌガヤは唯1例用途不明の芯持材があるのみである。中部地方の海岸に近い遺跡では、丸木弓はイヌマキが多い。イヌマキとイヌガヤとでは自然分布がやや違いイヌマキがやや海岸に近い暖地に、イヌガヤはこれより上部の山地に分布することと関係があると考えられる。

櫛櫛

これまで各遺跡から出土した櫛については、内荒遺跡(印刷中)でやや詳しく記したのでここでは省略する。本遺跡からは17枚と割合に多量に出土している。樹種は表に示してあるが出土数の多い順に、ツゲ(9)、イスノキ(4)、カナメモチ(2)、ネジキ(2)である。ツゲ、イスノキは出土櫛ではきわめて普通の樹種であり、現在でも作られている。カナメモチおよびネジキ(ネジキは櫛材では通常カシオシミと云う)は、静岡県下の伊場遺跡から出土しているが他県からの出土は知らない。ともに木櫛の素材としては普通のものであるが現在は作られていないようである。

椀・漆椀

椀はヒノキ、ケヤキが各々2点ずつとスギの計5点である。針葉樹材の椀は本遺跡出土の他はイヌガヤが京都府深草遺跡、ヒノキは福岡県板付遺跡などの弥生遺跡から出土している。なおケヤキは奈良県唐古遺跡から出土している。

漆椀はケヤキ(5)、ブナ、シオジの各1点ずつの計7点である。中世の各遺跡から出土しているものと同樹種でケヤキの出土数の多いのもきわめて普通である。これまで中世の遺跡からは、漆椀に針葉樹材の出土はない。

丸木舟

用材はクスノキである。発掘丸木舟の用材はカヤが多い。これは千葉県下での出土が多いためである。これまでにクスノキの発掘丸木舟は、新潟県次第浜、神奈川県葉山海岸、千葉県浜田鉢キリ神社洞窟、同県猿ヶ川、大阪府東奈良遺跡、同府船出橋、同府今福町鯨江川、同府天神橋、同府大仁町鷺州、兵庫県長越遺跡、和歌山県笠島の11点ある。新潟県はクスノキの分布圏ではない。従ってこの舟は次第浜に漂着したものであると考えられる。このほか静岡県下では、スギが7例、登呂遺跡、山木遺跡の各2点ずつ、千浜村、沢田遺跡、梶子遺跡の各1点ずつ、スギ以外ではシイ、クリ共に梶子遺跡出土の各1点ずつがある。

櫛

カシが2点である。近年発掘が盛んで更に多くの発掘例があると思われるが、手許の資料では、櫻用材としてはイヌガヤの出土例が多い。これは丸木舟と同様千葉県下の出土が多いことによる。静岡県下では耳川遺跡(4)、有東遺跡(2)、千葉県八日市場などからカシの櫻が出土している。その他の樹種では耳川遺跡 クリ、八日市場 タブノキ、埼玉県伊奈氏遺跡 カヤ、有東遺跡、千葉県畠遺跡 スギ、梶子遺跡 サワラがある。

以上明らかとなつた樹種には別に問題となるものはない。大井川を境としてこれより東の神奈川県辺りまでの遺跡からはスギの出土がきわめて多く本遺跡も例外ではない。スギが調査数全体の約66%強を占めている。

出土木製品

斎串 89点、スギ 85、ヒノキ 4

スギ : 239、3630、3646-1、3646-2、5045、5061、5069、5632-1、5486-3、5677、2-487、2C-549、3-2、3-151、3-188、3-532、3-562、3-645、3-651、3-653、3-705、3-719、3-720、3-752、3-756、3-768、3-769、3-905、3-907、3-927-1、3-935、3-976、3-977、3-983、3-1006、3-1054、3-1064、3-1081、3-1106、3-1117、3-1134、3-1139、3-1141、3-1145、3-1152、3-1156、3-1172、3-1185、3-1188、3-1189、3-1220、3-1221、3-1257、3-1287、3-1289、3-1293、3-1294、3-1303、3-1317、3-1339、3-1341、3-1387、3-1390、3-1427、3-2155、3-2532、3-2598、3-2930-1、3-3120、3-3210、3-3500、3-3565、3-3567、3-3637、3-3666、3-3722、3-3723、3-3724、3-3755、3-3760、3-3770、3-3772、3-3893-1、3-4077、3-4096

ヒノキ : MG4-3-243、3-252、3-974、3-1082

はし状木製品 3点 スギ 3

スギ : 2-143、2-144、2-145

馬形 36点 スギ 35、ヒノキ 1

スギ : 630、632、5014、5015、5048、5101、5102、5104、5107、5100-a、5100-b、5109、5110-1、5110-2、5111、3-237、3-272、3-277、3-309、3-709、3-710、3-721、3-906、3-990、3-1264、3-1265、3-1310、3-2000、3-2045、3-2185、3-2725、3-3122、3-3646、3-3668、3-4074

ヒノキ : 3-1206

人形 37点 スギ 34、ヒノキ 2、針葉樹皮 1

スギ : 5655、5939-1、3-57、3-73、3-105、3-194-1、MG6-3-243、3-257、3-643、3-647、3-648、3-649、3-656、3-657、3-708、3-908、3-952、3-953、3-991、3-1282、3-1283、3-1302、3-1354、3-1395、3-1399、3-1802、3-2089、3-2144、3-2153、3-3097、3-3417、3-3418、3-3645、3-3850

ヒノキ : MG6-3-109 樹皮 : 3-2697

刀形 22点 スギ 22

スギ : 5106、5657、5957、3-72、3-324、3-533、3-632、MG4-3-641、3-711、3-750、3-759、

3-1031、3-1191、3-1200、3-1275、3-1304、3-1318、3-1423、3-1687、3-2475、3-3644、

3-4095

鳥形 1点 スギ 1

スギ : 5939

舟形 3点 スギ 3

スギ : 3-111、3-1169、3-2500

ミニチュア杵 2点 ヒノキ 1、カシ 1

ヒノキ : 3-686、カシ : 3-1004

ミニチュア鉄 2点 カシ 2

カシ : 2-267、3-404

ミニチュア臘 1点 スギ 1

スギ : MG3-3-641

農具 7点 イヌマキ 1、カシ 6

イヌマキ : 5363、カシ : 5346、5350、2-763、3-927、3-1023、3-4098

柄 12点、目釘 1点、イヌマキ 3、ヒメコマツ又はチョウセンマツ 1、スギ 1、ヒノキ 2、

カシ 2、クスノキ 1、サカキ 1、ネジキ 1、トキワガキ 1

イヌマキ : 3-717、3-1853、3-2160 ヒメコマツ又はチョウセンマツ : 3-760 スギ : 706

ヒノキ : 2-23-b、2-277 カシ : 2-398、3-1803 クスノキ : 2-23-a サカキ : 5366 ネジキ : 1563

トキワガキ : 5904-1

田下駄 1点 スギ 1

スギ : 3-2165

大足の棒 1点 スギ 1

スギ : 3-1046

楔 1点 ミツバウツギ 1

ミツバウツギ : 3-3138

杵 3点 カシ 1、ヤブツバキ 2

カシ : 3-3349 ヤブツバキ : 3-3383、3-3390

横槌 2点 ムクノキ 1、イタヤカエデ 1

ムクノキ : 2C-613 イタヤカエデ : 7006

砧 2点 アカマツ又はクロマツ 1、カシ 1

アカマツ又はクロマツ : 3-909 カシ : 3-3762

有頭棒 1点 スギ 1

スギ : 2A-51

丸木弓 5点 イヌマキ 5

イヌマキ : 5371、3-984、3-2159、3-3347-1、3-3347-2

木札 6点 スギ 6

スギ：334、3-640、3-1071、3-1833、3-2570、3-2580

編錐 9点 カシ 5、クヌギ 2、サカキ 1、ヤブデマリ 1

カシ：5003-1、5341、5343、2-2035、2-2069 クヌギ：5340、5344 サカキ：2-1185 ヤブデマリ：
2-909

火鐵臼 3点 スギ 1、広葉樹 2

スギ：2-427 広葉樹：707、2-275

容器 6点 スギ 4、カシ 1、ケヤキ 1

スギ：5002、5008、5017、3-1656、カシ：5328、ケヤキ：3-3162

檜 2点 スギ 2

スギ：5374、5382

皿 3点 ヒノキ 3

ヒノキ：7009、2-150、3-133

礎板 4点 スギ 4

スギ：2C-935、2C-936、2C-947、2C-950-3

加工木製品 6点 スギ 5、リンボク 1

スギ：5052、2-1406、2-1407、2B-121、3-3182 リンボク：3-323

横櫛 17点 イスノキ 4、カナメモチ 2、ツゲ 9、ネジキ 2

イスノキ：2-665、2C-546、3-2572、3-2626 カナメモチ：1242、3-3121 ツゲ：1558、5011、7015、
3-312、3-722、3-751、3-1324、3-1880、3-2042、ネジキ：1235、1972

縦櫛 1点 カシ 1

カシ：3-862

杭 4点 ヒノキ 1、クリ 1、カシ 1、コナラ 1

ヒノキ：3-46 クリ：5541 カシ：3-3981 コナラ：3-3387

建築部材 1点、クヌギ 1

クヌギ：7002

木とんぼ 1点 スギ 1

スギ：2-228

杓子 2点 スギ 1、ブナ 1

スギ：2B-7 ブナ：3-329

曲物 4点 スギ 2、ヒノキ 2

スギ：2C-950-2、3-556 ヒノキ：3-295-a、3-295-b

井戸枠 4点 スギ 4

スギ：3-269、3-270、3-271、3-272

下駄 6点 アカマツ 1、スギ 2、ヒノキ 1、オニグルミ 1、サワグルミ 1

アカマツ : 3-3781 スギ : 3-6、3-3863 ヒノキ : 3-1201 オニグルミ : 3-33 サワグルミ : 2C-622
榾 5点 スギ 1、ヒノキ 2、ケヤキ 2
スギ : 2-89 ヒノキ : 2-884、3-650 ケヤキ : 2-1405、3-4097
漆挽 7点 ブナ 1、ケヤキ 5、シオジ 1
ブナ : 2B-55 ケヤキ : 5019、2-1191、2-1221、2B-22、2B-23 シオジ : 2C-586
桶 1点 スギ 1
スギ : 3-1408
糸巻き 1点 ヒノキ 1
ヒノキ : 3-642
鎧 1点 モッコク 1
モッコク : 3-900
壺の蓋 1点 スギ 1
スギ : 7000
草履 5点 スギ 5
スギ : 705、2-217、2-265、2-285、2-1050
丸木舟 1点 クスノキ 1
クスノキ : 2A-135
櫂 2点 カシ 2
カシ : 5365、5372
やす 1点 モミ 1
モミ : 2-35
その他 1点 スギ 1
スギ : 5381
接着物 2点
広葉樹 : 2-1373-b、末詳2-1373-a
用途不明木器 35点 カヤ 1、イヌマキ 3、イヌガヤ 1、マツ 2、スギ 19、針葉樹 1、
カシ 4、ブナ 1、アズキナシ 1、ヤブデマリ 2
カヤ : 5364
イヌマキ : 5042、3-275、3-2804 イヌガヤ : 2-1284 マツ : 950-1、3-743
スギ : 2-141、2-384、2-619、2-688、3-274、3-383、3-654、3-700、3-1074、3-1258、3-1363、3-1373-1、
3-1373-2、3-2046、3-2070、3-2539、3-3596、3-3749、3-2927、3-3183 (3-2927、3-3183は1
対で1点) 針葉樹 : 2-1368
カシ : 2-370、3-419、3-745、3-3600 ブナ : 2-832 アズキナシ : 5335 ヤブデマリ : 2-30、MG
3-3-109

*カシ : アカガシ属1種

樹種と木製品

カヤ *Torreya nucifera*

1点

用途不明木製品 (1)

仮道管に2本対になる傾向がある螺旋肥厚が残存していた。カヤの螺旋肥厚は一般に保存は不良である。試料も例外ではなかった。

何に使用されていた製品であるのか、夏材部付近の細胞にとくに黒褐色の物質が詰まっていた。

イヌマキ *Podocarpus macrophyllus*

12点

農具 (1)、鍔及び鎌の柄 (3)、弓 (5)、用途不明品 (3)

木部柔組織(樹脂細胞)は散在状、分野膜孔はヒノキ型である。

材は緻密で割裂性が少ない。従って丸木のまままで使用することが多い。

イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia*

1点

用途不明木製品 (1)

樹脂細胞は散在状、仮道管に螺旋肥厚がある。カヤに比べて細胞が小さく、樹脂細胞の存在と共に螺旋肥厚も保存が良い。これらによりカヤとの識別は簡単である。

材はきわめて弾性に富んでいるため丸木弓に使用されることが多く、これの用材としては出土例が最も高い樹種である。

モミ *Abies firma*

1点

やす (1)

年輪界に時に樹脂細胞が出現する。放射組織細胞に単膜孔が多く存在し、分野膜孔は縁部のきわめて少ないスギ型である。

材色は白く、材質は軽軟である。

マツ属1種 (アカマツ又はクロマツ) *Pinus sp.* (*P. densiflora* or *P. thunbergii*) 3点

砧 (1)、下駄 (1)、用途不明木製品 (1)

垂直・水平樹脂溝が存在する。放射仮道管が存在し、その細胞膜に鋸歯状肥厚が存在する。分野膜孔は大形の窓状である。これらの特徴から二葉松のアカマツ又はクロマツと同定した。鋸歯状肥厚はアカマツよりクロマツが一般に少ないが、これと相対的な区別に過ぎない。材の組織からの識別は困難な事が多いためアカマツ又はクロマツと同定した。

マツ属1種 (ヒメコマツ又はチョウセンマツ) *Pinus sp.* (*P. himekomatsu* or *P. koraiensis*)

1点

鎌の柄 (1)

放射仮道管の細胞膜は平滑で鋸歯状肥厚はない。この特徴以外の組織は二葉松のものと同じである。以上の特徴から五葉松のヒメコマツ又はチョウセンマツと同定した。

マツ属1種 *Pinus sp.*

1点

用途不明木製品

材の保存不良で鋸歯状肥厚の有無の確認が出来なかつたためマツ属1種とした。

スギ <i>Cryptomeria japonica</i>	248点
斎串 (85)、はし状木製品 (3)、馬形 (35)、人形 (34)、刀形 (22)、鳥形 (1)、舟形 (3)、ミニチュア 膳 (1)、歯の柄 (1)、田下駄 (1)、大足杵 (1)、有頭棒 (1)、木札 (6)、火鑓白 (1)、容器 (4)、槽 (2)、 礎板 (4)、加工木製品 (5)、木とんぼ (1)、杓子 (1)、曲物 (2)、井戸杵 (4)、下駄 (2)、椀 (1)、桶 (1)、壺の蓋 (1)、草履 (5)、その他 (1)、用途不明木製品 (19)	
樹脂細胞は主に夏材部付近に散在する。放射組織の分野膜孔はスギ型で1分野に2コ存在する事が多い。	
ヒノキ <i>Chamaecyparis obtusa</i>	20点
斎串 (4)、馬形 (1)、人形 (2)、ミニチュア杵 (1)、短刀の柄 (1)、目釘 (1)、皿 (3)、杭 (1)、曲物 (2)、下駄 (1)、椀 (2)、糸巻き (1)	
樹脂細胞は夏材部にやや接線状に配列する。樹脂細胞の水平膜に結節状肥厚がある。放射組織の分野 膜孔はヒノキ型で1分野に主に2コ存在する。	
オニグルミ <i>Juglans mandshurica</i> subsp. <i>sieboldiana</i>	1点
下駄 (1)	
半環孔材、木部柔組織は1列の接線状配列をする。放射組織は同性、1-4細胞列で時に細胞内に集 晶を包含している。	
サワグルミ <i>Pterocarya rhoifolia</i>	1点
下駄 (1)	
散孔材、道管は数個発生し放射方向に複合する、木部柔組織は1列の接線状配列をする。放射組織は 同性、1-2 (3) 細胞列である。	
クリ <i>Castanea crenata</i>	1点
杭 (1)	
環孔材、春材部大道管は放射径は500μmに達する、填充体が多い、小道管は集まって火炎状に配列する。 放射組織は1細胞列である。	
アカガシ属数種 <i>Cyclobalanopsis</i> spp.	27点
農具 (1)、鉄斧・鎌の柄 (2)、ミニチュア杵 (1)、ミニチュア歯 (2)、杵 (1)、歯 (2)、砧 (1)、編籠 (5)、容器 (1)、縦櫛 (1)、杭 (1)、槽 (2)、用途不明木製品 (4)	
放射孔材、広放射組織が存在する。道管と放射組織との交わる部分に瘤状の膜孔が存在する。結晶を 包含する樹脂細胞には大・小およびその存在数には種々ある。カシ類の材での相互間の識別は困難なこ とが多いためここでは単にアカガシ属とした。	
ブナ <i>Fagus crenata</i>	3点
杓子 (1)、漆椀 (1)、用途不明木製品 (1)	
散孔材、輪初に道管以外の要素 (仮道管など) が形成されている部分が多い。道管の穿孔板は単およ び階段状、放射組織は、単列、2-数列および広列のものとある。	
クヌギ <i>Quercus acutissima</i>	3点

編錠 (2)、建築部材 (1)

環孔材、大道管は単独で孔圈は1-2層、小道管の切口は円形で厚膜でその存在数は割合に多い。広放射組織が存在する。

コナラ *Quercus serrata*

1点

杭 (1)

環孔材、春材部道管は最大接線径 $170\mu\text{m}$ 、小道管は小径、切口は多角形で薄膜、放射方向に配列する。木部柔組織に薄酸石灰の結晶を包含している。広放射組織が存在する。

ケヤキ *Zelkova serrata*

8点

容器 (1)、椀 (2)、漆椀 (5)

環孔材、道管は単独または数個宛複合する。小道管には螺旋肥厚が存在する。放射組織は異性1-5-10細胞列で細胞内に薄酸石灰の大形の結晶を含有している。

クスノキ *Cinnamomum camphora*

2点

短刀の柄 (1)、丸木舟 (1)

散孔材、道管は単独または2-3個宛複合、穿孔板は单、木部柔組織は周囲状が顕著、大形の油細胞が存在する。放射組織は異性、1-2細胞列である。

イスノキ *Distylium racemosum*

4点

横樋 (4)

散孔材、道管は単独、その最大接線径 $60\mu\text{m}$ 、穿孔板は階段状、接線状に配列する木部柔組織が顕著である。放射組織は異性、1-2細胞列である。

リンボク *Prunus spinulosa*

1点

加工木片 (1)

散孔材、道管は単独または2-3個宛複合する。道管内壁に螺旋肥厚が存在する。穿孔板は单、放射組織は異性1-3細胞列である。

カナメモチ *Photinia glabra*

2点

横樋 (2)

散孔材、道管の穿孔板は单、大形の結晶を包含する木部柔組織が存在する。放射組織は異性、1-2細胞列、細胞内に褐色物質を含有している。

アズキナシ *Sorbus alnifolia*

1点

用途不明木製品 (1)

散孔材、道管の接線径は最大で $50\mu\text{m}$ と小径、穿孔板は单、道管内壁にかすかに螺旋肥厚が残っていた。木部柔組織は1列の接線状配列で時に大形の結晶を包含している。放射組織は1-2(3)細胞列、放射組織細胞の細胞膜は厚膜である。

ツゲ *Buxus microphylla* var. *japonica*

9点

横樋 (9)

散孔材、道管の最大接線径 $40\mu\text{m}$ 、切口は円形～橢円形で割合に厚膜である。穿孔板は階段状、穿孔は

梢円形～やや円形、bar（横線）の数は12本前後が多い。木部纖維組織の細胞膜も厚膜である。放射組織は異性、1～2細胞列である。

ミツバウツギ *Staphylea bumalda* 1点

散孔材、道管の最大接線径40 μm 、穿孔板は階段状、bar（横線）の数は多い。放射組織は1～6細胞列、多列放射組織の一方に直立細胞構成の高い単列部を持っている。鞘状細胞が多く存在する。

イタヤカエデ *Acer mono* 1点

横槌（1）

散孔材、道管は単独または2～3個宛複合する。穿孔板は单、木部柔組織に時に藤酸石灰の結晶を包含している。木部纖維細胞の細胞膜の厚薄によって横断面に現れる雲状の模様がカエデ属の特徴を現している。放射組織は同性、1～4細胞列である。学名で示してある通り広義のイタヤカエデである。

ヤブツバキ *Camellia japonica* 2点

杵（2）

散孔材、道管は単独を主とし時に2～3個宛接線方向に複合する。道管に螺旋肥厚が存在する。穿孔板は階段状、木部柔組織は1列の接線配列、道管と放射組織とが交わる部分には階段膜孔が存在する。放射組織は1～3細胞列、しばしば細胞内に大形の結晶を包含している。

サカキ *Cleyera japonica* 2点

鍔の柄（1）、編錐（1）

散孔材、道管の最大接線径45 μm 、多くは単独、切口は角丸の多角形、穿孔板は階段でbar（横線）は多数、道管と放射組織との交わる部分には対列状膜孔が存在する。放射組織は異性で1～（2）細胞列である。

モッコク *Ternstroemia japonica* 1点

鍔（1）

散孔材、道管の最大接線径45 μm 、穿孔板は階段状、道管の尾部に螺旋肥厚が存在する。木部柔組織は接線状に多数、道管と放射組織との交わる部分の膜孔は、階段状および対列状、放射組織は異性、1～3（4）細胞列、細胞内に褐色物質を多数含有している。

ネジキ *Lyonia neziki* 3点

短刀の柄（1）、横櫛（2）

散孔材、道管は単独時に2～3個宛複合する。単独道管の最大接線径50～60 μm 、穿孔は階段状、道管と放射と交わる部分は対列状膜孔、放射組織は異性で1～3（4）細胞列、単列のものは直立細胞構成である。

トキワガキ *Diospyros morrisiana* 1点

鍔の柄

散孔材、単位面積当りの道管数は少ない。道管の多くは単独時に2個宛複合しその接合膜は厚い。穿孔板は单、木部柔組織は周囲状、接線状、放射組織は同性1～2（3）細胞列である。放射組織は層階状配列をしない。

東海地方はトキワガキの北限で、トキワガキの名が示す通り常緑である。個体数は多い方ではない。
静岡県下の下野遺跡の鉄の柄も本種である（報告書ではカキと記されている。清水市下野遺跡1985）。

シオジ *Fraxinus spaethiana*

1点

漆桺 (1)

環孔材、春夏材の移行は急、道管は単独、時に2~3個複合する、接合膜が厚い、道管は大径である。
木部柔組織は周囲状および年輪状、放射組織は同性、1~2(3)細胞列である。

ヤブデマリ *Viburnum plicatum f. tomentosum*

3点

編鐘 (1)、用途不明木製品 (2)

散孔材、道管の切口は放射方向に長い多角形で小径、穿孔板は階段状、bar(横線)の間隔はやや広い、
道管の側壁の膜孔は階段状、木部柔組織は多数存在する、道管と放射組織との交わる部分の膜孔は階段
状、放射組織は異性、1~2(3)細胞列。

第42表 樹種と木製品との関係

木製品名	薺	馬	人	刀	鳥	舟	ミツチラス	義	柄	目	田	大	櫻	作	横	砧	有	丸	木	火	容	櫛	皿	加工	不	機	板	木	ト	曲	井	下	櫻	横	余	鋸	波	の	ヤ	波	合	
樹種名	半	本	洋	木	木	材	チ	チ	チ	チ	チ	チ	足	足	の	の	頭	木	頭	木	火	容	櫛	皿	加工	不	機	板	木	とん	曲	井	下	櫻	横	余	鋸	波	の	ヤ	波	合
カヤ																																										
イヌマキ																																										
イヌガヤ																																										
モミ																																										
アカマツ又は クコマツ																																										
ヒコマツ又は テウセンマツ																																										
マツ																																										
スギ	85	3	35	34	22	1	3			1	1	1	1					1	6	1	4	2	4	5			1	1	2	4	2	1	1	1	5	1	19	28				
ヒノキ	4	1	2			1		1	1												3			1			2	1	2		1										20	
オニグルミ																																										
サワグルミ																																										
タリ																																										
カシ		1	2	6	2				1	1								5	1				1	1											2	4	27					
ブナ																																										
クスギ																		2					1																			
コナラ																								1																		
ムクノキ																		1																								
ケヤキ																			1																							
クスノキ								1																																		
イスノキ																								4																		
リンボク																			1																							
カナメモチ																			2																							
アズキナシ																																										
ツダ																								9																		
ミツバツツギ																		1																								
イタヤカエデ																			1																							
ヤブツバキ																		2																								
サカキ										1									1																							
モッコク																																										
ネジキ										1													2																			
トキワガキ										1																																
シオジ																																										
ヤブダマリ																			1																							
針葉樹																																										
広葉樹																								2																		
不詳																			1																							
計	89	3	36	37	22	1	3	2	2	1	7	12	1	1	1	1	3	2	2	1	5	6	9	3	6	2	3	4	6	17	1	4	1	1	2	35						

第8節 神明原・元宮川遺跡出土の種実について

桃崎祐輔

1.はじめに

神明原・元宮川遺跡は、その調査区の大半が旧河道に位置し、加えて調査面積が広大なこともあって、発掘で得られた自然遺物は保存が良好であり、かつその量も膨大であった。

従来、遺跡出土の自然遺物は、人工遺物に比して副次的な取り扱いを受け、自然科学的な分析の対象とはなるものの、考古学的な側面からの分析は十分でないのが普通であった。当遺跡の調査においては、祭祀遺物に伴って多量の動植物遺体が出土しており、それらは共伴した祭祀遺物と不可分の関係をなし、祭祀において重要な位置を占めていた事は疑いない。実際に祭祀形態の復原を試みるならば、そこで使用される儀器および供膳形態も重要であるが、それに劣らずその内容物が注目されるべきであり、「中味」はより雄弁に祭祀の性格を物語るであろう。

この点については既に『大谷川II』において指摘がなされ、⁽¹⁾ そうした視点に立つ分析も試みられている。本文もその視点を踏襲しつつ、以下集成・分析を述べる。

2.種類

得られた植物遺体は多岐に亘り、報告者が植物の専門家でない事もあって、それらすべてを同定するに到らなかった。また回収された遺物は、当然遺存率が高く目に触れ易い大型のものに偏向する傾向に有るので、これらをもってただちに往時の反映とする事は出来ないが、おおまかな目安とはなるであろう。具体的な種名を挙げれば、モモ、アンズ、スマモ、ウメ、ヒヨウタン、ウリ類、オニグルミ、カヤ、イヌガヤ、トチ、イチイガシを始めとするドングリ類、マツの球果、センダン、それに加工痕のあるサクラ皮などであった。その中でも特に顕著なのがモモ・アンズなどのバラ科果核類の出土である。

(自然遺物一覧表参照)

3.小考

(1)モモ *Prunus persica* (Linn) Batsch

大谷川においては、合計9170個にもおよぶ桃核が出土している。それらは非常に多様な変異を示し、核長15.5~35.6mmに及び、いくつかの種に分類が可能である。

小清水卓二氏によれば、日本の遺跡出土桃核には4変種が認められ、var. *vulgaris* Maxim.(栽培モモ) var.*subspontanea* Makino(ノモモ) var.*antiqua* Koshimizu(コダイモモ)、およびvar.*nucipersica* Dipp.?(ズバイモモ?、所謂ネクタリン)であるという。これらの品種の核長、核幅、核厚の平均計測値および特徴は、栽培モモが $2.9 \times 2.1 \times 1.6$ cm程度で大型、長く扁平であるとし、ノモモが $2.1 \times 1.9 \times 1.5$ cm程度、中型でやや丸く、また小清水氏が命名したコダイモモは、 $1.9 \times 1.9 \times 1.3$ cm程度、小型球状を呈すとしている。しかし直良信夫氏は、小清水氏の分類は、典型的のものとしては認められるが、品種相互間の中間形態を示すものは漸次変化した明確な区分線を画す事は出来ないとしており、また近年では布留遺跡の種実の報告を行った埋蔵文化財天理教調査団が、コダイモモとされる、核長1.9cm前後の一群は漸

次大きくなつて2.0cm以上のノモモと混在するので、別亜種とするのは妥当ではなく、ノモモの未成熟果であろうとしている。⁽⁴⁾

大谷川のモモ核については、その量があまりに膨大に過ぎ、加えて時間の不足もあって個別計測を行うに到らなかつたが、便宜上から2.0cm未満を小型、2.0～2.5cm未満を中型、2.5～3.0cmを大型、3.0cmを越えるものを特大型とした。そのため品種ごとの把握は明確ではないが、小清水氏の謂う所の栽培モモ、ノモモ、コダイモモの典型はいずれも認められた。しかし、直良氏や天理教調査団の指摘にあるように、その中間的な様相を示すものも多く見受けられ、特にノモモとコダイモモは、分離独立して把握するのあまり意味がないように思われる。だが天理教調査団による、コダイモモをノモモの未成熟果とする指摘は、核の観察から見た成熟度やその比率から言えば、必ずしも的を得ているとは言い難い。しかし、呪術的な理由から、桃果の採取が特定日に集中する事は文献から推察され、有り得ない事ではない。⁽⁵⁾

静岡県内の弥生遺跡から出土する桃核は、地域・時期によって差異が認められるが、弥生時代～古墳時代前半では、比較的変異に乏しく、平面形が円形に近いノモモの比率が高いようである。例えば清水市長崎遺跡の、弥生～古墳前期墳迄を主体とする桃核は、ノモモが大半を占めた。大谷川出土桃核には、このほか核長2.0cm未満の頗る小型で、球状でなく卵型を呈すものが含まれ、その是非はともかく、所謂コダイモモとは異なるものが含まれていた。同様の核は徳島県徳島市の中島田遺跡（15c末～16c）でも管見に触れたが、別亜種（コダイヒメモモ？）であろうか。また、粉川昭平氏が中世以降に多く見られるとしている。やや細長く扁平、中程度の核長を見るタイプについては、類似したものがごく僅かに認められた。桃核の変異から見た限りは、大谷川の主体時期はやはり古代に置くべきであろう。

モモ核の品種については以上であるが、その中には少なからず穿孔を有するものが含まれていた。穿孔を有する桃核は早くから観察者の注目を集めしており、宮本常一氏や寺沢薰氏は、これを呪術的な意図になる人工遺物と見做しているが、古池博氏は石川県金沢市の二口六丁遺跡の報告中で、「動物のかじった跡のある核の存在については、すでに統説的な検討（吉岡金市、1967）⁽⁶⁾が発表されており、ネズミによるものと考えられている。」と述べ、埋蔵文化財天理教調査団の報告でもすべてネズミの噛跡としている。大谷川出土桃核についても、穿孔断面は削られてシャベル状を呈しており、金属利器よりはむしろ齧歯類の門歯によることを想定すべきと思われる。よって寺沢氏の、古墳期以降、「桃核に穴をあけベンダントにした」ものが近畿から東海地方にかけて見いだされはじめるという指摘は、現資料から見る限り妥当ではない。しかし、桃核を護符として用いる事は日本や中国の民俗事例に明らかであり、今後も注意を払う必要がある。徳島県の黒谷川郡頭遺跡や千葉県の村田川流域遺跡（仮称）では、桃核を象つたらしい土製品の出土が知られている。また桃仁の利用は、日本各地でそれらしい痕跡が見られ、『醫心方』の各種処方や『延喜式』⁽⁷⁾にも記載があるが、大谷川出土桃核に占める半欠の割合は僅か7.89%に過ぎず、自然破損も含めれば、桃仁の利用を窺わせる程ではない。このほか果皮が残存しているものが見られ、桃桑であろうか。トビケラの巣が付着するものもあり、旧河道よりの出土を裏づける。

桃核は北海道を除く日本全国の遺跡で普遍的に見出されるが、大谷川における出土量は、近畿地方の宮都を除けば、国内でも最も多い部類であると目される。モモはもちろん果物であり、食物残滓として

の核の存在も考えられるが、それ以上に、桃果の呪術的な性格が顧慮されて然るべきであろう。桃果が破邪・除災の効用を有する事は古代以降の漢籍に多くの記載を見ることが出来、日本の記紀神話もこの影響下に成立したと考えられる。各地の遺跡から出土する桃核の中には、明らかに陰陽道系の呪術行為を示すものが含まれており、そこに呪術性を指摘した例は有るが、十分な分析を行った事例は殆ど見あたらない。桃材を呪符や人形等の呪具に使用する記載が比較的多いのに対し、桃果を用いた具体的な祭式は、記紀神話及びそれに取材した祝詞を除くと非常に少ない。それでも『新撰龜相記』の註に「病の厄に桃を置くはこの由なり」と見え、また『古事類苑』に収録された『橘家雷除祭式』の中には、五月五日（旧暦）の午の時に東方に指した枝から桃の実を探り、これに神號を記して祈禱加持を施し、雷除の守とする旨が記されている。更に、桃を使用したと明言してはいないが、『今昔物語集』には、陰陽道祭式における果物類の使用について、幾つか具体的な記述が見られる。中でも巻十四の「山僧宿幡磨明石見貴僧語第四十四」において、比叡山の僧侶が幡磨（播磨）明石の浜で目撃した事として、僧の陰陽師が疫病を鎮めるため、砂上に胎藏界曼荼羅を描き、周囲に敷いた蘆の上に「土器ヲ以テ開闢ヲ奉ル。鉢供ニ五穀ヲ高盛リテ居ヘタリ。時ノ菓子モ皆ナ居ヘ次ケタリ」と見え、この「時ノ菓子（このみ）」、すなわち「季節の果物」に桃が含まれていた可能性は、祭祀遺構から出土する桃核の量の多さから推察して、極めて高いと考えられる。大谷川からは「南無大日如来」かと思われる墨書き木簡が出土しており、金剛界・胎藏界会の修法に則り、桃果を用いた祭儀が行われたかもしれない。

なお現在でも、西日本の祇園祭では、厄除けの縁起物として桃果を売る風習が有り、東日本では、東京都府中市大國魂神社の7月20日の祭礼において、李が厄除けの縁起物として売られる。これらの民俗事例は夏期の大祓に時期が接近しており、近畿地方の宮都遺構に於て人形などと共に大量に見出される桃核が、大祓と何らかの関連を持っていたことに起源を持つのではないか。大谷川の祭祀遺物は、年代観の確定を見ていないが、所謂「律令期祭祀」の範疇で把握されるものであり、桃核の大量出土も、これと無関係には論じられない。しかし近畿の律令期祭祀遺跡より出土する桃核については、位置付けが殆どなされておらず、現状に於て比較検討は困難である。ほぼ同時期に、桃核が祭祀遺物と共に伴し、大谷川と類似した性格が窺える遺跡の分布は、静岡県下に數カ所みとめられる他、東北から西日本に及んで見出される。大谷川出土の桃核の評価に際しては、今後これらの事例との比較検討が不可欠であろう。

(2)アンズ *Prunus armeniaca* (Linn)

核果類のうち、モモに次いで多く見出されたのがアンズである。アンズ核はモモ核に比して小型であり、顯著な特徴も有さず、アンズとした同定に不安を残すものではあるが、スモモ核に比してより小型でやや丸味を帯び、表面に微細な亀甲状の模様を有し、ウメ核のような刺突状の小穴が認められない点などからアンズと判断した。しかし一部の大型核にはスモモかアンズか現生種核との比較検討を行ってもなお判断に躊躇するものもある。もともとアンズ・ウメ・スモモはともにスモモ亜属 (*Prunophora*) に属し、ゲノム構成が等しく容易に交雑するため、植物学的には境界がないとされている。例えばブンゴウメは、アンズとウメの交雑種と見做されている。

大谷川でアンズ核が集中して出土したのは、水上11区の井戸SE554の上層が最も多く100以上を数えた。ここでは10個体以上に果肉の残存が認められ、表面の状態は市販のブルーンに似ており、もしこれが乾しアンズや塩漬けであるなら全国でも類のない貴重な事例となろう。ただ核・果実とも微小であるため、小型スモモ・コウメ等の誤認や未成熟果の果肉がたまたま遺存した可能性もある。また核には、モモ同様齧齒類らしい噛痕を残す物が見受けられた。大谷川では他の井戸からも植物遺体が検出されているが、保存状態や検出量ではSE554が最も注目される。ここからは多量のアンズ核に加えてモモ核、ヒョウタン種子及び果皮、ウリ類、イヌガヤなどの他、手握土器や須恵器・土師器なども出土し、井戸廃絶に際して何らかの祭祀が行われた事は確実と見做される。井戸へのモモやヒョウタンの投入は弥生時代以降比較的多く見られる現象であり、宮川3区の井戸SE-103でも認められたが、アンズはどうであろうか。水野正好氏は草戸千軒町遺跡関係の報文中で、岩手県の民俗事例に、井戸廃絶に際しウメとヨシ（葦）を埋納し、「埋め（ウメ）戻して良し（ヨシ）」とするまじないが存在する事を紹介しているが、この風習は現在茨城県、新潟県佐渡のほか、青森県の津軽地方にも行われている。しかし、ウメは本来暖地帯の植物であり、かつて青森県下では、一部ブンゴウメが存在するほかウメは存在せず、アンズを「ウメ」と呼称してその代用に当てていたという。すると津軽において行われた「ウメ戻してヨシ」の風習は、アンズが用いられた公算が大きくなる。ここで想像を逞しくすれば、井戸祭祀に際してバラ科の核果類を投入する風習が、語呂合わせの効用により中世以来の天神信仰と結び付いたウメに限定されていった過程を想定する事も可能であろう。ウメの果実が重視されるようになったのは比較的新しく、中世以降であり、またアンズは古くカラモモ（韓桃の意か）と呼称された事が『倭名抄』に見える。カラモモという呼称は、アンズに対してモモに準ずる意識を付与したであろうから、同様な意図を持って呪術祭祀に用いられた事も考えられる。

(3)ヒョウタンおよびウリ類

ヒョウタンの種子および果皮も井戸や河道から見いだされているが、さほど多い訳ではない。果皮は現在すべて破片となっており、果実がどのような形態であったかは不明である。ウリにはマクワウリかと思われるもの、トウガン様のもの他、スイカに類似したものも見られた。しかし、スイカの栽培開始時期は近世かと思われるから、これらの種子は、藤下典之氏の指摘にあるヒョウタンの未成熟種子、所謂「しいな」と考えた方が妥当であろう。ヒョウタンも含めたウリ類と水神信仰の関連は広く旧大陸各地に知られている。前述のSE554ではヒョウタン数個体分の果皮および種子が一括して出土しており、他にウリ類種子も若干得られた。水神祭祀の一例と考えられよう。

以上、冗長となったが、出土種実遺体について若干の見解を述べた。しかし今回は報告者の怠慢もあり、遺構や層位に即した分析は十分に果たせなかつた。この点については、今後稿を改めて詳述したい。なお当人は、出土種実類（特に桃）を見る植物信仰について資料蒐集を行っているが、埋蔵文化財研究所の佐藤達雄氏、栗野克己氏ほか各位に格別の御配慮を頂き、分析と報告の機会を頂いた。記して感謝したい。

- (1) 成島 仁「第IV章 まとめ」『大谷川II』(遺構編) p.205~207 静岡県埋蔵文化財調査研究所編 1987
- (2) 小清水卓二「古代日本の住居跡から出土する桃核について」『近畿古文化論叢』櫻原考古学研究所編 吉川弘文館 p.561~568 1963
- (3) 直良信夫『日本古代農業発達史』さ・え・ら書房 p.289~290他 1956
- (4) 金原正明ほか『考古学研究中間報告4ー出土果実および種子の同定I』p.47埋蔵文化財天理教調査団 1982
- (5) 祭祀に供せられた桃は祭儀の日取りに合わせて用意されるであろうから、成熟を待たずして収穫される事は十分有り得る。『橘家御除祭式』(後述)には旧暦五月五日の採取記述が見え、夏季の大祓は旧暦六月の晦日に当たっていたから、現在より既熟のもののが多かった往時には、未熟果の採集も有ったであろう。
- (6) 当資料はまだ正式報告されていないが、櫻原研の吉川事務所にて資料を実見させて頂き、核の観察・計測を行なった。同様な事実は既に直良信夫氏が指摘している(前掲註3)。
- (7) 徳島県教委の大西浩正氏、福清司氏に御教示を頂き、資料を実見させて頂いた。
- (8) 粉川昭平「矢部遺跡出土の植物遺体について」『矢部遺跡ー国道24号線櫻原バイパス建設に伴う遺跡調査報告(II)』櫻原考古学研究所 p.271~272 1986
- 粉川昭平ほか「江上遺跡群出土の植物遺体」『北陸自動車道遺跡調査報告ー上市町木製品(本文)・総括編ー』富山県埋蔵文化センターパー p.79~118 1984
- 粉川氏が矢部遺跡報文中で「細長く新しい型のモモである。前記の古墳時代のモモとは明らかに異なるタイプである」と述べられているのが其該当する。別垂蓋としての位置付けが可能かもしれない。中近世遺跡ではしばしば見受けられ、青森県の浪岡城跡出土桃核も殆どがこのタイプであった。
- (9) 宮本常一「日本人とモモ」『週刊朝日百科「世界の植物』』54「ウメ・モモ」朝日新聞社 1973
- (10) 寺沢 黒「弥生人の心を描く」『日本の古代13巻「心の中の宇宙』』中央公論社 p.126~130 1987
- (11) 古池 博「金沢市二口六丁遺跡から発掘された植物遺体とその植物学的検討」『金沢市二口六丁遺跡』金沢市埋蔵文化財調査委員会 p.189~226 1983
- (12) 吉岡金市『果樹の接木交雑による新種・新品種育成の理論と実際 第一巻』新科学文献刊行会 p.353~359 1967
- (13) 前掲註4
- (14) 角田秀生「桃と雷除」『民族文化(貝塚合併)第三卷第四號』山岡書店 p.16~17 1942
- (15) 中国においては、桃核を虎の頭や猿の形に彫刻したものを小児の守りとして服の前後にかける風習が有るという。米日された北京師範大学校の張崇昌先生に御教示を頂いた。
- (16) 徳島県教育委員会『黒谷川郡頭遺跡III・IV』(1989) ほかに紹介されている。
- (17) 大阪市立大学の辻誠一郎先生の御教示による。
- (18) 出土桃核中の人為的な半欠品・被損品の比率が高い場合、報告書は核中の仁を利用したものと推定している。「安國寺弥生式遺跡の研究」(1958)では、クルミやモモに小孔が見られ、鋭利な道具でえぐり取った形跡が有るとしているが、桃核の採取を行なう際は縫合線に沿って半分にする方が自然であるから、これは蓄歯類の歯跡の誤認であろう。時期は下るが、青森県浪岡城の縫合から見出された桃核の多くは半欠となっており、報告者は桃仁の利用を推定している。(浪岡町教育委員会『跡跡浪岡城 環境整備報告書』1988 p.25)
- (19) 「醫心方」永慶二年(984)丹波須彌撰には瘧など多数の病疾に対する处方に桃仁を用いる旨記されている。
- (20) 「延喜式」延喜年間(10世纪初頭)には日本各地、三十九カ国もの地域から桃仁が獻上された事が記されている。うち東海道は駿馬を含む十一ヶ国の名が見える。
- (21) 「桃龜」(桃核・鬼髑髏)とは桃核がクロミ病等に侵されて落葉せず、そのまま樹上に残ってひからびたものである。『本草綱目』(明、万曆二十四年刊)(1566)李時珍著等にはこの桃龜にも呪的な効能があるとしている。桃に果皮が残存した例は前述の矢部遺跡(古墳初期)にも知られるが、果肉や果皮は腐朽しやすい筈であるから、その残存には前記の理由の他、未熟果や乾燥、加熱による炭化などを想定する必要がある。
- (22) 「北海道考古」第22輯に道内遺跡より出土の植物種実集成が行なわれた(山田吾郎「北海道における先史時代の植物性食料について」1986)が、モモは含まれていなかった。現在把握している限りでは、桃核出土地の北限は青森県木造町鬼ヶ岡遺跡(繩文晩期?時期不詳)であり、南限は鹿児島県根占町成川遺跡(古墳時代)である。
- (23) たとえば滋賀県大津市の東光寺遺跡では、呪符木闇に接近して桃核一枚が出土しており、発掘担当者は「陰陽道にもとづく何らかの祭祀が行なわれた事は確実」と見做している。(同木武重「陰陽道の呪符出土 大津市大東光寺遺跡」『滋賀文化財だより No.84』勧進賀県文化財保護協会編1984、関連記事は『木闇研究』No.6、1984 p.63~64参照)
- (24) この点については和田翠氏の「呪符木闇の系譜」(『木闇研究』No.4、奈良国立文化財研究所1982) p.103~130にかけて非常に優れた論考が有るほか、いくつかの研究成果が記載される。
- (25) 「新撰龜相記」天慶七年(830)、伊豆遠زل撰は毛岐ト部の巣岐直氏成らによって述作された龜ト書であるが、ここに「伊勢諸説、黄泉平板を逃れ出て、【出雲の國、伊豫夜の坂】桃子を探りて、その核を擎ちてやみ逃れ忍りぬ。【病の處に桃を置くはこの由なり】」と見える。(椿 実「巣岐・対馬の龜トと新書」『新書の研究3』学生社刊 1988 p.67~76所収「新撰龜相記甲巻抄」に依った)
- (26) 「雷除守封事」中「五月五日午後二、東方へ指シタル桃ノ枝ノ實ヲ採り、洗イ清メ日ニ晒シ用ユ」(前掲註4所収)

- 初 前掲註9参照。なお大國魂神社は武藏總社として武藏國府遺跡と重複して立地するが、昭和51年度の調査に際して、ことぶきマンション地区より所謂「まいまい」井戸遺構（奈良～平安）が検出され、「国」墨書の須恵器などと共に、桃や梅などの果核も出土している。何か関係あろうか。（『武藏國府開発遺跡調査報告Ⅱ』府中市遺跡調査会 1980）
- 44 『延喜式』「中務省式」に「凡年終行。鑿云々。以。桃弓・葦矢・桃杖。瓶。充薦人。」と有り、或に桃杖の呪具を用いる中国の風習が日本にも流入している事が明らかであるが、それに関連して夏季は桃果を用いる事が行なわれたのではないか。
- 45 水野正好「竹筒をのこした一井とその秘呪」『草戸千軒No36』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所編 p.7 1976
- 46 青森県浪岡町歴史資料館の工藤清泰氏が、親戚の平野重蔵氏宅（西津軽郡車力村）の井戸周囲に際して「ウメもどしてヨシ」のまじないが行なわれた事を御教示下さった。
- 47 小林 草『果物と日本人』NHKブックス508 日本放送出版協会 p.167～170 1986
- 48 『倭名類聚抄』承平年中（931～938）源頼著に「加良毛毛」とある。「アンズ」の名称は『本朝食鑑』元禄八年（1695）人見必大著に「今は阿半須と訓む」と見える。
- 49 『藤下典之江上A遺跡およびB遺跡から出土したヒョウタン仲間Lagenaria siceraria STANDL.とメロン仲間Cucumis melo L.の遺体について』『北陸自動車道遺跡調査報告—上市町木製品（本文）・総括編ー』富山県埋蔵文化財センター p.107～112
- その他、南木聰彦「石御堂遺跡出土の種実類」『中原後・石御堂』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984 p.142～143を参照した。

第43表 自然遺物一覧表

地 区	グリッド	遺構・層位	遺物名称	合計	保存状態	数量	内訳・備考
試掘	-	灰色砂礫層	モモ核	1	完形	1	中1
			ウメ核	1	欠損	1	
大谷1区	S-19	粘土混砂礫層 西溝側S-20寄り	モモ核	16	完形 穿孔 半欠	12 1 3	大1、中11 中1 中3
			アンズ核	1	完形	1	
			マツ球果	1	完形	1	
			モモ核	8	完形 穿孔 半欠 摩滅	3 2 2 1	大3 大1、中1 中2 中1、中世か?
	S-20 T-20	茶褐色粘土 暗褐色粘土 粘土混砂礫層 黄褐色砂礫層	マツ球果	8	完形 欠損	4 4	
			モモ核	1	完形	1	中1
			オニグルミ	1	半欠 (穿孔)	1	
			モモ核	1	完形	1	大1、ノモモに似る
	T-20	粘土混砂礫層	モモ核	4	完形 穿孔	3 1	大3 中1、ノモモ
			マツ球果	7	完形 欠損	1 6	
			モモ核	1	完形	1	中1
			モモ核	1	完形	1	大1
	U-16 U-17	シジミ貝殻	シジミ貝殻	1対	表皮痕跡	1対	
			モモ核	4	完形 穿孔 半欠	1 1 2	(サイズ不明)
			オニグルミ	1	半欠	1	
			ドングリ殻 (クヌギかシワ?)	25	完形 半欠	5 20	
	V-15	砂層	不明小種子	9	完形	9	
			マツ球果	1	完形	1	
			カシワ?	1	外皮なし	1	胚1(外皮なし)
			小型種子	若干	完形	若干	不明小型種子若干
大谷2区	V-14	砂層	モモ核	1	完形	1	大1
	W-13	粘土混砂層	モモ核	1	完形	1	大1
	W-14	粘土混砂層	小型種子	多量	完形	多量	不明小型種子多量
西大谷1・2区	D-43	砂礫層	モモ核	1	完形	1	中1
	D-44	砂礫層	モモ核	4	完形	4	特大1、大1、中2
	D-45	砂礫層 灰茶粘土層	モモ核	34	完形 礫跡 半欠	32 1 1	特大3、大7、中22 中1 中1
			マツ球果	10	完形 欠損	5 5	

地 区	グリッド	遺構・層位	遺物名称	合計	保存状態	数量	内訳・備考
西大谷1・2区	D-46	砂疊層 灰茶粘土層	モモ核	337	完形 穿孔 半欠 欠損	282 19 26 10	特大3、大60、中196、小23 大4、中7、小1、不明7 大1、中16、不明9 大1、中4、不明5
			スマモ核?	5	完形	5	破片若干
			ウメ核?	2	完形	2	破片若干
			ドングリ類	6	完形 破片	5 1	マテバジイ、イチイガシ他 その他細片若干
			ヒョウタン種子	1	完形	1	
			カブトムシ	1	頭部残欠	1	
	E-42	砂疊層	モモ核	3	完形 残欠	2 1	中2 中1
	E-43	砂疊層 シルト上面 砂疊粘土間層	モモ核	46	完形 穿孔 半欠 欠損	28 8 9 1	大12、中16 大1、中7 中9 中1
			スマモカアンズ	2	破損	2	
			マテバジイ?	1	欠損皮	1	
			ヒョウタン皮	若干	皮破片	若干	
			樹皮片	1	破片		
			モモ核	2	完形	2	大1、中1
E-45	砂疊層	モモ核		1	穿孔	1	中1、ノモモ
E-46	灰茶粘土層	モモ核		4	完形 穿孔 半欠	2 1 1	大1、中1 中1 中1
E	砂疊層 I=2.18	モモ核		5	完形 半欠	2 3	中2 大1、中2
F-39	砂疊層	モモ核		2	穿孔 半欠	1 1	中1 中1
F-40	砂疊層	アンズかスモモ	少量		破片	少量	果核類の破片
			マツ球果	5	完形 欠損	1 4	この他細片
F-41	砂疊層 砂疊層上層	モモ核	37		完形 穿孔 半欠 欠損	31 2 3 1	大10、中20、小1 中2 中1、小2 中1
			モモ核	64	完形 穿孔 半欠	56 3 5	大10、中37、小9 中3 中5
F-42	砂疊層 砂疊層下層	スマモ核? アンズ核 ヒョウタン種子 スイカ種子? サクランボ皮	1	完形	1	大型アンズ核の可能性有り	
			7	完形 破損	4 3	(亀甲状の模様が認められる)	
			4	完形	4		
			1	完形	1	ヒョウタン種子の「しいな」か?	
			1	紐状	1	サクラ皮を紐状に巻いたもの	
			47	完形 穿孔 半欠 欠損	36 3 5 3	大9、中27 中3 中5 中3	
F-43	砂疊層 砂疊層中層	モモ核					

地 区	グリッド	遺構・層位	遺物名称	合計	保存状態	数量	内訳・備考
西大谷1・2区	G-39	砂礫層中層 砂礫層	モモ核	1	完形	1	小1
			マツ球果	3	完形 欠損	1 2	
	G-40	砂礫層 砂礫層中層	モモ核	2	完形 残片	1 1	大1 大1
			マツ球果	1	欠損	1	
	H-17	川岸灰色粘土層中	モモ核	6	完形 穿孔	5 1	大2、中3 中1
	H-39	砂礫層	モモ核	2	完形	2	大1、中1
	I-34	灰黒色粘土	モモ核	5	完形	5	中5
	-	第1トレンチ 砂礫層 灰色砂礫層 1・2~3トレンチ間 砂利上層 拡大発掘区 排水路整備 第3トレンチ 旧大谷川落込み 砂礫層中層	モモ核	45	完形 穿孔 半欠 残欠	35 2 6 2	大13、中21、小1 中1、小1 中6 中2
			アンズ核	1	完形	1	
			マツ球果	6	完形 欠損	4 2	破片若干
			サクラ皮	1	破片	1	
			モモ核	1	完形	1	大1
西大谷4区	Q-23	暗灰色粘土層	モモ核	1	完形	1	大1
			小榧子	多數	混在	多數	ヒエ?など複数種を含むと見られる
	R-21	砂層 暗灰色粘土層	モモ核	11	完形 穿孔 半欠 破損	6 1 3 1	大2、中4 中1 大1、中2 大1
			マツ球果	5	完形 欠損	2 3	
			サクラ皮	1	紐状	1	サクラ皮を紐状に切ったもの
			不明破片	3			
			モモ核	14	完形 穿孔 半欠	10 1 3	細長大1、中7、小2 中1 中3
	R-22	粘土混砂礫層 暗灰色粘土層	ウメ核	1	破片	1	
			カヤカイヌガヤ	1	完形	1	
			マツ球果	8	完形 欠損	1 7	
			不明小榧子	2	二分?	2	1体分
			モモ核	11	完形 半欠	8 3	大3、中5 小1、不明2
西大谷5区	S-21	暗灰色粘土層 粘土混黑色砂礫層 黑色砂礫層	モモ核	11	完形 半欠	8 3	大3、中5 小1、不明2
	T-21	セクション帶 粘土混砂礫層	クリかトチ皮	1	ほぼ完形	1	クリかトチの皮1個体分
	T-22		不明小榧子	若干	破片		
西大谷6区	O-26	S D-125 (SD-2) 暗褐色砂混粘土	サクラ皮	1	輪状	1	サクラ皮を細い輪状にして結び目をつけたもの
西大谷6区	N-29	暗青灰色粘土層	ヒシ	少量	破片	少量	1個体分
	N-30	暗青灰色粘土層 暗青灰色シルト層	マツ球果	2	欠損	2	

地 区	グリッド	遺構・層位	遺物名称	合計	保存状態	数量	内訳・備考
西大谷7区	J-34	暗灰色シルト層8層 9層 10層 2C-376の下 -	モモ核	88	完形 穿孔 半欠 欠損	82 2 3 1	大6、中74、小2 中2 中3 不明1
			サクラ皮	12	加工品	12	加工した帯状のもの
			モモ核	63	完形 半欠 欠損	60 2 1	大16、中41、小3 中2 中1
			イヌガヤ?	2	完形	2	
	K-34	黒色細砂層9層	サクラ皮	3	帶状	3	帶状の加工品および破片
			モモ核	2	穿孔 半欠	1 1	中1 中1
			マツ球果	2	半欠	2	
	A-44	砂疊層・灰色シルト層	マツ球果	1	欠損	1	
	A-45	灰色粘土層	マツ球果	1	欠損	1	
	B-43	粘土混砂疊層	マツ球果	1	欠損	1	
西大谷不明区	-	-	サクラ皮	若干	破片	若干	サクラ皮破片若干
水上1区	K-55	S R90 砂疊層	センダン	少量	破片	少量	1個体分
	K-56	S R90 砂疊層	マツ球果	13	完形 欠損	5 8	
	K-57	S R90 砂疊層	マツ球果	1	完形	1	
	L-56	暗青色砂層	マツ球果	1	残欠	1	
水上4区	-	S P-41	モモ核	1	完形	1	中1
水上5区	-	S E-222	モモ核	2	欠損	2	中2
水上6区	-	S X-228	モモ核	6	完形 半欠 残欠	3 2 1	大1、中2 中1、小1 中1
			マツ球果	2	完形	2	
			モモ核	3	完形	3	大3
水上7区	H-72	-	モモ核	2	半欠	2	中2
	H-76	砂疊層 東西土層帶	モモ核	7	完形 摩滅	6 1	大1、中5 中1
	H-77	赤褐色砂疊層 -	モモ核	1	半欠	1	中1
			マツ球果	1	完形	1	
	I-70	旧大谷川砂疊層	モモ核	2	完形 半欠	1 1	小1 小1
			オニグルミ	1	半欠	1	
	I-71	砂疊層②	モモ核	9	完形 穿孔 半欠 欠損	4 2 1 2	中2、小2 大2 中1 中2
	I-72	砂疊層② 砂疊層	モモ核	148	完形 穿孔 半欠 欠損	103 15 21 9	特大3、大18、中71、小11 大2、中13 大2、中16、小3 大1、中7、小1
			スマモカアン ズ核	2	完形	2	識別困難
			ツバキ?	1	欠損	1	未熟果の欠損1

地 区	グリッド	遺構・層位	遺物名称	合計	保存状態	数量	内訳・備考
水上7区	I-74	黒灰色粘土層 木製品を多く含む流路 茶褐色粘土層 灰褐色砂層	モモ核	16	完形 半欠 欠損	5 8 3	大1、中3、小1 中6、小2 大1、中1、小1
	I-75	黒色粘土	モモ核	3	完形 穿孔	1 2	小1 大1、中1
	I-76	南北土層帶 旧大谷川砂礫層	モモ核	28	完形 穿孔 半欠 摩滅	20 2 5 1	大3、中15、小2 中2 中5 大1
	I-76・H75 土手	砂利層③	モモ核	5	完形 欠損	4 1	中4 大1
	I-77	砂礫層	ドングリ	1	未熟果	1	フタの部分が殆どで実は小さい
	J-69	砂礫層	オニグルミ	1	完形	1	
	J-70	砂礫層①	モモ核	10	完形	10	大2、中8
		砂礫層②	トチ皮	1	果皮	1	トチの皮3分の2程度残存
		砂礫層③	マツ球果	2	欠損	2	
J-71	砂礫層	モモ核	13	完形 穿孔	12 1	大2、中8、小2 中1	
		カヤ	1	完形	1		
		マツ球果	1	完形	1	未熟果	
	J-72	砂礫層②	モモ核	35	完形 穿孔 半欠 破損	15 1 3 16	大2、中10、小3 中1 中3 中5、不明11
水上9区か11区	J-74	黒灰色砂層 —	モモ核	8	完形 穿孔	7 1	中3、小4 中1
	—	砂礫層	モモ核	1	穿孔	1	小1
		砂礫層⑤	ヒョウタン種子	多數	完形	多數	
水上9区か11区	—	—	ヒシ?	若干	破損	若干	ヒシのトゲらしきもの若干
水上11区	S E-554上層	S E-554上層	ヒョウタン皮	多量	破損	破損	中タッパ—一杯分、大量のヒヨウタン皮
		ヒョウタン種子	多量	完形	多量		かなり多量のヒョウタン種子
		スイカ種子?	少量	完形	少量		スイカ?ウリ科と思われる種子 少量
		動物遺体	若干	複数種	若干		魚鱗6、巻貝蓋1、昆虫遺体等
		モモ核	9				完形(中2)穿孔3(中2、小1) 小片4(中小)
		アンズ?	多數	完形 穿孔	多數		アンズ核100以上、10個体以上に 果肉残存、乾アンズ? 完形、 穿孔、破片多數
		S E-554下層	モモ核	6			完形1(中1)穿孔1(中1)半欠 1(中1)破片3
		アンズ核?	20以上	完形他	多數		完形、破片等20個体以上
		ヒョウタン破片	若干	破片	若干		
		ヒョウタン種子	多數	完形	多數		ヒョウタン種子100個前後
		ウリ科種子	少量	完形	少量		ウリ科?の種子少量
	炭化物?	3	完形	3			完形の炭化物3
		動物遺体	若干	複数種	若干		小動物骨、魚鱗20~30枚、昆虫 遺体等

地 区	グリッド	遺構・層位	遺物名称	合計	保存状態	数量	内訳・備考
宮川1区	-	S E 6井戸内部南 中層 下層	モモ核	9	完形 穿孔 欠損	6 1 2	中6 中1 中1、小1
		灰色粘土層 川岸 灰色粗砂層 灰綠色粘土層	モモ核	12	完形 穿孔	11 1	特大1、大1、中9 中1
			マツ球果	7	完形 欠損	2 5	
宮川2区	H 16	灰色粘土層	モモ核	1	完形	1	中1
			マツ球果	2	完形	2	
	H 17	川岸 灰色粘土砂層、粘土層	モモ核	11	完形	11	大3、中8
宮川3区	H 18	川岸 灰色粘土砂層	モモ核	2	完形 穿孔	1 1	特大1、特大 : 31.4×22.6×15.2 小1
		灰色粘土砂層	マツ球果	1	欠損	1	
	I 16	-	モモ核	1	完形	1	中1
宮川3区	H 96	青灰色粘土	モモ核	2	完形 半欠	1 1	中1 中1
	I 94	S E -170井戸中	モモ核	1	欠損	1	中1
	I 95	灰黑色粘土層 茶色粘土層 SD 145 灰色粘土層	モモ核 オニグルミ	4 2	完形 半欠	4 2	特大2、大1、中1、特大 : 33.0× 20.5×14.0
J-94	J-94	トレンチ 粘土混砂礫層	モモ核	43	完形 半欠 欠損	22 17 4	大10、中9、小3 大4、中10、小3 中2、小2
		灰黑色粘土層	マツ球果	2	完形 欠損	1 1	
		ドングリ		少量	果皮片	少量	
K 94	J-95	暗灰色粘土層	モモ核	2	完形	2	大2
	K 94	暗灰色粘土混砂礫層 灰褐色粘土層	モモ核	8	完形 半欠	3 5	中3 大3、中2
		マツ球果		1	完形	1	
L-93	L-93	仮道路13 粘土混砂礫層	マツ球果	2	欠損	2	
	N-98	N-98	モモ核	3	完形 穿孔 半欠	1 1 1	中1 中1 中1
		S E -426井ノ 暗灰色粘土層	モモ核	1	破損	1	完形のものが二分したもの
宮川4区	B-91	暗灰色粘土層	モモ核	1	完形	1	大1
	I-99	S R -59 (流路9) 粘土混砂層 暗灰色粘土層 暗灰色砂混粘土	モモ核	58	完形 穿孔 半欠 欠損	54 1 2 1	大15、中38、小1 中1 中2 大1
		黒色粗砂 (木島周辺)	ヒョウタン種子	1	完形	1	
I-100	I-100	暗灰色粘土混砂礫層	イチイガシ	1	破損	1	
		暗灰色砂混粘土	モモ核	36	完形 穿孔 半欠 欠損	28 6 1 1	大4、中21、小3 中6 大1 中1

地 区	グリッド	遺構・層位	遺物名称	合計	保存状態	数量	内訳・備考
宮川4区	J-98	S R-57 (流路7) 粘土混砂礫層 砂礫層 暗灰色粘土層	モモ核	53	完形 穿孔 半欠 欠損	42 6 4 1	大14、中27、小1 中6 中4 大1
	J-99	暗灰色粘土層 暗灰色砂層 暗灰色砂混粘土 暗灰色粘土混砂礫層	モモ核 スモモ核? アンズ核 イチイガシ ドングリ	494	完形 穿孔 半欠 欠損	412 64 16 2	特大2、大76、中278、小56 大10、中44、小10 特大1、大4、中11 中1、小1
	J 99~100	セクション 砂層 暗灰色粘土混砂礫層	モモ核 マツ球果	2	完形	2	中2
	K-96	茶褐色粘土混砂礫層	モモ核	3	完形 穿孔	2 1	中2 中1
	K-97	S R-57 流路7 茶褐色粘土混砂礫層 S R-56 流路6 茶色砂礫層 粘土混砂礫層 暗灰色粘土層	モモ核 チャ? ツバキ類か マツ球果	13	完形 欠損	12 1	大1、中10、小1 大1
	K-97・98	セクション 粘土混砂礫層	モモ核	4	完形	4	大2、中2
	K-97	セクション	モモ核	3	完形 欠損	2 1	大1、小1 大1
	K-98	砂礫層 暗灰色粘土層 粘土混砂礫層	モモ核 マツ球果	4	完形 穿孔 半欠 欠損	1 1 2 2	中1 小1 中1、小1
	K-98・99	土手はずれ 暗灰色砂混粘土	マツ球果	4	完形 欠損	1 3	
	L-95	S R-56 流路6 暗灰色砂混粘土 暗灰色粘土層 粘土混黑色砂礫層	モモ核 マツ球果 センダン	10	完形 半欠 欠損	5 4 1	中4、小1 中4 中1
	L-96	S R-57 流路7 茶褐色粘土混砂礫層	モモ核 マツ球果 センダン	19 1 100 以 上	完形 完形 完形	14 5 100以上	大3、中11 大2、中3
	L-97	S R-57 流路7 茶褐色粘土混砂礫層 茶褐色砂混粘土層	マツ球果 センダン	2 1	完形	2 1	
	M-93	流路5 暗灰色粘土混砂礫層	モモ核	1	完形	1	中1

地区	グリッド	遺構・層位	遺物名称	合計	保存状態	数量	内訳・備考
宮川4区	M-94	茶褐色砂混粘土層の下砂 礫層	モモ核	706	完形 穿孔 半欠 破損	516 75 81 34	特大2、大65、中333、小116 大5、中36、小34 大7、中49、小25 中18、小4、不明12
		粘土混黒色砂礫	アンズ核?	5	破片	5	
		S R-55 流路5 暗灰色砂混粘土	ウメ?	1	破片	1	
		S R-56 流路6 暗灰色砂混粘土	ヒョウタン種子	3	完形	3	
		粘土混砂礫層	不明	2	完形	2	2種類、一方はアオギリに似る?
	M-95	粘土混黒色砂礫	モモ核	558	完形 穿孔 半欠 欠損	472 42 35 9	特大2、大51、中337、小82 大2、中20、小20 大4、中21、小10 大1、中8
		S R-56 流路6 暗灰色砂混粘土	スマモ核?	3	完形	3	
		3-1168の内 暗灰色砂混粘土	アンズ核?	9	完形 欠損	6 3	
			ドングリ	2	破片	2	
			イヌガヤ?	1	完形	1	
			マツ球果	2	完形 欠損	1 1	
N-93	S R-55 流路5 暗灰色砂混粘土層 砂礫層	モモ核	164	完形 穿孔 半欠 欠損	127 15 17 5	大31、中86、小10 中15 中16、小1 中4、小1	
		茶色粘土混砂礫	ウメ核?	2	半欠	2	小型のウメないしアンズ
		暗灰色砂層	オニグルミ	1	完形	1	1)
	S R-54 流路4 暗灰色粘土混砂礫層	モモ核	872	完形 穿孔 半欠 欠損	656 89 96 37	特大1、大75、中465、小115 大7、中60、小22 大13、中63、小14 特大1、大4、中18、小4、不明10	
N-94	S R-55 流路5 暗灰色砂混粘土層	アンズ	1	完形	1		
	S R-56 流路6? 暗灰色砂混粘土層	ウメ核?	1	完形	1	ウメかアンズ?	
	S R-61 流路 暗灰黒色粘土層	イチイガシ	4	完形 破片	2 2		
	粘土混黒色砂礫	ドングリ	2	破片	2	皮片2	
	暗灰色砂混粘土層の下 砂礫層	ヒシ	少量	破片	少量	ヒシの棘・実の破片	
	サクラ皮	サクラ皮	1	紐状	1	サクラ皮の紐状に巻いたもの	
	黒色砂礫層	マツ球果	1	欠損	1		
	砂礫層	不明小種子	1	完形	1		
	暗灰黒色粘土層 (3-294の内)	モモ核	6	完形 半欠	3 3	中3 大1、中2	
		オニグルミ	5	半欠	5		
O-93	暗灰黒色粘土層	モモ核	135	完形 穿孔 半欠 欠損	104 16 11 4	大15、中83、小6 大2、中12、小2 大1、中8、小2 大1、中3	
	粘土混黒色砂礫	スマモ核	1	完形	1		
	S R-55 流路5 暗灰色砂混粘土	ドングリ	1	破損	1	果皮片1	
		不明種子	1	完形	1		

地 区	グリッド	遺構・層位	遺物名称	合計	保存状態	数量	内訳・備考
宮川4区	O-94	暗灰色砂混粘土 S R-55 流路5 暗灰色砂混粘土 S R-56 流路6 暗灰色砂混粘土 O-94の杭の下	モモ核	80	完形 穿孔 半欠 欠損	61 6 8 5	大9、中50、小2 大2、中4 中8 中5
		オニグルミ	1	半欠	1		
		ヒョウタン種子	1	完形	1		
		ウリ類種子	1	完形	1		
		ドングリ	3	完形	3		
		P-92 流路2 暗灰色砂混粘土	マツ球果	1	完形	1	
	Z-91	(3-056)の内 暗灰色砂混粘土	オニグルミ	1	欠損	1	
		近世砂礫層 灰色砂質粘土(3-021内) S R-56 流路6 暗灰色砂混粘土 粘土混砂礫層 (表探)	モモ核	16	完形 穿孔 半欠 欠損	13 1 1 1	大4、中9 中1 中1 中1
		マツ球果	2	完形 欠損	1 1		
宮川5区	A-107	-	マツ球果	3	完形 欠損	2 1	
	A-108	暗灰色粘土層	サクラ皮	1	皮片	1	
	A-109	S R-201 赤褐色砂礫層	モモ核	2	完形 欠損	1 1	中1 中1
	B-104	表面滑掃中	モモ核	2	完形 半欠	1 1	中1 中1
	B-106	茶褐色砂礫(混粘土)	モモ核	1	完形	1	中1
	B-108	S R-201 暗灰色粘土層	モモ核	8	完形	8	大3、中5
	C-104	S R-202 暗灰色粘土層 青灰色粘土層	モモ核	63	完形 穿孔 半欠	44 7 12	大10、中30、小4 大1、中4、小2 大1、中6、小5
	C-106	微高地東斜面 青灰色粘土層 S P-202 青灰色粘土層 S R-202 暗灰色砂層 S R-202 青灰色砂層 S R-202 赤褐色砂礫層	モモ核	67	完形 穿孔 半欠 欠損	55 4 6 2	特大1、大3、中41、小10 中1、小3 大1、中3、小2 中1、小1
		アンズ核	1	半欠	1		
		ウメ核?	1	摩滅	1	ウメか?摩滅しているため不明	1
		ヒョウタン種子	約25	完形	約25		
		スイカ種子	約5	完形	約5	スイカ? ヒョウタンの未成熟種子か?	
		マクワウリ?	約30	完形	約30	メロン類かと思われる種子30個前後	
		イヌガヤ?	1	完形	1	イヌガヤ、あるいはエゴか?	
		シイカブナ?	1	破片	1	シイカブナのイガ皮片	
		針葉樹球果?	1	鱗片	1	針葉樹類の球果鱗片?	
	F-103	-	モモ核	2	完形	2	中1、小1
	-	灰褐色粘土層 S R-202 赤褐色砂礫層	モモ核	11	完形 穿孔 半欠	8 2 1	大2、中5、小1 中2 中1

地 区	グリッド	遺構・層位	遺物名称	合計	保存状態	数量	内訳・備考
宮川16区	C 107	—	モモ核	23	完形 穿孔 半欠	18 4 1	大3、中15 中4 中1
	C-108	S R-315 —	モモ核	127	完形 穿孔 半欠 欠損	97 19 10 1	特大1、大39、中51、小6 大4、中13、小2 大3、中7 大1
			マツ球果	1	完形	1	
			サクラ皮	1	粗状	1	粗状に細切りしたもの一巻き
	C-109	—	モモ核	4	完形	4	大1、中2、小1
	D 102	—	モモ核	47	完形 穿孔 半欠 欠損	42 3 1 1	特大1、大19、中21、小1 大1、中2 中1 中1
	D-103	—	モモ核	173	完形 穿孔 半欠 欠損	152 10 8 3	特大7、大56、中85、小4 大2、中6、小2 大4、中4 大2、小1
			アンズ核	2	完形 欠損	1	大型、スモモ核の可能性
			鞋石製品？他	若干	欠損他	若干	浮子ないし陽物？、骨片、木片
	D-106	S E-314 緑灰色砂層 —	モモ核	6	完形 穿孔 半欠	3 2 1	大1、中2 大2 中1
D-107	S R-314 —	モモ核	43	完形 穿孔 半欠 欠損	38 1 3 1	大9、中28、小1 中1 大1、中1、小1 中1	
		マツ皮片	1	破片	1		
	D-108	—	モモ核	6	完形 穿孔 半欠	4 1 1	大2、中2 大1 中1
D-109	—	モモ核	10	完形 欠損	7 3		大2、中4、小1 特大1、中2
E-103	—	モモ核	2	完形	2		大1、中1
E-104	—	モモ核	56	完形 穿孔 半欠	50 4 2		特大1、大13、中28、小8 中4 中2
		マツ球果	1	完形	1		
		マツ皮	1	破片	1		
	E-105	—	モモ核	4	完形	4	中3、小1
E-106	S R-312 —	モモ核	5	完形	5		中5
		ヒヨウタン 皮？	若干	破片	若干		ヒヨウタン皮か木製容器の破片 若干
		マツ球果	3	欠損	3		
E-109	—	マツ球果	2	欠損	2		
F-102	—	モモ核	2	穿孔	2		中2
		マツ球果	1	完形	1		
		マツ皮	若干	破片	若干		

地 区	グリッド	遺構・層位	遺物名称	合計	保存状態	数量	内訳・備考
宮川6区	F-103	S R-312 緑灰色粘土 -	モモ核	922	完形 穿孔 半欠 欠損	765 80 41 36	特大22、大240、中437、小66 大24、中55、小1 大13、中27、小1 大9、中22、小5
			アンズ核	4	完形 破損	1 3	
			オニグルミ	1	半欠	1	
			イヌガヤ?	1	穿孔	1	
			ドングリ	1	破損皮	1	
			樹皮片?	若干	破片	若干	ラベルに「冬瓜の皮」とあるも異なる
	F-104	緑灰色粘土層 -	モモ核	96	完形 穿孔 半欠 欠損	71 3 11 11	大16、中48、小7 中3 大1、中7、小3 大3、中8
			アンズ核?	1	破片	1	
			モモ核	1	完形	1	中1
	G-101	-	モモ核	1	完形	1	中1
			マツ球果	4	完形 欠損	3 1	
			モモ核	64	完形 穿孔 半欠 欠損	54 3 6 1	大11、中39、小4 中3 大3、中3 中1
	G-102	S R-313 黒灰色砂混粘土 -	マツ球果	5	完形 欠損	3 2	
			モモ核	238	完形 穿孔 半欠 欠損	208 8 10 12	特大3、大73、中117、小15 大3、中5 中9、小1 中12
			オニグルミ	1	半欠	1	オニグルミと思われるがかなり大型
	G-103	緑灰色粘土層 -	モモ核	1	完形	1	大1
	G-108		モモ核	80	完形 穿孔 半欠 欠損	46 26 7 1	大15、中27、小4 大11、中15 大5、中2 大1
	G-109	-	モモ核	8	完形 欠損	7 1	大1、中3、小3 大1
	H-103	-	モモ核	5	完形 半欠	3 2	大3(大2・同一?) 大2・同一個体?
	H-105 (H-165?)	-	モモ核	5	完形 半欠	3 2	中2、小1 中2
	H-106	暗緑色粘土層	モモ核	3	完形 半欠	1 2	中1 中1、小1
			ドングリ?	1	未熟果	1	ドングリ未熟果の蓋および実?
			不明小種子	1	完形	1	小型球状

地 区	グリッド	遺構・層位	遺物名	合計	保存状態	数量	内訳・備考
宮川6区	-	表面清掃中	モモ核	2553	完形 穿孔 半欠 欠損	2021 182 155 195	特大47、大744、中1056、小174 大41、中114、小27 大30、中107、小18 特大1、大69、中114、小11
			スモモ核?	1	完形	1	
			アンズ核	22	完形 穿孔 破損	15 1 6	
			オニグルミ	4	完形 半欠	1 3	
			トチ	1	外皮破損	1	
			イヌガヤ? (カヤ?)	5	完形 破片	4 1	
			イナイガシ	1	完形	1	
			ドングリ	1	破片	1	果皮片1
			ヒョウタン?	若干	破片	若干	ヒョウタンのヘク部か?不明
			センダン	18	完形	18	
			マツ球果	44	完形 欠損	19 25	

※備考

上掲の表中、モモ核については個別計画を行なうに到らなかったので、4つの等級を設けて判断の目安とした。即ち、

特大：核長 3.0cm以上のもの

大：核長 2.5cm以上～3.0cm未満のもの

中：核長 2.0cm以上～2.5cm未満のもの

小：核長 2.0cm未満のもの

である。これは計測値で分類したに過ぎず、モモの品種による分類は特定のもの以外は行なわなかった。

しかし特大型は殆どが「栽培モモ」、小型が「コダイモモ」、大型・中型は「ノモモ」「栽培モモ」およびその中間型が多数を占めるという傾向は認められた。モモの品種については前述の文を参照にされたい。

なお参考までに核長ごとの成分比を下記に示すが、不明としたものは、核長の観察を怠った当方のミス、および全容を知り得ない細片を一括した。

また保存状態については、「穿孔」は齧歯類の痕跡とおぼしきものを集め、「半欠」は核の縫合線から半欠したもの、「欠損」は機械的な破損、即ち発掘時に受けた二時的な破損をこれに当てた。また泥水による「摩滅」も僅かに認められたので、欠損と一緒に「欠損・摩滅」の項を設けた。

第44表 モモ核核長別成分表

等 級	合 計	全体比	完 形	穿 孔	半 欠	欠損・摩滅	備 考
特大型 (3.0cm以上)	108 (100.0%)	1.18%	104 (96.3%)	0 (0.0%)	1 (0.93%)	3 (2.77%)	
大型 (2.5~3.0cm未満)	2193 (100.0%)	23.91%	1852 (84.45%)	129 (5.88%)	109 (4.97%)	103 (4.7%)	
中型 (2.0~2.5cm未満)	5758 (100.0%)	62.79%	4504 (78.22%)	501 (8.7%)	493 (8.56%)	260 (4.52%)	
小型 (2.0cm未満)	1042 (100.0%)	11.36%	780 (74.86%)	131 (12.57%)	98 (9.4%)	33 (3.17%)	
不明	69 (100.0%)	0.75%	1 (1.45%)	8 (11.59%)	13 (18.84%)	47 (68.12%)	
総計	9170 (100.0%)	100.0%	7241 (78.96%)	769 (8.39%)	714 (7.79%)	446 (4.86%)	

※カッコ内は等級別中の割合を示す

第45表 モモ核地区別集計表

地 区	遺物名	合 計	全体比	保存状態	数量	地区別比	内訳・備考
試験	モモ核	1	0.01%	完形	1	100.0%	中1
大谷1区	モモ核	36	0.39%	完形 穿孔 半欠 欠損	23 5 7 1	63.89% 13.89% 19.44% 2.78%	大9、中13、不明1 大1、中3、不明1 中5、不明2 中1
大谷2区	モモ核	1	0.01%	完形	1	100.0%	大1
西大谷1・2区	モモ核	648	7.07%	完形 穿孔 半欠 欠損	527 42 60 19	81.33% 6.48% 9.26% 2.93%	特大7、大128、中357、小35 大5、中28、小2、不明7 大2、中47、小2、不明9 大2、中12、不明5
西大谷4区	モモ核	37	0.40%	完形 穿孔 半欠 欠損	25 2 9 1	67.57% 5.41% 24.32% 2.70%	大7、中16、小2 中2 大1、中5、小1、不明2 大1
西大谷7区	モモ核	153	1.67%	完形 穿孔 半欠 欠損	142 3 6 2	92.81% 1.96% 3.92% 1.31%	大22、中115、小5 中3 中6 中1、不明1
水上4区	モモ核	1	0.01%	完形	1	100.0%	中1
水上5区	モモ核	2	0.02%	欠損	2	100.0%	中2
水上6区	モモ核	6	0.07%	完形 半欠 欠損	3 2 1	50.0% 33.33% 16.67%	大1、中2 中1、小1 中1
水上7区	モモ核	291	3.17%	完形 穿孔 半欠 欠損	191 25 42 33	65.64% 8.59% 14.43% 11.34%	特大3、大32、中129、小27 大5、中19、小1 大2、中34、小6 大4、中16、小2、不明11
水上11区	モモ核	15	0.16%	完形 穿孔 半欠 欠損	3 4 1 7	20.0% 26.67% 6.67% 46.67%	中3 中3、小1 中1 不明7
宮川1区	モモ核	9	0.1%	完形 穿孔 欠損	6 1 2	66.67% 11.11% 22.22%	中6 中1 中1、小1
宮川2区	モモ核	27	0.29%	完形 穿孔	25 2	92.59% 7.41%	特大2、大4、中19 中1、小1
宮川3区	モモ核	64	0.7%	完形 穿孔 半欠 欠損	33 1 24 6	51.56% 1.56% 37.5% 9.38%	特大2、大13、中15、小3 中1 大7、中14、小3 中3、小2、不明1
宮川4区	モモ核	3238	35.31%	完形 穿孔 半欠 欠損	2532 323 280 103	78.2% 9.98% 8.65% 3.18%	特大7、大367、中1763、小395 大28、中206、小89 特大1、大33、中193、小53 特大1、大10、中60、小10、不明22
宮川5区	モモ核	156	1.7%	完形 穿孔 半欠 欠損	120 13 20 3	76.92% 8.33% 12.82% 1.92%	特大1、大18、中85、小16 大1、中7、小5 大2、中11、小7 中2、小1
宮川6区	モモ核	4485	48.91%	完形 穿孔 半欠 欠損	3608 348 263 266	80.45% 7.76% 5.86% 5.93%	特大82、大1250、中1979、小297 大89、中227、小32 大62、中176、小25 特大2、大86、中161、小17
合 計	モモ核	9170	100.0%	完形 穿孔 半欠 欠損	7241 769 714 446	78.96% 8.39% 7.79% 4.86%	特大104、大1852、中4504、小780、不明1 大129、中501、小131、不明8 特大1、大109、中493、小98、不明13 特大3、大103、中260、小33、不明47

第9節 神明原・元宮川遺跡出土の動物遺存体

金子 浩昌（早稲田大学教育学部）

1. まえがき

神明原・元宮川遺跡の1983年から3カ年にわたる間で出土した動物遺存体の総量はコンテナ30数箱分になる。また種類も軟体動物、脊椎動物の各種にわたるもので、この地方ではこれまでに若干量づつ出土していた古墳時代以降の資料が、ここで一挙にしかも大量に検出されることになり、また良好なこの時代の動物骨資料を新たに加えたのであった。幸い当研究所の当初からの資料保存、保護の処置によって多くの標本がのこされて来た。ただ標本が大量になったために、全体的な資料整理は現在なお行われている最中であり、また出土の状況が河川敷であったために、その堆積関係を明らかにすることも問題としてのこされており、これについては今後の検討を待たねばならないようである。従ってここでは出土した動物骨の内容の概報と形質についてのべておきたいと思う。本遺跡の主要動物はイヌ、ウマ、ウシの3種類であって、いずれも当時の主要な家畜である。しかし、この三つの家畜の果たす役割は決して一様でなく、そのことが量的、形質的な面にも現れてくるはずである。また家畜については特に骨格の計測、観察が必要であり、その他の動物骨についても同様の作業が必要であることはいうまでもない。ただ、標本があまりに多いために今これを果たすには日時の余裕がない。筆者は別にこの面での研究を果たしたいと考えているので、今回は出土の量的な内容を記し、形質、形測についてはその一部の概要を記すに留めた。

報告に当たって、調査当時種々お世話をいただいた財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の栗野克己氏、また後に資料の図表化・パソコン入力等の作業に当られた同研究所の佐藤達雄氏および葉山安子、鈴木記代の両氏に御礼申し上げる。

2. 神明原・元宮川遺跡検出の動物遺存体種名表

I 軟体動物門	I Phylum MOLLUSCA
a 二枚貝綱	a Class Pelecypoda
翼形目	Order Pteriomorphia
イタボガキ科	Family Ostreidae
カキ類	<i>Ostrea</i> sp.
古異歯目	Order Paleoheterodontia
イシガイ科	Family Unionidae
イシガイ	<i>Unio douglasiae</i>
マツカサガイ	<i>Inversidens japonensis</i>

異齒目	Order heterodontia
シジミガイ科	Family Corbiculidae
シジミガイ類	<i>Corbicula sp.</i>
II 脊椎動物門	II Phylum VERTEBRATA
a 硬骨魚綱	a. Class Chondrichthyes
スズキ目	Order Perciformes
サバ科	Family Scombridae
マグロ類	<i>Thunnus sp.</i>
b 爬虫綱	b. Class Reptilia
カメ目	Order Chelonia
イシガメ科	Family Emydidae
イシガメ	<i>Clemmys japonica</i>
c 鳥 綱	c. Class Aves
ミズナギドリ目	Order Procellariiformes
アホウドリ科	Family Diomedeidae
アホウドリ	<i>Diomedea albatrus</i>
キジ目	Order Galliformes
キジ科	Family Phasianidae
ニワトリ	<i>Gallus g. var. domestica</i>
d 哺乳綱	d. Class Mammalia
ウサギ目	Order Lagomorpha
ウサギ科	Family Leporidae
ノウサギ	<i>Lepus brachyrurus</i>
クジラ目	Order Cetacea
クジラ類	Fam. indet.
イルカ科	Family Delphinidae
バンドウイルカ	<i>Tursiops gilli</i>
イルカ類	Ge. et sp. indet.
食肉目	Order Carnivora
イヌ科	Family Canidae

イヌ	<i>Canis famirialis</i>
キツネ	<i>Vulpes vulpes</i>
ネコ科	Family Felidae
ネコ	<i>Felis catus</i>
奇蹄目	Order Perissodactyla
ウマ科	Family Equidae
ウマ	<i>Equus cabullus</i>
偶蹄目	Order Artiodactyla
イノシシ科	Family Susidae
イノシシ	<i>Sus scrofa</i>
ブタ	<i>Sus scrafa domesticus</i>
シカ科	Family Cervidae
ニホンジカ	<i>Cervus nippon</i>
ウシ科	Family Bovidae
ウシ	<i>Bos taurus</i>

以下標本についての概要を記す。文中の計測値は特に記されていない限りm.m.である。

貝類

二枚貝類

イシガイ科

イシガイ、マツカサガイ、トブガイがみられた。

シジミガイ科

ヤマトシジミ？と思われるものである。

貝類は大部分がカストとなってその型を残すか、それに殻皮が僅かに認められるという状態のものである。砂礫層、粘土層、シルト層内の出土でその数の多いことから、こうした貝を含む堆積層を掘っているのであろう。おそらくこれも自然棲息の貝であったと思われる。シジミ類については、それがマシジミかヤマトシジミであるかを不完全な資料から判定することはできなかったが、輪脈の刻りの比較的浅いことからヤマトシジミの可能性があると思われる。殻は大きく、殻長35.0になるものもあった。他の貝は不完全なものが大部分で、マツカサガイで殻長46.0mmになるのがあった。

魚類

マグロ類

擬鱗骨片と椎体があるだけである。椎体は径48.0、長さ40.0のやや大きい個体のものである。おそら

く全長は1mにもなる個体のものであったろう。

海岸を間近に控えた遺跡でありながら魚類あるいは鹹水貝類などの全く少なかったことはこの遺跡の特徴である。このことは、若し魚骨などが保存の条件で失われてしまったという推測—流失などで一ということでなければ、もとから魚骨などは少なかったことも考えられる。それはこの遺跡がいわゆる生活址とは性格を異にしたものであったということと関係があるかもしれない。若しそうでなければ、中世鎌倉の市街遺跡の例のように、多量の魚骨や、さらに多くのイルカ類の骨などが出土すると思われるからである。

爬虫類

イシガメ

本遺跡の特徴的な動物の一つにイシガメの多いことがあげられる。カメ類としては、この一種のみである。イシガメは砂礫層、暗青灰色シルト層、暗灰色砂混粘土層などより出土し、一ヶ所に4個体分がまとまって出土することもあった。骨は背甲骨板、四肢の部分の断片的なものもあったが、背甲、腹甲が生体の状態で出土する例が8個体分あった。ただ、甲はほぼ完存していたが、その他の骨格の失われているものが大部分で、一部のみ残存する場合も、肩帶や腰帯と大きな四肢骨に限られたようである。おそらく、それ以外の骨は流失したのではないかろうか。また、これが他の動物によって捕食されたと思われる痕跡を直接見出すことはできず、おそらく自然堆積層において自然死した個体であったのであろう。

背甲長×背甲幅 164.0×139.0 (背甲のほぼ完存するものの一例)

鳥類

アホウドリ

大谷川 宮川4区 J-99

粘土混砂礫

右第2指中手骨1

ほぼ全体をのこすほねである。

全長 56.0

大型鳥の骨の唯一のものである。今日では殆どみることの無くなったアホウドリの骨が出土しているのは興味あることである。

エワトリ

大谷川 西大谷 F40-23

砂礫層

左尺骨1

近位骨端を僅かに欠損する。

全長80.0±mm

宮川4区 N-94

暗灰色砂混粘土

脛骨

宮川4区 O-92

暗灰色砂混粘土層

左桡骨

全長 71.0mm

哺乳類

ニホンザル

右M² 歯冠長×歯冠幅 9.36×8.50

歯冠エナメル質の一部に一孔のみがあく。ニホンザルの遺体で確認できたのはこの臼歯が一点あっただけである。狩の獲物とするよりも飼っていたものであった可能性もある。サルがウマやウシの保護神という考え方のあったことはよく知られている。

イルカ類とクジラ類

少數のイルカ類の骨が出土している。やや小さい種類と、バンドウイルカである。小さい方が後頭頸の部分のみの破片。標本として比較的良好であったのは2点のバンドウイルカの下顎骨で、その一つには、人為的な切痕—おそらく解体あるいは肉をとるために切り込んだ際についたものであろうがみられた。このことから、これらのイルカは捕獲されて食用などにあてられたものであることは確かである。ただ、それ以外に出土している椎体などの出土量が著しく少ないが、あるいはこれも流失したためであるとも考えられる。下顎骨の歯はすべて脱落し、別に検出されてもいない。これも流失したのであろう。クジラ類は小骨片をのこすのみであるが、この骨も切断したような痕跡のみられる骨片である。きれいな切断面がみられるので、何か骨製品をつくった際の残りなのであろう。

イヌ

ウシ、ウマ以外の家畜としてイヌが最も多くの骨を出土している。比較的良好な頭蓋2点と下顎骨は8点を見ることができた。ただし、これらの骨の保存は必ずしも良いものではなく、頭蓋も残念ながら頬骨部分を欠損し(新しい割れ口であるが)、下顎骨、肢骨も數個を除いて満足な計測の果せる標本はなかった。また、これらのイヌの骨に埋葬を思わせる出土状況はなく、河川内で自然解体し、小さい骨は流失し、大型の骨も腐食破損し、埋没するに到ったものと思われる。

標本について概要をのべる。

頭蓋

大・小2つの特徴的な標本が出土している。

No.1頭蓋：長谷部(1952)の中小型のサイズで、丸みの少ない頭形であるが、鼻根の凹陷はやや強く、歯も小さく、既に抜け落ちた歯もある。

No.2頭蓋：同基準によれば中型サイズで一段と大きい。骨組みはがっしりとし、頭蓋低く、鼻根の凹陷は弱く、殆ど斜傾するような前額部になる。歯は左I・2が欠歯している他はすべて揃っていた。前臼歯の咬頭に僅かに咬耗がみられるが、右P4にはやや異状な過剰の咬耗がみられた。

No.1・2はそれぞれ特徴的で、No.2は石器時代犬の面影を多分に残す形質の個体であり、No.1の小さ

第46表 イヌ 下顎骨と肢骨計測表

	1	2	3	4	5	6	7	8
	1区D44	1区F41-5	4区N93	F40-22	G103	E43-3	4区N94	4区O93
	砂礫層1140	砂礫層539	砂礫層3-2214	砂礫層426	3-555	砂礫960	3-950	暗褐色砂泥粘土 3-2714
下顎骨全長(1)	140.0±L	L	R	124.38R	R	R	L	-
// (2)	140.0±	120.5±	127.40±R	126.38	-	-	-	110.31L
下顎枝高	-	-	51.62	-	-	51.78±	-	40.55±
// 幅	38.64	31.62	33.71	33.85	-	34.22	-	27.02
下顎体高(M ₁ 後部)	25.38	25.90	25.93	22.17	25.0±	26.0±	20.45	19.18
// (P ₃₋₃ 間)	22.76	19.92	17.85	16.75	17.16	-	17.16	16.90
// 厚(M ₁ 中央)	13.31	12.03	11.55	9.17	11.45	12.17	10.28	9.42
咬筋窩深	7.82	6.11	6.46	5.84	5.88±	-	6.16	-
M ₁ (近遠心径)	21.31	20.01	-	19.03	18.29	20.63	19.32	-
M ₂ (頬舌径)	8.93	8.43	-	7.50	7.59	8.69	7.52	-

	G L	B p	B d	S D
上腕骨・L 6 区G102 3-1352	156.41	31.54	33.03	14.08
脛骨・LN 8 C42砂礫2C-678	156.60 近位関節端幅	-	18.76	11.84
脛骨・L 4 区T21T22 2-1091	159.79	28.43	20.46	12.39
脛骨・R 1 区F-39砂礫層	162.80	-	19.56	12.64

G L : 全長
 B p : 近位端最大幅
 B d : 遠位端最大幅
 S D : 骨幹最小径

い方のは顔つきに中世以降のイヌにみる形質を見ることができる。

下顎骨

下顎骨にも大・小のサイズの差が顕著である。長谷部(1952)の規準に合わせると、下顎骨長140.0という標本は中大型であり、一方110.0というのは小型のもので、その中間の中小、中型も含まれていた。しかし、おしなべていえるのは骨体のきゃしゃなことで、体高、体厚とともに小さい。

四肢

四肢骨はさらに破損が大きく、数の割には形状をよく知り難いのである。計測値に示した上腕骨一例は大きく、中大型になり、全体に頑丈な骨質である。その他の標本で全長を計測できたのは脛骨のみに限られ、その中には146.0以上の中型、161.0の中大型を含むものの骨体は細く、きゃしゃで石器時代犬の面影は無かった。このような形質は先に述べた下顎骨の多くの例にみるのと共通しており、中世以降の遺跡でみるイヌの特徴の一つである。

第47表 イヌの頭蓋計測表

	No.1	No.2	
1 頭骨最大長	164.05	174.98	
2 基底全長	154.98	168.00	
3 頭蓋基底長	146.88	159.02	
4 硬口蓋長	77.82	87.11	
5 硬口蓋最大幅	58.96	61.78	
6 頭蓋幅	50.40	55.00	
12 最小前頭幅	31.89	32.97	
13 前頭骨頰骨突起端幅	49.10	41.50	
12 最小眼窩間幅	32.93	31.77	
17 頭長	78.78	81.65	
18 吻長 (1)	70.44	75.63	
19 吻長 (2)	53.11	53.26	
20 吻幅	35.65±	37.27	
21 吻高	38.37	39.25	
22 鼻骨凹陥深	6.01	3.0±	
P ⁴	近遠心径	15.43	18.71
	頬舌径	8.03	9.57
M ¹	近遠心径	10.88	12.64
	頬舌径	12.24	14.58

これらのイヌは歯の萌出、咬耗でみる限り成獣の個体が大部分であるが、四肢骨の骨端が骨化していないもの、歯の咬耗の殆どみられないものが多く、若い個体も多かったと思われる。またイヌを食べたような痕跡は、脛骨に切痕のある例が一点であるが確認されている。

イノシシ

野生獣ではシカに次ぐ数の骨が出土しているが、シカに比べるとその総量は、はるかに少ない。頭骨では側頭骨、下顎骨と歯牙、四肢骨では上腕骨が4点と最も多く、肩胛骨、桡骨、大腿骨が1点づつと少なかった。上腕骨が遠位端関節の骨質が硬質のために比較的よくのこるからであろう。骨格は成獣のもので、下顎骨の一つはM₃の咬耗の開始期、一つはすべての咬頭に全面的に咬耗が進みセメント質が大きく露呈する状態である。

イノシシの二つの上腕骨にも顕著な打ち割り痕、切痕がみられた。左上腕骨例は骨幹の中央で打ち割られスパイラル状割れ口がみられ、骨幹前面の最下端に近い位置に横位に切痕がみられる。上腕部と前腕部の切り離しのための切り込みであろう。右側上腕骨は近・遠位の両端を欠損するが、骨幹の内側面に

横位に深い切痕がつく。同じような切痕は先に述べた左側上腕骨にもみられる。このような切り方がどのような目的あるいは意図で行われたものか明きらかでない。イノシシ位の太さの骨になるとむやみにたたいても割れないからである。切痕からみても効果をもったとは考えられなかった。

ニホンジカ

野生獣としては最も多くの骨を出土している。その多くは鹿角と四肢骨で、顎骨類は少なかった。また遊離した歯も殆どみることがなかった。遺物としては、人工的な切断痕をしばしばみることのできた鹿角が注目される。鹿角は断片的なものを除いて、角座部分とか枝角との分岐部には以下のような切断の切痕がみられた。

角座部：①前頭骨と角座骨の殆ど接点に近い位置で切断している。切断は金属の刃形で骨体に直行する方向で幾度も切り込むという方法をとっている。そして中央部分、つまりスピンドル質のところまで切り込み、その後で折りとっている。

角座部②：角座骨と角座・角幹をのこす例では、角座骨をほぼその中央から金属刃でたたき切るようにして切断している。切断の方向は鹿角を垂直に起した位置で斜め方向からである。

分岐部：切断は分岐する枝の直上あるいは直下（数cmの間があくこともある）で行われる。方向は角幹にほぼ直交させており、きれいな切断痕をのこしている。これには鋸による切断痕が観察される。

以上のように鹿角の切断には、刃子のようなものによる切り込みと、手斧などによるたたき切りの方法がとられているが、その他に鋸も使われている。鋸の使用例は、その切痕をもつ遺物の例でみると新しいようである。古墳時代の切痕ではたたき切りあるいは削るような切り方である。本遺跡の場合、この二つの方法が併用されている可能性もある。

ウシ

ウマとともに本遺跡の大型家畜の主要種であるが、標本の出土量としてはウマよりもかなり少なかった。標本の保存はウマの場合と同様に一般的に良好であるとは言えないようであった。

別表にその主要な骨の出土量を示したが、頭蓋の保存は少なく、角の部分（角突起）は1点を確認したに止まった。牛の角は様々な利用面があるので、その部分を別に切断していることも考えられる。

標本の大部分は成獣のものであるが、下顎骨にはM₃の未萌出段階（2才前後）のものと四肢骨にも同程度もしくはそれよりも若い個体のあることが確認されている。

ウシの骨格に明瞭な解体痕のあるものは意図的に骨を折ったような痕跡を見いだすことは出来なかつた。出土したウシの幾つかの骨について計測値を表示する。この計測値からすると在来牛である三島牛から黒毛の和牛に近い大きさのものまでがあり、やや大きい。

ウマ

最も多くの歯牙、骨格を出土した動物である。標本の保存は必ずしも良好ではなく、完存もしくはそれに近い標本はごく限られた。例えば頭蓋はそのごく一部が確認されたに過ぎなかつた。しかし、上顎歯は下顎歯とともにかなりの数が出土しており、上顎骨の一部をのこす骨も出土しているので、頭蓋もかなりあったことが推定されるが、良好な状態で確認することはできなかつた。破損した骨は流失したこととも考えられる。

第48表 出土したウマ・ウシの計測値（参考までに幾つかの例を示したものである）

		馬 甲 骨			上 骨			中 骨			機 構			骨			中 足 骨			
		GL	GLP	SLC	GL	Bp	Bd	SD	GL	Bp	Bd	SD	GL	Bp	Bd	SD	GL	Bp	Bd	SD
	MG6, G102, SR3113-1025 N2, E1024	74.6	49.7	—	R 74.8	66.0	27.9													28.0
ウ	G102, 3-1024 G102, 3-1023																			
	F-40-18, 稲葉層425 西川1区.0-93, 海底4.3-2303																			
ア	E-43-23, 稲葉層1028 N8, Ba2, 455b, 2C-684																			
	N8, Ba2, 455b, 2C-684 G6, F173, 3676																			
	MG6, G102, SR3113-1025 3-1202																			
ウ	N1, G43, 2213 MG4, 3-3436 MG4, 3-787																			
シ	N2, E44, 1674 N2, — 西川4区.P-92, 海底453-329																			
	神奈1区.美, 2191																			

四肢骨も完存あるいはそれに近い（骨端の確認できる資料）資料は少なかった。多くの骨の破損は、骨質的に脆い近、遠位骨端に外圧が加わりあるいは腐食によって破損し、その破損が骨幹部にも及ぶというものが一般的であったようである。

計測値の一部を示したが、本遺跡のウマは一般に小さく、在来中型馬である木曾ウマよりも小さいようである。

3.まとめ

神明原・元宮川遺跡の動物遺体は、複雑な河川堆積層からの検出であったために、時期認定、遺跡との関係を明らかに出来たのは一部のものに限られた。これも止む得ないことであったと思う。以上に上述した内容の要点をのべておく。

貝類：自然堆積層のもののみであった。すべて淡水もしくは汽水種であったので、旧大谷川に生息していたものであろう。

爬虫類：イシガメがあり、これも旧河川底で自然死したもののが遺体である。かなりの数が生息していたものと思う。本州の遺跡からのイシガメの出土は、石器時代にさかのばる濃美平野とその近域の貝塚が東限のようである。イシガメの生息と淡水域の発達は関連しよう。神明原・元宮川遺跡のイシガメの一部は古墳時代の可能性があるかも知れない。

鳥類：アホウドリ、ニワトリがあったが、いずれも1～2点である。古墳時代のニワトリの骨格資料は日本ではほとんどない。大谷川の標本がこの時期のものであるかどうかはなお問題であるが、中世鎌倉の遺跡から出土する大型品種ではないので可能性はあるかも知れない。

哺乳類：イルカ類數種があった。大型のイルカのバンドウイルカ下顎骨2個が注目される。時期を古代から中世に到る間のどこにするか決めかねるが、この種のイルカは中世鎌倉の遺跡でも出土していた。捕獲し得い条件があったと考えられる。

イヌの遺骸の出土が目立った。これまでに知られた古墳時代の遺跡でのイヌの出土例はまだ少ない。今少し新しくなると遺跡からの出土量も増える。中世鎌倉の遺跡でのイヌの出土は本遺跡のイヌの出土はそれ程多くはないが、次第に多くなる傾向を示している時期のものといえよう。比較的保存の良かつた2つの頭蓋のうちの一つは鼻根陥凹の弱い、より古いタイプであり、今一つは陥凹のや深い新しい顔付きであった。このような二つの顔付きのイヌがみられるようになるのは古墳時代以降なのである。そしていっしょに出土している四肢骨の中に細くてきしゃな骨があるのも新しい時代のものの特徴である。

ウシ、ウマは他の動物よりもはるかに多くの遺骸をのこしていた。これらの骨は、水上7区S X803、804（古墳時代後期）、宮川4区S R56（古墳時代後期）、同S R53（平安末～鎌倉時代）、宮川6区S R312（古墳時代後期～奈良時代）、同S X335（古墳時代後期）の各区に骨の集中域がみられたのである。おそらく骨はこれに近い時期に所属するものなのである。さらに、ここでは、上述したイルカ、イヌ、イノシシ、シカも出土している。

ところで、ウシ、ウマの骨は、出土状況の詳細を知り得ないが、一頭がまとめて出土するというこ

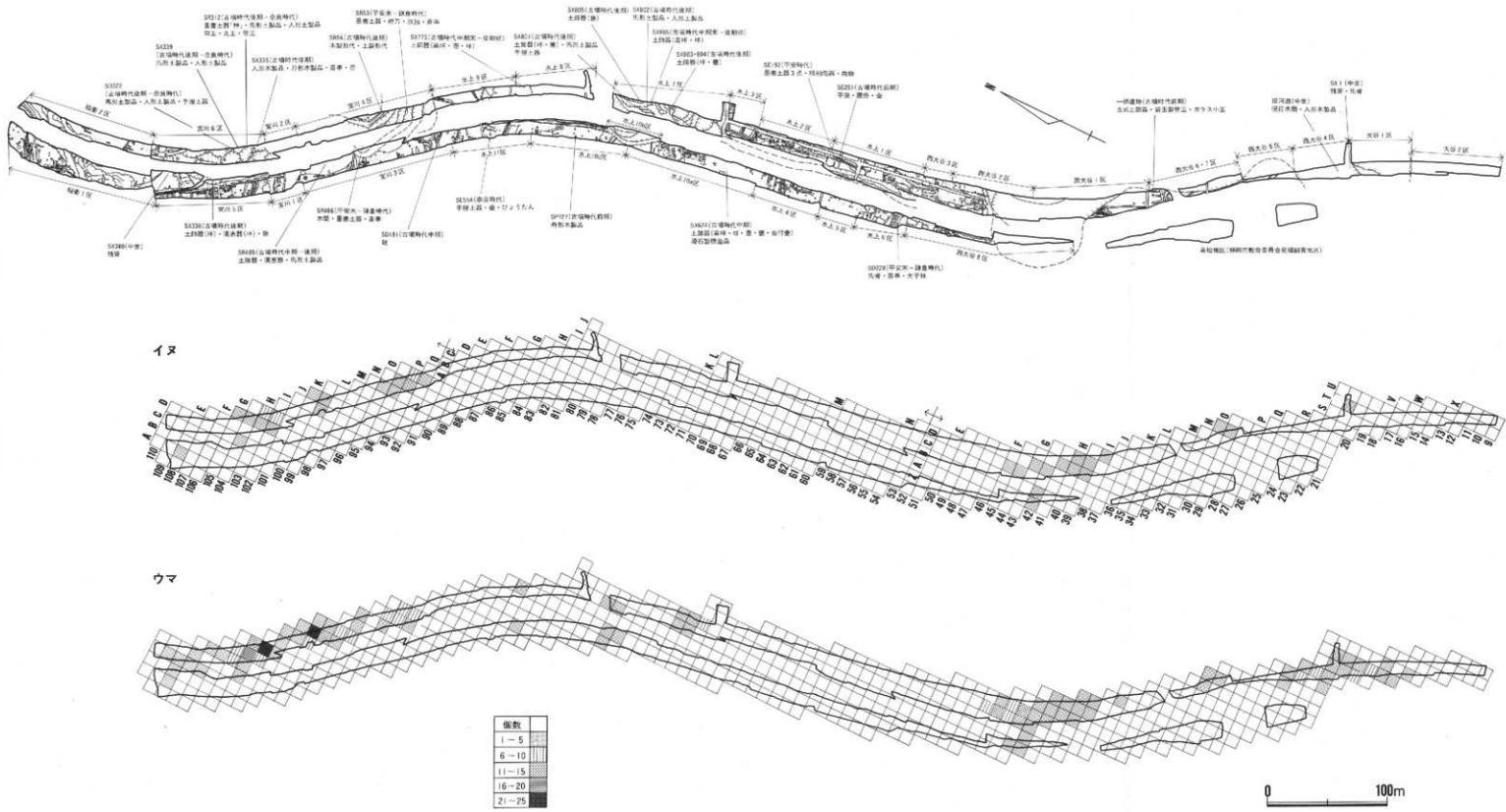
ではなく、骨は破片し、散乱する状況であったらしい。一方、それぞれの地点で出土する人工遺物には、土牛・土馬のような祭祀にかかわる遺物が多い。そして、これと関連して、出土した牛馬が犠牲獸ではなかったかと報告されている。ただ、これには種々の問題が残る。

例えは出土した多くのウシ、ウマの骨に、これを屠殺するための刃物の痕跡を見出すことは骨の保存状況の良くないことからあまり期待できなかった。また、出土状況例えは、頭蓋などが意図的に置かれていたということを確認するまでに到らなかつた。四肢骨についても同様で何らかの特別な扱いの跡を明らかにすることはできなかつた。また本遺跡で出土した多くの土馬と関連することであるが、これらはウマ、ウシに代わるべきものとして製作されたと考えられるものであるので、実際に出土するウシ、ウマが犠牲獸であったとするには問題があるかも知れない。しかし、一方また本遺跡の動物骨について全般的な性格をみると、生活址との関係が少ないように思う。例えは横須賀市鉈切遺跡（古墳時代）にみるような貝、魚、鳥、獸（ウシ、ウマ以外）が少ないし、鎌倉市内の諸遺跡（中世）と比べても遺体の在り方に異なるものがある。このことが本遺跡のウシ、ウマに対する特殊な祭祀の場所であったことを間接的に説明することも考えられる。ただ、遺骸が原位置を保っているかどうかは出土の状況からみて明らかではない。むしろ埋没時の当時の環境から考えてかなり動いているとみなければならぬだろう。祭祀の状況を動物骨から復原するのは難しいようだ。それとこれらのウマ、ウシが食べられたかどうかという問題があるが、これを証明するような切痕をもつ骨は少量であるが検出されているので、ウマ、ウシを食べることは決して稀ではなかつたのではないかと考えている。

神明原・元宮川遺跡の動物は、この地方でのはじめての大量の出土であり、古代から中世に至るこの地域の空白を埋める動物資料である。今回の報文では概要をのべるに止まつたが、別の機会にまたふれたいと思っている。

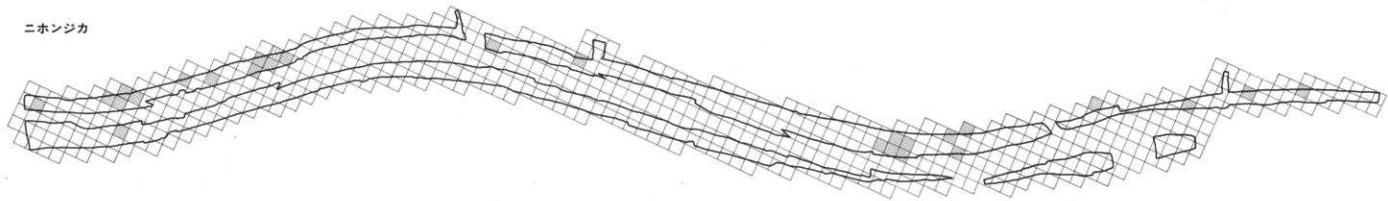
参考文献

- 金子浩昌・牛沢百合子：「なたぎり遺跡出土の動物遺存体と骨角器」『横須賀市“なたぎり遺跡”B地点発掘調査報告書』
なたぎり遺跡調査団1975
金子浩昌：「なたぎり遺跡、C、D地点出土の動物遺存体と骨角加工品」『鉈切遺跡、-C、D地点調査-』横須賀市文化財調査報告書第12集 横須賀市教育委員会 1986年3月
金子浩昌：「鶴岡八幡宮研修道場用地出土の獸骨について」『研修道場用地発掘調査報告書』鎌倉市鶴岡八幡宮研修道場用地発掘調査団、1983年11月
金子浩昌：「千葉地東遺跡出土の動物遺存体」『千葉地東遺跡』 神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告10、1986年2月
金子浩昌：「中世遺跡における動物遺存体—鎌倉市内遺跡の調査例を中心として—」『藤木義昌先生古希記念論集、考古学と関連科学』1988年12月
西中川駿：古代遺跡出土骨からみたわが国の牛・馬の起源、系統に関する研究 昭和63年度文部省科学研究費補助金研究成集報告書 1989年3月

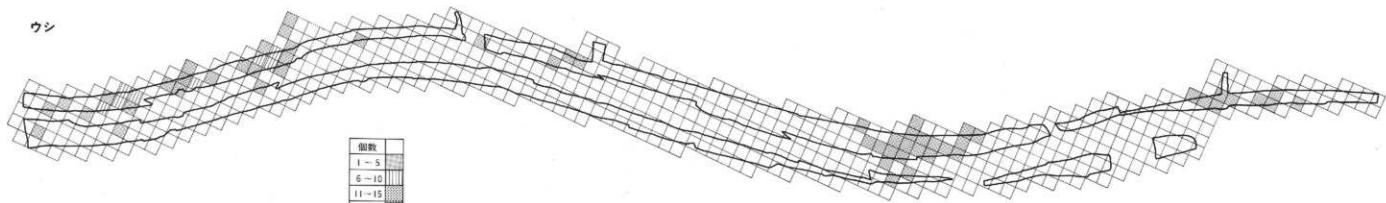


第110図 調査地点における動物骨の出土量表 1

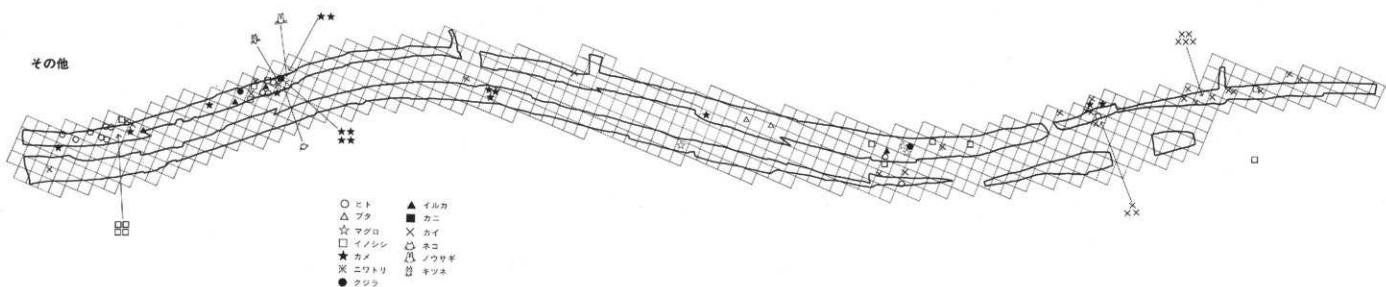
ニホンジカ



ウシ



その他



第111図 調査地点における動物骨の出土量表 2

第49表 地地区別、種別、動物遺存体出土数一覧表

		貝類	カニ類	マダラ類	リクガメ類	イシガメ類	アホウドリ	ニワトリ	サル	ノウサギ	クジラ類	イルカ類	イヌ	ネコ	ウマ	イノシシ	ブタ	ニホンジカ	ウシ	ヒツ	大型獸破片
大谷1区	U15														2			1	1		
西大谷1区	V15	1																1			
宮川2区	H16															1			1	1	
宮川2区	I16																		1		
大谷1区	T16														1						
西大谷1区	V16	1																	1		
宮川2区	H17																		1		
宮川2区	I17														1				2		
大谷1区	T17														1				1		
大谷1区	U17														2				1		
西大谷1区	T18	1													8	1			1	1	
大谷1区	S19														6						
西大谷1区	T19														2		1				
大谷1区	S20	2													5			1			
大谷1区	T20														1						
西大谷4区	R21	1													2				1		
西大谷4区	S21														2				2		
西大谷4区	T21													1		2					
西大谷4区	Q22	1														1					
西大谷4区	R22	5													6			1	1		
西大谷4区	Q23	1													9		2		1		
西大谷4区	R23	1													1			1			
西大谷5区	P24															1					
大谷4区	Q24														1						
西大谷6区	M29	4													1				1		
西大谷6区	N29				1									1							
西大谷6区	M30	2														1					
西大谷6区	N30	1			1									1		3		1			
西大谷6区	L32	1																			
西大谷1、2区	I36															1					
西大谷1、2区	G38															2			1		
西大谷1、2区	H38													1		2		2	1		
西大谷1区	F39													1		5		1	1	1	
西大谷1、2区	G39													1		3			1		

		貝類	カニ類	マグロ類	リクガメ類	イシガメ	アホウドリ	ニワトリ	サル	ノウサギ	クジラ類	イルカ類	イヌヌ	キツネ	ネコ	ウマ	イノシシ	ブタ	ニホンジカ	ウシ	ヒト	大型獸破片	
西大谷1、2区	H39															4		1	3				
西大谷1、2区	F40							1					3			3			2		2		
西大谷1、2区	G40												1			1		2					
西大谷	E41															4			1		1		
西大谷1区	F41													1		3	1		3				
西大谷1区	G41															2							
西大谷8区	B42												3			3			1				
西大谷8区	C42	1												1			1		1		1		
西大谷1、2区	D42																3						
西大谷1、2区	E42													1			5		1		2		
西大谷1、2区	F42																5		2				
西大谷8区	B43																4		1				
西大谷1、2区	D43																4		2	2	1		
西大谷1、2区	E43		2										1	2			15		1	12	4		
西大谷1、2区	F43																			1			
西大谷1区	G43																		2				
西大谷8区	B44	1																					
西大谷1、2区	C44																	1		2			
西大谷1、2区	D44												1	3			7		3	5	1	1	
西大谷1、2区	E44																8		1	3	1		
西大谷1、2区	D45													2			12		1	5	4		
西大谷1、2区	E45																4						
西大谷2区	D46																6	1		2			
西大谷1、2区	E47																		4				
水上1区	L54																		1				
水上1区	L56																		1				
水上1区	K59							1															
水上1区	H60		1																				
水上7区	J70	1															6		1	2			
水上7区	I71																1						
水上7区	J71																1			1			
水上7区	I72																1			1			
水上7区	J72																1						
水上10区	F76						3										1						

		貝類	カニ類	マグロ類	リクガメ類	イシガメ	アホウドリ	ニワトリ	サル	ノウサギ	クジラ類	イルカ類	イヌ	キツネ	ネコ	ウマ	イノシシ	ブタ	ニホンジカ	ウシ	ヒト	大型歯破片	
水上10区	E77																1						
水上10区	F77																1						
水上7区	H77																2		1				
水上10区	F78							1															
水上7区	H78																1		1				
水上11区	C84																1						
水上8区	F85																1						
水上9区	D87																		1				
宮川4区	N92					1											1			1			
宮川4区	O92	1				4	1						3	1	6			1	1				
宮川4区	P92					2			1										1				
宮川4区	C93																		1				
宮川3区	L93																		1				
宮川4区	N93										1	2				7			5	7	2		
宮川4区	O93												6	1	9	1		7	7	1	1		
宮川4区	Q93																		1				
宮川4区	M94	1											1		1	1		1	4				
宮川4区	N94							1					2		7	1		1	9				
宮川4区	O94																		1				
宮川4区	L95										1								2				
宮川4区	M95										1	1											
宮川4区	K96															2							
宮川4区	L96															1							
宮川4区	M96															1							
宮川4区	J97															2							
宮川4区	K97					1										6		1	3				
宮川4区	J98															15			10				
宮川4区	K98															3							
宮川4区	I99												1		6			5					
宮川4区	J99												2		31			3	23				
宮川4区	K99															1			1				
元宮川4区	I100															5			5				
宮川4区	J100															2							
宮川6区	G101												1			1							

		貝類	カニ類	マグロ類	リクガメ類	イシガメ	アホウドリ	ニワトリ	サル	ノウサギ	クジラ類	イルカ類	イヌ	キツネ	ネコ	ウマ	イノシシ	ブタ	ニホンジカ	ウシ	ヒト	大型歯破片
元宮川2区	H101															1						
元宮川	I101															2						
宮川6区	D102																	1	1			
宮川6区	F102													2			10			2		
宮川6元宮川2	G102	1				1								6			22		1	10		
宮川6区	D103																1					
宮川6区	E103																2					
宮川6区	F103													5			16	4		2	9	
宮川6区	G103	1												7			14	1		1	9	
宮川6区	D104													1								
宮川6区	E104																10	6	2			
宮川6区	F104													1			7		1	4	2	
宮川6区	D105																		1			
宮川6区	E105																1			1		
宮川6区	F105													1								
宮川5区	C106																1					
宮川6区	D106																			1		
宮川6区	E106																1					
宮川5区	A107	1																				
宮川6区	C107					1											4					
宮川6区	D107																4			1	1	
宮川5区	A108														1		5			3		
宮川5区	B108																5					
宮川6区	C108																1			2		
宮川6区	C109																1			1		
計		29	1	3	4	12		4		1	2	4	67	1	1	399	13	2	45	205	14	26

第50表 動物遺存体部位別出土數一覧表〈イヌ〉

地 区	グリッド	環	軸	腰	肋	頭 蓋	上 頸 骨	下 頸 骨	齒	上 腕 骨	桡	尺	大 腿 骨	膝 蓋	脛	蹠	中手・足 骨	合 計
		椎	椎	椎	骨	骨				骨	骨	骨	骨	骨	骨	骨		
宮川4区	O 9 2	左																
		右												1				1
		不明				1												1
宮川4区	O 9 3	左										1						1
		右																
		不明							2									2
宮川4区	N 9 3	左																
		右																
		不明											1					1
宮川4区	N 9 4	左										1						1
		右																
		不明																
宮川4区	I 9 9	左																
		右																
		不明							1									1
宮川6区	F 102	左																
		右																
		不明					1							1				2
宮川2区	G 102	左									1							1
		右																
		不明	1	1		1	1				1		1					6
宮川6区	F 103	左																
		右																
		不明									2		1		1			4
宮川6区	G 103	左																
		右																
		不明		1	2			1			2							6

地区	グリッド		環椎	軸椎	腰椎	肋骨	頭蓋骨	上頸骨	下頸骨	歯	上腕骨	橈骨	尺骨	大腿骨	膝蓋骨	脛骨	踵骨	中手・足骨	合計
宮川6区	F104	左																	
		右																	
		不明				1													1
宮川6区	F105	左																	
		右															1		1
		不明	1																1
宮川5区	A108	左																	
		右																	
		不明								1									1
計			2	2	2	3	2	1			4	6		3	3	2		1	31

第51表 動物遺存体部位別出土数一覧表（ウマ）

地区	グリッド	部位	頭	肋	肩	上	橈	尺	中	大	膝蓋	脛	中	中手・足	基	中	末	合
			椎	骨	胛骨	腕骨	骨	骨	手骨	尾骨	蓋骨	骨	足骨	手骨	節骨	節骨	節骨	計
宮川2区	I 1 7	左																
		右																
		不明											1					1
西大谷1区	U 1 7	左										1						1
		右																
		不明				1						1						2
大谷1区	T 1 8	左																
		右					1											1
		不明											1					1
大谷1区	T 1 8	左																
		右						1										1
		不明																
西大谷1区	S 1 9	左										1						1
		右																
		不明													1			1
大谷1区	S 2 0	左						1										1
		右																
		不明																
西大谷4区	R 2 1	左																
		右					1											1
		不明																
西大谷4区	Q 2 2	左										1						1
		右																
		不明																
大谷4区	R 2 2	左			1													1
		右																
		不明					1											1

地区	グリッド	頭 椎	肋 骨	肩 胛 骨	上 腕 骨	桡 骨	尺 骨	中 手 骨	大 腿 骨	膝 蓋 骨	胫 骨	中 足 骨	中 手 ・足 骨	基 節 骨	中 節 骨	末 節 骨	合 計
大谷4区	Q 2 3	左				3		1									4
		右															
		不明															
西大谷1、2区	G 3 8	左															
		右															1
		不明						1									
西大谷1、2区	G38-10	左															
		右										1					1
		不明															
西大谷1、2区	H38-6	左															
		右															
		不明										1					1
西大谷	F 3 9	左															
		右						1									1
		不明															
西大谷	F 39-3	左															
		右															
		不明		1			1										2
西大谷	F 39-14	左										1					1
		右															
		不明															
西大谷	G 3 9	左					1										1
		右															
		不明										1					1
西大谷1、2区	H 3 9	左				2											2
		右															
		不明															

地区	グリッド	頸椎	肋骨	肩胛骨	上腕骨	橈骨	尺骨	中手骨	大脛骨	膝蓋骨	脛骨	中足骨	中手・足骨	基節骨	中節骨	末節骨	合計
西大谷	F 4 0	左															
		右															
		不明			1												1
西大谷	F 40-18	左					1										1
		右															
		不明				1											1
西大谷1、2区	G 4 0	左															
		右															
		不明						1									1
西大谷	F 41-10	左				1											1
		右															
		不明															
西大谷8区	B 4 2	左							1								1
		右				1	1										2
		不明															
西大谷1、2区	D 4 2	左															
		右															
		不明						1									1
西大谷1、2区	E 42-3	左		1													1
		右															
		不明															
西大谷1、2区	F 4 2	左												1			
		右															
		不明															1
西大谷8区	B 4 3	左									1						1
		右															
		不明															

地区	グリッド		頸椎	肋骨	肩胛骨	上腕骨	橈骨	尺骨	中手骨	大脛骨	膝蓋骨	胫骨	中足骨	中手・足骨	基節骨	中蹠骨	末節骨	合計
西大谷1、2区	D43-20	左			1													1
		右																
		不明																
西大谷1、2区	E 4 3	左																
		右												1	1			2
		不明																
西大谷1、2区	E 43-3	左																
		右											1					1
		不明																
西大谷1、2区	E 43-9	左																
		右																
		不明											1					1
西大谷1、2区	E 43-23	左													1			1
		右																
		不明																
西大谷1区	D 4 4	左													1			1
		右											1	1				2
		不明																1 1
西大谷1、2区	E 4 4	左					2											2
		右																
		不明																
西大谷2区	D 4 5	左				1								1				2
		右												2				2
		不明													2			2
西大谷1、2区	E 4 5	左													1			1
		右						1						1				2
		不明																

地区	グリット	頸椎	肋骨	肩胛骨	上腕骨	橈骨	尺骨	中手骨	大脛骨	膝蓋骨	脛骨	中足骨	中手・足骨	基節骨	中節骨	末節骨	合計		
西大谷1、2区	D 4 6	左				1											1		
		右																	
		不明																	
大谷川	D 4 6	左																	
		右															1		
		不明															1		
水上10区	F 7 6	左																	
		右																	
		不明									1						1		
宮川4区	O 9 2	左																	
		右																	
		不明	1	1									1	1			4		
宮川4区	N 9 3	左				1												1	
		右									1							1	
		不明			1								1					2	
宮川4区	O 9 3	左																	
		右					1	1	1									3	
		不明										1						1	
宮川4区	N 9 4	左				1													1
		右																	
		不明																	
宮川4区	L 9 6	左																	
		右																	
		不明												1				1	
宮川4区	J 9 8	左			1						1							2	
		右									1							1	
		不明																	

地区	グリッド		頸椎	肋骨	肩胛骨	上腕骨	橈骨	尺骨	中手骨	大脛骨	腓蒼骨	脛骨	中足骨	中手・足骨	基節骨	中節骨	末節骨	合計
宮川4区	K 9 8	左																
		右																
		不明							1									1
宮川4区	I 9 9	左																
		右														1		1
		不明																
宮川4区	J 9 9	左				1							1	1				3
		右				1	2		1	1		2	1					8
		不明							1			1				1	1	4
宮川4区	I 100	左																
		右																
		不明											1					1
宮川6区	G 101	左																
		右																
		不明							1									1
元宮川2区	I 101	左											1					1
		右																
		不明																
宮川6区	F 102	左					1					1						2
		右										1						1
		不明							1						1			2
宮川6区	G 102	左							2									2
		右			1			1					1					3
		不明		2			1	1	1					1	1			7
宮川6区	F 103	左					1		1	1								3
		右										1						1
		不明							1					1				2

地区	グリッド	頸椎	肋骨	肩胛骨	上腕骨	橈骨	尺骨	中手骨	大脛骨	膝蓋骨	胫骨	中足骨	中手・足骨	基節骨	中節骨	末節骨	合計
宮川6区	G103	左						1									1
		右															
		不明										1					1
宮川6区	E104	左										1					1
		右						1									1
		不明										1					1
宮川6区	F104	左															
		右															
		不明										1	1				2
宮川5区	C106	左															
		右															
		不明	1														1
宮川6区	E106	左															
		右															
		不明															1 1
宮川6区	C107	左															
		右										1					1
		不明															
宮川5区	A108	左															
		右							1								1
		不明															
宮川5区	B108	左					1										1
		右															
		不明															
大谷1区	セクション 帶	左															
		右															
		不明										1					1

地区	グリッド	頸椎	肋骨	肩胛骨	上腕骨	橈骨	尺骨	中手骨	大腿骨	膝蓋骨	脛骨	中足骨	中手・足骨	基節骨	中節骨	末節骨	合計
西大谷	拡大猪掘区	左								1							1
		右					1										1
		不明															
西大谷7区	旧大谷川	左															
		右															2
		不明					1	1									
西大谷1、2区	土手下	左															
		右															
		不明						1									1
西大谷1、2区	排水中	左															
		右															
		不明										1					1
	グリッド不明	左										3					3
		右			1												1
		不明										1					1
計		2	5	4	10	28	11	20	6	4	27	20	3	3	4	3	149

第52表 動物遺存体部位別出土数一覧表（ニホンジカ）

地 区	グリッ フ	環 椎	軸 椎	肋 骨	頭 骨 片	前 頭 骨	後 頭 底 部	角 齒	肩 胛 骨	上 腕 骨	尺 骨	中 手 骨	大 腿 骨	胫 骨	距 骨	蹠 骨	中 足 骨	中 手 ・足 骨	合 計
西大谷1区	V 1 5	左																	
		右																	
		不明						1											1
西大谷1区	T 1 9	左																	
		右																	
		不明	1																1
西大谷4区	Q 2 3	左																	
		右							1										1
		不明							1										1
西大谷6区	N 3 0	左																	
		右																	
		不明														1			1
西大谷	F 39-2	左								1									1
		右																	
		不明																	
西大谷1、2区	H39-21	左																	
		右																	
		不明						1											1
西大谷1、2区	G 4 0	左				1													1 2
		右																	
		不明																	
西大谷	G 40-1	左																	
		右														1			1 2
		不明																	
西大谷1、2区	D 4 3	左						1								1			2
		右																	
		不明																	

地区	グリッド	環椎	軸椎	肋骨	頭骨片	前頭骨	後頭底部	角	齒	肩胛骨	上腕骨	尺骨	中手骨	大指骨	脛骨	距骨	踵骨	中足骨	中手・足骨	合計
西大谷1区	D 4 3	左																		
		右				1														1
		不明																		
西大谷1、2区	E 48-II	左																		
		右																		1
		不明								1										
西大谷1、2区	D 4 4	左								1										1
		右								1										1
		不明			1									1				1	3	
西大谷1、2区	D 4 5	左								1										1
		右																		
		不明					1		1											2
水上7区	J 7 0	左								1										1
		右																		
		不明																		
水上7区	H 7 7	左																		
		右																		
		不明								1										1
宮川4区	O 9 2	左																		
		右																		
		不明			1				1											2
宮川4区	N 9 3	左												1		1	1			3
		右																		
		不明		1	1														1	3
宮川4区	O 9 3	左								1										1
		右																		
		不明			2					2										4

地区	グリッド		環	軸	肋	頭	前	後	角	曲	肩	上	尺	中	大	腰	距	踵	中	手・足	合
			椎	椎	骨	骨片	頭骨	頭骨	頸底部		胛骨	腕骨	手骨	腿骨	腿骨	骨	骨	骨	足骨	計	
宮川4区	M94	左																			
		右																			
		不明				1														1	
宮川4区	N94	左																			
		右					1													1	
		不明				1														1	
宮川4区	K97	左																			
		右																1		1	
		不明																			
宮川4区	J99	左							1											1	
		右																			
		不明																1	1	2	
宮川6区	D102	左						1												1	
		右																			
		不明																			
宮川6区	G102	左				1														1	
		右																			
		不明																			
宮川6区	F103	左													1					1	
		右																			
		不明						1												1	
宮川6区	G103	左																			
		右															1			1	
		不明																			
宮川6区	C109	左																			
		右																			
		不明						1												1	
計			1	6	4	1	1	6	8		1	1	1	1	2	1	2	2	38		

第53表 動物遺存体部位別出土数一覧表(ウシ)

地区	グリッド	軸 椎	頸 椎	肋 骨	前 頭 骨	角	頸 骨	眼 窩 部	肩 胛 骨	上 腕 骨	桡 骨	尺 骨	中 手 骨	大 腿 骨	膝 蓋 骨	脛 骨	中 足 骨	基 節 骨	中 節 骨	合 計
大谷1区	T 1 7	左															1		1	
		右																		
		不明																		
大谷1区	U 1 7	左																		
		右											1						1	
		不明																		
大谷1区	T 1 8	左																		
		右											1						1	
		不明																		
大谷1区	第2トレンチ	左															1		1	
		右																		
		不明																		
大谷1区	S 2 0	左																		
		右														1			1	
		不明																		
西大谷4区	R 2 1	左																		
		右														1			1	
		不明																		
西大谷4区	S 2 1	左														1			1	
		右																		
		不明																		
大谷4区	S 2 1	左														1			1	
		右																		
		不明																		
西大谷4区	R 2 2	左																		
		右																		
		不明															1		1	

地区	グリッド	軸椎	頸椎	肋骨	前頭骨	角	頬骨	眼窩部	肩胛骨	上腕骨	桡骨	尺骨	中手骨	大脛骨	膝蓋骨	脛骨	中足骨	基節骨	中節骨	合計
西大谷1、2区	H38-6	左																		
		右																		1
		不明			1															1
西大谷1区	G 3 9	左																1		1
		右																		
		不明																		
西大谷1、2区	H 3 9	左																		
		右																		1
		不明																		
西大谷1、2区	H39-16	左																		1
		右																		
		不明																		
西大谷	F 4 0	左																		
		右																		1
		不明																		
西大谷	E 4 1	左															1			1
		右																		
		不明																		
西大谷	F 4 1	左															1	1		2
		右																		
		不明																		
西大谷	F41-9	左															1			1
		右																		
		不明																		
西大谷	F41-14	左															1			1
		右																		
		不明																		

地区	グリッド	軸椎	頸椎	肋骨	前頭骨	角	頸骨	脛窩部	肩胛骨	上腕骨	橈骨	尺骨	中手骨	大靱骨	膝蓋骨	脛骨	中足骨	基節骨	中節骨	合計
西大谷1、2区	E 4 2	左								1									1	
		右																		
		不明																		
西大谷1、2区	F 4 2	左																		
		右															1		1	
		不明																		
西大谷	F 4 2	左																		
		右																		
		不明																1	1	
西大谷1区	D 4 3	左															1		1	
		右																		
		不明																		
西大谷1、2区	D43-3	左																		
		右															1		1	
		不明																		
西大谷1、2区	E 4 3	左																		
		右														1				
		不明																		
西大谷1、2区	E43-2	左																		
		右															1		1	
		不明																		
西大谷1、2区	E43-3	左															1		1	
		右																		
		不明																		
西大谷1、2区	E43-11	左																		
		右															1		1	
		不明																		

地区	グリッド	軸椎	頸椎	肋骨	前頭骨	角	頸骨	腰窓部	肩胛骨	上腕骨	橈骨	尺骨	中手骨	大腿骨	膝蓋骨	脛骨	中足骨	基底骨	中跖骨	合計
西大谷1、2区	E43-12	左											1						1	
		右																		
		不明																		
西大谷1、2区	E43-17	左															1		1	
		右																		
		不明																		
西大谷1、2区	E43-19	左																		
		右																		
		不明					1												1	
西大谷1、2区	F 4 3	左																		
		右																		
		不明				1													1	
西大谷1区	G 4 3	左															1		1	
		右																		
		不明											1	1				1	3	
西大谷1、2区	C 4 4 • 4 3	左																		
		右				1													1	
		不明																		
西大谷1、2区	E 4 4	左								1	1	1							3	
		右																		
		不明																		
西大谷1、2区	D 4 5	左											1	1					2	
		右																		
		不明	1						1				1	1					4	
西大谷1、2区	D 4 6	左																		
		右												1					1	
		不明																		

地区	グリッド	軸椎	頸椎	肋骨	前頭骨	角	頸骨	眼窩部	肩胛骨	上腕骨	橈骨	尺骨	中手骨	大腸骨	膝蓋骨	脛骨	中足骨	基節骨	中節骨	合計
西大谷7区	旧大谷川	左								1										1
		右												1						1
		不明											1							1
宮川4区	N 9 2	左																		
		右															1			1
		不明																		
宮川4区	O 9 2	左																		
		右																		
		不明		1																1
宮川4区	P 9 2	左																		
		右																		
		不明		1																1
宮川4区	N 9 3	左											1		1	1	1			4
		右																		
		不明			1									1						2
宮川4区	O 9 3	左															1			1
		右												1	1		1			3
		不明																		
宮川4区	Q 9 3	左															1			1
		右																		
		不明			1															1
宮川4区	O 9 4	左																		
		右																		
		不明												1						1
宮川4区	M 9 4	左											1				1			2
		右											1			1				2
		不明																		

地区	グリッド		軸椎	頸椎	肋骨	前頭骨	角	頸骨	眼窩部	肩胛骨	上腕骨	橈骨	尺骨	中手骨	大腿骨	膝蓋骨	脛骨	中足骨	基節骨	中髄骨	合計
宮川4区	M95	左															1				1
		右					1														1
		不明																			
宮川4区	J98	左									1			1				1			3
		右											1	1							2
		不明																			
宮川4区	J99	左									1	1		1							3
		右								1		2			3		2				8
		不明												1		1	1				3
宮川4区	I99	左																			
		右											1								1
		不明																			
宮川4区	K99	左													1						1
		右																			
		不明																			
宮川4区	I100	左																			
		右																			
		不明																	1	1	
宮川6区	D102	左																			
		右																			
		不明			1									1							2
宮川6区	G102	左												1		1	1				3
		右																			
		不明			1																1
宮川6区	F103	左																			
		右																			
		不明																	1	1	

地区	グリッド	軸椎	頸椎	肋骨	前頭骨	角	頸骨	眼窩部	肩胛骨	上腕骨	桡骨	尺骨	中手骨	大腿骨	膝蓋骨	脛骨	中足骨	基節骨	中節骨	合計
宮川6区	G103	左												1					1	
		右											1						1	
		不明															1	1	2	
宮川6区	E104	左								1									1	
		右											1						1	
		不明										1							1	
宮川6区	F104	左																		
		右																		
		不明												1		1			2	
西大谷1区	グリッド 不明	左												1					1	
		右											1						1	
		不明																		
西大谷1、2区	グリッド 不明	左															1		1	
		右																		
		不明																		
宮川2区	グリッド 不明	左																		
		右																		
		不明																	1	
計		1	4	4	1	2	2	1	1	18	17	1	15	19	2	17	7	4	121	

第54表 グリッド別出土数一覧表(ウマ)

地区		左 前臼歯				左 臼歯			右 前臼歯				右 臼歯			左顎骨		右顎骨		その他	計	
	上顎歯	1	2	3	4	1	2	3	1	2	3	4	1	2	3	上顎骨	上顎骨					
	下顎歯	1	2	3	4	1	2	3	1	2	3	4	1	2	3	下顎骨	下顎骨					
西大谷1区	T 1 6															1						
西大谷1区	T 1 7					1	1											1				
西大谷1区	T 1 8					1										1		1	1			
大谷1区	S 1 9					1										1		1				
西大谷1区	T 1 9																1		P+左右不明			
大谷1区	S 2 0		1															1				
西大谷4区	R 2 1			1																		
西大谷4区	S 2 1				1																	
大谷4区	S 2 1															1						
西大谷4区	T 2 1																1	1				
西大谷4区	R 2 2																		上左 LM 位置不明			
西大谷4区	Q 2 3		2			1												1				
西大谷4区	R 2 3					1												1				
西大谷5区	P 2 4				1													1				
宮川6区	N 3 0					1																
西大谷6区	N 3 0					1																
西大谷1、2区	I 3 6			1	1													1				
西大谷1、2区	H 3 9					1											1					

地区		左 前臼齒				左 白齒			右 前臼齒				右 白齒			左齶骨	右齶骨	その他	計	
		上顎齒	1	2	3	4	1	2	3	1	2	3	4	1	2	3	上顎骨	上顎骨		
		下顎齒	1	2	3	4	1	2	3	1	2	3	4	1	2	3	下顎骨	下顎骨		
西大谷	E 4 1						1													
西大谷	F 4 1						1	1												
西大谷1、2区	G 4 1						1							1						
西大谷8区	B 4 2									1										
西大谷1、2区	E 4 2													1		2	LM上下不明			
西大谷1区	F 4 2													2	1		1			
西大谷8区	B 4 3						1							1				LM七下不明		
西大谷1、2区	D 4 3						1	1	1	1										
西大谷1、2区	E 4 3						1			2										
西大谷1、2区	D 4 4													1						
西大谷1区	D 4 4													1						
西大谷1、2区	E 4 4							1	1							1	1			
西大谷1、2区	D 4 5													1	1		1			
西大谷2区	D 4 5													1	1	1				
西大谷1、2区	E 4 5													1	1	1	1			
西大谷2区	D 4 6						1	1	1	1										
水上7区	J 7 0						1							1	1					
水上7区	I 7 1							1	1							1	1			

地区		左 前臼齒				左 白齒				右 前臼齒				右 白齒				左顎骨	右顎骨	その他	計		
	上顎齒	1	2	3	4	1	2	3	1	2	3	4	1	2	3	上顎骨	下顎骨						
水上7区	J 7 1	1																					
		1	1	1	1	1	1																
水上10区	E 7 7									1	1	1	1	1	1	1							
										1	1	1	1	1	1	1							
水上7区	H 7 7													1									
														1									
水上7区	H 7 8					1																	
						1																	
水上8区	F 8 5					1																	
						1																	
宮川4区	N 9 2															1							
																1							
宮川4区	O 9 2							1															
								1															
宮川4区	N 9 3							1								2		1			切齒		
								1	1														
宮川4区	O 9 3															1			1		上顎乳齒切齒2		
																1							
宮川4区	N 9 4					1	1	1								1				切齒			
						1	1	1								1							
宮川4区	M 9 6																1						
																1							
宮川4区	J 9 7									1	1												
										1													
宮川4区	K 9 7																1	1					
										1							1	3					
宮川4区	J 9 8							1	2		1	2				1	1	1			切齒		
								1			1					1							
宮川4区	K 9 8										1												
											1												
宮川4区	I 9 9											1					1						
												1											
宮川4区	K 9 9																		1	1			
																			1	1			
宮川4区	I 100							1			1												

地区		左 前臼齒				左 臼齒			右 前臼齒				右 臼齒			左顎骨	右顎骨	その他	計		
	上顎齒	1	2	3	4	1	2	3	1	2	3	4	1	2	3	上顎骨	上顎骨				
	下顎齒	1	2	3	4	1	2	3	1	2	3	4	1	2	3	下顎骨	下顎骨				
宮川 4 区		J 100								1											
元宮川 2 区						2				1											
元宮川				I 101				1													
宮川 6 区						2				1						切齒 2					
宮川 6 区		G 102								1		1		1				LM 1.上下不明 PM ^d 左右不明			
宮川 6 区						1		3		1		2		1							
宮川 6 区		D 103								1											
宮川 6 区				E 103						1											
宮川 6 区						1				1						切齒 2					
宮川 6 区		G 103				2		1		1		1		1							
宮川 6 区						2		1		1		1		1							
宮川 6 区		E 104				1		2				1		1		切齒					
宮川 6 区						1		2		1		1		1							
宮川 6 区		F 104				1				1				1							
宮川 6 区										1				1							
宮川 6 区		C 107				1		2				1		1				切齒			
宮川 5 区						1				1				1				切齒			
宮川 5 区		B 108				1				1				1							
宮川 6 区						1				1				1							
宮川 6 区		C 109				1				1				1							
西大谷						1				1				1							
西大谷		旧大谷川								1				1							
水上 7 区						2															

第55表 グリッド別歯出土数一覧表(ウシ)

地区	左 前臼齒				左 臼齒				右 前臼齒				右 臼齒				その他	計	
	上顎齒		1	2	3	4	1	2	3	1	2	3	4	1	2	3	上顎骨		
	下顎齒		1	2	3	4	1	2	3	1	2	3	4	1	2	3	下顎骨		
宮川2区	I	1	6													1			
宮川2区	H	1	7													1	1		
宮川2区	I	1	7					1								1	2		
西大谷4区	R	2	3					1								1			
西大谷1、2区	H	3	8												1				
西大谷8区	B	4	3					1											
西大谷1、2区	E	4	3				1												
西大谷1、2区	D	4	4							2					1	1			
西大谷1、2区	E	4	4												1				
西大谷1、2区	E	4	7					1								1			
水上7区	J	7	0												1	1			
水上7区	J	7	1					1											
水上7区	H	7	8						1										
宮川4区	N	9	3												1			LM上下不明	
宮川4区	O	9	3																
宮川4区	N	9	4						1						1	1		M ₁ M ₂ P ₃	
宮川4区	K	9	7							1						1	1		P ₄ 左右不明
宮川4区	J	9	7												1				

地区		左 前臼齒				左 臼齒				右 前臼齒				右 臼齒				左顎骨			右顎骨			その他	計		
	上顎齒	1	2	3	4	1	2	3	1	2	3	4	1	2	3	1	2	3	上顎骨	上顎骨							
	下顎齒	1	2	3	4	1	2	3	1	2	3	4	1	2	3	1	2	3	下顎骨	下顎骨							
宮川4区	J 9 8					1	1											1	1								
宮川4区																			1								
宮川4区	I 9 9																		1								
宮川4区	J 9 9					1																					
宮川4区	I 100																	1									
宮川6区	F102						1											1									
宮川6区	G102							1										1	1								
宮川6区	F103								1										1						五顎齒		
宮川6区	G103								1										1								
宮川6区	E104									2									1	1					LM3上下不明 RM位置不明		
宮川6区	D105																									LM1?	
宮川5区	A108										1	1															
宮川6区	C108										1	1								1							
水上7区	旧大谷川																		1								

第10節 神明原・元宮川遺跡出土の骨角加工品

金子 浩昌(早稲田大学教育学部)

神明原・元宮川遺跡からは骨角に種々の切痕、加工痕をとどめる遺物が出土している。そのうちの一つはウシ、ウマ、イヌの四肢骨に解体あるいは骨角を切断その他の変形を試みようとする際に付いた傷をもつもので、これについては既に個々の動物についてのべた際にふれておいた。今一つはいわゆる骨角製品といわれるものであって、極く少量の遺物が出土している。以下この角骨製品についてのべておく。

I. 骨鏃

宮川6区 F103 第112図1

現長53.92 略中央幅×厚 8.43×3.78

シカの中手骨製

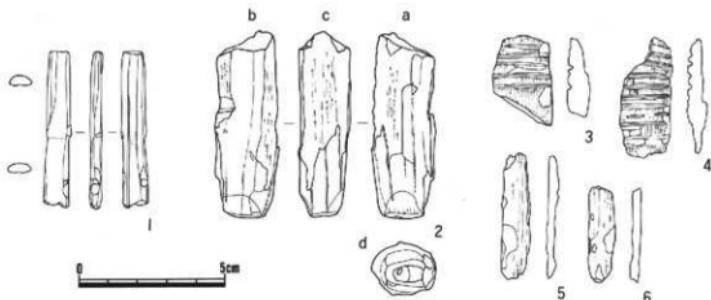
両端を欠き身部のごく一部をのこすのみの破片である。中央に浅い切込みがあり、この種の鏃にみる特有のつくりである。表面はよく研磨され裏側には鼈腔壁がみられる。その鼈腔壁の片側に細い切込みが縦に走る。

この種の鏃はその大きさ、鏃のつけ方に多少の差違のある製品がつくられているが、本製品はそのうちの細型のつくりで、長さもやや短く全長120~130位であろうか。鏃は多分一つで、茎のところでくびれて細くなるのである。

II. 刀子柄

1) 刀子柄 西大谷2区 E43-4 砂礫 第112図2

鹿角を使ったもの



第112図 骨角加工品実測図1

1. 骨鏃

2. 鹿角製刀子柄(d.が柄頭になる a,b.側面 c.上面 d.柄頭先端面)

3-6. 剣目をもつ鹿角製品(3,4.剣目部分の一部 5,6.柄の部分の一部)

現存長 64.0 略中央部の径21.0×17.0

遺物はほぼ中程で折れ、残存部は柄の頭の方に当たるようである。角の表層部が一部剥離するなど保存は良好でない。柄頭の部分はほぼ垂直に切られ、縦長だ円形に孔があく、その中は泥がつまりよく観察出来ない。柄頭の周囲は削りをいれてやや尖るようなかたちになっている。

表面はよく研磨されており、さらに手ずれがあるので、加工痕などは柄頭の方を除いてみることはできない。また全体に僅かな反りがあったようである。復元形あるいは大きさは次に述べる製品に近いものであったろうと思われる。

2) 刀子柄

宮川 6 区 F 103 3-1176

鹿角枝を使ったもの 完存品

現長（直線径）：135.8

径：基部17.91×18.27 頭部16.23×13.74

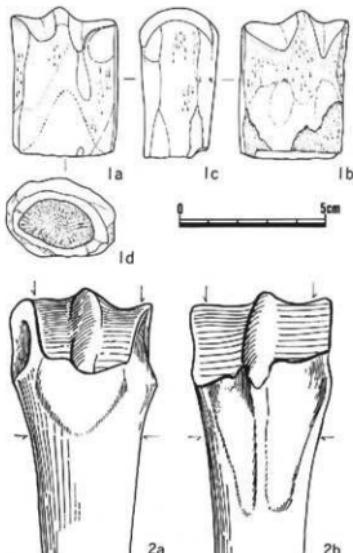
完存するが全面に亀裂が細かくはいっている。刀子の鉄片がのこる。柄頭に近い1/3程のところで僅かに湾曲する。全面は埋没後の腐食のために細かい凹凸あるいは傷がつき、原形はほとんど判明出来ない程度である。しかし、子細にみると整形時の擦痕が所々みられ、また滑らかな部分もあるので、元はもつと平滑な製品であったのであろう。

刀子茎部の挿入部内径は10.3×13.4(亀裂が生じてるので実際にはこれよりもやや狭いと思われる。) 刀部鉄の幅11.20、同厚さ3.3、周りにかなりの隙間があくことになる。そこにはきっちりと木質部がつめられており、刀部の脱け落ちを防止していたようである。この木片は薄い板状のものである。

III. 柄の一部かと思われるもの

ウマの中足骨遠位部を使った加工品である。現長50.07、骨端の径36.53×26.75、切断部の径34.92×21.25。この加工品はウマの中足骨遠位部を利用した特殊なもので、骨端を切断後、左右の両側を削って面取りし、さらにその両側の角を切りとっている。これで末端の骨らしい感じはかなり無くなっている。しかし、骨端中央の「縦稜」と呼称する関節突起とその周辺はそのままのこされ、多分この部分は装飾的な意味を含めて残されたのであろう。

切断部側は平に切られており、その内側円錐型に孔があけられる。深さは22.22で全体の半ばに達する深さである。



第113図 骨角加工品実測図 2

柄の一部かと思われるもの

ウマ中足骨(2a,b)遠位部を示す(矢印の方向に切っている)

la・b・c 加工品

2a・b 現生ウマの同部位を示す

a.前面 b.後面 c.側面 d.切断面

全体は上述した加工の他に特に研磨するようなことはなかったようである。どのような目的でつくられたのか、その類例もないが、表記のような柄頭の一種とする用途を考えておきたい。

IV. 刻み目をもつ鹿角製品

宮川4区 J99 暗灰色砂混粘土

標本は20数片の小片に分割され、それらはほとんど修復できない状態である。おそらくこれは原品の一部であり、原品の破損後細片化し、また腐食によって多くの部分が失われたのであろう。

破片より推測される原形は、径20.0程の鹿角の一端に、幅3.0程の間隔を置いて溝を切り込んで行ったものである。溝の幅は1.5位で、断面はやや開き気味のU字型である。おそらく鋸で切り込んだのであろう。この切込みが鹿角の全周をめぐるのではなく、片方の面のみであったらしいことは残存する部分からもうかがえる。

刻みの数は現存標本で数えられるのは11体までであるが、途中で折れているのでさりにつづくはずである。なお、二つの比較的大きい破片のうちの一つには、刻線の終った直ぐ下で、斜めに切断した痕がみられる。この切断がどのような意味をもつか不明である。本品が使われなくなった後の何か廃棄を現す行為であったのであろうか。

刻線の上面は腐食が著しく、もとの状況を観察することは全く出来ない。この角製品の用途に関して考えさせる手だてのないことを残念に思うのである。

本製品の製作年代は、周囲から比較的多く出土する古墳時代後期の遺物との関連からみて、その所属する年代も同じ頃とみてよいであろう。その形態や製作法にこれまでに知られた製品と共に通する点のあることが認められるからである。ただ上述したように本資料の破損が著しいために細部にわたる比較が充分できないために、本製品の特徴を明らかにすることができなかった。

まとめ

本遺跡の骨角加工品は、鐵、刀子柄、柄頭?、刻みをもつ製品に大別され、出土はいずれも1~2点であった。これらの骨角加工品の年代は古墳時代後期と考えられているが問題のこる点もある。調査面積の割りにこうした遺物は少なかったが、これは河川敷の部分が多かったためであろう。また他の小型の骨同様に流失している可能性もある。しかし、神奈川県横須賀市の鉈切り遺跡における遺物の出土状況は、同様の水辺にあってさらに多くの遺物の出土が知られている。今後このような例が本地域においても知られる可能性はある。参考文献は別項の「動物遺体」の文末に記したものに以下のものをあげておく。

金子浩昌 「豊田本郷遺跡出土のウマの髪骨について」『豊田本郷』所収 1985
木村幾太郎「刻骨」『弥生文化研究』p.55 1987

おわりに

ようやく肩の荷をおろすことが出来てほっとしている。同時にこの神明原・元宮川遺跡の膨大な資料を生かすことが出来たかどうか非常に心配である。

足掛け6年、準備段階からいえば7~8年の長期にわたるものとなってしまった。その間多くの調査員がこれに関わり、とうとう最初から最後まで本遺跡に携わった者はいないという状況も生まれてしまった。整理作業の途中から加わり、最終の報告書の編集に携わった者として、これら諸氏の労苦と成果を生かし切れていないことに心の痛みを覚える。検討しなければならない資料はまだまだ残っている。限られた時間の中で精一杯の努力をしてみたつもりであるが、悔いの残ることばかりである。

さきに基本方針のところで述べたように、我々は本遺跡の主体は祭祀にあるとの共通認識に立ち、祭祀関係遺物の紹介とその解明に整理の主眼を置いた。この点特に祭祀遺物の紹介についてはほぼ目的を達したといえるであろう。しかし出土状況の不明な部分も多く、単なる遺物の羅列に終ってしまったくらいがある。力の及ばなかったことを申し訳なく思う。

本遺跡の性格づけなど詳細な検討に関しては、整理に参加した者や現地調査を担当した調査員だけではなく、関連分野の専門研究者の方々にも依頼し、それぞれの専門分野で分析をお願いした。その中で原稿の頂けたものを収録させていただいた。『大谷川III』第V章および『大谷川IV』第IV章がそれである。

加藤芳朗先生・山内文先生・金子浩昌先生・桃崎祐輔氏にはお忙しい中の無理なお願いを聞いていただき本当にありがとうございました。特に山内先生には何度も整理事務所においていただき、木材の基本的特徴や取り扱い方からお教えいただいた。また桃崎氏には夜遅くまで種子の計測をしていただいだ。このような形で最終報告をまとめることができ、深く感謝申し上げる次第である。

当研究所の職員もそれぞれのテーマから、この神明原・元宮川遺跡を考えた。まだ未消化で荒削りなものもあるがそれぞれ資料整理の中で考えて来たことの一端をまとめてみた。共同の討議と検討を加えたものではあるが、若干の見解の異なる部分もみられる。これらについては統一見解をまとめるこより、様々な角度から本遺跡を考えることを主眼とし、あえてそのままとした。そのような性格を考え、当研究所の調査員が分担した部分も文末に氏名を明記し文責を明らかにした。なお『大谷川III』における考察部分の文責は第1節「神明原・元宮川遺跡出土の文字資料」(森下春美)、第2節「人形土製品について」(寺田甲子郎)である。

長期にわたる資料整理の中で、多くの方々の御指導・御教示をいただいた。最後ではありますが御芳名をかかげて謝意を表したい。

本遺跡の調査はこれで終了したが、逆に本遺跡の研究はこれが出发点である。調査の中で様々な問題が指摘された。特に大量の木製模造品の時期と性格については、調査員の中でも見解が大きくわかれ私自身としても古墳時代とするにはいまひとつしつくりしない点がある。今後これらの問題が大いに論議され、深められていくことを期待するとともに、我々もまた不十分な点をさらに追求していかたい。

(佐藤達雄)

資料整理関係者名簿

(敬称略)

1. 調査指導

水野正好（奈良大学・考古学） 金子浩昌（早稲田大学・動物遺存体） 山内 文（元国立科学博物館・樹種鑑定） 工渠善通（奈良國立文化財研究所・考古学） 鬼頭清明（奈良國立文化財研究所・木簡） 綾村 宏（奈良國立文化財研究所・木簡） 金子裕之（奈良國立文化財研究所・考古学） 加藤芳朗（静岡大学名誉教授・地質学） 向坂鋼二（浜松市博物館・考古学） 高橋 豊（県立教育研修所・地質学） 下出穂与（明治大学・宗教史） 吉岡康暢（国立歴史民俗博物館・考古学） 斎藤孝正（名古屋大学・考古学） 神野善治（文化庁・民俗学） 服部佐夜子（県立金谷高等学校・動物遺存体処理） 桃崎祐輔（筑波大学・種子） 西宮秀紀（愛知教育大学・古代史）

2. 資料提供・調査協力

榎本義謙（三重県・松阪市教育委員会） 山中 章（京都府・向日市埋蔵文化財センター） 杜本和美（京都府埋蔵文化財調査研究センター） 加賀見省一（兵庫県・日高町教育委員会） 増田作一郎（静岡市大谷） 川江秀孝（浜松市博物館） 及川 司（静岡県教育委員会） 鈴木良孝（静岡県教育委員会）

3. 調査員

成島仁 森下春美 寺田甲子郎 矢田勝 中山正典 竹山喜章 足立順司 佐藤達雄

4. 整理作業参加者

柳原勉 横田宏 山本ひとみ 大須賀則子
竹内久美子 伊藤えり 望月由佳子 川淵由美子 栗田広美 杉山暁子 栗田昌子 長谷川みか
斎藤実知子 岩崎和代 堀八重子 葉山安子 河村清枝 小野間薰子 井上隆子 藤森三千代
志村ひろみ 鈴木記代 白石征子 杉山美智子 中川保代 高井多実枝 諸貫照美 稲田美代子
滝 桂子 滝光江 梅本康枝 藤田有 渋谷八重子 野村しのぶ 伊藤重子 中山由利子
鈴木由利子 後藤久美子 山口いずみ 山口貢子 片瀬美佐子 深沢千香子 鈴木一葉
福葉多佳子 井鍋京子 杉山暁子 栗田昌子

5. 写真撮影

池田洋仁

大谷川 IV

遺物・考察編

本文編

巴川(大谷川)総合治水対策特定河川事業
埋蔵文化財発掘調査報告書(神明原・元宮川流域)4

平成元年3月30日

編集発行 財團法人
静岡県埋蔵文化財調査研究所
印 刷 所 株式会社 三創
静岡市中村町166番地の1
TEL (054)282-4031